鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(99)　中尾遺跡・四方高迫遺跡　二〇〇六年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（99）

―一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―

中尾（なかお）遺跡
四方高迫（よもたかさこ）遺跡

（鹿児島県鹿屋市吾平町）

２００６年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴って，平成８年度から平成10年度にかけて実施した中尾遺跡の発掘調査と，平成12年度に実施した四方高迫遺跡の発掘調査の記録です。

この両遺跡は，鹿児島県の東部，大隅半島の鹿屋市吾平町（旧肝属郡吾平町）上名にある近距離の位置に所在し，近くには神代三山稜のひとつ，吾平山上稜があります。

今回の調査では，縄文時代早期から中世まで長い間にわたる多くの遺構，遺物が発見されました。なかでも，縄文時代早期の集石遺構や，古墳時代の竪穴住居跡群・地下式横穴墓などの発見は，南九州における縄文時代や古墳時代の集落の様相を研究するうえで貴重な資料を提供し，このほかにも弥生時代前期の線刻土器や石剣など注目される遺物も出土しています。

本報告書が県民の皆様はじめ，多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた県土木部道路建設課，吾平町教育委員会，関係各機関並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成18年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　上　今　常　雄

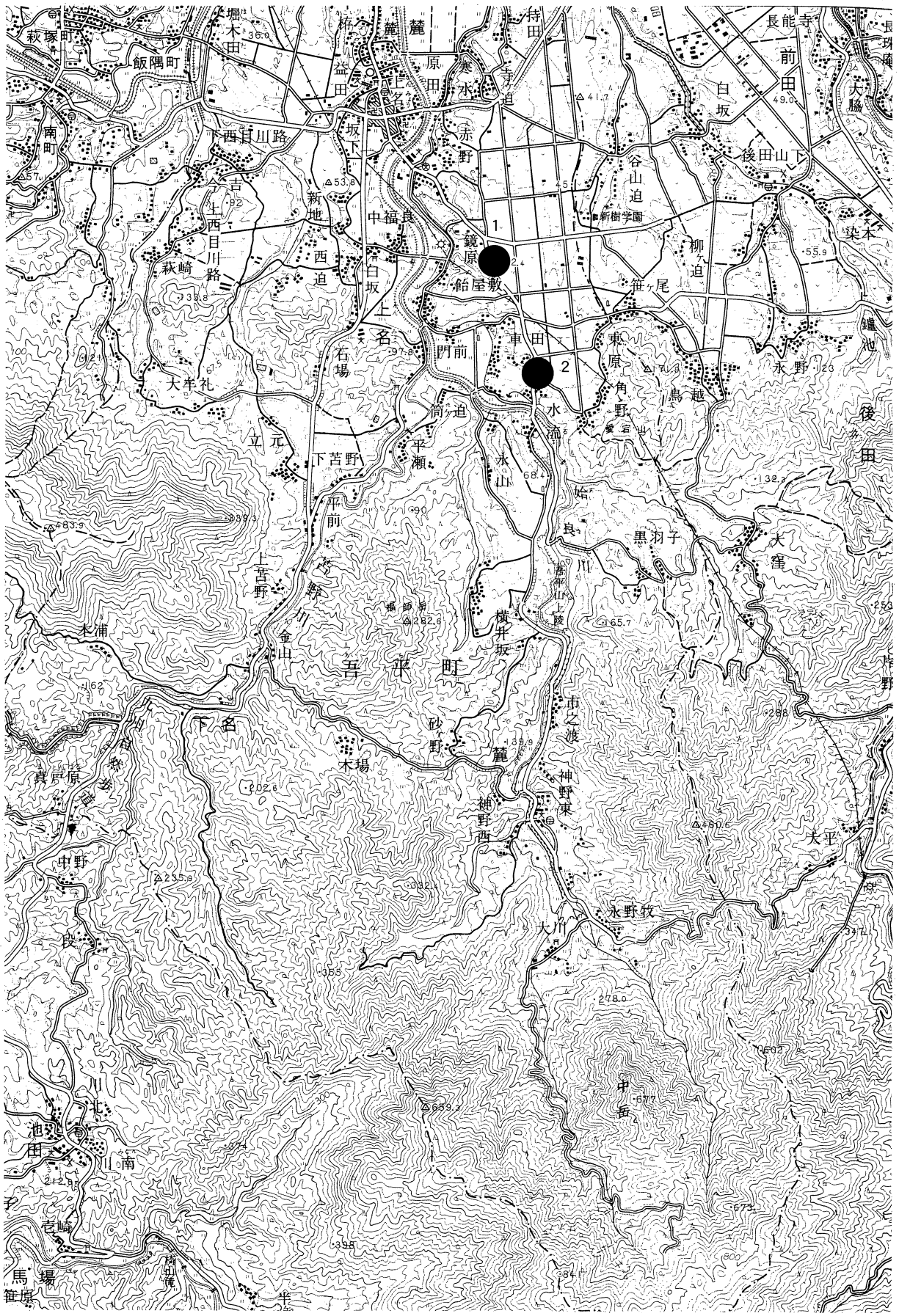
報　告　書　抄　録

ふりがな	なかおいせき・よもたかさこいせき
書名	中尾遺跡・四方高迫遺跡
副書名	一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	99
編著者名	池畑　耕一・三垣　恵一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995－48－5811
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
中尾遺跡（なかおいせき）	鹿児島県鹿屋市（かごしまけんかのやし） 吾平町上名（あいらちょうかんみょう） 字中尾（あざなかお）	46485	75－47	31度 18分 37秒	130度 54分 46秒	19960819 ～ 19961018 19961125 ～ 19961129	確・本調査 1,200	一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業
						19970421 ～ 19970711	本調査 1,600	
						19981109 ～ 19981215	本調査 1,280	
四方高迫遺跡（よもたかさこいせき）	鹿児島県鹿屋市（かごしまけんかのやし） 吾平町上名字（あいらちょうかんみょうあざ） 四方高迫（よもたかさこ）	46485	75－53	31度 18分 17秒	130度 54分 46秒	20000807 ～ 20001027	確・本調査 3,470	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中尾遺跡	集落跡	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代早期 弥生時代前期 弥生時代中期 古墳時代 奈良～平安	集石遺構　12基 集積遺構　２基 竪穴住居跡　５基 土坑　１基 古道	土器（前平式・桑ノ丸式・下剥峯式・押型文・平栫式・塞ノ神式） 石鏃・石斧・磨石・敲石・石皿・礫器等 曽畑式土器 土器 入佐式土器・黒川式土器・組織痕土器・打製石斧・磨石・石皿等 夜臼式土器 高橋式土器 山ノ口式土器 成川式土器等 土師器・須恵器・刻書土器・両端穿孔棒状土錘・陶磁器	遺跡は調査範囲については消滅したが，県道神野・折生野・吾平線を挟む部分については残存している。
四方高迫遺跡	包含地	縄文時代早期 弥生時代中期 古墳時代	集石遺構　13基 集積遺構　１基 土坑　１基	前平式土器・石坂式土器・妙見式土器・石鏃・トロトロ石器・石斧・礫器・磨石・石皿・砥石 山ノ口式土器・磨製石鏃 中津野式土器・笹貫式土器	

要約	中尾遺跡は道路の改良工事で調査し，縄文時代早期から中世，なかでも古墳時代を主体とする。縄文時代早期では集石が多く検出され，桑ノ丸式土器など各種の土器が出土している。縄文時代晩期から弥生時代前期の土器も多い。古墳時代では県内で初めて集落と地下式横穴墓が同じ台地で発見された。多くの竪穴住居跡があり，土器も在地のものや搬入土器など多様である。 四方高迫遺跡も中尾遺跡と同じ台地にあり，縄文時代早期から古墳時代までの遺跡で，主体となるのは縄文時代早期である。石坂式土器が多く出土しており，集石遺構13基が検出されている。他に弥生時代中期後半，古墳時代前・中期の土器も多い。



遺跡位置図　　1：中尾遺跡　2：四方高迫遺跡

例　　言

1　本報告書は「一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業」に伴う中尾遺跡・四方高迫遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお，県教育委員会主体での中尾遺跡の発掘調査は，平成３年度および平成５年度から平成10年度の７か年にわたって実施したが，本報告は，平成８年度から平成10年度の３か年分の発掘成果をまとめたものである。

2　発掘調査は，鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。整理作業および報告書作成は，平成16年度および平成17年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて実施した。

3　発掘調査については，鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所）や吾平町教育委員会の協力を得た。

4　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号はすべて一致する。

5　遺物は時期ごと，器種ごとに分けたが，弥生土器・石器については，はっきりと区分できなかったため，大きくまとめて記した部分がある。

6　本書で用いたレベル数値はすべて海抜絶対高である。

7　発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は，調査担当者が行った。

8　遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。

9　出土遺物の写真撮影は西園勝彦が，遺構の写真構成は鶴田静彦が担当した。

10　本書の執筆及び編集は池畑が担当したが，Ⅱ・Ⅲについては鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（87）に三垣恵一が記したものを利用した。

11　出土した遺物は，県立埋蔵文化財センターが一括して保管し，展示・活用する予定である。
　なお，中尾遺跡の遺物注記の略号は「ナカオ」，四方高迫遺跡の遺物注記の略号は「四方」である。

凡　　例

1　遺　構

１）遺構図の縮尺は，基本的に縄文時代の集石遺構が１／20・土坑が１／40，古墳時代の竪穴住居跡が１／40・溝状遺構が１／20，または１／40で掲載している。それぞれの遺構図については縮尺を付してある。

２）遺構番号についてはこの報告書において付け変えたものがある。それぞれの項で，それを表記したが，遺物への注記においては調査時のものを使用している。

2　土　器

１）中尾遺跡では基本的に１／２あるいは１／３で掲載したが，１／４のものもある。縮尺はそれぞれの図面に示してある。

２）四方高迫遺跡では１／２で掲載してある。

３）土製品についても土器と区別せず，通し番号とした。

3　石　器

１）石器の番号の前にはすべてＳが付してある。軽石製品についても同様で，これらは区別せず通し番号としてある。

２）縮尺は，基本的に打製石鏃・磨製石鏃・トロトロ石器・石匙・スクレイパーなどの剥片石器を実寸，四方高迫遺跡の石斧，中尾遺跡の磨石の一部，石錘・石剣を１／２，中尾遺跡の磨製石斧・打製石斧・礫器・磨敲石類を１／３，石皿を１／４で掲載しているが，一部については縮尺の異なる場合がある。

３）石器観察表の計測値で（　　）書きのものは，欠損品の残存部における数値である。

４）石器観察表の計測値で長さ・幅・厚さの単位は㎝，重さの単位はｇである。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の経緯 …… 1
　第１章　調査に至るまでと，その後の経過 …… 1
　第２章　調査の組織 …… 1
　第３章　調査の経過 …… 3

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 9
　第１章　地理的・地質的環境 …… 9
　第２章　歴史的環境 …… 9

Ⅲ　地層 …… 14

Ⅳ　中尾遺跡 …… 15
　第１章　発掘調査の概要 …… 15
　　第１節　発掘調査の方法 …… 15
　　第２節　調査成果の概要 …… 15
　　第３節　中尾遺跡の地層 …… 17
　第２章　縄文時代 …… 18
　　第１節　早期 …… 18
　　第２節　前期 …… 54
　　第３節　後期 …… 54
　　第４節　晩期 …… 54
　第３章　弥生時代 …… 79
　　第１節　早期・前期 …… 79
　　第２節　中期 …… 86
　第４章　古墳時代 …… 90
　　第１節　遺構 …… 90
　　第２節　土師器 …… 105
　　第３節　土製品 …… 114

第５章　古代・中世 …… 118
第１節　遺構 …… 118
第２節　遺物 …… 124
第６章　小結 …… 127
第１節　縄文時代集団の変遷 …… 127
第２節　縄文時代の生活要素の移り変わり …… 127
第３節　弥生時代前期の特異な遺物について …… 128
第４節　古墳時代集落の広がり …… 128

Ⅴ　四方高迫遺跡 …… 129
第１章　発掘調査の概要 …… 129
第１節　発掘調査の方法 …… 129
第２節　調査成果の概要 …… 129
第３節　四方高迫遺跡の地層 …… 131
第２章　縄文時代 …… 132
第１節　遺構 …… 132
第２節　遺物 …… 150
第３章　弥生時代 …… 169
第１節　土器 …… 169
第２節　石器 …… 173
第４章　古墳時代 …… 174
第１節　土師器 …… 174
第２節　須恵器 …… 184
第３節　土製品 …… 184
第５章　小結 …… 185
第１節　縄文時代早期の生活跡 …… 185
第２節　古墳時代土師器の特性 …… 186

Ⅵ　まとめ …… 188
第１章　台地上における人びとの変遷 …… 188
第２章　古墳時代の拠点集落 …… 189
第３章　古墳時代のムラとハカ …… 190

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図 …… 11
第２図　基本地層図 …… 14
中尾遺跡
第３図　調査区域全体図 …… 16
第４図　平成８～10年度調査グリッド配置図 16
第５図　中尾遺跡の地層図 …… 17
第６図　縄文時代早期の遺構配置図 …… 18
第７図　集石遺構１号・３号 …… 19
第８図　集石遺構２号 …… 20
第９図　集石遺構４号と出土土器 …… 21
第10図　集石遺構５号と出土土器 …… 22
第11図　集石遺構６号・７号・９号 …… 23
第12図　集石遺構８号 …… 25
第13図　集石遺構８号出土石器 …… 26
第14図　集石遺構10号・11号 …… 27
第15図　集石遺構12号 …… 28
第16図　集積遺構１号と出土石器 …… 29
第17図　集積遺構２号と出土石器 …… 30
第18図　集積遺構２号出土遺物 …… 31
第19図　集積遺構２号出土石器 …… 32
第20図　縄文土器⑴　前平式・桑ノ丸式土器 33
第21図　縄文土器⑵　桑ノ丸式土器 …… 34
第22図　縄文土器⑶　下剥峯式土器 …… 35
第23図　縄文土器⑷　下剥峯式土器 …… 36
第24図　縄文土器⑸　押型文土器 …… 38
第25図　縄文土器⑹　平栫式土器 …… 39
第26図　縄文土器⑺　平栫式土器 …… 40
第27図　縄文土器⑻　塞ノ神式土器 …… 41
第28図　石器⑴　石鏃 …… 42
第29図　石器⑵　石鏃 …… 43
第30図　石器⑶　スクレイパー・つまみ形
　石器・トロトロ石器 …… 44
第31図　石器⑷　磨製石斧・打製石斧 …… 45
第32図　石器⑸　礫器 …… 47
第33図　石器⑹　礫器 …… 48
第34図　石器⑺　礫器 …… 49
第35図　石器⑻　磨石 …… 50
第36図　石器⑼　磨石・敲石・凹石 …… 51
第37図　石器⑽　石皿 …… 52
第38図　石器⑾　石皿 …… 53
第39図　縄文土器⑼　曽畑式土器 …… 55
第40図　縄文土器⑽　中岳式・入佐式・
　干河原式土器 …… 56
第41図　縄文土器⑾　黒川式土器 …… 57
第42図　縄文土器⑿　黒川式土器 …… 59
第43図　石器⑿　石鏃・石錐 …… 63
第44図　石器⒀　石匙・スクレイパー …… 64
第45図　石器⒁　スクレイパー・磨製石斧 65
第46図　石器⒂　打製石斧 …… 66
第47図　石器⒃　打製石斧 …… 67
第48図　石器⒄　打製石斧 …… 68
第49図　石器⒅　打製石斧 …… 69
第50図　石器⒆　打製石斧 …… 70
第51図　石器⒇　礫器・砥石 …… 71
第52図　石器㉑　砥石 …… 71
第53図　石器㉒　石錘・磨石・石剣 …… 72
第54図　石器㉓　石皿 …… 73
第55図　石器㉔　石皿 …… 74
第56図　弥生土器⑴ …… 80
第57図　弥生土器⑵ …… 81
第58図　弥生土器⑶ …… 82
第59図　弥生土器⑷ …… 83
第60図　弥生土器⑸ …… 84
第61図　弥生土器⑹ …… 85
第62図　弥生土器⑺ …… 86
第63図　古墳時代・古代中世の遺構配置図 90
第64図　１号竪穴住居跡 …… 91
第65図　１号竪穴住居跡出土土器 …… 92
第66図　２号竪穴住居跡 …… 93
第67図　２号竪穴住居跡出土土器 …… 94

第68図　３号竪穴住居跡と出土土器⑴　…… 95
第69図　３号竪穴住居跡出土土器⑵　…… 96
第70図　３号・４号竪穴住居跡出土石器　… 97
第71図　４号竪穴住居跡　…… 98
第72図　４号竪穴住居跡出土土器⑴　…… 99
第73図　４号竪穴住居跡出土土器⑵　…… 100
第74図　４号竪穴住居跡出土土器⑶　…… 101
第75図　５号竪穴住居跡　…… 102
第76図　５号竪穴住居跡出土土器⑴　…… 103
第77図　５号竪穴住居跡出土土器⑵　…… 104
第78図　甕形土器⑴　…… 105
第79図　甕形土器⑵　…… 106
第80図　甕形土器⑶　…… 107
第81図　壺形土器⑴　…… 109
第82図　壺形土器⑵　…… 110
第83図　壺形土器⑶・鉢形土器⑴　…… 111
第84図　小型壺形土器・坩形土器　…… 112
第85図　鉢形土器⑵・高坏形土器　…… 113
第86図　手づくね土器　…… 114
第87図　古代・中世の土坑　…… 118
第88図　土坑２と出土遺物　…… 119
第89図　古代・中世の溝⑴　…… 121
第90図　溝２出土の土器　…… 122
第91図　古代・中世の溝⑵　…… 123
第92図　古代・中世の土師器　…… 125
第93図　須恵器・陶磁器・土錘　…… 126

四方高迫遺跡

第94図　トレンチ配置・本調査範囲図　…… 130
第95図　四方高迫遺跡の地層図　…… 131
第96図　集石遺構配置図　…… 132
第97図　集石遺構１号・３号と出土石器　… 133
第98図　集石遺構２号と出土遺物　…… 134
第99図　集石遺構４号と出土土器　…… 135
第100図 集石遺構４号出土土器　…… 136
第101図 集石遺構５号・６号と出土石器　… 137
第102図 集石遺構５号出土土器　…… 138
第103図 集石遺構７号と出土石製品
・集石遺構８号・９号　…… 139
第104図 集石遺構10号　…… 140
第105図 集石遺構11号　…… 143
第106図 集石遺構10号・11号出土遺物　…… 144
第107図 集石遺構12号と出土土器　…… 145
第108図 集石遺構12号出土遺物　…… 146
第109図 集石遺構13号と出土石器　…… 147
第110図 集積遺構と出土石器・土坑　…… 149
第111図 縄文土器⑴　前平式土器・
石坂式土器　…… 150
第112図 縄文土器⑵　石坂式土器　…… 151
第113図 縄文土器⑶　石坂式土器　…… 152
第114図 縄文土器⑷　石坂式土器　…… 154
第115図 縄文土器⑸　石坂式土器　…… 155
第116図 縄文土器⑹　妙見式土器　…… 156
第117図 石器⑴　石鏃・トロトロ石器　…… 159
第118図 石器⑵　磨製石斧・打製石斧　…… 160
第119図 石器⑶　礫器　…… 161
第120図 石器⑷　磨石・敲石　…… 163
第121図 石器⑸　磨石・敲石　…… 164
第122図 石器⑹　砥石・石皿　…… 165
第123図 石器⑺　石皿　…… 166
第124図 石器⑻　砥石　…… 167
第125図 弥生土器⑴　…… 169
第126図 弥生土器⑵　…… 170
第127図 弥生土器⑶　…… 171
第128図 弥生土器⑷　…… 172
第129図 磨製石鏃　…… 173
第130図 土師器⑴　…… 174
第131図 土師器⑵　…… 175
第132図 土師器⑶　…… 176
第133図 土師器⑷　…… 177
第134図 土師器⑸　…… 179
第135図 土師器⑹　…… 180
第136図 土師器⑺　…… 181
第137図 須恵器・土製品　…… 184
第138図 完成後の道路と旧道の位置関係　… 187
第139図 時代ごとの住居地分布図　…… 188

表　目　次

第１表　一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧　1 …… 7
第２表　一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧　2 …… 8
第３表　周辺遺跡地名表⑴ …… 12
第４表　周辺遺跡地名表⑵ …… 13
第５表　縄文土器観察表⑴ …… 60
第６表　縄文土器観察表⑵ …… 61
第７表　縄文土器観察表⑶ …… 62
第８表　石器観察表⑴ …… 75
第９表　石器観察表⑵ …… 76
第10表　石器観察表⑶ …… 77
第11表　石器観察表⑷ …… 78
第12表　弥生土器観察表⑴ …… 87
第13表　弥生土器観察表⑵ …… 88
第14表　弥生土器観察表⑶ …… 89
第15表　土師器観察表⑴ …… 115
第16表　土師器観察表⑵ …… 116
第17表　土師器観察表⑶ …… 117
第18表　縄文土器観察表⑴ …… 157
第19表　縄文土器観察表⑵ …… 158
第20表　石器観察表 …… 168
第21表　土師器観察表⑴ …… 182
第22表　土師器観察表⑵ …… 183
第23表　土師器観察表⑶ …… 184

図　版　目　次

中尾遺跡
図版１　遺跡遠景（平成９年度）
図版２　遺跡遠景（平成10年度）
図版３　集石遺構
図版４　集積遺構と遺物出土状況
図版５　古墳時代の竪穴住居跡
図版６　古墳時代の竪穴住居跡
図版７　古墳時代の竪穴住居跡と古代の溝状遺構
図版８　縄文土器
図版９　縄文土器
図版10　石器
図版11　石器
図版12　石器
図版13　石器
図版14　石器
図版15　石器
図版16　弥生土器
図版17　弥生土器
図版18　古墳時代土師器
図版19　古墳時代土師器
図版20　古墳時代土師器
図版21　古墳時代土師器と古代の遺物
四方高迫遺跡
図版22　発掘体験と地層
図版23　縄文早期土器出土状況と集石遺構群
図版24　集石遺構
図版25　集石遺構
図版26　集石遺構出土土器
図版27　集石遺構出土石器・石製品と弥生土器
図版28　縄文土器
図版29　縄文土器
図版30　石器
図版31　弥生土器
図版32　古墳時代土師器

Ⅰ　発掘調査の経緯

第１章　調査に至るまでと，その後の経過

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無およびその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所道路建設課）は，「一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業」の計画に基づいて，肝属郡吾平町上名地区に計画した道路改良工事に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度から文化財課と改称）に照会した。

この結果，事業区間内には周知の遺跡である中尾遺跡が所在することが判明し，平成３年度に県道拡幅部分について緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は県文化課が担当した。その結果，遺跡は縄文時代早期から古墳時代にかけての複合遺跡であることや，遺跡の範囲が現県道の下部まで広がることが確認された。

そこで，平成４年度に鹿児島県土木部・県文化課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の三者で再度協議を行い，当事業区間内においては現状保存や設計変更が不可能なことから，平成５年度以降，計画的かつ継続して発掘調査（確認・本調査）を実施し，発掘調査は埋文センターが担当することとした。

県教育委員会主体の調査は，平成３年度，平成５年度から平成10年度までの７か年にわたって実施した。調査総面積は8,860㎡である。本調査終了後，平成３年度および平成５年度から平成７年度までの調査成果については，平成15年度及び平成16年度に埋文センターにおいて整理作業・報告書作成作業を行った。また，平成８年度以降の調査成果については，平成16年度及び平成17年度に埋文センターにおいて整理作業・報告書作成作業を行った。

本改良工事に伴い中尾遺跡の南側の和田及び四方高迫遺跡についても遺跡の存在が明らかとなったため，平成12年８月７日から12月27日まで確認調査・本調査を実施した。和田遺跡については確認調査のみを埋文センターが実施し，本調査については平成14・15年に吾平町教育委員会が行った。これらの整理作業・報告書作成作業については，和田遺跡を平成15年度に吾平町教育委員会が行い，平成16年３月に「吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書」17として刊行された。

四方高迫遺跡については平成17年４月から９月に埋文センターにおいて，整理作業・報告書作成作業を行った。

第２章　調査の組織

確認・本調査（平成８年度～平成10年度，平成12年度）

起因事業主体者　鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所道路建設課）

調 査 主 体 者　鹿児島県教育委員会

調査企画調整　鹿児島県教育庁文化財課

調 査 責 任 者　県立埋蔵文化財センター　所　長　吉　元　正　幸(H8･9)

〃　〃　吉　永　和　人(H10)

調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文(H12)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎進(H8～10)
	〃	〃	黒木友幸(H12)
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋(H8)
	〃	調査課長	戸崎勝洋(H9･10)
	〃	〃	新東晃一(H12)
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東晃一(H8～10)
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神次郎(H8)
	〃	課長補佐	立神次郎(H12)
	〃	主任文化財主事	青崎和憲(H10)
	〃	第一調査係長	青崎和憲(H12)
調査担当者	〃	文化財主事	長野眞一(H8)
	〃	〃	肱岡隆夫(H8)
	〃	〃	中村耕治(H9)
	〃	〃	安藤浩(H9)
	〃	〃	大久保浩二(H10)
	〃	〃	鶴田靜彦(H10～12)
	〃	文化財研究員	中原一成(H8)
	〃	〃	黒川忠広(H9)
	〃	〃	西村喜一(H12)
事務担当者	〃	総務係長	有村貢(H12)
	〃	主査	成尾雅明(H8)
	〃	〃	前屋敷裕徳(H9･10)
	〃	〃	政倉孝弘(H9･10)
	〃	主事	追立ひとみ(H8･9)
	〃	〃	溜池圭子(H10･12)

整理・報告書作成（平成16・17年度）

起因事業主体者　鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所道路建設課）

作成主体者　鹿児島県教育委員会

企画調整　鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者	県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝(H16)
	〃	〃	上今常雄(H17)
作成企画者	〃	次長兼総務課長	賞雅彰(H16)
	〃	〃	有川昭人(H17)
	〃	次長兼調査第一課長	新東晃一(H17)
	〃	調査課長	新東晃一(H16)

作成企画者	県立埋蔵文化財センター	調査課長補佐	立神次郎(H16)
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一(H16～17)
	〃	主任文化財主事	中村耕治(H16～17)
作成担当者	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一(H17)
	〃	文化財主事	三垣恵一(H16)
事務担当者	〃	主幹兼総務係長	平野浩二(H16～17)
	〃	主事	福山恵一郎(H16)
	〃	〃	田之畑美幸(H17)
企画委員	〃	主任文化財主事	中村耕治(H16～17)
〃	〃	文化財主事	鶴田静彦(H16～17)
報告書作成検討委員会	平成17年12月20日	所長ほか　７名	
報告書作成指導委員会	平成17年12月19日	次長ほか　３名	

第３章　調査の経過

ここで紹介する第５次調査以降の発掘調査は，平成８年８月19日～10月18日，同11月25日～11月29日，平成９年４月21日～７月11日，平成10年11月９日～12月15日にかけて実施した。以下，年度ごとに日誌抄をもって調査の経過を略述する。

平成８年度

○８月19日（月）～10月18日（金）

平成８年度は８月19日から10月18日まで次年度以降の確認調査280㎡と，本調査1,200㎡を実施したが，途中で地下式横穴墓が発見され，この周辺の民間工事を次年度まで待つことができなかったため，11月下旬に追加調査を行った。

○11月25日（月）～29日（金）

地下式横穴２号墓の発掘調査。25日から玄室の掘り上げ，清掃。写真撮影。

26・27日に鹿児島大学歯学部の小片丘彦教授・竹中正巳助手・峰和治助手による人骨取り上げ。

人骨取り上げ後，竪坑・玄室の清掃。29日に終了。

本調査と併行して，隣接地で５号墓・６号墓の調査を吾平町教育委員会が実施。

平成９年度

○４月21日（月）～25日（金）

21日の午後から作業開始。表土剥ぎ，Ⅲ層掘り下げ（M－52～57区・N－50～53区）。

成川式土器・縄文時代晩期・曽畑式土器・磨製石斧・有茎鏃など出土。

現道部分のアスファルト剥ぎ。

吾平小学校６年生，川崎重治氏（吾平町教委），新福深氏（高山町教委），長浜正明氏，岩元秋見氏（大根占町教委）来訪。

○４月30日（水）～５月２日（金）

現道部分の表土剥ぎ，Ⅲ層掘り下げ。長方形の掘り込み掘り下げ。

２日は雨のため作業休止。

○５月６日（火）～９日（金）
Ｌ－53～57区，Ｍ－50～56区，Ｎ－53・54区のⅢａ層掘り下げ。
２条の溝状遺構写真撮影・掘り下げ。
○５月12日（月）～16日（金）
Ｌ－52～56区，Ｍ－50～56区のⅢａ層掘り下げ。溝状遺構掘り下げ。15日は雨のため作業中止。
15日から30日まで長期研修生・内村憲和氏（大崎町教委）が発掘実習。
○５月19日（月）～22日（木）
Ｊ・Ｋ・Ｌ－57・58区のⅢａ層掘り下げ。Ｍ・Ｎ－50・51区のⅣ層・Ｖ層掘り下げ。
縄文時代晩期の突帯文土器・磨製石斧・打製石斧・石鏃などが出土。
土坑・溝状遺構の掘り下げ，写真撮影・実測。
新福深氏（高山町教委）来訪。安全パトロール（児玉・大保）。
○５月26日（月）～30日（金）
Ｊ・Ｋ・Ｌ－57・58区のⅢａ層，Ｍ・Ｎ－50・51区Ⅵ層掘り下げ。
溝状遺構写真撮影・実測。
空中写真撮影（27日），教育長・川崎重治氏（吾平町教委），長浜正明氏（大根占町教委）来訪。
○６月２日（月）～６日（金）
Ｍ・Ｎ－50・51区のⅥ層掘り下げ。Ｋ～Ｍ－55・56区のⅢａ層掘り下げ。
集石１基検出。
３日は雨のため作業中止。６日から19日まで長期研修生・古川斉氏（末吉町教委）が発掘実習。
長浜正明氏（大根占町教委）来訪。
○６月10日（火）～13日（金）
Ｋ・Ｌ－58・59区のⅥ層掘り下げ。Ｌ・Ｍ－55・56区の遺物取り上げ。N51区の集石写真撮影・実測。
Ｋ58区で集石検出。
○６月16日（月）～19日（木）
Ｊ－58・59区，Ｋ・Ｌ－58・59区のⅥ層掘り下げ。
10年度の確認調査（４つのトレンチ）。
Ｋ58区の２号集石の写真撮影・実測。
Ｊ59区の３号集石の実測。
○６月23日（月）～27日（金）
Ｋ57区・Ｌ～Ｎ－52・53区掘り下げ。
M52・53区に集石（４号・５号集石）。
集石の実測，トレンチの位置図作成・地層実測。
守屋氏（高山町教委）来訪。
○７月１日（火）～４日（金）
Ｋ～Ｎ－54～57区掘り下げ。
Ｌ－57区に６・７号集石，Ｋ57区に８号集石，M57区に９号集石。
集石の写真撮影・実測。Ｋ57区で異形石器。断面の実測。

松野氏（鹿屋土木）来訪。

○７月８日（火）～10日（木）

Ｋ～Ｎ－54～56区掘り下げ。

10～12号集石検出。

集石の写真撮影・実測。

内村憲和氏（大崎町教委）実測実習。

平成10年度

○11月９日（月）～13日（金）

９日：現道アスファルト除去。鹿屋土木・駒寿氏と境界杭など確認。

10日：表土剥ぎ。発掘機材搬入。

11日：発掘作業開始。

Ⅱ～Ⅲｂ層まで掘り下げ。

長崎教育長・川崎重治氏・山下博文氏（吾平町教委），係長・駒寿氏（鹿屋土木），尾崎次長，中村文化財主事，政倉主査（埋文セ）来訪。

○11月16日（月）～20日（金）

17日からグリッド設定。Ｇ・Ｈ－63～65区Ⅱｂ層，59～62区Ⅵ層掘り下げ。

縄文時代晩期の土器・石器が多い。早期の土器・石鏃も出土。

17日午前作業中止。

鶴峯小６年生発掘体験（25名），大園係長・駒寿氏（鹿屋土木），川崎氏（吾平町教委）来訪。

○11月24日（火）～26日（木）

Ｇ・Ｈ－64・65区の遺構検出。ピットが少し。

早期層の掘り下げ。

○11月30日（月）～12月４日（金）

東側のⅡ層，西部分のⅥ層掘り下げ。

地層写真撮影・実測。

２日・３日は雨のため中止。

鹿屋土木の大園係長・駒寿氏と打合せ。

○12月９日（水）・10日（木）

62～65区の早期層掘り下げ。地層の写真撮影・実測。

○12月15日（火）

空撮をし，調査終了。

〔平成12年度〕

○８月７日（月）～11日（金）

７日：重機による表土剥ぎ。トレンチ設定。

８日：調査開始。調査員への諸注意。

トレンチ設定，掘り下げ。

弥生土器・縄文早期の土器が数点出土。

10日に安全パトロール。

○８月16日（水）～18日（金）

トレンチの掘り下げ。一部の表土剥ぎ開始。16日午後・17日・18日は雨のため作業中止。

○８月21日（月）～25日（金）

トレンチの掘り下げ。一部は埋め戻し。

本調査開始。一部は表土剥ぎ。

○８月28日（月）・29日（火）

弥生～古墳時代包含層の掘り下げ。

重機によって縄文時代早期包含層まで掘り下げ。

○９月１日（金）

Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。

Ⅶ層掘り下げ。

○９月４日（月）～８日（金）

縄文時代早期包含層の掘り下げ。石坂式土器や磨石・石皿などが出土。

集石が８基検出される。

鹿屋土木事務所山路氏・金井氏来訪。

○９月11日（月）～14日（木）

台風の影響で雨天が続き，外の作業はできなかった。

遺物・図面整理。

鹿屋土木事務所との打合せ。

○９月18日（月）～22日（金）

縄文時代早期包含層の掘り下げ。集石の検出，掘り下げ，写真撮影。集石のなかに，使い込んだ石皿・磨石等のまざったものがある。

弥生時代の遺物包含層掘り下げ。

○９月25日（月）～29日（金）

縄文時代早期包含層の掘り下げ。

集石の検出，写真撮影。

弥生～古墳時代包含層の掘り下げ。

○10月２日（月）～６日（金）

弥生～古墳時代包含層の掘り下げ。

縄文時代早期の遺構検出。包含層の掘り下げ終了。

下層確認トレンチ掘り下げ。

集石の実測。

鶴峰小学校６年生32名発掘体験。（６日）

○10月10日（火）～13日（金）

下層確認トレンチ掘り下げ。遺物なし。

集石・断面の実測。地層の写真撮影。

和田遺跡の確認トレンチ設定。掘り下げ。

神野小学校３～６年生15名体験学習。（13日）

○10月16日（月）～20日（金）

和田遺跡の確認調査。

設計変更部分（400㎡）の調査開始。集石の実測。

○10月23日（月）～26日（木）

設計変更部分の弥生・古墳時代包含層の掘り下げ。

集石の実測。

○11月１日（水）・２日（木）

集石の実測。

現場撤収。

第１表　一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧　1

	年度	調査期間	調査面積	調査担当者	時代	遺　構	遺　物	
中尾遺跡	H3	7／23～8／9 8／19～1／31	確認調査 本調査 3,600㎡	鶴田　静彦 湯之前　尚	縄文早期 縄文前期 縄文晩期 古墳 古代	集石遺構８基 土坑３基 竪穴住居跡22軒 溝状遺構４条 古道	吉田式土器・下剥峯式土器・塞ノ神式土器 深浦式土器 黒川式土器・夜臼式土器・組織痕土器 打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨敲石・砥石・石皿 成川式土器・鉄製鈴	県教育委員会主体
	H5	8／24～11／2	本調査 3,000㎡	鶴田　静彦 大久保浩二				
	H6	7／26～8／26	本調査 1.200㎡	鶴田　静彦 大久保浩二				
	H7	5／22～7／14	確認調査 60㎡ 本調査 1,000㎡	宮田　栄二 湯之前　尚				
	H8	8／19～10／18 11／25～11／29	確認調査 280㎡ 本調査 1,200㎡	長野　眞一 肱岡　隆夫 中原　一成	縄文早期 古墳	集石遺構１基 地下式横穴墓２基 竪穴住居跡５軒 溝状遺構３条 土坑２基	土器・石鏃・石斧 鉄製太刀・鉄製刀子 成川式土器	
	H9	4／21～7／11	確認調査 45㎡ 本調査 1,600㎡	中村　耕治 安藤　浩 黒川　忠広	縄文早期 縄文前期 縄文晩期 古墳 古代	集石遺構12基 集積遺構２基 溝状遺構2条 土坑2基	下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・塞ノ神式土器 石鏃・異形石器・石斧・石斧未製品・礫器・磨石・石皿 曽畑式土器 刻目突帯文土器・組織痕土器 成川式土器	

※中尾遺跡については，検出した遺構が一部重複するため，平成３年度から平成７年度分を一括して掲載した。

第２表　一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧　２

	年度	調査期間	調査面積	調査担当者	時代	遺　構	遺　物	
中尾遺跡	H10	11／９～12／15	本調査 1,280㎡	鶴田　静彦 大久保浩二	縄文早期 縄文晩期 弥生中期 古墳		土器・石鏃 刻目突帯文土器・石斧・スクレイパー 土器 成川式土器	県教委主体
	H16	５／11～９／９	本調査 1,400㎡	山下　博文	弥生 古墳	竪穴住居跡１基 地下式横穴墓１基	山ノ口式土器・石庖丁 成川式土器 鉄剣・鉄刀	吾平町教委
四方高迫遺跡	H12	８／７～10／27	確認調査 70㎡ 本調査 3,400㎡	鶴田　静彦 西村　喜一	縄文早期 弥生 古墳	集石遺構８基	前平式土器・石坂式土器 石鏃・打製石斧・礫器・磨石・石皿 甕形土器 成川式土器	県教育委員会主体
和田遺跡			確認調査 40㎡		―	―	―	
	H14	７月 10月～ １月～	確認調査 本調査 3,200㎡	川崎　重治 山下　博文	縄文早期 弥生	連穴土坑２基 集石遺構20基	加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・砥石 土器	吾平町教育員会主体
和田Ⅱ遺跡	H15	４／５～７／14	本調査 530㎡	川崎　重治 山下　博文	縄文早期 弥生 古墳	集石遺構８基	加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・辻タイプ・中原式土器・磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・敲石・凹石・石皿・軽石製品 山ノ口式土器 成川式土器	

中 尾 遺 跡

Ⅱ　遺跡の位置と環境

第１章　地理的・地質的環境

中尾遺跡及び四方高迫遺跡は，鹿児島県肝属郡吾平町上名字中尾及び四方高迫に所在する。

遺跡の所在する吾平町は，鹿児島県の東半を占める大隅半島のほぼ中央にあり，県庁所在地の鹿児島市とは鹿児島湾を挟んで南東約40㎞の距離に位置する。行政区分上では，東を高山町，北西を鹿屋市，南西を大根占町と境を接しており，総面積は59.15㎢の町である。

吾平町は，地勢的には南部の国見山系（肝属山地），中部のシラス台地，北部の河川流域に沿って形成された河岸段丘および沖積地に区分される。南部一帯は山林，台地上には畑，河川流域には水田地帯がひろがっている。

地質的には，南部山地に黒雲母花崗岩，西部山地に輝石安山岩・玄武岩などの火山岩，その中間地帯には砂岩・頁岩交互層などの堆積岩が分布する。北部一帯は姶良カルデラを噴出源とするいわゆるシラス層からなり，姶良川流域には粘土層や一部に泥岩などが分布する。

中尾遺跡は，国見山系の支脈（福師岳286.2mなど）の北側，東原台地とよばれるシラス台地上および姶良川の開析によって形成された河岸段丘縁辺部に立地する。標高は約40m～55mである。吾平町役場からは南へ約1.5㎞の距離にあり，遺跡の西約250mほどを肝属川の支流の一つである姶良川が北流している。

第２章　歴史的環境

吾平町における遺跡の分布状況は，南部の山地帯には少なく，中部のシラス台地から北部の河岸段丘上および沖積地にかけて遺跡が集中する傾向がうかがえる。

吾平町において特筆すべきものとして，古墳時代の地下式横穴墓群がある。大隅地域では，志布志湾沿岸および肝属川流域を中心に分布しており，現在までに23遺跡で総数90基以上が発見されている。吾平町では天神原地下式横穴墓群・宮ノ上地下式横穴墓群・堀木田原地下式横穴墓群・中尾地下式横穴墓群の４遺跡で26基以上が確認されている。今後の発掘調査によってさらに増加する可能性が高い。これらの発掘成果は，南九州の古墳時代，なかでも墓制の研究においては欠かせないものとなっている。以下，吾平町内における主な遺跡を概観する。

⑴　宮ノ上地下式横穴墓群

肝属川の支流，姶良川の周辺に広がる平野を望む標高約40mの台地上に位置し，現在は吾平小学校の校庭である。昭和24年から計６回にわたる発掘調査が実施され，15基が確認され，そのうち10基の調査が行われている。副葬品として土師器や鉄剣・鉄鏃・鉄鉾・刀子などが出土している。

⑵　天神原地下式横穴墓群

肝属川に面した標高約25mの台地縁辺部にある。吾平町と高山町にまたがって存在する地下式横穴墓群である。これまでに４基の調査が行われ，１号地下式横穴墓から人骨一体と軽石製石棺，２号からは粘土床や軽石板とともに副葬品として直刀・刀子・鉄斧などが出土している。

⑶　堀木田原地下式横穴群

宮ノ上地下式横穴墓群の西約１㎞の台地縁辺部に所在し，昭和55年に発見，発掘調査が行われている。地下式横穴墓は，全長5.2mと県内では最大級の規模があり，玄室内に粘土床を有する。副葬品は鞘と思われる木質が残存する直刀，柄の一部を伴う鉄剣，刀子が出土している。

⑷　中尾遺跡（中尾地下式横穴墓群）

平成３年度以来11度の発掘調査が実施されている縄文時代早期から古代にかけての複合遺跡である。なかでも古墳時代の成果が注目される遺跡であり，竪穴住居跡や溝状遺構，地下式横穴墓などの遺構が多数確認されている。今回報告するものを除いた調査成果について列挙することとしたい。

平成３年度の調査では，古墳時代のものと思われる竪穴住居跡21軒と円形周溝状遺構１基，溝状遺構４条が検出されている。前回報告した調査区の隣接地であり，周辺に大規模な集落が存在したことを裏付ける発見となった。平成８年度には，本事業に伴う調査で地下式横穴墓が２基検出されたのをはじめ，個人の畑地造成に伴う調査でも４基確認されている。平成16年度に確認した１基を含め，中尾地下式横穴墓群ではこれまでに７基の存在が把握されたことになる。玄室は平入りで隅丸長方形を呈する。玄室内から１号で２体，２号で１体，５号で１体，６号で３体の人骨が発見されている。副葬品は円頭太刀・鉄刀・鉄鏃・刀子・銅製鈴などがある。

このほか，平成16年度の調査では，弥生時代中期後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡，古墳時代の竪穴住居跡などが検出され，地下式横穴墓から鉄剣・鉄刀が出土している。

⑸　栫ノ下遺跡

古墳時代の壺形土器が採集されている。底部はやや尖り気味の丸底で胴部がふくらみ，頸部はよくしまり口縁部は外反する器形で，胴部にはすれ違う刻み目突帯が１条めぐり，頸部から肩部と突帯の上下に櫛描波状文がみられるものである。在地性の強い成川式土器に畿内・瀬戸内の影響が考えられる技法がみられる注目すべき発見である。

⑹　名主原遺跡

昭和63年，平成元年，平成13・15・16年度に調査が実施され，弥生時代終末頃の花弁形住居跡をはじめとする竪穴住居跡群が多数検出されている。平成３年度の調査では同心円文や重弧文など幾何学的な沈線文様が施された壺形土器が出土している。

⑺　荷掛原遺跡

平成元年および平成３年に調査が実施され，縄文時代早期のものと思われる集石遺構や打製石鏃・磨石・剥片石器類が出土している。

⑻　水流遺跡

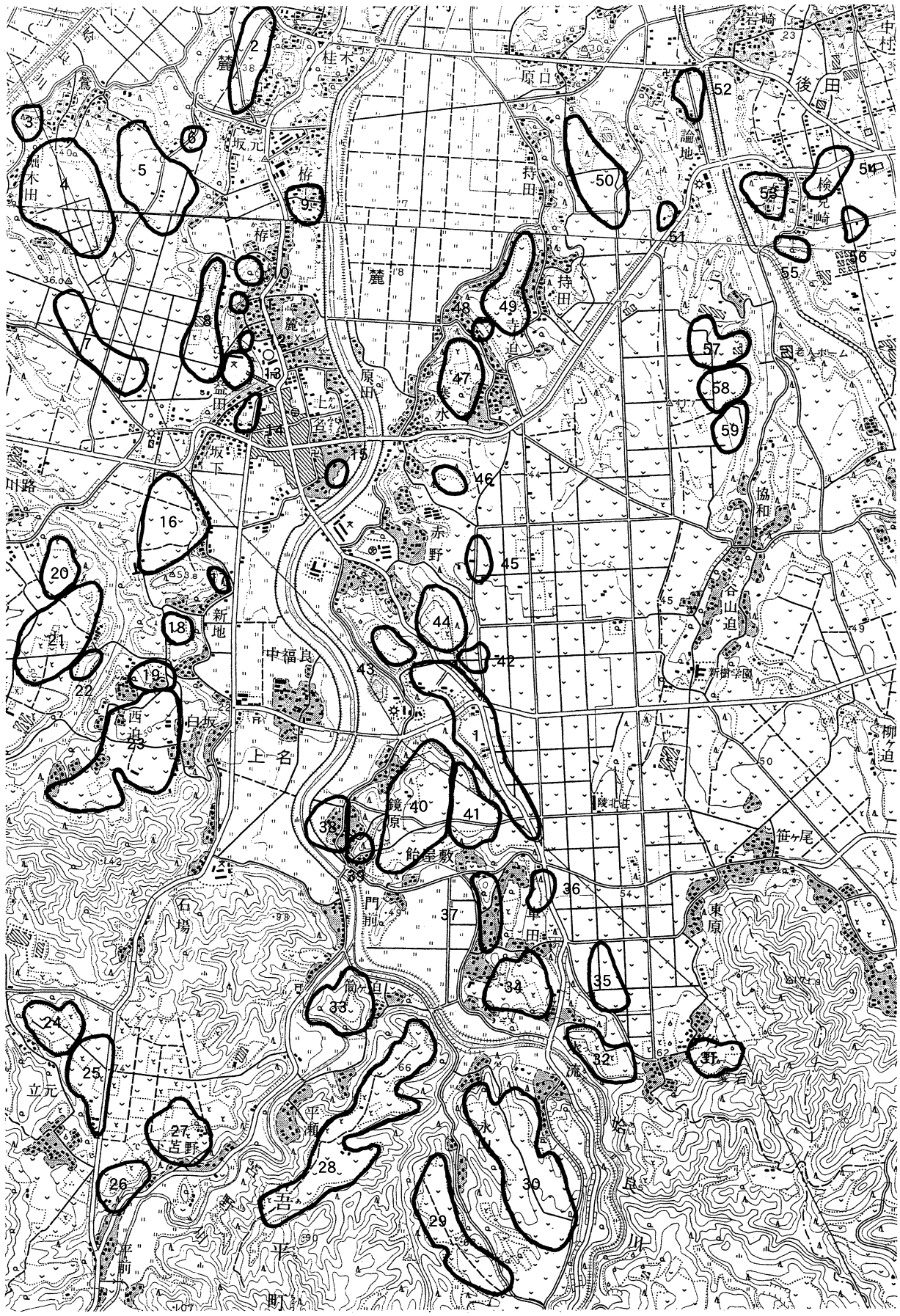
平成２年に調査が実施され，縄文時代早期の集石遺構が検出され，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・山形押型文土器のほか阿高式土器が出土している。

⑼　原口岡遺跡

平成６年度に発掘調査が実施され，縄文時代早期の集石遺構６基のほか，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・石斧・磨製石鏃・石皿・砥石・剥片石器等の遺物が出土している。

⑽　和田遺跡

平成14・15年度の本調査で，縄文時代早期の連穴土坑２基，集石遺構28基などの遺構のほか，加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・辻タイプ・中原式土器・磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・砥石などの遺物が発見されている。



第１図　周辺遺跡位置図（１／25000）

第３表　周辺遺跡地名表(1)

№	遺跡名	所　在　地	地形	時　　代	遺　　物　　等	備　　考
1	中尾	鹿屋市吾平町上名中尾	台地	縄文・弥生・古墳	縄文土器（早・晩）・弥生土器・成川式土器	本報告書
2	名主原	鹿屋市吾平町下名川西名主	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	S63・H1・13・15・16調査
3	堀木田	鹿屋市吾平町麓堀木田	低地	弥生（中・後）	弥生土器・打製石斧	
4	和泉田原	鹿屋市吾平町麓和泉田原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・須恵器・土師器	
5	鶯原	鹿屋市吾平町麓鶯原	台地	弥生	弥生土器	
6	川上	鹿屋市吾平町麓川上	台地	弥生	高坏・壺	
7	廣牧	鹿屋市吾平町麓廣牧	台地	古墳		H5町調査
8	城ヶ迫原	鹿屋市吾平町麓城ヶ迫原	台地	弥生	弥生土器	
9	栫の下	鹿屋市吾平町麓栫下	低地	弥生（中）・古墳	弥生土器（櫛目文あり）・成川式土器	
10	山古城跡	鹿屋市吾平町麓城ヶ迫原城山	丘陵	平安（末）・中世（室町末）	上古平判官と申人数代居住，近世初頭島津氏支配，回り八町，高さ十間	「姶良名勝志」「三國名勝図会」
11	地頭御仮屋跡	鹿屋市吾平町麓山古城南山麓	低地	平安（末）・中世（室町）・近世	上古平判官居館跡，島津の地頭初代以降（天正から）	
12	千手院（坂）	鹿屋市吾平町麓千手院	台地	弥生（後）・奈良・平安	弥生土器・土師器	
13	宮ノ上地下式横穴墓群	鹿屋市吾平町麓宮ノ上吾平小校庭	台地	古墳	地下式横穴墓群・直刀・鉄器	S24・29・46・53・61調査
14	宮ノ前（鵜戸神社脇）	鹿屋市吾平町麓宮ノ前鵜戸神社脇	低地	弥生（中）	壺形土器（完全）	
15	町頭	鹿屋市吾平町麓町頭	低地	弥生（中）	壺形土器（完全）	
16	道脇	鹿屋市吾平町麓道脇	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器・青磁	
17	猫塚	鹿屋市吾平町麓猫塚	台地	古墳・奈良・平安	成川式土器・土師器・須恵器	
18	新地上	鹿屋市吾平町上名新地上	台地	縄文（前）・弥生（前・中）	曽畑式土器・石匙・弥生土器・石庖丁	
19	西迫	鹿屋市吾平町上名西迫	台地	弥生（中）	弥生土器・石斧	
20	モタイ坂	鹿屋市吾平町上名モタイ坂	台地	弥生（中）・古墳	弥生土器・成川式土器・打製石斧	町報4
21	前木場A	鹿屋市吾平町上名前木場	台地	古墳・奈良・平安	成川式土器・土師器・須恵器	
22	前木場	鹿屋市吾平町上名前木場	台地	縄文（前・晩）・弥生（中・後）・古墳	曽畑式土器・弥生土器・磨石・砥石・成川式土器・土師器・須恵器	町報3・4
23	白坂原	鹿屋市吾平町上名白坂原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	
24	下小原	鹿屋市吾平町上名下小原	台地	弥生・古墳	弥生土器・土師器	
25	立元	鹿屋市吾平町上名立元	台地	縄文（後）・弥生（前・中）	指宿式土器・市来式土器・石鏃・磨製石斧・弥生土器	
26	苫野原A	鹿屋市吾平町上名苫野原	台地	縄文（後）・弥生（中）	指宿式土器・市来式土器・弥生土器・石器	
27	苫野原B	鹿屋市吾平町上名苫野原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	
28	筒ヶ迫	鹿屋市吾平町上名筒ヶ迫原	台地	縄文（晩）・古墳	黒川式土器・成川式土器・磨製石斧・打製石斧・敲石	町報10
29	中崎	鹿屋市吾平町上名中崎	台地	古墳	成川式土器	
30	水流	鹿屋市吾平町上名水流	台地	縄文（早）・弥生・古墳	縄文土器・弥生土器・成川式土器	H2調査
31	角野原	鹿屋市吾平町上名角野原	台地	弥生（中）	弥生土器・石斧	
32	四方高迫	鹿屋市吾平町上名四方高迫	台地	縄文・弥生・古墳	曽畑式土器・指宿式土器・蓆目圧痕・弥生土器・成川式土器・土師器・青磁・打製石斧・石皿・磨製石斧・磨石・砥石	本報告書
33	筒ヶ迫城跡	鹿屋市吾平町上名迫門前	丘陵	中世（室町）	天文天正の頃地頭居住。回り十二町，高さ十五間，肝属伊勢守の城跡という。	「姶良名勝志」「三國名勝図会」

第４表　周辺遺跡地名表(2)

№	遺跡名	所　在　地	地形	時　　代	遺　　物　　等	備　　考
34	渡迫	鹿屋市吾平町上名渡迫（車田）	台地	弥生（前・中）	弥生土器・石斧	
35	角野原Ⅱ	鹿屋市吾平町上名角野原	台地	縄文（早）・弥生（中）・古墳	吉田式土器・石槍・山ノ口式土器・成川式土器・土師器・須恵器・紡錘車	町報16
36	和田	鹿屋市吾平町上名和田	台地	縄文（早）・弥生（中）・古墳（前）	集石・下剥峯式土器・石坂式土器・弥生土器	町報17
37	松下城跡	鹿屋市吾平町上名西栫	台地	中世（室町）	筒ヶ迫城跡の前哨陣地	
38	軍宮下	鹿屋市吾平町上名	低地	弥生（前・中）・古墳（後）	突帯文土器・山ノ口式土器・成川式土器・須恵器・石製紡錘車	町報13
39	鏡原	鹿屋市吾平町上名鏡原	台地	縄文（中・後）・弥生・古墳	阿高式土器・市来式土器・磨製石斧・弥生土器・成川式土器・土師器	
40	鏡原上	鹿屋市吾平町上名鏡原	台地	弥生（中・後）	弥生土器・石斧	
41	諏訪尾	鹿屋市吾平町上名諏訪尾	台地	弥生（中・後）	弥生土器・土師器	H9調査
42	打越	鹿屋市吾平町赤野打越	低地	古墳		H5市町村調査
43	大久保迫	鹿屋市吾平町上名大久保迫	台地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	
44	境原	鹿屋市吾平町麓境原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	
45	赤野原	鹿屋市吾平町麓赤野原	台地	弥生（中）	弥生土器・石斧	
46	反田原	鹿屋市吾平町麓反田原	台地	縄文・弥生・奈良・平安	縄文土器・弥生土器・土師器	町報12
47	三角原	鹿屋市吾平町麓三角原	台地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器	
48	寺ヶ迫古墳群	鹿屋市吾平町麓寺ヶ迫	台地	弥生（中）・古墳	円墳9基	
49	霧島原	鹿屋市吾平町麓霧島原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	
50	井牟田	鹿屋市吾平町下名論地	低地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	
51	論地原	鹿屋市吾平町下名論地	台地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	
52	論地原	肝付町後田論地原	台地	弥生	弥生土器	
53	検見崎城跡	肝付町後田検見崎	台地	中世	肝属氏出城の一・肝属二代の主兼経の弟兼友の居館堀割・墓石等現存	
54	橋戸	肝付町後田		古墳		H12土木分布調査
55	北後田古墳群	肝付町後田稲村	台地	弥生・古墳	円墳4基・弥生土器	
56	検見崎	肝付町後田検見崎	台地	弥生（後）	円墳の回りに多量に散布	
57	銭亀	肝付町後田銭亀	台地	弥生		
58	小牟田上	肝付町後田小牟田上	台地	弥生・奈良平安		
59	稲荷岡	肝付町後田稲荷岡	台地	弥生		

〈参考・引用文献〉

「宮ノ上地下式横穴群・松下城遺跡・大牟礼遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）1987　吾平町教育委員会
「前木場遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）1988　吾平町教育委員会
「前木場原遺跡・モタイ坂遺跡・薗入寺跡遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）1989　吾平町教育委員会
「名主原遺跡・荷掛原遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）1990　　吾平町教育委員会
「筒ヶ迫遺跡・荷掛原遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）1992　　吾平町教育委員会
「反田原遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）1994　吾平町教育委員会
「出水・軍宮下遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（13）2000　吾平町教育委員会
「中尾地下式横穴群」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（14）1998　吾平町教育委員会
「角野原Ⅱ遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（16）2002　吾平町教育委員会
「和田遺跡」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）2004　吾平町教育委員会

Ⅲ　地　層

中尾遺跡・四方高迫遺跡は，標高約40m～55mのシラス台地および姶良川の開析によって形成された河岸段丘縁辺部に立地する。遺跡およびその周辺の現況は，徐々に宅地化が進んではいるものの，ほぼ平坦な畑地帯が広がっており，地形的には良好な様相を呈している。ただし遺跡が形成されたⅠ層より下位の旧地形においては，台地縁辺部に立地することもあって部分的に起伏が認められ，浅い谷状の地形を形成するなど，現地形から受ける印象とは相違がある。このような旧地形に対し，後世に盛土や削平などの造成が行われたこともあり，地層の堆積や残存状況には地点によって若干の差が認められる。今回報告する基本的な地層は，中尾遺跡M～N－41区の地層を指標とした。基本的な層序は以下の通りである。なお，層厚については調査区全体における数値である。

Ⅰ	Ⅰ層　灰黒褐色土
Ⅱ	Ⅱ層　黒褐色土
Ⅲ	Ⅲ層　暗紫色土
Ⅳa	Ⅳa層　暗黄褐色土
Ⅳb	Ⅳb層　黄褐色土
Ⅴ	Ⅴ層　黄褐色軽石層
Ⅵa	Ⅵa層　黄橙色火山灰層
Ⅵb	Ⅵb層　黄橙色軽石層
Ⅶ	Ⅶ層　乳茶褐色粘質土
Ⅷ	Ⅷ層　黒褐色土
Ⅸ	Ⅸ層　暗茶褐色粘質土
Ⅹ	Ⅹ層　黄褐色粘質土

第２図　基本地層図

Ⅰ層は，表土または旧表土・盛土・耕作土である。層厚約20㎝～200㎝である。

Ⅱ層は，O－14～15区，M－20～25区を中心に調査範囲の一部にわずかに残存する。古代の遺物包含層である。残存部分での層厚は約５㎝～50㎝である。

Ⅲ層は，開聞岳を起源とする噴出物で，通称紫ゴラと呼ばれる。Ⅳ層中の上位に部分的であるがブロック状に認められ，層厚約４㎝～10㎝である。

Ⅳ層は，約5,500年前の池田カルデラを起源とする噴出物で，上位から火山灰層（Ⅳａ），火砕流層（Ⅳｂ）に細分される。Ⅳ層の層厚は約20㎝～40㎝である。

Ⅴ層は，池田カルデラを起源とする噴出物で池田降下軽石と呼ばれる。層厚は約20㎝～50㎝である。なお，Ⅴ層下部には部分的に尾下降下スコリアと呼ばれる黒褐色火山礫が認められる。層厚約４㎝程度である。

Ⅵ層は，約6,400～6,300年前の鬼界カルデラを起源とする噴出物で，通称アカホヤ火山灰と呼ばれる。上位から火山灰層（Ⅵａ），軽石層（Ⅵｂ）に細分される。Ⅵ層の層厚は約20㎝～60㎝である。

Ⅶ層は，縄文時代早期の遺物包含層で，粘質をおびやや硬質である。層厚約20㎝～30㎝である。

Ⅷ層は，やや硬質で，約11,500年前の桜島を起源とする噴出物，通称薩摩火山灰が部分的にパミス状に点在する。層厚約30㎝である。

Ⅸ層は，通称チョコ層と呼ばれる層に該当すると思われ，やや硬質である。Ⅸ層から遺物の出土は認められていない。

Ⅳ　中　尾　遺　跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

平成８年度以降の調査も７年度までと同じように，測量基準として「一般地方道折生野・神野・吾平線改良施行計画平面図」のセンターライン№64と№68の２点を結ぶ線を基軸にし，北西から南東方向に１・２・３～，北東から南西方向にＡ・Ｂ・Ｃ～とする10m間隔の調査用グリッド（区割り）を設定して実施した。

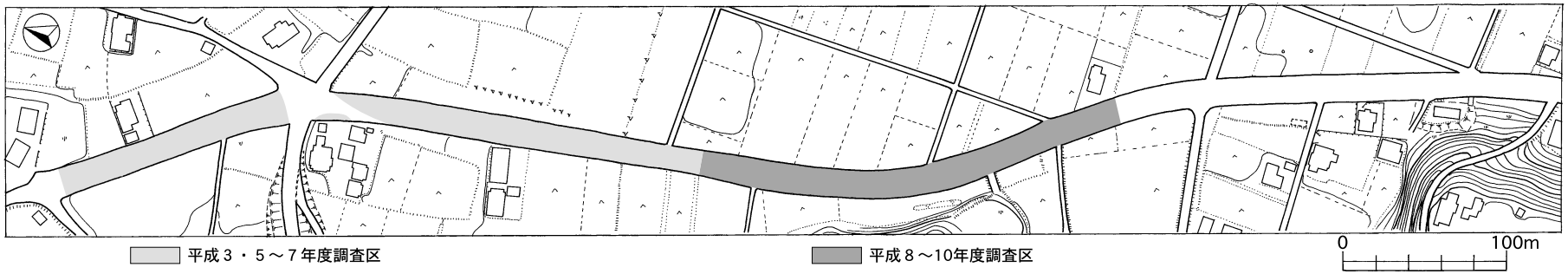
なお，平成３年から平成７年度の調査では，レベル原点として肝属郡吾平町上名字中尾の町営グラウンドに所在するＢＭ．６（Ｈ＝49.459m）と同字中尾6396番地に所在するＢＭ．５（Ｈ＝51.887m）を基準として利用した。

平成３年度の調査によって，調査区域全体に遺跡が残存することが判明したため，平成５年度から継続して調査を実施してきた。平成８年度は1,200㎡，平成９年度には1,600㎡，平成10年度に1,280㎡を対象に本調査を行った。なお，平成８年度と平成９年度については，さらに南側への遺跡のひろがりを把握するための確認調査を本調査と併行して実施した。

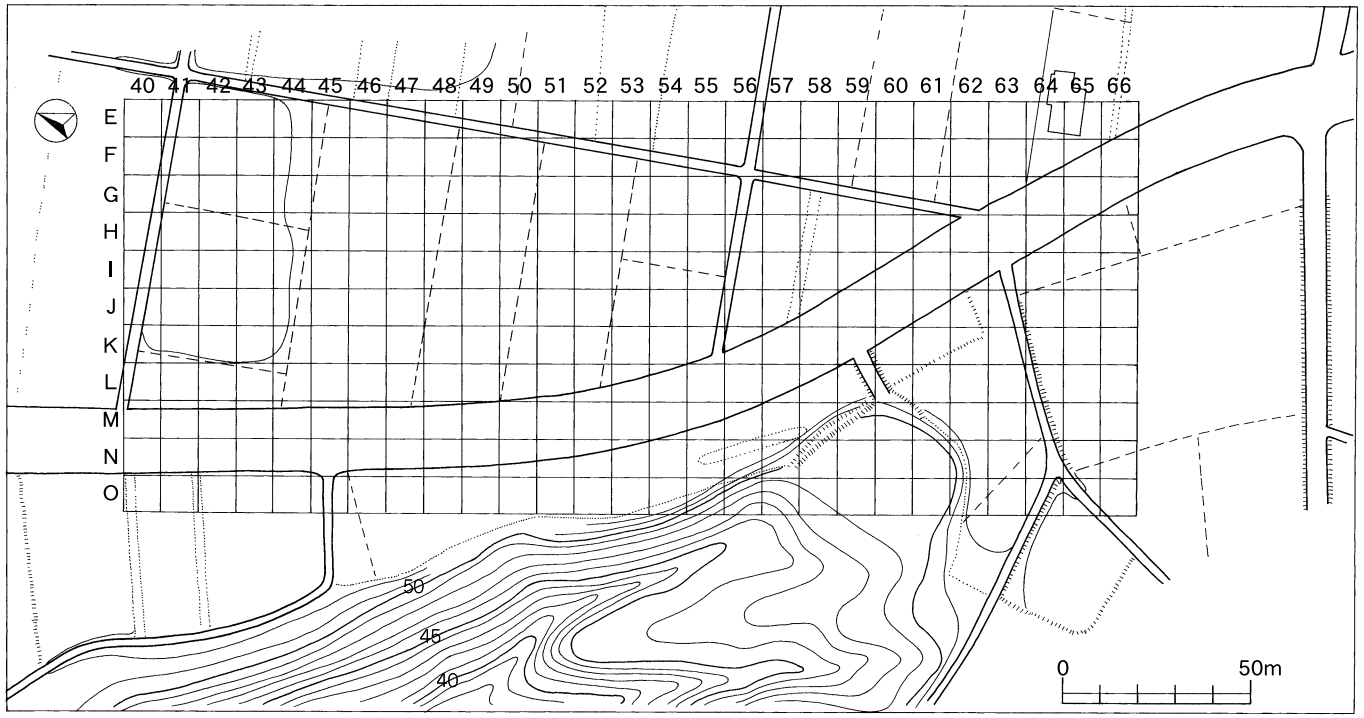
調査の順序としては，伐採等の環境整備を実施した後，重機（バックホー）によって表土・アスファルトなどを除去し，Ⅱ層以下について遺構検出面であるⅣ（池田火山灰）層上面あるいはⅥ（アカホヤ火山灰）層上面まで人力（山鍬・ジョレン等を利用）による掘り下げを行った。出土した遺物（土器・石器など）を記録して取り上げた後，検出した遺構（竪穴住居跡・溝状遺構など）については，それぞれ丁寧に掘り下げを行い（移植ゴテ等を利用），写真撮影や図面作成作業を実施した。その後，Ⅶ（乳茶褐色粘質土）層まで人力によって掘り下げ，再度，遺物の取り上げなどを行い，遺構検出（集石など）・図面作成作業などを実施した。さらに下層確認のため，部分的に下層確認トレンチを設定して掘り下げを行い，遺物包含層の確認に努めた。なお，掘削によって生じた排土は，調査区の幅が狭いために隣接する事業区内の調査終了区間などにベルトコンベアやタイヤショベル，バックホーによって搬出した。その際，調査地と現道との高低差がある場合は，作業上の安全等を考慮して場合によっては法勾配を取りながらの掘削，排土処理を実施した。なお，各年度とも発掘調査終了時には掘削部分の埋め戻しを行った後，県土木部（鹿屋土木事務所）への調査現場の引き渡しを実施した。

第２節　調査成果の概要

平成８年度から平成10年度にかけての発掘調査の結果，Ⅷ層上面で縄文時代早期の集石遺構を12基検出し，Ⅶ層から前平式土器・下剥峯式土器・塞ノ神Ａ式土器などの土器，打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨敲石類・石皿などの石器が出土した。Ⅳ層からは，縄文時代晩期の土坑１基のほか，曽畑式土器・黒川式土器・刻目突帯文土器・組織痕土器などの土器，打製石鏃・磨製石斧・打製石斧などが出土した。Ⅳ層からⅥ層上面において古墳時代の竪穴住居跡５軒，地下式横穴墓２基，土坑１基などが検出され，多くの土器が出土した。また弥生時代中期の土器が少量出土し，古代の溝状遺構・土坑も検出された。各時代ごとの調査成果の詳細については，第２章以下で触れることとする。



第３図　調査区域全体図



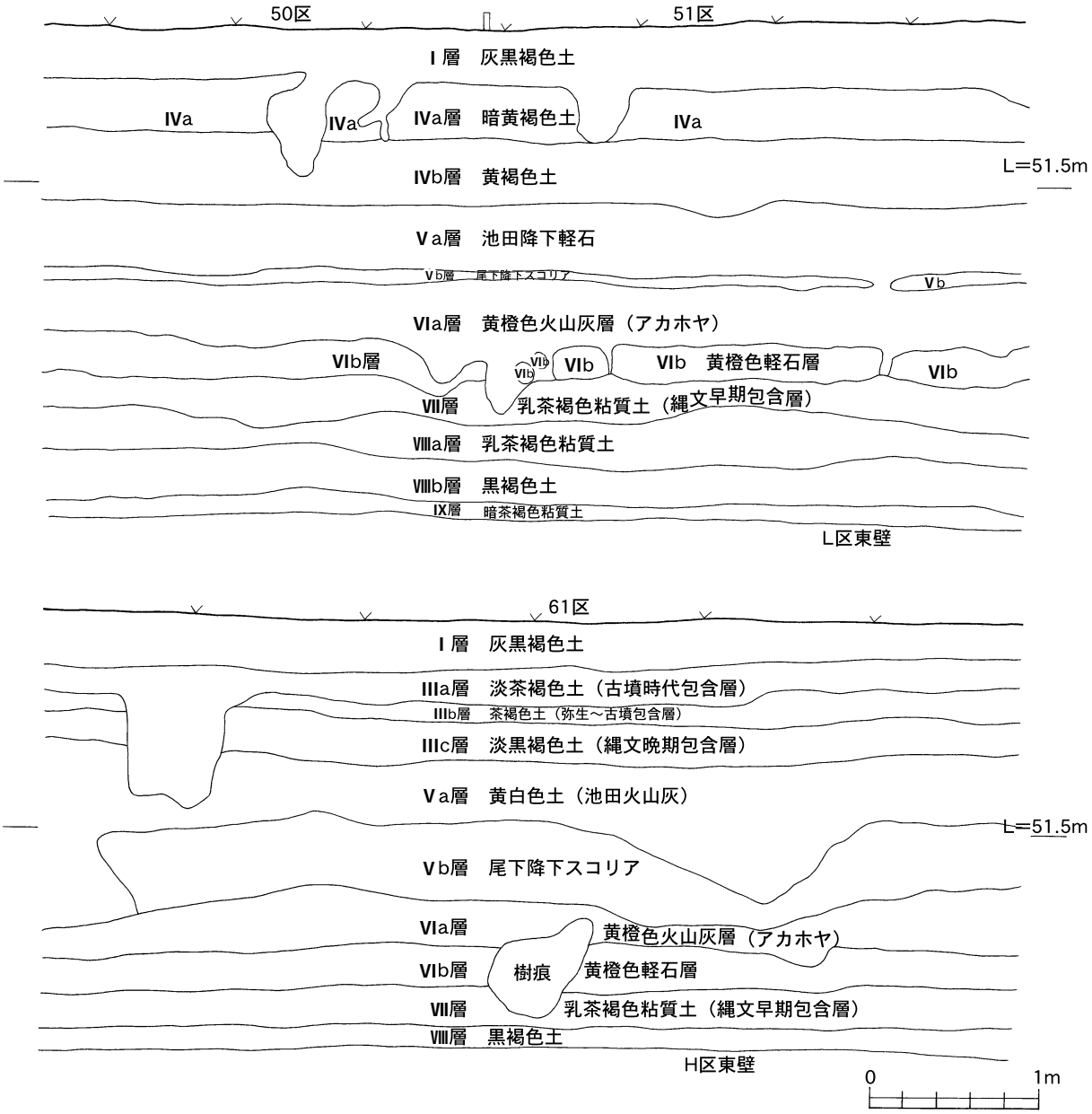
第４図　平成８～10年度調査グリッド配置図

第３節　中尾遺跡の地層

今回調査した地点は台地の西端近くに南北に長く続いているが，部分的に落ち込みなどがあるものの全体的に安定した地層をしている。

場所によっては地層の厚さや，残存状況に違いがある。50・51Ｌ区付近ではⅡ層・Ⅲ層がなくなっており，61H区付近ではⅡ層・Ⅳ層がない。また，50・51Ｌ区ではⅤ層の下部に尾下降下スコリアが４㎝～８㎝ほど安定して堆積しており，Ⅷ層も上下の２層に分けることが可能で，下部のほうが色が濃く，この層に薩摩火山灰が粒状に含まれている。61H区では砂や茶褐色パミス・黄白色パミスなどが互層となる尾下降下スコリア（Ⅴｂ層）が50㎝ほどの厚さに堆積している。

遺物は縄文時代早期はほぼⅦ層に，前期はⅥａ層に包含されているが，縄文時代後期以降はⅡ～Ⅳ層に包含されて区別しにくい。



第５図　中尾遺跡の地層図

第２章　縄文時代

早期・前期・後期・晩期の遺構・遺物が発見されている。早期はⅥ層に含まれており，集石・集積遺構などの遺構，前平式土器・桑ノ丸式土器・下剥峯式土器・押型文土器・平栫式土器・塞ノ神式土器などの土器，石鏃・異形石器・局部磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・石皿などの石器が発見されている。前期・後期は曽畑式土器などが出土しており，Ⅲ層に包含されている。晩期は黒川式土器・石鏃・扁平打製石斧・磨石・石皿などがⅢ層から出土している。

第１節　早期

集石遺構・集積遺構などの遺構と，土器・石器などが発見されている。

１　集石遺構

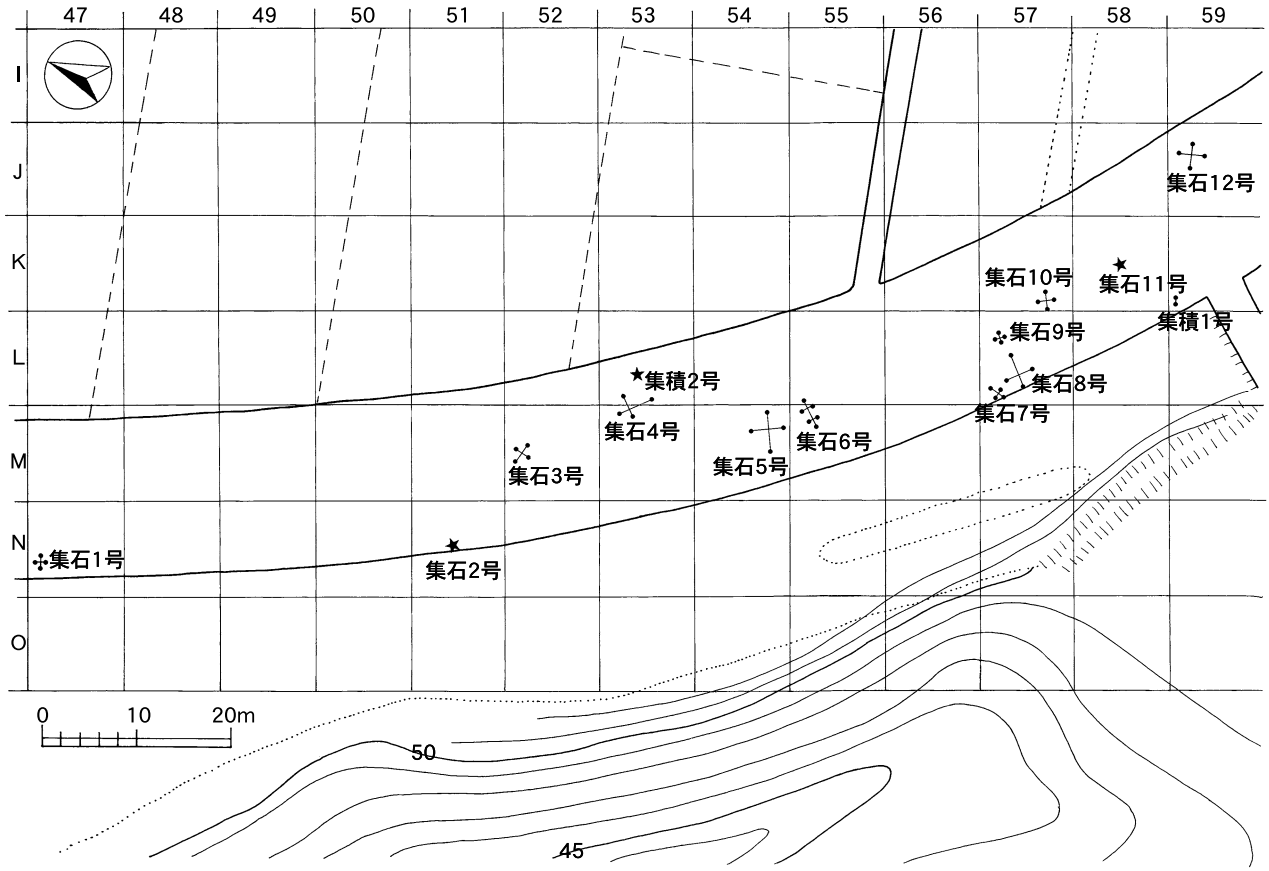
12基の集石遺構が大きく５か所に所在し，47N区に１号，51～53－Ｌ～N区に２～４号，54・55－Ｌ・M区に５・６号，57－Ｋ～M区に７～10号，58・59－Ｊ・Ｋ区に11・12号がある。

１）集石遺構１号（Ｈ８年度調査，第７図）

47N区で検出された１m四方に散らばる集石遺構で，35個の礫から成る。３㎝ほどしかない小さいものから，10㎝大もあるものまであり，円礫が多い。ほぼ平坦に検出されていることから，かき出されたものと思われる。

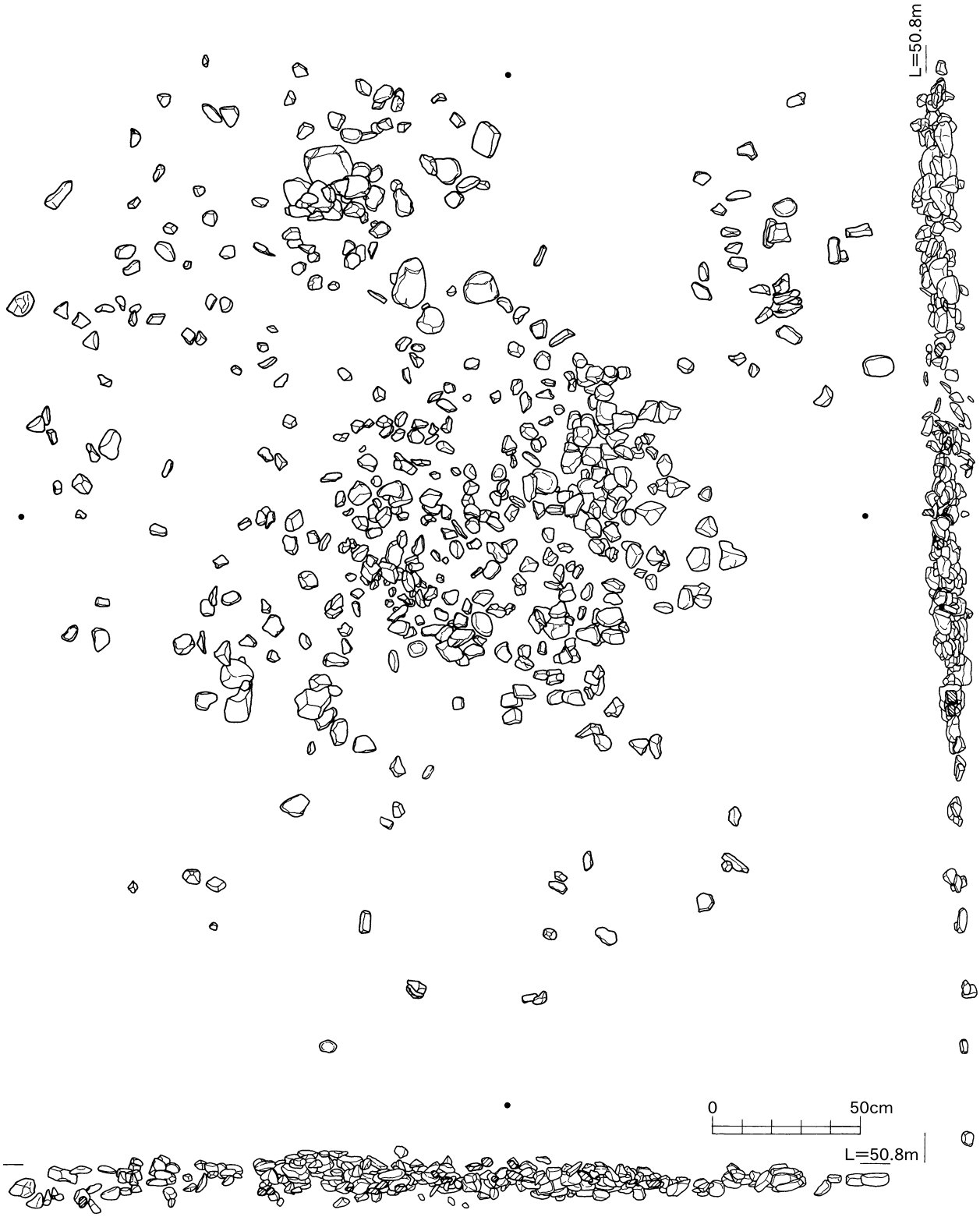
２）集石遺構２号（旧１号，第８図）

51N区で検出された３m四方に広がる集石遺構だが，その中央部には直径1.5mの範囲に集中して存在している。２㎝位の小礫から20㎝近くもある円礫まで504個の礫から成るが，その８割ほど



第６図　縄文時代早期の遺構配置図

第７図　集石遺構１号・３号

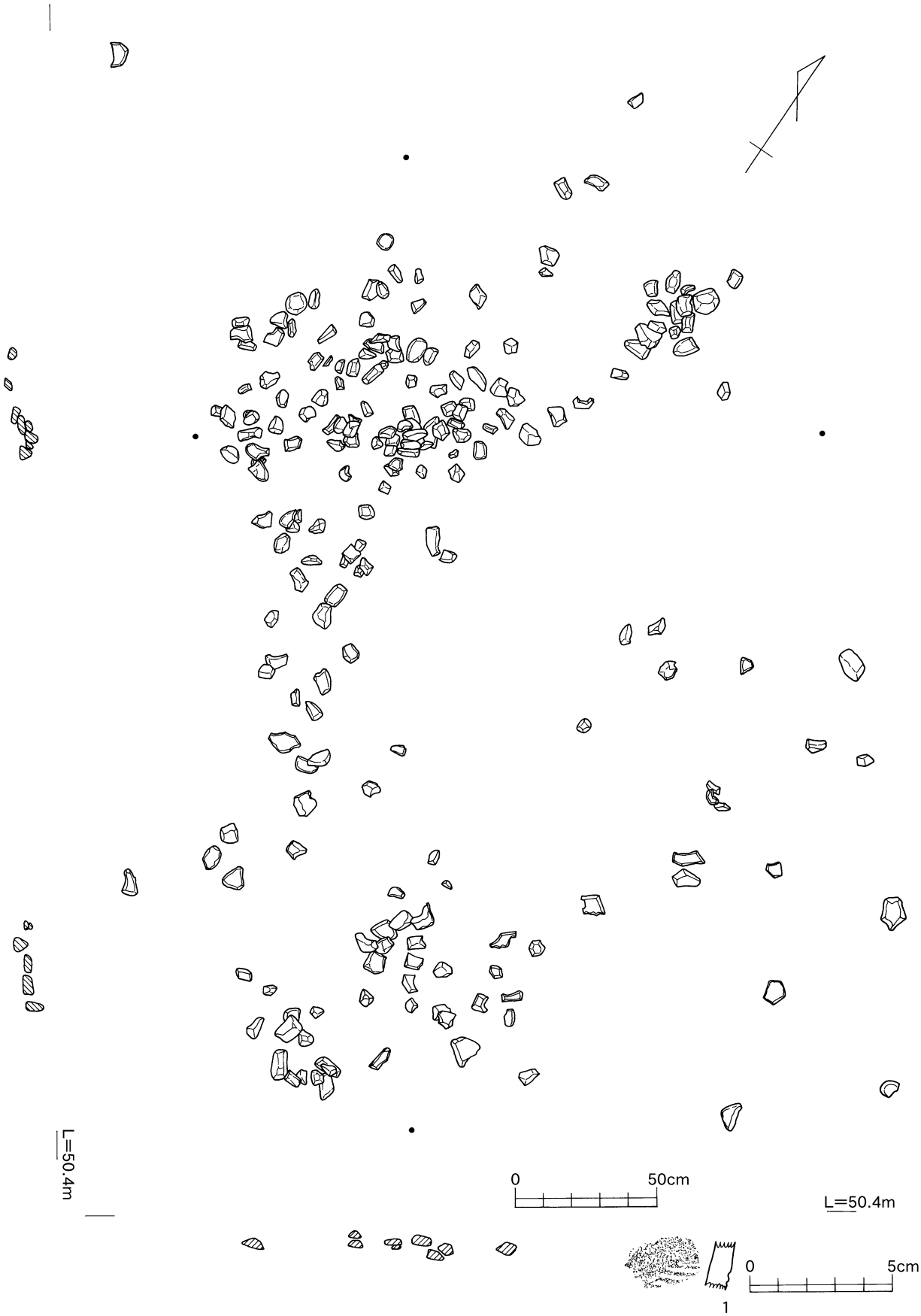


第８図　集石遺構２号

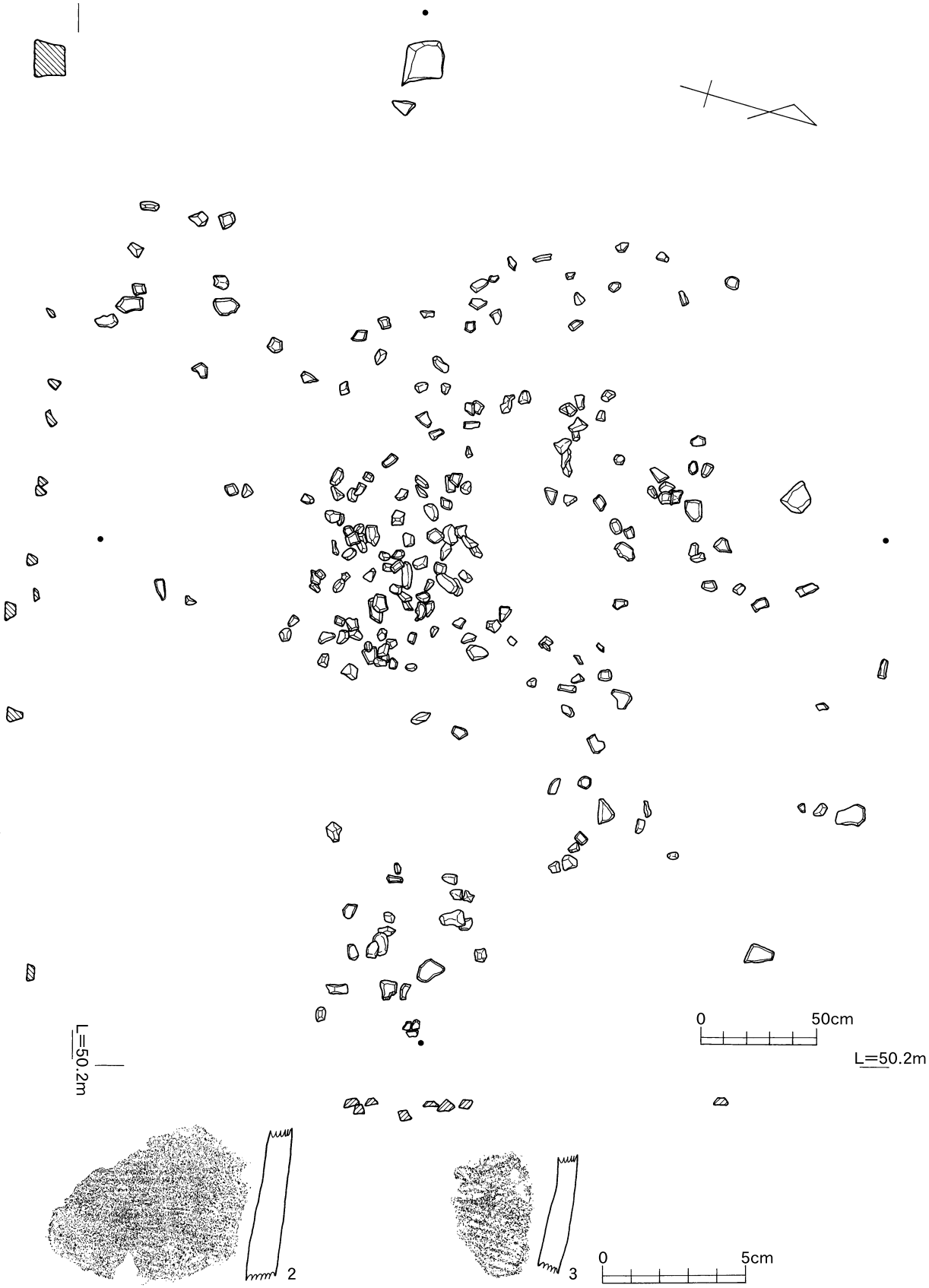
が中央に集中している。この中央部分が集石本体で，その周辺はそこからかき出された礫であると思われる。ほぼ平坦に検出されており掘り込みはみられない。

３）集石遺構３号（旧４号，第７図）

52M区で検出された1.1m×1.5mの略円形に広がる集石遺構で，さらにその外側に少量の礫が散



第９図　集石遺構４号と出土土器

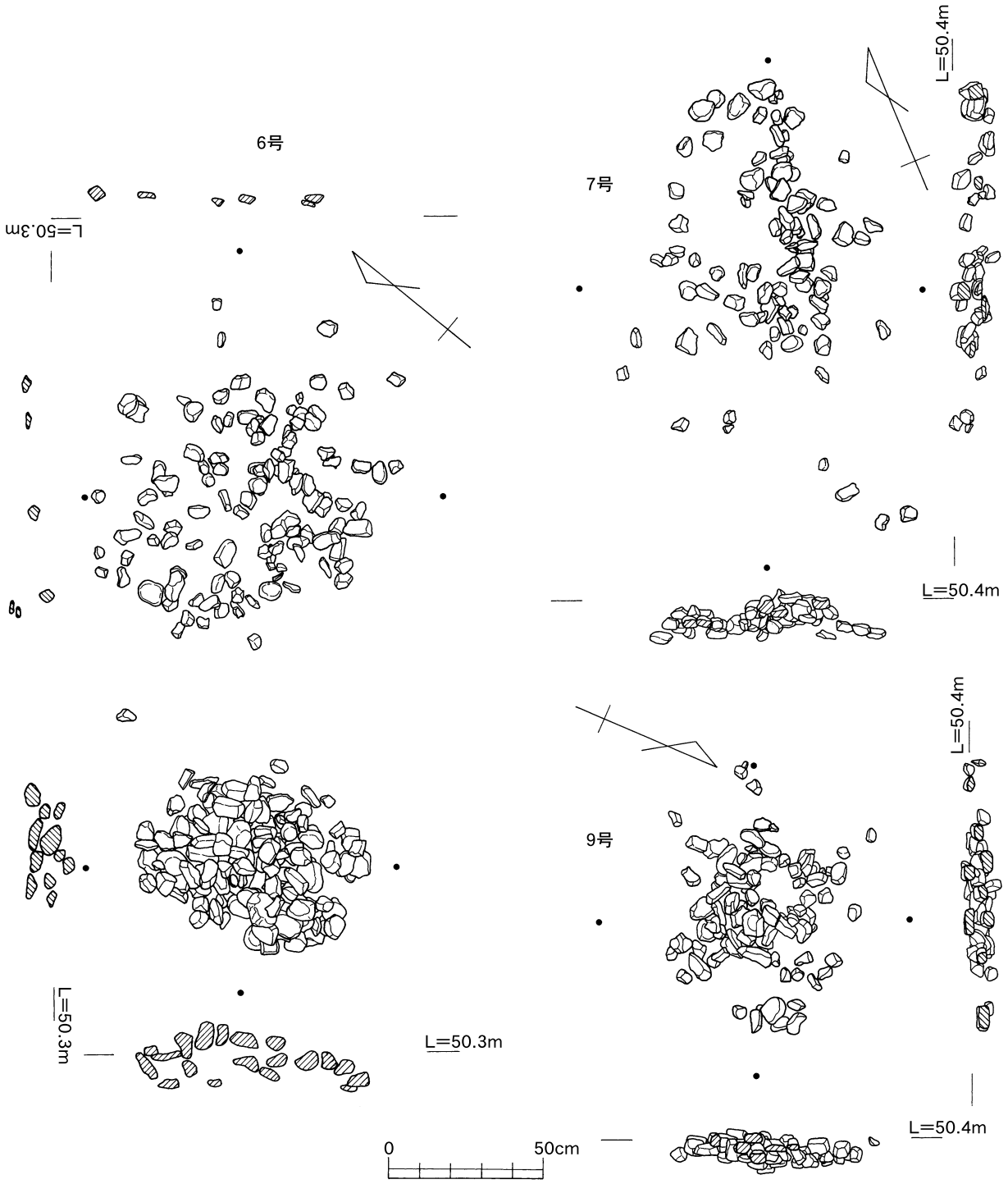


第10図　集石遺構５号と出土土器

在しており，それを含めると1.5m×2.0mの範囲に広がっている。130個ほどの礫から成っており，そのほとんどは中央部に集中している。角礫が多く，15㎝ほどの大型のものや５㎝未満の小型のものもあるが，ほとんど５㎝～８㎝程度の礫である。中央部は40㎝ほどの窪みとなっており，この遺構は掘り込みのある集石本体と思われる。

４）集石遺構４号（旧５号，第９図）

53Ｌ・Ｍ区で検出された2.8m×3.4m四方に広がっている集石遺構で，散在しているようにもみ



第11図　集石遺構６号・７号・９号

えるが，北側では直径1.1mほどのなかに５割程度の礫が集中している。ここが集石遺構本体で，そのまわりのものはかき出された礫かもしれない。礫はあまり大きくなく，10㎝を越えるものはほとんどない。206個から成る。土器の小破片が１点含まれている。

土器は外面が茶褐色，内面が暗茶褐色を呈する。外面には斜方向の細かい貝殻条痕がみられ，周辺はヘラでナデている。内面はていねいなヘラナデである。金雲母・黄白色石・茶色石・石英などの細かい石を多く含む胎土を用い，焼成度は良好である。薄手の作りで桑ノ丸式土器の可能性がある。

５）集石遺構５号（旧12号，第10図）

54－M区で発見された集石遺構で，3.5m×4.5mの広い範囲に散在している。214個の礫から成るが，4割は中央付近の直径１mの円形の範囲に集中しており，ここが５号の本体部分で，周辺の礫はかき出し部分だと思われる。同一個体の可能性もある土器片２点が出土している。

２は外面が斜方向の細かい貝殻条痕とヘラナデ，内面がていねいなヘラナデ，３は外面が横方向の細かい貝殻条痕，内面がていねいなヘラナデである。ともに内外とも白い灰状のものが付着しており，色調がはっきりしないが，３は暗茶褐色をしているようである。金雲母・石英・黄白色石などの細かい石を含んでおり，焼成度は良好である。２は薄手の作りで，桑ノ丸式土器の可能性がある。

６）集石遺構６号（旧10・11号，第11図）

55－L・M区で検出された2.2m×1.1mの範囲に広がる集石遺構だが，２つの群に分かれ，2基になる可能性がある。西側の群は0.6m×0.8mの惰円形に広がり，150個から成る。ほぼ平坦であるが，中央部はやや窪んで約30㎝と厚く堆積している。５㎝足らずのものから10㎝ほどのものまでの円礫である。東側の群は1.0m×1.1mの範囲に広がり，101個から成る。西側の群に比べて小さい礫が多いことと，広がりから，西側が本体で，東側がそのかき出し礫と思われる。

７）集石遺構７号（旧９号，第11図）

57－L・M区で検出された1.0m×1.5m四方に広がる集石遺構で，92個から成るが，そのうち９割ほどが0.7m×0.9mの範囲に集中している。10㎝以下の小さい礫から成る。掘り込みはなく，ほぼ平坦に置かれている。集石遺構８号と隣接している。

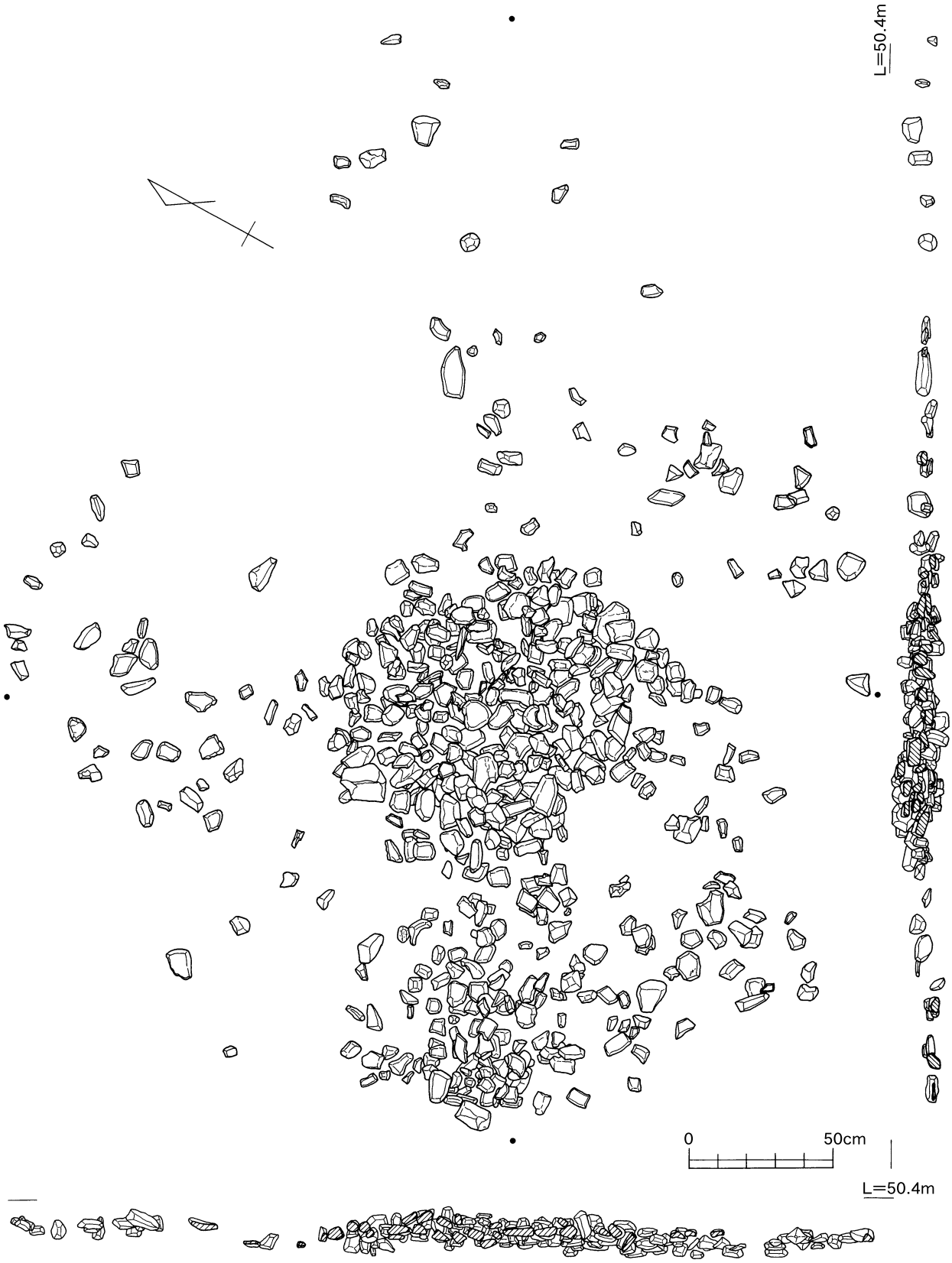
８）集石遺構８号（旧７号，第12・13図）

57L区で検出された3.0m×3.6mの範囲に広がる集石遺構で，中央の径1.1mの範囲にはぎっしりとつまった状況で集中している。礫はすべてで506個から成り，その85%ほどが中央に集中している。10㎝を越す割合に大きな礫も含まれている。掘り込みはなく，平坦に置かれ，厚さは15㎝ほどに堆積している。中央部が集石本体で，その周辺はそこからかき出された礫であると思われる。

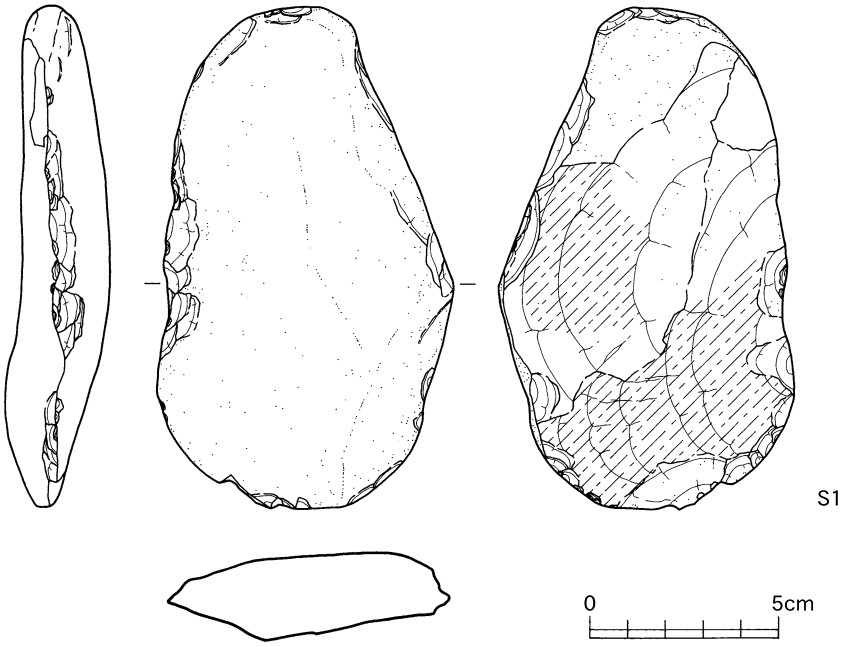
礫の中に１点だけ礫器がまざっている。片面に自然面を残す長さ13.3㎝，最大幅7.5㎝，厚さ2.3㎝，重さ290ｇの安山岩礫を用い，片方の長側辺中央付近と短側辺の一部に打撃痕跡がみられる。

９）集石遺構９号（旧６号，第11図）

57L区で検出された0.7m×0.9mの略円形に広がる集石遺構で，厚さ10㎝にぎっしりとつまっている。５㎝四方ほどの礫80個位から成る。掘り込みはないが，集中していることから集石遺構本体と思われる。



第12図　集石遺構８号



第13図　集石遺構８号出土石器

10）集石遺構10号（旧８号，第14図）

57－Ｋ区で検出された２m四方の範囲に広がる集石遺構で，割合に散在しているが，直径90㎝の範囲には集中している。

11）集石遺構11号（旧２号，第14図）

58Ｋ区で検出された集石遺構で，９個だけがややはみ出ているが，ほかの198個の礫は1.0m×1.2mのほぼ円形の範囲に集中している。掘り込みはなく，ほぼ平坦に置かれ，厚さは10㎝ほどである。時に10㎝前後のものもみられるが，５㎝～８㎝ほどのものが多い。

12）集石遺構12号（旧３号，第15図）

59Ｊ区で検出された2.5m四方に広がる集石遺構で，11号とは近い。271個の礫から成るが，集中しているのは1.5m四方ほどで，なかでも北側には90個ほどの礫が約15㎝の厚さに堆積している。掘り込みはない。これは集石遺構の本体とそのかき出し部分から成っているものと思われる。

２　集積遺構

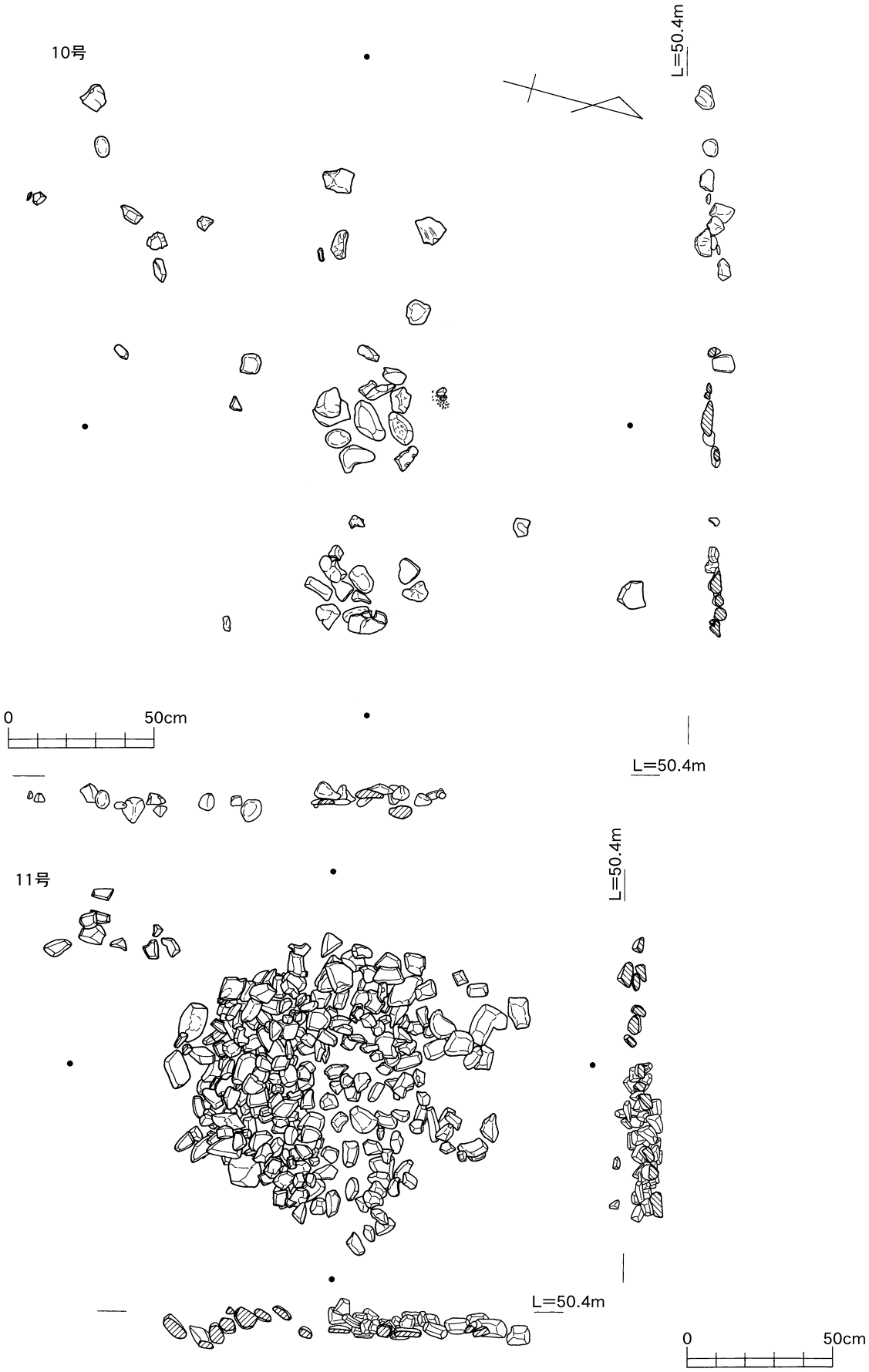
１）集積遺構１号（第16図，Ｓ２～Ｓ６）

59Ｋ区で発見された集積遺構で，粘板岩の剥片５点が横に並ぶようにして出土している。Ｓ４を除き，他は横剥ぎの剥片で，Ｓ２・Ｓ５・Ｓ６は片面に自然面を広く残し，Ｓ３・Ｓ４も一部に自然面を残している。接合はできないが，Ｓ２～Ｓ５は同じ母岩から剥ぎ取った可能性がある。割れ口は幅の広い部分もあるが，鋭い部分もあることから，刃器として使用可能だが，使用痕跡はない。大きな母岩から剥ぎ取った剥片を一か所に集めて置いたものと思われる。

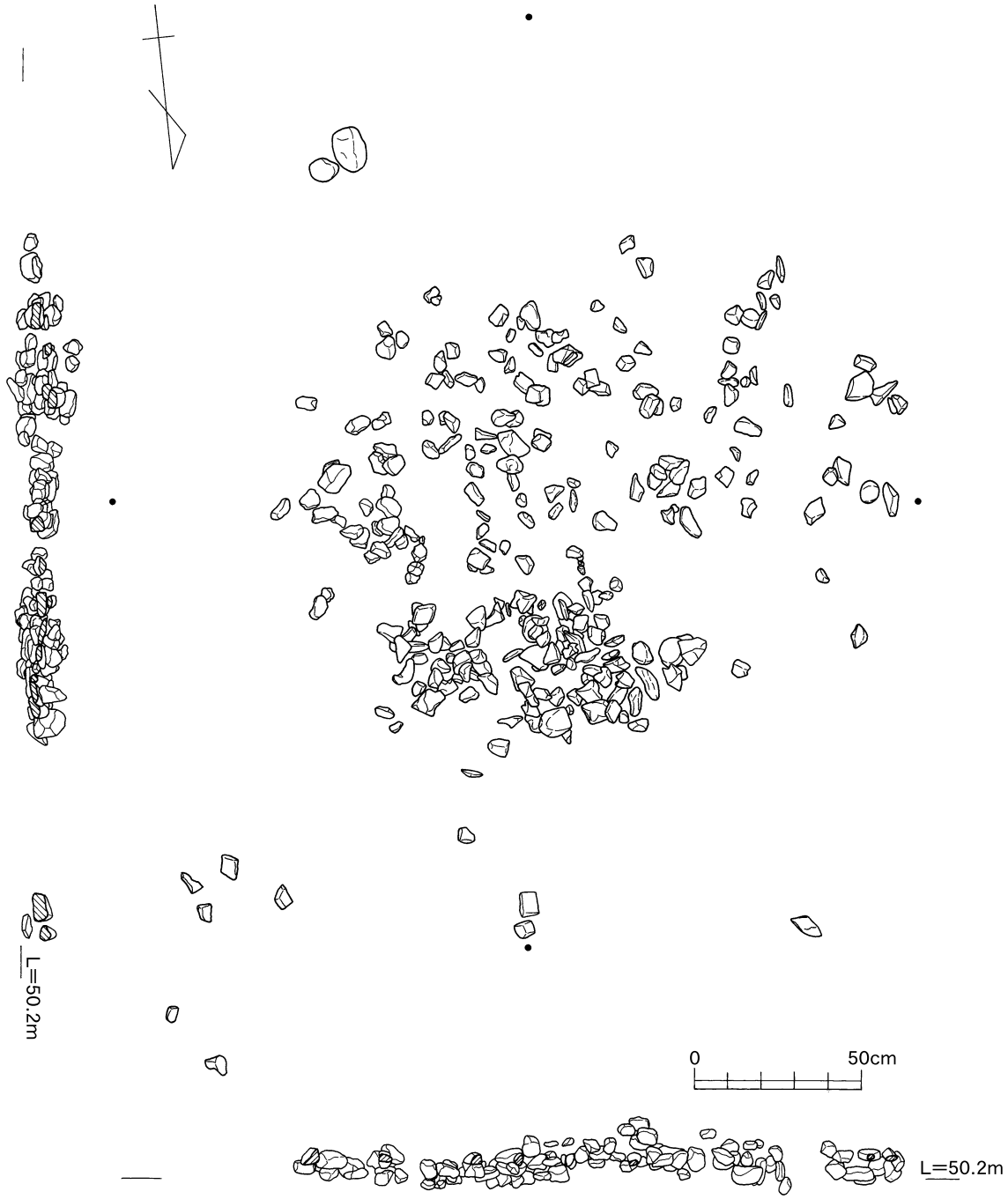
２）集積遺構２号（第17図～第19図，４，Ｓ７～Ｓ13）

53Ｌ区で発見された集積遺構で，1.4m×2.4mの範囲に石核・剥片が22点集中している。ほぼ平坦な面に置かれており，特に中央では10点の剥片が集中している。

Ｓ７・Ｓ９は石皿である。Ｓ７は底辺25㎝，高さ36.5㎝の略五角形をしており，厚さは７㎝ほどある。砂岩製で片面を使用しており，ほぼ平坦であるが，よく使っている。Ｓ９は長さ22㎝，幅23



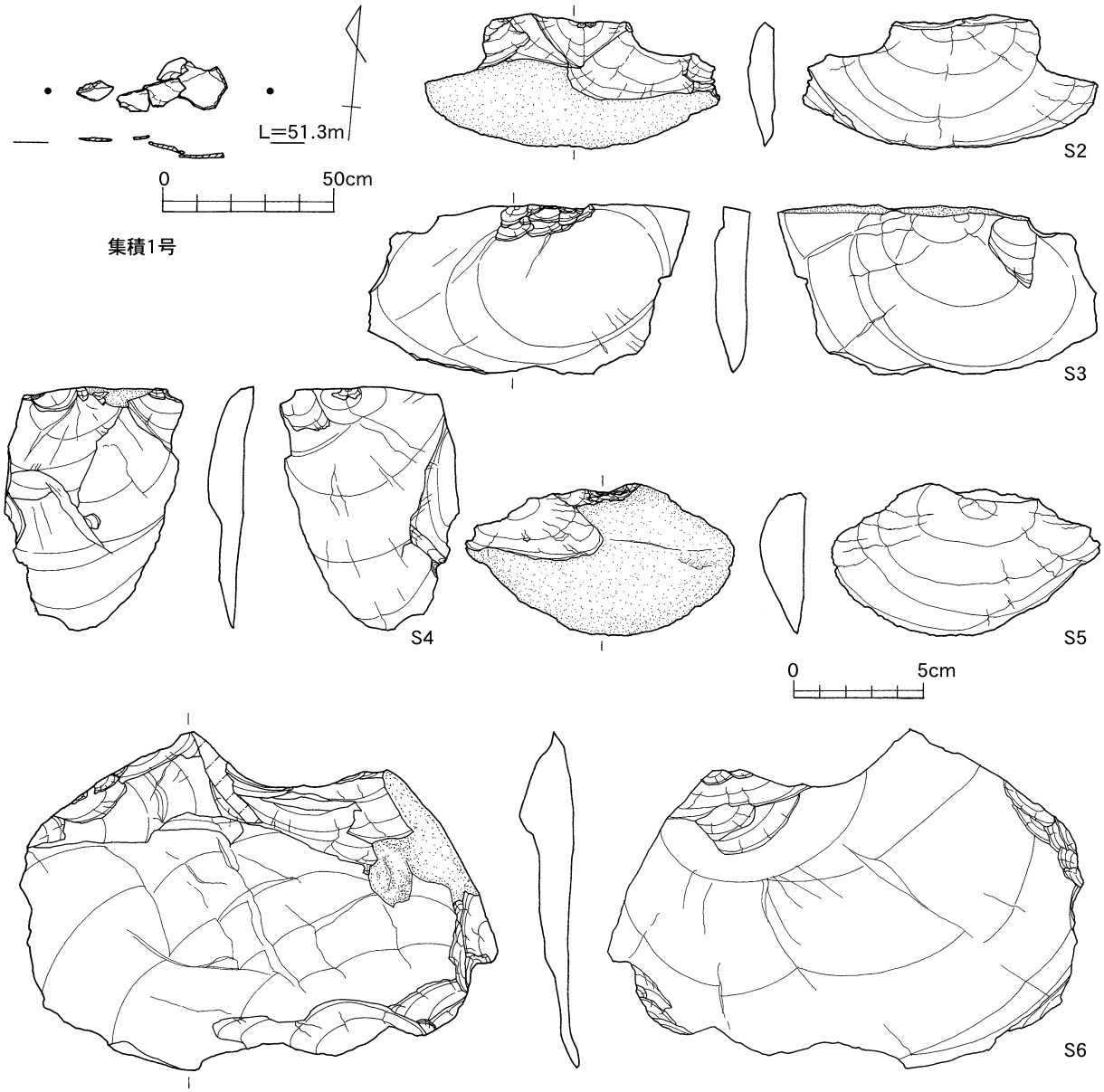
第14図　集石遺構10号・11号



第15図　集石遺構12号

㎝の略六角形で，厚さは4.5㎝の扁平なものである。花崗岩製で片面を使用し，ほぼ平坦である。

Ｓ８・Ｓ10は接合する粘板岩の石核・剥片である。Ｓ８は長さ17㎝，幅5.7㎝，厚さ３㎝の扁平な直方体をしており，４破片に分かれている。上と下が石核状となり，その間が剥片になっている。長側辺の一辺を両側から打ち欠いて，頭部と下端部も打痕跡がみられる。元の形の時に礫器状に加工し，それを両面から叩いて４つに分けたものである。Ｓ10も長さ16㎝，幅７㎝，厚さ４㎝の扁平な直方体をし，４破片に分かれているが，一部欠損している。一部に自然面を残しているが，両側から細かく打ち欠いて打製石斧形に整えており，そのあと両側から叩いて４つに分けたものである。



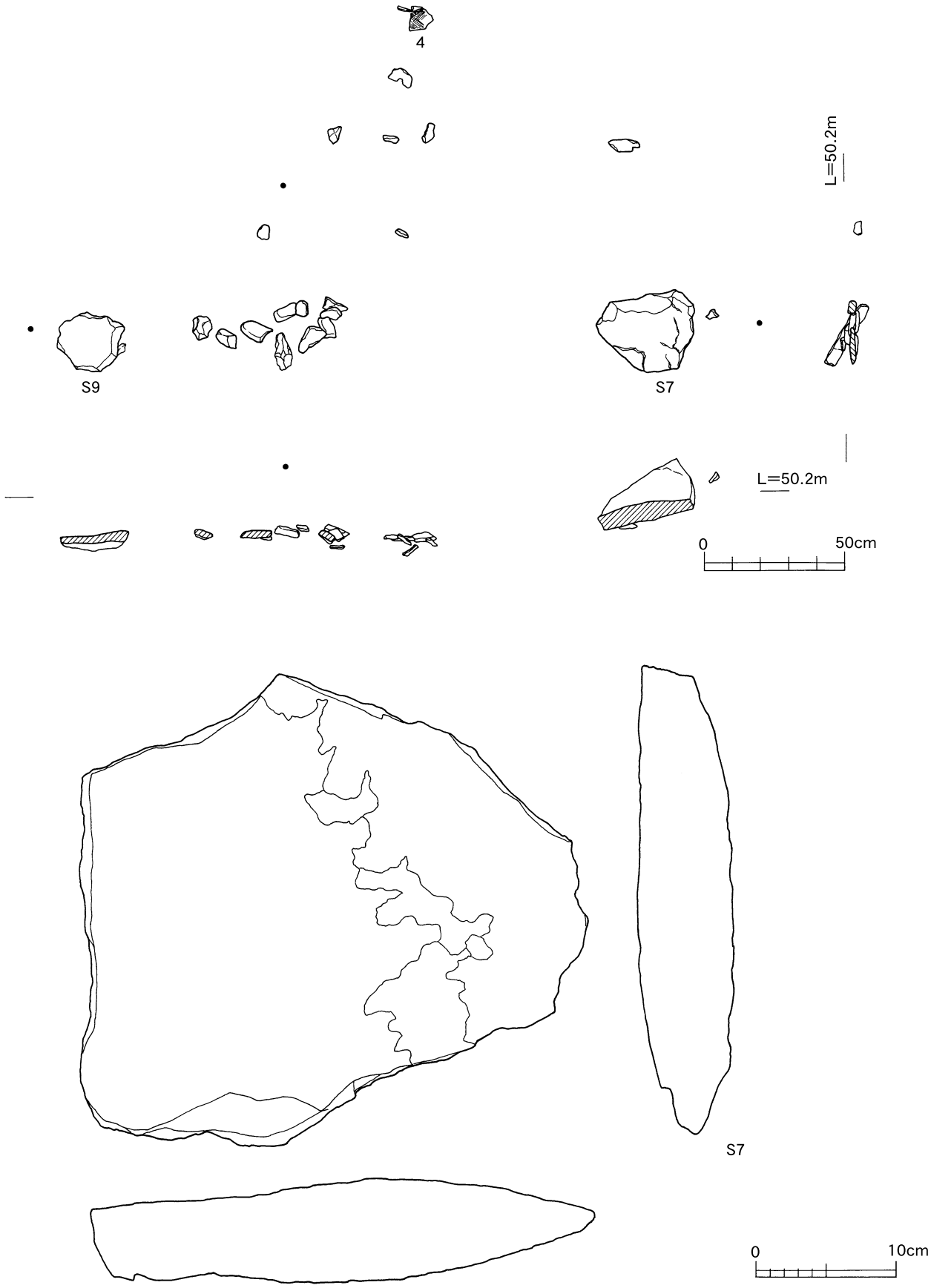
第16図　集積遺構１号と出土石器

Ｓ11・Ｓ12も粘板岩の加工痕ある自然礫である。Ｓ11は長さ20.5㎝，幅6.5㎝，厚さ1.5㎝ほどの扁平な礫で，両面とも自然であるが，一方は剥片状となっている。短側辺の片側は丸みをもち，裏側に４か所の打撃痕があることから刃部形成の意図が伺えるが，完全ではない。Ｓ12は長さ13.2㎝，幅5.3㎝，厚さ３㎝の直方体をした形をし，打撃痕が多くみられるが，石器として完成していない。

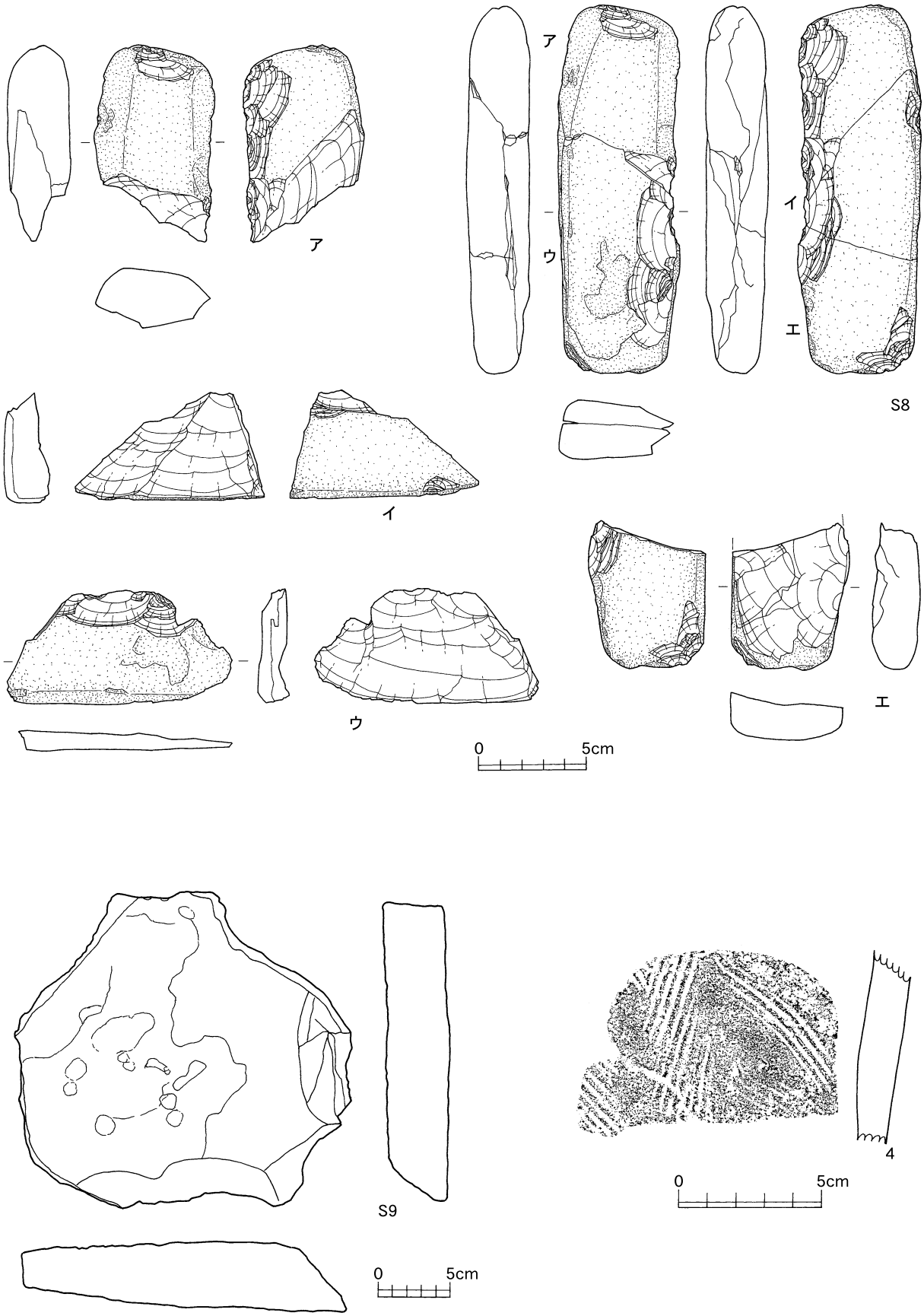
Ｓ13は粘板岩製の小型磨製石斧である。長さ4.8㎝，幅３㎝，厚さ0.8㎝で，折れているようにもみえるが，摩耗していることから完形品のようにもみえる。両刃で刃部に刃こぼれはない。

４は外面をヘラナデのあと４条ほどの斜方向貝殻条痕が短絡線として施される茶褐色を呈する厚めの土器片で，内面はヘラナデで仕上げる。金雲母・白色石・黄白色石などの細石の多い粗い土を用い，３㎜大のものもある。焼成度は普通だが，外はやや摩滅している。

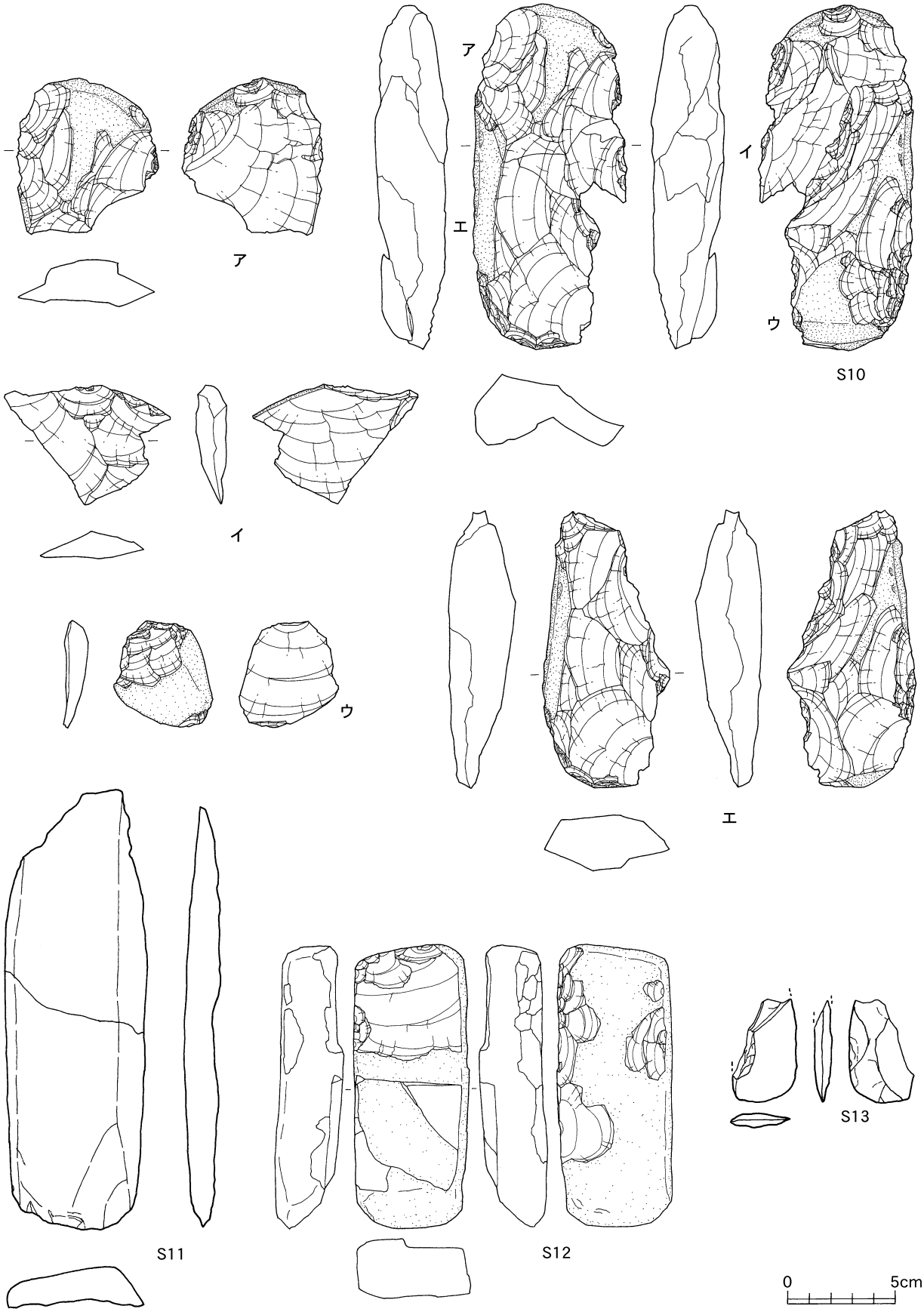
この遺構は石皿を両方に置き，未製品の礫４点と未製品らしき石斧から成ることから加工場のようにもみえ，時期は桑ノ丸式土器に伴う早期中頃と思われる。



第17図　集積遺構２号と出土石器



第18図　集積遺構２号出土遺物



第19図　集積遺構２号出土石器

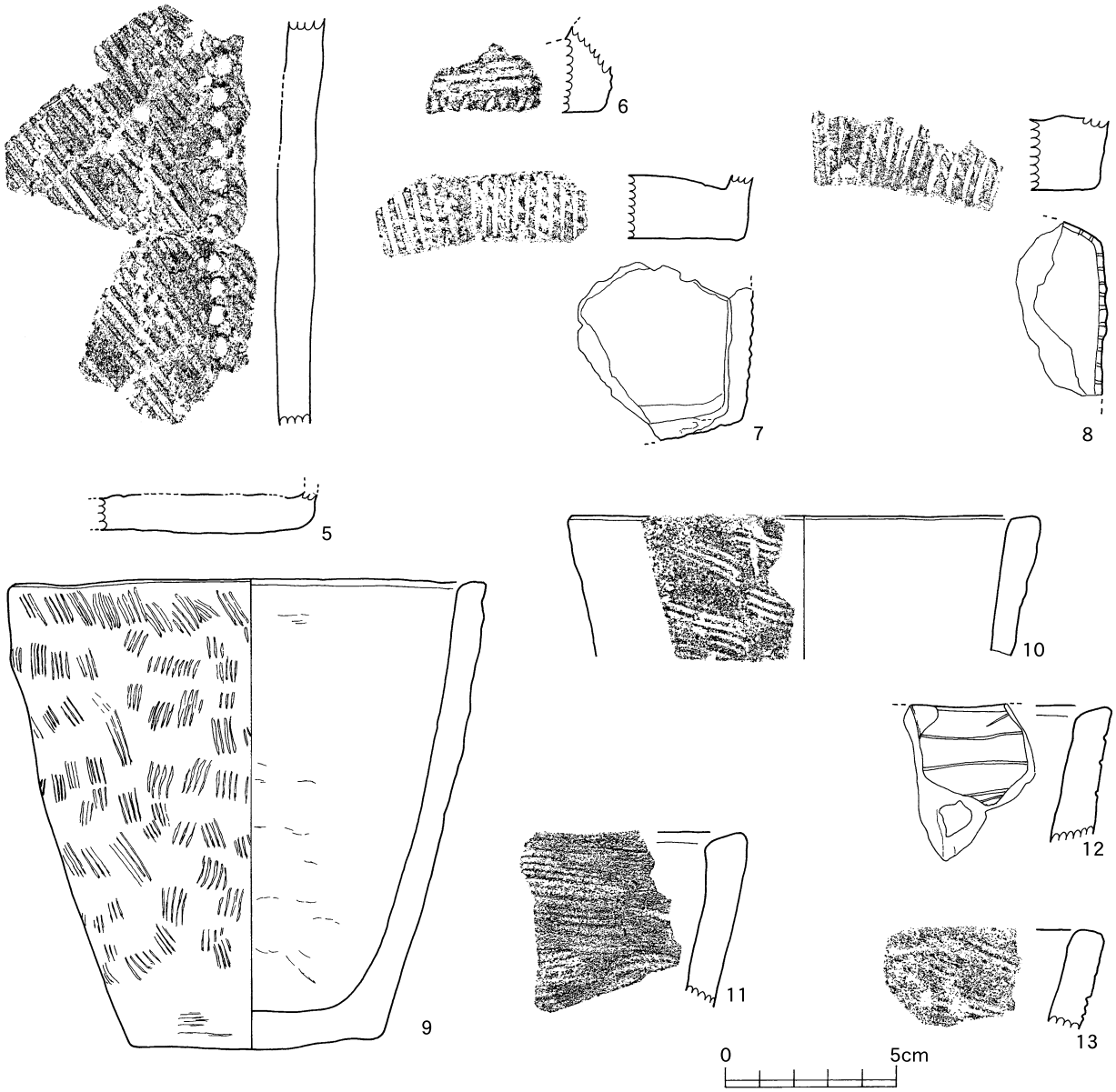
３　土器

早期の土器は大きく６種類に分けることができる。型式名でいえば前平式土器・桑ノ丸式土器・下剥峯式土器・押型文土器・平栫式土器・塞ノ神式土器となるが，その中間形態のものもある。

１）１類（前平式土器：第20図５～８）

外面に貝殻条痕文がある土器で，円筒形のものと，角筒形のものとがある。６は円筒形のものである。底近くまで横方向の貝殻条痕文があり，底との境には縦長のヘラ刺突文がみられる。底はていねいなヘラナデで仕上げている。

５・７・８は角筒形である。５は胴部で，斜方向の貝殻条痕文がみられ，その上に縦方向の二枚貝の腹縁押圧文が施される。角には巻貝殻頂の刺突文がみられる。内面はヘラナデであるが，剥脱が目立つ。７・８は底部で，厚さ２㎝ほどの分厚い底の作りで，ややへこんで直に近く薄い胴部へ



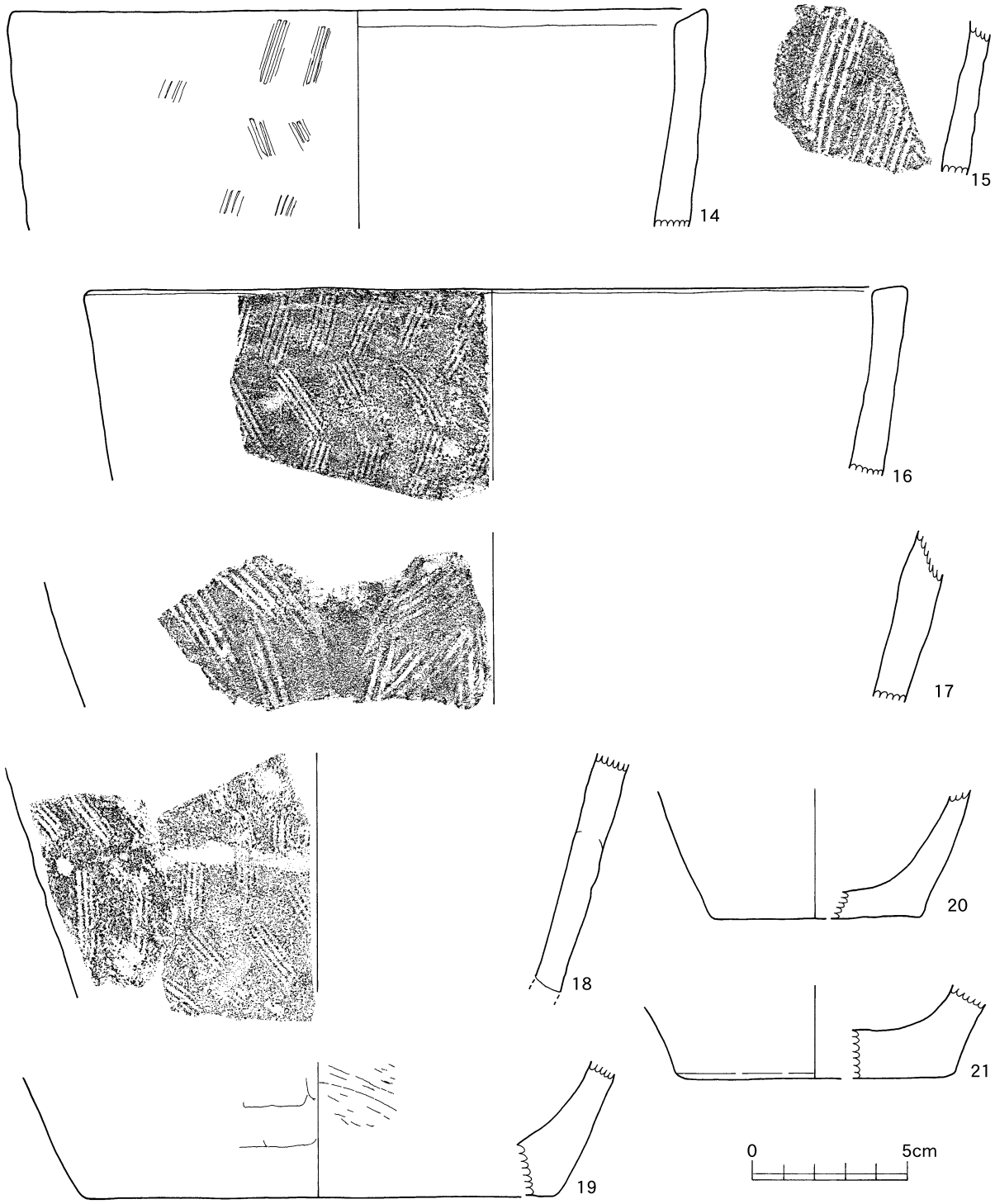
第20図　縄文土器(1)　前平式・桑ノ丸式土器

立ち上がる。斜方向のあと縦方向の沈線がみられる。底はていねいにヘラナデで仕上げている。この３点は58Ｌ区でまとまって出土しており，石英・金雲母・白色石・黄白色石などの細かい石を含む胎土，茶褐色の色調，焼成度などが一致することから同一個体の可能性が強い。

２）２類（桑ノ丸式土器：第20図・第21図９～21）

外面に短かく貝殻条痕文のある円筒形の土器で，口縁端が分厚い作りとなる。

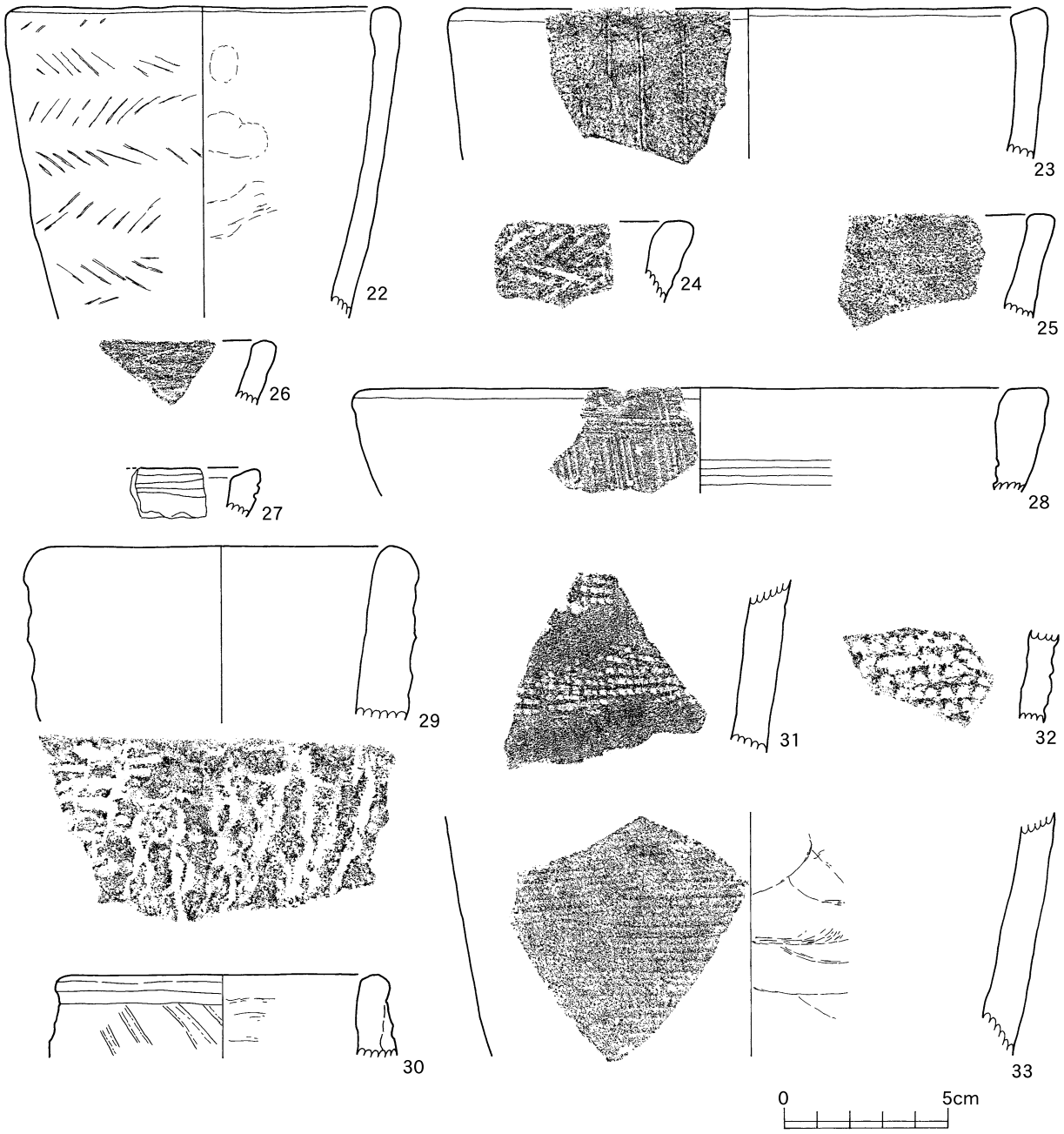
９・10は小型のものである。９は完形品で口縁直径が14㎝，高さが13.7㎝，底の直径が7.3㎝あ



第21図　縄文土器(2)　桑ノ丸式土器

る。平底で，口縁へ向かって開きながらまっすぐ伸びている。外面はナデ整形のあと，４条単位ほどの二枚貝腹縁条痕が施され，内面はヘラナデで仕上げている。口縁部はていねいにナデている。10は口縁直径14㎝で，口縁下４㎝ほどの所に積上げ痕がみられる。外面はやや右下がりとなる斜方向の短絡線貝殻条痕文がみられる。内面はていねいなナデである。

11～18が普通の大きさで，口縁部直径は14が22.5㎝，16が26.5㎝ある。口縁端は内傾するもの，直に近くなるもの，丸く収まるものとがある。11の外面は横方向の貝殻条痕であるが，割合に密で，長い。12の外面は剥脱が目立つ土器であるが，外面には横方向の細い沈線がみられる。胎土に金雲母が多く含まれている。14・16の外面は４条ほどの短絡貝殻条痕で綾杉状に施す。17の外面は貝殻条痕のあと部分的にていねいなヘラナデがみられる。内面はミガキに近いていねいな横方向のヘラ



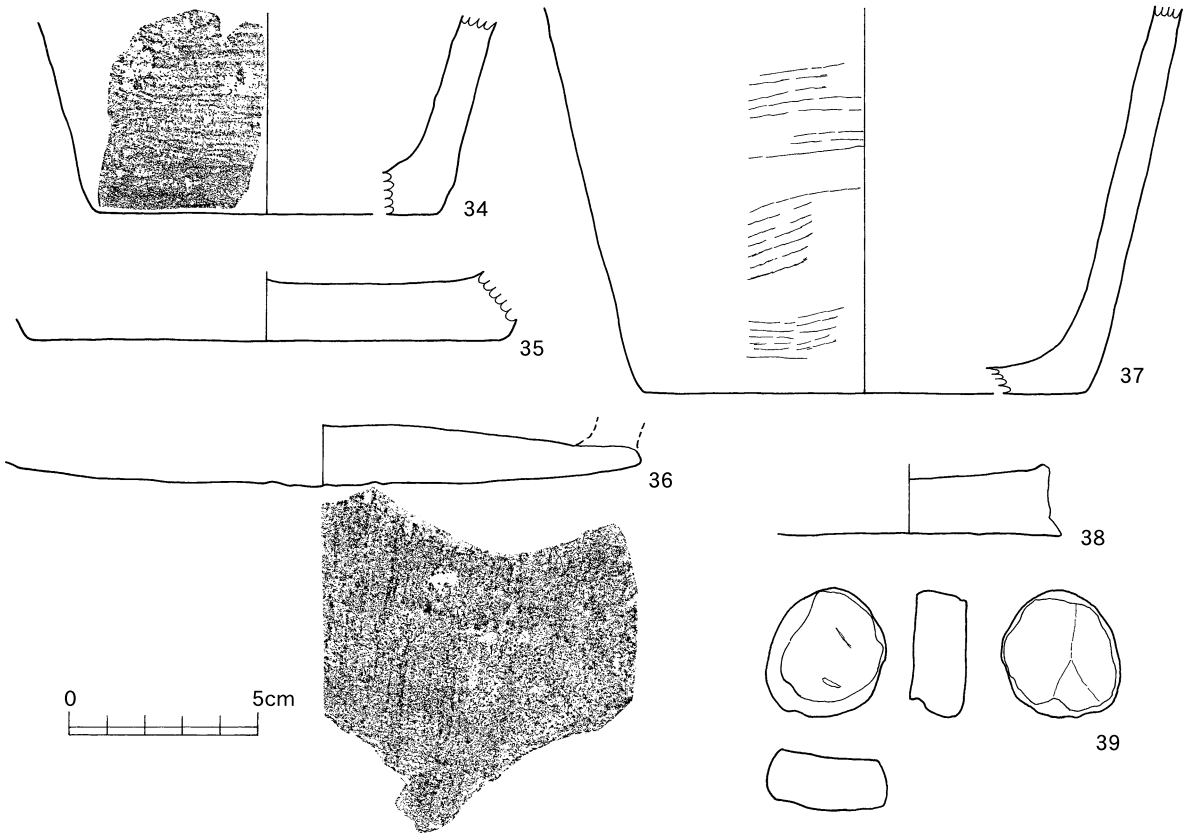
第22図　縄文土器(3)　下剥峯式土器

ナデで仕上げている。18の外面も４条の貝殻条痕で綾杉状に仕上げている。底に近い部分と思われる。

19～21は貝殻条痕がないため桑ノ丸式土器と判定できないが，胎土等からこの類に置いた。底部直径は19が15㎝，20が７㎝，21が９㎝で，安定した平底をしている。角はやや丸みをおびて立ち上がっているが，やや丸みをもって立ち上がるもの，まっすぐ伸びるもの，やや外へ反るものとがある。外面は19・21がていねいなヘラナデで，20も縦方向ヘラナデである。内面・底面もヘラナデで，底面はていねいにナデている。

３）３類（下剥峯式土器：第22図・第23図22～38）

口縁端が肥厚し，貝殻文やヘラ沈線文のみられる円筒形の土器である。22は口縁直径が12㎝の小型土器である。外面はヘラナデのあと横方向にハの字様のヘラによる細い短沈線が施される。口縁端部が玉縁状にふくらんでいる。51M区に集中していたが，52M区，52N区でもみられた。23は口縁直径が18㎝ありやや狭くなっているがほぼまっすぐ底へ伸びており，口縁端は内へふくらんでいる。外面はていねいなヘラナデのあと縦方向の平行な細い沈線がみられる。24の外面は細い鋸歯状のヘラ沈線がみられる。25は表面が摩耗しているためはっきりしないが浅いヘラ沈線様のものがみられる。26は無文，27はていねいなヘラナデのあと２条のヘラ沈線がみられるが，その下に刺突文らしきものもある。28は口縁直径が21㎝あり，口縁端部の厚さは1.5㎝と分厚い。外面は横方向のヘラナデのあと縦方向の細いヘラ沈線が施される。口唇部や内面は，ていねいなヘラナデだが，胴部近くには深い沈線風のものがみられる。火山ガラス・白色石などの細かい石を含んでいるが９㎜大ほどの茶色石もある。29・30も分厚い器壁の円筒形土器である。29は口縁直径が12㎝と小型であ



第23図　縄文土器(4)　下剥峯式土器

るが，分厚く，外面は二枚貝押圧あるいはヘラ沈線のようにみえるが，粗い撚糸文のようにもみえる。30は貼付けによって分厚く作っており，外面は上部に横方向の凹線があり，その下はヘラによる斜方向のひっかき凹線がある。金雲母が多く含まれている。31・32はていねいなヘラナデのあと，横方向に飛び飛び二枚貝の押圧文が施されている。33は外面に横方向の浅い貝殻条痕がみられる。34～38は底部である。34は直径が９㎝で，外面に浅い貝殻条痕がみられる。底近くはていねいなヘラナデで仕上げている。35は直径12.5㎝あり，厚さ1.5㎝と分厚い。内外ともていねいなヘラナデである。36は円盤状の底で，直径が17㎝と大きい。底の厚さは中央が1.6㎝あるが，周辺へ向かうと薄くなり0.5㎝しかない。底がやや丸みをおびている。底と胴部は貼付けによって積上げている。底は平行状のヘラナデで仕上げている。37は直径が12㎝足らずで，外へ広がってまっすぐ伸びている。外面はヘラナデのあと斜方向の浅い貝殻条痕を施している。底近くはヘラナデで条痕を消している。内面や底はていねいなヘラナデで仕上げている。38は厚さ1.5㎝～２㎝の分厚い底で，直径８㎝ほどの円盤状を呈し，胴部はそれを巻くようにして積上げている。金雲母を多く含んでいる。

４）４類（押型文土器：第24図40～47）

押型文のある土器で，口縁部は外反している。山形のものと，楕円形のものとがあり，内面はナデ整形である。

40～46は山形，47は楕円形のものである。40は口縁直径が30㎝ある外反する口縁部である。器壁厚が1.5㎝近くある厚いもので，外面は斜方向の山形押型文を施す。内面は横方向のヘラナデである。41も40と同じような形態，文様をしているが，剥脱が目立つ破片である。口縁近くに補修孔が穿たれているが，穿孔は主として外から穿ち，一部は内からも穿っている。42も剥脱が目立ち，押型文は浅い。内面はていねいなヘラナデである。43は摩耗が多く，外面文様がはっきりしないが，口縁の傾きからこの類に入れた。一条の横方向凹線がみられ，これは二枚貝押圧のようにもみえる。45は分厚い作りで，外は剥脱が目立つため途切れ途切れに山形文がみられる。46は直径10㎝ほどの平底で，丸みをもって立ち上がる。外面は底まで押型文が施されている。底・内面ともヘラナデで仕上げている。47は楕円押型文で，内面は剥脱が目立つが，ヘラナデである。

５）５類（平栫式土器：第25図・第26図48～58）

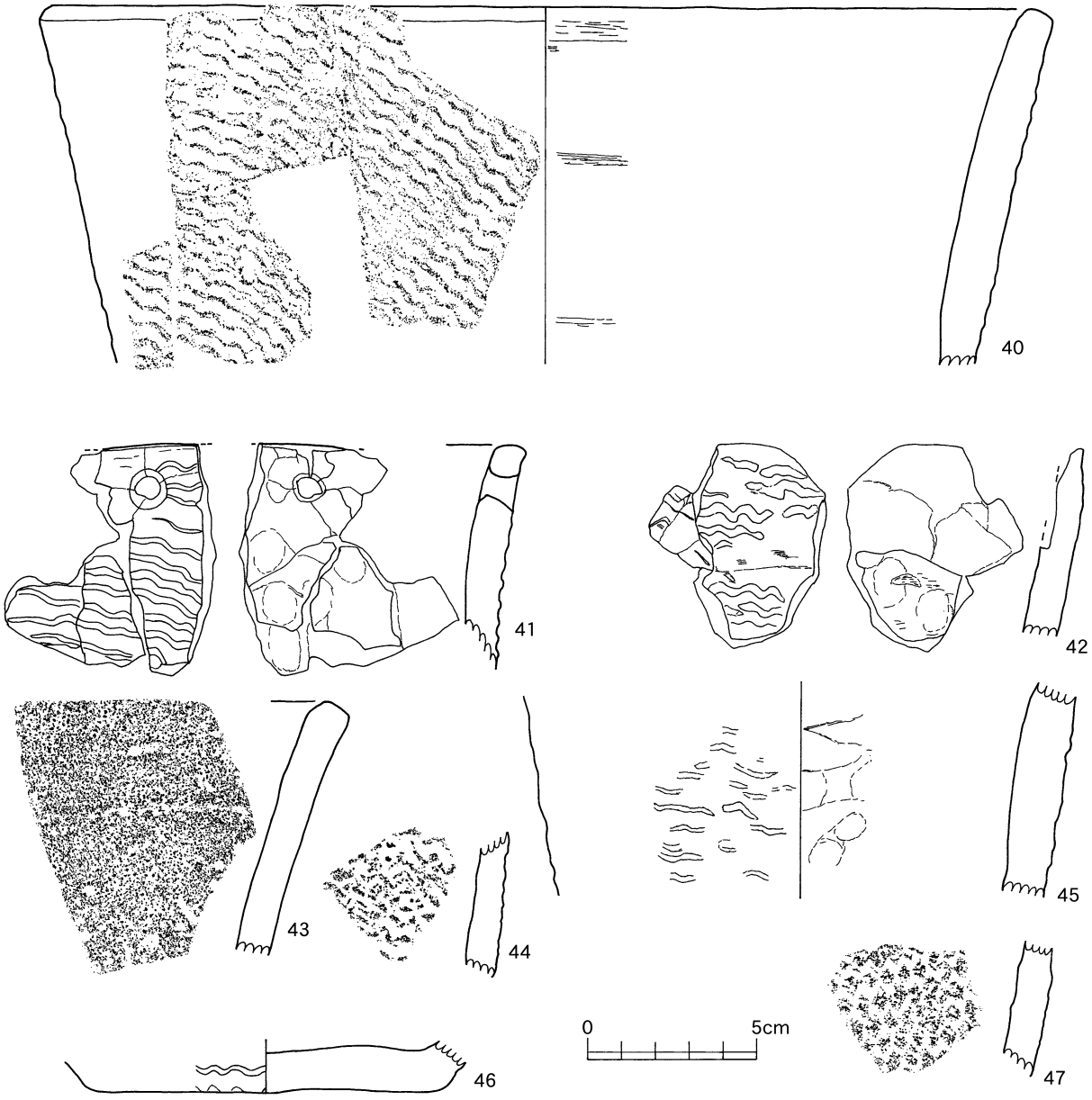
口縁部がやや肥厚し，内反ぎみに立ち上がるものである。48は口縁直径23.5㎝で，口唇外面にヘラ刻みが施される。口縁部には上から横方向ヘラ沈線，ヘラ刺突文，３条の波状沈線，刺突文，ヘラ沈線，ヘラ押圧文，横方向ヘラ沈線，４条の三角形ヘラ沈線＋２条横方向ヘラ沈線，ヘラ刺突文と続く。内面は横方向のヘラナデで丸く仕上げ，そこで屈曲している。49も48と同じであるが，三角沈線でなく下が２条の波状沈線となる。50は口縁直径が31.3㎝と大型で，口唇外面にヘラ刻みが施される。口縁部には上からヘラ刺突文に挟まれた２条～３条の波状となるヘラ沈線，ヘラ押圧文，２条の波状となるヘラ沈線と続く。51～55も同じような文様だが，短いものもある。54は口唇部に浅いヘラ刻みがあり，その下にヘラ刺突文に挟まれた４条の斜方向ヘラ沈線がある。いずれも細かい。これらは淡茶褐色・茶褐色などをしており，焼成度はあまり良くなく表面が摩耗したものが多い。胎土は石英・白色石・火山ガラスなどの細礫を含む砂質土を用いている。

56は口縁直径が24.5㎝で，口唇部は平坦であるが，ややへこんでいる。外の端部に浅いヘラ刻みがある。口縁部にはヘラによる鋸歯状沈線，ヘラ刺突文，３条の横方向沈線があり，ここで屈曲し，

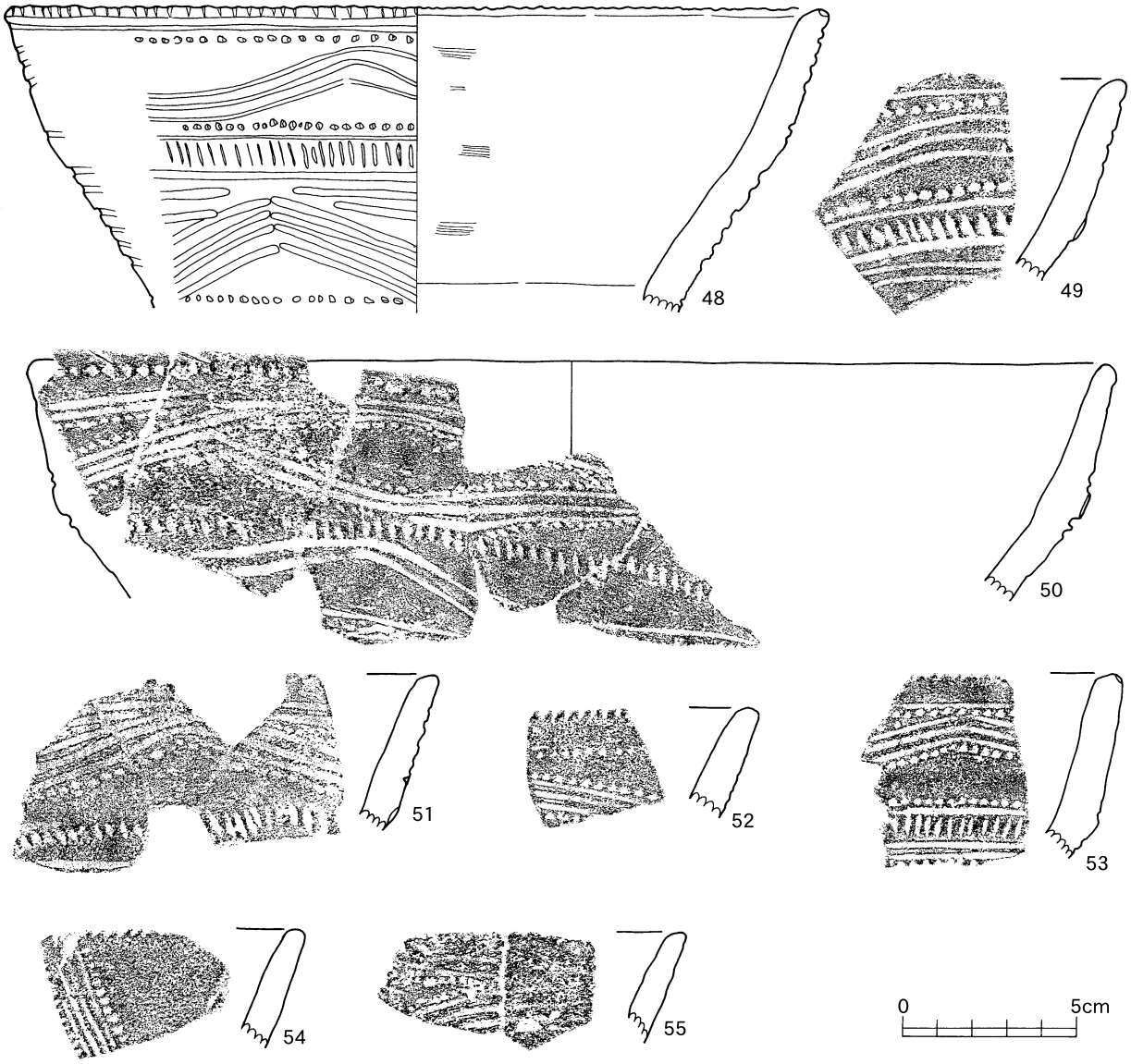
頸部下面に３条の沈線があり，間があって１条の沈線がある。内面はていねいなヘラによる横ナデで仕上げている。57は胴部であるが，２条以上のヘラ沈線の下にヘラ刺突文があり，その下にヘラ刺突文に囲まれた縦方向に長い同心楕円文，外向きくの字状文と縦方向一条鋸歯文がある。内面はヘラによる横ナデで，外面も素地はていねいなナデである。58は弧状となる沈線の間に撚糸文がある。内面は横方向のヘラナデである。これらは明茶褐色，赤みがかった淡茶褐色を呈し，焼成度は割と良い。白色石・石英・茶色石などの細かい石を含んだ土を用いているが，５㎜大の石のあるものもあり，56は金雲母が多い。

６）６類（塞ノ神Ａ式土器：第27図59～64）

59は口縁部が肥大するもので，頸部から強く外反して端部にいく。口縁直径は25㎝あり，口唇外面に浅いヘラ刻みがみられる。口縁部には１条の沈線と波状沈線に挟まれた撚糸文があり，頸部か



第24図　縄文土器(5)　押型文土器

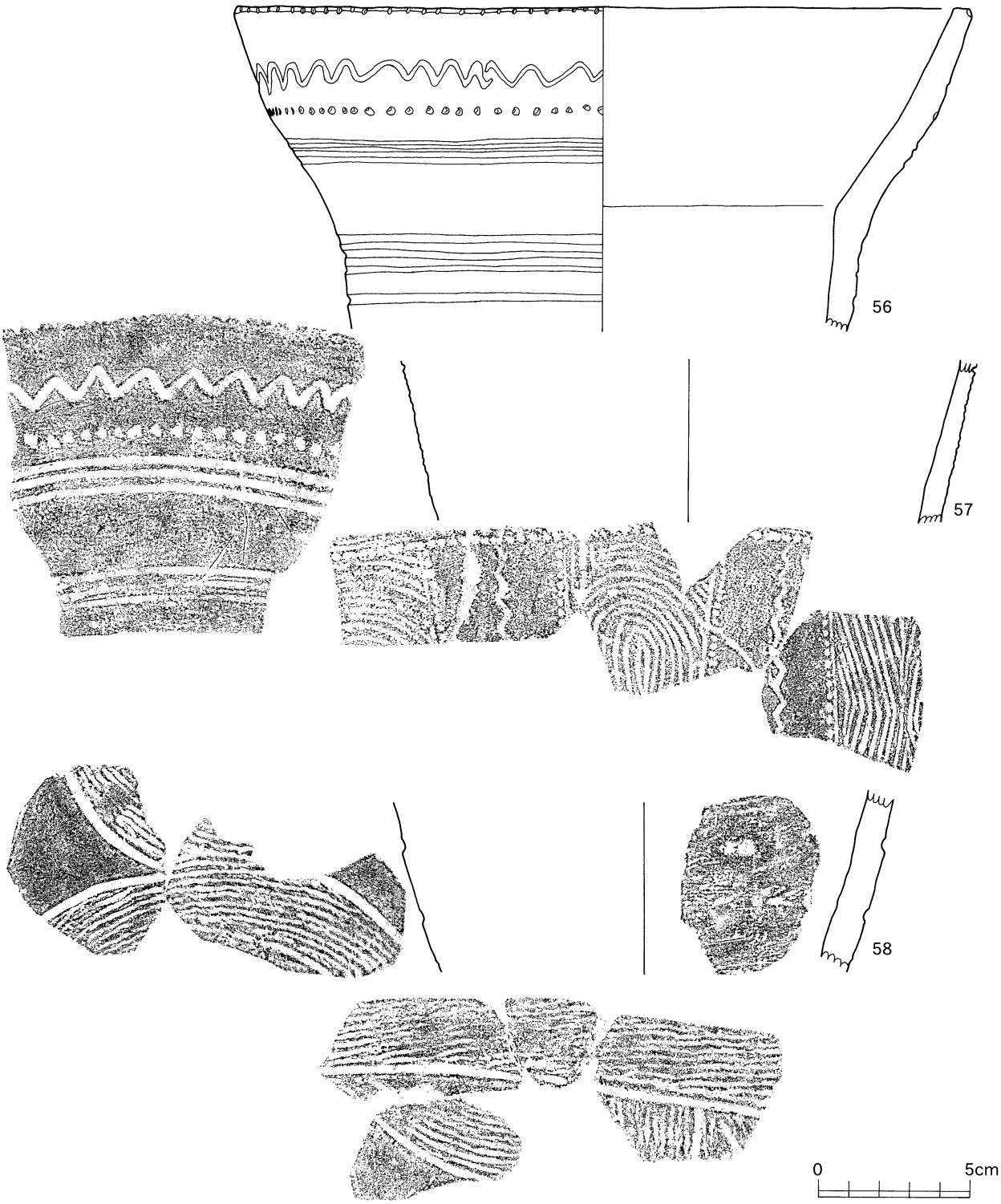


第25図　縄文土器(6)　平栫式土器

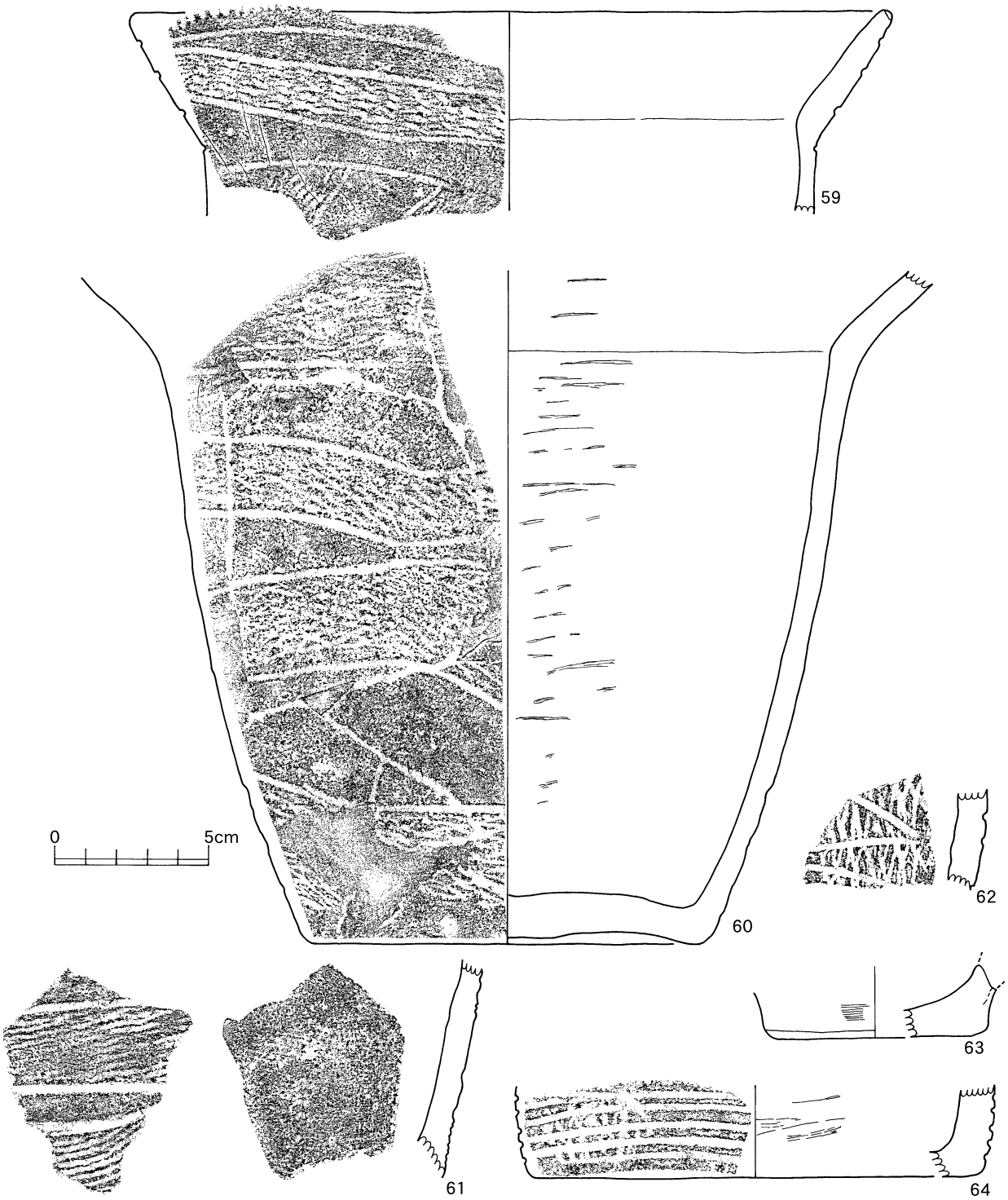
らまっすぐ伸びる胴部へ移り，そこに横方向の沈線とそれと直交する縦方向沈線に挟まれた撚糸文がある。内面はヘラナデだが，胴部内面は粗い横ナデである。

60は口縁部が欠けているが，下はほぼ完形である。残存高は22㎝，底部径13㎝，頸部径23㎝である。胴部はややふくらみながら底へ至る。頸部の上から底部までていねいな横方向のヘラナデのあと横方向の直線ヘラ沈線に挟まれた撚糸文がある。内面は横方向のヘラナデであるが，口縁部は特にていねいである。底はていねいなヘラナデを施しているが，立ち上がり部分が丸みをおびて，あげ底になっている。61も同じような文様である。62は縦方向の撚糸文のあと横方向の鋸歯状沈線が施されている。64は直径14.5㎝の底部で，ヘラナデのあと縦方向の撚糸文が施され，そのあと横方向のヘラ沈線が施される。

茶褐色を主とした色調をしており，焼成度は普通のものと良好なものとがある。白色石・火山ガラス・石英・黄白色石・長石などの細かい石を含んだ土を用いている。



第26図　縄文土器(7)　平栫式土器



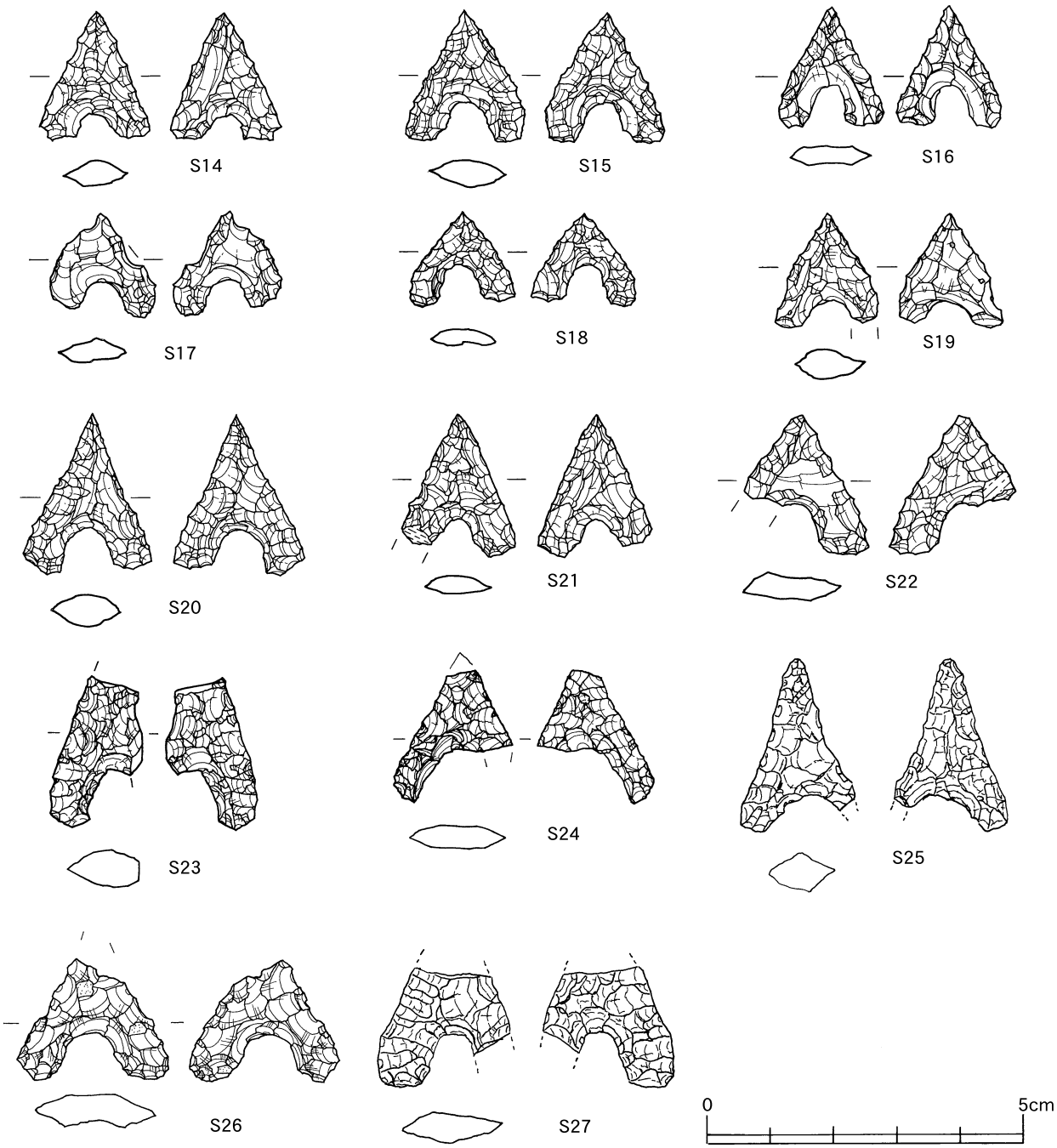
第27図　縄文土器(8)　塞ノ神式土器

4　土製品（第23図39）

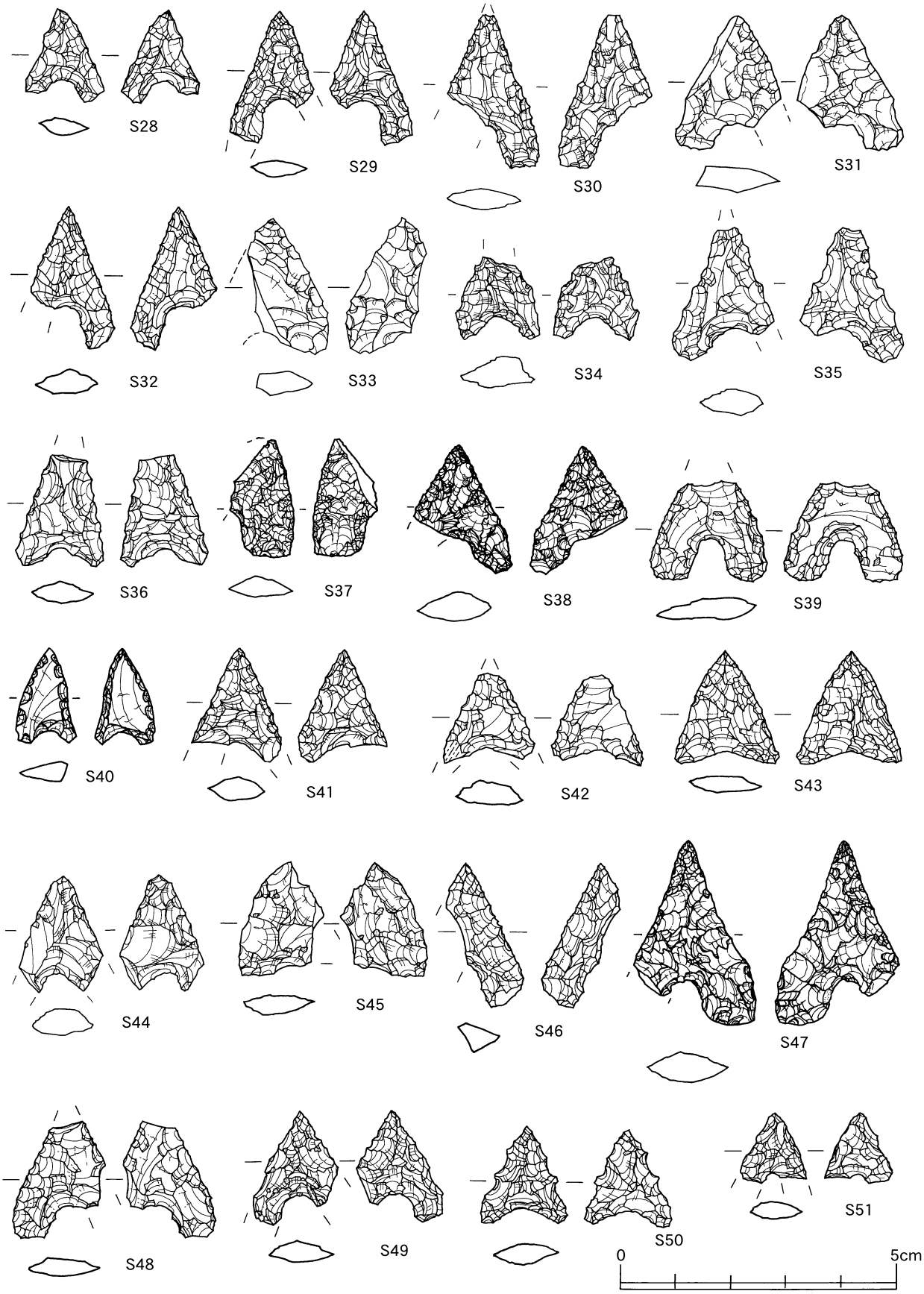
Ⅱａ層で出土しているが，厚さ1.5㎝と厚いことから早期の桑ノ丸式土器あるいは下剥峯式土器の破片を加工したものと思われる。平面形は3.4㎝×3.2㎝の略円形を呈しており，側面をていねいにみがいていることからメンコと思われる。内外ともていねいなヘラナデで仕上げた破片である。淡茶褐色を呈し，焼成度は良好である。白色石・石英などの細かい石を含んでいる。

5　石器

石器には石鏃・スクレイパー・つまみ形石器・トロトロ石器・局部磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・凹石があるが，石鏃が圧倒的に多い。黒曜石を用いたものも多いが，剥片を含めて質の悪いものが多く，近い産地のものを用いており，西北九州産のものはない。



第28図　石器(1)　石鏃


S28
S29
S30
S31
S32
S33
S34
S35
S36
S37
S38
S39
S40
S41
S42
S43
S44
S45
S46
S47
S48
S49
S50
S51
0
5cm

第29図　石器(2)　石鏃

１）石鏃（第28図・第29図Ｓ14～Ｓ51）

38点出土しているが，いずれもえぐりのあるものである。正三角形を呈し浅いえぐりのもの，正三角形を呈し深いえぐりのもの，二等辺三角形を呈し浅いえぐりのもの，二等辺三角形を呈し深いえぐりのもの，基部近くで鈍角に曲がり五角形状を呈するものなど，さまざまな形態がある。ていねいな調整をするものが多いが，周辺のみを加工し，大剥離面を残しているものもある。周辺からの剥離が深くサメ歯状を呈するものもみられる。完形品も多いが，頭部や脚部の折れたものも目立つ。石材には黒曜石・チャート・安山岩などがある。

２）スクレイパー（第30図Ｓ52・Ｓ53）

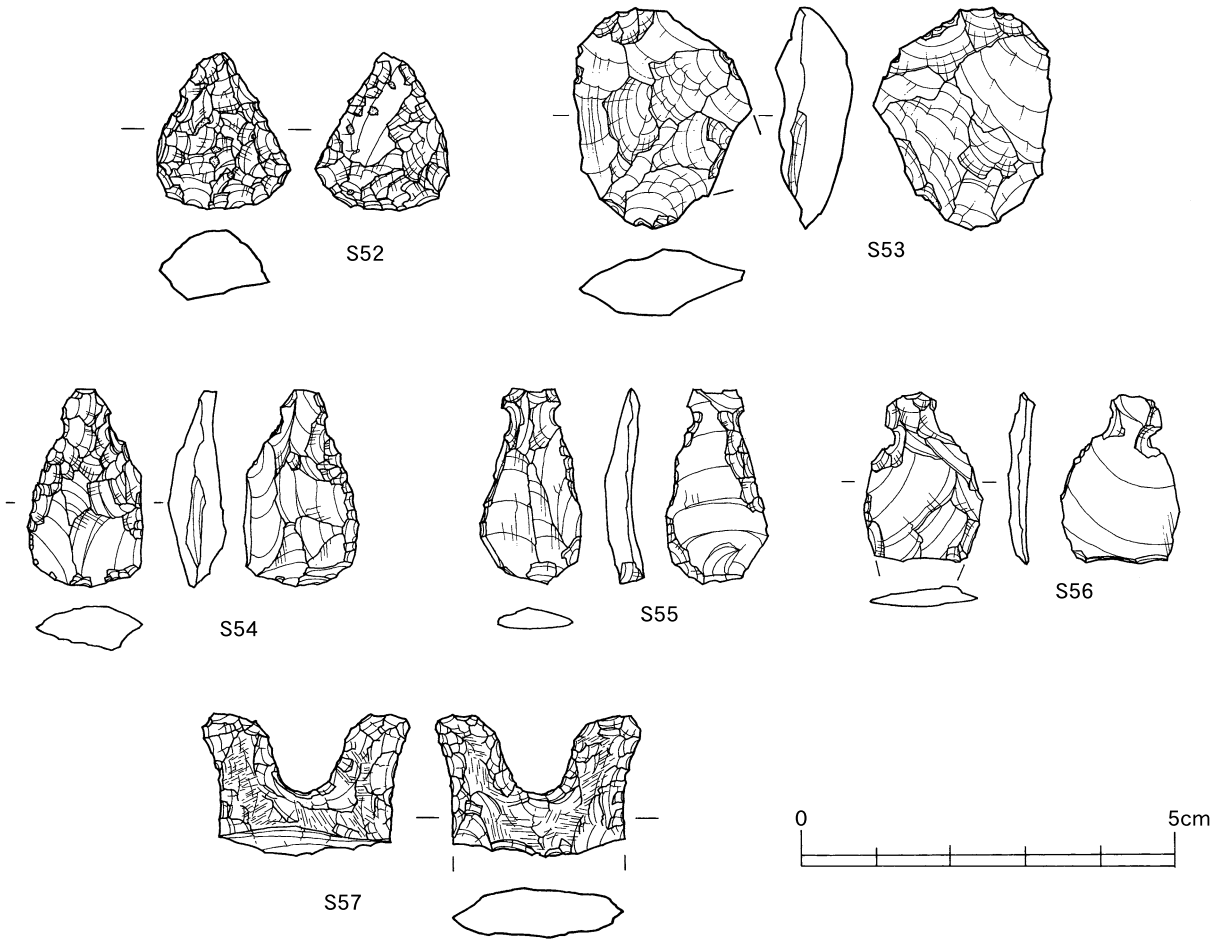
小型のものが２点出土しており，三角形状を呈したサムエンドスクレイパー様のものと，楕円形を呈したものがある。ともに分厚い作りで，周辺をていねいに調整している。

３）つまみ形石器（第30図Ｓ54～Ｓ56）

上部につまみを有する石器で３点出土している。Ｓ54は分厚い作りで，えぐり部分の一方は両面からていねいに打ち欠き，先端に一部使用痕がみられる。Ｓ55とＳ56は薄い縦長剥片を用いており，えぐり部分は両面から細かく打ち欠いている。長側辺にも周辺のみ一部打ち欠きがみられる。

４）トロトロ石器（第30図Ｓ57）

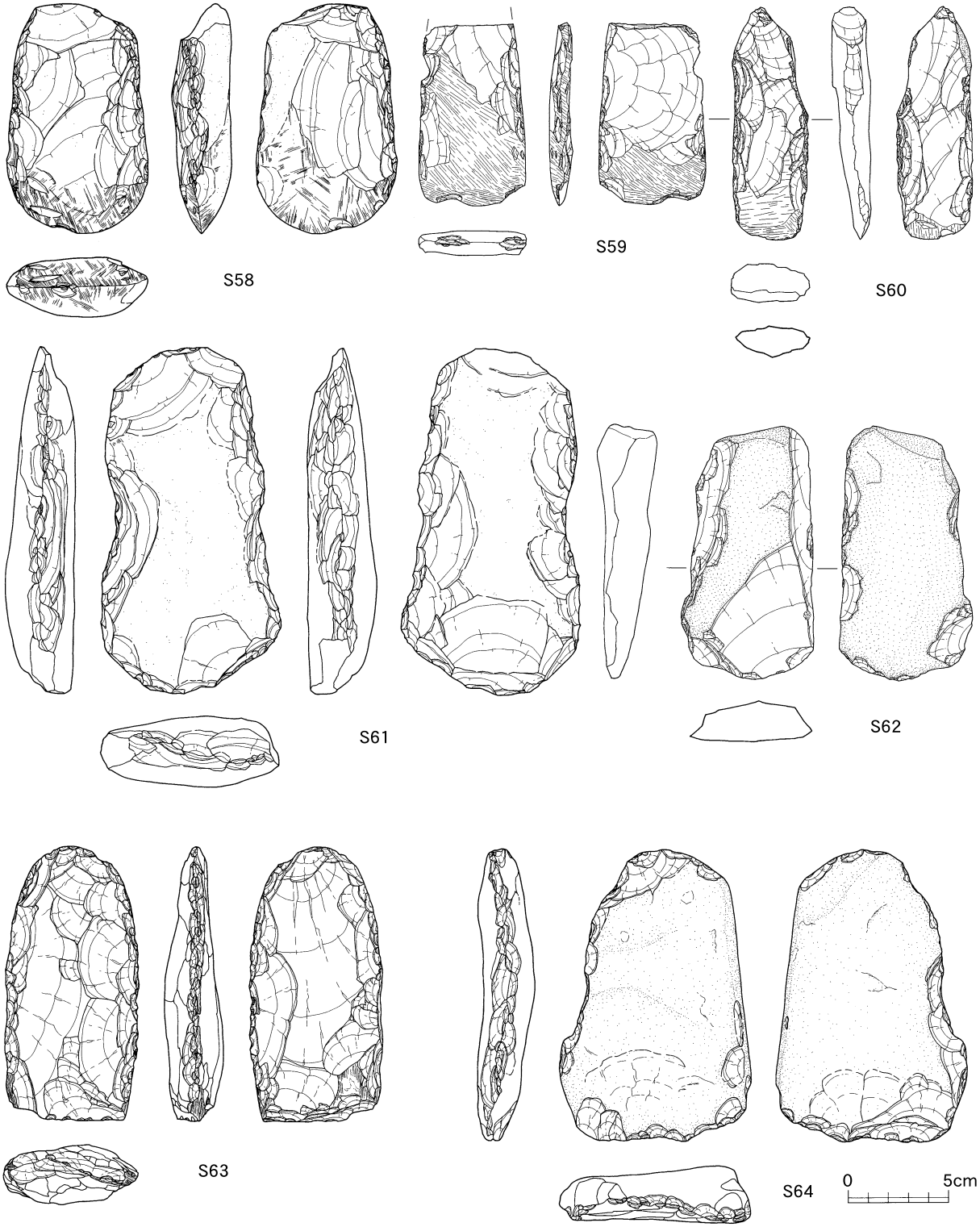
チャート製のもので表面をツルツルに磨いている。先端部が丸みをおびた雁股状を呈し，基部は欠けている。ていねいな調整をしている。



第30図　石器(3)　スクレイパー・つまみ形石器・トロトロ石器

５）局部磨製石斧（第31図Ｓ58～Ｓ60）

３点出土している。蛤刃状のもの，長方形状のものとがある。Ｓ58は側縁部を加工して形を整えているが，片面は自然面も広く残している。刃部を両方からていねいにみがいて蛤刃状に仕上げている。Ｓ59は両面・縁部を打ち欠いて，方形に作ったあと，下部の方のみを研磨し，両刃に作りあ



第31図　石器(4)　磨製石斧・打製石斧

げている。S60は両面・側縁ともていねいに打ち欠いて幅の狭い方形にこしらえ，刃部のみをていねいにみがいている。片面が幅広くのみ状を呈す。頭部は両側から打ち欠いて三角形状になっている。

６）打製石斧（第31図S61～S64）

４点出土している。S61は中央部がややくびれた形をしている。分厚い礫を用いて周縁を打ち欠き形を整えている。刃部はにぶい。S62は自然面を広く残しており，特に片面は局部的に周縁を打ち欠いただけで，刃部もにぶい。S63は局部磨製石斧を再加工したもので，頭部は丸みをおびて，周辺を細かく調整している。刃部付近が折れたためここを再調整しているが，刃部はにぶく半加工品の可能性もある。S64も礫の片長側辺部と刃部のみを打ち欠いて形を整えたもので，刃部はにぶく，分厚い作りである。

７）礫器（第32図～第34図S65～S79）

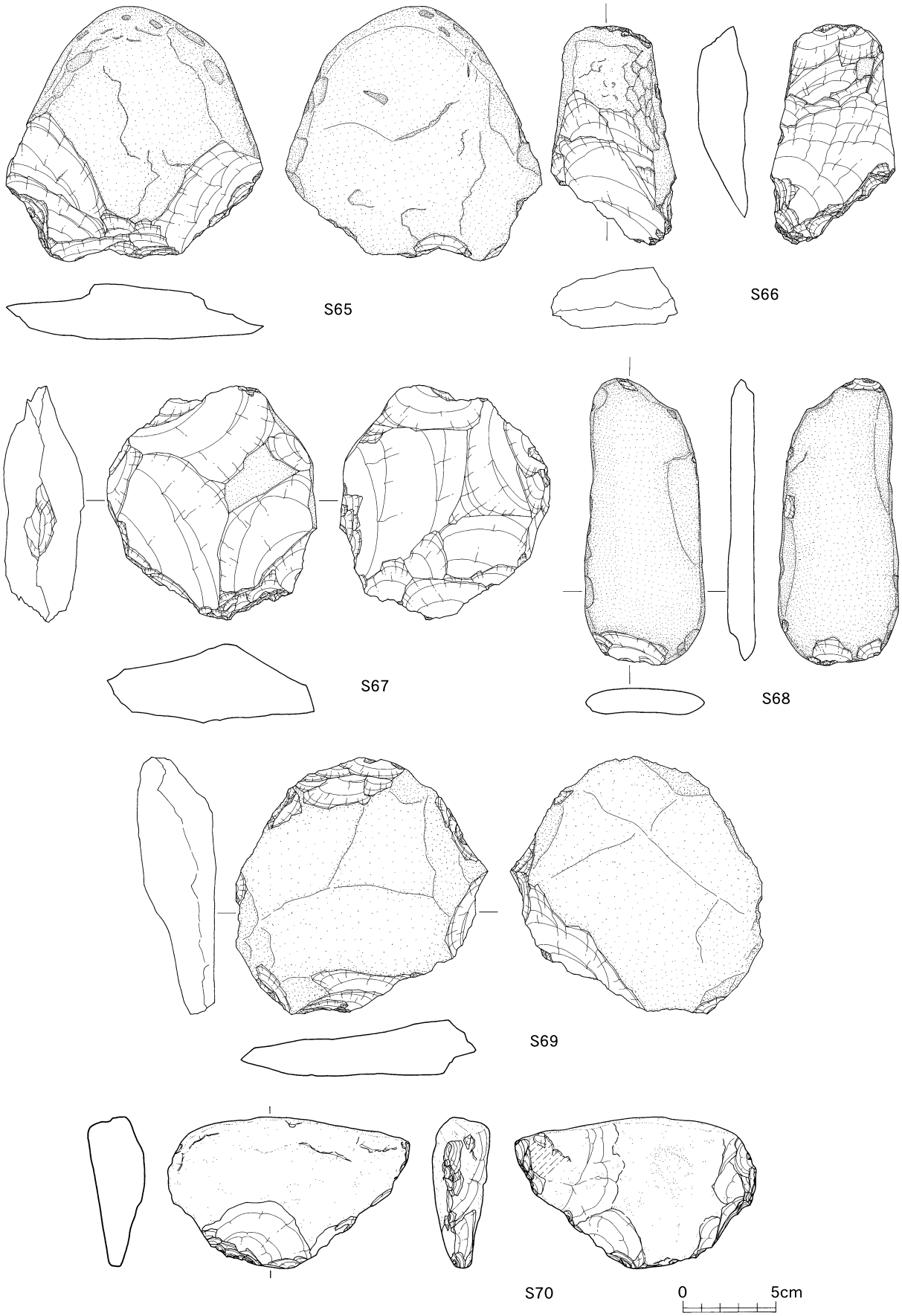
礫あるいは石核の側辺を刃部とするもので，縦長のもの・横長のものあるいは多角形のものなどがある。

S65・S66・S68・S71・S72・S77～79は縦長のものである。S65は礫の割れ口を打ち欠いて刃部としたもので，大きな剥離を加えて形を整えたあと，小さな加工をして刃部としている。一方の面はほとんど加工がみられない。S66は打製石斧あるいは局部磨製石斧の上半部の折れたものを再利用したもので，片面はていねいに打ち欠いて，特に刃部の端は両面から加工をして鋭い刃としている。S68は楕円形をした自然礫の一短側辺を両側から打ち欠いて刃部としている。S71も楕円形をした円礫の周辺を打ち欠き，その一短側辺を両面から打ち欠いて刃部としている。とがった部分を細かく加工して鋭くしている。S72は片面に自然面を残す楕円形大型剥片の周辺を加工して形を整え，その一短側辺を刃部としており，ややへこんでいる。S77はおむすび形の円礫の周辺に加工を施し，一辺に両面から加工して刃部としている。S78も楕円形円礫を利用し，一短側辺の一部に両面から打ち欠いている。S79もほとんど自然面を残しているが，片面の短側辺に打痕を加えて刃部としている。S70・S73・S75・S76は横長のものである。S70は円礫の三辺を両面から打ち欠いて刃部としたものであるが，にぶい刃部である。S73は片面に自然面を残す楕円形剥片の一長側辺の片面を打ち欠いて刃部としているもので，両面とも磨痕があることから磨製石斧を作ろうとしたのかもしれない。S75は楕円形をした円礫の一辺を片面のみ加工して刃としている。S76も楕円形をした円礫だが，二つの長側辺のうち直線のほうを背にし，曲線となったほうを両面から加工して刃部としている。

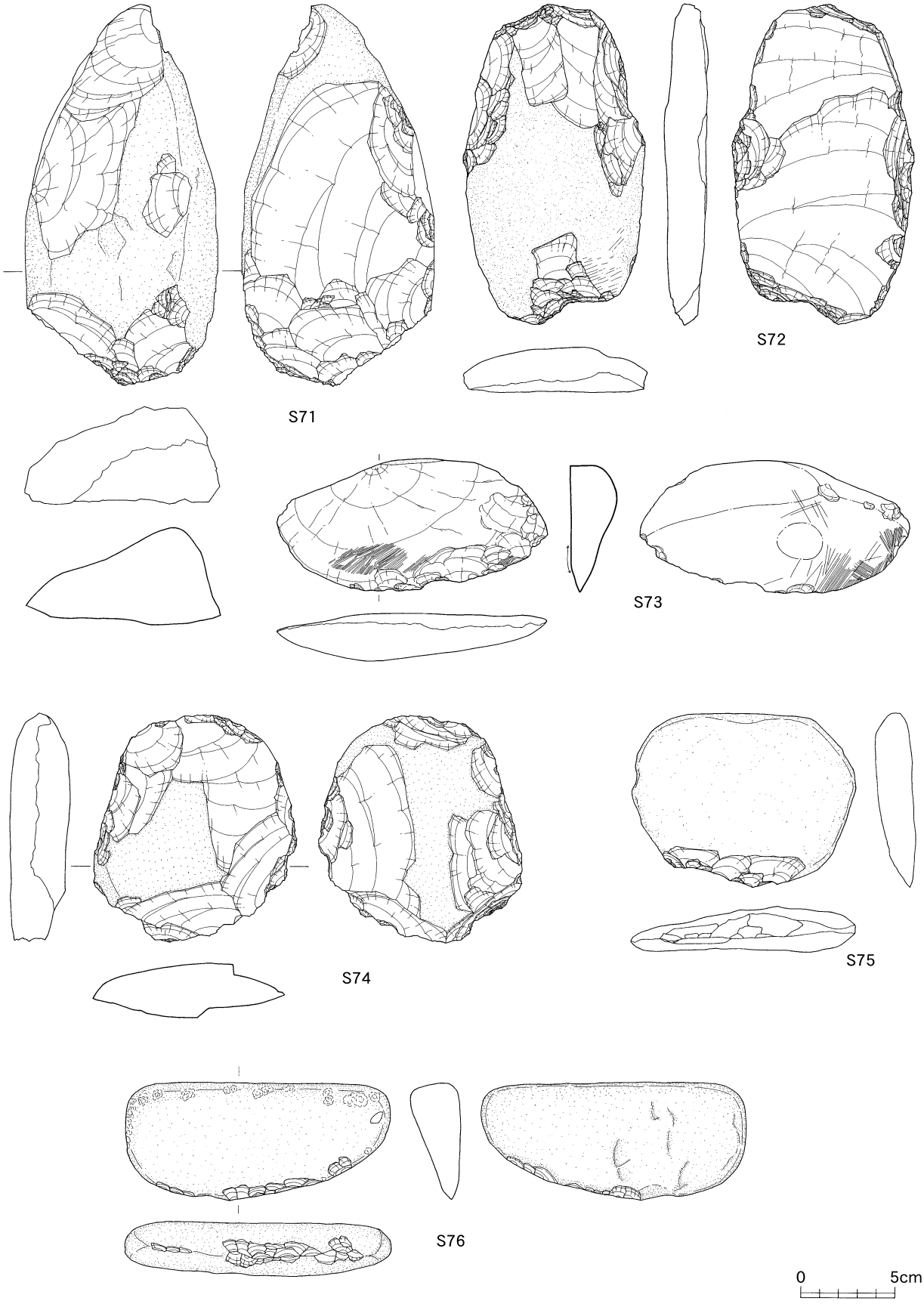
S67・S69・S74は周辺から打ち欠いて多角形としたものである。S67は一部に自然面を残しているが，周辺から打ち欠き分厚い石核となっている。その一辺に細かい加工をして刃部にしている。S69は円形をした礫を周辺から打ち欠き，その一部を刃部としているが，自然面を広く残している。S74は円礫の周辺を打ち欠き，亀甲状とした石核で，一部には自然面を残している。

８）磨石・敲石（第35図・第36図S80～S91）

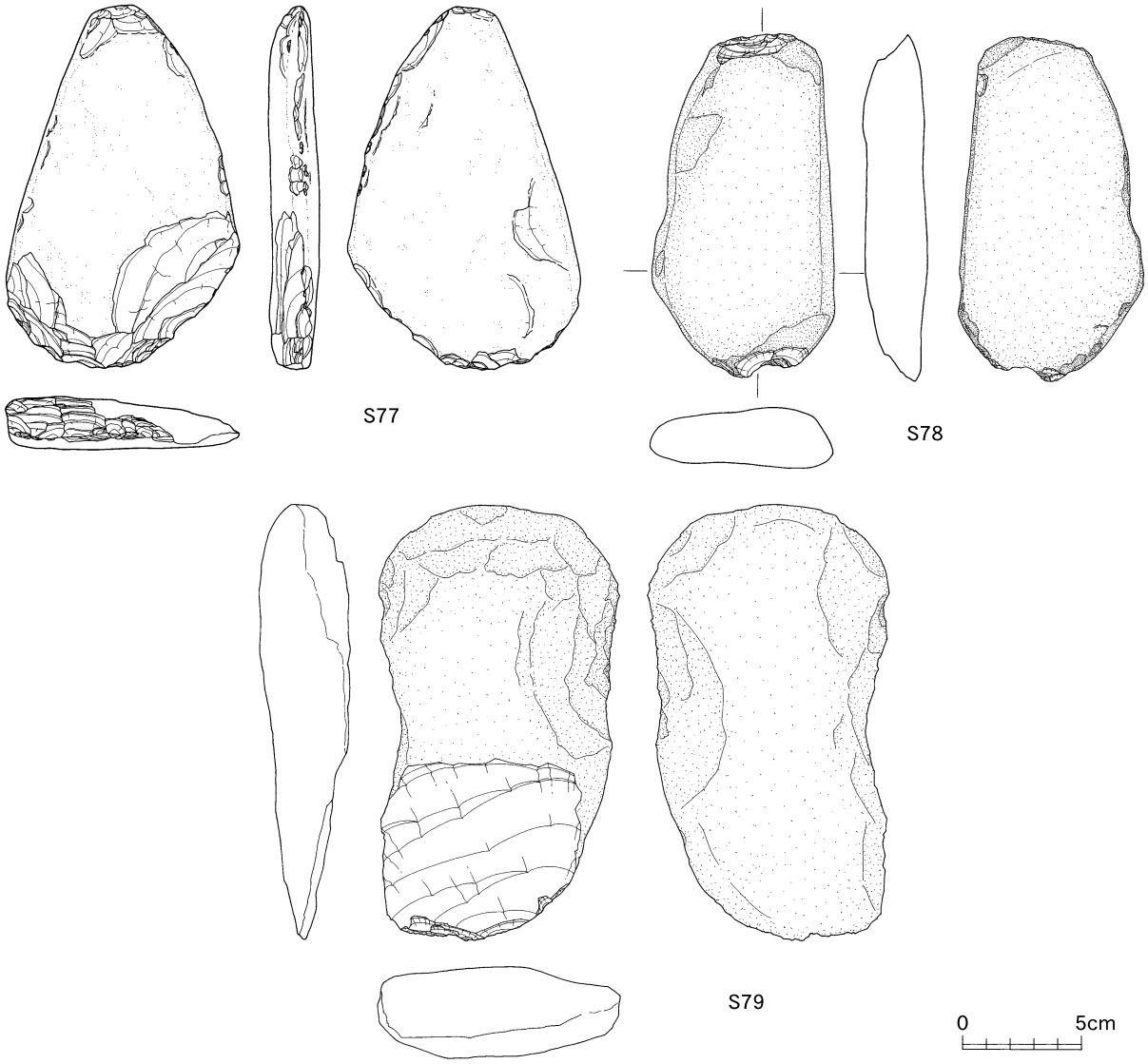
23点の磨石が出土しており，12点を図化した。平面形は楕円形のものと円形に近いものがあり，断面形は扁平なものと円形に近い厚いものとがある。長径が6.8㎝しかない小さなものから13.4㎝もある大きなものまでさまざまである。S80～S82・S84のように側面を使い込んで面をなしてい



第32図　石器(5)　礫器



第33図　石器(6)　礫器



第34図　石器(7)　礫器

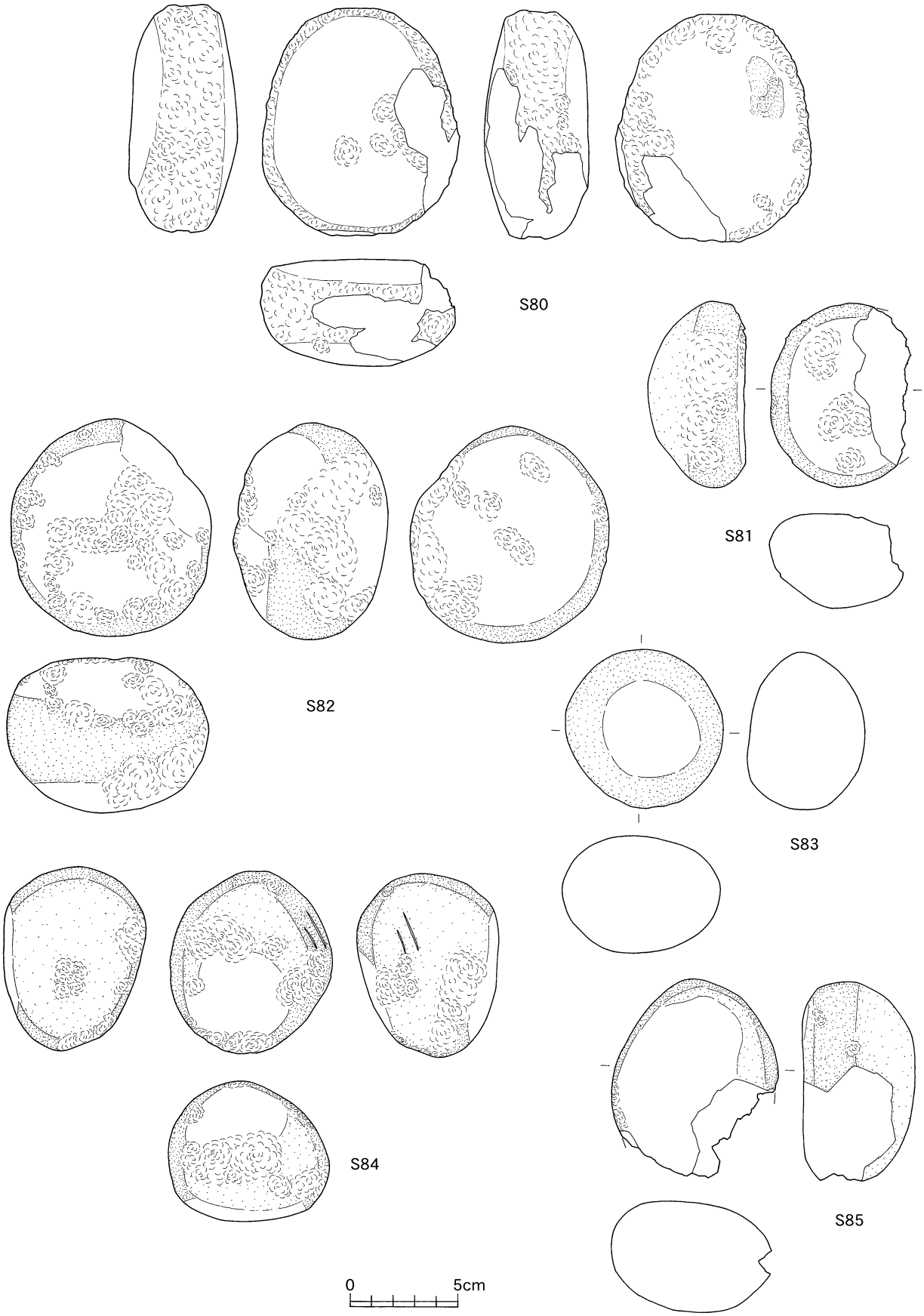
るものや，顕著な使用痕跡がないもの，あるいは完形のものと，欠損しているものなどもある。S80～S82・S84・S90・S91などは敲打痕が顕著で，敲石としても用いられる。

9）凹石（第36図S92・S93）

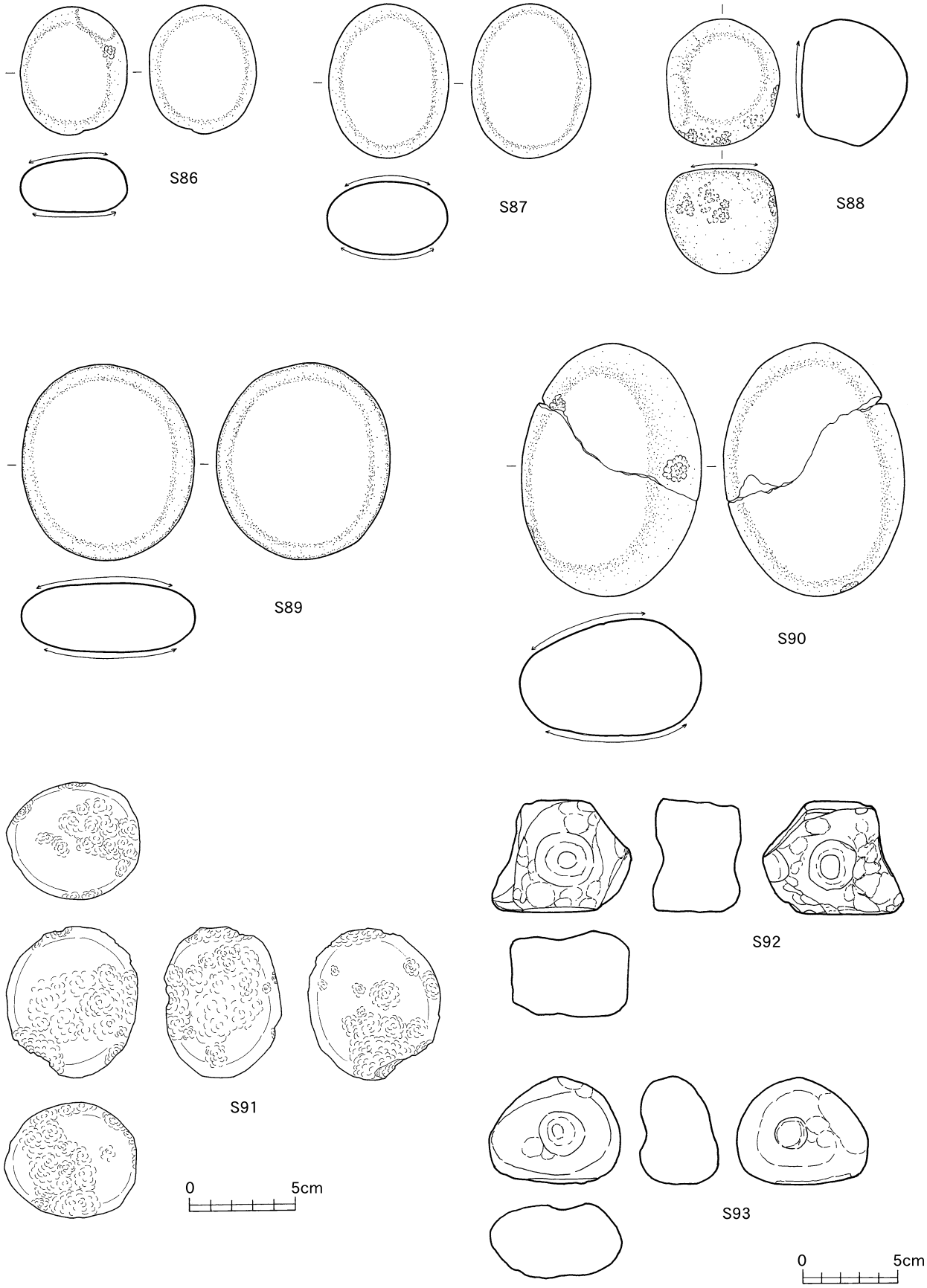
礫の中央が丸く窪んでいる凹石が２点出土している。ともに分厚い砂岩礫で，両面を用いている。S92はやや角張っており，S93は円礫である。S93の片面窪みは浅く，側面の一部分と下面は磨石としても用いている。

10）石皿（第37図・第38図S94～S101）

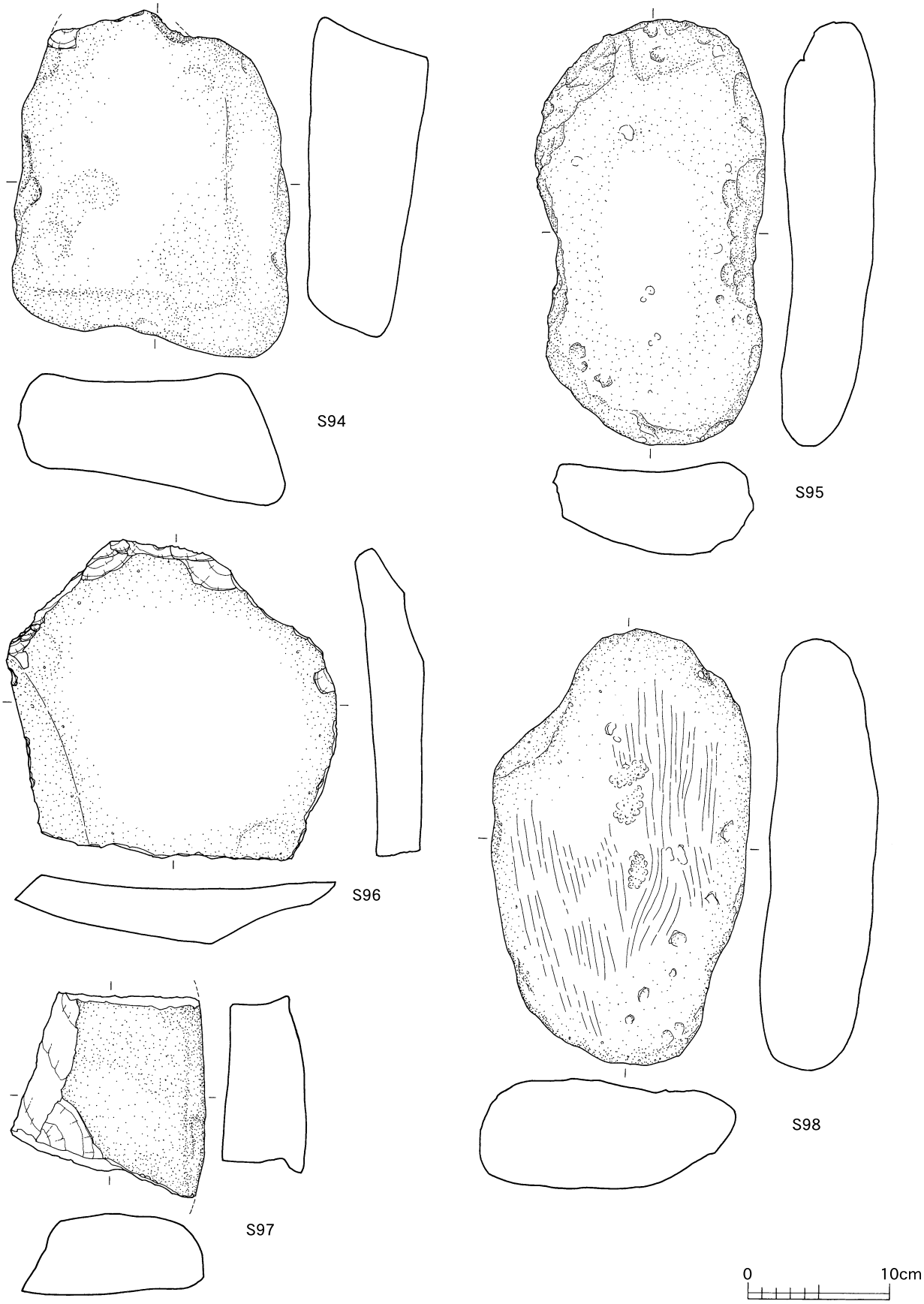
扁平なものや分厚いものが39点ある。完形のものと破砕されたものとがある。片面しか使っていないものと，両面を使っているものとがあり，あまり窪んでいないが，S95などは片面がやや窪んでいる。



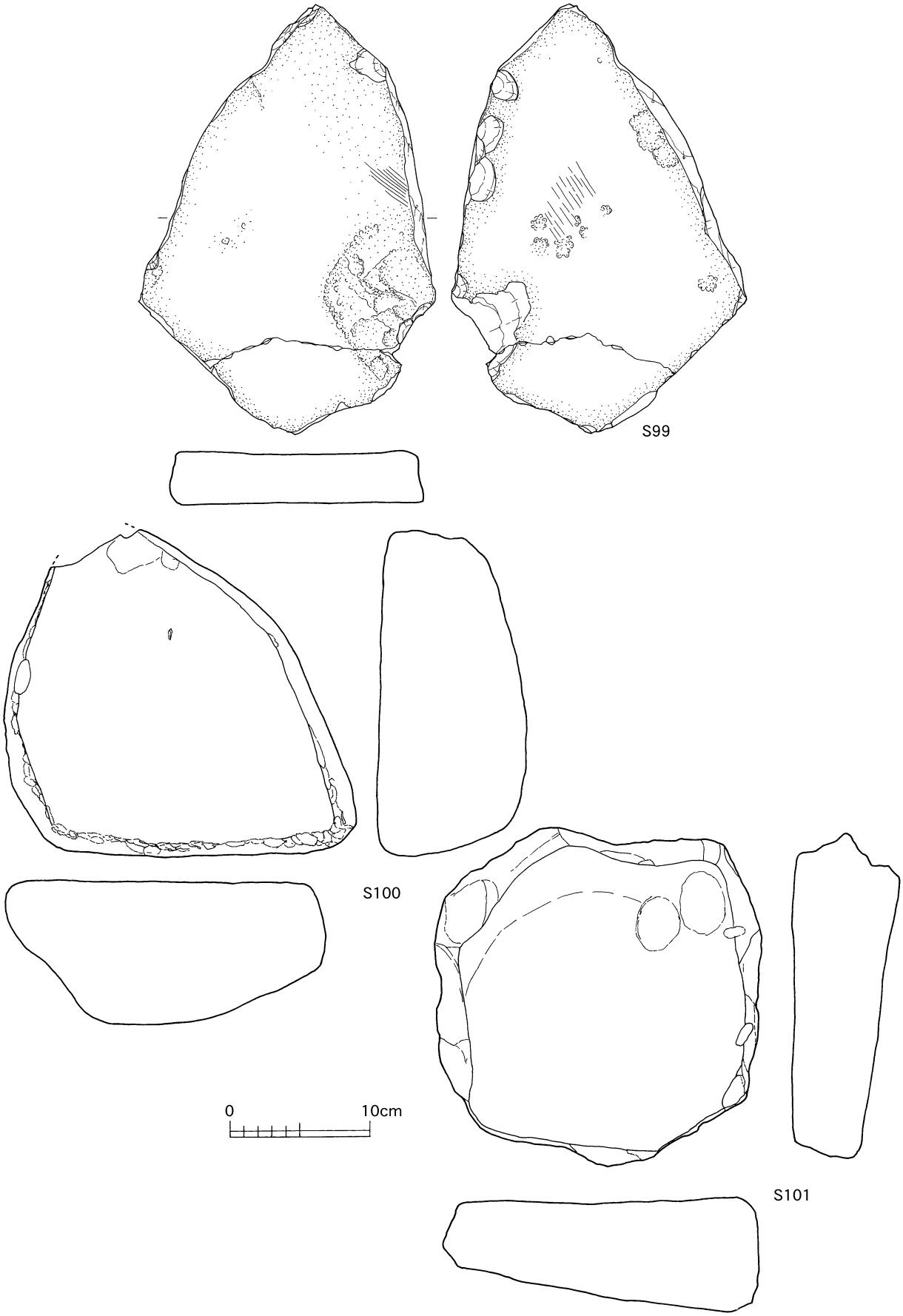
第35図　石器(8)　磨石



第36図　石器(9)　磨石・敲石・凹石



第37図　石器(10)　石皿



第38図　石器(11)　石皿

第２節　前期

遺構はないが，土器が少量出土している。石器は土器と同じ層から出土しており，前期に属するものがある可能性もあるが，土器の出土量などから晩期の所で紹介し，ここでは扱っていない。

土器（第39図65～80）はいずれも，口縁部が外反し，丸底となる器形をし，ヘラによる沈線文と刺突文からなる曽畑式土器である。65は口縁直径が33㎝ある大型の土器で，頸部から口縁へ向かって強く外反する器形を呈している。口縁近くは分厚い。外面は所々切れる横方向の沈線と，その間に縦方向にやや長い刺突文が２段にわたって施されている。刺突文はやや上へ曲がっており，刺突文より上の平行沈線文の上には縦方向に長い波状沈線文が施されている。順序としては横沈線文→波状文・刺突文の順となる。内面は口縁部に横方向の沈線があり，その上にヘラによる波状沈線文が施されている。口唇部にはヘラキザミがみられる。内外ともヘラによるていねいな横方向のナデ調整である。外面は赤っぽくなっており，あるいは赤色顔料が塗布されているのかもしれない。これは口唇部と内面の一部にもみられる。外にはススが付着している。

66・67は口縁部で，口唇部には巻貝殻頂による刺突文がみられる。66の外面はヘラによるていねいなナデのあと４条の沈線が，内面はヘラ横ナデのあと巻貝殻頂による刺突文が３段にみられる。67の外面は二条の細沈線，内面は三条の細沈線がみられる。68～74・76は胴部で，外面に横・左下がり，右下がり・矩形状の沈線がみられる。内面はヘラナデで，ほとんど横方向となっている。

75・77～79は底部あるいはその近くである。丸底で沈線によりくもの巣状の底となる。78は擬似口縁となっている。

80は長さ4.5㎝，幅５㎝ほどのメンコで，内外とも貝殻条痕で仕上げている。これは轟式土器と思われる。

第３節　後期

後期と思われる土器はほとんどないが，その可能性のあるものとして２点（第39図81・82）ある。

81は口縁付近に粘土紐を縦方向に貼付けて複雑な文様をつけたものである。そのため口縁部もでこぼこしており，外面・内面ともヘラナデで仕上げているが，窪みが残っている。暗茶褐色を呈し，焼成度は良好である。

82は底部直径が７㎝しかなく，開きながら口縁へまっすぐ立ち上がっていく。剥脱がみられるが，外面が縦方向ヘラナデ，内面が横方向ヘラナデで仕上げている。

第４節　晩期

１　土器

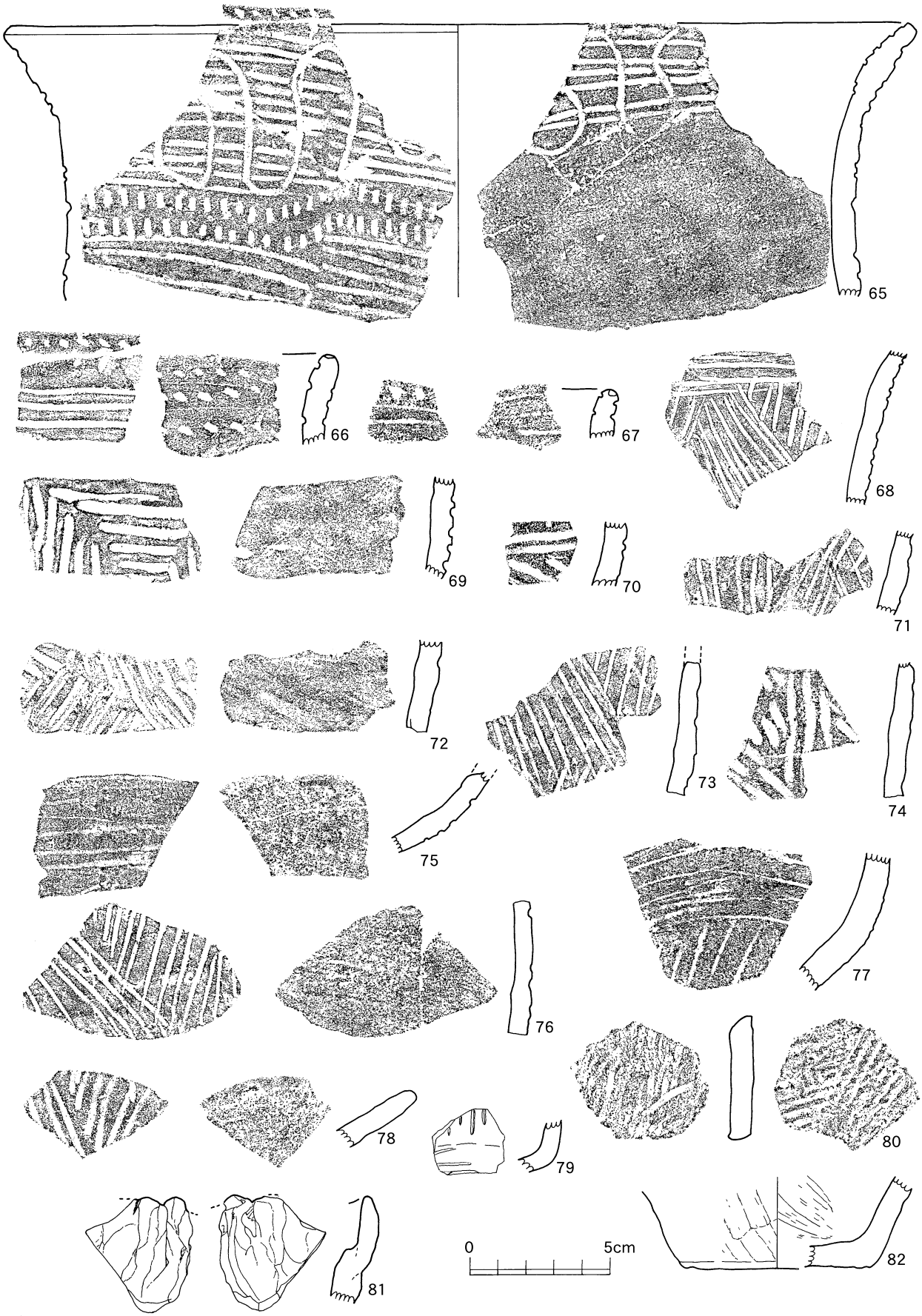
形態によって４類に分けることができる。Ⅰ類は中岳式土器と呼ばれる初頭の土器，Ⅱ類が入佐式土器と呼ばれる前葉の土器，Ⅲ類が干河原式土器と呼ばれる中葉の土器，Ⅳ類が黒川式土器と呼ばれる後葉の土器であるが，圧倒的にⅣ類が多い。

１）Ⅰ類（中岳式土器：第40図83）

口縁部が三角形に張り出す壺形様の土器で，口縁直径は16㎝である。内外とも横方向のヘラナデで仕上げ，外は特にていねいである。肥厚した口縁部に２条の凹線がみられる。

２）Ⅱ類（入佐式土器：第40図84～88）

肩部が稜をもって屈曲する器形で，頸部でへこみ口縁部へ開きながらまっすぐ伸びる。85は浅鉢



第39図　縄文土器(9)　曽畑式土器

で，他は深鉢である。85は外面に丹が付着している。肩部の直径は19㎝～33㎝と大小あり，88だけは稜をもたない。87は直径10.5㎝ほどの丸みをおびた底部である。内外とも横方向のヘラナデで仕上げているが，外面はていねいで85・88などはミガキ様になる。86はナデの前に条痕状に調整している。

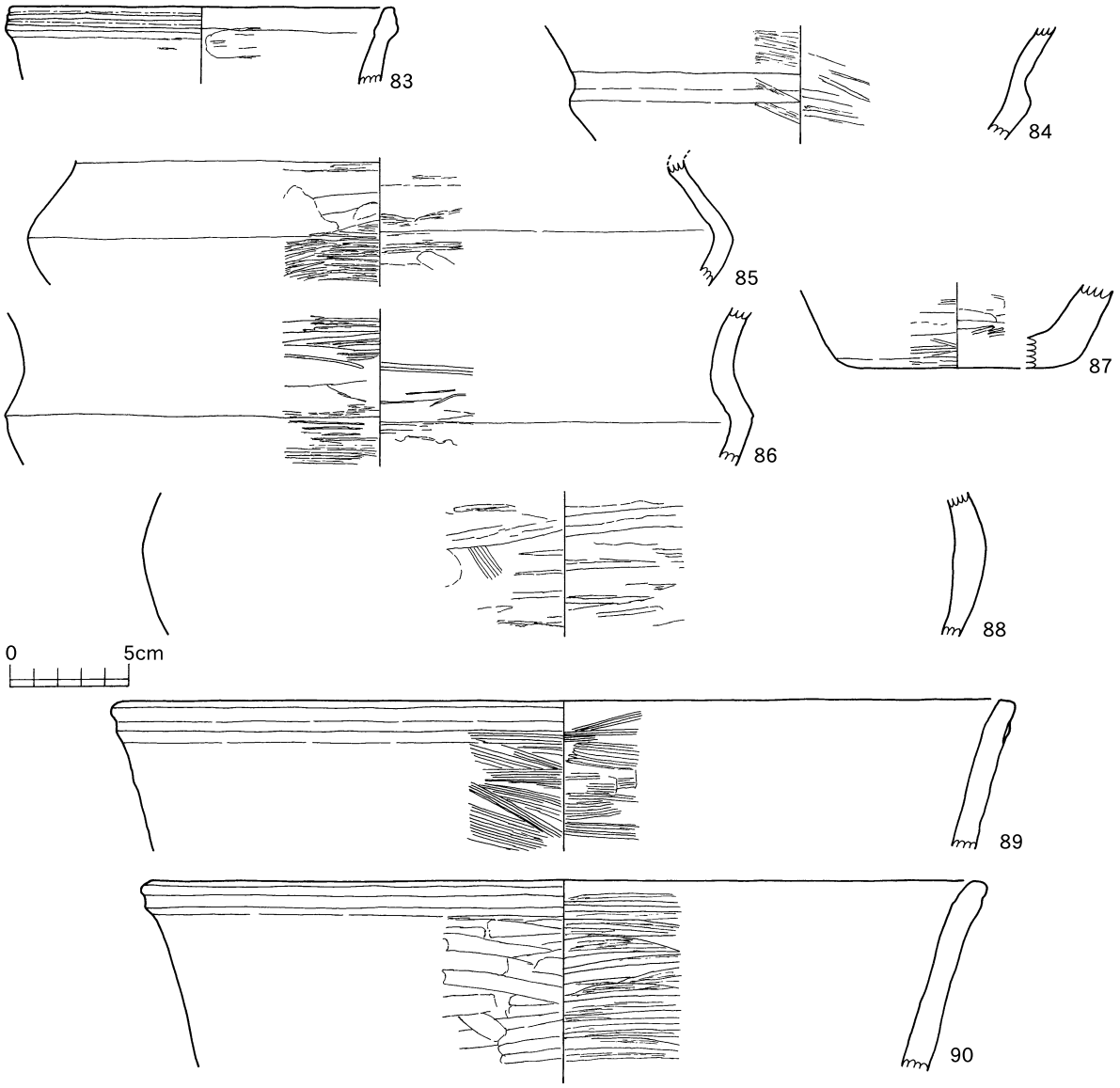
3）Ⅲ類（干河原式土器：第40図89・90）

口縁の直径が36㎝～38㎝ほどの頸部からまっすぐ外へ広がる深鉢で，同一個体の可能性がある。内外とも横方向のヘラナデで調整しており，端部近くに低い三角突帯があり，その上は浅く窪んでいる。明茶褐色を呈しているが，外にはススが付着し，灰色がかっている。

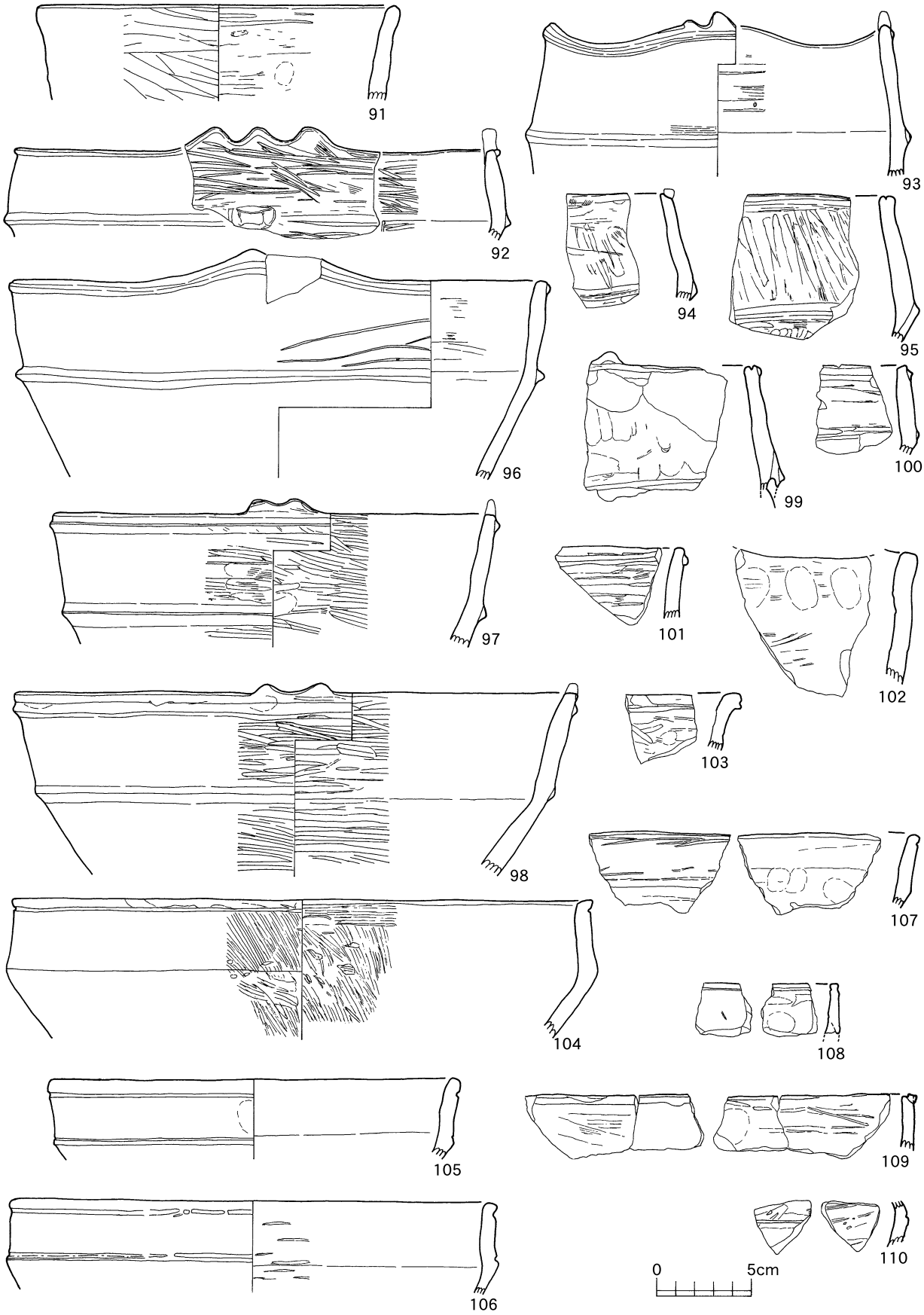
4）Ⅳ類（黒川式土器：第41図・第42図91～138）

深鉢・浅鉢・壺形土器・小型台付皿形土器・まり形土器などの器種がある。

91～103は深鉢である。口縁部が直に立ち上がるもの（91），内傾しているもの（92～95，99・100），外へ開くもの（96～98，101～103）とがある。



第40図　縄文土器⑽　中岳式・入佐式・干河原式土器



第41図　縄文土器(11)　黒川式土器

91はやや開いているもので，端部は丸みをもっている。外面はヘラミガキで仕上げているが，ススが厚く付着している。

内傾するものには93のように口縁直径が18㎝しかないものから，92のように25㎝あるものまである。92・93とも何か所にあるか不明だが３連の山形突起があり，肩部には三角突帯が巡る。93では山形突起の中央部がやや高くなっている。92は肩部の突帯が山形突起の下付近で切れ，そこに蝶ネクタイ風の突起が付されている。口縁部のやや下にも三角突帯が巡っている。94・95・99は口唇部に凹線がみられる。94・99では口縁端に突帯が貼付けられているが，95も同様である可能性がある。99の断面をみると，肩部の屈曲部に貼付け痕跡がみられる。99は口縁部に山形突起もみられ，内外とも深く剥離痕跡がみられることから，粘土板を貼付けた様子がうかがえる。

外へ開くものも口縁部と肩部に三角突帯が巡っており，口縁に２連の山形突起がみられ，96・102は波状口縁となる。口縁直径は23㎝～30㎝ある。103は口縁部の貼付突帯に沈線がみられる。

これらはいずれもヘラによる調整がていねいで，ヘラミガキあるいはそれに近いものが多い。

104～106，131～138は鉢形土器である。肩部で屈曲し，やや内反あるいは直立する器形を呈し，131～138は型取り法によって作られたことを示すいわゆる組織痕土器となる。104～106は同じような器形を呈し，口縁端近くに一条の沈線が巡る。口縁直径は22㎝～31㎝あり，105・106は同一個体の可能性があるが，肩部にも一条の沈線が巡る。これらはいずれも内外とも斜め方向のヘラミガキ仕上げである。組織痕土器のうち131～134は網布圧痕，135～138が網目圧痕であり，131と135・137は型取りによる胴部の上に輪積み整形をし，口縁をこしらえている。網布圧痕はタテ糸が５㎜～６㎜，ヨコ糸が１㎜～２㎜間隔である。網目圧痕のサイズは２㎜～３㎜である。

107～115は浅鉢である。107～109は口縁部が直あるいは外へ開きながらまっすぐ伸びており，胴部との境は逆くの字状に屈曲している。107・108は外面口縁端付近に一条の沈線がある。109は口縁端が貼付突帯により肥厚しており，口唇部には凹線がある。110は口縁部と胴部境のやや上に一条の沈線がある。111は口縁端部に２個のこぶ状突起がみられる。112も同じようなこぶ状突起がみられるが，その間に表裏に短かく垂れる棒状の貼付突帯がみられる。113は口縁端部にヘラによって切込みを入れて，突起様にみせており，外側には山形を呈する突起状貼付けがみられる。114は波状口縁で，口縁部を胴部の内側に貼付けている。外面に口縁部と並行する波状の突起が貼付けられている。115は胴部に逆Ｌ字形の棒状突起が貼付けられている。111～115は黄褐色あるいは黄みがかった茶褐色を呈し，107～110に比べて調整はていねいでない。

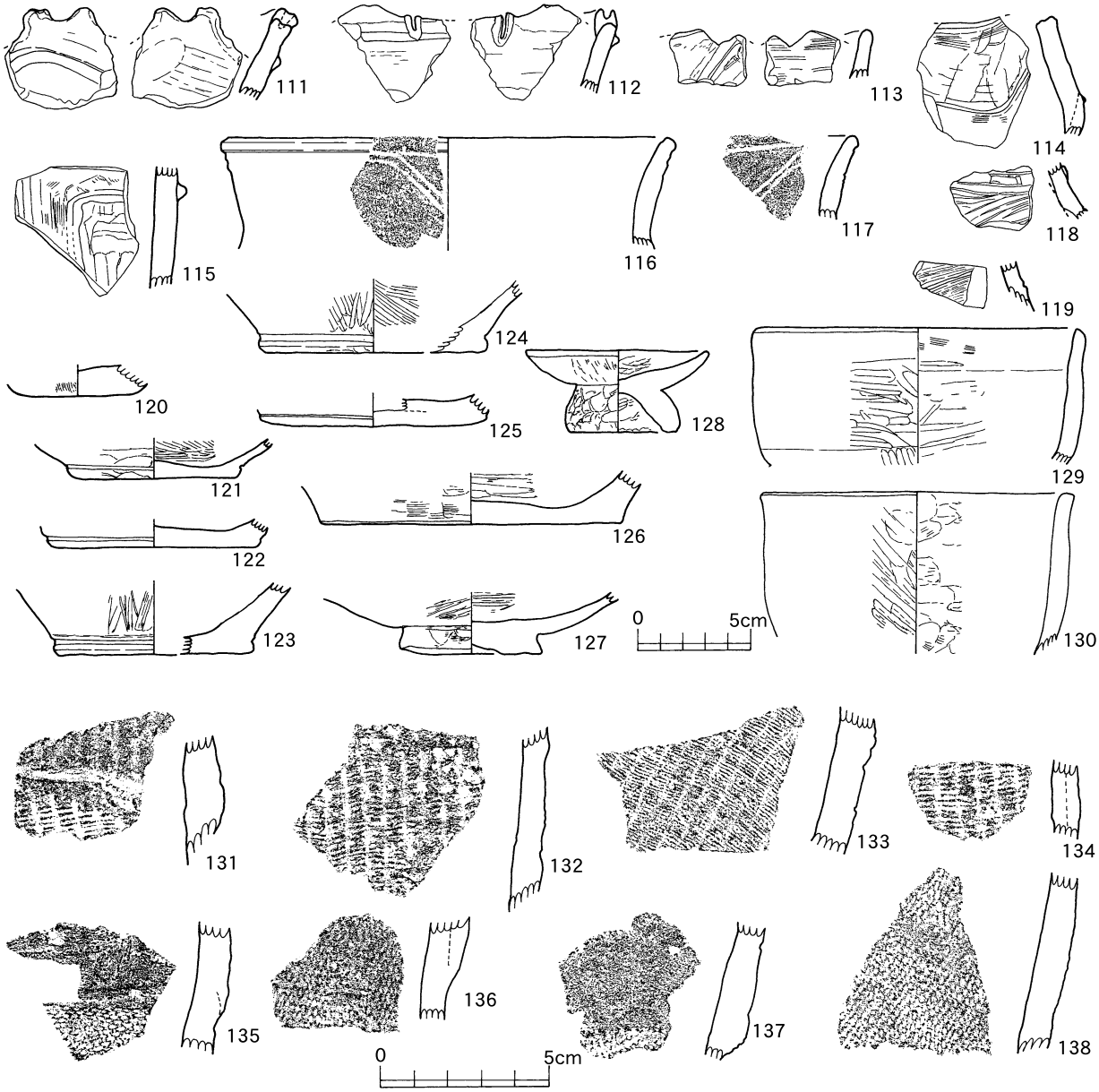
116～119は壺形の土器である。116・117は口縁部に横方向あるいは斜方向の並行する直線のヘラ沈線がみられるもので，116は直径が20㎝ある。口縁部の端部は丸みをおびて，外反する器形を呈する。118・119はヘラミガキ調整で，肩部に貼付突帯と沈線がみられ，丹塗りとなっている。これは粘土もこまかいものを用いており，色は黄みがかった明茶褐色を呈している。118の内面はほとんど剥脱している。

120～127は底部である。120は小さい丸みをおびた平底で，内底部にはヘラによる突刺し痕がみられる。121～125は安定した平底から強く外へ広がる器形をし，立ち上がり部分に沈線が巡る。121・124は薄い作りである。125は底部を貼付によって厚くしている様子がうかがえる。内外ともヘラミガキあるいはていねいなヘラナデ仕上げである。126は安定した平底で，底はていねいにナ

デている。外面の一部ににごった丹が付着している。127はあげ底となっている充実高台をもち，内面はヘラミガキで仕上げている。薄い作りである。

128は口縁直径が８㎝，高さが3.7㎝，脚台径が５㎝の小型皿形土器の完形品で，外面は粗いヘラナデ仕上げであるが，皿部内面はヘラミガキ，脚台内面もミガキに近いヘラナデとていねいである。赤っぽい茶褐色を呈し，焼成度は良い。

129・130は口縁直径が14㎝ほどのまり形土器で，129がまっすぐ伸びるのに対して，130はやや外反する。丸底風である。内外とも横方向のヘラナデだが，ていねいなナデで，129の外面はミガキになっている。129の外にはススも付着している。



第42図　縄文土器⑫　黒川式土器

第５表　縄文土器観察表(1)

図番	出土地	層	類	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
5	58L	Ⅵ	早期1類	斜方向貝殻条痕 角には巻貝殻頂の押圧	ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・黄白色石・金雲母などの細かい石
6	2T			横方向貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	白色石・石英・長石などの細かい石（５㎜大の石を含む）
7	58L	Ⅵ		沈線	ていねいなナデ	茶褐色	良	金雲母・白色石・黄白色石などの細かい石
8	58L	Ⅴ		沈線	ていねいなナデ	茶褐色	良	金雲母・白色石・黄白色石などの細かい石
9	60J	Ⅴa･b	早期2類	ナデのあと貝殻条痕	ヘラナデ	茶褐色 （口縁と内は暗茶褐色）	良	石英・黄白色石の多い砂質土
10	57K	Ⅵ		短絡貝殻条痕	ていねいなナデ	暗茶褐色	良	石英・茶色石・白色石などの細かい石
11	58L	Ⅵ		横方向貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	赤みがかった茶褐色	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石
12	58K	Ⅵ		ヘラナデのあと細沈線	ヘラナデ	暗茶褐色	普通	石英・黄白色石・白色石も含む
13	58L	Ⅵ		斜短絡貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	茶褐色	普通	白色石・黄白色石などの細かい石
14	57K	Ⅵ		短絡貝殻条痕	横ナデ	外：暗茶褐色 内：茶褐色	普通	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石
15	53L	Ⅵ		ヘラナデ 縦方向貝殻条痕	ヘラ縦ナデ	外：茶褐色 内：黒褐色	普通	白色石・金雲母・黄白色石・石英などの細かい石
16	56K 57K	Ⅵ		ていねいなナデ	ていねいなナデ	赤みがかった茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を多く含む砂質土
17	53M	Ⅵ		貝殻条痕のあと部分的にていねいなヘラナデ	ミガキ ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	良	黄白色石・茶色石・石英・金雲母の多い砂質土
18	57K 56L 58L	Ⅵ		短絡貝殻条痕	ていねいな横ナデ	茶褐色 （内は紫がかっている）	普通	白色石・長石・石英・黄白色石などの細かい石多（３㎜大の石を含む）
19	52M	Ⅵ		ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	白色石・金雲母の細かい石を多量に含む
20	57L	Ⅵ		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
21	57K	Ⅵ		ていねいなナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・黄白色石・白色石などの細かい石（３㎜大の石を含む）
22	51M 52M 52N	Ⅵ	早期3類	ヘラナデ	ヘラナデ	灰黒褐色	普通	石英・白色石などの細かい石（４㎜大の石を含む）
23	55M	Ⅵ		ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石
24	56M	Ⅵ		鋸歯状短絡沈線	ヘラナデ	淡茶褐色	普通	金雲母・白色石・茶色石などの細かい石
25	54L	Ⅵ		ヘラナデ	ヘラナデ	黄茶褐色	普通	石英の多い細かい石（６㎜大の石を含む）
26	56L	Ⅵ		横方向繊維状ハケナデ	ていねいな横ナデ	外：暗茶褐色 内：明茶褐色	普通	石英・黄白色石などの細かい石
27		Ⅱ		ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	明茶褐色	良	白色石・石英の多い細かい石
28	55L	Ⅵ		ヘラ横ナデのあと 細かい縦ヘラ沈線	ていねいなヘラナデ	外：黒褐色 内：淡茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石（９㎜大ほどの茶色石もあり）
29	52N	Ⅵ		ヘラ沈線	ヘラナデ	外：茶褐色 内：暗茶褐色	良	黄白色石・石英などの細かい石
30	58L	Ⅵ		ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	金雲母が多く，白色石などの細かい石
31	58K	Ⅵ		ていねいなヘラナデ	ていねいな横ナデ	外：明茶褐色 内：淡黒褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
32	2T			二枚貝貝殻押圧	ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・黄白色石などの小石多
33	55L	Ⅵ		横方向貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	石英・茶色石・黄白色石などの細かい石
34	56M	Ⅵ		底近くはていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：灰黒褐色	良	白色石・石英などの細かい石（６㎜大の石を含む）
35	55M	Ⅵ		ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	白色石・金雲母・黄白色石・石英などの細かい石
36	55M	Ⅵ		ヘラの平行ナデ	ていねいなナデ	淡茶褐色	良	黄白色石・金雲母などの細かい石
37	58K	Ⅵ		条痕のあとヘラナデ	ていねいなナデ	淡茶褐色 （内は紫がかっている）	普通	茶色石・石英・白色石などの細かい石
38	58L	Ⅵ		ヘラナデ	ヘラナデ	暗茶褐色	普通	金雲母多。石英・茶色石などの細かい石を含む
39		Ⅱa	早期4類	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石
40	58J 59J 59K	Ⅵ		ていねいなナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色 （部分的に暗紫褐色）	普通	石英などを含む細かい石（１㎝大の石を含む）
41	59J	Ⅵ		山形押型文	ヘラナデ	外:茶色がかった黒褐色 内：淡茶褐色	普通	黄白色石・茶色石などの細かい石
42	58L	Ⅵ		浅い押型文	ていねいなナデ	外：茶褐色 内：暗茶褐色	良	金雲母の多い土　黄白色石・茶色石などの細かい石
43	58K	Ⅵ		二枚貝押圧文・ナデ	ナデ	茶褐色	普通	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土（５㎜大の石を含む）
44	58L	Ⅵ		押型文	ていねいなナデ	茶褐色	良	金雲母・白色石・黄白色石などの細石多
45	59K	Ⅵ		粗い押型文	ナデ	外：茶褐色 内：淡黒灰褐色	普通	石英・茶色石・白色石・長石などの細かい石
46	58L	Ⅵ		山形押型文 ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	金雲母・黄白色石・白色石などの細かい石の多い砂質土
47	55L	Ⅵ		楕円押型文	ヘラナデ	外：淡黄茶褐色 内：淡黒褐色	良	白色石・長石・石英などの細かい石多
48	53L 55L 56M	Ⅵ	早期5類	刺突文・沈線・ヘラ押し	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	悪	白色石・石英などの細かい石
49	53L	Ⅵ		刺突文・沈線・ヘラ押圧	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石

第６表　縄文土器観察表(2)

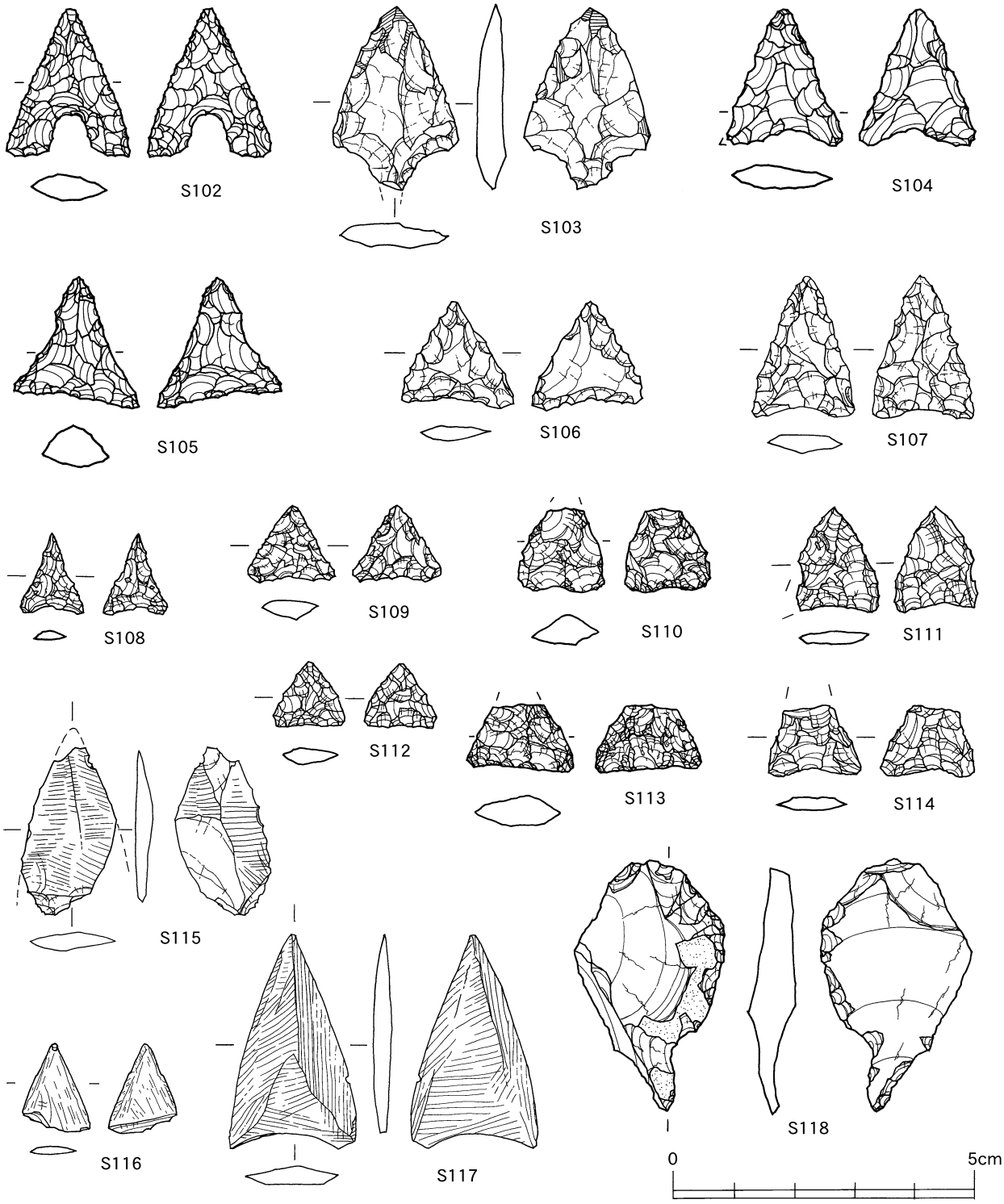
図番	出土地	層	類	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
50	51N	Ⅵ	早期5類	沈線・刺突文・ヘラ押圧	ていねいなヘラナデ	茶褐色（やや紫がかっている）	普通	白色石・石英・茶色石など４㎜大ほどの粗い土多
51	51N	Ⅵ		ヘラ刺突文・ヘラ沈線	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石
52	53N	Ⅵ		沈線・ヘラ刺突文	ていねいなヘラナデ	茶褐色	悪	石英の多い細かい石
53	51M	Ⅵ		刺突文・沈線	ていねいなヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	普通	石英・黄白色石などの細かい石
54	56L	Ⅵ		ヘラ沈線・ヘラ刺突文	ていねいなナデ	明茶褐色	悪	石英・白色石などの細かい石
55	51N	Ⅵ		ヘラ沈線・刺突文	ていねいなヘラナデ	黒みがかった茶褐色	悪	石英・白色石・茶色石・黄白色石などの細かい石
56	57K	Ⅵ		ヘラ刺突文・沈線	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良	金雲母多 白色石・石英などの細かい石
57	54L	Ⅵ		ていねいなナデ ヘラ刺突文・沈線	ヘラ横ナデ	赤みがかった淡茶褐色	普通	白色石・茶色石・石英などの細かい石（５㎜大の石を含む）
58	52M	Ⅵ		撚糸文	ヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：灰黒褐色	良	白色石・金雲母・茶色石・石英などの細かい石
59	52N	Ⅵ	早期6類	沈線・縄文	粗いヘラ横ナデ	明茶褐色（内はやや暗い）	普通	白色石・石英・黄白色石・長石などの細石多
60	51M 51N	Ⅵ		撚糸文 ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色（赤みがかった部分あり）	良	黄白色石・白色石・石英などの石を含む粗い土（５㎜大の石を含む）
61	52M	Ⅵ		ヘラ沈線・縄文	ケズリに近いヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	金雲母・白色石・黄白色石などの細石多
62	52M	Ⅵ		撚糸文・沈線	ていねいなヘラナデ	茶褐色	普通	金雲母・白色石などの細かい石
63	53M	Ⅵ		ていねいなナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・茶色石などの細かい石
64	51M	Ⅵ		ヘラナデ　撚糸文・沈線	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	普通	黄白色石・石英・金雲母・白色石などの細かい石
65	46N	Ⅲa	前期	沈線・波状文・ヘラ刺突文	ていねいなヘラ横ナデ	黄茶褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石
66	56M	Ⅲa		沈線・ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ・刺突文	淡茶褐色（外は黒褐色）	良	白色石・石英などの細かい石
67	57K	Ⅲa		沈線・巻貝殻頂押圧	沈線	暗茶褐色	普通	金雲母多・石英多 茶色石・白色石などの細かい石が多い
68	52M	Ⅲa		横沈線	ていねいな横ナデ	黄茶褐色（外はススのため暗い）	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石
69	57L	Ⅲa		方形状のヘラ凹線	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色（外にはスス）	良	石英・白色石・黄白色石などの細かい石
70	63H	Ⅱb		縄文	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石
71	53L	Ⅲa		右下がり左下がりの沈線	ていねいなヘラナデ	黄褐色（外にはスス）	普通	黄白色石・石英などの細かい石（３㎜大の石を含む）
72	52N	Ⅲa		右下がり左下がりの沈線	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（外にはスス）	良	白色石・石英などが多く，茶色石もある
73	52M	Ⅲa		左下がり右下がりのヘラ凹線	ヘラ横ナデ	黄茶褐色	良	黄白色石・白色石などの細かい石
74	52N	Ⅲa		右下がりと左下がり凹線の間に縦長短絡線	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	良	石英・茶色石などの細かい石
75	57K	Ⅲa		くもの巣状ヘラ沈線	こげ付着	明茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石が多い
76	52M	Ⅲa		右下がり沈線 縦方向沈線	ヘラ横ナデ	外：黄褐色（スス付着） 内：淡黒褐色	良	黄白色石・石英などの細かい石が多い
77	58J	Ⅲa		細い沈線（横線＋縦線）	ヘラナデ	外：暗茶褐色 内：黒褐色	普通	石英・長石・白色石・黄白色石などの細かい石
78		表採		ヘラ沈線	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	石英などの細かい石
79	64H	Ⅱb		ヘラナデの後細かいヘラ沈線	ヘラ横ナデ	黄褐色	普通	長石・黄白色石・白色石などの細かい石
80	46N	Ⅲ		貝殻条痕	貝殻条痕	暗茶褐色（内は淡褐色）	良	石英などの細かい石（５㎜大の石を含む）
81	47N	Ⅱ	後期	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	暗茶褐色	良	白色石などの細かい石が多い
82		Ⅱ		ヘラ縦ナデ（剥脱あり）	ヘラ横ナデ	茶褐色（内は黒褐色）	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
83	55M	Ⅲa	晩期Ⅰ類	２条の凹線 ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	良	黄白色石・金雲母・白色石などの細かい石
84	55M	Ⅲa		ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外:淡茶褐色(スス付着) 内：暗茶褐色	良	黄白色石・金雲母・茶色石などの細かい石
85	47N	Ⅲ	晩期Ⅱ類	ヘラミガキ様ていねいなナデ	ヘラ横ナデ	黄褐色(内側に黒褐色あり）外に丹付着	普通	黄白色石・石英などの細かい石
86	48M	Ⅲ Ⅲa		条痕のあとていねいなナデ	条痕のあとナデ	明茶褐色（内は暗い）	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石
87	65H	Ⅱ		ヘラ横ナデ 底ヘラナデ	ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	灰がかった明茶褐色（外にスス）	普通	白色石・黒曜石・石英などの細かい石
88	64H	Ⅱb		ヘラミガキ	粗い条痕状横ナデ	淡茶褐色（外は部分的に灰褐色）	普通	白色石・石英などの砂粒多（内面剥脱あり）
89		表採	晩期Ⅲ類	ヘラナデ	細かいていねいなヘラ横ナデ	外:灰がかった明茶褐色（外にスス） 内：明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
90	63H	Ⅱa		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外:灰がかった明茶褐色（外にスス） 内：明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
91	59K	Ⅲa	晩期Ⅳ類	ヘラミガキ　ススが厚く付着	ていねいな横ナデ	外：黒褐色 内：淡黄褐色	良	石英・白色石などの砂粒
92	65G	Ⅱb		ミガキに近いヘラ横ナデ 三角突帯（リボン周辺で途切れ）	ミガキに近いていねいな横ナデ	外：黒褐色 内：黄みがかった淡茶褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石
93	59J	Ⅲa		突起，波状，三角突帯 ていねいな縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石（５㎜大の石を含む）
94	64H	Ⅱb		ていねいなヘラナデ 縦ミガキ	ていねいな横ナデ	黒褐色	良	石英・白色石・黒曜石などの細かい石

第７表　縄文土器観察表(3)

図番	出土地	層	類	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
95	64H	Ⅱb	晩期Ⅳ類	口縁と胴に突帯 ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	淡黄褐色（外は黒み）	普通	石英・茶色石・灰色石などの砂質土（４㎜大の石を含む）
96	58K 59K	Ⅲa		突起，波状，三角突帯 ていねいな縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石（５㎜大の石を含む）
97	64H	Ⅱb		ていねいなヘラ横ナデ	ヘラミガキ	外:茶褐色だがススで黒褐色化　内：黒褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石（４㎜大の石を含む）
98	64H	Ⅱb		ていねいな横ナデ	ヘラミガキ	黒褐色	良	白色石・石英・黄白色石・茶色石などの細かい石（４㎜大の石を含む）
99	64G	Ⅱb		深く削り，突起，波状 ヘラ縦ナデ	一部厚く剥脱 ていねいなヘラ縦ナデ	外：淡黄褐色（スス付着） 内：黒灰色	普通	石英・黄白色石などの細かい石
100	64G	Ⅱa		ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	黒褐色（外にスス）	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石
101	65H	Ⅱb		三角突帯　ヘラ横ナデ	ていねいな横ナデ	暗茶褐色	普通	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石
102	46M	Ⅲa		粗いヘラ横ナデ	粗いヘラ斜めナデ （ケズリ風）	白っぽい黄褐色(外にス付着)	普通	石英・白色石・茶色石など細かい石
103	65G	Ⅱb		ヘラ横ナデ	厚く剥脱 ていねいなヘラ横ナデ	黒褐色（内は一部黄褐色）	普通	石英・白色石などの細かい石
104	57M	Ⅲa		斜め研磨，沈線 ていねいなミガキ	ヘラによる斜め研磨	外：暗茶褐色（外にスス） 内：淡茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石
105	58L	Ⅲa		ていねいな横ナデ	ヘラ横ナデ	灰がかった明茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
106	58L	Ⅲa		ていねいな横ナデ	ヘラ横ナデ	灰がかった明茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
107	64G	Ⅱb		ていねいな横ナデ	ヘラ横ナデ	黒褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
108		表採		ヘラ沈線 ていねいなナデ	ヘラナデ 口縁近くは雑	黒褐色	普通	石英・黄白色石などの細かい石
109		Ⅱc		ミガキ風，沈凹線 ていねいなヘラナデ	ミガキ ていねいなヘラナデ	接合（黒褐色，白っぽい黄褐色）	良	石英・白色石などの細かい石
110	65H	Ⅱb		ヘラ横ナデ 摩滅している　沈線	ヘラ横ナデ	黒灰褐色	普通	石英などの微石
111	66G	Ⅱb		ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	明黄褐色	普通	白色石・黄白色石・石英・雲母・茶色石などの細かい石
112	64H	Ⅱb		三角突帯 ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	灰がかった黄褐色(外に朱？)	普通	石英・白色石などの細かい石
113		Ⅱ		ヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	普通	黄白色石・石英・白色石などの細かい石
114	64G	Ⅱc		ヘラ縦ナデ，ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
115	65H	Ⅱa		ヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石
116	58K	Ⅲa		ヘラ縦ナデ ヘラ沈線（二次沈線）	ヘラ横ナデ	茶褐色	普通	白色石・石英・金雲母などの細かい石
117	58K	Ⅲa		ヘラ縦ナデ ヘラ沈線（二次沈線）	ヘラ横ナデ	茶褐色	普通	白色石・石英・金雲母などの細かい石
118	64H	Ⅱb		ヘラミガキ 突帯貼付の前に浅いヘラケズリ	ほどんど剥脱	外：丹塗り 内：黄みがかった明茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石
119	64H	Ⅱb		沈線	ていねいなヘラナデ	外：丹 内：黄みがかった明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
120	66G			ヘラ縦ナデ	ヘラ突き刺し	淡茶褐色	普通	石英・茶色石・白色石などの細石多
121	63H 64H	Ⅱb		沈線 ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	普通	白色石・石英・茶色石（５㎜大の礫を含む）
122	58K	Ⅲa		沈線 ヘラナデ	ヘラナデ	茶がかった淡黒褐色 内はやや白っぽい	普通	白色石・石英などの細かい石が多い
123	65H	Ⅱb		２条の沈線ヘラ切り ヘラミガキ	ヘラナデ	外：白っぽい灰茶褐色 内：黒褐色，剥脱多	普通	石英・茶色石・白色石などの細かい石
124	65G	Ⅱb		沈線 ヘラ縦ミガキ	ヘラ横ミガキ	外：黄褐色・黒褐色 内：黒褐色	普通	石英・白色石・黒曜石などの細かい石
125	64H	Ⅱb		沈線　ヘラナデ	ヘラナデ	黄褐色	普通	石英・黄白色石などの細かい石
126	65H	Ⅱb		ていねいなヘラ横ナデ 底はていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡黄褐色(にごった丹が外に付着)	普通	石英多　黒曜石・白色石・茶色石などの細かい石
127		表採		条痕のあとヘラナデ	ヘラミガキ	外：赤っぽい茶褐色 内：黄っぽい淡茶褐色	良	黄白色石・石英などが多い
128	44M	Ⅲa		粗いヘラナデ ミガキに近いヘラナデ	ヘラミガキ	赤っぽい茶褐色	良	黄白色石・白色石などの細かい石
129		Ⅱ		ヘラミガキ	ていねいな横ナデ	明茶褐色 外はススのため黒色化	良	石英・白色石などの細かい石
130	58K	Ⅲa		ていねいなヘラ斜ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	普通	石英・黄白色石・白色石などの細かい石
131		Ⅱa		ヘラナデ	ていねいなナデ	外：茶褐色 内：黒褐色（こげ？）	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石
132	65G	Ⅱb		ヘラナデ	不明	外：暗茶褐色 内：黒褐色 （こげ厚く付着）	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石
133	59K	Ⅲa		ヘラナデ	ていねいなナデ	黄褐色	良	茶色石・石英・黄白色石などの細かい石
134		Ⅱa		ヘラナデ	ていねいなナデ	外：淡茶褐色 内：黒褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石
135	57L	Ⅲa		ヘラナデ	ていねいなヘラナデ （ミガキに近い）	外：明茶褐色 内：黒褐色	良	黄白色石・茶色石・黒曜石などの細かい石
136	58L	Ⅲa		ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	普通	石英・黄白色石などの細かい石（６㎜大の石を含む）
137	58K	Ⅲa		ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	黄白色石・茶色石・白色石・石英などの細かい石（５㎜大の石を含む）
138	58K	Ⅲa		ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	外：灰褐色 内：黒褐色	良	白色石・石英・黄白色石・雲母などの石（６㎜大の石を含む）

2　石器

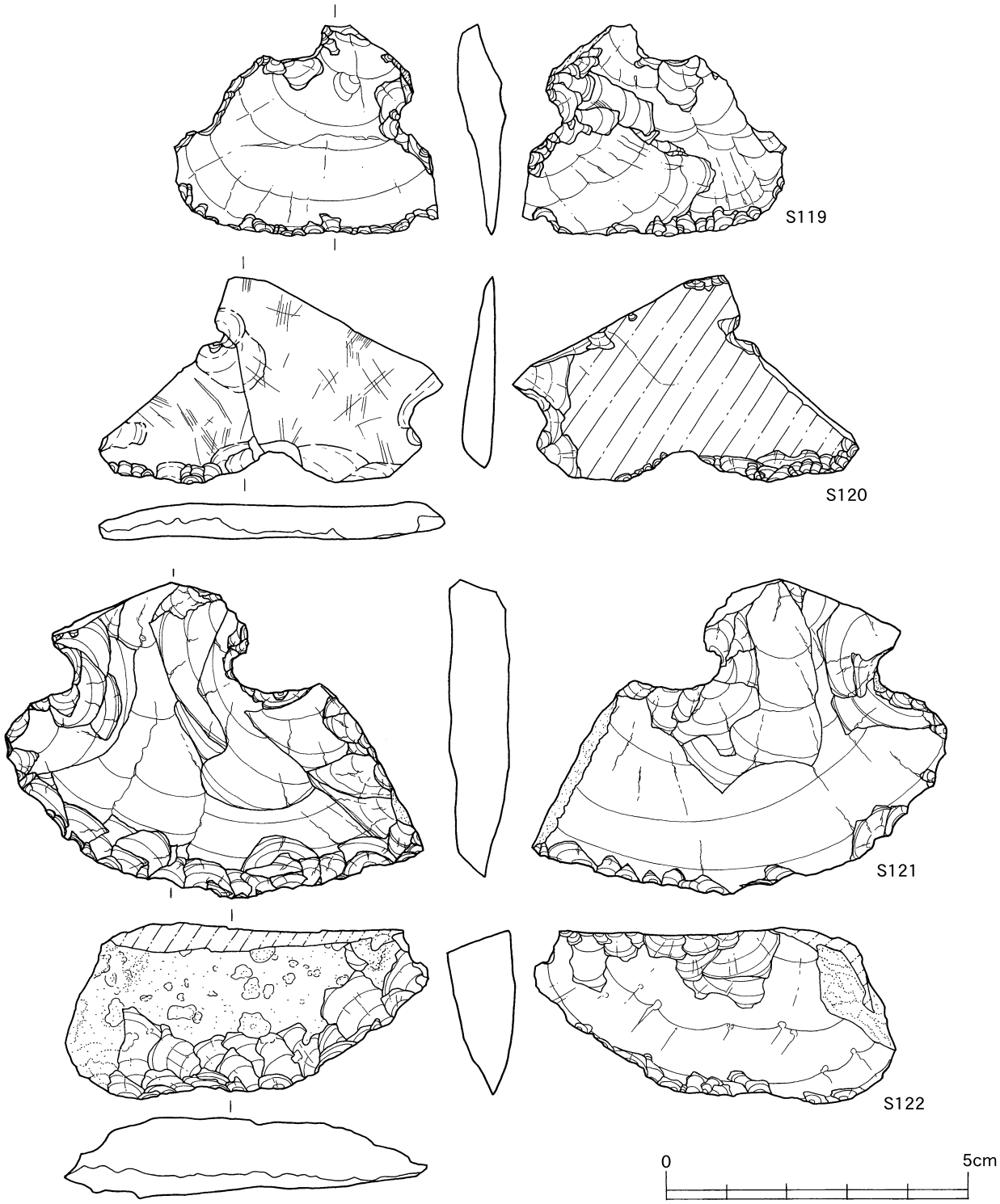
縄文時代前期から弥生時代までの遺物は同じ層から出土しており，時期を分けることができないために，ここで一括して扱う。打製石鏃・磨製石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・打製石斧などがあり，打製石斧が多い。



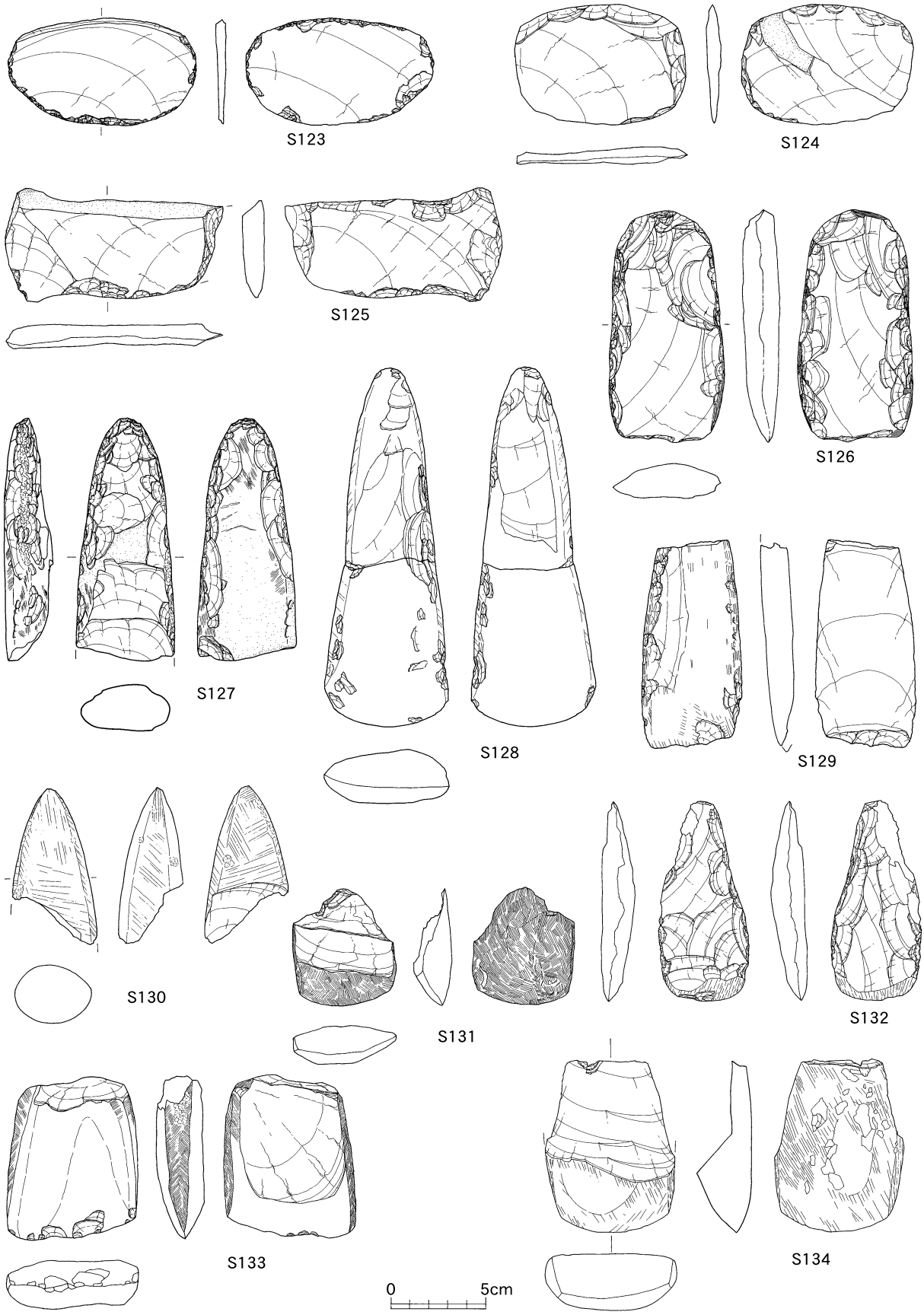
第43図　石器⑫　石鏃・石錐

１）打製石鏃（第43図Ｓ102～Ｓ114）

13点出土しているが，多様である。Ｓ103は県内では珍しい有茎鏃である。茎部端が欠けているが，ほぼ完形で二等辺三角形を呈している。作りは雑であるが，数カ所に研磨痕がみられることから，研磨したあとに二次的な再加工をした可能性がある。Ｓ106は正三角形をし，浅いへこみがある。周辺のみを打ち欠いている。Ｓ107は先端が鋭くとがった二等辺三角形をし，浅いへこみがあ



第44図　石器⑬　石匙・スクレイパー

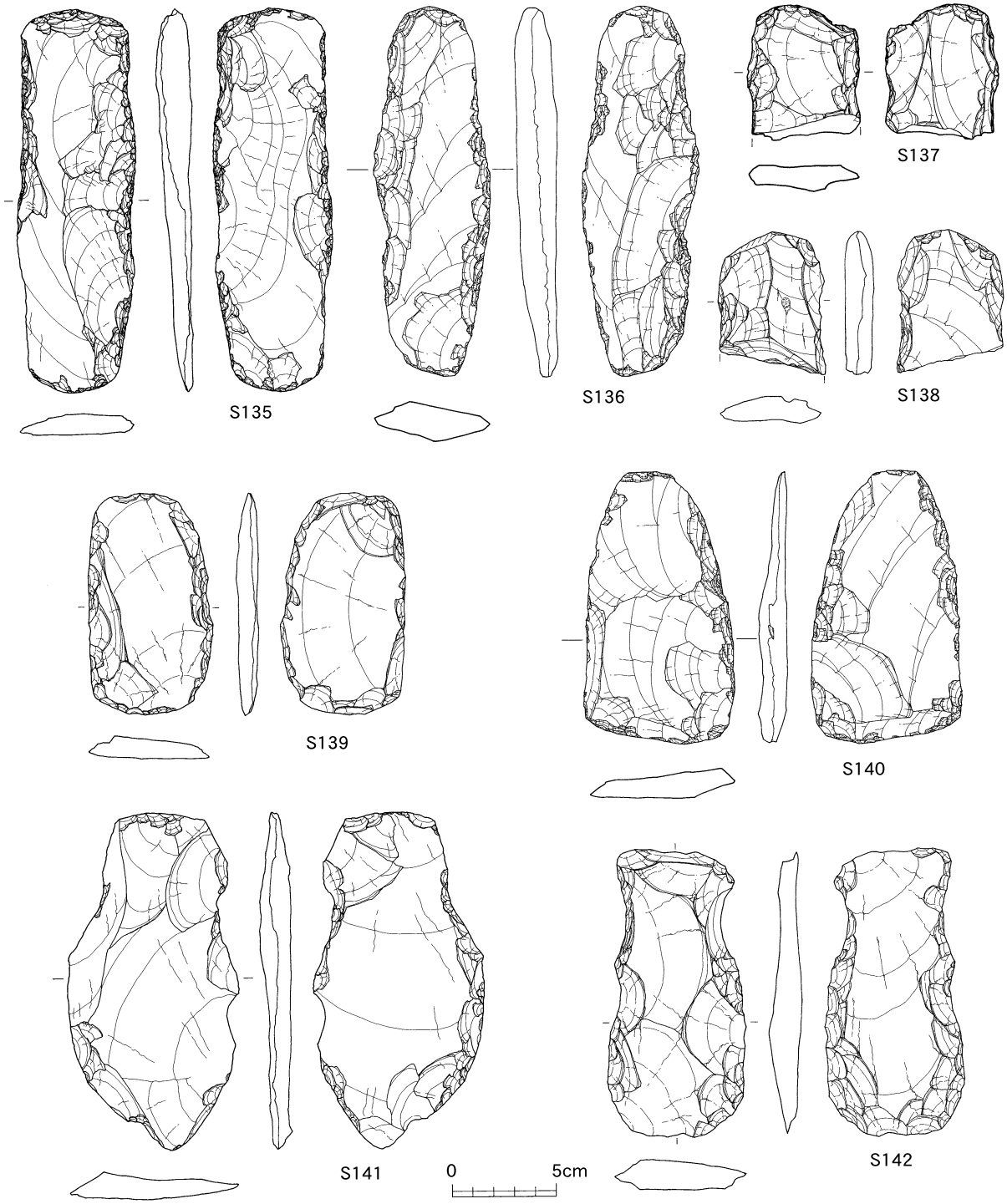


第45図　石器⑭　スクレイパー・磨製石斧

る。ていねいに打ち欠いている。S108とS109・S112は小型の正三角形をしたもので基部は直である。S111とS113・S114は二等辺三角形をした小型のもので，浅いへこみがある。S111は先端が鋭い。

2）磨製石鏃（第43図S115～S117）

3点出土しており，1点だけが完形で，残り2点は欠けている。S117は二等辺三角形を呈し，片面は中央に鎬があるが，あとの一面は両側辺に稜がある。浅いえぐりがある。S115は両面とも鎬がある。S116は先端部のみである。



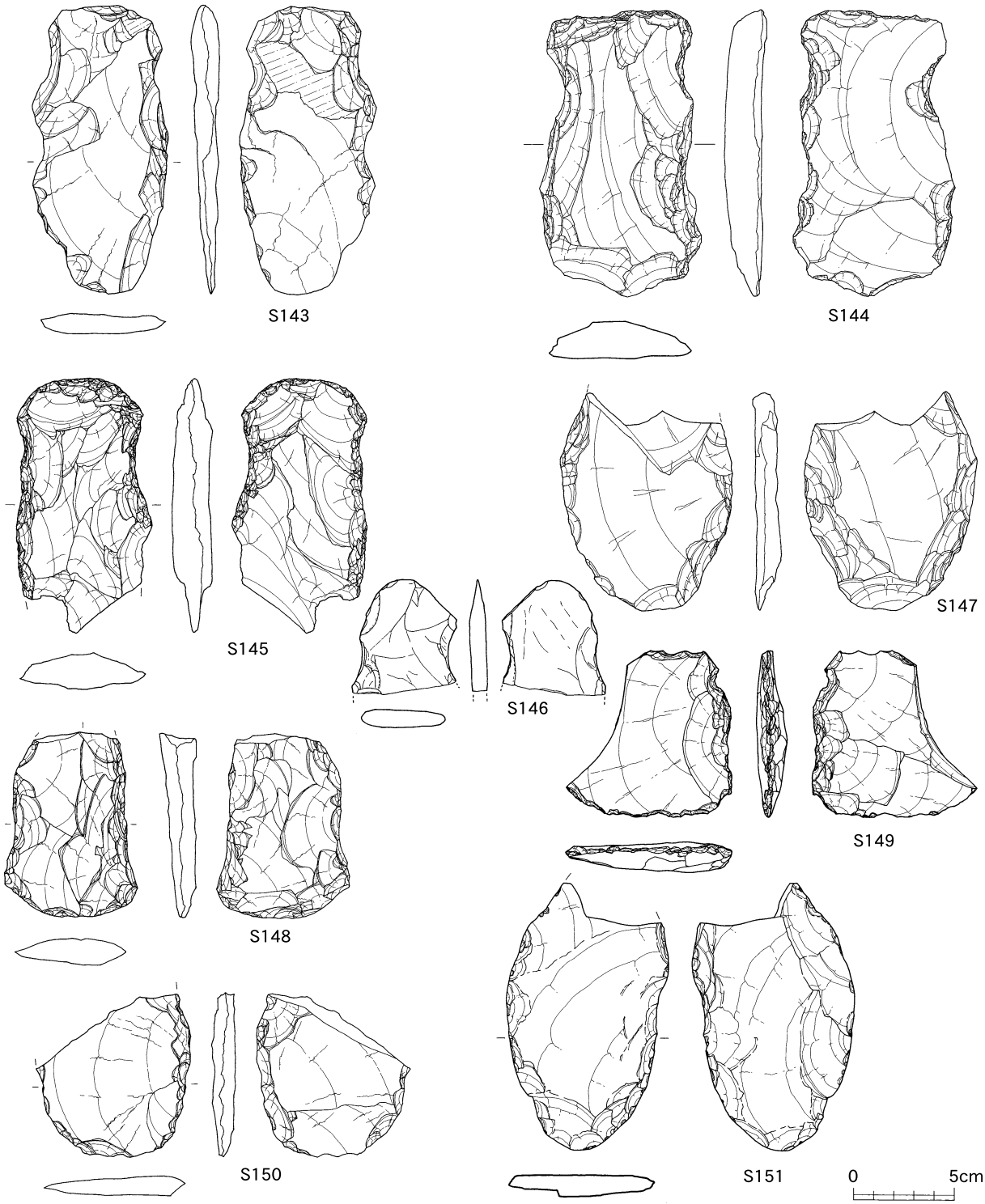
第46図　石器⑮　打製石斧

３）石錐（第43図Ｓ118）

つまみの一側辺を両面から打ち欠いて形を整えた石錐で，錐部も雑に打ち欠いている。

４）石匙（第44図Ｓ119～Ｓ121）

横長のものが３点出土しているが，つまみはすべて片方に寄っている。Ｓ119は横長剥片の側縁部のみを打ち欠いて形を整えている。Ｓ120は薄い剥片の一長側辺部を打ち欠いて刃部としたもの

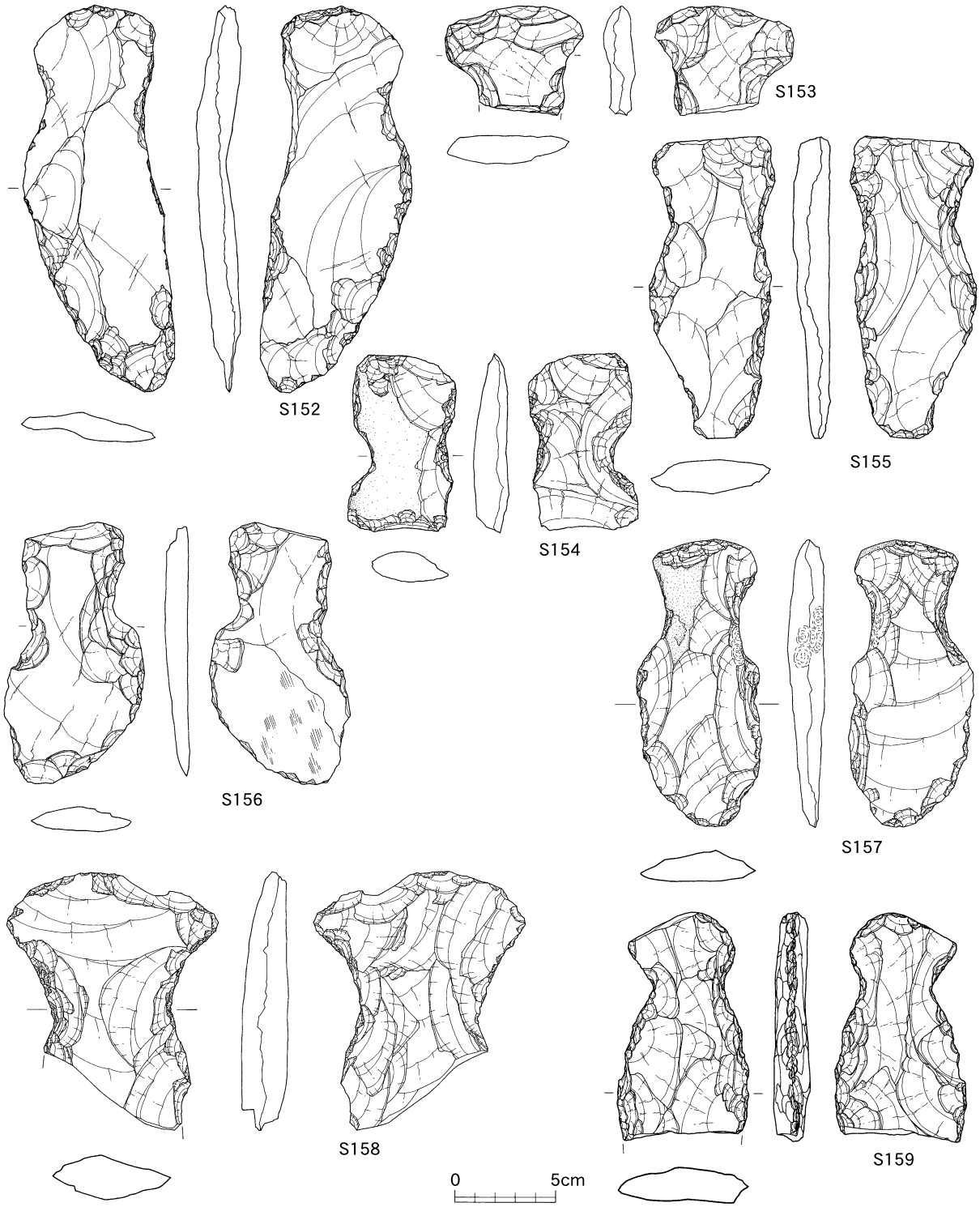


第47図　石器⑯　打製石斧

で，えぐりは粗く加工して作っている。ほとんど二次加工はない。S121は横長剥片の縁部を加工しているが，特に片面の周縁とえぐり部・刃部はていねいである。分厚いが，刃部は外反し，鋭い。

5）スクレイパー（第44図S122，第45図S123～S125）

S122の基部は直線で刃部は両面から打ち欠いて弧状を呈している。片面に自然面を残す分厚いものだが，刃部は鋭い。S123・S124は楕円形をした横剥ぎ剥片の長側辺を利用し，背部も刃こぼ

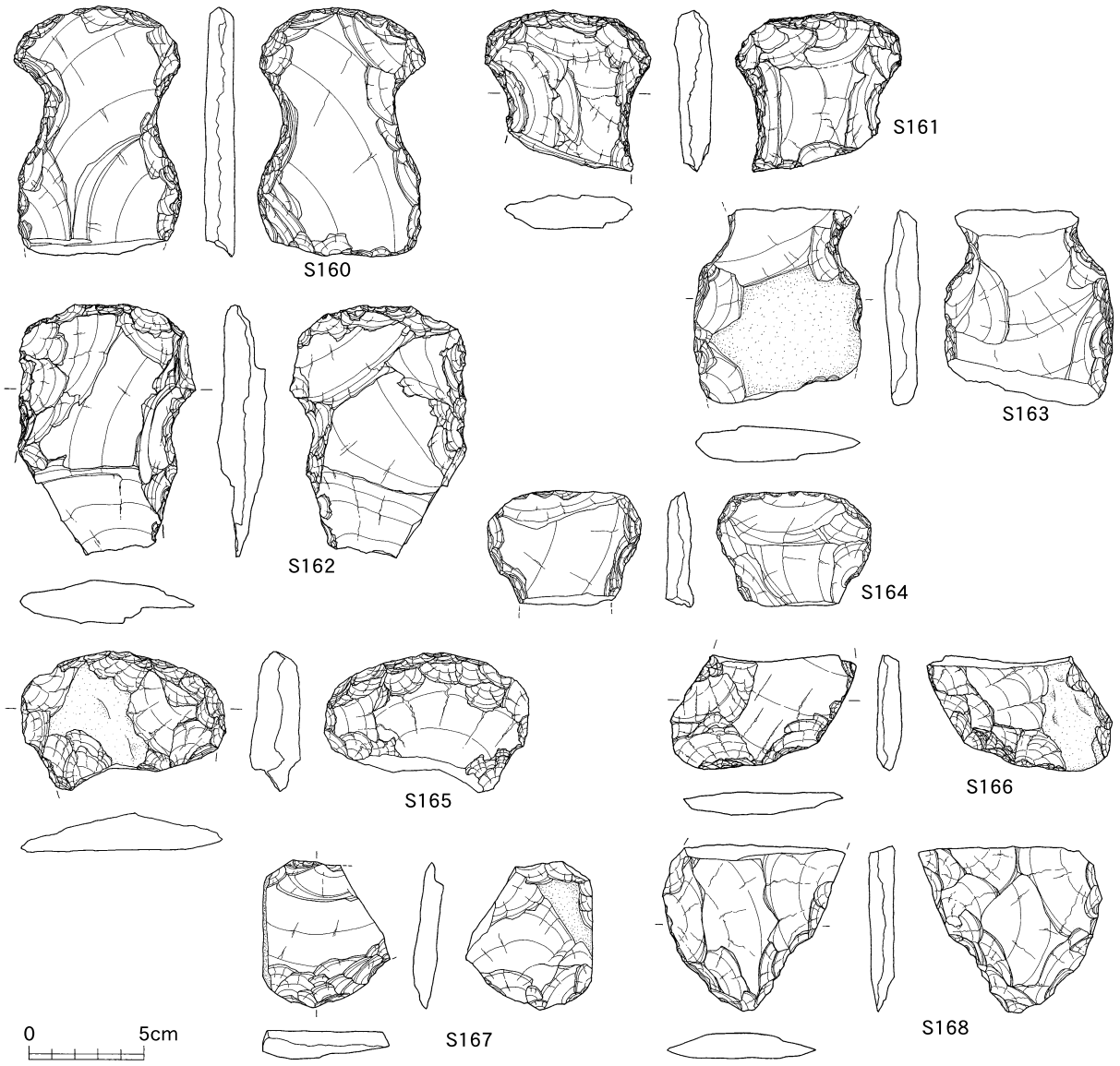


第48図　石器(17)　打製石斧

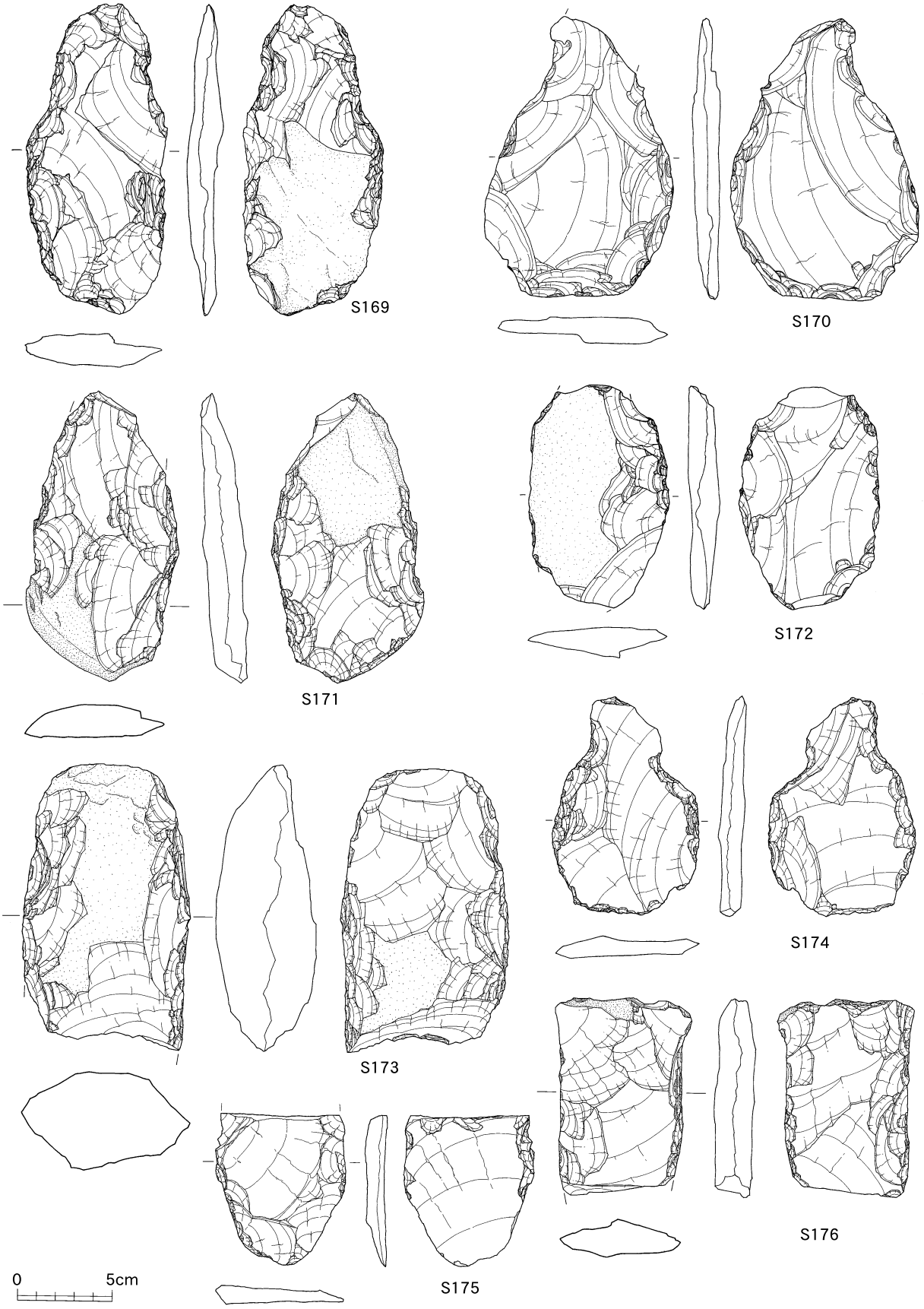
しをしている。S125も長方形をした剥片の一長側辺を刃部としており，背部も刃こぼしをしているが，自然面が残っている。

6）磨製石斧（第45図S126～S134）

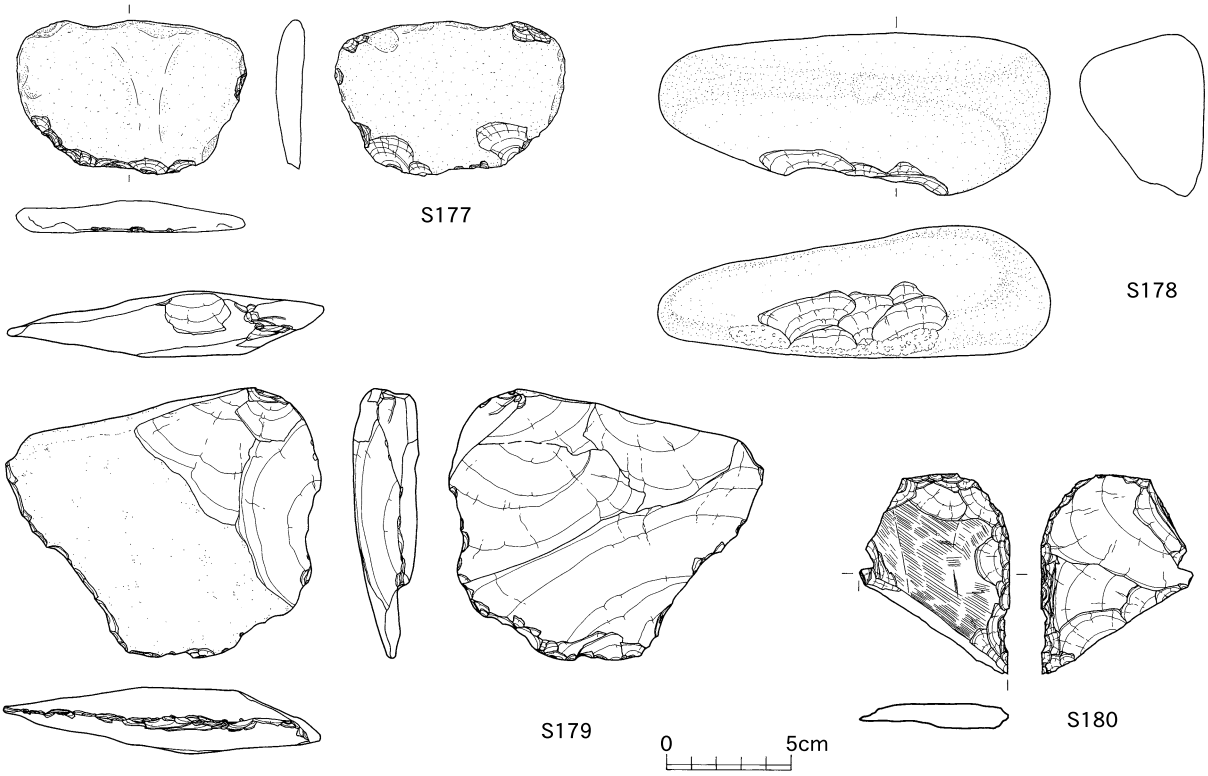
部分的に磨いた局部磨製石斧と，ていねいに磨いた磨製石斧がある。破片を含めて15点出土している。S126とS127は局部磨製石斧である。S126は横剥ぎ剥片の周辺を加工して形を整えているが，刃部の磨きは簡略である。S127は周辺を加工したバチ形を呈し，刃部が欠けている。S128は中央付近で折れているが，バチ形をした完形品である。S129も縦長剥片を利用したバチ形をしているが，基部が欠けている。S130はていねいに加工したバチ形石斧の基部破片である。S131は刃部のみの破片でていねいに加工している。S132はバチ形をした局部磨製石斧で，長さ10.5㎝と小型である。刃部のみを加工している。S133・S134は刃部のみの破片で，ていねいに加工しているが，S134は丸のみ風になっている。



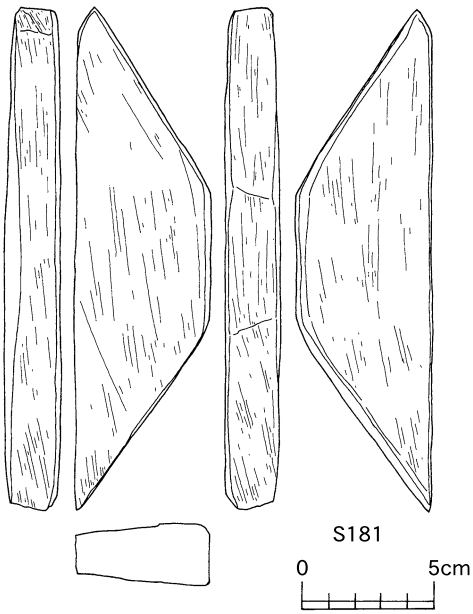
第49図　石器⑱　打製石斧



第50図　石器(19)　打製石斧



第51図　石器⑳　礫器・砥石



第52図　石器㉑　砥石

7）打製石斧（第46図～第50図Ｓ135～Ｓ176）

粘板岩を用いた打製石斧が57点出土している。いずれも周縁のみをこまかく加工しており，形態によって大きく４種に分かれる。

Ｓ135～Ｓ140・Ｓ176はえぐりのはっきりしない長方形のものだが，幅の狭いものと広いものとがある。

Ｓ141～Ｓ151・Ｓ175は長方形あるいは長楕円形をしており，えぐりがある。刃部はやや狭くなっている。Ｓ152～Ｓ159は靴形をしたものだが，Ｓ154は折れたあと刃部側を加工しており，二次的に使用しようとする意図がみられる。側縁部はていねいに加工しているが，刃部の加工は少ない。Ｓ160～Ｓ168は頭部あるいは刃部の破片であるが，図化しなかった破片も多い。Ｓ169～Ｓ174は幅の広いものである。Ｓ169・Ｓ171・Ｓ172は自然面を広く残した剥片を用いて形を整えている。Ｓ173は両面に自然面を残す分厚い礫を用いている。

これらは表面の摩滅が目立つため，刃部の使用痕が不明である。使用後に放棄されたものではなく，再加工されて放棄されたものと思われる。

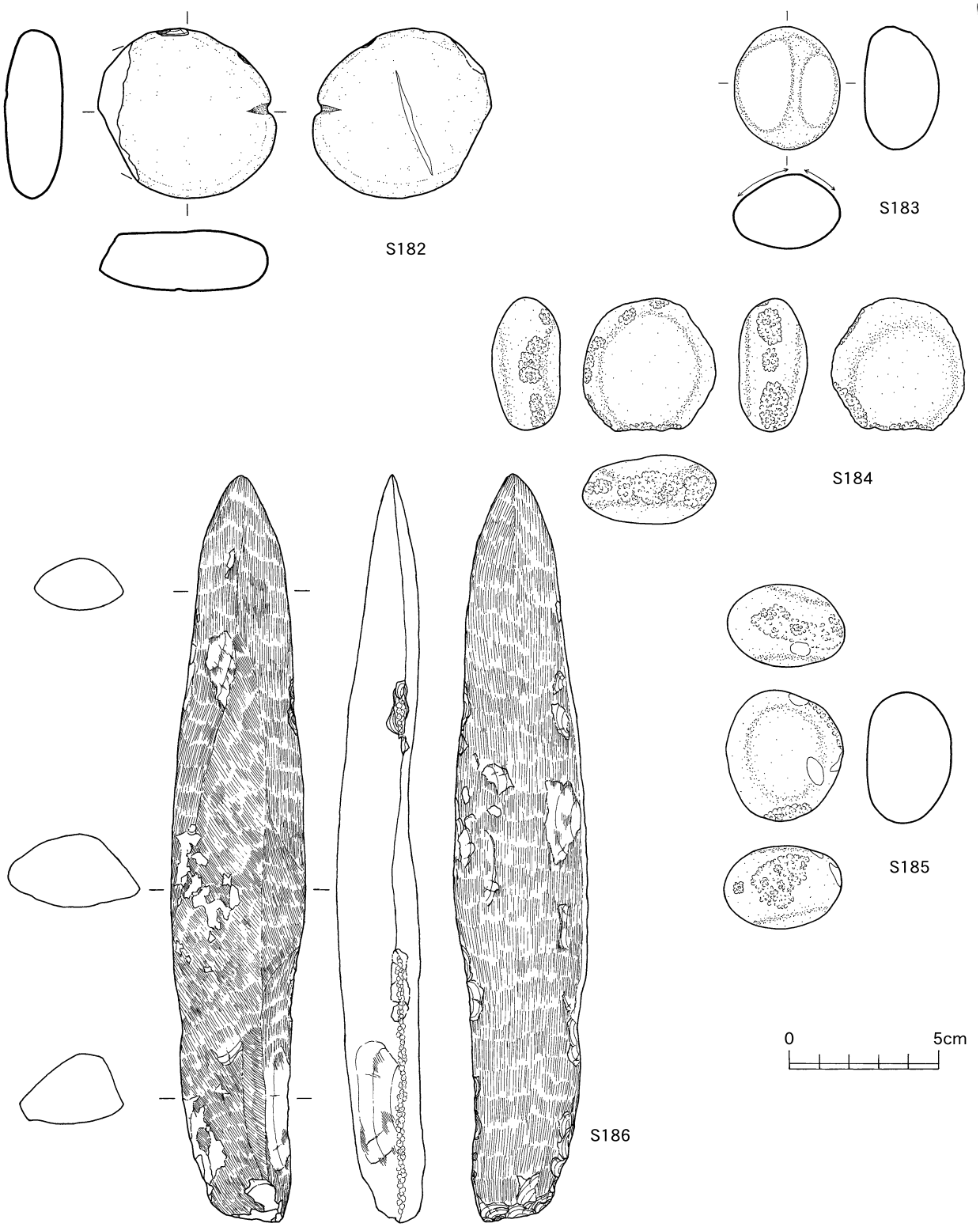
8）礫器（第51図Ｓ177～Ｓ179）

Ｓ177・Ｓ178は礫の縁辺を加工して刃部にしたもので，Ｓ177は薄い礫を用い，長側辺の一辺を

両側から打ち欠いて片刃の刃部としている。S178は分厚い礫の一長側辺を片側から打ち欠いて刃部としている。S179は片面に自然面を残す分厚い剥片の一側辺を両側から打ち欠いて刃部としている。

9）砥石（第51図・第52図S180・S181）

S180は打製石斧の頭部欠損品を２次的に使用している砥石である。S181は台形をした板状の石



第53図　石器(22)　石錘・磨石・石剣

を４面使用している仕上げ砥である。

10）石錘（第53図Ｓ182）

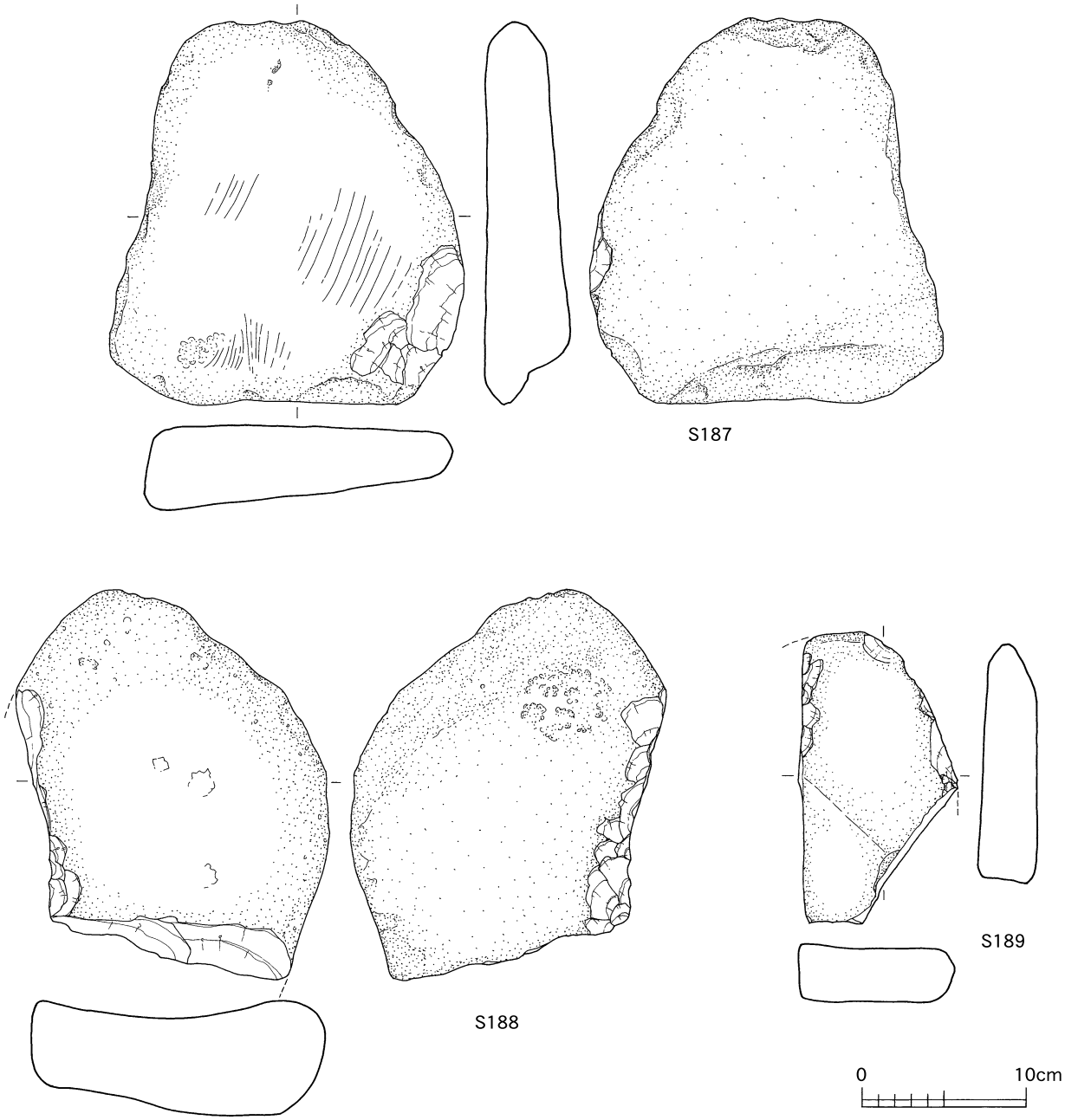
ほぼ円形をした扁平な礫の２か所に紐かけ用のえぐりを施したものである。

11）磨石（第53図Ｓ183～Ｓ185）

砂岩・安山岩製の磨石が７点ある。円礫の側縁を利用しており，この中には敲石として使用したものもある。

12）石剣（第53図Ｓ186）

長さ25.1㎝，幅4.5㎝，厚さ2.4㎝の粘板岩製石剣で，先端を鋭く尖らせている。先端部は両面に鎬があり断面菱形を呈するが，下半部は断面三角形となる。表・裏面とも全面こまかい研磨がされ

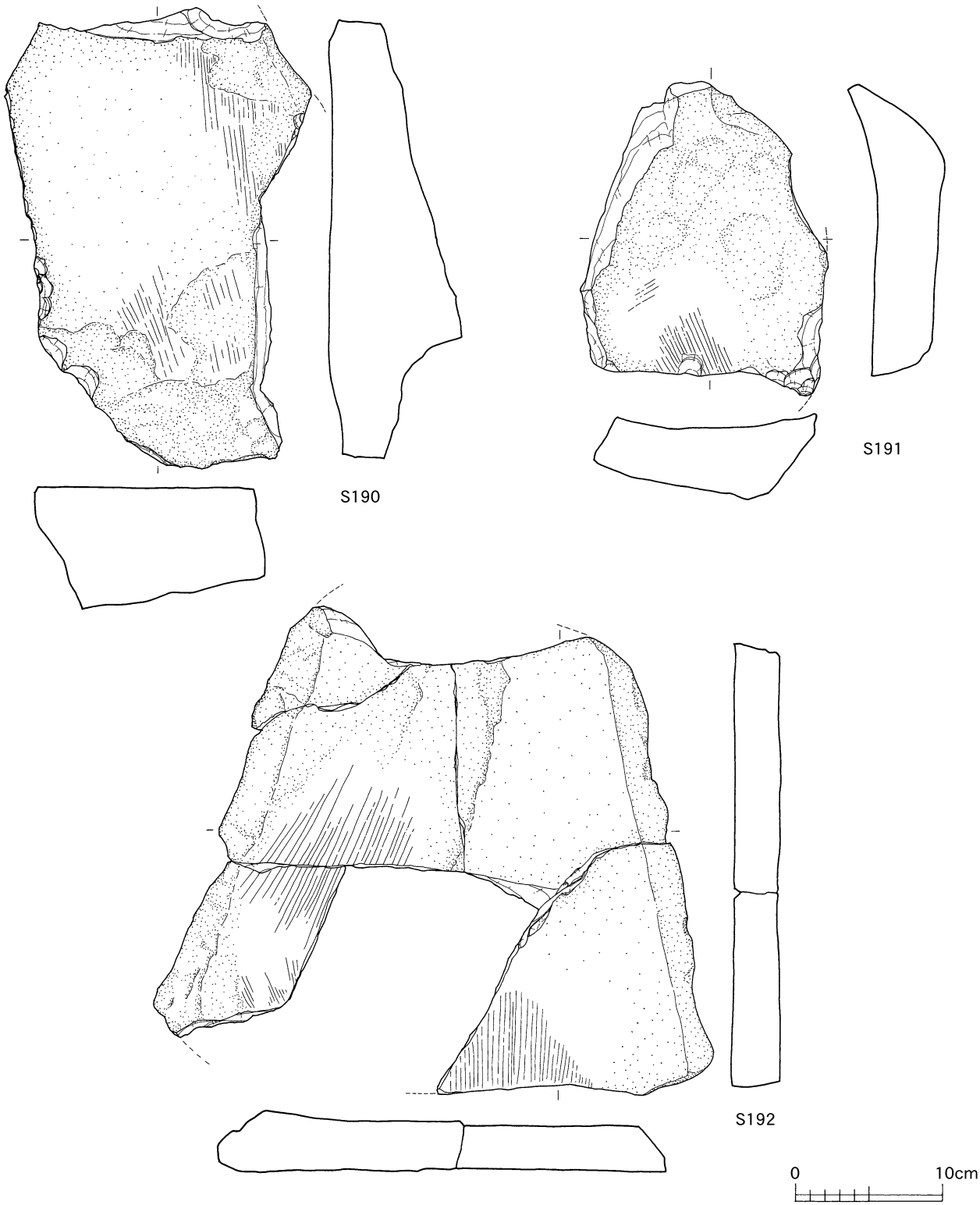


第54図　石器(23)　石皿

ている。

13）石皿（第54図・第55図Ｓ187～Ｓ192）

完全なものはほとんどないが，６点の石皿がある。Ｓ187は完形であるが小さい。両面とも平坦なものが多いが，Ｓ188・Ｓ191のように窪んでいるものもある。



第55図　石器(24)　石皿

第８表　石器観察表(1)

番	種　類	出土地点	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ
1	礫器	集積８号	Ⅵ	安山岩	13.3	7.6	2.4	290
2	剥片	集積１号	Ⅵ	粘板岩	5.2	11.3	1.2	60
3	剥片	集積１号	Ⅵ	粘板岩	6.5	11.1	1.2	100
4	剥片	集積１号	Ⅵ	粘板岩	9.4	6.9	1.3	70
5	剥片	集積１号	Ⅵ	粘板岩	5.7	10.3	1.7	90
6	剥片	集積１号	Ⅵ	粘板岩	13.0	17.9	2.3	410
7	石皿	集積２号	Ⅵ	砂岩	35.9	31.8	7.0	10,700
8	加工石核	集積２号	Ⅵ	粘板岩	17.0	5.7	3.0	430
9	石皿	集積２号	Ⅵ	花崗岩	22.0	23.0	4.5	3,700
10	加工石核	集積２号	Ⅵ	粘板岩	16.0	7.0	4.0	370
11	加工礫	集積２号	Ⅵ	粘板岩	20.5	6.5	1.5	370
12	加工礫	集積２号	Ⅵ	粘板岩	13.2	5.3	3.0	395
13	石斧	集積２号	Ⅵ	粘板岩	(4.8)	3.0	0.8	15
14	石鏃	58K	Ⅵ	チャート	2.0	1.7	0.4	1.18
15	石鏃	51K	Ⅵ	安山岩	2.0	1.8	0.4	0.99
16	石鏃	58K	Ⅵ	安山岩	1.9	1.6	0.3	0.64
17	石鏃	59J	Ⅵ	安山岩	1.6	1.6	0.4	0.71
18	石鏃	55M	Ⅵ	安山岩	1.4	1.6	0.3	0.44
19	石鏃	53N	Ⅵ	黒曜石	1.7	1.6	0.5	0.93
20	石鏃	58L	Ⅵ	チャート	2.5	2.0	0.5	1.25
21	石鏃	55M	Ⅵ	チャート	2.2	(1.7)	0.3	0.96
22	石鏃	58J	Ⅵ	タンパク石	2.1	(1.9)	0.4	1.02
23	石鏃	57L	Ⅵ	チャート	(2.4)	(1.4)	0.6	1.62
24	石鏃	57L	Ⅵ	黒曜石	(2.0)	(1.8)	0.4	0.91
25	石鏃	57M	Ⅵ	チャート	2.7	(1.8)	0.6	1.71
26	石鏃	58K	Ⅵ	安山岩	(1.9)	2.3	0.5	1.40
27	石鏃	57L	Ⅵ	チャート	(1.9)	(2.1)	0.5	1.57
28	石鏃	55L	Ⅵ	安山岩	1.6	1.4	0.4	0.51
29	石鏃	57L	Ⅵ	安山岩	(2.4)	(1.5)	0.4	0.76
30	石鏃	55L	Ⅵ	黒曜石	2.2	(1.7)	0.4	1.12
31	石鏃	59J	Ⅵ	チャート	2.4	(1.9)	0.5	1.68
32	石鏃	57L	Ⅵ	黒曜石	2.6	(1.5)	0.4	0.92
33	石鏃	58K	Ⅵ	水晶	2.5	(1.5)	0.5	1.35
34	石鏃	58K	Ⅵ	黒曜石	(1.5)	1.6	0.5	0.78
35	石鏃	56L	Ⅵ	頁岩	(2.4)	(1.9)	0.5	1.43
36	石鏃	53L	Ⅵ	頁岩	(2.0)	1.6	0.5	1.30
37	石鏃	58K	Ⅵ	黒曜石	2.1	(1.3)	0.4	0.87
38	石鏃	55L	Ⅵ	黒曜石	2.3	(1.7)	0.5	1.26
39	石鏃	59K	Ⅵ	黒曜石	(1.8)	2.1	0.4	1.31
40	石鏃	57L	Ⅵ	安山岩	1.7	1.0	0.3	0.42
41	石鏃	59J	Ⅵ	黒曜石	2.0	(1.6)	0.5	0.96
42	石鏃	58J	Ⅵ	黒曜石	(1.6)	(1.6)	0.4	0.81
43	石鏃	51N	Ⅵ	黒曜石	2.0	1.9	0.3	0.91
44	石鏃	58L	Ⅵ	黒曜石	2.1	(1.5)	0.4	1.02
45	石鏃	56K	Ⅵ	黒曜石	2.1	(1.5)	0.4	1.02
46	石鏃	60I	Ⅵb	黒曜石	2.6	(1.4)	0.4	0.86
47	石鏃	61J	Ⅵa	チャート	3.3	(2.2)	0.5	2.28
48	石鏃	60J	Ⅵb	黒曜石	(2.1)	1.6	0.3	1.10
49	石鏃	61I	Ⅵb	黒曜石	(2.0)	(1.5)	0.5	0.91
50	石鏃	61J	Ⅵa	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.59
51	石鏃	69J	Ⅵb	チャート	(1.3)	(1.2)	0.4	0.45
52	スクレイパー	56M	Ⅵ	黒曜石	2.1	1.8	0.8	2.45
53	スクレイパー	57K	Ⅵ	黒曜石	2.9	2.3	0.8	5.62
54	つまみ形石器	57K	Ⅵ	チャート	2.6	1.5	0.7	2.59
55	つまみ形石器	57K	Ⅵ	チャート	2.6	1.4	0.3	1.30
56	つまみ形石器	57K	Ⅵ	チャート	(2.3)	1.6	0.3	0.95
57	トロトロ石器	56M	Ⅵ	チャート	(1.8)	2.8	0.6	3.05
58	磨製石斧	44M	Ⅵ	粘板岩	(11.4)	7.0	3.0	300
59	磨製石斧	57L	Ⅵ	粘板岩	(9.0)	5.3	1.2	70
60	磨製石斧	52M	Ⅵ	粘板岩	11.5	3.6	1.9	90
	磨製石斧	59K	Ⅵ	安山岩	7.1	5.3	0.9	42
	磨製石斧	59K	Ⅵ	安山岩	5.6	3.0	0.5	12
	磨製石斧	58L	Ⅵ	安山岩	8.7	5.4	1.2	71
61	打製石斧	45M	Ⅵ	粘板岩	17.2	8.9	3.5	660
62	打製石斧	59K	Ⅵ	粘板岩	12.6	6.6	2.9	270
63	打製石斧	42N	Ⅵ	粘板岩	13.5	6.6	3.0	315
64	打製石斧	47N	Ⅵ	粘板岩	14.4	9.5	2.9	435
	打製石斧	60J	Ⅵb	安山岩	10.1	9.2	2.5	290
65	礫器	59J	Ⅵ	粘板岩	13.8	13.8	3.0	730
66	礫器	56L	Ⅵ	粘板岩	11.9	6.8	3.3	260
67	礫器	51N	Ⅵ	粘板岩	12.7	11.4	4.4	580
68	礫器	55L	Ⅵ	粘板岩	11.5	6.5	1.5	250
69	礫器	59J	Ⅵ	粘板岩	13.7	13.6	4.0	850
70	礫器	44M	Ⅵ	粘板岩	8.1	13.0	3.0	320
71	礫器	55L	Ⅵ	粘板岩	20.2	10.2	5.2	1,125
72	礫器	47N	Ⅲa	粘板岩	17.0	9.6	2.4	427
73	礫器	56K	Ⅵ	粘板岩	7.0	14.3	2.5	265
74	礫器	55L	Ⅵ	粘板岩	12.0	10.8	3.2	494
75	礫器	55L	Ⅵ	粘板岩	9.2	11.8	2.4	326
76	礫器	55L	Ⅵ	砂岩	6.2	14.0	2.8	300
77	礫器	42N	Ⅵ	粘板岩	15.3	9.8	2.2	410

第９表　石器観察表(2)

番	種　類	出土地点	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ
78	礫器	56L	Ⅵ	粘板岩	14.4	7.8	2.6	420
79	礫器	59K	Ⅵ	粘板岩	18.4	10.2	3.8	990
	礫器	53L	Ⅵ	砂岩	10.3	6.9	5.2	480
	礫器	51M	Ⅵ	砂岩	7.5	12.5	4.5	520
80	磨石	56L	Ⅵ	安山岩	10.5	9.2	4.9	620
81	磨石	55L	Ⅵ	内緑岩	8.6	(6.4)	4.6	300
82	磨石	55M	Ⅵ	安山岩	10.1	9.4	7.2	850
83	磨石	50M	Ⅵ	安山岩	7.4	7.4	5.5	385
84	磨石	56M	Ⅵ	安山岩	8.6	7.5	6.6	547
85	磨石	56L	Ⅵ	安山岩	(9.2)	7.7	5.4	415
86	磨石	59K	Ⅵ	砂岩	6.8	5.7	2.8	157
87	磨石	56L	Ⅵ	砂岩	8.2	6.4	3.9	290
88	磨石	55L	Ⅵ	安山岩	6.7	6.0	5.5	313
89	磨石	55L	Ⅵ	砂岩	10.4	9.2	3.6	545
90	磨石	56K	Ⅵ	安山岩	13.4	9.6	6.1	1,110
	磨石	58J	Ⅵ	花崗岩	10.8	7.6	5.0	512
	磨石	56K	Ⅵ	砂岩	9.7	9.0	3.8	430
	磨石	57K	Ⅵ	花崗岩	8.6	9.8	5.4	352
	磨石	58K	Ⅵ	花崗岩	6.0	4.0	4.2	110
	磨石	56L	Ⅵ	砂岩	9.3	8.2	4.2	480
	磨石	45M	Ⅵ	安山岩	12.7	11.5	4.3	950
	磨石	52M	Ⅵ	花崗岩	8.2	9.2	4.0	440
	磨石	55M	Ⅵ	花崗岩	9.5	7.7	4.0	480
	磨石	49N	Ⅵ	花崗岩	9.5	6.6	3.7	300
	磨石	51N	Ⅵ	花崗岩	11.0	5.9	4.5	430
91	敲石	47M	Ⅵ	安山岩	7.2	6.3	5.5	270
	敲石	53L	Ⅵ	砂岩	11.6	7.0	5.3	490
92	凹石	58L	Ⅵ	砂岩	6.0	6.8	4.6	263
93	凹石	44N	Ⅵ	砂岩	5.7	7.0	4.2	203
94	石皿	55L	Ⅵ	花崗岩	22.7	19.6	9.5	6,100
95	石皿	55L	Ⅵ	安山岩	30.0	16.5	6.4	3,700
96	石皿	51M	Ⅵ	安山岩	22.0	22.4	4.0	2,500
97	石皿	58K	Ⅵ	砂岩	(14.2)	13.6	5.9	1,595
98	石皿	53M	Ⅵ	安山岩	31.0	18.2	8.0	5,000
99	石皿	51N	Ⅵ	安山岩	30.8	21.4	4.6	2,900
100	石皿	55M	Ⅵ	砂岩	23.0	29.0	10.4	8,600
101	石皿	56L	Ⅵ	安山岩	23.0	23.4	8.3	4,700
	石皿	58J	Ⅵ	砂岩	11.3	9.5	3.9	680
	石皿	56K	Ⅵ	砂岩	15.5	11.8	7.2	1,450
	石皿	57K	Ⅵ	花崗岩	12.1	11.3	4.3	1,350
	石皿	58K	Ⅵ	砂岩	13.8	8.4	4.6	740
	石皿	58K	Ⅵ	花崗岩	19.0	13.5	4.7	1,715
	石皿	53L	Ⅵ	砂岩	21.2	13.6	2.4	765
	石皿	53L	Ⅵ	花崗岩	13.3	14.1	5.0	1,530
	石皿	55L	Ⅵ	砂岩	5.9	4.5	1.5	35
	石皿	56L	Ⅵ	砂岩	18.1	10.6	4.4	1,110
	石皿	56L	Ⅵ	砂岩	19.0	9.6	6.6	1,710
	石皿	56L,56K	Ⅵ	砂岩	9.6	5.5	1.3	60
	石皿	57L	Ⅵ	砂岩	23.0	16.9	7.8	4,200
	石皿	44M	Ⅵ	砂岩	5.2	4.0	0.8	20
	石皿	46M	Ⅵ	砂岩	4.6	4.3	4.7	110
	石皿	47M	Ⅵ	安山岩	8.0	4.4	2.3	120
	石皿	48M	Ⅵ	砂岩	3.4	2.2	5.1	75
	石皿	48M	Ⅵ	砂岩	7.8	5.5	3.4	160
	石皿	48M	Ⅵ	砂岩	4.3	4.4	2.8	55
	石皿	48M	Ⅵ	砂岩	7.5	5.5	4.4	245
	石皿	48M	Ⅵ	安山岩	11.3	8.2	3.1	390
	石皿	52M	Ⅵ	花崗岩	7.3	11.3	4.6	640
	石皿	56M	Ⅵ	砂岩	14.8	7.7	2.3	365
	石皿	56M	Ⅵ	砂岩	9.2	8.8	1.7	240
	石皿	56M	Ⅵ	花崗岩	11.3	17.6	4.5	2,400
	石皿	47N	Ⅵ	安山岩	10.7	10.1	2.2	315
	石皿	48N	Ⅵ	砂岩	5.1	3.4	0.9	25
	石皿	48N	Ⅵ	砂岩	5.3	3.8	4.1	80
	石皿	50N	Ⅵ	花崗岩	15.9	12.8	3.4	835
	石皿	51N	Ⅵ	砂岩	10.1	8.2	2.7	340
	石皿	52N	Ⅵ	花崗岩	26.0	22.5	13.6	8,800
	石皿	60I	Ⅴb	砂岩	5.6	6.1	2.7	130
	砥石	47M	Ⅵ	砂岩	12.3	6.0	4.3	330
	砥石	47N	Ⅵ	砂岩	7.1	6.5	5.5	230
102	石鏃	43M	Ⅳ	安山岩	2.5	2.0	0.4	1.34
103	石鏃	55M	Ⅲa	安山岩	3.0	(2.0)	0.5	2.44
104	石鏃	43M	Ⅲa	安山岩	2.3	(1.9)	0.4	1.23
105	石鏃	43M	Ⅲa	安山岩	2.3	2.1	0.7	1.40
106	石鏃	54L	Ⅲa	安山岩	1.7	1.8	0.2	0.65
107	石鏃	58J	Ⅲa	安山岩	2.3	1.7	0.4	1.16
108	石鏃	64H	Ⅱb	黒曜石	1.3	1.0	0.2	0.17
109	石鏃	57K	Ⅲa	黒曜石	1.2	1.5	0.3	0.34
110	石鏃	64G	Ⅱ	黒曜石	(1.4)	1.4	0.5	0.78
111	石鏃	64H	Ⅱb	黒曜石	1.6	(1.4)	0.2	0.54
112	石鏃	65G	Ⅱb	黒曜石	1.1	1.2	0.3	0.27

第10表　石器観察表(3)

番	種　類	出土地点	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ
113	石鏃		表採	黒曜石	(1.1)	1.3	0.5	0.87
114	石鏃	65H	IIb	黒曜石	(1.2)	1.6	0.2	0.48
115	石鏃	50N	IIIa	頁岩	(2.8)	(1.6)	0.3	1.06
116	石鏃	43M	IIIa	頁岩	(1.5)	(1.2)	0.1	0.23
117	石鏃	58J	IIIa	頁岩	3.5	2.1	0.3	1.76
118	錐	59K	IIIa	チャート	4.1	3.5	0.7	5.20
119	石匙	52M	IIIa	チャート	3.4	4.4	0.7	8.37
120	石匙	52M	IIIa	チャート	3.4	5.7	0.6	6.03
121	スクレイパー	66G	IIb	安山岩	5.2	6.9	1.0	32.96
122	スクレイパー	57K	IIIa	安山岩	2.9	6.0	0.3	21.32
123	スクレイパー	65F	IIb	粘板岩	5.6	9.9	0.5	40
124	スクレイパー	65G	IIb	粘板岩	6.3	8.9	0.9	50
125	スクレイパー	65G	IIb	粘板岩	6.0	11.4	1.2	110
126	磨製石斧	62H	V	粘板岩	12.1	6.0	1.9	195
127	磨製石斧		表採	粘板岩	(12.7)	5.1	2.5	210
128	磨製石斧	52N	IIIa	粘板岩	18.7	6.5	2.8	400
129	磨製石斧	47M	III	粘板岩	(10.9)	5.2	1.7	140
130	磨製石斧	57L	III	粘板岩	(8.2)	(4.4)	3.4	90
131	磨製石斧	48M	III	粘板岩	(5.1)	(5.3)	2.0	62
132	磨製石斧	54L	III	粘板岩	10.5	4.7	1.9	90
133	磨製石斧	64H	IIb	粘板岩	(8.6)	6.9	2.5	243
134	磨製石斧	57L	IIIa	粘板岩	(9.1)	6.8	3.0	177
	磨製石斧		表採	安山岩	3.7	6.9	2.0	58
	磨製石斧	64H	IIb	安山岩	4.3	4.4	0.9	24
	磨製石斧	64H	IIb	安山岩	5.0	2.2	0.5	10
	磨製石斧	64H	IIb	安山岩	3.9	2.8	0.5	5.20
	磨製石斧	64H	IIb	安山岩	4.0	2.4	0.4	3.27
	磨製石斧	59K	IIIa	安山岩	5.8	4.7	1.8	52
135	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	18.3	5.7	1.7	167
136	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	17.7	5.6	2.0	220
137	打製石斧		表採	粘板岩	(6.5)	5.4	1.2	60
138	打製石斧	54M	IIIa	粘板岩	(6.8)	5.1	1.4	60
139	打製石斧		表採	粘板岩	10.5	5.9	1.1	90
140	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	13.1	7.2	1.4	70
141	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	16.2	8.2	1.5	183
142	打製石斧	59K	IIIa	粘板岩	13.8	6.5	1.5	180
143	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	14.1	6.6	1.4	117
144	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	14.2	8.0	2.1	253
145	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	(12.6)	6.6	2.0	165
146	打製石斧		溝	頁岩	(5.7)	(5.1)	0.9	30
147	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	(10.8)	8.5	1.4	126
148	打製石斧	66G	IIb	粘板岩	(9.1)	6.6	1.8	115
149	打製石斧		表採	粘板岩	8.2	8.2	1.5	95
150	打製石斧	65G	IIb	粘板岩	(8.1)	7.5	1.2	73
151	打製石斧	50M	IIIa	粘板岩	(13.2)	8.0	1.1	160
152	打製石斧	66G	IIb	粘板岩	19.0	8.5	2.2	220
153	打製石斧	64G	IIb	粘板岩	(5.4)	(5.9)	1.6	60
154	打製石斧	64G	IIc	粘板岩	(8.7)	5.2	1.8	85
155	打製石斧	64G	IIb	粘板岩	14.9	6.2	1.8	175
156	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	12.9	6.9	1.2	140
157	打製石斧	56L	IIIa	粘板岩	14.2	6.2	1.8	160
158	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	(12.8)	(10.5)	2.3	230
159	打製石斧		表採	粘板岩	(11.3)	6.5	1.8	150
160	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	(10.8)	7.3	1.3	135
161	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	(7.0)	7.2	1.6	90
162	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	(10.9)	(7.7)	2.1	160
163	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	(8.5)	7.3	1.6	120
164	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	(5.0)	(6.7)	1.2	50
165	打製石斧	64G	IIb	粘板岩	6.0	8.9	2.2	110
166	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	(5.0)	(8.0)	1.1	45
167	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	5.5	(6.4)	1.2	50
168	打製石斧	65G	IIb	粘板岩	(7.3)	7.9	1.1	70
169	打製石斧	65G	IIb	粘板岩	16.3	7.3	1.9	220
170	打製石斧		表採	粘板岩	(14.8)	9.9	1.4	190
171	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	15.3	8.0	2.4	270
172	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	(11.7)	7.4	1.7	150
173	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	(15.1)	8.9	5.3	880
174	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	11.6	7.8	1.4	105
175	打製石斧	44M	IIIa	粘板岩	(8.0)	6.8	1.2	60
176	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	(10.4)	7.2	2.1	200
	打製石斧		表採	粘板岩	5.9	3.5	0.9	20
	打製石斧		表採	粘板岩	6.0	3.5	1.0	20
	打製石斧		表採	粘板岩	3.9	4.1	0.8	10
	打製石斧	66G	IIb	粘板岩	4.8	0.6	1.2	50
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	5.9	5.9	0.8	35
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	7.0	6.2	0.9	40
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	3.3	6.6	1.2	40
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	4.9	2.8	0.8	10
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	6.0	3.5	0.8	20
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	3.1	2.8	0.4	1
	打製石斧	64H	IIb	粘板岩	9.5	6.9	1.7	143

第11表　石器観察表(4)

番	種　類	出土地点	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ
	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	4.1	2.6	0.5	10
	打製石斧	58K	IIIa	粘板岩	9.5	7.1	1.4	122
	打製石斧	53N	IIIa	粘板岩	3.2	4.4	1.2	18
	打製石斧	65H	IIb	粘板岩	6.1	4.6	0.9	38
177	礫器	54M	IIIa	粘板岩	6.1	9.2	1.2	85
178	礫器		表採	砂岩	6.5	15.7	5.3	630
179	礫器		表採	粘板岩	10.8	12.6	2.6	315
	礫器	4号住居跡		砂岩	8.0	4.2	2.8	100
	礫器	4号住居跡		砂岩	10.9	6.1	4.1	346
	礫器	4号住居跡		砂岩	22.0	7.2	7.0	1,328
	礫器	4号住居跡		砂岩	12.1	9.0	6.8	615
	礫器	4号住居跡		砂岩	16.4	7.4	5.0	982
	礫器	4号住居跡		砂岩	18.9	8.2	7.0	1,200
	礫器	4号住居跡		砂岩	11.5	7.0	5.9	538
	礫器	4号住居跡		砂岩	13.2	8.1	3.7	492
	礫器	4号住居跡		砂岩	7.7	7.0	6.1	290
	礫器	43M	IIIa	安山岩	14.1	10.2	2.0	400
	礫器	45M	IIIa	砂岩	10.8	7.5	6.3	610
	礫器	45M	IIIa	砂岩	13.0	7.5	4.9	718
180	砥石		表採	粘板岩	(8.0)	6.0	1.1	50
181	砥石	48M	III	粘板岩	17.7	4.8	2.2	235
182	石錘		表採	砂岩	5.9	5.7	2.0	80
183	磨石	53N	IIIa	砂岩	6.1	5.3	3.7	145
184	磨石	58K	IIIa	安山岩	6.6	6.6	3.4	175
185	磨石	53N	IIIa	安山岩	6.6	5.8	4.1	190
	磨石		表採	安山岩	11.0	9.1	4.5	735
	磨石	3号住居跡		砂岩	10.0	8.0	5.0	632
	磨石		表採	砂岩	7.2	5.5	4.8	240
	磨石	56M	IIIa	安山岩	10.9	8.4	4.4	660
	敲石	65G	IIb	安山岩	5.2	3.6	2.1	60
	敲石	66G	IIb	砂岩	7.8	2.8	2.5	80
186	石剣	25G	IIb	粘板岩	25.1	4.5	2.4	380
187	石皿	55M	IIIa	花崗岩	23.4	21.1	5.7	4,100
188	石皿	58K	IIIa	安山岩	(21.5)	(18.3)	8.4	4,500
189	石皿	58K	IIIa	砂岩	18.0	(10.0)	3.4	860
190	石皿	59K	IIIa	安山岩	(31.4)	(20.6)	9.0	6,200
191	石皿	58J	IIIa	砂岩	(20.0)	17.0	5.4	2,200
192	石皿	58J, 58K, 59K	IIIa	砂岩	(33.8)	38.2	4.2	5,000
	石皿		表採	砂岩	15.3	5.7	3.6	360
	石皿		溝II	砂岩	13.9	8.6	4.6	835
	石皿		溝II	砂岩	8.1	3.2	3.9	50
	石皿		溝II	砂岩	9.7	7.0	1.4	85
	石皿		溝II	砂岩	10.7	4.5	1.4	50
	石皿		溝II	砂岩	4.4	5.5	0.8	20
	石皿	43M	IIIa	砂岩	3.4	3.3	1.0	10
	石皿	5号住居跡		溶結凝灰岩	13.8	10.5	5.0	790
	石皿		表採	砂岩	14.5	6.1	7.0	960
	石皿	65G	IIb	砂岩	13.5	11.5	2.9	595
	石皿	64H	IIb	砂岩	7.8	12.0	7.1	870
	石皿	64H	IIb	砂岩	16.3	9.3	4.4	730
	石皿	64H	IIb	砂岩	13.8	8.7	6.7	1,510
	石皿	65H	IIb	砂岩	4.9	4.6	10.3	485
	石皿	65H	IIb	砂岩	10.8	3.8	8.1	370
	石皿	65H	IIb	砂岩	11.8	6.4	9.4	1,010
	石皿	65H	IIb	砂岩	6.4	4.7	4.3	190
	石皿	58J	IIIa	砂岩	4.6	3.7	6.4	360
	石皿	58J	IIIa	砂岩	7.4	6.7	6.0	465
	石皿	58J	IIIa	安山岩	19.4	11.8	12.4	5,000
	石皿	58K	IIIa	砂岩	6.4	5.2	7.1	595
	石皿	58K	IIIa	砂岩	10.8	8.4	8.8	1,295
	石皿	59K	IIIa	安山岩	19.0	12.1	13.9	3,900
	石皿	55L	溝I	砂岩	9.8	6.7	7.9	525
	石皿	45M	IIIa	砂岩	12.6	9.0	9.1	1,600
	石皿	45M	IIIa	砂岩	6.7	2.7	2.1	160
	石皿	55M	IIIa	砂岩	24.0	19.0	5.0	3,500
	石皿	46N	IIIa	砂岩	6.7	3.8	4.4	80
	石皿	51N	IIIa	砂岩	3.3	3.0	4.2	110
	石皿	53N	IIIa	砂岩	9.8	6.9	5.2	420
193	砥石	3号住居跡		砂岩	15.6	7.5	6.9	1,120
194	砥石	4号住居跡		砂岩	18.3	6.5	5.9	1,150
195	砥石	4号住居跡		粘板岩	8.8	7.3	2.4	245
	砥石		溝II	砂岩	8.2	4.6	1.5	62
	砥石	4号住居跡		砂岩	13.6	9.0	3.2	510
	砥石	45M	III	粘板岩	20.5	7.5	1.5	340
	砥石	45M	III	砂岩	7.5	8.6	5.2	560
	砥石	45M	IIIa	砂岩	2.9	2.2	0.5	5
	砥石	47M	III	砂岩	15.5	6.6	5.8	764
	砥石	47M	IIIa	砂岩	3.3	2.5	0.5	6
	砥石	45N	III	砂岩	7.4	5.1	1.2	72
	砥石	65N	IIb	粘板岩	6.6	3.9	0.6	21

第３章　弥生時代

弥生時代の遺構は検出されていないが，多くの土器が出土している。土器は早期，前期，中期の３時期に分けられ，早期，前期のものが多く，中期のものは少ない。

第１節　早・前期

遺構はないが，多くの土器が出土している。早期と前期の区分が困難なために，ここでは一括して取扱う。なお，石器のなかには磨製石鏃・石剣・砥石・磨石など，この時期のものと思われるものもあるが，縄文時代晩期のところで扱っている。

土器には甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器がある。

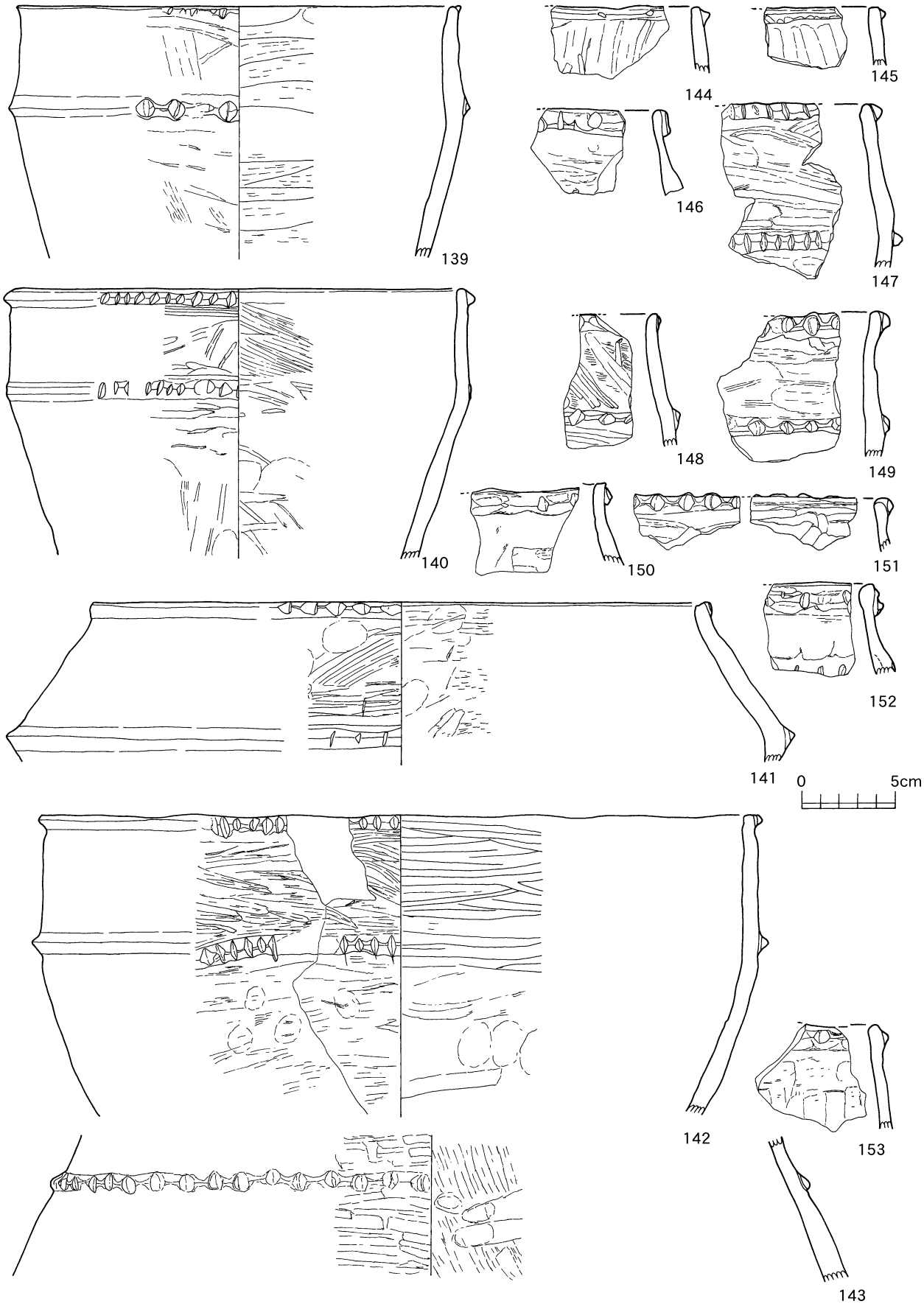
１　甕形土器（第56図～第59図，139～208）

口縁部と胴部に突帯文のある甕形土器で，胴部で屈曲して内傾するものと，胴部から外へ開きながらまっすぐ伸びるものとがある。口縁部の突帯は端部にあるものと，やや下にあるものとがある。また，口縁部近くに焼成前の穿孔がある，いわゆる孔列文土器とがある

139～153は口縁部が内傾するものである。139・140は口縁部の直径が23.5～24.5㎝と小さなもので，140の外面調整はヘラミガキ，あるいはミガキに近いていねいなヘラナデである。139の突帯はいずれも小さく，口縁部のものは口唇部に小さく貼付けられる。141は強く内傾しているもので，口縁直径は32.5㎝ある。口縁部の刻みは太いのに対して，胴部の刻みは小さい。142は内傾度が弱いが，口縁部の直径は38㎝ある。胴部の突帯はやや蛇行しており，刻み目は両方とも深い。143も内傾するものだが，肩部に刻目突帯が貼付けられている。144の突帯は鋭い三角形を呈しているが，ヘラ刻みの間隔は広く離れ，小さく浅い。145は口縁部の少し下に三角突帯が貼付けられ，突帯の上でなく，その下に突き刺し文がみられる。146・149・150・152は口縁部近くで細くなっており，150は波状口縁となっている。152は口縁部と胴部の突帯間が短かい。147の刻みも深い。151は薄い作りである。

154～174は口縁部の直径がもっとも広い器形をし，胴部にも刻み目突帯がみられる。154・155は18.5㎝～24㎝とやや小型で，口縁端に貼付けられた三角突帯に刻みが付されている。154は一か所に突起がみられる。156は口縁直径が37㎝ で，口縁の少し下に三角突帯が貼付けられ，胴部の三角突帯はやや蛇行している。内面・外面とも横方向のヘラナデのあと，縦方向のていねいなヘラナデがされ，暗文風にみえる。157の口縁直径は40㎝である。内外ともていねいなヘラナデで，ミガキに近い。158は口縁部と胴部に刻み目のある三角突帯が貼付けられ，その間には１個の補修孔がみられる。この個体の破片は100m近い広い範囲に散らばっている。165の三角突帯は刻み目がない。166の突帯は口縁端よりやや下がって浅いヘラ刻みが施される。167～169は補修孔のある破片である。167・168は内外両側から穿っている。169は内側から孔をあけようとして未貫通となり，そのあとその少し上へ外から内へ向かって穿孔している。170の突帯は鋭い。174は口縁直径が41㎝ある大きなもので，まっすぐ口縁へ向かって開くものである。突帯は口縁端にあり，あとひとつは７㎝も離れていない所にある。三角突帯で，そこにヘラ切り様の刻みがみられる。口縁部の突帯は上からみると溝状になる部分もある。

176～180は焼成前に小さい孔が外から内へ穿たれている孔列文土器である。176・179は同一個体と思われ，やや外反するもので堅く焼けて外面はヘラミガキである。接近して小さい孔が穿たれて



第56図　弥生土器(1)

154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
0
5cm

第57図　弥生土器(2)

いる。177の外面はやや粗い横方向のヘラナデ整形で，口縁部の少し下に突帯が貼付けられる。178は内外とも横方向のヘラミガキで仕上げ，山形の突起が口縁上に貼付けられるが，突起のまわりにはヘラ切りが付されている。ヘラ刻みのある突帯が付される。

181～208は底部である。この中には壺形土器や鉢形土器の底部も含まれているが，ここでは区分がはっきりしないため一括して扱う。

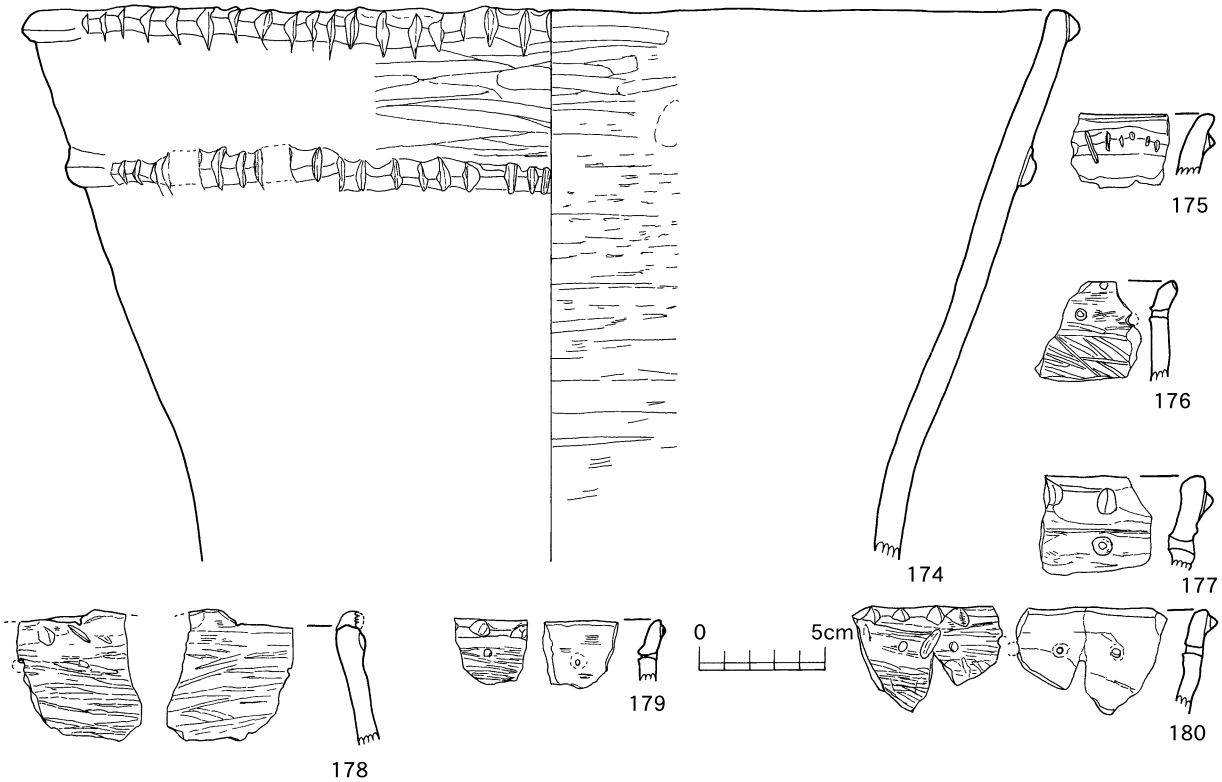
181～188は底部が外へ広がっているものである。181は立上がりで強くくびれ，円盤貼付状となっている。184は底の端が鋭角に屈曲しており，内外とも調整がていねいである。185・186の内側にはコゲが堆積している。187は中央部がややあげ底となり，外側から内へかぶったようになる。

189～198は鈍角に屈曲するものである。189は直に近く立上がっているが，190は外へ強く広がっている。191の底には白粉がみられる。190・193などの調整はヘラミガキである。195の内面は直に近く屈曲している。196の外側もヘラミガキを施しているが，ススが付着し，内側にはコゲもある。198の底には繊維状の圧痕があり分厚い。

199～205は丸みをもって屈曲するものである。199は直径が14㎝あり，底に胴部を積上げている。200は直径が8.5㎝の安定した底である。201・202はていねいなヘラナデで，202の内面は剥脱が目立つ。201・204は底に圧痕があり，204はでこぼこしている。205は直径が13㎝の安定した平底で，外へ広がっている。206は不安定な円盤貼付状の底で，植物質圧痕がある。207の内面はまわりがへこんでおり，底には圧痕がみられる。208は直径が小さく分厚い底で，前期後半のものである。

2　壺形土器（第60・61図209～230・242）

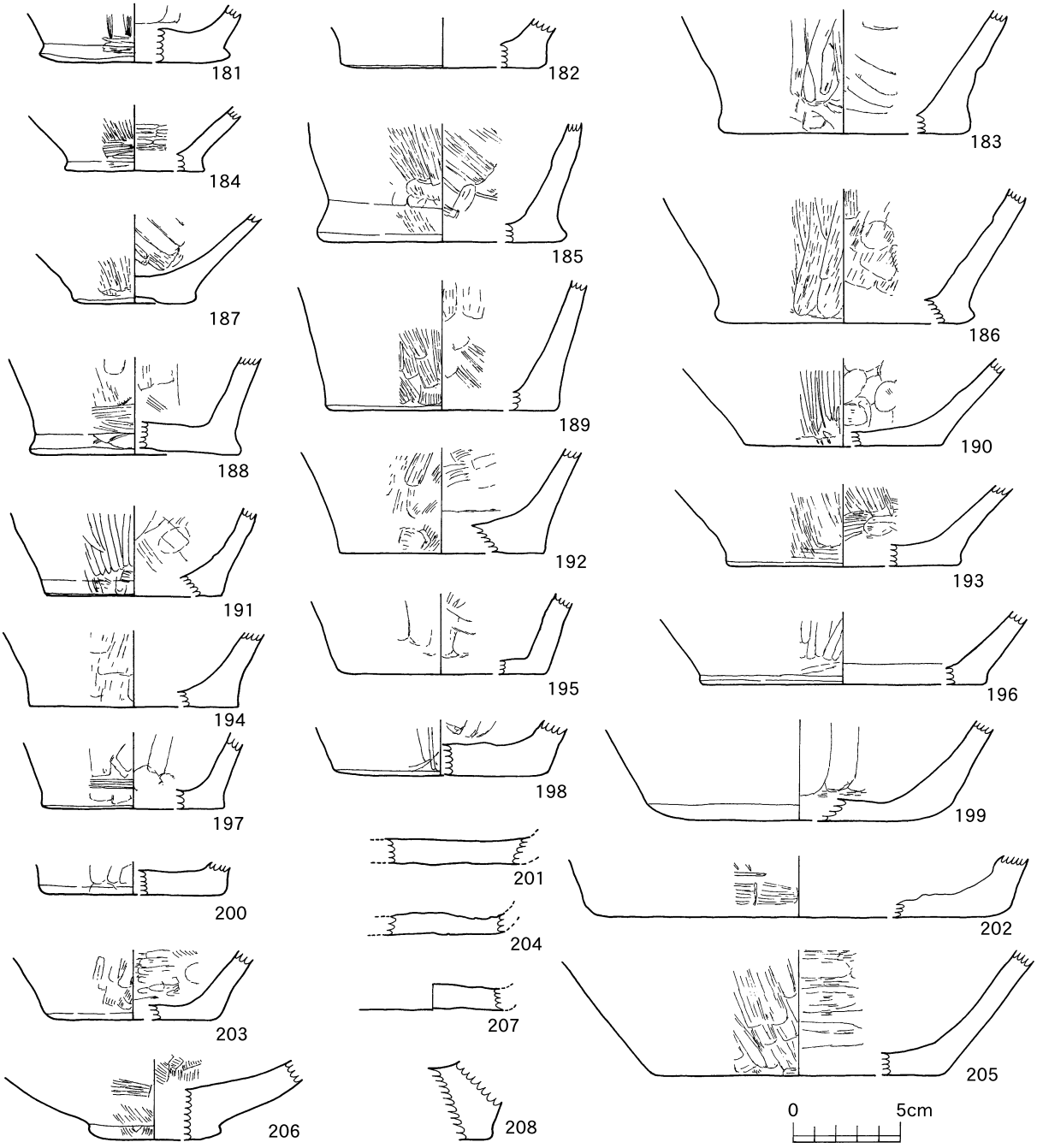
口縁部は頸部から内傾し，端部近くで外反する。209～211・214・215は端部がやや上外へ屈曲し，212・216は外反度が少ない。直径は209・210・213のように13㎝～14㎝ほどの小さいものと，17㎝



第58図　弥生土器(3)

ほどのもの，214のように21㎝もあるものとがある。調整はミガキあるいはていねいなヘラナデである。213は頸部から内へ向かい，やや反りながら口縁部へ向かう器形を呈し，口縁直径は17㎝ある。頸部には断面形が方形となる突帯が貼付けられ，その上にヘラによる細い二重の鋸歯状沈線が横方向に施される。215は頸部から上へ立ち上がって端近くで外反している。216は頸部で，胴部の内側に口縁部を貼付けており，接合部は分厚くなる。口縁部外面は剥脱しているが，さらに粘土を貼付けた痕跡もある。内面の剥脱が多くみられる。217も頸部で接着しており，内面の剥脱が目立つ。

219は丸みをもった胴部で上半部へ向かい内傾し，傾部付近はゆるやかに立ち上がっている。内外面とも表面の剥脱・摩滅が目立つ。底は安定した平底で，220はやや立ち上がって胴部へ移り，

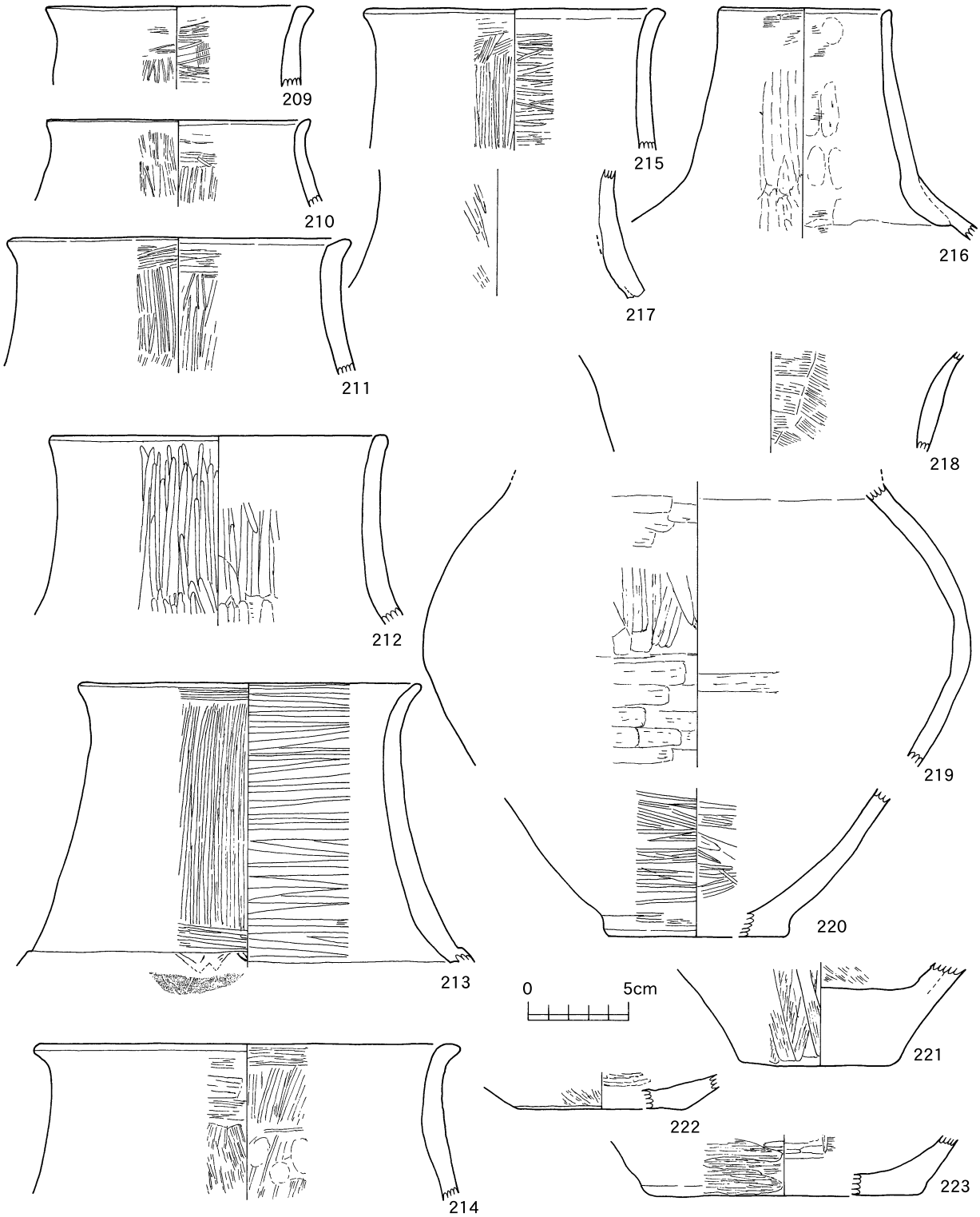


第59図　弥生土器(4)

他は丸みをもっている。221は厚さ４㎝と分厚い底で，継ぎ足している。

224～226は同一個体の可能性がある。内傾する肩部で，胴部との境付近に一条の凹線がある。内面には幅広の貝殻条痕が縦あるいは横方向に施され，そのあとヘラでていねいにナデている。外はていねいなヘラナデで仕上げており，225には部分的に丹が付着し，横方向の鋸歯状暗文もみられる。

227～229は外面をヘラミガミで仕上げ，その上に丹塗りがされている。227は内面の上まで，228



第60図　弥生土器(5)

は底まで丹塗りがされている。228は細かい土を用いて，薄く作られ，ていねいに調整されている。

230はソロバン玉状の胴部で，肩部に短い沈線で線刻画が描かれている。全体像は不明で，顔がないが，足を広げ，手を下へ向けた人物画のように見える。胴部にはハの字状文がみられる。

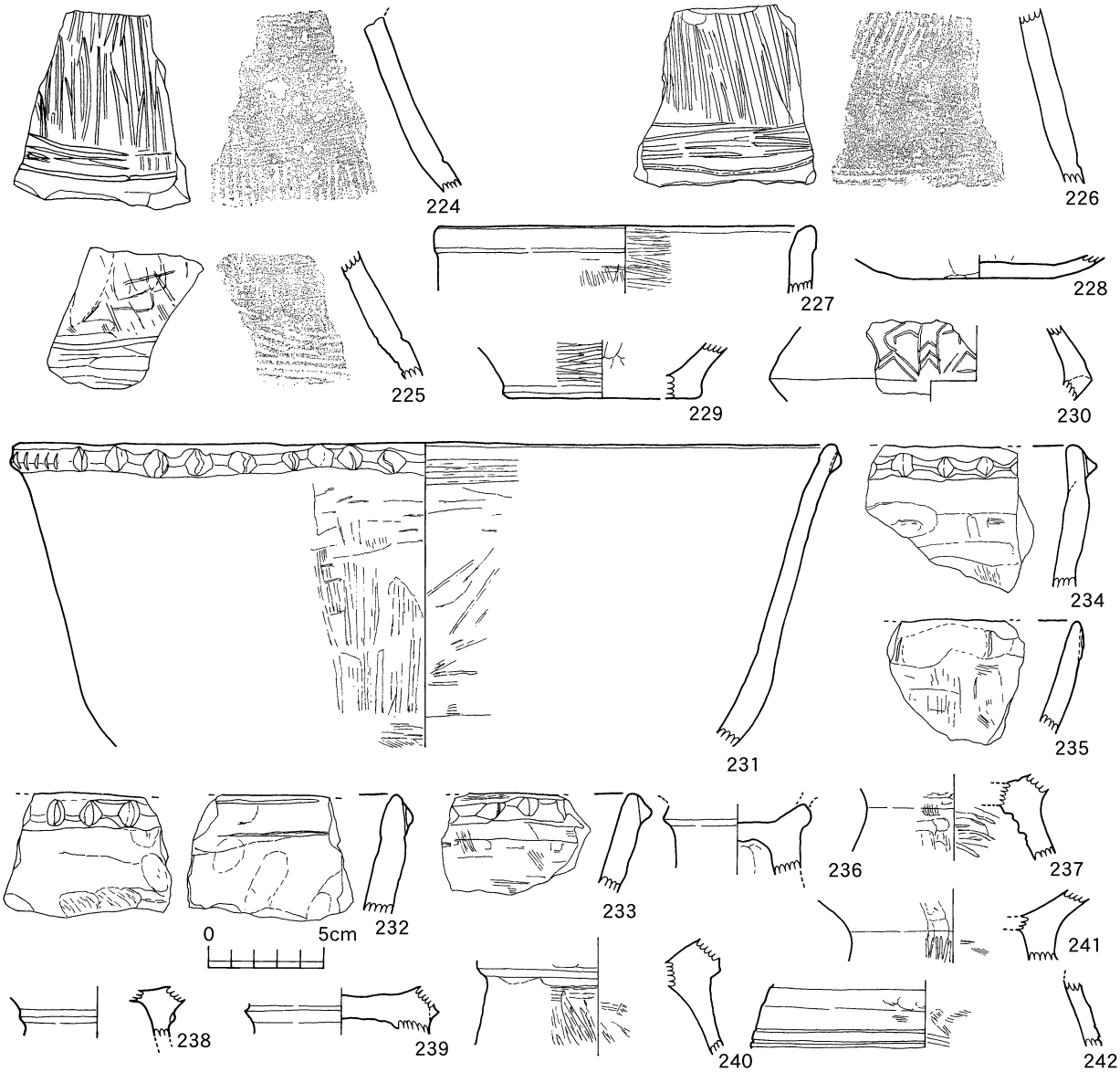
242は薄手の肩部で，頸部に１条，胴部に３条の沈線が巡っている。

３　鉢形土器（第61図231～235）

口縁部が外へまっすぐ開き，丸みをもった平底の大型鉢形土器である。231は口縁部の直径が35㎝あり，口縁部近くに刻み目の付いた断面三角形の貼付突帯がみられる。刻み目は幅が広く，外面は縦方向へラミガキとヘラナデ，内面は横方向のヘラナデで仕上げている。外面にはススが厚く付着している。232～235も同じような器形をしており，口縁部付近は厚い。

４　高坏形土器（第61図236～241）

坏部と脚部の境部分がある。境部分に三角突帯を貼付けたものと，突帯のないものとがある。坏部は底部が平らで，236は立上り部分で坏部と底部を接着している。裾はゆるやかに広がっている。



第61図　弥生土器(6)

第２節　中期

量は多くないが，甕形土器・大型甕形土器・壺形土器が出土している。

１　甕形土器（第62図243～245）

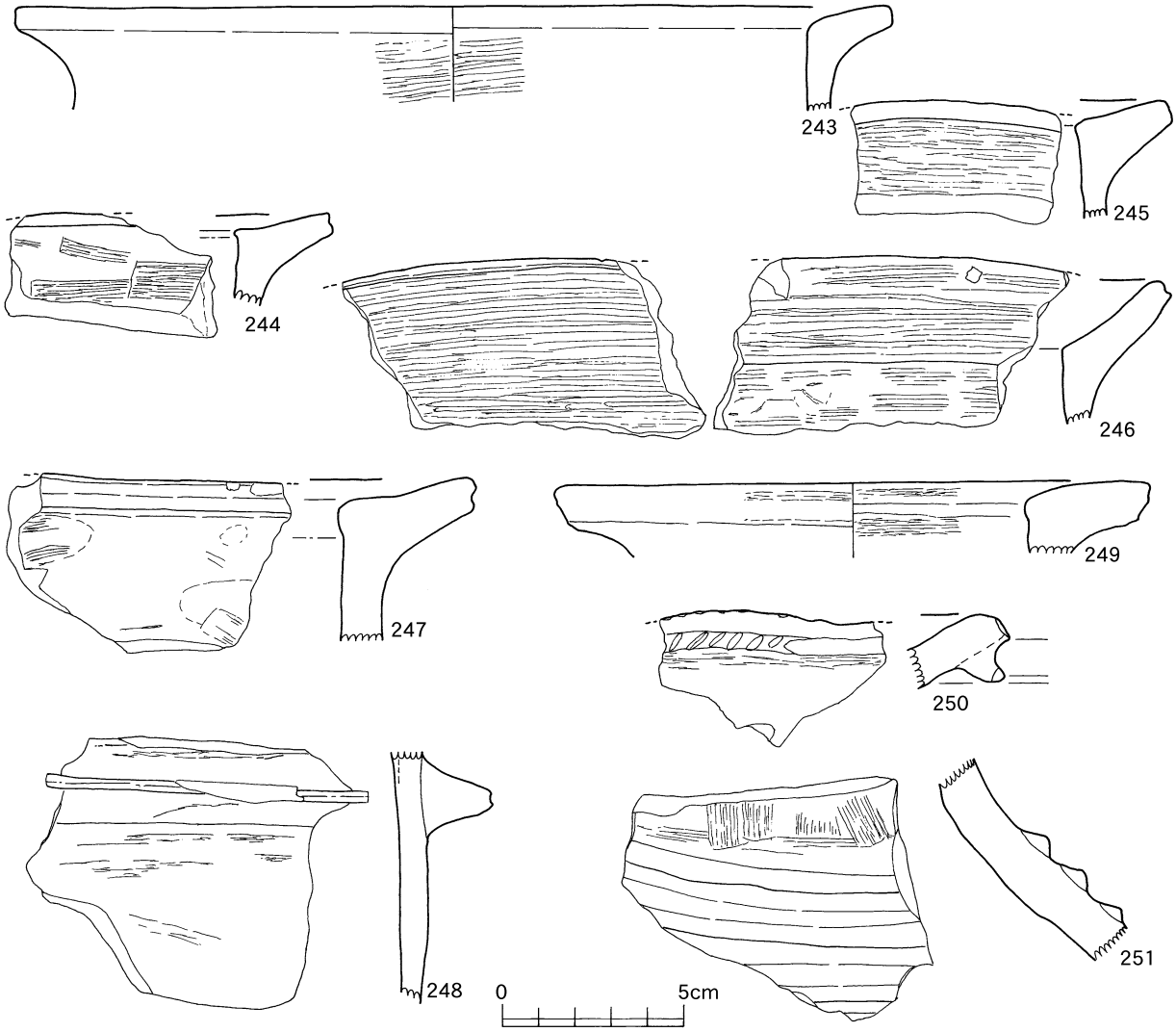
口縁部は内面がやや下がるが，ゆるやかに曲がるものと，直に曲がるもの，やや内に突出するものとがある。243は口唇部がやや窪んでいる。244は外へ突出している部分で貼付痕がよくわかる。

２　大型甕形土器（第62図246～248）

口縁部の内面が下がるもので，丸いくぼみをもっており，246は相当に下がっている。口唇部は窪んでおり，247の内面はやや突出している。肩部近くには外へ張り出す突帯が貼付けられているが，この部分では内面にも粘土が補強されている。内・外面とも横方向のヘラナデで仕上げられる。

３　壺形土器（第62図249～251）

口縁部は逆Ｌ字形のものと二叉になるものがある。249は直径16.5㎝あり，やや内側に下がっており，口唇部は欠けているが，やや窪んでいるものと思われる。内にやや突出しており，器壁が分厚い。250は口縁下部に上向きの突帯を貼り付けて二叉としている。ともに端部は左下がりのヘラキザミがある。剥脱が目立つ。251は三条以上の三角突帯が貼付けられる肩部で，内側は剥離が目立つ。



第62図　弥生土器(7)

第12表　弥生土器観察表(1)

図番	出土地	層	外面の調整	内面の調整	色　調	焼成度	胎　土
139	65H	Ⅱb	ヘラナデ	粗いヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	普通	白色石・黄白色石・石英・長石・茶色石の多い砂質土
140	65G	Ⅱb	ミガキに近いていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	黄茶褐色（内外とも黒っぽい，外にはスス）	良	白色石・石英・黒曜石などの細かい石
141	65G	Ⅱb	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ナデ	外：暗茶褐色（スス付着） 内：黄っぽい淡茶褐色	良	黄白色石・白色石・石英などの小石が多い
142	58K	Ⅲa	ミガキ風ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった灰褐色	普通	石英・白色石・茶色石・黄白色石などの多い砂質土（６～８㎜大の石を含む）
143	58K	Ⅲa	ヘラ横ナデ	ヘラ斜ナデ	外：黒褐色 内：白っぽい灰褐色	良	白色石・茶色石・黄白色石などの細かい石（６㎜大の石を含む）
144	58K	Ⅲa	ていねいなヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黒褐色	普通	石英・黄白色石・白色石などの細かい石（５㎜大の石を含む）
145	59K	Ⅲa	ていねいなヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黒褐色	普通	黄白色石・白色石・石英・茶色石などの細かい石
146	56L	Ⅲa	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	外：灰褐色 内：白っぽい黄褐色	普通	石英・白色石・黄白色石・茶色石などの細かい石
147	65G 64H	Ⅱb	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外：黒褐色 内：灰褐色	良	白色石･石英･茶色石などの細かい石(7㎜大の石を含む)
148	64H	Ⅱb	ヘラ横ナデのあとヘラ斜ミガキ	ヘラ横ナデ	灰褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい砂質土
149	56L	Ⅲa	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：黒褐色（スス多） 内：黄みがかった明茶褐色	良	石英・黄白色石・白色石・茶色石などの細かい石
150	56K	Ⅲa	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	外：灰褐色 内：白っぽい黄褐色	普通	石英・白色石・黄白色石・茶色石などの細かい石
151	56L	Ⅲa	ヘラ横ナデ	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	黒褐色	良	石英・茶色石・白色石などの細かい石
152	56L	Ⅲa	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	外：淡黒褐色（スス付着） 内：白っぽい黄褐色	普通	白色石・石英などの細かい石
153		表採	ヘラ横ナデのあとヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデのあと ヘラ縦ナデ	外：黒灰色 内：白っぽい明茶褐色	普通	黄白色石・茶色石・石英などの細かい石（５㎜大の石を含む）
154	65G	Ⅱb	ヘラミガキ	ていねいなヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：暗茶褐色	良	石英･黄白色石･白色石などの細かい石
155	64H 65H	Ⅱb	ヘラミガキ	ヘラナデ	外：黒褐色 内：暗茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
156	63H	Ⅲ	ていねいなヘラナデ ヘラ横ナデのあと暗文風のヘラ縦ミガキ	ヘラ横ナデのあと ヘラ縦ミガキ（暗文風）	外：黒褐色 内：黄みがかった淡茶褐色	良	黄白色石・石英・茶色石・金雲母などの細かい石
157	65G	Ⅱa･b	ミガキに近いヘラ縦ナデ	ヘラミガキ ていねいなヘラ横ナデ	外：黒褐色（スス多） 内：黄みがかった茶褐色	良	石英・黄白色石・白色石・茶色石などの細かい砂質土
158	65H 55L 65G 58K	Ⅱa Ⅱb Ⅲa	ヘラナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	外：黄茶褐色 内：灰褐色	普通	白色石・黄白色石・石英・茶色石（８㎜大の石を含む）
159	65G	Ⅱb	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	黄っぽい明茶褐色 （外にスス付着）	良	白色石・長石・石英・茶色石などの細かい石の多い砂質土
160		表採	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：暗茶褐色 内：明茶褐色	良	石英・茶色石・白色石・黄白色石などの細かい石
161	58J	Ⅲa	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：茶褐色	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石
162	54L	Ⅲa	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	外：黒褐色 内：黄褐色(部分的に暗い)	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石
163	64G	Ⅱa	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黒褐色	良	石英・白色石・茶色石・長石などの細かい石
164	58K	Ⅲa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡黒褐色	良	白色石・石英などの細かい石
165	58K	Ⅲa	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	黄色っぽい明茶褐色	普通	石英・白色石・長石などの細かい石
166	58L	Ⅲa	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	暗灰茶褐色	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石
167	57K	Ⅲa	ミガキに近いヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：明茶褐色	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石
168	58K	Ⅲa	ヘラ横ナデ	ミガキに近いヘラ横ナデ	外：暗淡茶褐色 内：灰褐色	普通	黄白色石･石英･白色石などの細かい石
169		Ⅱ	ヘラナデ	ヘラナデ	茶がかった黄褐色	良	白色石・石英などの細かい石が多い（５㎜大までの茶色石を含む）
170	65H	Ⅱb	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄茶褐色	普通	黄白色石・白色石・石英などの細石
171	65G	Ⅱc	ヘラナデ	ヘラナデ	白っぽい黄褐色 （外：ススにより黒色化）	悪	石英・黄白色石・白色石などの細石
172	63H	Ⅱa	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明黄褐色	普通	石英・黄白色石・白色石などの細石
173	55L	Ⅲa	ヘラ横ミガキ	ていねいな横ナデ	外：黒褐色 内：灰がかった明茶褐色	良	石英・黄白色石・白色石などの細石
174	65H	Ⅱb	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：淡茶褐色（上はスス多く黒っぽい，下は赤みがかる） 内：黄みがかった明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石が多い
175		Ⅱ	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった明茶褐色	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石
176		Ⅱ	粗いヘラ横ナデ	ていねいなヘラナデ	淡い黄褐色	普通	石英・白色石などの細かい石

第13表　弥生土器観察表(2)

図番	出土地	層	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
177		Ⅱ	粗いヘラ横ナデ	ていねいなヘラナデ	淡い黄褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
178	55L	Ⅲa	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外：灰黒褐色 内：明茶褐色	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石
179		Ⅱ	ヘラ横ミガキ	ヘラナデ	外：黒褐色 内：茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
180	65G	Ⅱb	ヘラ横ミガキ	ヘラナデ	外：黒褐色 内：茶褐色	良	白色石・茶色石・黄白色石などの細かい石
181	66G	Ⅱb	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石
182		表採	ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	外：明茶褐色 内：黒褐色	普通	白色石・石英などの細かい石
183	56K	Ⅲa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	外：明茶褐色 内：黒褐色	普通	黄白色石・石英・白色石・茶色石などの細かい石（６㎜大の石含む）
184	4T		ヘラミガキ　ナデ	ていねいなヘラナデ ミガキ	乳茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石
185	64G 64H 65H	Ⅱa Ⅱb	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：淡褐色 内:黒褐色（こげ厚く付着）	良	白色石・石英の多い粗い土 （６㎜大の石を含む）
186	56K 57K	Ⅲa	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色（外にスス，内に黒っぽいこげ付着）	良	白色石・石英などの石が多い （５㎜大の石を含む）
187	45M	Ⅲa	ミガキに近い ヘラ縦ナデ	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石
188	63H	Ⅲ上	ヘラ横ナデ	部分的に縦ミガキ ていねいなヘラナデ	外：淡茶褐色 内：黒褐色	良	白色石・茶色石・黄白色石・石英などの細かい石（８㎜大までの石が多い）
189	64G 64H	Ⅱa Ⅱb	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	灰褐色 （内：やや黒色化）	普通	石英・白色石の細かい石
190	58K	Ⅲa	ヘラ縦ミガキ	ていねいなヘラナデ	外：茶褐色 内：黒灰褐色	良	白色石・石英などの細かい石
191	59K	Ⅲa	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	外：茶褐色 内：明茶褐色・淡黒褐色	良	石英・黒曜石・茶色石・黄白色石・白色石などの細かい石
192	56K	Ⅲa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡い黄みがかった 明茶褐色	良	白色石・雲母・石英などの細かい石 （５㎜大の石を含む）
193	57K	Ⅲa	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄褐色　部分的に黒灰褐色	良	白色石・石英などの細かい石
194	58J	Ⅲa	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	白っぽい黄褐色　（内:やや黒っぽい）	良	長石・白色石・黄白色石・石英などの細かい石
195	58K	Ⅲa	ヘラナデ	ヘラナデ	乳茶褐色	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石
196		Ⅱ	ヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	茶褐色（黒班）	普通	白色石・石英・黄白色石の細かい石
197	64G	Ⅱb	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
198	58L	Ⅲa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	外：灰がかった黄褐色 内：灰褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石
199	58K	Ⅲa	不明（摩滅）	ヘラ縦ナデ	黄褐色	普通	黄白色石・青灰色石・白色石などの細かい石（８㎜大の石を含む）
200	58K	Ⅲa	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：黄茶褐色 内：黒褐色	良	黄白色石・石英・白色石などの細かい石
201	57K	Ⅲa	ヘラミガキ	ていねいなナデ	灰がかった明茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石 （４㎜大の石を含む）
202	65H	Ⅱb	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	暗茶褐色	普通	白色石・石英・黒曜石・茶色石など粗い石（４㎜大の石を含む）
203	64H	Ⅱ Ⅱb	ヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：淡茶褐色（黒班） 内：黒褐色（コゲあり）	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
204	54M	Ⅲa	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	普通	白色石・金雲母・石英などの細かい石
205	65H	Ⅱa	ヘラ縦ミガキ	ていねいな横ナデ	外：明茶褐色 内：黒褐色	良	石英・白色石の多い土
206	64H	Ⅱa	ヘラ横斜ナデ	ヘラ縦ナデ	赤っぽい茶褐色	普通	石英・黄白色石・茶色石・黒曜石などの細かい石（５㎜大の石含む）
207	58L	Ⅱa	ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石・茶色石などの細かい石
208		Ⅱ	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：明茶褐色 内：黒褐色	良	金雲母・白色石・石英などの細かい石
209	64H	Ⅱb	ヘラ縦ナデのあとミガキ	ヘラ縦ナデのあと ヘラ横ミガキ	黄茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石
210	65F	Ⅱb	ヘラ縦ミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	良	黄白色石・石英などの細かい石
211	64H 65H	Ⅱa Ⅱb	ヘラ縦ミガキ	ヘラミガキ 内面の剥脱目立つ	外：茶褐色 内：黒色	普通	石英・白色石・黄白色石・茶色石などの小礫を含む粗砂 （６㎜大の石を含む）
212	64G	Ⅱb	ヘラ縦ミガキ	ていねいなヘラ横ナデ 深いヘラ縦ナデ	暗茶褐色 明茶褐色 } 接合	良	石英・黄白色石・白色石・茶色石などの細かい石（５㎜大の石を含む）
213	64H	Ⅱa Ⅱb	二重の鋸歯状沈線 ヘラ縦ミガキ	ヘラミガキ	淡茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石
214	65G 65H	Ⅱb	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡茶褐色	良	石英・黄白色石・白色石・茶色石などの細かい石
215	65G	Ⅱb	ていねいなヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	良	石英などの細かい石

第14表　弥生土器観察表(3)

図番	出土地	層	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
216	63H	IIc	ヘラ横ナデ ヘラ縦ミガキ	ヘラ縦ナデ 剥脱多	外：灰黒褐色 内：白っぽい明黄褐色	普通	石英・白色石などの細かい石
217	58K	IIIa	ヘラミガキ	ヘラナデ	明茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石多・砂質土
218		IIIa	ヘラ縦ナデ ほとんど剥脱	ヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：淡黄褐色	普通	茶色石多・石英・黄白色石などの細かい石
219	57K	IIIa	ヘラミガキ（やや粗い）	ほとんど剥脱	外：黄みがかった淡茶褐色 （黒っぽい部分あり） 内：黄褐色	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石
220	63H	IIc	粗いヘラミガキ	ヘラ横ミガキ	外：黒褐色 底・内：うすい黄茶褐色	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石（6㎜大の石を含む）
221		II	ていねいな縦ナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	白色石・金雲母・茶色石などの細かい石の多い粗い砂質土
222	65G	IIb	ていねいなヘラ斜めナデ	ヘラ縦ナデ	外：黒褐色 内：白っぽい黄茶褐色	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石（4㎜大の石を含む）
223	63H	III	ヘラ横ナデの後ミガキ	ていねいなヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	普通	白色石・黄白色石・茶色石・石英などの細かい石（7㎜大の石を含む）
224	66G	IIb	ヘラ縦ミガキ	貝殻条痕のあと ていねいなヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：淡黄茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石
225	65H	IIb	ていねいなヘラ縦ナデ	横方向の鋸歯状暗文	外：明茶褐色 内：黒褐色	良	黄白色石・石英・白色石・茶色石などの細かい石（5㎜大の石を含む）
226	65G	IIb	ヘラミガキ	ヘラミガキ 上の方は粗い条痕の後 ていねいな横ナデ	外：明茶褐色 内：黒褐色	良	黄白色石・石英・白色石・茶色石などの細かい石（5㎜大の石を含む）
227	56L	IIIa	ヘラミガキの上に丹塗り	ヘラミガキ	丹塗り 内：淡い黄褐色	普通	白色石・黄白色石・石英・茶色石などの細かい石
228		IIIa	ヘラ縦ミガキ	ヘラ縦ミガキ	丹塗り 内：黒色	良	白色石・石英などの細かい石
229	64H	IIb	ヘラミガキ	ヘラナデ	丹塗り 内：淡茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石・茶色石などの細かい石
230	64H	IIb	ていねいなナデ 細いヘラ沈線	ヘラナデ　摩滅多	黄褐色	良	白色石・茶色石などの細かい石
231	63H	IIc	ヘラ縦ミガキ 横ナデ	ヘラ横ナデ 下はていねいなナデ	白っぽい黄褐色	普通	石英・白色石・黄白色石・茶色石・黒曜石などの細かい石（5㎜大の石を含む）
232	58K	IIIa	ていねいなヘラナデ	ヘラ縦ナデ	淡黄茶褐色 （外：ススのため黒色化）	普通	石英・黄白色石・白色石などの細かい石
233	58K	IIIa	ヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色 （外：スス付着）	普通	白色石・石英・黒曜石などの細かい石
234	58K	IIIa	ヘラ横ナデ	ヘラナデ	白っぽい黄茶褐色 （外：スス付着）	普通	白色石・石英・黒曜石などの細かい石
235	57K	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	灰褐色	普通	白色石・石英などの細かい石
236	65H	IIb	ていねいなヘラナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	普通	青灰色石・茶色石・石英・白色石など小石もある粗い土（5㎜大の石を含む）
237	65H	IIb	ヘラ縦ミガキ	粗いヘラ横ナデ	明茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石
238	57K	IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	外：淡茶褐色 （突帯は色がややうすい） 内：黒灰褐色	普通	白色石・石英の多い砂質土
239		IIa	ヘラナデ	ヘラナデ でこぼこしている	茶褐色	良	石英・白色石・黄白色石などの細かい石
240	65H	IIb	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	ていねいなナデ	外：黄茶褐色 内：黒褐色	良	石英・白色石などの細かい石
241	58K	IIIa	ミガキに近い ていねいな縦ナデ	ていねいなナデ	灰褐色	普通	石英・白色石など砂粒が多い
242	58L	IIIa	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色（外：スス付着）	良	金雲母多　他に黄白色石・白色石あり（5㎜大の石を含む）
243		表採	ヘラ横ナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	普通	金雲母・白色石・石英などの細かい石の多い砂質土
244		IIIa	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった茶褐色	良	金雲母・黄白色石多，石英・白色石などの細かい石
245		IIIa	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色 （外：やや灰色がかる）	普通	石英・白色石・金雲母などの細かい石
246	63I	IIIc	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	普通	石英・白色石・金雲母などの細かい石（3㎜大の茶色石もある）
247		IIIa	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	金雲母・石英・白色石などの細かい石
248		II	ていねいなヘラナデ	ハケ横ナデのあとヘラナデ	明茶褐色	普通	黄白色石・茶色石・石英などの細かい石
249		II	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	普通	金雲母・白色石・石英などの細かい石
250		I	ていねいなナデ	ていねいなナデ	茶褐色	普通	金雲母・白色石・黄白色石などの多い砂質土
251		II	ヘラ縦ナデ ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	金雲母・石英・黄白色石・白色石など細かい石の多い砂質土

第４章　古墳時代

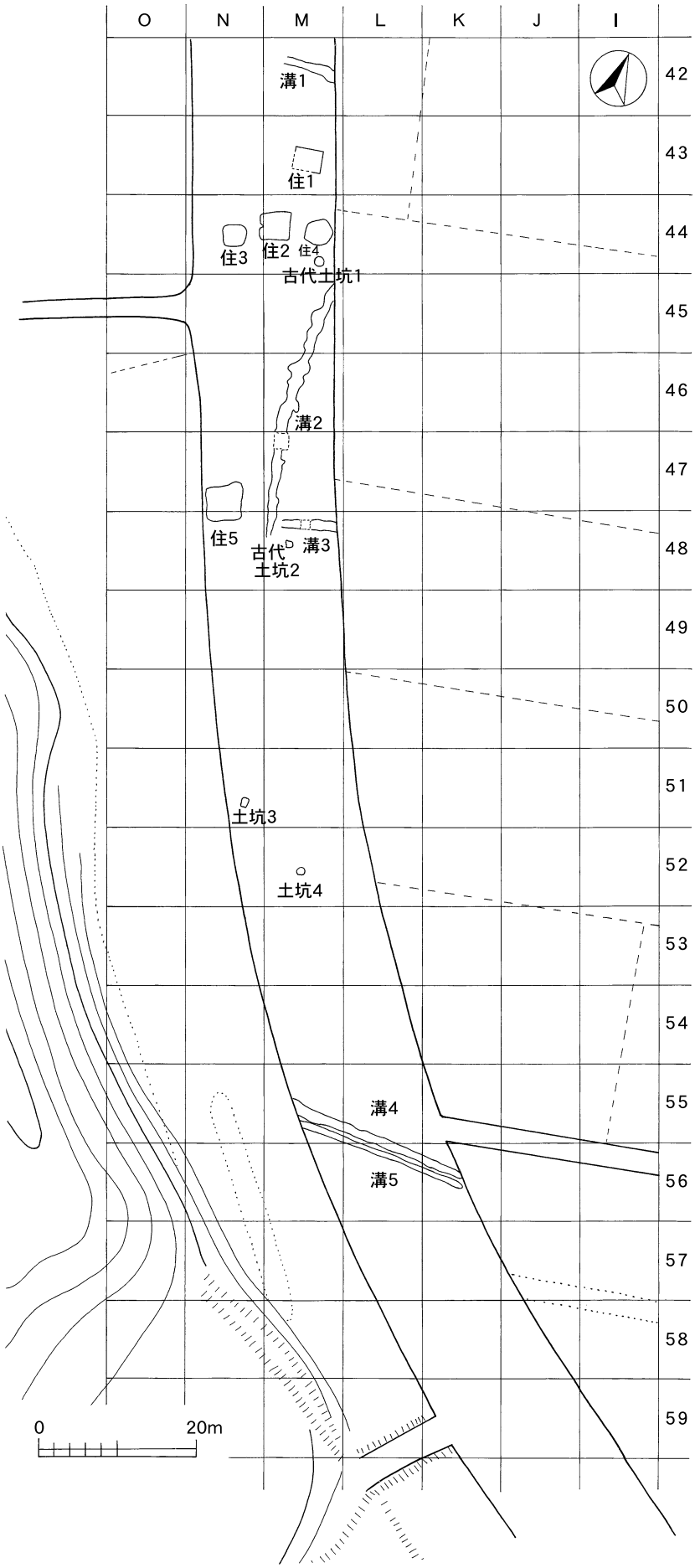
当遺跡の主体となる時代で，多種・多量の遺構・遺物が発見されている。遺構には竪穴住居跡があり，遺物には甕形土器・壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器などの土師器や，須恵器が出土している。

第１節　竪穴住居跡

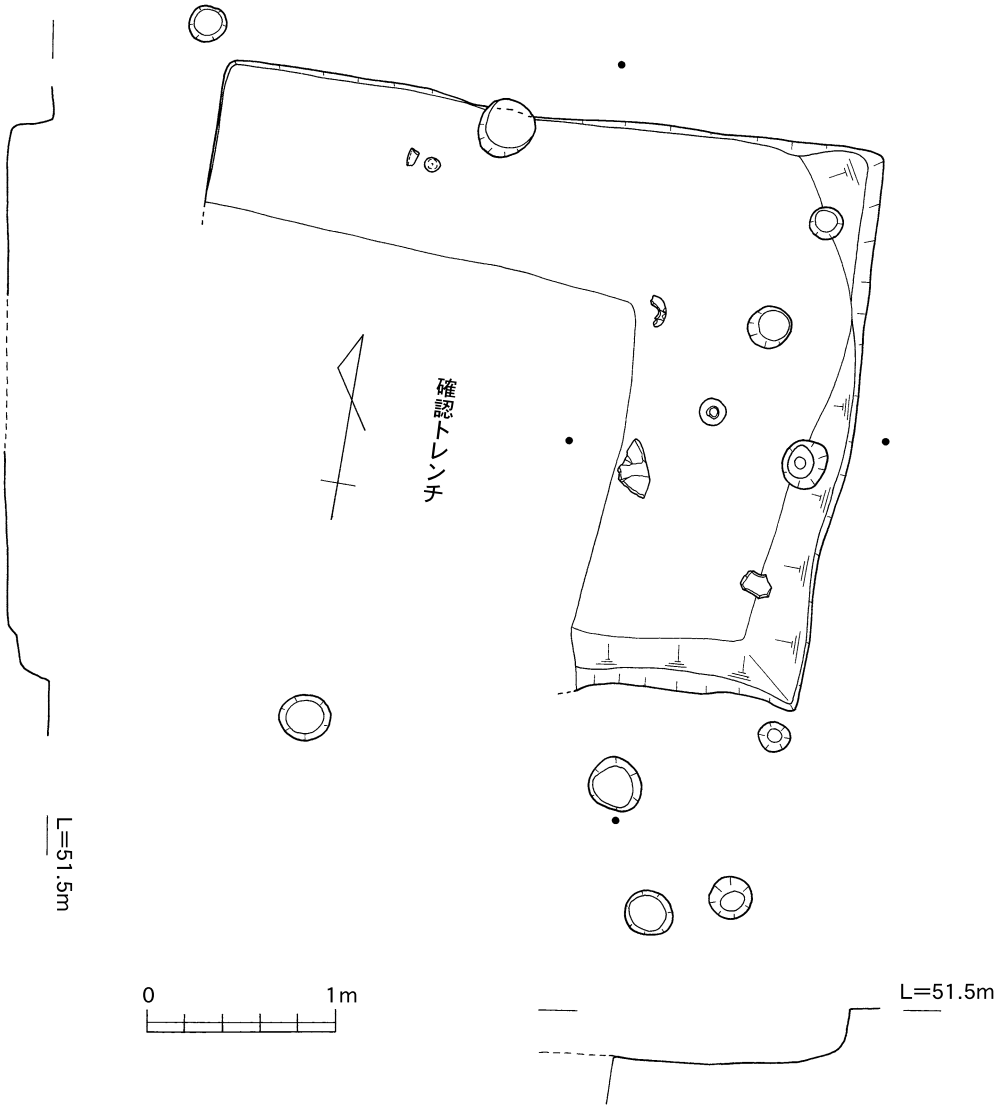
５軒が発見されている。この延長部は16年度に吾平町教委が調査しているため，これをあわせると竪穴住居跡６軒・地下式横穴墓３基となる。今回は43・44M区から44N区にかけて４軒がほぼ集中して，少し離れて47・48N区に１軒存在している。

１　１号竪穴住居跡（第64図・第65図252～259）

43M区で検出された3.5m×3.0mの方形をした竪穴住居跡であるが，西側の２分の１ほどが確認トレンチによって破壊されている。深さは22㎝～28㎝ほどが残っている。直径20㎝～30㎝ほどの柱穴が住居跡内で３，その周辺で８ほど見つけられているが，住居との関連は定かでなく，住居の主柱穴は不明である。住居内でいくつかの土器が出土しているが，床面から10㎝ほど浮いた場所にある。



第63図　古墳時代・古代中世の遺構配置図



第64図　1号竪穴住居跡

甕形土器・小型壺形土器・坩形土器・鉢形土器・小型鉢形土器がある。

甕形土器は口縁直径が30㎝あり，やや内反するもので，底は不明である。口縁下部に布目の付いたヘラ刻みのある断面かまぼこ形の貼付突帯がある。外面・内面とも縦方向のヘラナデで仕上げているが，外面下部はミガキに近いていねいなナデである。他に外反する口縁部もあるが，混入したものと思われる。

小型壺形土器は口縁部が外へ強く反る器形をし，胴部はあまり張らずに丸みをおびている。内外とも縦方向のヘラナデだが，外は特にていねいである。

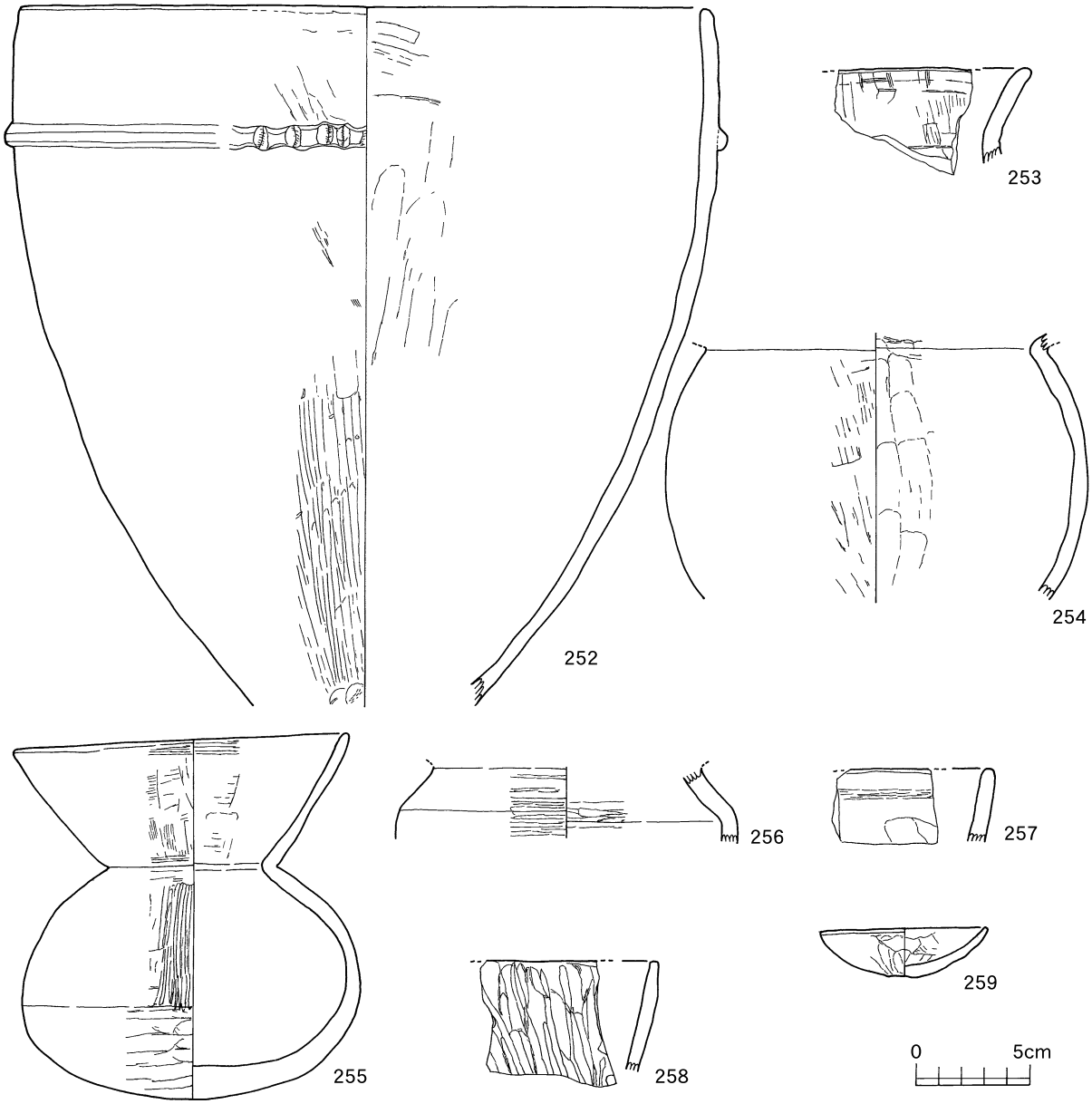
坩形土器は口縁部が外反し，丸みをもつものと，ソロバン玉状のものとがある。255は口縁直径14.7㎝，高さ16㎝の完形品である。口縁部はやや内弯ぎみのもので，内面が横方向，外面が縦方向のヘラナデである。胴部は中央付近に最大径があり，丸みをもった底になる。外面上半はヘラミガキだが，下半部はやや粗いヘラナデである。256は肩がやや屈曲してソロバン玉状となる。

鉢形土器は口縁部のみで，やや内弯ぎみのものと，まっすぐ伸びるものとがある。258は内外ともていねいなヘラナデで仕上げるが，外面はミガキに近い。

小型鉢形土器は口縁直径が7.5㎝，高さが2.2㎝の浅い盃形をしており，内外ともヘラナデで仕上げるが，外面は粗い調整で，内面の底近くはミガいている。外面の一部は黄みがかった淡茶褐色をしているが，その他は黒褐色をしている。

２）２号竪穴住居跡（第66図・第67図260～273）

44M・N区で検出された南北3.5m，東西3.4mの方形をした竪穴住居跡であるが，南西隅が1.8m幅で西へ0.7mほど突出している。東端から1.3mはいった所で14㎝ほど下がっている。深さは東側が14㎝ほど，西側が28㎝ほどである。埋土はアカホヤがにごったような暗黄褐色土で，深いほうの底近くは炭まざりで黒色化している。南壁に接して直径80㎝，深さ10㎝の窪みがある。中央には直径40㎝，深さ10㎝ほどの掘り込みがあるが，ここには焼土がはいっている。また，段落ちの中央やや南寄りの壁近くに炭や焼土が20㎝四方ほどの広さに３㎝ほどの高まりをなしているが，この壁



第65図　１号竪穴住居跡出土土器

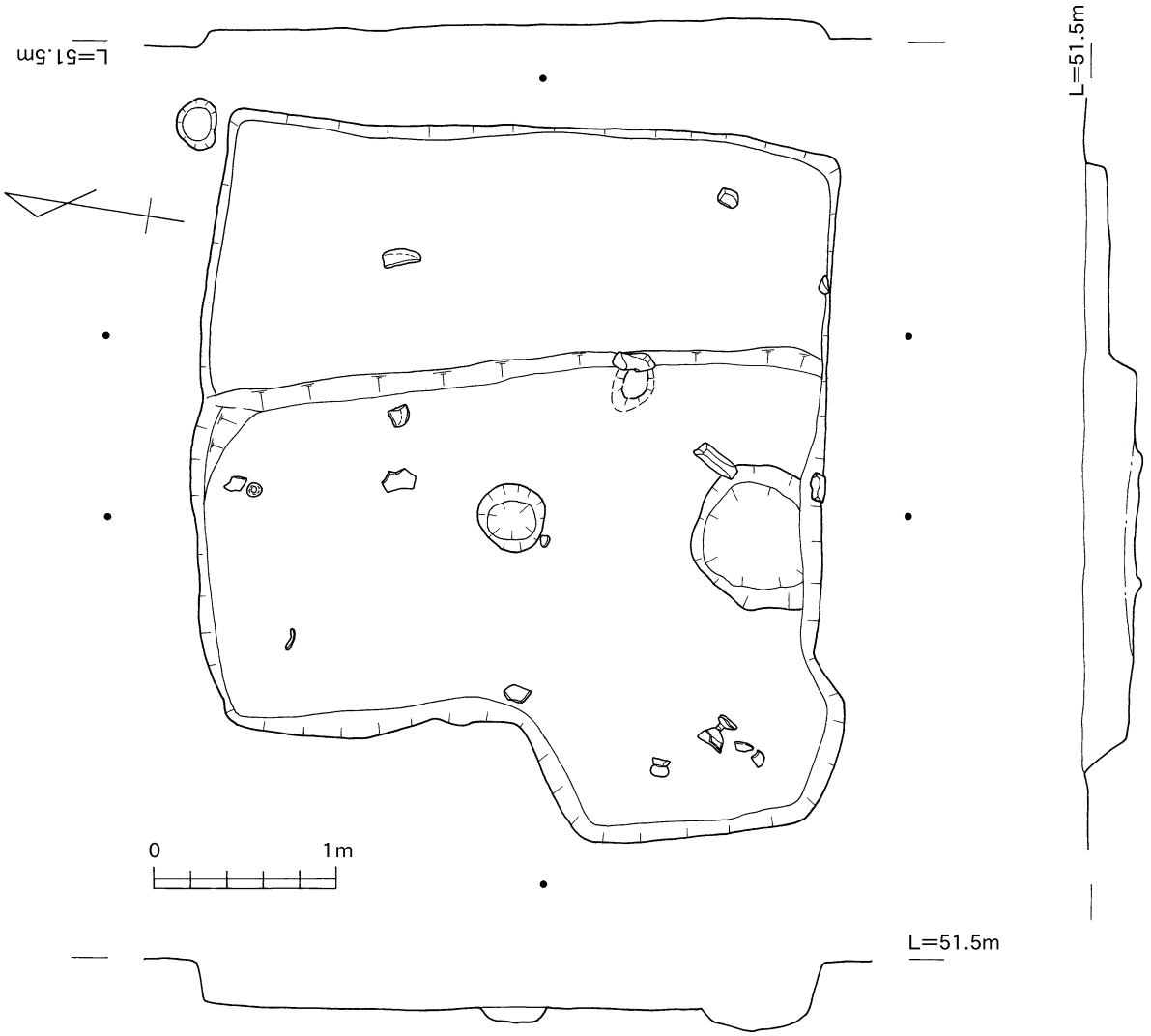
には小さな円礫がある。床面に接して土器片が散在しているが，４点の礫もある。完形の坩形土器と高坏形土器は南西隅の突出部で出土している。

中から甕形土器・小型壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器が出土している。

甕形土器は口縁部がやや内反する形をし，脚台が付く。260は口縁直径が28㎝あり，胴部上半に断面形が台形の突帯が貼り付けられている。突帯の端は接着部から下へ曲がっている。突帯には布目のあるヘラ押圧文が付される。内外とも縦方向のヘラナデで仕上げているが，内面は特にていねいに仕上げ，そのあとに指紋が付される。261も同様の形をしているが，口縁直径は25㎝で薄く作られている。内面・外面には積み上げ痕が残っている。

小型壺形土器は口縁直径が12㎝あり，くびれた頸部からまっすぐ外へ開いている。内外ともヘラナデで仕上げているが，内面には指紋が残っている。

坩形土器には大小２種ある。265は口縁直径9.5㎝，高さ7.8㎝の完形品である。口縁部はやや内弯ぎみに外へ開いており，胴部は下半に最大径がある。内外ともていねいにナデている。266は口縁部のみで，形は265と良く似ているが，直径が15㎝とやや大型である。内面には多くの指紋が



第66図　２号竪穴住居跡

残っている。267は胴部のみで，形は265と良く似ているが，径が一回り大きい。外面はヘラミガキで仕上げている。

鉢形土器は３種ある。268は薄い作りであるが，口縁直径が17.2㎝ある丸みをもった形をしている。外面に輪積み痕が残っている。269は外反する雑な作りである。270は口縁直径7.7㎝，高さ2.7㎝の丸底となる完形品である。胴部中頃で屈曲して外へまっすぐ開いている。

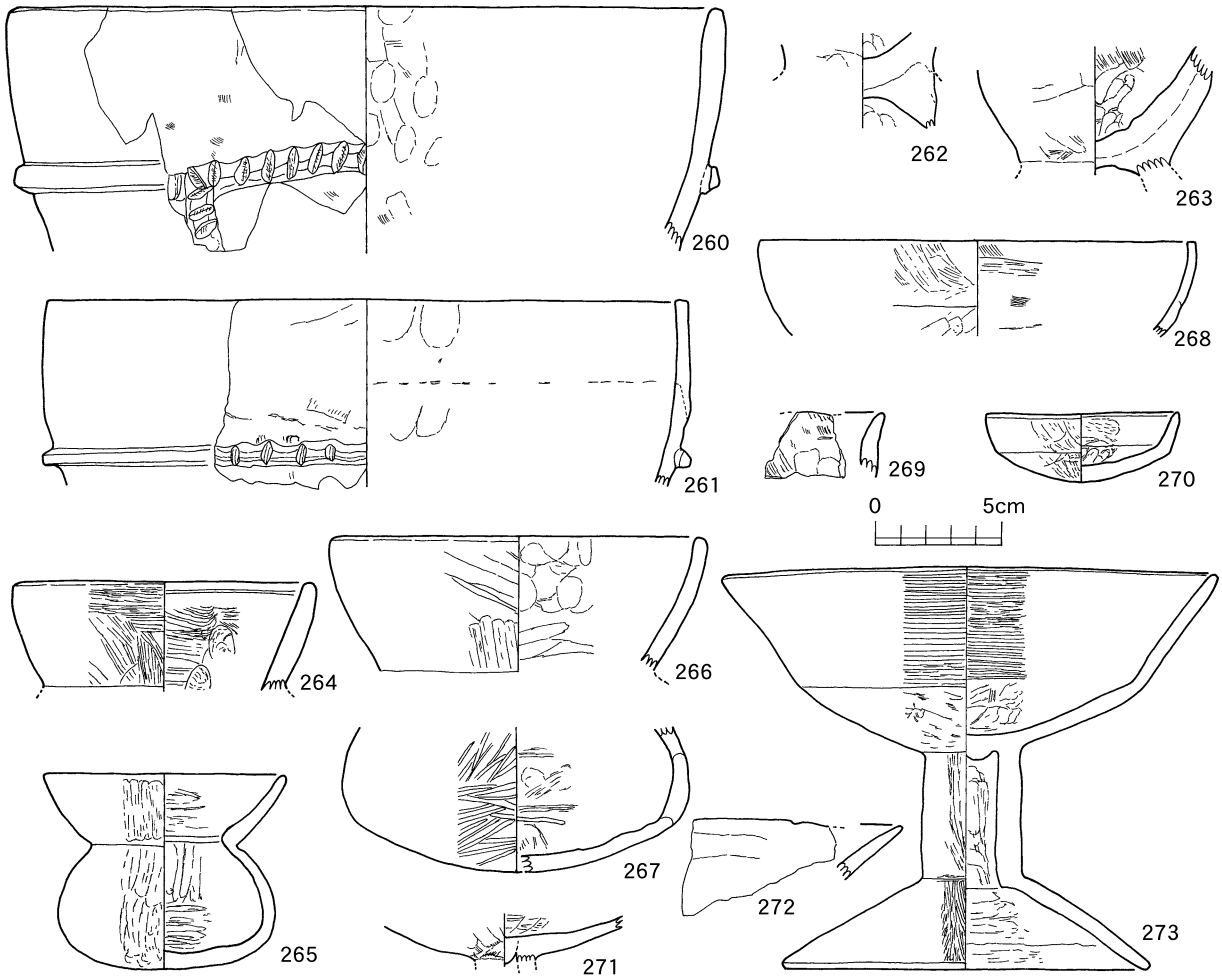
高坏形土器は口縁部がやや外反する坏部と，筒部と裾部からなる脚部である。273は口縁直径19.7㎝，脚直径14.5㎝，高さ16㎝の完形品である。坏部は丸みをもった底部と，やや屈曲して外反する口縁部から成る。脚部は棒状の筒部と，やや外へふくらむ裾部とから成る。内外ともていねいにヘラでナデているが，外面はミガキに近い。271は坏部と脚部の間に団子状の粘土を充填している。

３）３号竪穴住居跡（第68図～第70図，274～286，Ｓ193）

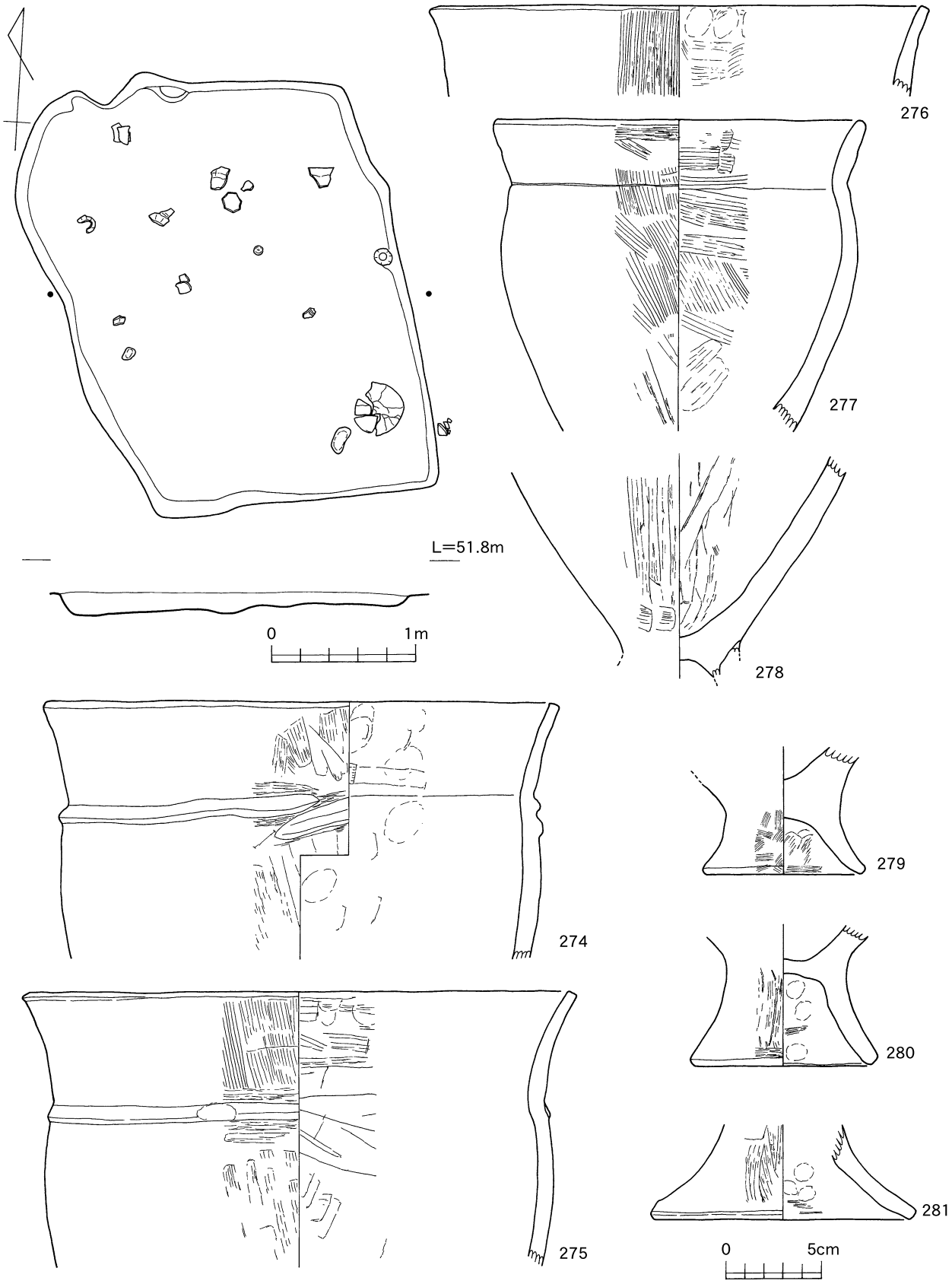
44N区で検出された主軸がN10度Wにある方形の竪穴住居跡である。南北方向が３m，東西方向が2.4mあり，深さは12㎝ある。埋土は淡茶褐色砂質土で，腐植土のブロックがまざっている。床面に土器片とともに，軽石・円礫が各１点ある。

中から甕形土器・壺形土器・鉢形土器・蓋形土器・磨石が出土している。

甕形土器は口縁部が外反するものが４個体分出土している。口縁直径は274が27㎝，275が29㎝，276が26㎝，277が19.5㎝ある。274と275は長胴形の胴部で，頸部からゆるやかに外へ開き，頸部に



第67図　２号竪穴住居跡出土土器



第68図　3号竪穴住居跡と出土土器(1)

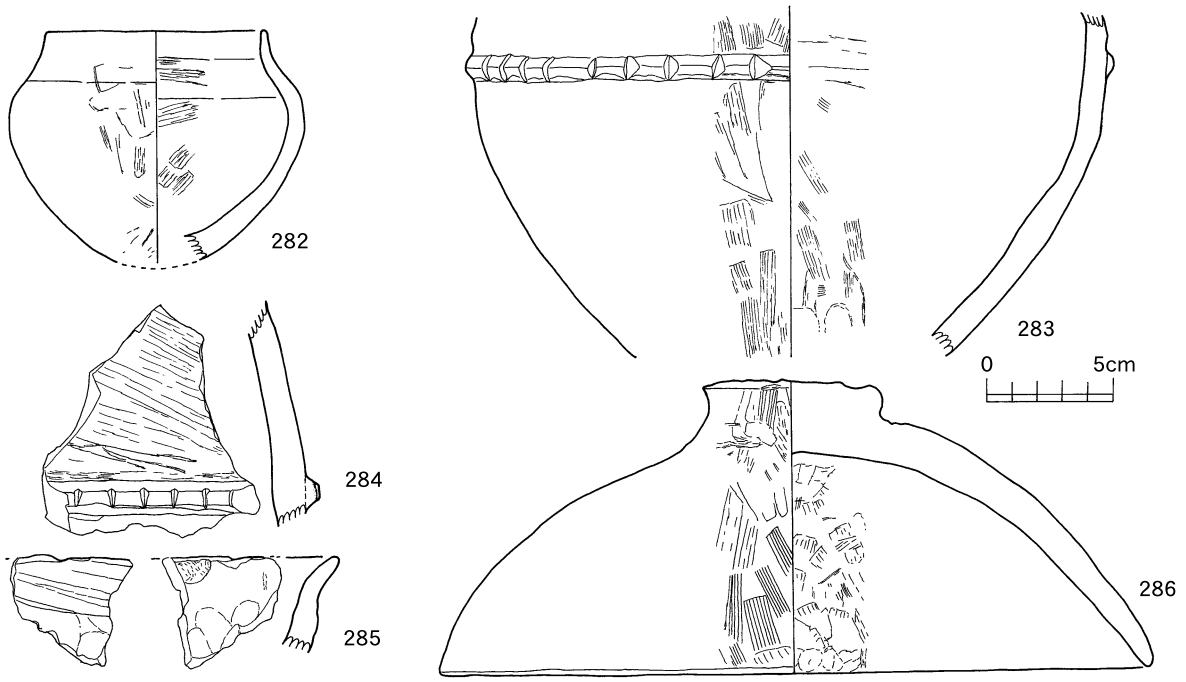
三角突帯が貼付されている。274は外面が縦方向，内面が横方向のヘラナデで仕上げ，三角突帯の接着部はすれ違いになっている。275は口縁部がややでこぼことなっており，外面は突帯の上が縦方向ハケナデ，下が縦方向ヘラナデで整形し，内面は横方向ヘラナデであるが，内面には指の押圧文がみられ，突帯は低い。276は275と同じ整形をしている。277は頸部で段となるように屈曲し，内外ともハケナデだが，外は縦，内は横ナデである。そのあとヘラナデをしており，特に外面下部はハケ目がみえないほどである。内面も下部はハケ目がよくみえない。外面にはススが多く付着し，内面の下部にはコゲがある。278は胴下部で，外面はていねいにヘラでナデておりミガキに近い。脚台がはがれており，接着状況がよくわかる。下のほうは白色化しており，灰が付着していた可能性がある。使用中にはがれた可能性もある。279～281は裾の広がる脚台で，端部は丸みをおびるものと，方形になるものとがある。底までの高さは３㎝位のものと，５㎝近くあるものがある。

壺形土器（282～284）は小型・中型・大型とある。282は口縁直径が8.8㎝，高さが9.5㎝ほどの丸底をした小型の直口壺である。口縁部はでこぼこしており，手づくね風である。283は胴部にヘラ押圧が付されたにぶい三角突帯が貼付けられる。内外ともヘラ縦ナデである。284は大型のもので，内外とも横方向のヘラナデで，断面が台形の貼付突帯には縦方向のヘラ切り凹線が付される。

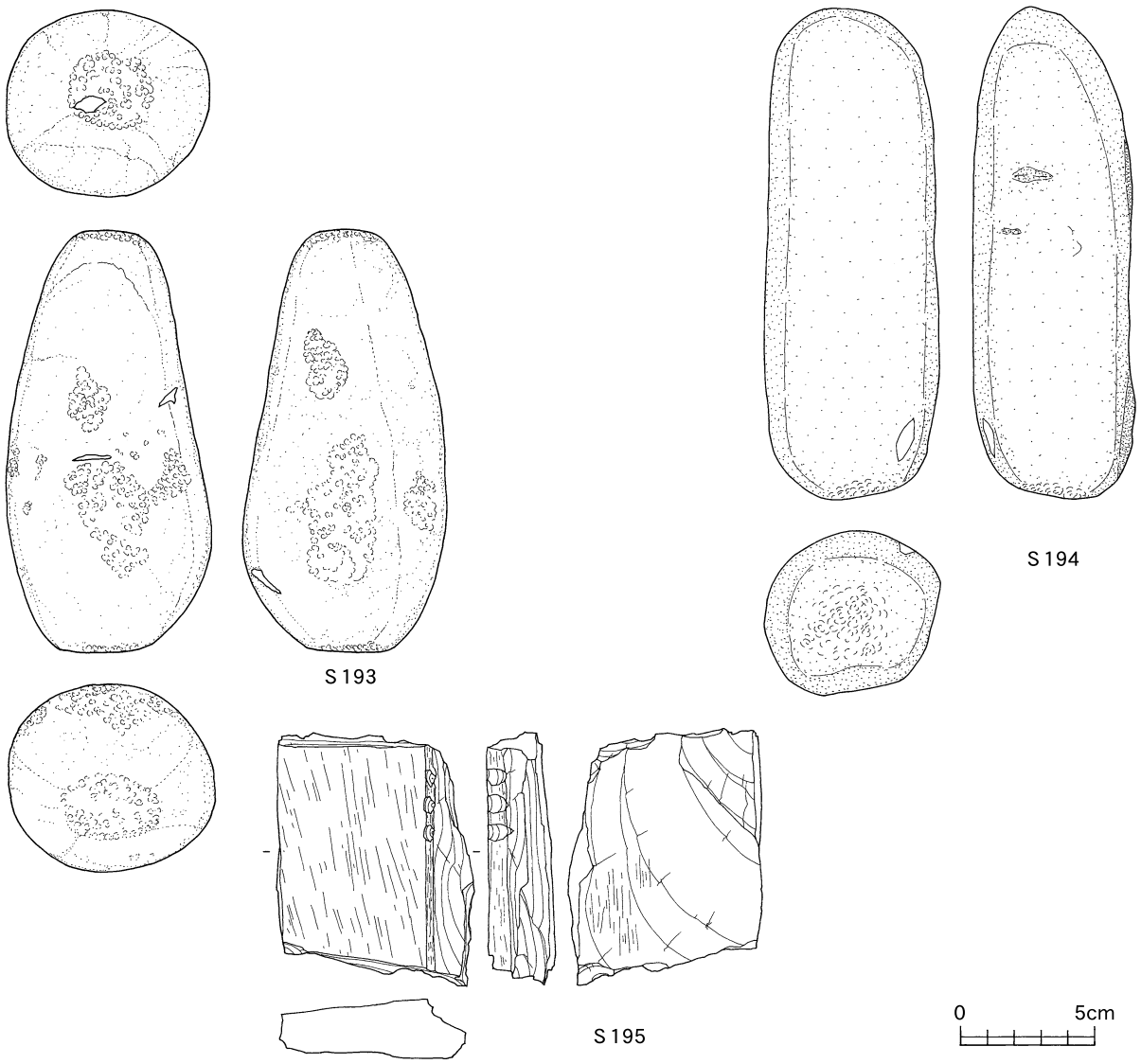
鉢形土器（285）は手づくね風の雑な作りで，内外ともヘラナデで仕上げられる。口縁が外反し，胴部は分厚くなる。内面の口縁付近には指紋が残っている。

蓋形土器（286）は倒鉢状のもので，天井部につまみがつく。天井部直径が７㎝，底部直径が28.5㎝，高さが11.7㎝あり，天井部には繊維状圧痕が付いている。外面はハケナデのあとヘラナデ，内面はヘラナデで仕上げている。内面と，外面の一部にススが付着している。

Ｓ193は砂岩製の磨石である。長さ15.6㎝，幅7.5㎝，厚さ6.9㎝，重さ1120ｇの棒状をした河原石を用い，両端を使い込んでいる。側辺部分には敲打による窪みもみられることから，凹石としても使われていたようである。



第69図　３号竪穴住居跡出土土器(2)



第70図　３号・４号竪穴住居跡出土石器

４）４号竪穴住居跡（第70図～第74図，287～347，Ｓ194・Ｓ195）

44N区で検出された直径３ｍの円形をした竪穴住居跡である。深さは45㎝あり，埋土はアカホヤのにごった暗黄褐色土である。床面近くに甕形土器・壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・手づくね土器など多くの土器片があり，他に円礫６点もある。

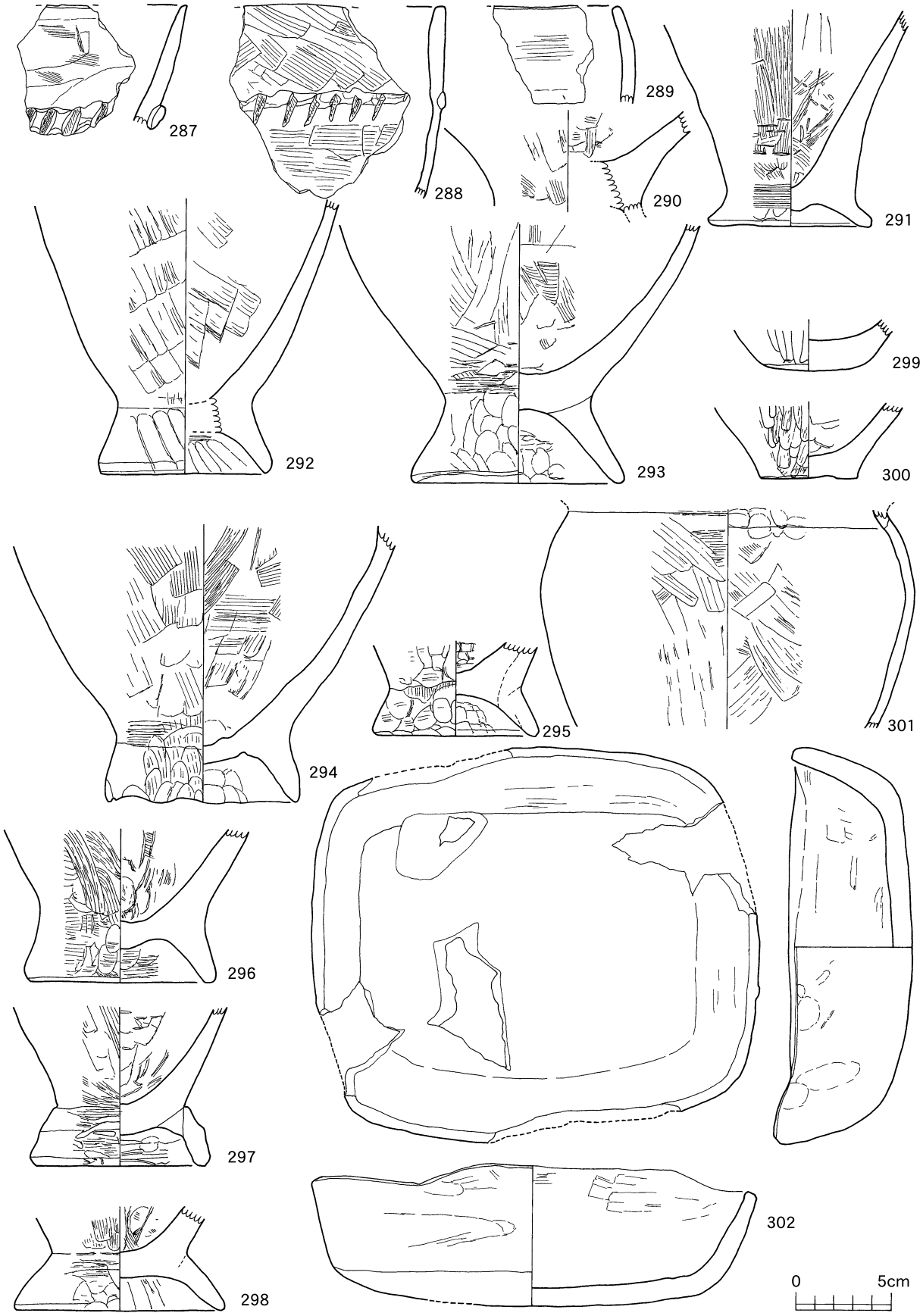
甕形土器（287～301）の口縁部は外へまっすぐ伸びるものと，直に立上がるもの，やや内弯するものとがある。いずれもヘラナデで，288の内面を除き横方向で，287の内面と，289の外面はていねいである。口縁下部には左下がりの布目あるヘラ押圧が施された三角突帯が貼付けられているが，三角突帯の先はつぶれて台形状を呈している。288は薄い作りのもので，軽く感じる。底部近くもヘラナデで仕上げているが，下部はヘラが深く押され雑な整形である。脚台は高いものと低いものとがあるが，概して低い。特に291は高台状で，291と294・296などは底がこぶ状に突出している。294は内底部が深く押さえられて薄くなっている。293～295などは脚台の調整が雑である。295の脚台は外から貼付け，貼付部の内に粘土を補充している。297は脚台との貼付部が顕著に残っており，

第71図　４号竪穴住居跡

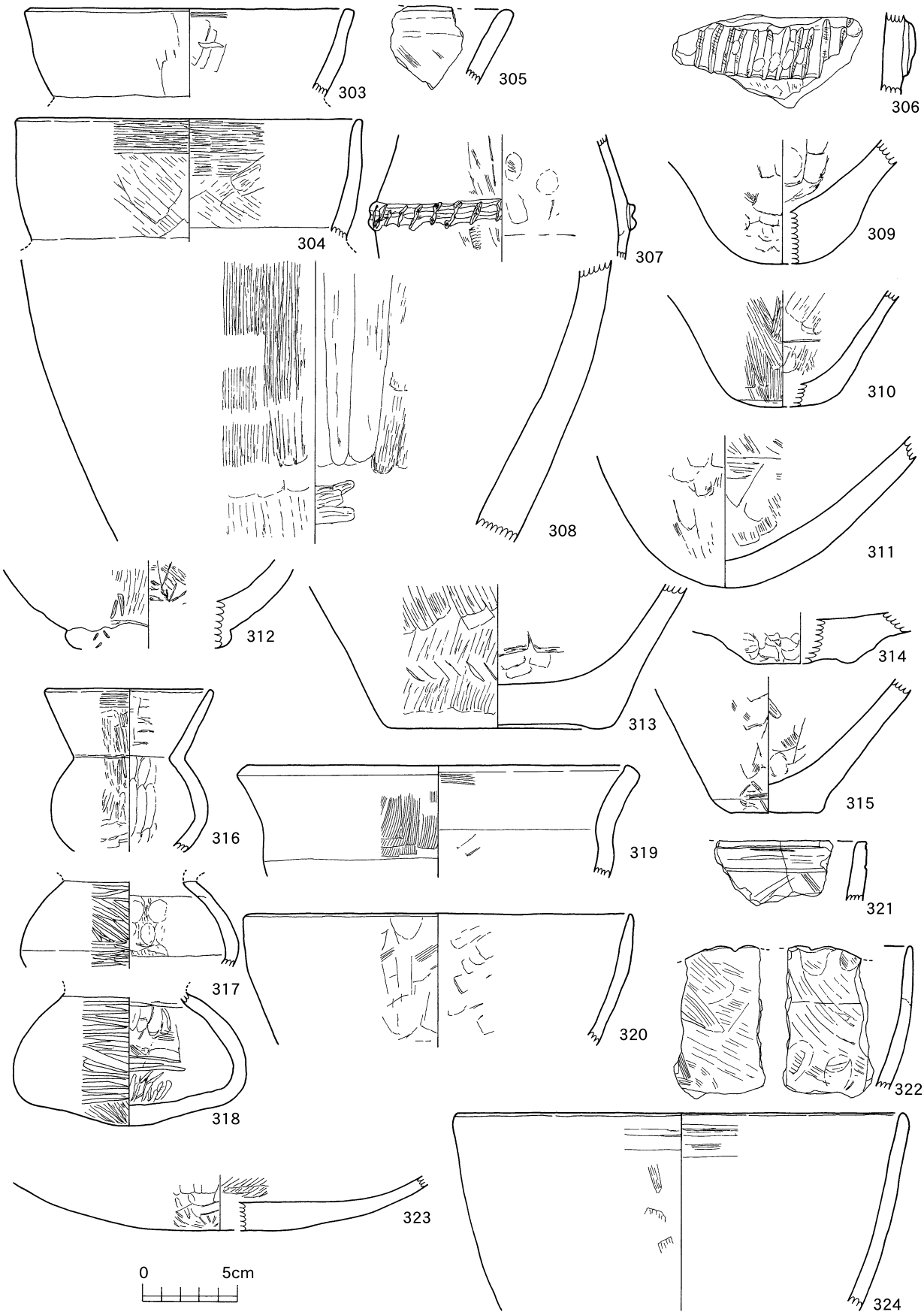
脚台部も段となっている。297・298の表面は小石粒が多いため石英粒が残ってごつごつしており，298には1.1㎝大の小石もある。299・300は平底であるが内側にコゲがある。299は丸みをもった平底，300は小さい平底でていねいなヘラナデで仕上げ，300の底中央部はケズリによって，あげ底にしている。301は薄い作りの布留甕で，頸部でくびれ，丸底になる器形と思われる。外はヘラナデ，内は斜方向ヘラケズリで仕上げている。内面の頸部付近は積み上げ痕を指状のもので押さえている。

壺形土器（303～315）の口縁部は直径18㎝ほどの袋状をしたものと，まっすぐ外へ広がるものとがある。袋状にしたものは端部近くで外が窪んでおり，304の外にはススが付着している。胴部に幅広突帯のあるものがあり，これには布痕のある縦方向のヘラ押圧が付されている。307は小型壺形土器で，胴部中央に幅広突帯が貼付けられている。突帯には凹線が引かれ，そのあと布目のある縦方向の押圧文が付されているが，部分的にはさらに凹線がみられる。突帯のある付近の内面には積上げ痕がある。308は大型のものである。底は丸底，丸みをおびた不安定な小さな平底，安定した平底がある。312は丸底だが，底付近の調整が粗く，こぶ状に突出している。314・315も同じように，底に木の葉や枝状の圧痕がみられる。313は平底だが，中央部をケズってややあげ底としている。胎土には５㎜～７㎜大の小石が多く含まれたものが多い。

坩形土器（316～318）は丸底である。316は口縁直径・高さとも９㎝ほどのもので，口縁は外へまっすぐ開き，丸底となる。内外ともヘラミガキ，あるいはそれに近いていねいなヘラナデである。317はやや大きいが，同じような形態で，精製土を用い軽い。貼付痕が良く残っている。318は下半分がややふくらんでおり，317と同じように軽い。



第72図　４号竪穴住居跡出土土器(1)

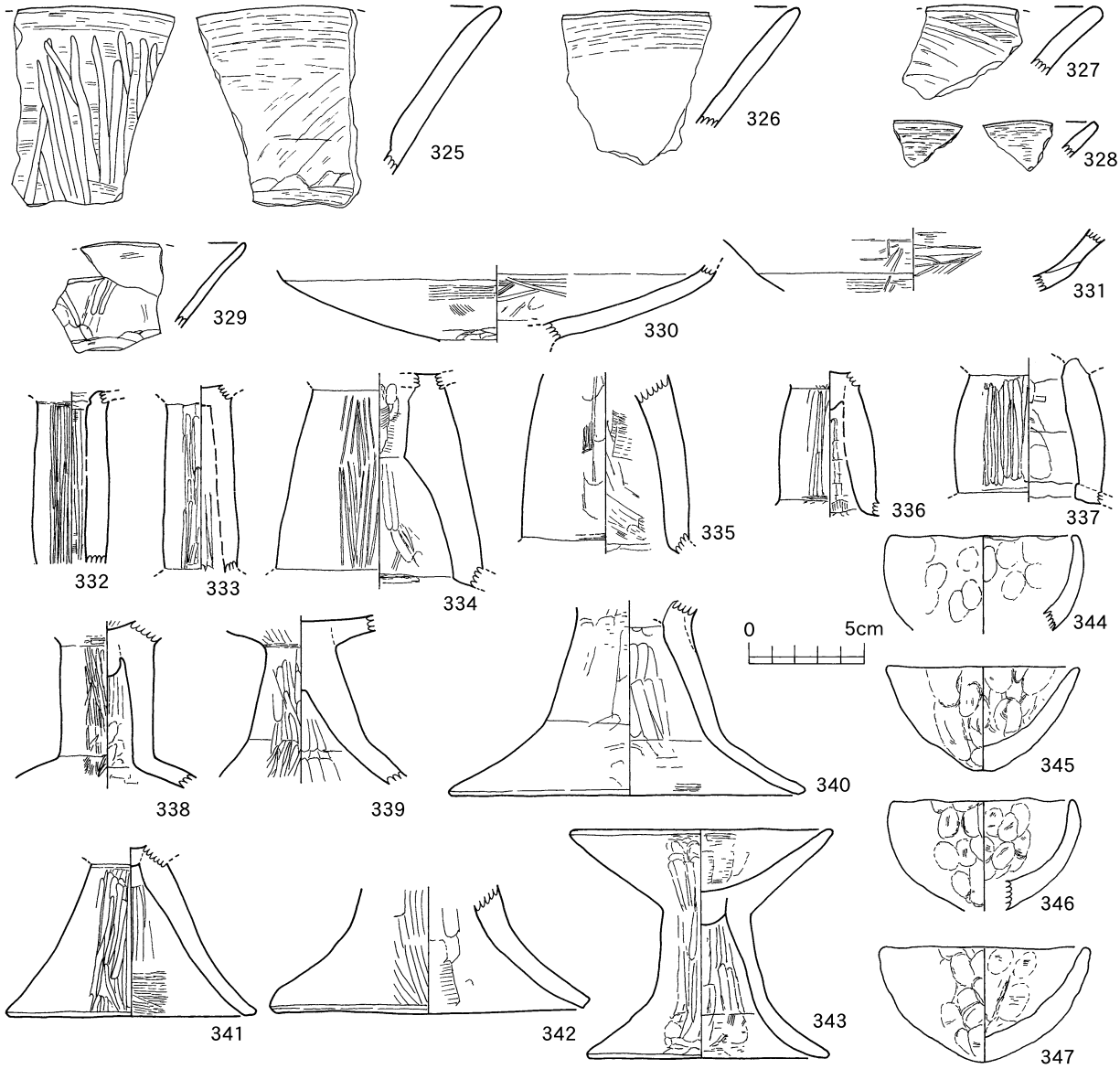


第73図　４号竪穴住居跡出土土器(2)

鉢形土器（302・319～324）には角鉢，くの字状に外反するもの，内反するもの，直立するものなどがある。302は23㎝×20㎝の方形を呈し，深さ6.5㎝ほどの鉢で，口縁部は波状を呈している。丸みをおびた平底で，周辺はていねいなヘラナデで仕上げている。319は口縁直径が21㎝あり，くの字状に外反し，口縁部はヘラによるかきあげ調整である。外にススが付着し，蓋の可能性もある。内反するものは直径20.5㎝と大型である。321は直立し，口縁部に２～３条の沈線がみられる。323はていねいな調整で仕上げており，直口壺の可能性もある。324は口縁直径24㎝と大型である。

高坏形土器（325～342）の坏部は外へまっすぐ広がる口縁と浅い底部とからなる。329は薄い作りで，328に似ている。330は２号住居跡出土の破片と接合している。325と330は外にススが付着しており，蓋に転用された可能性もある。筒部は管状となっており，細いものと，太いものがある。裾部は広がるものと，まっすぐ伸びるものがある。概してていねいな調整だが，332は粗い作りである。

器台形土器（343）は口縁直径11.5㎝，裾直径11㎝，高さ10㎝の完形品で，内外ともていねいにヘラミガキで仕上げている。裾の内面には指紋の痕が残っている。



第74図　４号竪穴住居跡出土土器(3)

手づくね土器（344～347）は口縁直径が８㎝～９㎝，高さが５㎝ほどのとんがり底のもので，344や346のように口縁が内反するものと，345・347のように外へ開くものとがある。

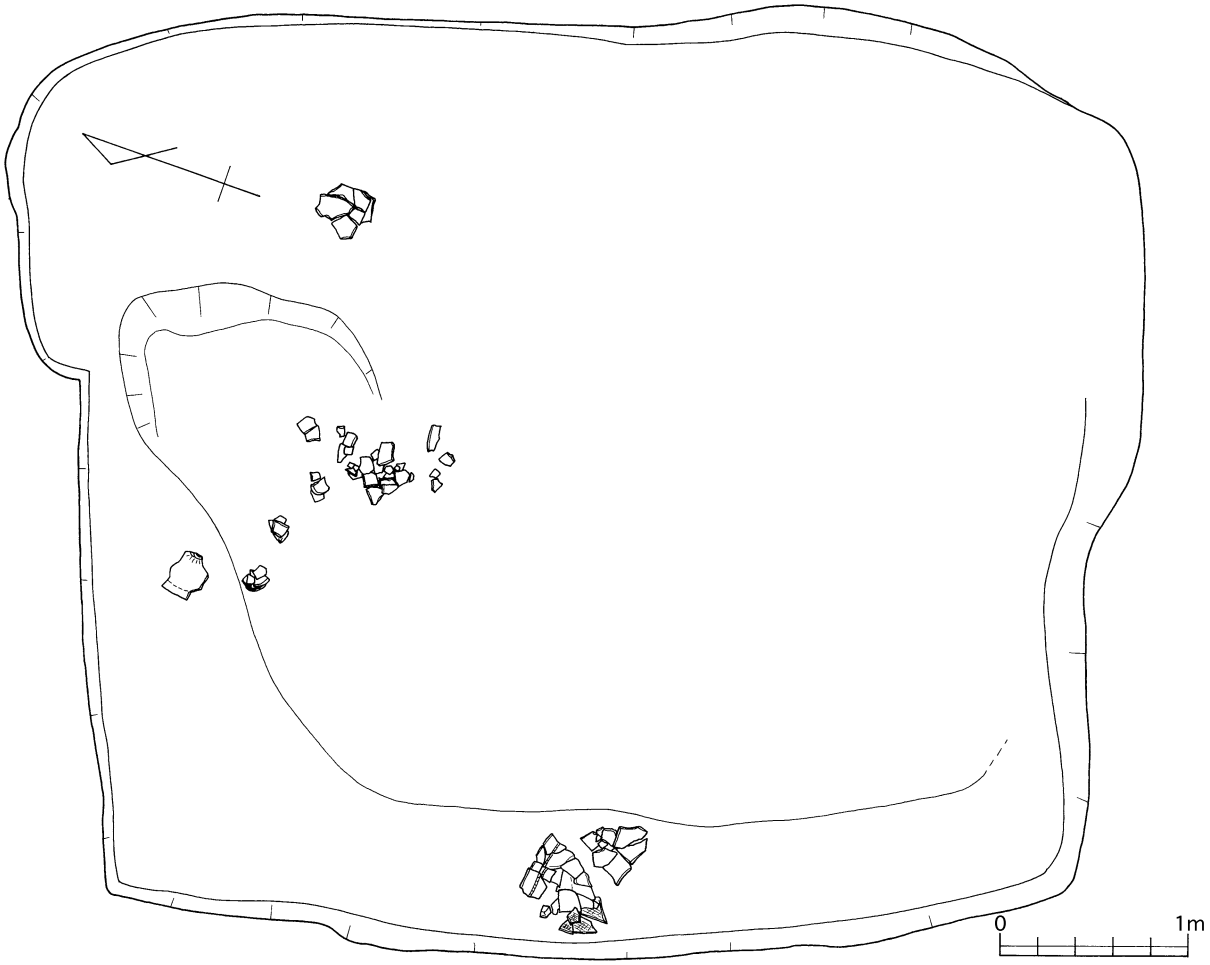
Ｓ194は長さ18.3㎝，幅6.5㎝，厚さ5.9㎝の棒状を呈する砂岩製砥石で，一端に磨痕跡と窪みがあることから磨石とともに凹石としても使われていたことがうかがえる。Ｓ195は粘板岩製の扁平な仕上げ砥である。すり面の端は直線的に切れており，擦切技法によって作られたことがうかがえる。ここには３か所にくさび痕があり，このくさびの下ではがれているため側面は整然としない。

５）５号竪穴住居跡（第75図～第77図，348～356）

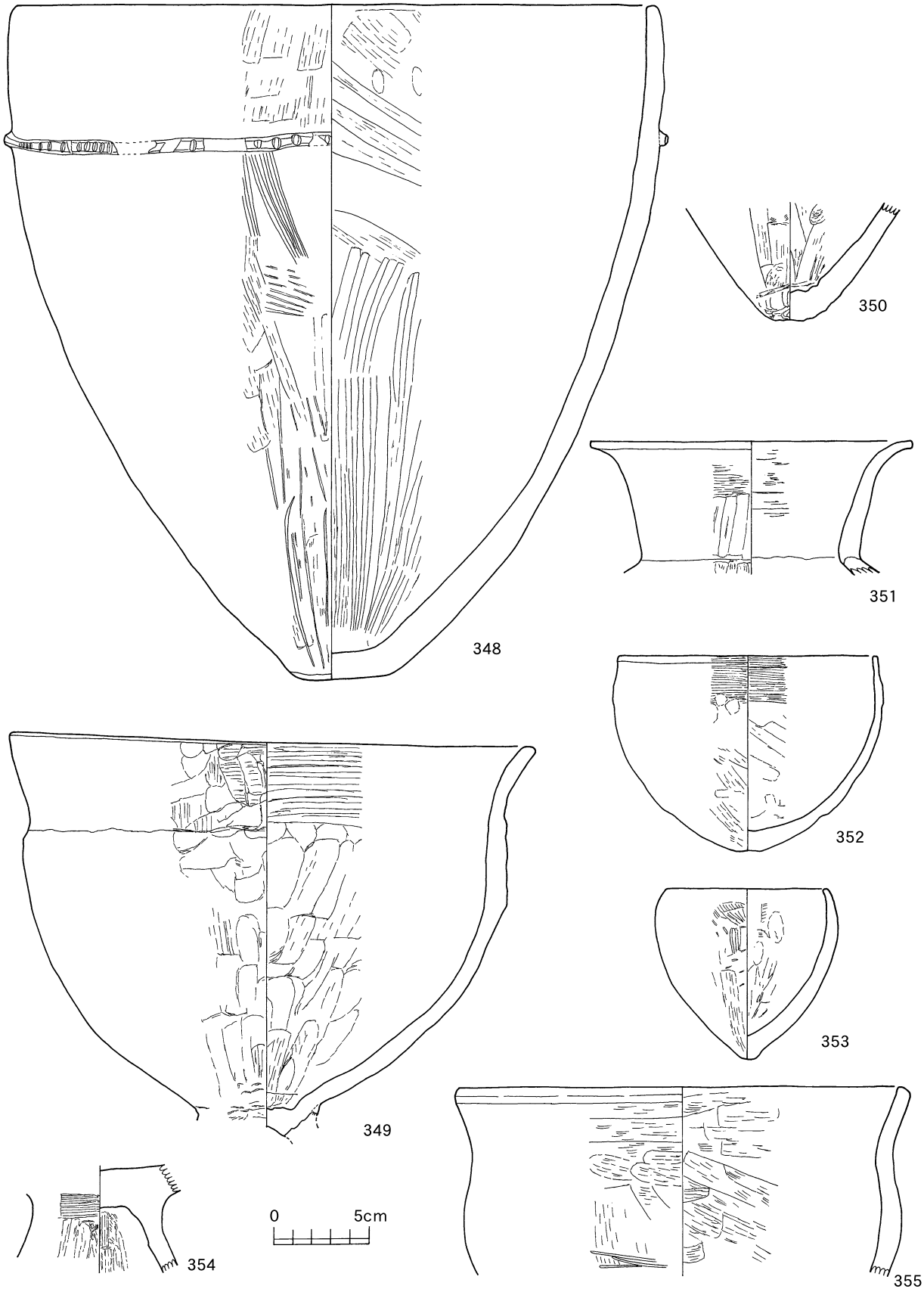
47Ｎ区で検出された主軸がＮ20度Ｗにある隅丸方形の竪穴住居跡である。東西方向が５ｍ，南北方向が5.6ｍある。北東隅が幅160㎝，長さ40㎝ほど北に突出している。床面に土器が散布している。

中から甕形土器・壺形土器・鉢形土器が出ている。

甕形土器はやや内反するものと，逆に外反するものとがある。348は口縁直径が33㎝，高さが35㎝ある小さい平底のもので，ほぼ完全なものである。底部は丸みを帯びた平底で直径は５㎝ほどである。口縁下に断面形が台形の突帯が貼り付けられるが，その上に浅いヘラ押圧が付される。外面の下半部は粗い縦方向のヘラナデのあと，部分的にヘラミガキがされる。上半部もヘラナデだが，部分的にはハケナデの痕跡もみられる。内面は上半部が斜方向，下半部が縦方向のヘラナデだが，下半部はミガキに近いていねいなナデが付される。349は口縁部がでこぼこし，胴部の内外とも調



第75図　５号竪穴住居跡

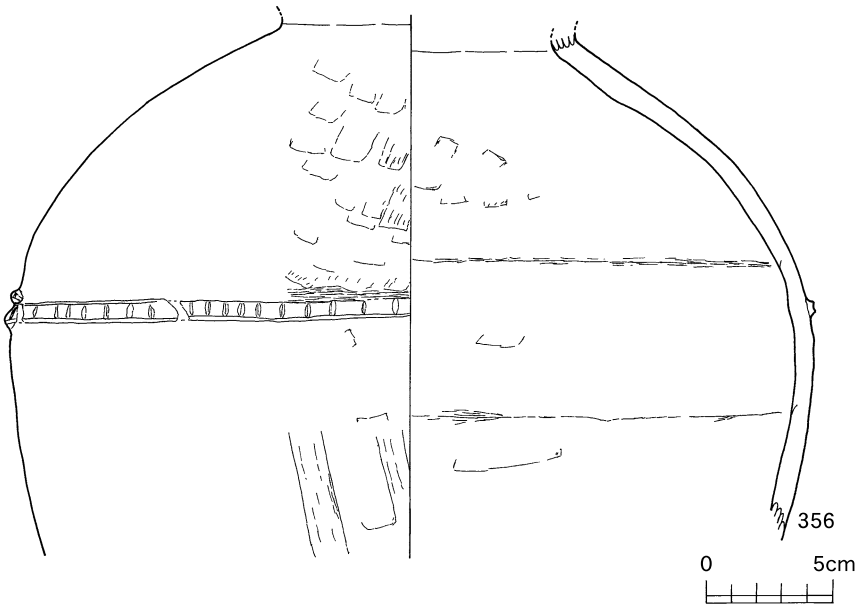


第76図　5号竪穴住居跡出土土器(1)

整の粗い雑な作りのもので，脚台を欠いているが，ほぼ完全なものである。口縁直径が27.5㎝，残存高が20.5㎝とやや低い器形をし，内外ともヘラナデで仕上げているが，口縁部は横方向，胴部は縦方向のナデである。外面は丸い胴部と外反する口縁部から成るが，その境はかきあげによって段を作っている。外面の上半部にはススが付いているが，下半部にはない。内面の下半部にはこげが付いている。脚台ははがれている。355も外反する口縁の器形だが，口縁部と胴部の境はゆるやかに移っており，部分的に分厚い部分もある。

壺形土器の口縁部（351）は端部近くで強く外反し，直径が17㎝ある。口唇部はやや窪んでおり，調整は内外ともていねいなヘラナデである。頸部で強く屈曲している。356は残りの良い胴部で，くびれた頸部から丸みをおびた胴部へ移り，最大径の部分に断面形が台形の突帯が貼り付けられる。突帯の接合部分はすれ違っており，突帯上にヘラ押圧がみられる。内外ともていねいなヘラナデで仕上げるが，内面には２段に輪積み痕跡がみられる。底（350）は丸底で，内外とも縦方向のヘラナデで仕上げているが，底にはアンペラ状の圧痕があり，さらに指紋が多く付着しているが，これは内側の底にもある。

鉢形土器は３種がある。352は口縁直径が13.5㎝，底径が1.5㎝，高さが10㎝のまり形のものである。内外とも上半部が横方向，下半部が縦方向のヘラナデで仕上げているが，外面には指紋が残っている。内面はていねいである。353は口縁直径が8.5㎝，高さが９㎝の乳房状をしたもので，口縁部が内弯し，底は乳首状の突起がある。外はミガキに近いていねいな縦方向ヘラナデ，内面は縦方向ヘラナデで仕上げ，内側に指紋がみられる。354は台付のもので，鉢部の底は分厚く，脚台は高い。大型のものである。外面や底部はていねいなヘラナデで仕上げている。



第77図　５号竪穴住居跡出土土器(2)

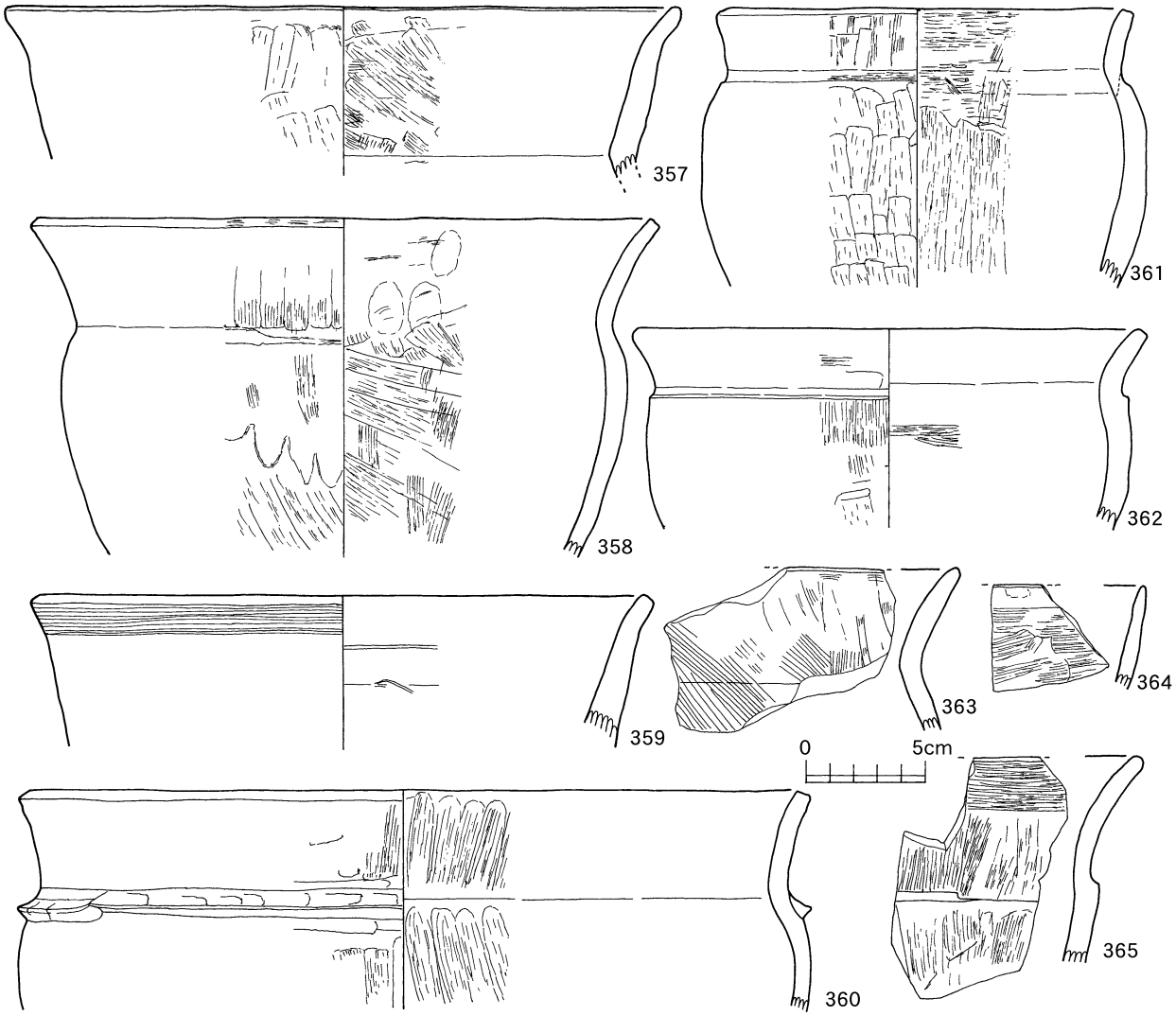
第２節　土師器

甕形土器・壺形土器・小型壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・蓋形土器・ミニチュア土器・手づくね土器などがある。

１　甕形土器（第78図～第80図357～383）

口縁部はくの字状に外反するものと，直口あるいは内反するものとがあり，底部は脚台が付くものと，丸底のものとがある。

357～365・370がくの字状の口縁になるもので，このうち360は頸部に突帯が貼付けられる。357は内面が稜をもって屈曲しており，359とともに外面の口縁近くは段をもって外反する。359は頸部近くが分厚く，端部は矩形を呈している。358・361は頸部がくびれて外反度は強いが，内面の稜ははっきりしない。縦方向のヘラナデで仕上げ，358はかきあげ様になっている。360も358・361と同じような形態で，頸部に三角突帯が貼付けられる。この突帯の上部のみヘラ押圧がみられ，突帯紐の端は少しずれている。362・365も頸部で器厚を変えて段となり，強く屈曲している。363・370は内外ともゆるやかに反っている。364は薄い器厚である。口縁直径は，361・362のように17.5㎝，21.5㎝しかない小型のものと，357～359のように26㎝～28㎝と中型のもの，360のように33㎝ある



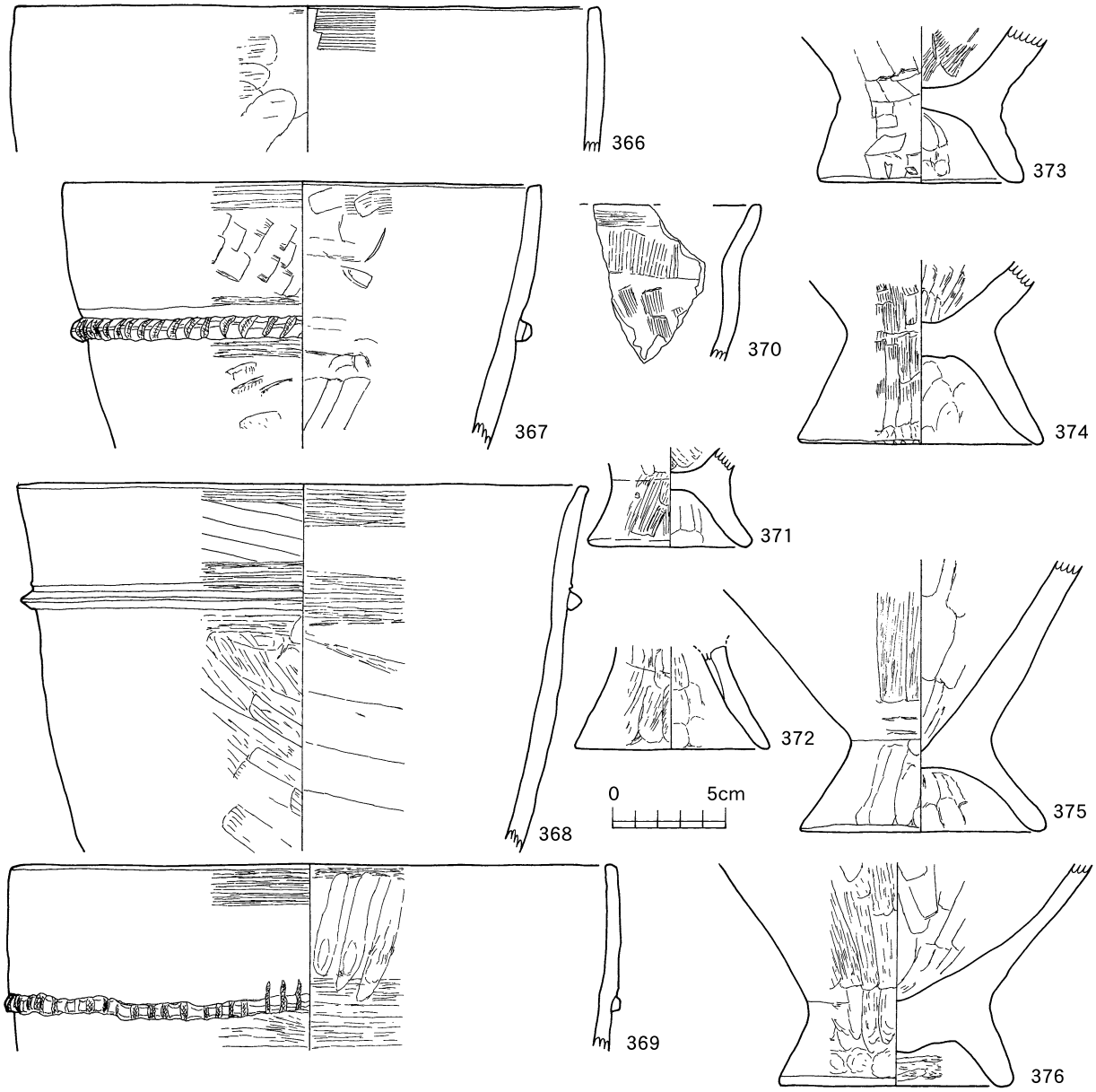
第78図　甕形土器(1)

大型のものとがある。器面調整はヘラナデが主体であるが，363は内外ともハケナデである。

366～369は口縁部が直口あるいはやや内反するものである。367～369は三角突帯が貼付けられるもので，368が刻みがないのに対して，367・369には布目のあるヘラ刻みが付される。口縁直径は367が21㎝と小さいが，他は25㎝～27㎝ある。

脚台は直径が７㎝～８㎝と小さいものと，９㎝～11㎝ほどのものとがあり，高さは３㎝～４㎝ほどであるが，375のように２㎝足らずの低いものもある。調整はヘラナデであるが，373は雑な作りである。373は胎土も９㎜大のものもあるほど大粒な石が多く含まれた粗い土である。

377～383は底まである大きな破片がないため定かではないが，器厚が薄いことと，器形からして丸底の，いわゆる布留甕と思われる。379は持ち込みと思われるもので，口縁直径が14㎝あり，頸部でくびれ，やや内傾ぎみの立上がりのものである。外面はヘラミガキ，内面はヘラ横ナデで仕上げている。377は頸部でくびれ，外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部で，くびれ部に突帯が貼付



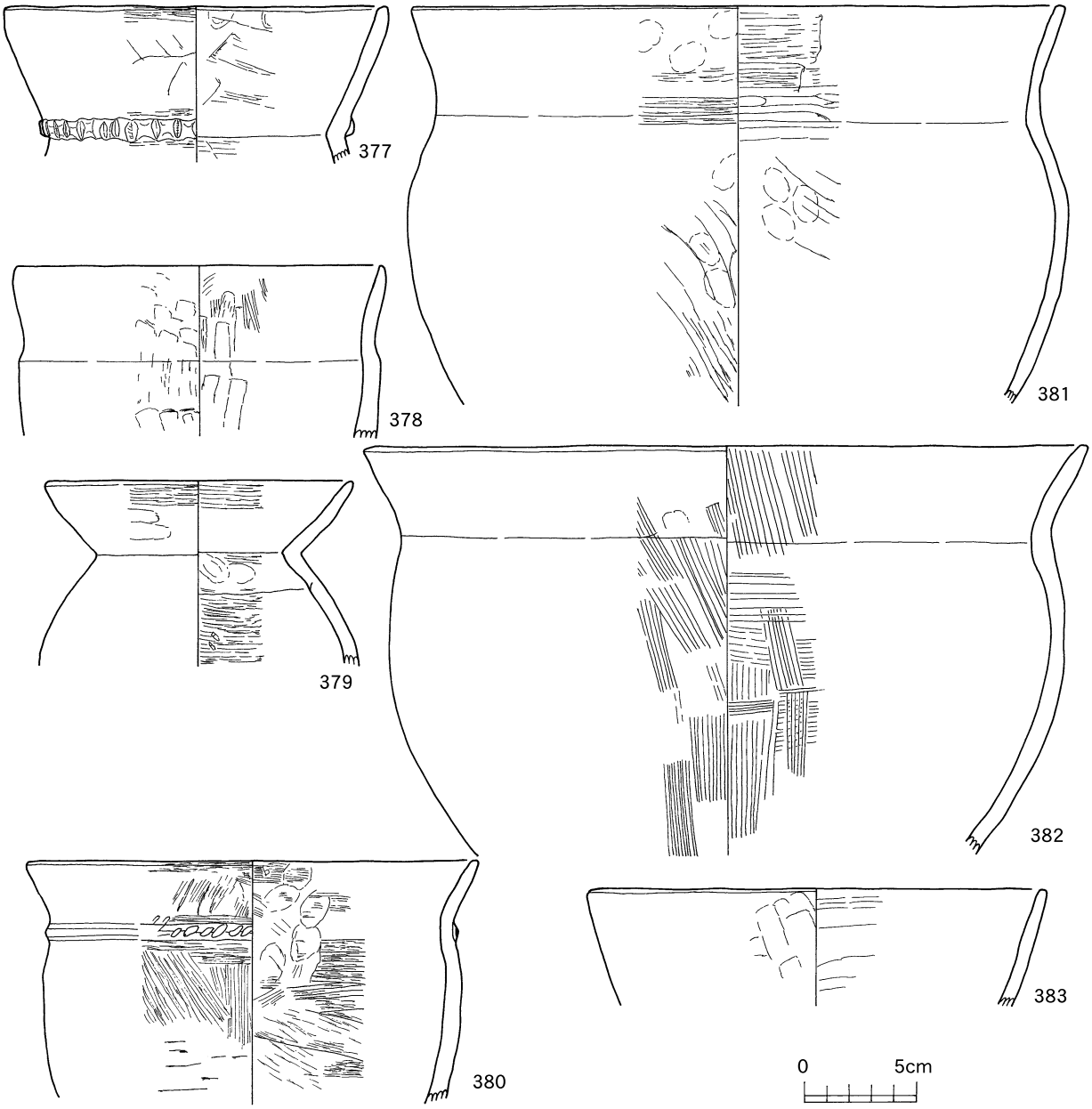
第79図　甕形土器(2)

けられ，布目のあるヘラ刻みが付される。383も同様の作りであるが，胎土が粗く特殊である。378は雑な作りで，口縁部もでこぼこしている。380は頸部に左下がりヘラ押圧の付される三角突帯が貼付けられる。381・382はゆるやかな外反口縁であるが，381がヘラナデであるのに対して，382はハケナデである。口縁直径は377・378が16㎝～17㎝，380・383が20㎝程度，381が29㎝，382が32㎝である。

2　壺形土器（第81図～第83図384～416，418）

完形品がなく全形は不明だが，口縁部・頸部・胴部・底部などがある。

口縁部は外へ開くものと，二重口縁になるものとがある。外へ開くものは外反するものと，まっすぐ伸びるものとがある。384は外反するもので，口唇部がやや窪んでいる。385は雑な作りで，口唇部は外へ下がり，外面の口縁部付近には部分的に沈線がみられる。386はまっすぐ伸びる分厚い作りで，頸部がくびれ，口縁近くは内外ともやや窪んでいる。387は外へ弯曲しているもので，頸



第80図　甕形土器(3)

部には凹線が巡っている。口唇部には浅い沈線が見られる。388は外へまっすぐ伸びており，胎土に大粒の石を含んでいる。390は頸部から外反しながら立上がり，口唇部に沈線がみられる。肩部はふくらんでおり，内面に輪積み痕跡がみられる。これらの口縁直径は11㎝～18.4㎝ある。389・391は二重口縁で，389はやや外へ開き，391は直口する。両方とも調整はていねいで，ミガキに近い。

416は口縁部を欠いているが，頸部以下はほとんど残っている。57Ｊ・Ｋ区，58Ｋ区に散らばっている。なで肩の長胴形で，丸底となる。頸部でくびれて，まっすぐ立ち上がっている。胴部上半に断面形が台形の突帯が貼り付けられている。外面は摩耗し，内面は剥離しているため整形痕が見にくいが，外面は縦方向へラナデで，部分的にハケナデ痕がみられることからハケナデのあとへラナデをしたものと思われる。最大直径が26.5㎝，残存高が30.5㎝で胴部中央はやや薄く作られている。

頸部は細くくびれるものが多いが，393は直径20㎝と広い。392・393は三角突帯が貼付されているが，392は貼付したあと沈線を施し，そのあとへラによる押圧がみられる。393の外面はミガキに近い横方向のへラナデであるが，そのあと縦方向の暗文がみられる。

肩部は393・395のように外へ張り出すものと，394のように肩が張るものとがある。

胴部には突帯が貼付けられているが，395・396は細く，397は幅が広い。396は突帯に縦方向のへラ刻みがある。397は突帯に二条の沈線がみられ，そのあと布目のある縦方向へラ押圧がみられる。

底部は丸底，小さい平底，安定した平底とがある。399の底は摩滅している。402は丸底だが，底近くでくびれている。403は内外ともていねいな縦方向のへラナデ仕上げだが，特に外面はていねいでミガキに近く，ツルツルしている。406は粗いナデ整形で，底には棒状のへこみがみられる。404・411は同一個体の可能性があるでこぼこした平底である。413は充実高台風の平底で，底には植物質の圧痕がみられる。414は不安定な平底で分厚い。415は厚さが4.5㎝と異状に分厚く，大型壺形土器の底である可能性が強い。

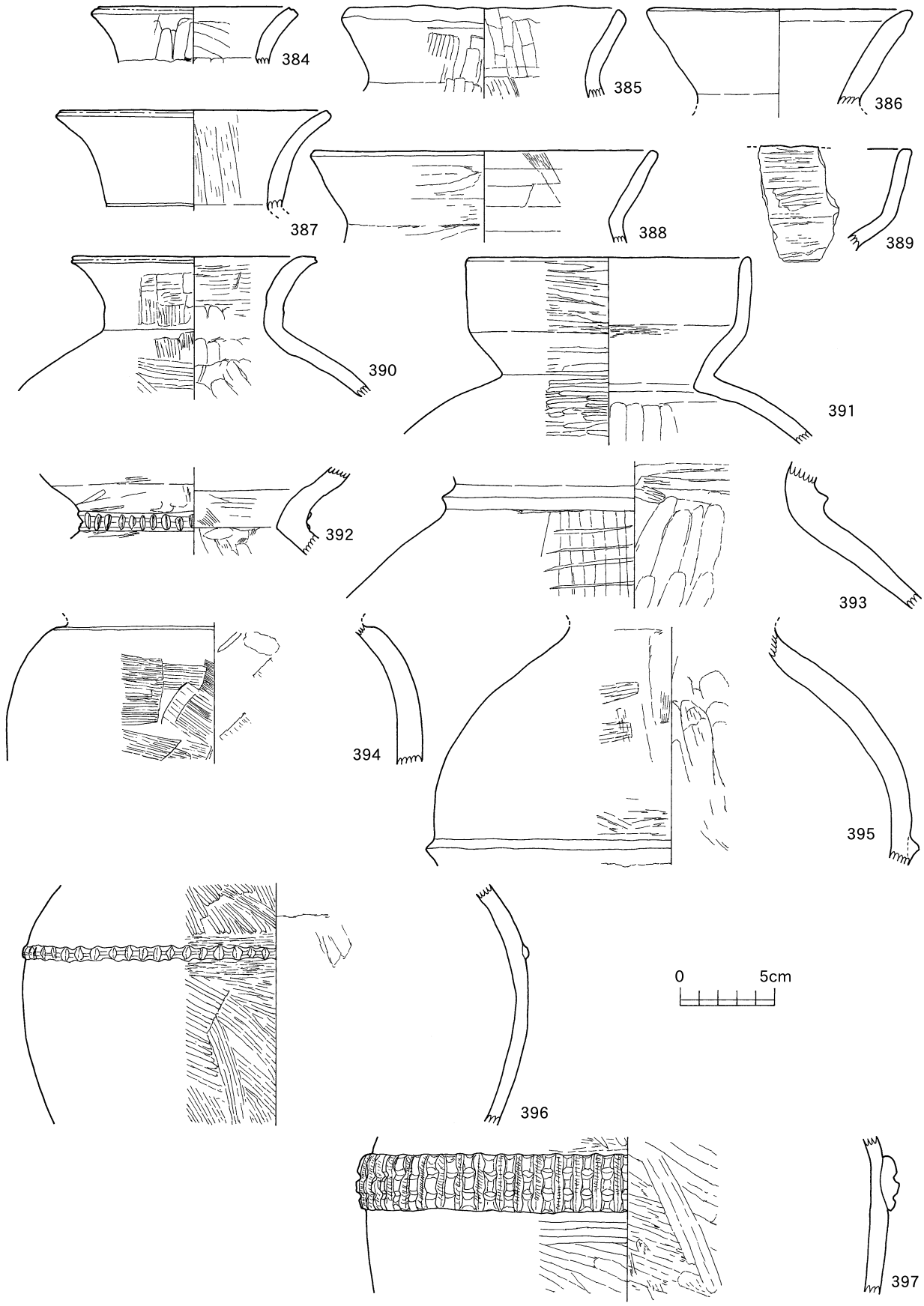
418は口縁直径が22㎝，最大直径が52㎝ある大型の壺形土器である。くびれた頸部からまっすぐ外へ開きながら立上がり，口唇部には凹線がみられる。頸部には先端のにぶい三角形の突帯が貼付けられている。胴部の中央よりやや上にも突帯が貼付けられているが，これは断面形が台形を呈する。表面の摩滅・剥脱が目立つが，外面の口縁部と胴部の下半部は縦方向のへラナデ，胴部上半部は縦方向のハケナデで仕上げている。内面は口縁部が横方向，胴部が縦方向のへラナデである。

３　小型壺形土器（第84図419～426）

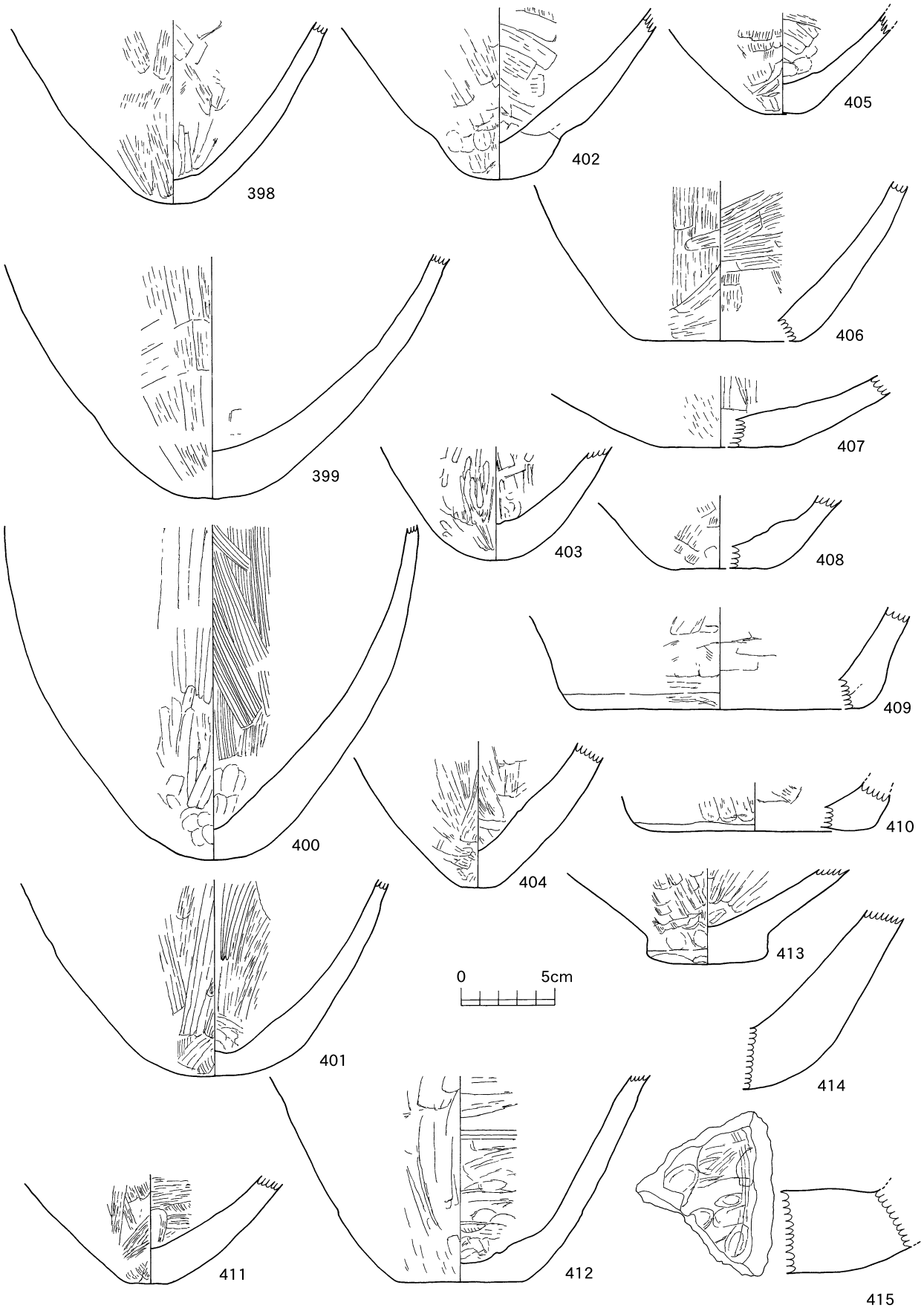
口縁部はやや外反するものと，直口するものとがある。直径は419が９㎝，420が11㎝あり，420は端部近くに少し離れて２条の沈線が巡っている。419は直口ぎみに立ち上がるが，端部がやや外反し，内面は横方向のへラミガキである。421と422は頸部でくびれて，口縁はやや内傾ぎみに立上がり，丸みをおびた胴部となる。423と424は短かい肩部から底へ向かって丸みをおびて移る器形で，ていねいにナデている。425は稜ははっきりしないが，胴の張った長胴形丸底壺で，内外ともへラナデである。426は小さい平底で，外にススが付着していることから甕形土器の可能性がある。

４　坩形土器（第84図427～429）

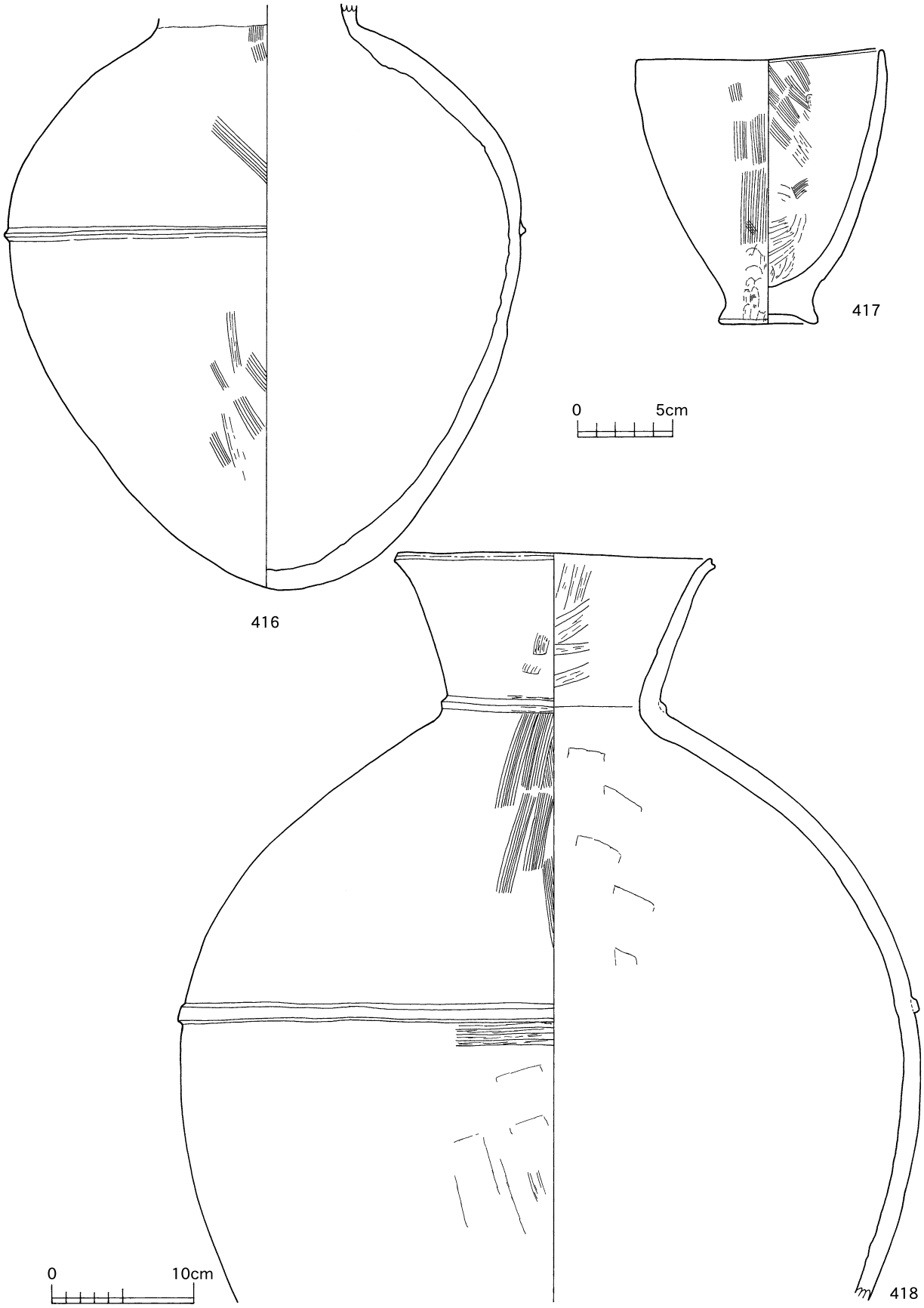
427は最大径が下半部にあるもので，この直径は7.5㎝と小型である。頸部でくびれ，外へ広がりながらまっすぐ伸びる。残存高4.8㎝である。頸部近くに接合痕がみられる。429は丸みをもった器形で，やや大きい。口縁部との接合痕がみられる。ともに外面はへラミガキで仕上げている。



第81図　壺形土器(1)


398
402
405
406
399
407
403
408
400
409
404
410
413
401
0
5cm
414
411
412
415

第82図　壺形土器(2)



第83図　壺形土器(3)・鉢形土器(1)

5　鉢形土器（第83図，第85図417，430～447）

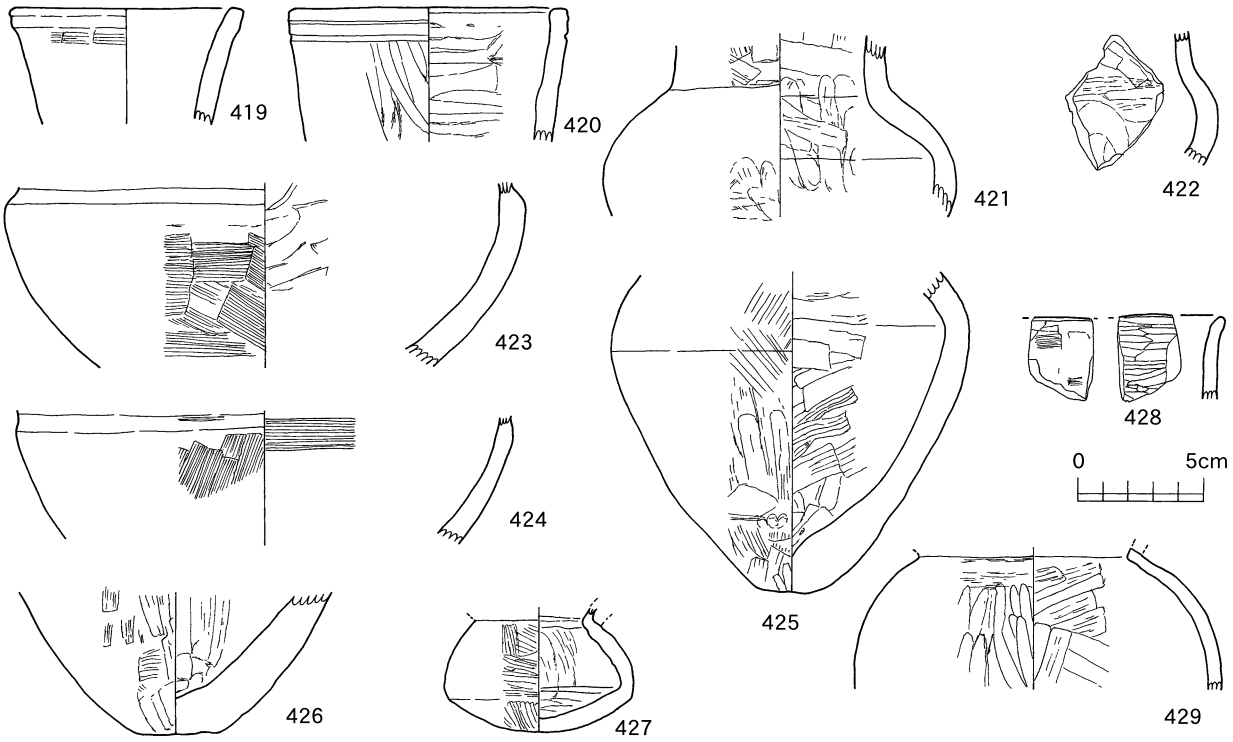
口縁部は内弯するもの・直立するもの・外反するものがあり，底部は安定した平底・不安定な平底・脚台付きのものがある。

417は長い鉢部に低い脚台が付くもので，完形品である。口縁直径が13㎝，高さが14㎝，脚台直径が5.2㎝ある。内外とも上半部はハケナデ，下半部はヘラナデであり，内面の口縁付近に指紋が付いている。赤っぽい発色をしている。

430は口縁端がいくらか欠けているが，ほぼ完形のもので，口縁直径が13㎝，高さが９㎝ある。やや内弯しており，内外ともヘラナデで，外面が縦方向，内面が横方向である。底は雑な作りをした直径4.5㎝ほどの不安定な平底で，繊維痕もみられる。431もやや内弯するもので，口縁付近で内外とも段をもち，少し薄くなっている。内外ともヘラナデで仕上げ，外面が縦方向，内面が横方向である。それぞれに沈線様のものがみられる。432～434はやや広がりながらまっすぐ伸びるもので，端部が細くなるものと，矩形を呈するものとがある。434は直径10㎝と小型だが，433は大型である。435は外反する口縁をもつもので，胴部に沈線がみられる。

436～440が平底で，439はややあげ底となる。436の底は不定形で，一部に繊維痕があるが，ヘラでていねいにナデている。438は６㎜大ほどの大きな茶色石を多く含む特殊な土を用いており，やや広い平底である。440はていねいなナデをしているが，でこぼこのある雑な平底で繊維状圧痕がある。

441～446は脚台付きのものである。441と443はやや高い脚台で，441は裾が外へ開くスマートな脚台である。443は脚台はヘラナデだが，胴部は縦方向のハケナデである。444の脚端部は厚さが1.3㎝と分厚く，端部はていねいなヘラナデで仕上げている。442・445は低い雑な脚台が付き，ナデも粗い。



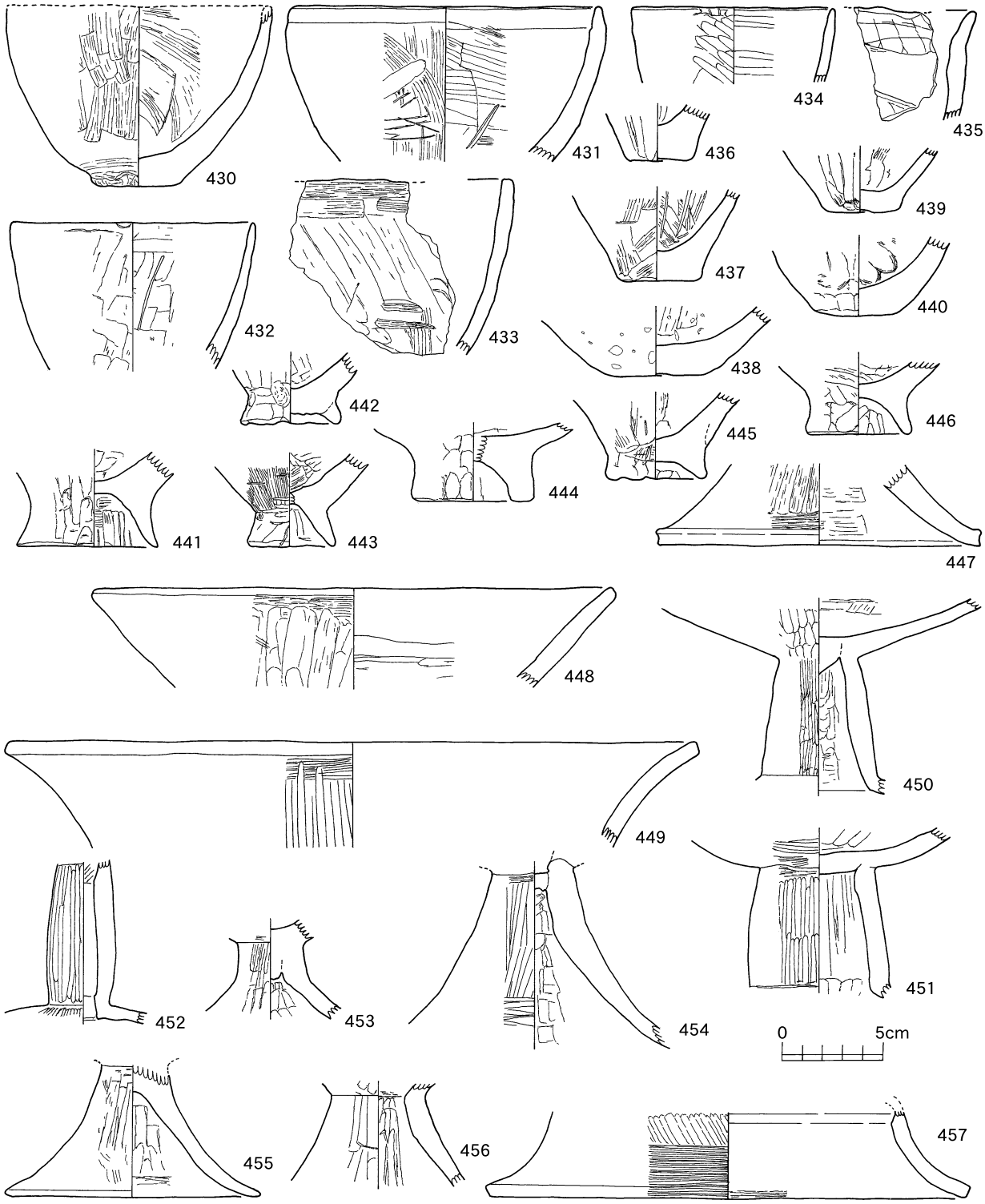
第84図　小型壺形土器・坩形土器

447は脚端の直径が16㎝と広い脚台で，端部はやや窪んでいる。外面はミガキに近い，ていねいな縦方向ヘラナデで，丹らしきものが付着している。

このほかに，白っぽい発色をし，砂がごつごつした指宿産鉢かと思われる破片が３点ある。

６　高坏形土器（第85図448～455）

外反する大型の坏部と筒部・裾部から成る。



第85図　鉢形土器⑵・高坏形土器

坏部は外反するもので，448は外反度が少なく，口縁部と底部との境は凹線風になりはっきりしない。直径が26㎝で，端部は丸い。449は口縁直径が34.5㎝の大型のもので，口縁端部は方形となる。

脚部は筒部があり，屈曲して裾部が広がるものと，筒部のはっきりしないものとがある。450～452は筒部のあるものであるが，やや外へ開くものと，中ふくらみとなるものがある。裾部へは強く屈曲して広がる。451は最大直径７㎝と太く，逆に452は3.5㎝と細い。外面調整はともにていねいにミガかれている。坏部との接合は，中央に団子状のものを充填するものと，下から押し付けるものとがある。453～455は筒部がなくゆるやかに端部へ広がるもので，455は直径12.5㎝あり端部は丸みを帯びて細くなる。いずれも外はヘラミガキ，内はヘラナデで仕上げている。

７　器台形土器（第85図456）

坏部がまっすぐ外へ開きながら伸びるもので，裾部も外へまっすぐ伸びている。内側もナデている。筒部のない高坏形土器に似ている。

８　蓋形土器（第85図457）

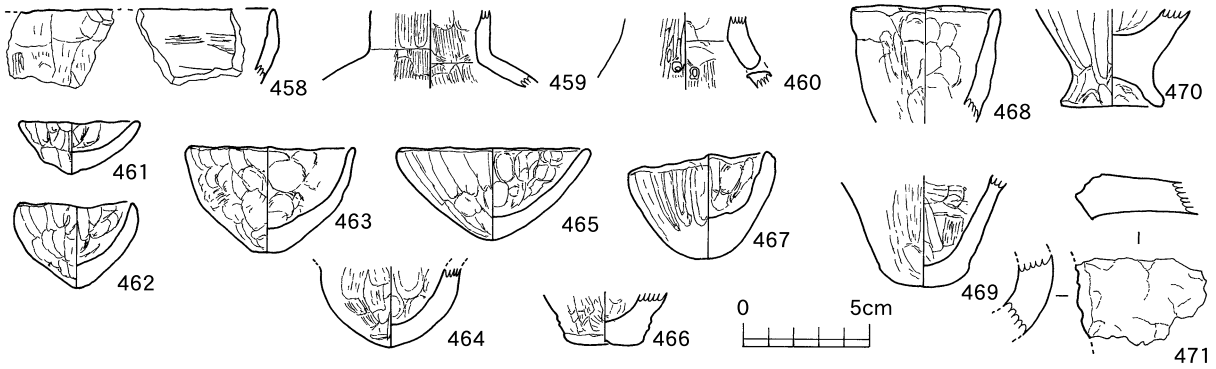
外反する高坏形土器の口縁部を転用したもので，直径が24㎝ ある。内面にススが付着しているが，周辺部はやや赤くなってススがみられない。外面の天井部近くはミガキに近いヘラによるていねいな縦ナデで仕上げている。

９　ミニチュア土器・手づくね土器（第86図458～470）

鉢形土器・壺形土器・高坏形土器・甕形土器などのミニチュア土器・手づくね土器がある。鉢形土器は底が尖って，口縁が外へ開くものと，やや丈の高いものとがある。口縁直径が５㎝，高さが２㎝ほどのものから，口縁直径が6.5㎝，高さが４㎝ほどの大きなものまで大小ある。内外ともヘラナデで仕上げている。467の外面は深いヘラナデである。466は平底となるもので，外面は粗いヘラナデででこぼこしている。470は低い脚台をもつもので外面のヘラナデが粗く，器壁も厚く雑な作りである。壺形土器は頸部から口縁部へ直口する器形をしており肩は外へ張っている。高坏形土器は筒部がはっきりしない脚部で，裾部に焼成前の穿孔がみられる。468は頸部にくびれを表現したもので，くの字状口縁をもつ甕形土器だろうと思われる。

第３節　土製品（第85図471）

高坏形土器の脚部，裾部の屈曲部を再利用した鞴の羽口である。淡茶褐色を呈しているが，外側は灰褐色に変色している。鉄が付着している。焼成度は良く，こまかい石を含んだ土を用いている。



第86図　手づくね土器

第15表　土師器観察表(1)

図番	出土地	層	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
357	45M	IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む
358	47M	IIIa	ヘラナデ，かきあげ	ヘラナデ	明茶褐色	良	石英・茶色石・黄白色石などの細かい石を含む
359		IIIa	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（内には黒班）	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を多く含む土　（5㎜大の石が多くあり）
360	47N	IIIb	ヘラ縦ナデ 突帯の上のみヘラ押し	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む　（割と大粒，4㎜大の石あり）
361	1T	IIIb I	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	良	長石・石英・黄白色石・白色石などの細かい石あり（4㎜大の石あり）
362		表採	ていねいなヘラ横ナデ ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
363		表採	ハケナデのあとヘラナデ	ハケナデ	黄褐色	普通	黄白色石・石英・白色石などの細かい石を含む
364	45M	IIIa	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（スス付着）	良	白色石・灰白色石・石英などの細かい石を含む
365		表採	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	白っぽい黄褐色（スス付着）	良	白色石・石英などの細かい石を含む
366	45M	IIIa	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色（外にはスス付着）	良	黄白色石・石英などの細かい石を含む（3㎜大の石あり）
367		IIIa	ヘラナデ，刻目	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石を含む
368	43M	IIIa	ヘラ斜ナデ，三角突帯	ヘラナデ（下はやや粗い）	明茶褐色（外はやや黄み）	良	黄白色石・石英などの大粒の石を含む
369	44M	IIIa	ヘラ横ナデ 繊維痕のあるヘラ押圧	ヘラ横ナデ，ヘラ縦ナデ	茶褐色	良	石英・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
370	47M	IIIa	ハケ縦ナデ	ヘラナデ	明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
371	64H	IIb	ヘラナデ，ハケナデ	ヘラナデ	黒褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
372		IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	白っぽい黄褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
373	1T	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	明茶褐色	普通	茶色石・石英・白色石などの細かい石を含む（大粒の石も多く，9㎜大の石も多くあり）
374	47M	III	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色（内にコゲ）	良	白色石・石英・茶色石などの細かい砂を含む
375	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ，ヘラナデ	茶褐色（内には厚くコゲ）	普通	金雲母・石英・茶色石・白色石などの細かい石を含む
376	44M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ，ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
377		IIIa	ヘラ横ナデ 繊維痕のある刻目	ヘラ横ナデ	茶褐色（外にスス付着）	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む
378	46N	III	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	黄みがかった明茶褐色	良	茶色石・黄白色石・石英・白色石などの細かい石を含む
379		IIIa	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラナデ	暗い淡茶褐色（外にスス付着）	良	石英・茶色石・黄白色石の細かい石を含む
380	65H	IIa	ヘラ横ナデ，ヘラ縦ナデ	ハケナデの後ヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：淡茶褐色	良	黄白色石・石英などの細かい石を含む
381		IIa IIIa	ヘラ横ナデ，ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色（外にスス付着）	良	黄白色石・石英・白色石などの細かい石を含む
382	64H	IIa	ハケ縦ナデ	ハケ横ナデ，ハケ縦ナデ	灰白色	普通	石英・茶色石・黄白色石・黒曜石などの細かい石を含む（5㎜大の石あり）
383	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外：茶褐色（スス付着） 内：黄褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む（5～6㎜大の石あり）石が特殊
384		IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	黄白色石・石英などの細かい石を含む
385	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	黄っぽい明茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
386		表採	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	赤っぽい淡茶褐色	普通	白色石・黄白色石・石英・黒曜石などの細かい石を含む
387	44N	III	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	茶がかった黄褐色	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
388	1T	I	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ，部分的に縦ナデ	茶褐色	良	黄白色石・石英・白色石などの細かい石を含む（6㎜大の石あり）
389		IIIa	ていねいな細かいヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ，ミガキに近い	淡茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
390	45M	IIIa	ハケ縦ナデ後ヘラ横ナデ	ハケ横ナデ，ハケ縦ナデ	淡茶褐色	普通	黄白色石・石英・茶色石・黒曜石などの細かい石を含む
391		IIIa	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ，ミガキに近いヘラ縦ナデ	淡茶褐色	良	白色石・黒曜石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
392	54L 54M	IIIa	ヘラ縦ナデ，沈線の後ヘラ押し	ヘラ横ナデ，ヘラ縦ナデ	明茶褐色	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
393		IIIa	ミガキに近いヘラ横ナデ暗文風	ヘラ横ナデ，ていねいなヘラ縦ナデ	淡茶褐色	良	白色石多　石英などの細かい石を含む
394		IIIa	ハケ縦ナデ	ヘラ斜ナデ	淡茶褐色（色は黒み多）	良	黄白色石・石英多などの細かい石を含む
395	45M	IIIa	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ，ヘラ縦ナデ	黄褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を多く含む

第16表　土師器観察表(2)

図番	出土地	層	外面の調整	内面の調整	色　調	焼成度	胎　土
396		IIIa	ヘラ斜ナデ，ハケナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄っぽい明茶褐色	良	白色石・石英多などの細かい石を含む
397	48M	III	ヘラミガキ，布押し	ていねいな横ナデ	外：黒褐色 内：淡茶褐色	良	白色石・石英・黒曜石・黄白色石などの細かい石を含む
398	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色（コゲあり）	良	黄白色石・白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
399	64H	IIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	外：明茶褐色(黒班あり) 内：茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を多く含む砂質土
400	64H	IIa	ヘラ縦ナデ，一部にハケナデのあと	ハケ縦ナデ，部分的にヘラナデ	黄っぽい明茶褐色	普通	黄白色石・石英・茶色石など小石を多く含む粗い土（7㎜大の石あり）
401	64H	IIa	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデの後ミガキ	外：茶褐色（黒班あり） 内：黄っぽい明茶褐色	良	石英･白色石などの細かい石を含む(6㎜大の石あり)
402	64H	IIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡黄褐色（外に黒班あり）	普通	白色石・石英・黄白色石・黒曜石などの細かい石を含む
403		IIIa	ミガキに近いヘラナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	白っぽい明茶褐色 （内にやや黒班）	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
404	45M	IIIa	粗いヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	外：黒灰褐色 内：にごった明茶褐色	良	白色石･石英などの細かい石を含む(5㎜大の石多くあり)
405	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった灰褐色 （内は黒みの部分あり）	良	黄白色石・青灰色石・石英などの細かい石を含む
406	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ，縦ナデ	赤っぽい明茶褐色 底にコゲ付着	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む（4㎜～1㎝大の石多くあり）
407		II	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	乳茶褐色	普通	石英・茶色石・黄白色石・金雲母などを多く含む砂質土（8㎜大の石あり）
408	4号 住居跡		ヘラ縦ナデ	剥脱　でこぼこ	淡茶褐色（黒っぽい）	普通	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む（4㎜大の石あり）
409	58K	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	外：白っぽい明茶褐色 内：淡黒褐色	普通	白色石・石英・長石などの細かい石を含む
410	58K	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：明茶褐色 内：淡黒褐色	普通	白色石・石英・長石などの細かい石を含む
411		IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：淡茶褐色 内：黒褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
412	64H	IIa	粗いヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色（外に黒班あり）	良	石英・白色石・茶色石・黄白色石などの細かい石を含む
413	45M	III	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	良	石英・長石・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
414		表採	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：灰白色 内：茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を多く含む（6㎜大の石あり）
415		IIIa	粗いヘラナデ（圧痕あり）	ヘラナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
416	57J 57K 58K	IIIa	ハケナデ後ヘラナデ，ヘラ縦ナデ	整形不明	黄っぽい淡茶褐色	普通	白色石・黒曜石・石英などの細かい石を含む（5㎜大の石あり）
417	47M ・N	IIIa	ハケナデ，ヘラナデ	ハケナデ ヘラナデ	茶褐色(内外とも黒班あり)	良	白色石・茶色石などの細かい石を含む（5㎜大の石あり）
418	1T 63H 64H	IIIa III IIb	ヘラ縦ナデ ヘラ横ナデ　三角突帯	ヘラナデ ヘラ縦ナデ	うすい黄茶褐色(黒班あり)	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
419		IIIa	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	黄っぽい淡茶褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
420	64H	IIb	ヘラ縦ナデ，2条の沈線	ヘラ横ナデ	白っぽい灰褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
421	64H	IIa	ヘラナデ，ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石・茶色石・長石などの　細かい石を多く含む
422		表採	ヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄白色（外に黒班あり）	普通	白色石･黄白色石などの細かい石を含む
423		IIIa	ハケ横ナデ	ヘラナデ	茶褐色	良	石英･白色石などの細かい石を含む(5㎜大の石あり)
424	47M	IIIa	ていねいなヘラ縦ナデ	ていねいなヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色 （外はやや赤み黒っぽい）	良	黄白色石・石英などの細かい石を含む
425	64H	IIa	ヘラ縦ナデ，ヘラ押	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（黒班あり）	普通	白色石・石英・長石などの砂粒を多く含む（4㎜大の石あり）
426	64H	IIa	横あるいは縦のヘラナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	良	白色石･石英などの細かい石を含む(5㎜大の石あり)
427	54M	IIIa	ヘラミガキ	ヘラナデ 内底粗いケズリ	淡茶褐色（黒班あり）	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
428		II	ていねいなヘラナデ	横ヘラミガミ	淡茶褐色	普通	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
429	45M	IIIa	ヘラ横ナデ ヘラ縦ミガキ	ヘラ横ナデ ヘラ縦ナデ	淡茶褐色（黒班あり） （内は黄っぽい）	良	白色石・石英などの細かい石を含む
430	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黄っぽい淡茶褐色	良	黄白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
431		IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（外に黒班）	良	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
432	48M	III	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	灰黒褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
433	46M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：黄っぽい淡茶褐色 内：茶褐色	良	黄白色石・石英などの細かい石を含む（6㎜大の石あり）

第17表　土師器観察表(3)

図番	出土地	層	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
434		IIIa	ヘラナデ	ていねいな横ナデ	茶褐色	普通	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
435		表採	ヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む（５㎜大の石あり）
436		IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外：赤みがかった淡茶褐色 内：黒褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
437	45N	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶がかった黄褐色	良	茶色石・白色石・石英などの小石を含む
438	45M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	黄っぽい淡茶褐色	普通	６㎜大の茶色石多く他に白色石・石英などの細かい石を含む
439	45M	IIIa	ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	黄っぽい淡茶褐色	普通	白色石・石英多などの細かい石を含む
440	1T		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ ていねいだがでこぼこあり	暗茶褐色	良	白色石・石英・黒曜石などの細かい石を多く含む（４㎜大の石あり）
441	44M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：黄っぽい淡茶褐色 内：黒褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を多く含む
442	47M	III	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	普通	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
443	45M	IIIa	ハケ縦ナデ	ヘラナデ	外：黄っぽい淡茶褐色 内：黒褐色	良	石英・黒曜石などの細かい石を含む
444	44M	IIIa	粗いヘラナデ	ていねいなヘラナデ	外：黄っぽい淡茶褐色 内：茶褐色	良	茶色石・黄白色石・白色石などの細かい石を含む（４㎜大の石あり）
445	47M	IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む（５㎜大の石あり）
446		IIIa	粗いヘラナデ	ヘラ縦ナデ	黄っぽい淡茶褐色 （内はやや黒み）	普通	白色石・金雲母・石英などの細かい石を含む
447	2T		ヘラ縦ナデ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（内はやや黒っぽい）	良	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む（６㎜大の石あり）
448		IIIa	ヘラ横ナデ 粗いヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	白色石・茶色石・金雲母・黄白色石などの細かい石を含む
449		IIIa	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良	黄白色石・白色石・石英などの細かい石を含む
450	45M	IIIa	ミガキに近いていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	明茶褐色	良	黄白色石・石英・茶色石・黒曜石などの細かい石を含む
451	44M	IIIa	ヘラミガミ	ていねいなヘラナデ	黄茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
452	44M	IIIa	ていねいなヘラミガミ	ヘラナデ	外：赤っぽい明茶褐色 内：黄褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む
453	47M	IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
454	4T		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
455	45M	IIIa	ヘラ縦ミガミ ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：明茶褐色 内：淡黄褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
456	46N	III	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：黄みがかった明茶褐色 内：淡茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む（５㎜大の石あり）
457		IIIa	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった明茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
458		IIIa	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（内にやや黒み）	普通	白色石・黄白色石などの細かい石を含む
459		IIIa	こまかいハケナデ	ヘラナデ	黒っぽい黄褐色	良	白色石・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
460	47M	IIIa	ヘラミガミ	ヘラナデ	外：暗灰褐色 内：淡茶褐色	普通	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
461		IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	良	黄白色石・石英・金雲母などの細かい石を含む
462	44M	IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	暗い淡茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
463	45M	IIIa	粗いヘラナデ	指押し	明茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの小石を含む
464	62M	IIIa	ていねいなヘラナデ	強い押しヘラナデ？	黒褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
465	62M	IIIa	ヘラナデ	指押し	明茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
466		II	粗いヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	黄白色石・石英・茶色石・白色石などの細かい石を含む
467	62M	IIIa	深いヘラナデ 指ナデ？	指押し	灰茶褐色	普通	黄白色石・金雲母・石英などの細かい石を含む
468	61M	IIIa	ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	石英・白色石・黒曜石・黄白色石などの細かい石を含む
469	47N	III	粗いヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外：茶褐色 内：黒褐色	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
470		表採	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	普通	黒曜石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
471		IIIa	ヘラナデ	ヘラナデ	外：灰褐色 内：淡茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む

第５章　古代・中世

第１節　遺構

この時期の遺構として土坑が４基，溝が５条ある。

１　土坑

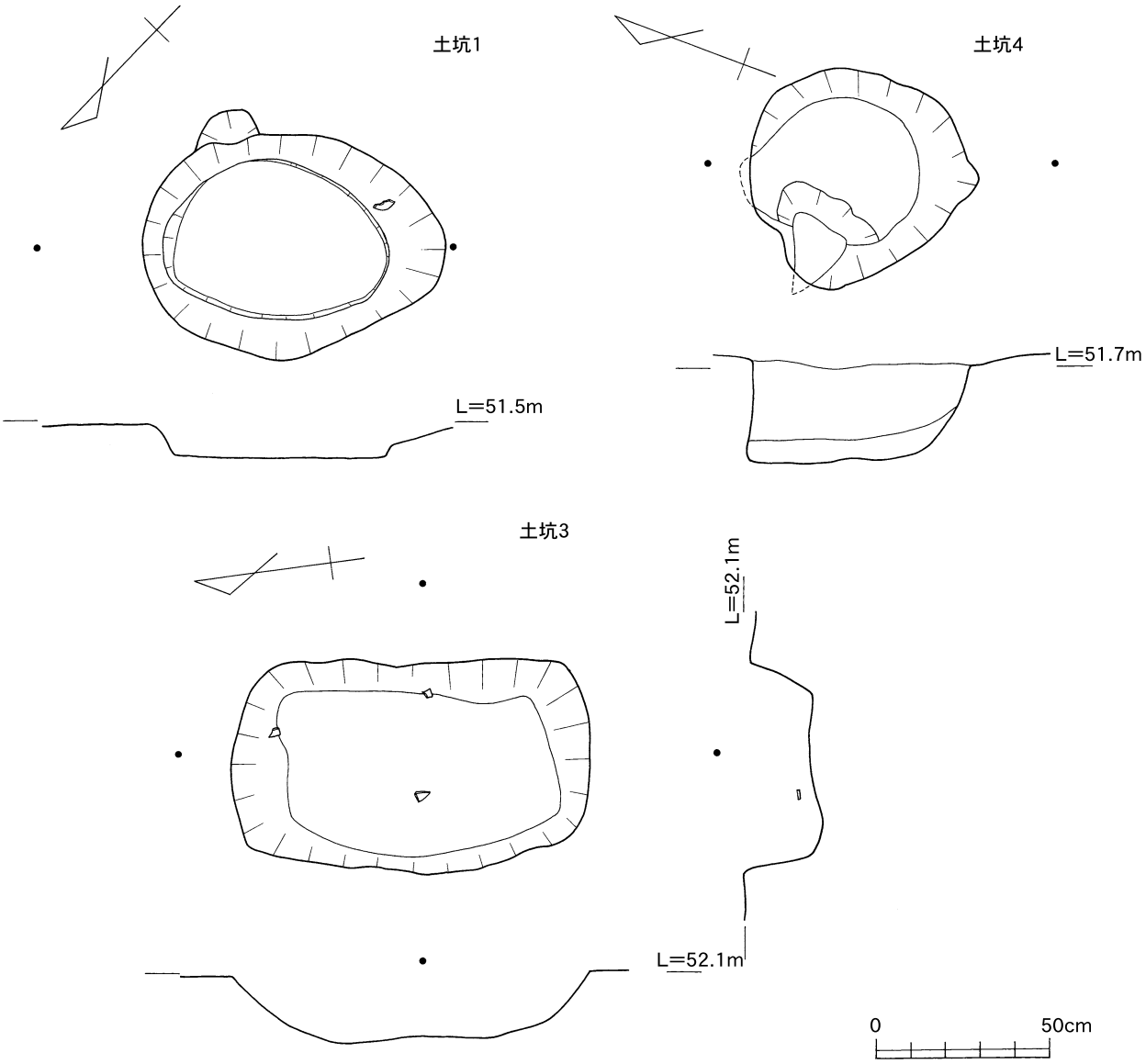
１）土坑１（第87図）

44M区で発見された長径170㎝，短径130㎝の楕円形をした土坑で，深さは20㎝ある。埋土は暗黄褐色を呈する土である。破片のみの成川式土器が28点出土しているが，いずれも小破片であり，流れ込みと思われる。北側の外側に60㎝×40㎝の範囲に炭が散在している。

２）土坑２（第88図472～479）

48M区で発見された上で160㎝四方，底で130㎝四方ほどの正方形をした土坑で，深さは40㎝ある。埋土の中から土師器・内黒土師器・須恵器・両端穿孔棒状土錘が出土している。

土師器には坏・皿・鉢・甕がある。坏の底部直径は6.5㎝あり，やや丸みをおびて立ち上がる。

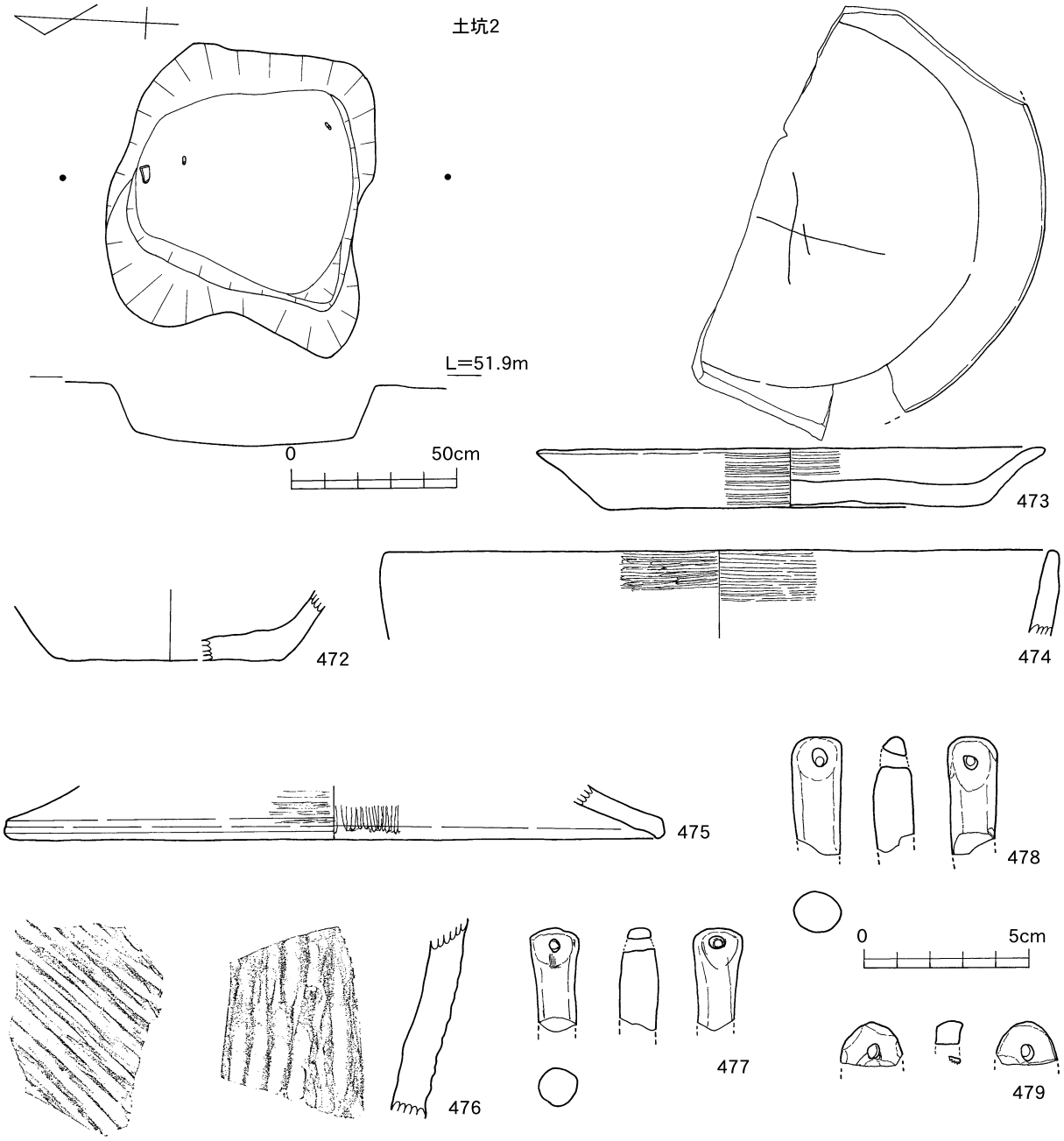


第87図　古代・中世の土坑

皿は口縁直径が15.5㎝，高さが1.8㎝，底部直径が11.5㎝あり，やや上げ底となっている。ヘラ切り離しである。口縁はゆるやかに外反して細くおわっている。ていねいなろくろびきで，内面に『×』印の刻書がある。短い線から先に引き，長い線へ移っている。乳灰色を呈し，精製土を用いている。焼成度は良い。鉢は小型で，口縁直径が20.5㎝ある。口縁はまっすぐ伸びており，端部は矩形を呈している。内外ともヘラ横ナデで仕上げている。甕は内面がヘラケズリで３点出土している。

内黒土師器は蓋で，口縁直径が20㎝あり，端部がやや丸くなり，内面に段ができている。外面は黄みがかった明茶褐色を呈し，ていねいにナデている。内面はていねいなヘラミガキで仕上げ，光沢のある黒色を呈している。焼成度は良く，石英などの微砂を用いている。

須恵器は甕の破片で，外面に条痕タタキ，内面に条痕当て具の痕が残っている。外面は緑がかっ



第88図　土坑２と出土遺物

た淡茶褐色，内面は赤みがかった淡茶褐色を呈している。白色石・黄色石・石英などのこまかい石を多く含んだ土を用い，焼成度は良い。

両端穿孔棒状土錘は３点出土しているが，いずれも折れている。端部がやや幅広く，孔のあくほうは押さえてやや薄く作っている。表面はていねいなヘラナデで，孔は一方から穿たれている。茶褐色を呈し焼成度は良い。石英・黒雲母・白色石などの細かい石を含んだ土を用いている。

他に成川式土器12点も出土しているが，以上の出土品からこの土坑は９世紀頃のものと思われる。

３）土坑３（第87図）

51Ｎ区で発見された長さ105㎝，幅60㎝，深さ15㎝の長方形をした土坑である。床面は長さ75㎝，幅50㎝で，中央がややあがっている。

４）土坑４（第87図）

52M区で発見された直径60㎝の土坑で，深さが25㎝ある。いっぽうは袋状を呈し，片隅がやや下がっている。埋土は上部が暗茶褐色軟質土，下部が池田シラス混じりの淡茶褐色土である。

２　溝

東西方向に流れる溝が４条，南北方向に流れる溝が１条ある。

１）溝１（第89図）

42M区で検出された幅90㎝～150㎝，深さ20㎝～30㎝ほどの溝で，ほぼ東西に流れ，長さ７m近くが発見された。

２）溝２（第89図，第90図480～491）

45M区から48M区へほぼ南北方向に流れる幅100㎝，深さ30㎝ほどの溝で，33mほど検出された。

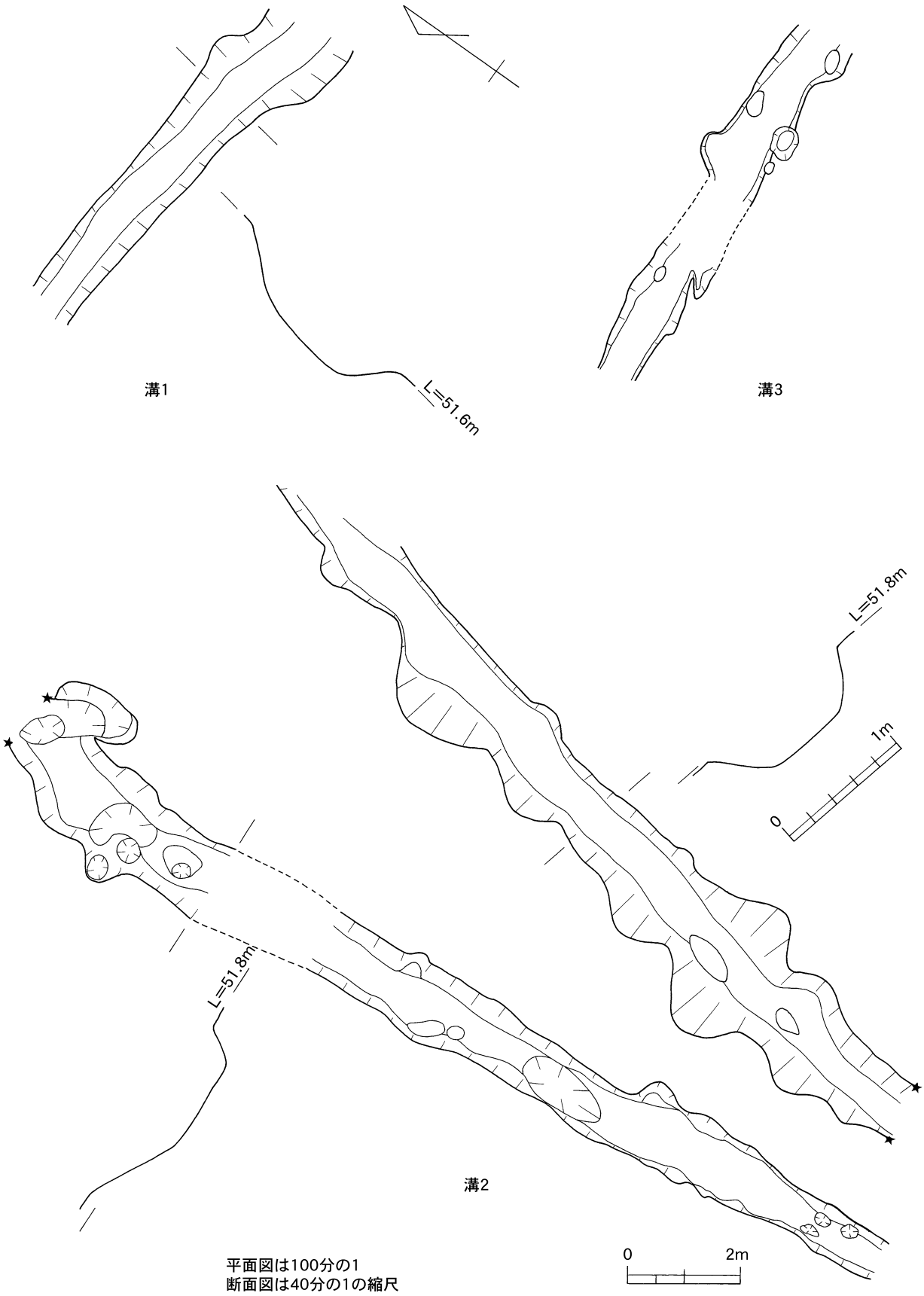
埋土から土師器・須恵器・陶器・瓦質土器・青磁・白磁が出土している。

土師器はヘラ切離し底の坏である。内底の立上がり部分は窪みとなって段をなす。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。石英を含む精製土を用いている。底に判読不明の墨書がみられる。

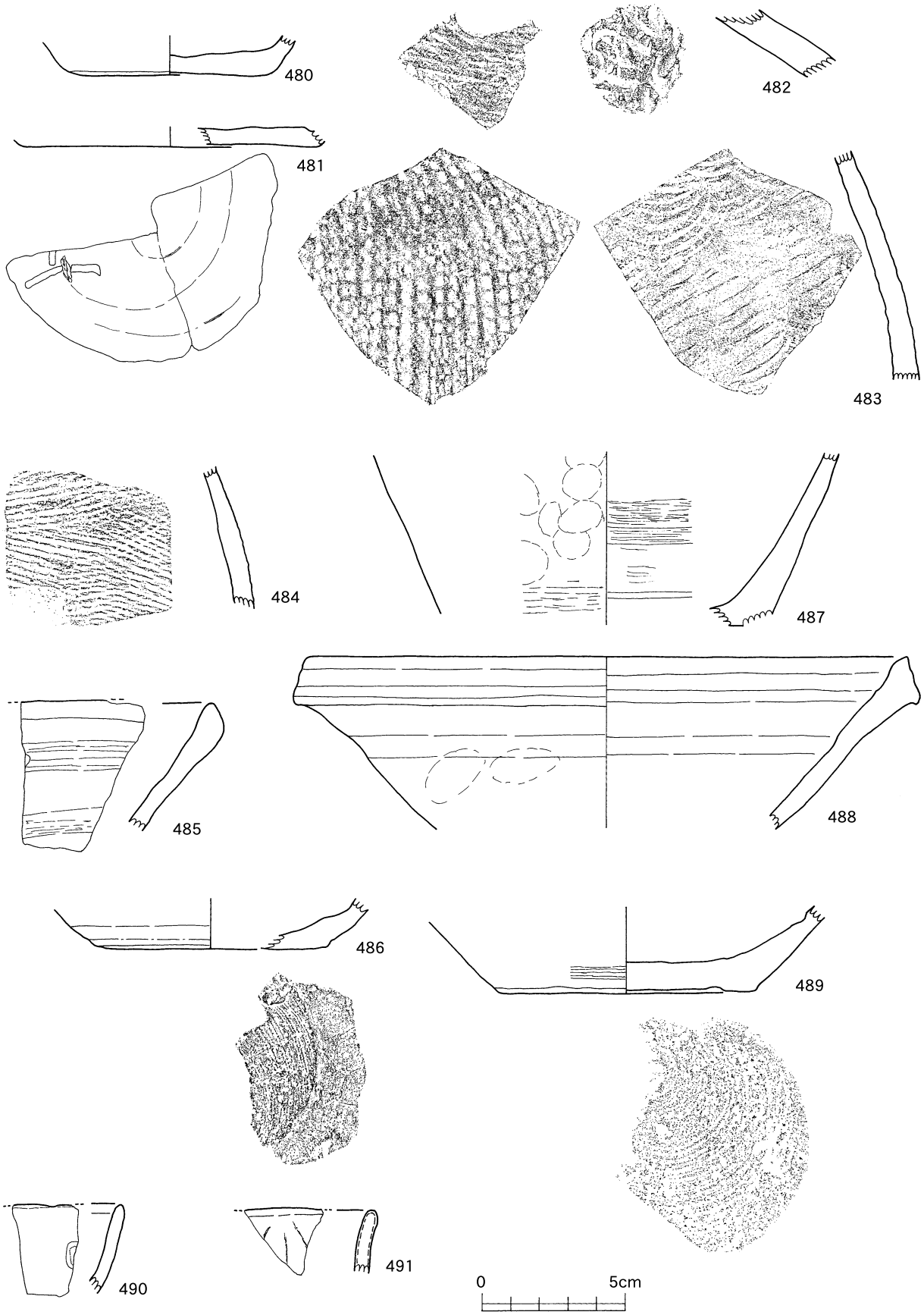
須恵器の甕破片が２点ある。482は肩部，483は上半部である。482の外面は明淡茶褐色を呈し，条痕タタキのあとヘラでナデている。内面は紫がかった淡茶褐色を呈し，同心円の当て具痕が残っている。石英の多い細かい土を用い，焼成度は良い。483の外面は正格子タタキ，内面は同心円と条痕の当て具痕が残っている。表面は黒灰色を呈しているが，内面は紫色で，外表面には自然釉がかかっている。白色石や石英の細かい石の多い土を用い，焼成度は良い。

陶器には甕とこね鉢がある。甕（484）は樺万丈窯産と思われるもので，軟質の須恵器である。外は細かい条痕タタキ（下には長格子タタキもみられる）の痕がみられ，内はヘラナデで仕上げている。外面は青っぽい灰褐色を呈しているが，その下は赤っぽい淡茶褐色をしている。内面は乳茶褐色である。４㎜大の石もあるが，石英の多い細かい土を用いている。こね鉢（485・486）は東播系産の軟質須恵器だが，口縁部のほうは硬質である。口縁は玉縁状となり，明灰褐色を呈しているが，口縁外面のみは暗灰褐色をしている。内外ともナデ仕上げで凹凸が目立っている。底は直径８㎝と小さめで，糸切り離しである。石英や白色石などの細かい石を用いている。

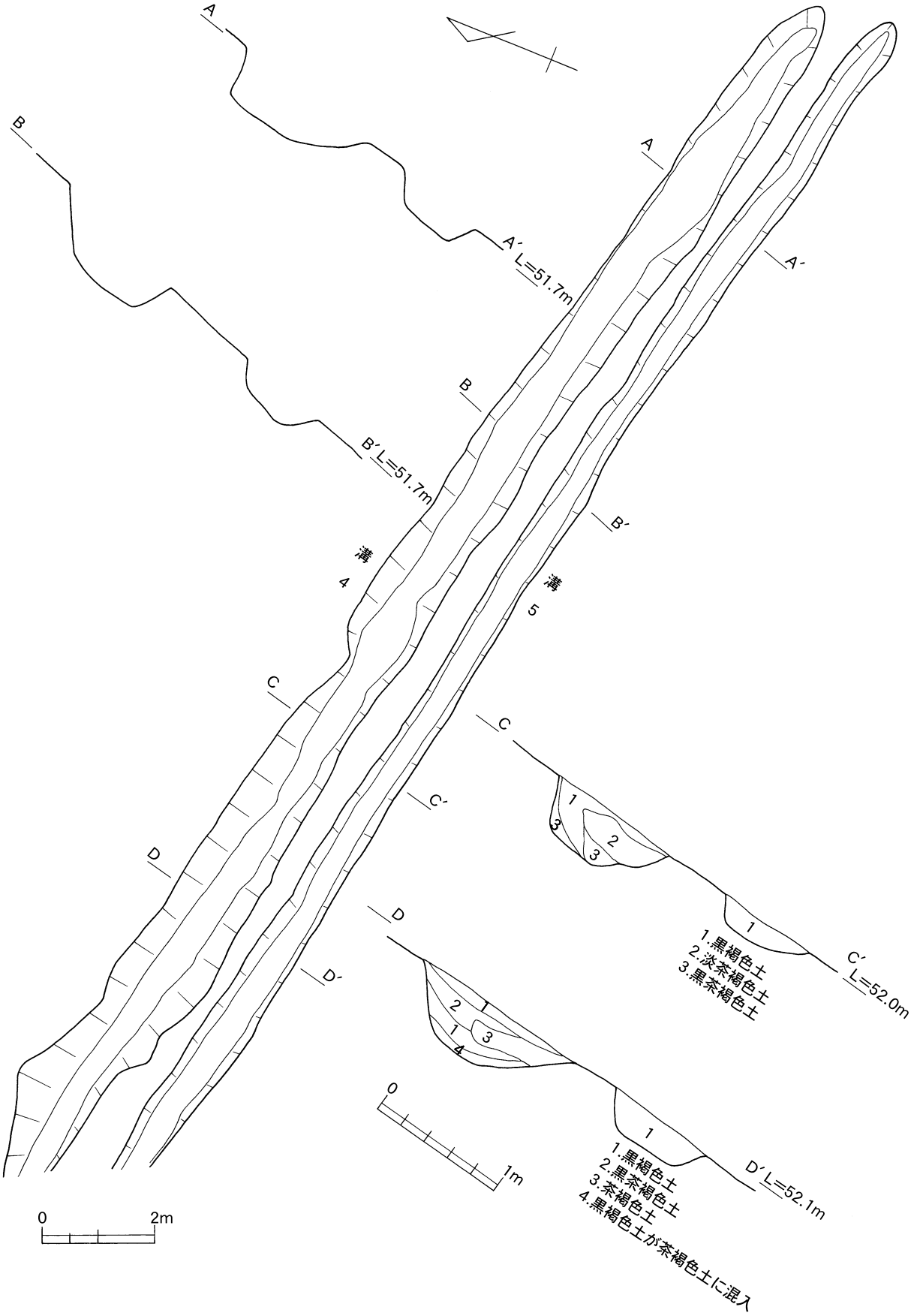
瓦質土器はこね鉢３点（487～489）がある。口縁部は端部が上下へ伸びた形をし，直径が21㎝ある。端部は中央がやや窪んで，上端は使用のためか，つぶれている。内外ともでこぼこしているが，内面の下の方は使用のためかつぶれて薄くなっている。灰褐色を呈している。石英・白色石の多い



第89図　古代・中世の溝(1)



第90図　溝２出土の土器



第91図　古代・中世の溝(2)

土を用いている。底部は，486と同じようにゆるやかな傾斜をしているものと，487のように割と急に立ち上がっているものとがある。489は直径が９㎝あり，糸切り離しであるが，やや摩滅している。内面は使用によって摩耗が目立ち，本来の面は一部しか残っていない。石が抜けたためか，小穴が目立つ。外は暗灰褐色，内は白っぽい灰褐色を呈している。石英・白色石・黒っぽい石などを含んでいる。487は直径が11㎝ほどで，内面に使用痕がみられる。外面はヘラナデ・ヘラ押しで仕上げ，表面の剥脱が目立つ。表面は黒褐色を呈し，石英・茶色石などの細かい石を用いている。

白磁は口はげ口縁の碗（490）で，外に貫入がみられる。緑がかった白色釉がかかっている。

青磁は鎬蓮弁文のある龍泉窯産の碗（491）で，オリーブ色をし，貫入が目立つ。

これらの他に多量の成川式土器もあり，常滑焼らしい甕の小破片も１点ある。この溝の年代は古墳時代・古代のものも含まれているが，樺万丈窯産甕・東播系産こね鉢・瓦質土器こね鉢・鎬蓮弁文青磁碗・口はげ口縁白磁碗が示す13世紀後半～14世紀初頭頃のものと思われる。

３）溝３（第89図）

48M区で検出された幅100㎝の溝で，ほぼ東西方向に流れ，長さ７mが発見された。溝２と直交しているが，前後関係は不明である。

４）溝４（第91図）

55・56－Ｋ～Ｍ区で発見された東西方向に延びる幅60㎝～90㎝，深さ30㎝ほどの溝で，溝５の北側に並行している。長さ24m発見されているが，東側は浅くなって途切れている。

中から土師器坏と内赤土師器坏が出土している。土師器は底部直径が6.5㎝で，丸みをおびて底へ移っている。ヘラ切り離しでやや分厚い。乳茶褐色を呈しているが，底はやや赤っぽい。石英・茶色石を含んだ精製土を用い，焼成良好である。内赤土師器はヘラ切り離しの小破片である。

５）溝５（第91図）

55・56－Ｋ～Ｍ区で発見された東西方向に延びる幅100㎝～150㎝，深さ20㎝ほどの溝で，長さ25m発見されているが，東側は浅くなって途切れている。溝４と平行している。

第２節　遺物

出土数は少ないが，土師器・須恵器・陶器・磁器・土製品がある。

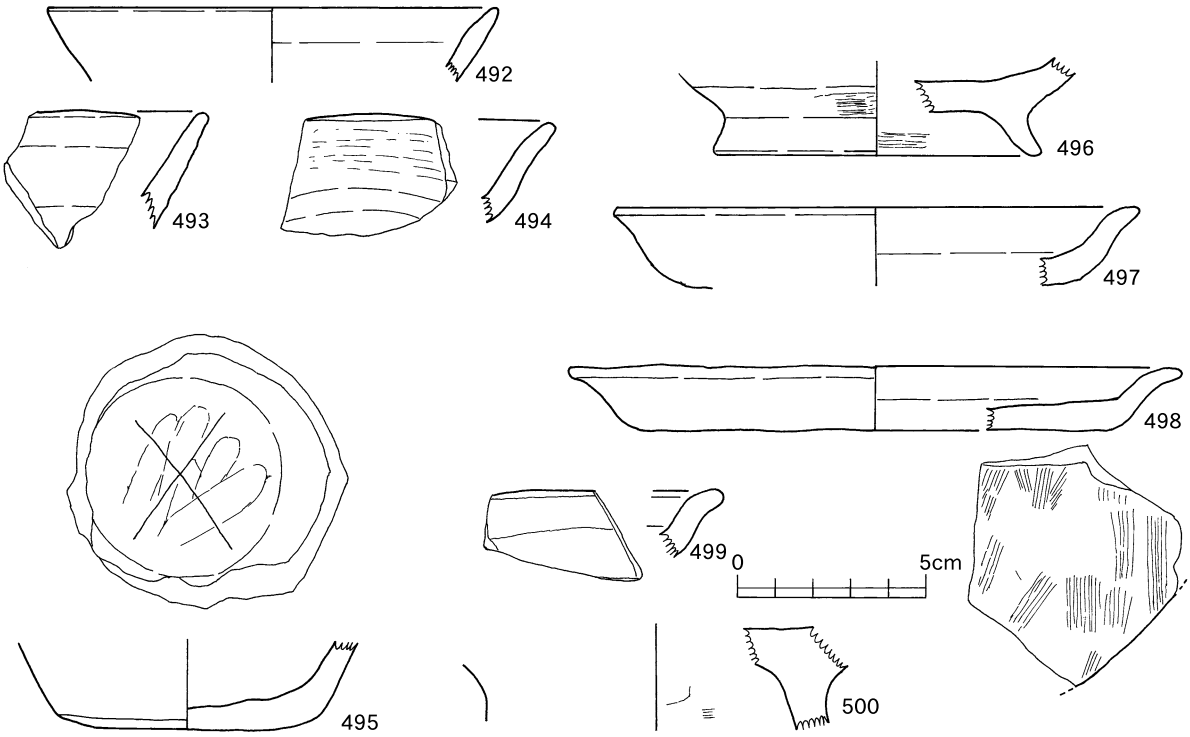
１　土師器（第92図492～500）

坏・埦・皿・鉢・甕がある。

坏は外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁とヘラ切り離しの底部からなる。口縁直径は12㎝で，外面はろくろびきのためややへこみがあるもののまっすぐ伸びるものと，やや外反するものとがある。底部直径は約７㎝あり丸みをおびて底へ至る。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。石英などを含む精製土を用いている。495は底のみ赤っぽく，内底に焼成後の『×』印の刻書がある。ていねいな作りで，内は淡黒褐色，外は乳茶褐色を呈し，石英・茶色石などを含む細かい胎土である。

埦は高台部分で，直径が8.7㎝，高台の高さは1.2㎝ある。淡茶褐色を呈しているが，外底は淡黒褐色である。焼成度は良い。

皿は外反する器形をし，口縁直径16.3㎝，高さ1.7㎝，底部直径12.5㎝である。底はヘラ切り離しで，乳茶褐色を呈している。焼成度は普通であるが，摩滅している。石英を多く含む精製土である。



第92図　古代・中世の土師器

鉢は台付のもので，内外ともヘラナデである。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。茶色石・石英などの細かい石を含む土を用いている。甕は内面ヘラケズリである。

2　須恵器（第93図501～508）

坏身と甕・壺がある。坏身は口縁直径が15.6㎝で，まっすぐ外へ開いており，軟質で灰褐色を呈している。甕は割と薄い作りであるが，503は特に薄い。外面のタタキは正格子・長格子・条痕で，正格子のあとヘラ横ナデをしたものもある。内面当て具は同心円と条痕がある。色調は灰黒色・青灰色・灰褐色などを呈し，硬質に焼けているが，軟質のものもある。白色石・石英などを含む細かい土である。壺は２点の小破片がある。内面はナデている。

3　陶器（第93図509・510）

509は外面に長格子タタキのある軟質の須恵器系陶器の甕である。内面はヘラナデで，外面が赤っぽい茶褐色，内面が白っぽい乳茶褐色を呈している。石英が多く，茶色石も含む細かい土を用い，溝２の484と同一個体かと思われる。樺万丈窯産の甕である。

510はこね鉢の底で，直径が10㎝で，ヘラナデで仕上げている。内外とも横方向のヘラナデで，淡灰褐色を呈しているが，内面は使用痕があり，部分的にやや黒みがかっている。東播系窯産である。

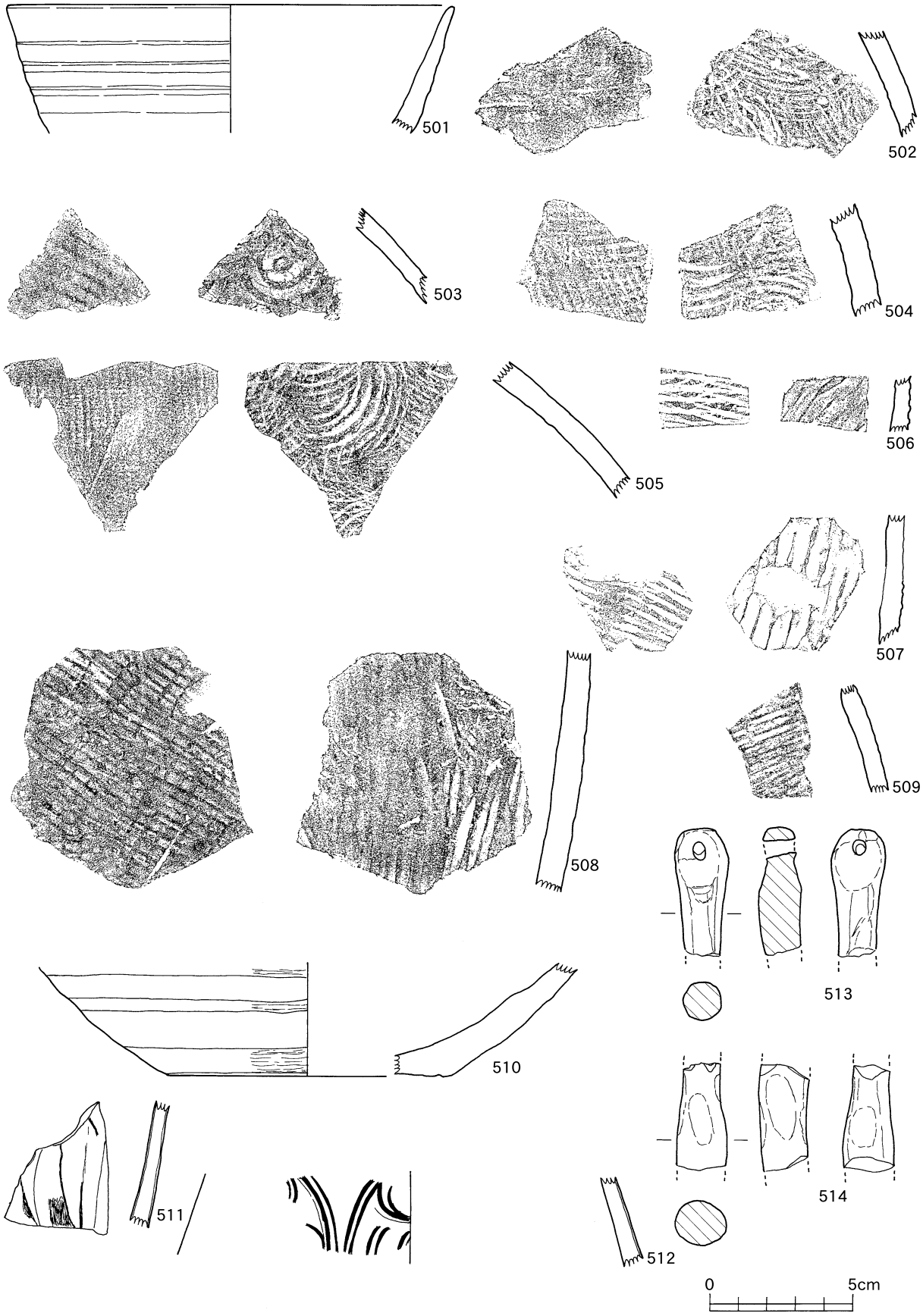
この他に図化していないが，常滑焼の甕の小破片が３点ある。

4　青磁（第93図511・512）

幅の狭い鎬蓮弁の碗と，青緑色釉の梅瓶がある。碗は灰緑色の釉である。梅瓶は肩部で，片彫りの曲線文がみられる。内面は横方向のナデで仕上げチョコ色を呈している。釉はぶつぶつしている。

5　土製品（第93図513・514）

両端穿孔棒状土錘の破片が２点出土している。穿孔部は押して少し平坦にしている。



第93図　須恵器・陶磁器・土錘

第６章　小結

中尾遺跡の調査成果は２回に分けて報告している。前回は遺跡の北側の調査成果を，今回は南側の調査成果を報告することになる。これらは一貫性のある時期と，全く別の集団で構成される時期とがあり，これらを考慮しながらまとめなければならないが，それは別の項でまとめることにし，ここでは今回報告分の調査成果をまとめることとする。

第１節　縄文時代集団の変遷

縄文時代の遺構・遺物は大きく早期・前期・後期・晩期に分けられ，なかでも早期と晩期（これは弥生時代早期・前期へと継続している）に安定した生活跡を残している。

早期は土器型式にして６期に分けられるが，主体となるのは早期中葉の桑ノ丸式・下剥峯式・押型文土器の時期で，遺構として検出された集石遺構・集積遺構もこれらの時期である可能性がある。

これらの前に当たる前平式土器の時期は58Ｌ区付近に少量の土器が出土しているのみであることから，キャンプサイト的な存在であったと思われる。集石遺構は，47N区に少し離れて１基あるが，２～12号は51～59区にまとまって連続していることから一連のあまり時期差のない遺構であろうと思われる。これはのちに四方高迫遺跡で記すように基礎的な本体と，そのかき出しとに分かれることを考慮すれば11基からなっており，47N区の１号のみが本体は別にあって，これはかき出し場である。集積遺構もこれらの一角にあることから同じ集団のものと思われる。生活の場とすれば住居や墓など基礎的なものがないが，ある時期の生活跡と思える。ここの集積遺構はいわゆるデポ的な要素はみられず，石器製作場的様相を示しているようで生活跡の一要素と思われる。

土器の分布を比較すれば，それぞれの時期によって集中場所が異なる。早期前葉は58Ｌ区周辺に集中しているが，中葉の桑ノ丸式・下剥峯式・押型文土器は57～59Ｋ区に集中している。さらに後葉の平栫・塞ノ神式土器になると，51～53M・Ｎ区周辺へ居住地を移している。これを先の集石遺構と合わせると１号・６号は該当する型式がないが，他はいずれかにあたり，２号～５号は平栫・塞ノ神式土器，７号～12号は中葉の土器と分布が重なる。ただ，４号・５号集石遺構は桑ノ丸式土器と思われる土器が近くにあることを考えると，これらの集石遺構はいずれも中葉のものである可能性が強い。

曽畑式土器は52・53－Ｍ・Ｎ区と，57～59－Ｊ・Ｋ区の２か所に集中か所が分かれる。これを同時期における２つの集団と考えるか，時期を異にするものと考えるかは今後検討する余地があろう。

ただ，この２か所の集中か所は第139図でわかるように谷頭の脇にあり，いずれも湧水地の近くに居を構えていた可能性がある。

晩期は58・59－Ｋ・Ｌ区付近と64・65－Ｇ・Ｈ区付近に集中している。

第２節　縄文時代の生活要素の移り変わり

遺構の変遷から当時の生活変遷をとらえることができないとすれば，当時の生活用具の違いによってその移り変わりを探ることはできないだろうか。

鹿児島県では遺構検出が困難であることから，細かい移り変わりを探ることはむずかしい。ここでも早期と前期・晩期といった大きな変化しか探ることできないが，それでも両時期において大きな違いがある。①早期の石器には石鏃が多く含まれ，逆に晩期の石器には扁平打製石斧が多く含まれる。②早期だけにみられる石器としてつまみ形石器があり，礫器が多くみられる。③前期・晩期

の石器には石匙・石錐が含まれるが，早期にはない。④黒曜石の原産地をみると，早期には近隣地産と思われる質の悪いものを用いているのに対し，前期あるいは晩期には西北九州産のものが多く含まれる。ただ，早期の石器には西北九州産製のものがみられることから原石などは持ち込まれていないが，完成品（製品）だけが持ち込まれた可能性が想定できる。

以上の特徴だけみても，この両時期において生活形態，交易形態において大きな違いがあったことがわかる。

第３節　弥生時代前期の特異な遺物について

多くの出土品のなかには特異な遺物もあり，ここではそのうちの２つについて記すこととする。

まず磨製石剣である。縄文時代晩期には南さつま市坊津町や大口市などで装飾のある石刀が出土しているが，弥生時代には南さつま市高橋貝塚と，鹿屋市栄田遺跡で出土しているだけで，出土例の少ないものである。このうち，栄田遺跡のものは整然とした鉄剣形のものであり，当遺跡のものとは高橋貝塚のものとが似ている。整形もていねいであり，実用というよりは祭祀的なものと思われる。全国的に広がりを見せていることから，ここで出現したというより，他地域とのつながりによって作られたものであろう。

次に線刻土器である。県内の出土例をみると，縄文時代には指宿市大園原遺跡で後期の家と思われる絵が，日置市黒川洞穴で晩期の狩猟風景と思われる絵が発見されている。弥生時代には南さつま市諏訪前遺跡で竜が，鹿屋市名主原遺跡で人物が描かれた土器などが出土している。古墳時代になると，魚・船と思われるものが指宿市・鹿児島市などで出土している。古代でも薩摩川内市薩摩国府跡や姶良町萩原遺跡などで墨書土器や線刻土器がある。

このように出土例は少ないが，当遺跡のものは描かれた土器の形態も特殊な壺形土器であり，絵自体も部分的であることからはっきりしないが，人物画とすれば胴部に描かれた三角文が壺形土器（193）の突帯に刻まれたものと類似していることから前期のものと思われる。さらに，この絵の内容を考えてみると手の向きに違和感があるが，足の形態から出産状況を描いたとも考えられる。生産と結びつけた祭祀に用いられた可能性がある。

第４節　古墳時代集落の広がり

平成７年度までの調査で20軒を超える多くの竪穴住居跡が発見されており，この台地に大きな集落が存在していることがわかったが，平成８年度以降では５軒の竪穴住居跡しか発見されず，この集落の南北における範囲が確認された。いっぽうでは平成８年の確認調査と，平成16年の本調査などによって８基の墓が確認され，居住域と墓域の存在もはっきりした。ここでは今回報告した５軒の竪穴住居跡について，その性格を考えてみたい。

５軒の竪穴住居跡の平面形は方形のものが４軒あるのに対して，円形のもの（４号竪穴住居跡）が１軒ある。ただ，円形のものについては平面積が７㎡しかなく，深さが45㎝もあること，遺構内から多量の土器が出土するなど他の４軒とは様相が違うことから，住居ではなく貯蔵穴，あるいは祭祀遺構など他の性格を持った可能性がある。とすれば，多くても４軒の住居だけから成る集落と考えることができ，これらは狭い範囲に集中していることとなる。７年度までに検出された構成に比べると，数軒の軒数で構成された散村的な集落となっている。

Ⅴ　四方高迫遺跡

第１章　発掘調査の概要

当遺跡は当初「諏訪尾遺跡」として調査を始めたが，調査を開始してから小字名が違うことが判明したため，遺跡名を改めた。

第１節　発掘調査の方法

調査は，測量基準として「一般地方道折生野・神野・吾平線改良施行計画平面図」のセンターライン№12と№17の２点を結ぶ線を基軸に，南から北方向に１・２・３…，西から東方向にＡ・Ｂ・Ｃ…とする10m間隔の調査用グリッド（区割り）を設定して実施した。

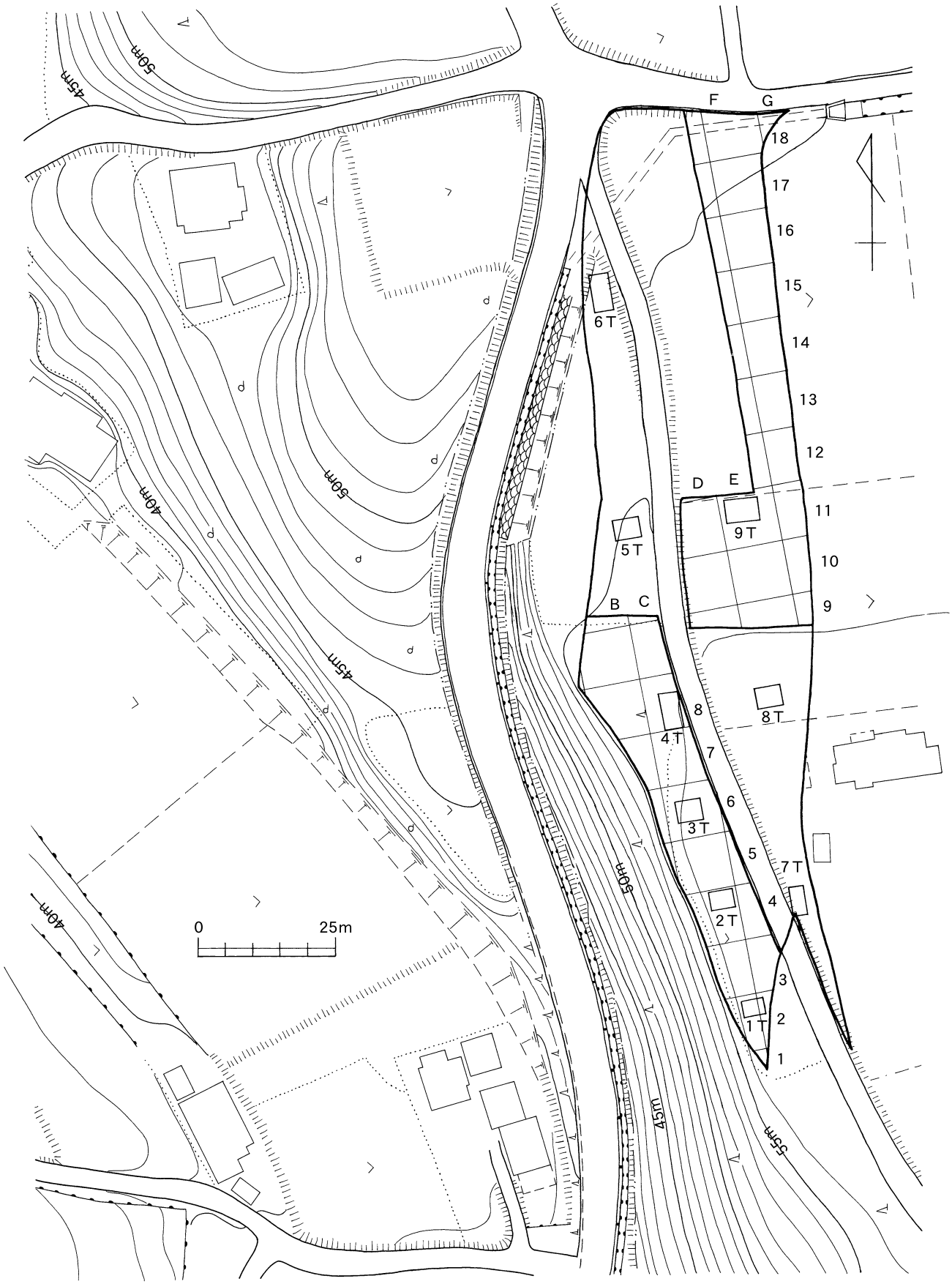
なお，レベル原点として肝属郡吾平町上名字中尾の町営グラウンドに所在するＢＭ.６（Ｈ＝49.459m）と同字中尾6396番地に所在するＢＭ.５（Ｈ＝51.887m）を基準として利用した。

まず，遺跡の範囲や性格を把握するため調査対象部分，約8,000㎡を対象に確認トレンチを９か所設定して行った。調査面積は70㎡である。その結果，4か所のトレンチでは遺構・遺物とも発見されなかった。しかし残り５か所の地域には遺跡が残存することが判明したため，確認調査を本調査に切り替え，継続して調査を実施した。調査対象面積は3,400㎡であった。

調査の順序としては伐採等の環境整備を実施した後，重機（バックホー）によって表土・アスファルトなどを除去し，Ⅱ層以下について遺構検出面であるⅣ（池田火山灰）層上面あるいはⅥ（アカホヤ火山灰）層上面まで人力（山鍬・ジョレン等を利用）による掘り下げを行った。出土した遺物（土器・石器など）を記録して取り上げた後，検出した遺構（竪穴住居跡・溝状遺構など）については，それぞれ丁寧に掘り下げを行い（移植ごて等を利用），写真撮影や図面作成作業を実施した。その後，Ⅶ（乳茶褐色粘質土）層まで人力によって掘り下げ，再度，遺物の取り上げなどを行い，遺構検出（集石など）・図面作成作業などを実施した。さらに，下層確認のため，部分的に下層確認トレンチを設定して掘り下げを行い，遺物包含層の確認に努めた。なお，掘削によって生じた排土は，調査区の幅が狭いために隣接する事業区内の調査終了区間などにベルトコンベアやタイヤショベル，バックホーによって搬出した。その際，調査地と現道との高低差がある場合は，作業上の安全などを考慮して場合によっては法勾配を取りながらの掘削，排土処理を実施した。なお，各年度とも発掘調査終了跡には掘削部分の埋め戻しを行った後，県土木部（鹿屋土木事務所）への調査現場の引き渡しを実施した。

第２節　調査成果の概要

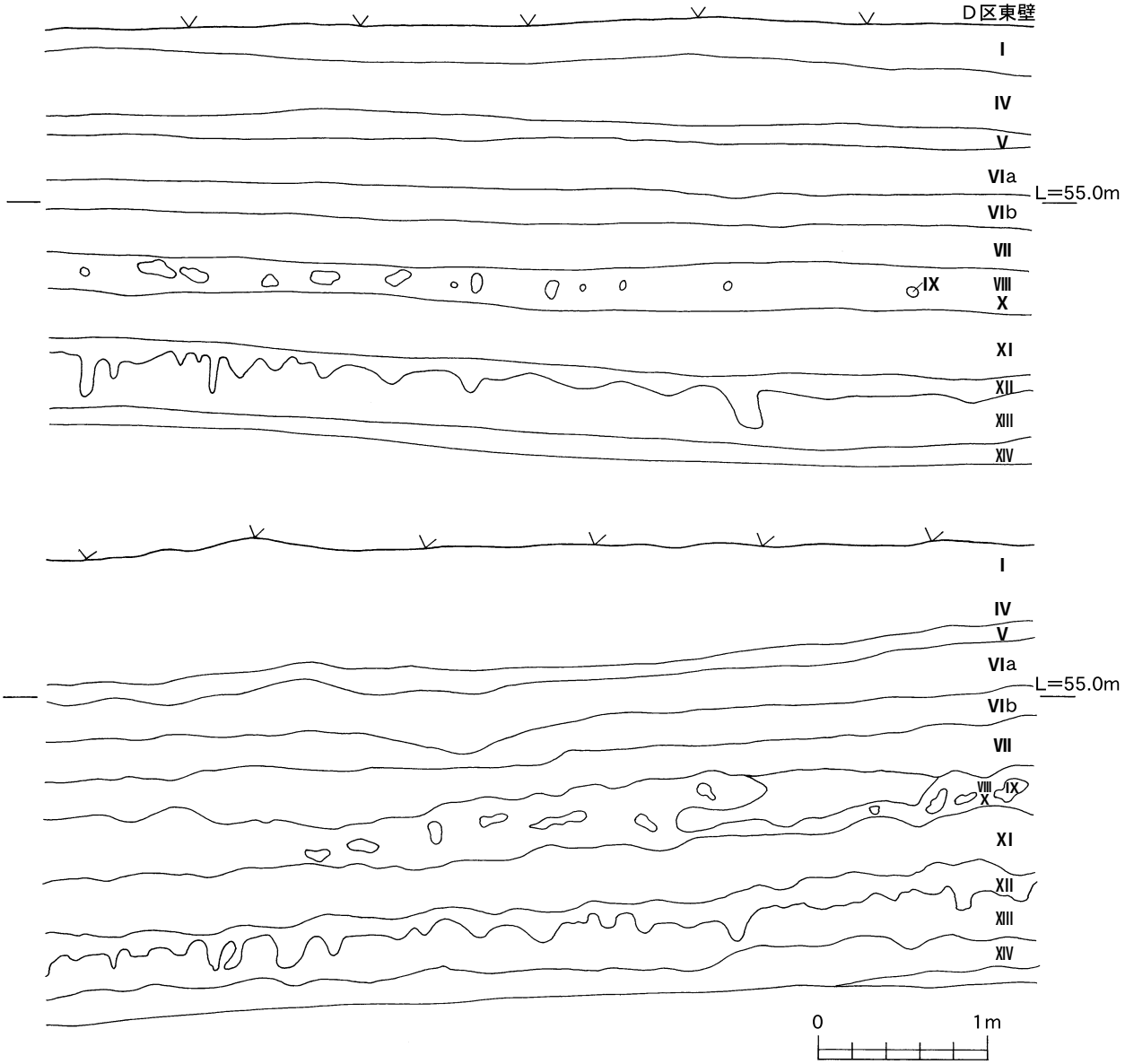
調査区は中央をほぼ南北に走る道路を境にして南西側（２～10－Ｂ～Ｄ区）と，北東側（９～18－Ｄ～Ｆ区）とに分かれた。南西側ではⅦ層で縄文時代早期の集石遺構13基・集積遺構１基・土坑１基が検出され，前平式土器・石坂式土器・石鏃・打製石斧・礫器・磨石・石皿が出土した。土器はほとんどが石坂式土器で，前平式土器は１点だけだったことから，集石遺構などの遺構や石器は石坂式土器期のものと思われる。北東側ではⅡ層で弥生土器・土師器が出土し，土坑１基が検出された。弥生土器は中期後半の山ノ口式土器で，甕形土器・壺形土器である。土師器は古墳時代前・中期の中津野式土器・笹貫式土器で，甕形土器・壺形土器である。磨製石鏃が１点出土しているが，形態からして弥生時代のものと思われる。



第94図　トレンチ配置・本調査範囲図

第３節　四方高迫遺跡の地層

遺跡は台地の西端近くに立地し，特に南西側は傾斜面近くにある。Ｄ区東壁では４区を最高にして南へ北へやや下降している。層序は基本的なものとほとんど同じで，Ⅰ層が表土，Ⅳ層（Ⅱ・Ⅲ層はほとんど見られない）が池田火山灰で弥生時代，古墳時代の遺物包含層である。Ⅴ層が池田降下軽石，Ⅵａ層がアカホヤ火山灰，Ⅵｂ層がアカホヤの軽石層，Ⅶ層が乳茶褐色粘質土で縄文時代早期の遺物包含層である。Ⅷ層は黒褐色土，Ⅸ層は薩摩火山灰層，Ⅹ層は黒褐色土，Ⅺ層は通称チョコ層と呼ばれる暗茶褐色粘質土，Ⅻ層は黄褐色粘質土，ⅩⅢ層は橙褐色土，ⅩⅣ層は通称シラスと呼ばれる姶良カルデラ噴出の火山灰である。



第95図　四方高迫遺跡の地層図

第２章　縄文時代

第１節　遺構

縄文時代の遺構として集石遺構と，石皿・磨石集積遺構，土坑がある。縄文時代の遺構・遺物のほとんどは調査区の南西側にあたる２～８－Ｂ～Ｄ区に集中している。本地域の地形はⅦ層下部でみると，４Ｄ区付近に頂部があり，ここからゆるやかに西側へ下っている。４Ｄ区と，北西隅にあたる９Ｂ区との比高は1.6mほどである。

１　集石遺構

２～７－Ｂ～Ｄ区で13基の集石遺構が検出された。集石遺構は４Ｄ区の最頂部を囲むようにして同心円状に分布しており，特に３～６－Ｃ・Ｄ区には11基とそのうちの多くが存在している。

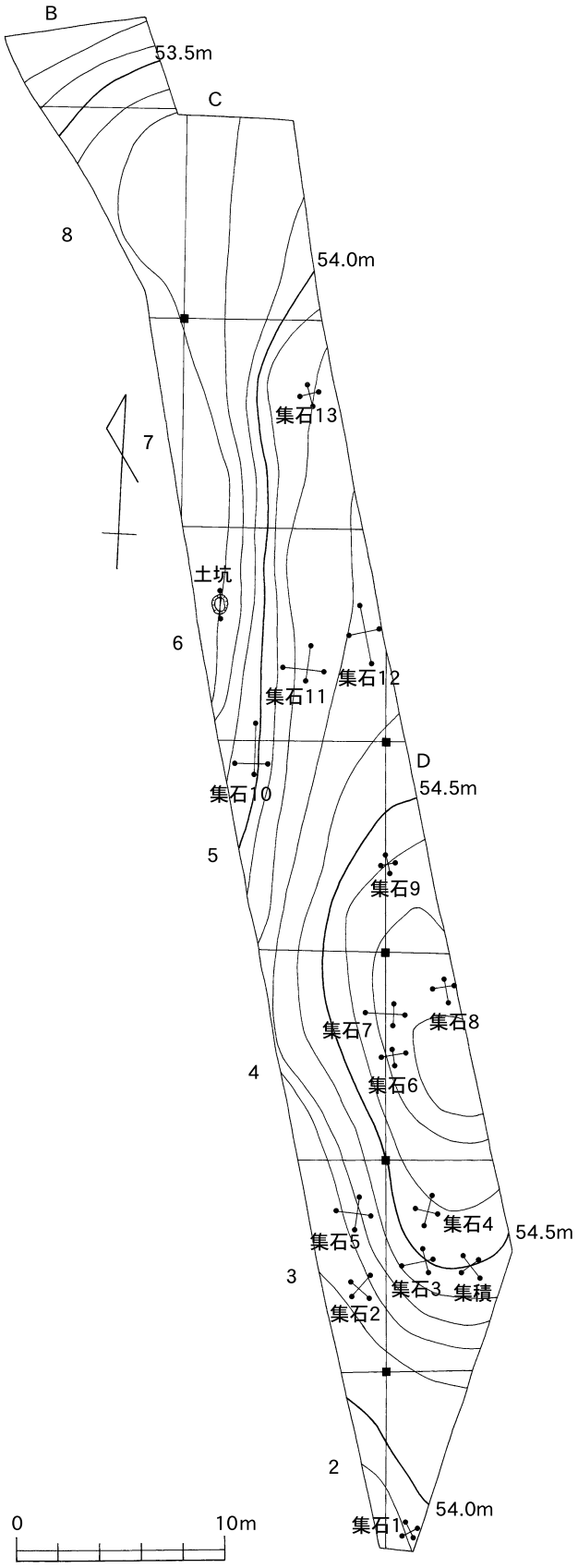
１）集石遺構１号（第97図）

２Ｄ区で検出された集石遺構で，50㎝四方のなかに８個の大きな円礫が集中している。ほとんど幼児頭大の円礫で安山岩である。掘り込みはみられず，一部は重なっている。礫は火をほとんど受けておらず，人工遺物は含まれていない。

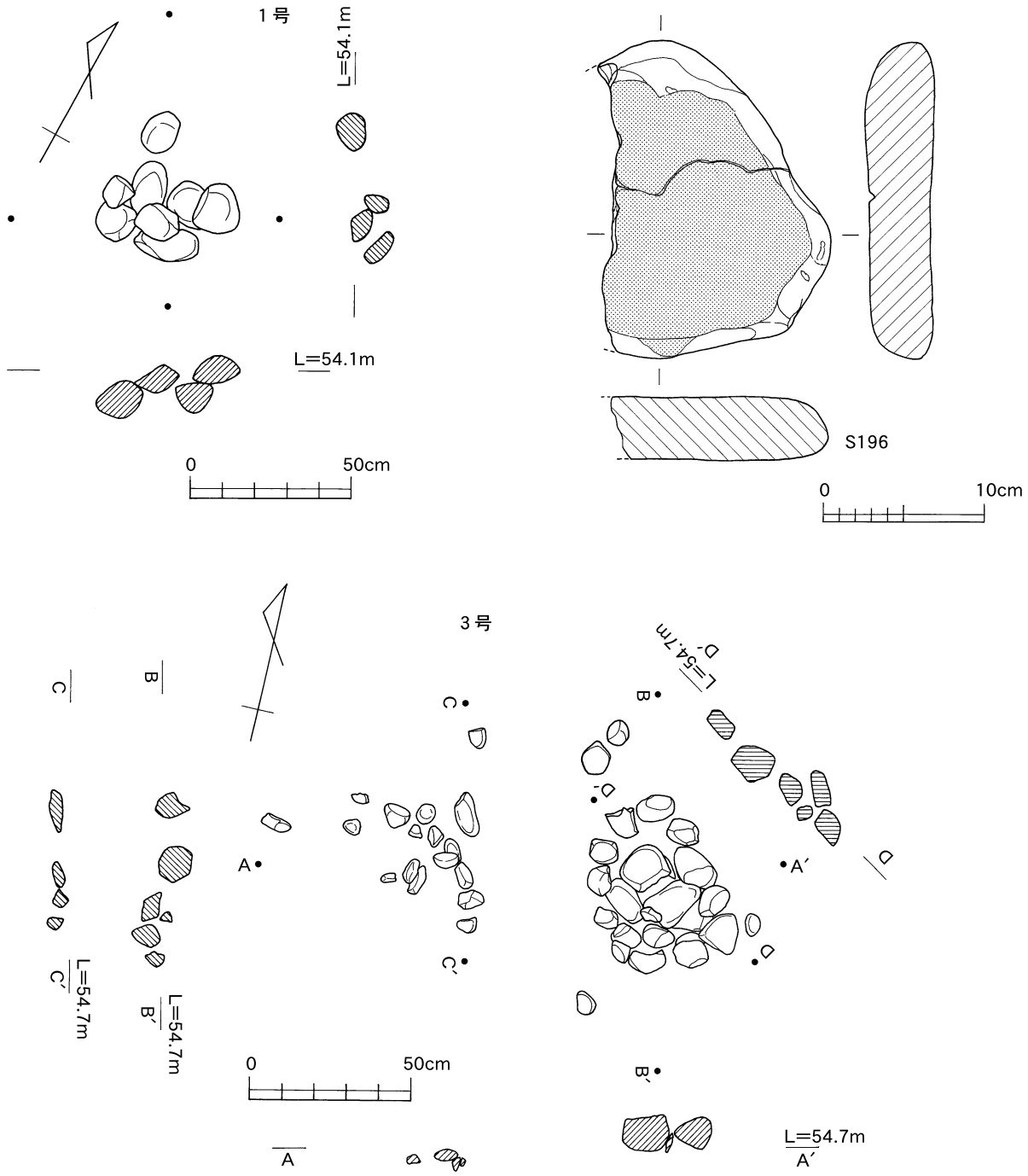
２）集石遺構２号（第98図）

３Ｃ区で検出された集石遺構で，100㎝×75㎝のなかに34個の円礫があり，この西側に石皿がある。５㎝大の小さいものから，15㎝の大きいものまで散在しており，いずれも安山岩で火熱を受けたものが多い。掘り込みはない。石皿は深くくぼんだもので，その上に欠損した磨石２個と礫２個が乗っている。周辺に石坂式土器の胴部片が１点ある。

土器（515）は外面に浅い綾杉状の貝殻条痕が施されているが，その後，部分的にヘラナデもみられる。内面はていねいな横方向のヘラナデで仕上げている。外面は淡茶褐色，内面は灰褐色を呈し，焼成度は良い。石英・



第96図　集石遺構配置図



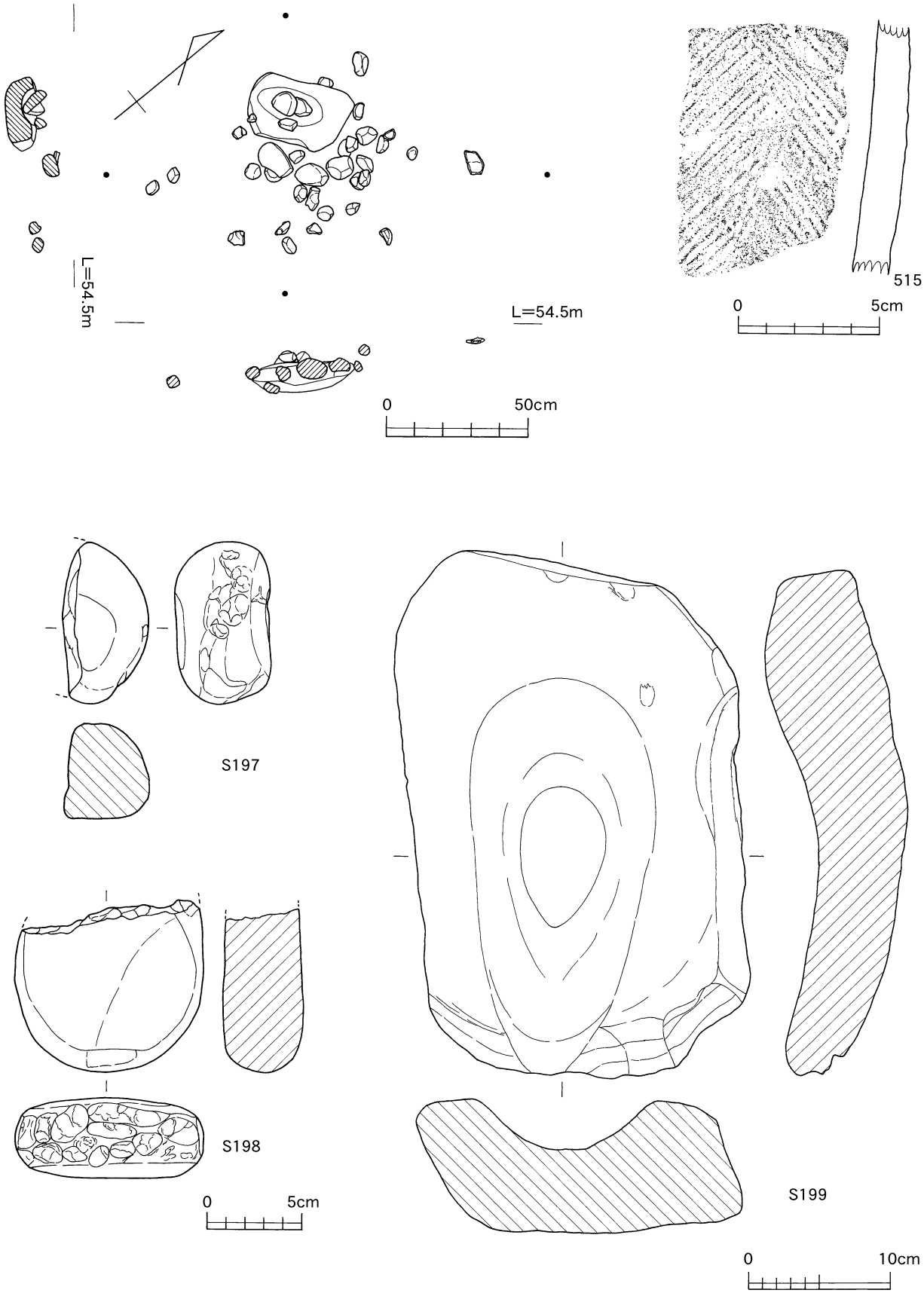
第97図　集石遺構１号・３号と出土石器

黄白色石の細かい石を多く含む砂質土を用いている。石坂式土器である。

石皿（Ｓ199）は長径が37㎝，短径が24㎝の楕円形をした軟質溶結凝灰岩製である。厚さは10㎝近くで，片面が3.5㎝ほどの深さに窪んでおり，片方に注ぎ口を有する。逆の面は自然面を残している。

３）集石遺構３号（第97図）

３Ｄ区で検出された集石遺構で，東側に整然とした礫群が，西側に散在した礫群がある。掘り込みはともになく，床面は東側が高く，西側へ向かって下降している。東側の礫群は直径55㎝のなかに22個の円礫が集中し，そのまわりに３個の円礫がある。これらの円礫はこぶし大よりやや大きく，



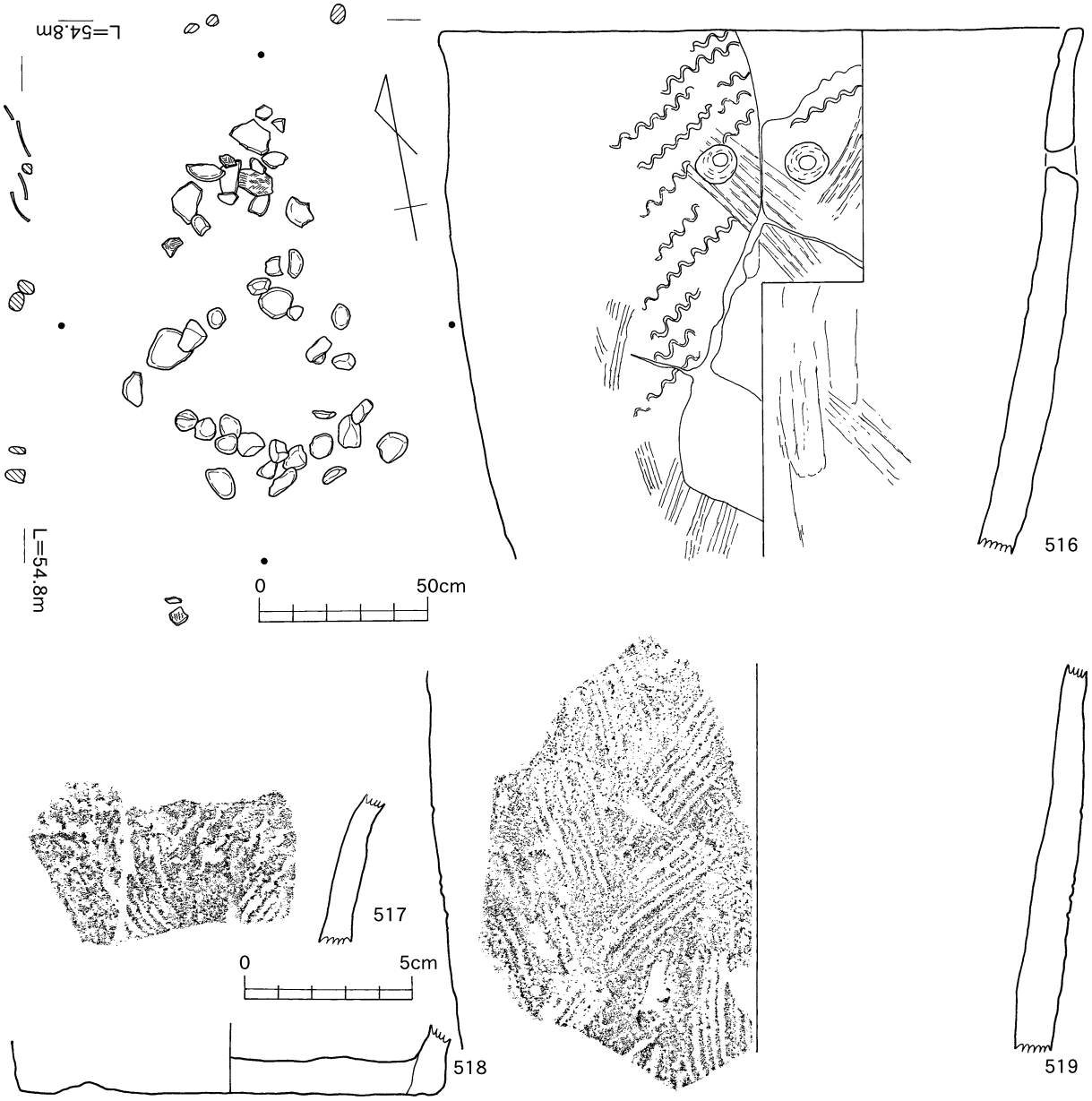
第98図　集石遺構２号と出土遺物

角がすり減ったものが多い。中央の礫は上が水平に一部欠けているが，その部分は一部焼けている。焼けた痕跡が顕著に観察できるのは全体の１／３程度である。石材は花崗岩もいくらかあるが，多くは安山岩である。西側の礫群は東側に比べてやや小さい礫が多く，70㎝四方の範囲に17個がある。東側のほうが一次的に置かれたもので，西側のほうは使用後取り除かれたものと思われる。

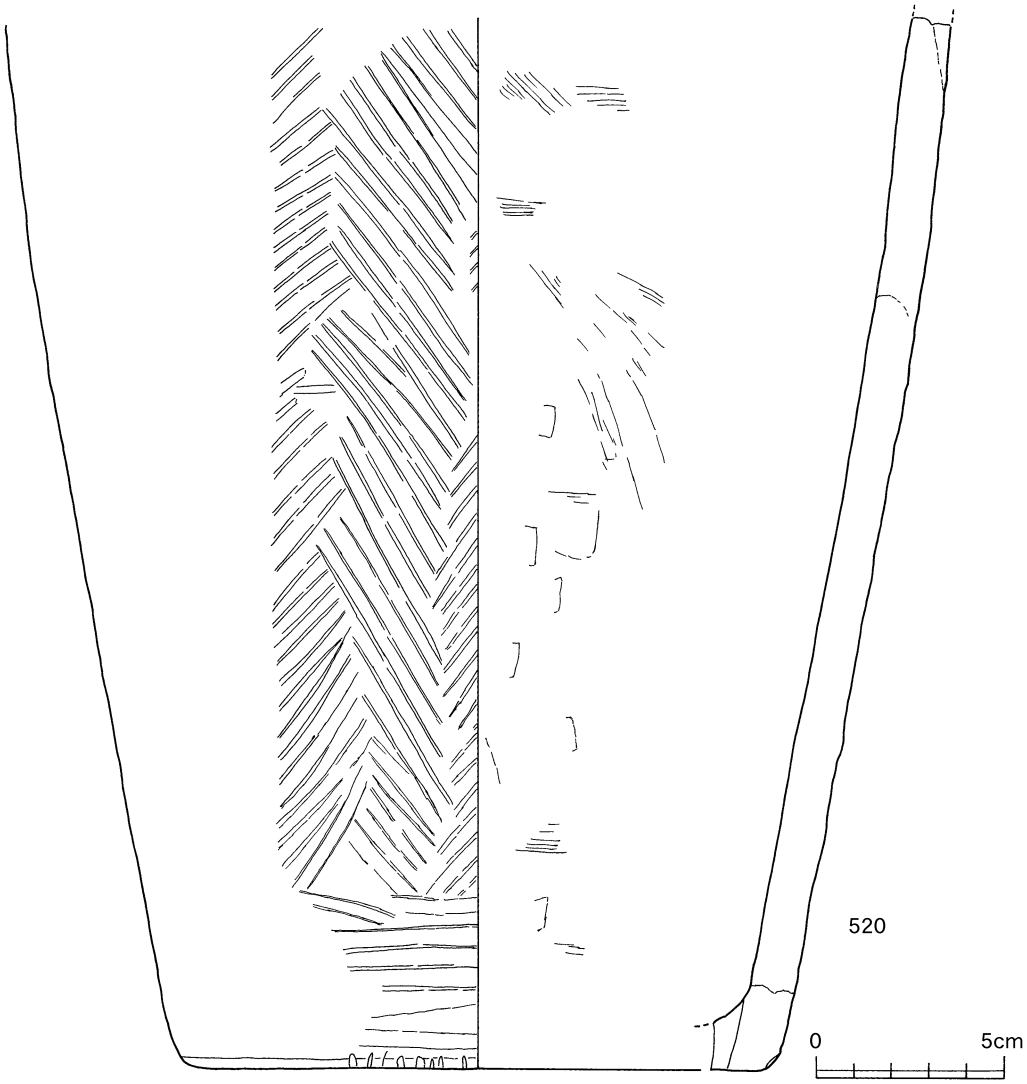
半欠の安山岩製石皿（Ｓ196）が１点出土している。長径が14.5㎝＋α，短径が20㎝ほどの略楕円形を呈しており，厚さは約４㎝ある。両面とも使用しており，ともにいくらか窪んでいる。

４）集石遺構４号（第99図・第100図）

３Ｄ区で検出された集石遺構で，直径90㎝ほどの円形の範囲にこぶし大の円礫が30個程平面的に散在している。風化が激しくもろい花崗岩も数個含まれているが，そのほかのほとんどは安山岩である。この南側50㎝の所には集石３があることから，集石４は集石３の捨て石の場とも考えられる。



第99図　集石遺構４号と出土土器



第100図　集石遺構４号出土土器

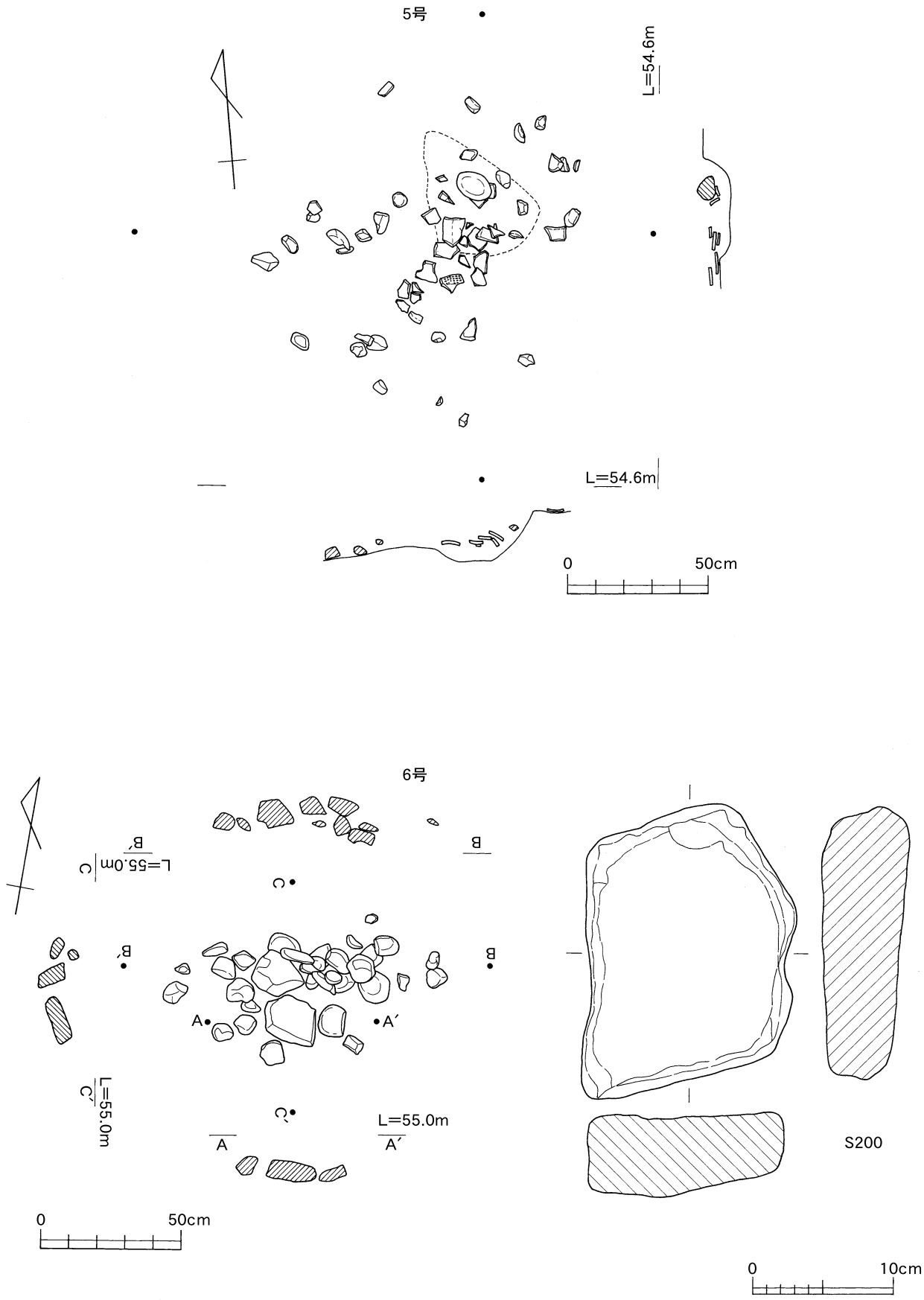
また，この北側には完形に近い石坂式土器が数点あり，南側にも１点の破片がある。

516～519は同一個体と思われる深鉢で，内面に厚くこげが付着している。外へ開きながら伸びる器形を呈し，口縁近くでゆるやかに外反している。口縁部はややでこぼこしているが，直径が17.5㎝あり，端部は薄くなり矩形を呈している。外面は綾杉状二枚貝条痕のあと，上半には左下がりの斜方向の二枚貝押圧文がみられ，部分的にはそのあとヘラナデを施している。剥脱も目立つ。内面は上部が横方向，下部が縦方向のヘラナデで仕上げている。底部は安定した平底で，ていねいなヘラナデをしているが，でこぼこし剥脱も目立つ。底には白色粉が全面に付着している。底は中央の円盤のまわりに粘土紐を巻き付ける作りである。上部に円形の補修孔があるが，外からうがっている。520も同様な作りだが，やや大きい。

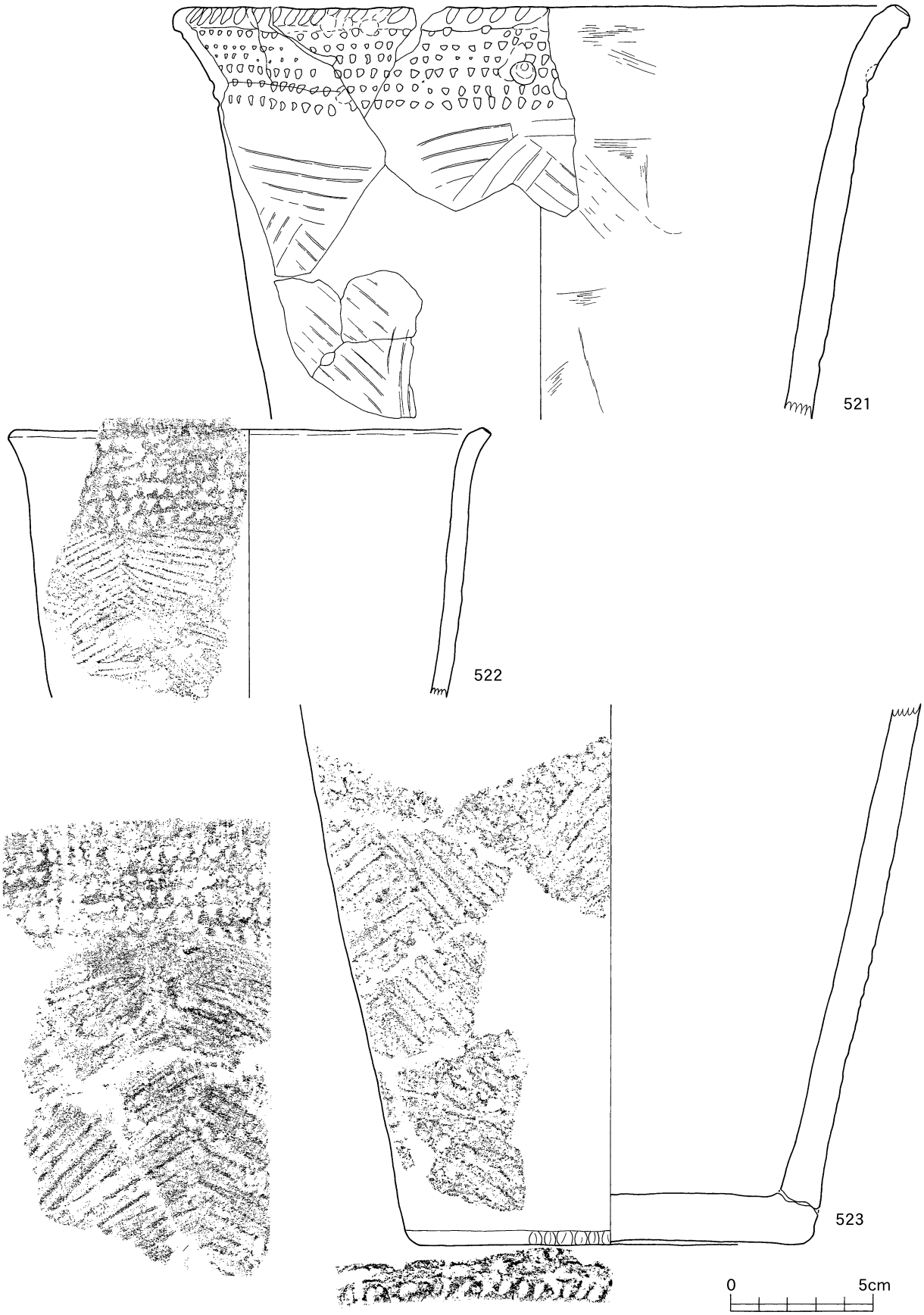
色調は赤あるいは灰色がかった淡茶褐色を呈し，堅く焼けた部分もあるが，普通の部分が多い。石英・茶色石・白色石・雲母・長石などの細かい石を含んだ土を用いている。

５）集石遺構５号（第101図・第102図）

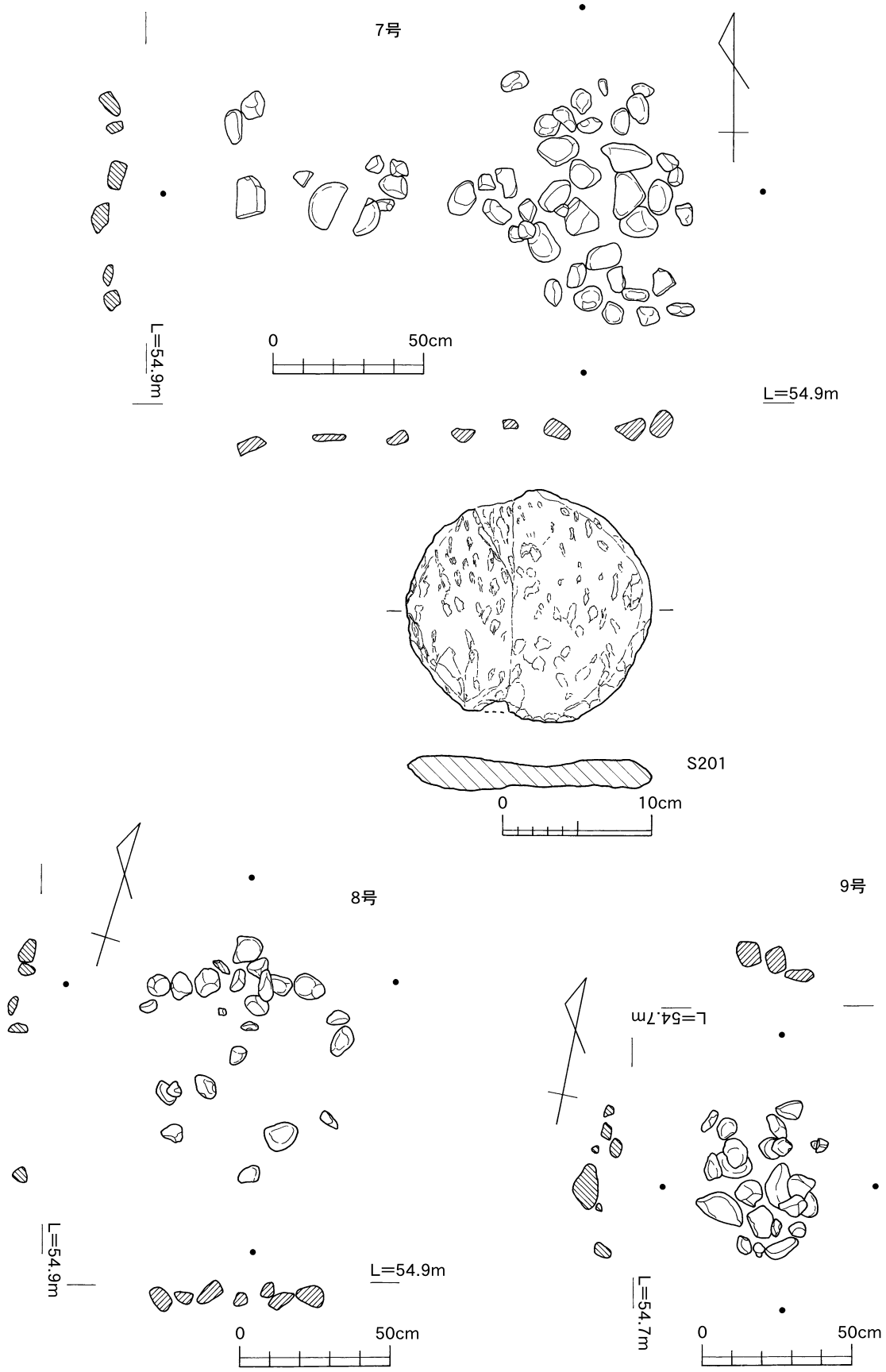
３Ｃ区で発見された集石遺構で，約30個の礫が1.3m×1.2mの範囲に広がっている。安山岩・ホルンフェルスなどの角礫・円礫で，火熱を受けてもろくなっている。掘り込みはないが，やや東へ



第101図　集石遺構５号・６号と出土石器



第102図　集石遺構５号出土土器

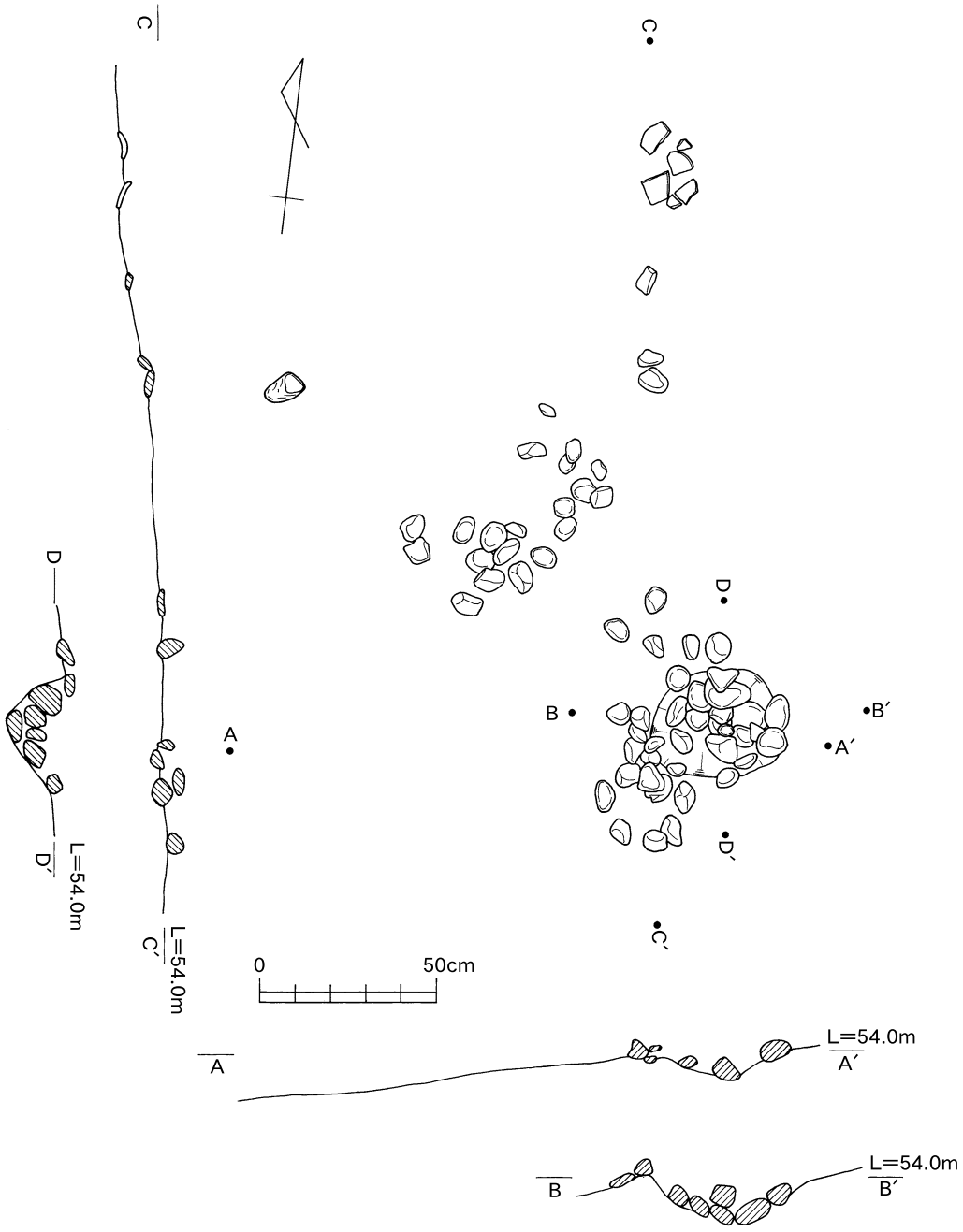


第103図　集石遺構７号と出土石製品・集石遺構８号・９号

上昇している。中央付近に土器が集中している。

土器が４点出土しており，うち１点は破片のため図化していない。

521は口縁直径が26㎝あり，外反する円筒土器である。口唇部にはヘラによる浅い押圧文がある。外面は口縁近くに６段の巻貝殻頂による押圧文がみられ，その下には幅の広い貝殻条痕が横あるいは綾杉状にみられる。内面は口縁近くが横方向，その下が縦方向のヘラナデであるが，口縁近くはていねいである。押圧文の上に，割と接近して２個の浅い円穴がみられる。補修孔を作る意図がうかがえるが，未孔である。部分的に黒褐色を呈しているが，概して黄色っぽい淡茶褐色で，内面はやや赤っぽい。焼成度は普通で，表面は剥脱が目立つ。茶色石・黒色石・白色石・石英・雲母・灰



第104図　集石遺構10号

褐色石などを含む砂質土を用いている。

522は口縁直径が17㎝あり，外反する円筒土器である。薄手の作りで，口唇部にはヘラによる押圧文がある。外面は口縁近くに７段ほどの二枚貝腹縁による横方向の押圧文があり，その下は綾杉状の貝殻条痕がみられる。内面はていねいなヘラナデがみられ，下のほうにこげが付着している。外面は茶褐色を呈しているが，内面は黄みがかった褐色である。焼成度は普通で，石英・黄白色石などの細かい石を含む胎土である。この破片は４Ｃ区Ⅶ層で出土した土器と接合している。

523は底径が14㎝ある平底の深鉢で，外へ開きながらまっすぐ伸びている。外面は幅の広い綾杉状貝殻条痕で，底近くはヘラによる横ナデで仕上げている。立ち上がり部分にはヘラによる押圧文がみられる。底は厚く，ミガキに近いていねいなヘラナデで仕上げている。内面は縦方向のヘラナデで，下半部にはこげが付着している。接合せず，直径がいくらかあわないが，文様，厚さ，色，胎土などが似ていることから521と同一個体の可能性がある。

６）集石遺構６号（第101図）

４－Ｃ・Ｄ区のⅦ層最下部で発見された集石遺構で，32個の円礫が幅50㎝，長さ１ｍの列状に並んでいる。中央付近に２個の大きな礫があり，その周辺にこぶし大の礫がある。安山岩が主で，花崗岩や砂岩等も混在している。３分の１ほどの礫が火熱を受けて赤く変色したり割れている。掘り込みはなく，ほぼ平坦で石が重なった部分もある。

石皿（Ｓ200）が１点含まれている。15㎝×21㎝ほどの角張った楕円形をした花崗岩を用いている。厚さは６㎝近くあるが，ややでこぼこし，片面のみを使用しているが，使用痕跡は顕著でない。

７）集石遺構７号（第103図）

４－Ｃ・Ｄ区のⅧ層直上で発見された集石遺構で，49個の円礫が幅0.9m，長さ1.1mの範囲に広がっている。東側の80㎝×90㎝の円形の範囲には39個の礫が集中しており，これが本体と思われる。石材には安山岩・花崗岩・軽石等があり，このうち赤色に変色している礫は５個しかない。掘り込みはなく，ほぼ平坦だが，東から西へ向かってやや下降している。中に円盤状軽石製品１点がある。

軽石製品（Ｓ201）は15.5㎝×16.5㎝のほぼ円形をした円盤形をしている。厚さは約２㎝と扁平で，二つに割れている。黄みがかった軽石を用いており，摩耗が目立つ。ボロボロしているため加工痕ははっきりしないが，周辺をていねいに磨いているようである。

８）集石遺構８号（第103図）

４Ｄ区のⅧ層直上で発見された集石遺構で，24個の円礫が70㎝×80㎝の範囲に丸く散らばっている。石材は安山岩が主体で，赤く焼けた痕跡のあるのは１点だけである。掘り込みはなく，ほぼ平坦である。

人工遺物は含まれていない。

９）集石遺構９号（第103図）

５－Ｃ・Ｄ区のⅧ層上面で発見された集石遺構で，23個の円礫が直径50㎝の範囲に集中している。安山岩と花崗岩で，３㎝ほどの小さいものから15㎝ほどの大きさのものまである。３分の１ほどの礫は赤く変色している。ほぼ平坦だが，中央がやや窪んでいる。

人工遺物は含まれていない。

10）集石遺構10号（第104図・第106図　524・525・Ｓ202）

５・６－Ｃ区のⅧ層直上で発見された集石遺構で，62個の円礫が1.1m×2.1mの範囲にある。石材は安山岩が多く，花崗岩も少量含まれている。南東隅には38個の礫が直径70㎝の円形の範囲に集中しており，ここは15㎝ほどにくぼんでいる。ここが主体部と思われる。その北西側には40㎝×60㎝の楕円形の範囲に21個の礫が集中している。ここは廃棄の場と思われる。これらの北側には土器が集中している。石坂式土器である。

土器２点と石器１点が出土している。土器は口縁部が外反し，分厚い作りのもので，524の口縁直径は21.5㎝ある。524の口縁の１か所は厚くなり，こぶ状を呈している。口唇部はともにヘラによる細い押圧文が施され，外面は上部が貝殻による押圧文，下部が二枚貝の綾杉状条痕であるが，押圧文が524は二枚貝による左下がり，525は巻貝殻頂による横方向である。525は押圧のあと横方向のヘラナデを施している。内面はともに横方向のヘラナデである。524の外面と525の口縁内面にはススが，524の内面下部にはコゲが付着している。524は輪積み痕跡が良く残っており，外面は剥脱痕が目立つ。色調は外面が524は茶褐色，525は明茶褐色，内面が524は黄みがかった淡茶褐色，525は赤っぽい明茶褐色をしている。胎土はともに石英・白色石・茶色石・角閃石などの細礫を含み，焼成度は525は良いが，524は普通である。524は６Ｃ区Ⅶ層出土の破片と接合している。

石器は頭部の欠けた局部磨製石斧（Ｓ202）である。先端は細いＵ字状を呈しているが，ここのみを磨いている。周辺をていねいに打ち欠き，幅７㎝に仕上げている。頁岩製で，風化している。

11）集石遺構11号（第105図・第106図　526・Ｓ203～Ｓ205）

６Ｃ区のⅦ層で発見された集石遺構で，55個の円礫が0.6m×1.0mの範囲に広がっている。掘り込みはなく，ほぼ平坦な部分に広がっており，こぶし大の安山岩が多いが，扁平なものもある。また，砂岩の扁平なものと角礫，非常に風化した花崗岩も数点ずつある。この集石遺構の西側へやや下降している部分には石坂式土器が数点ある。集石遺構の中及びまわりには石皿や磨石・石斧もある。

土器１点と石器３点が出土している。

土器は集石遺構10号で出土した524と，形態・文様・厚さ・色調・胎土・焼成度などがほとんど同じで，同一個体の可能性がある。

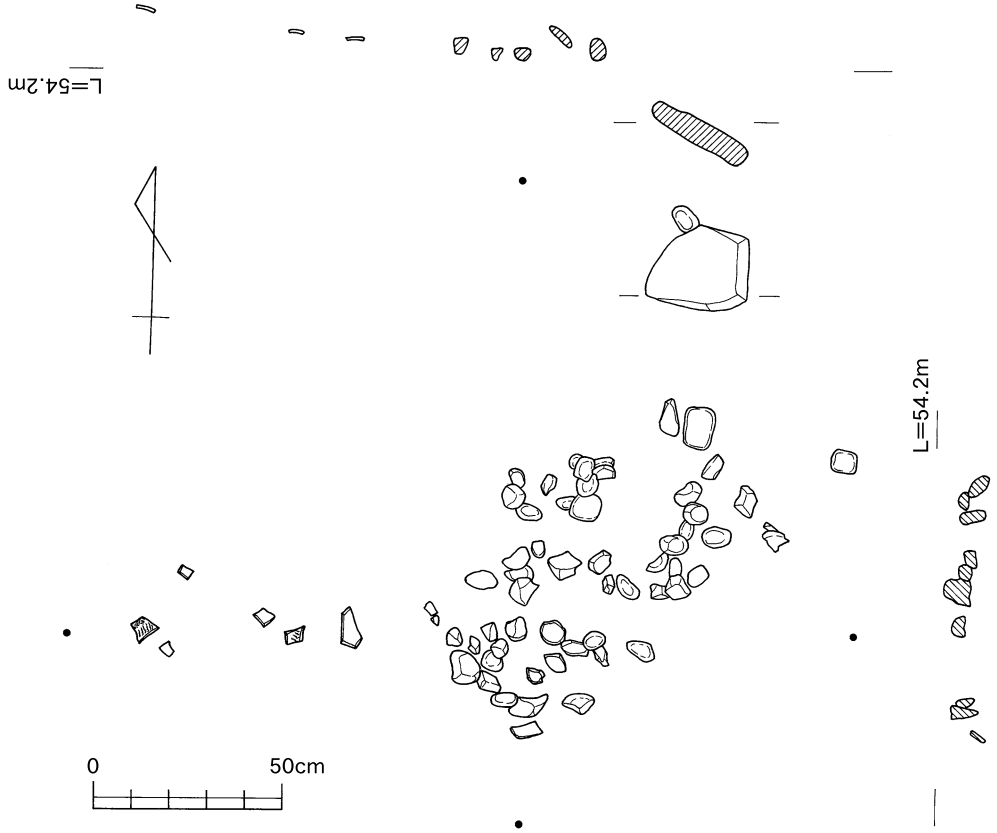
Ｓ203は頁岩製の礫器で，風化が激しい。長さが11.5㎝，幅が5.5㎝の長方形をしており，刃部のみ両側から細かい加工をしている。Ｓ204は長径13㎝，短径10㎝，厚さ３㎝の円形に近い形をした砂岩製の石器で，両面ともよくすれており，側面には全周，特に頭部以外の場所に敲打痕がみられる。磨石・敲石・石皿兼用の石器だろうと思われる。Ｓ205は長さ28.5㎝，幅22㎝，厚さ7.5㎝の砂岩製石皿で，でこぼこしているが，両面を使用している。裏面には中央に丸くて浅い窪みがある。

12）集石遺構12号（第107図・第108図）

６Ｃ区のⅦ層下面で発見された集石遺構で，30個の礫が１m四方に散在している。北側に２個の石皿を配し，それと接するようにして石坂式土器がある。安山岩が主体で，火を受けて破砕しているものもある。また風化してボロボロとなった花崗岩が２点ある。ほぼ平坦であることから，捨てられたものと思われる。

土器３点と石器３点がある。

527はこぶ状突起のある頸部付近の破片である。外面は幅の広い貝殻条痕で，突起の上は右下が



第105図　集石遺構11号

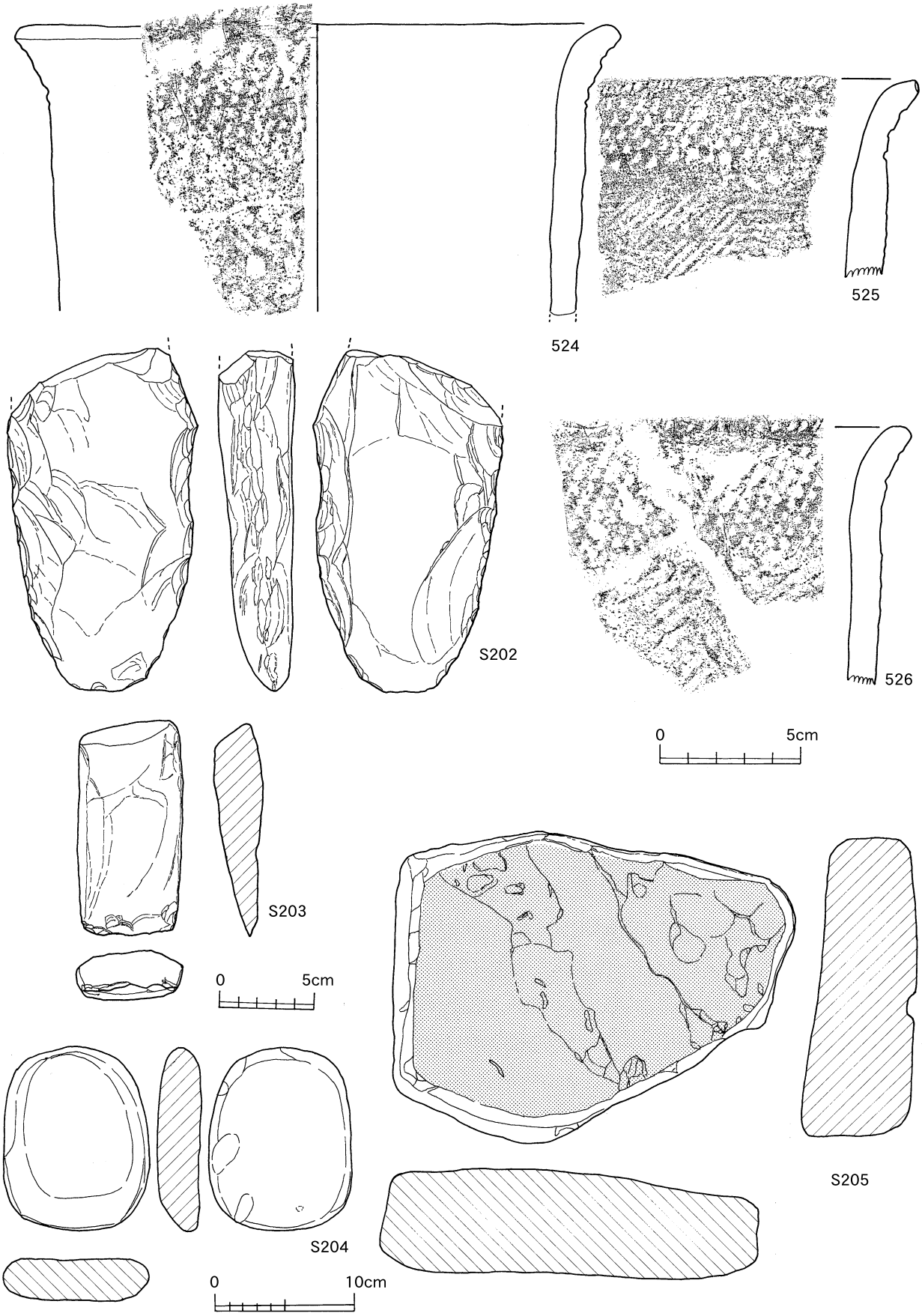
りの二枚貝押圧文がある。内面はていねいなヘラナデで仕上げている。黄みがかった淡茶褐色を呈し，焼成度は良い。石英・黄白色石の細かい石が含まれている。

528は口縁直径が26㎝ある分厚い作りの深鉢で口唇部には左下がりのヘラ押圧がみられる。外面は上に二枚貝腹縁による横方向の押圧文があり，下には幅の広い綾杉状貝殻条痕がみられる。内面は横方向のていねいなヘラナデで仕上げている。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。石英・白色石の多い土を用いている。

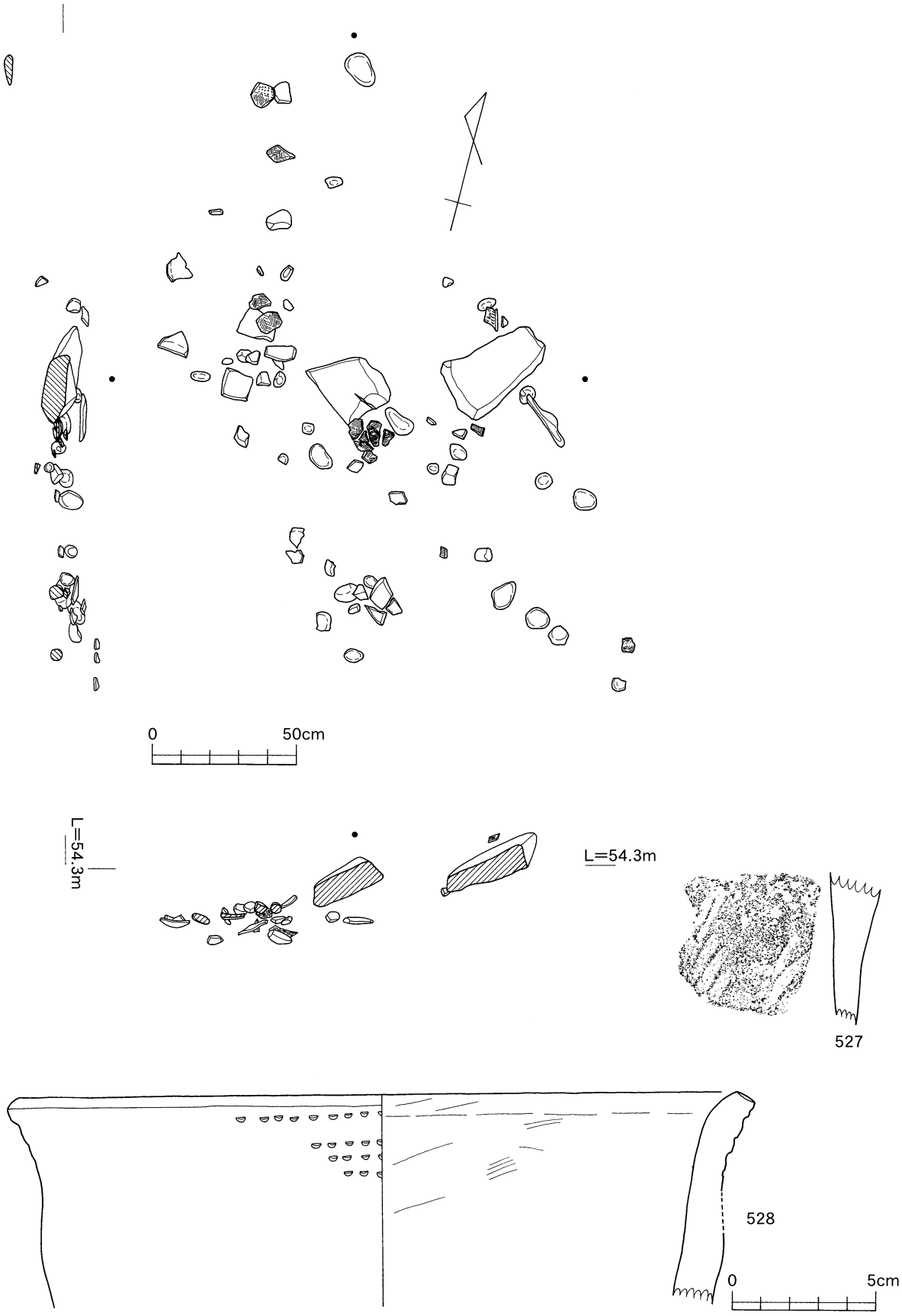
529は口縁直径25㎝，高さ27.3㎝，底径13.5㎝の完形品である。安定した平底から開きながらまっすぐ上へ伸び，外反して口縁へ至る。分厚い作りの深鉢である。口唇部に左下がりの浅いヘラ沈線があり，口縁部には８段ほどの巻貝殻頂による押圧文があり，その下には二枚貝腹縁による綾杉状貝殻条痕がみられる。底近くは横方向となる。内面の上方は横方向，下は縦方向のヘラナデである。口縁近くに円形の補修孔が２個みられる。色調は茶褐色で，焼成度は普通である。石英・白色石などの細かい石を含んでいる。この土器は５Ｃ区・６Ｃ区Ⅶ層の土器とも接合している。

Ｓ206は長径10㎝，短径8.5㎝，厚さ4.4㎝の楕円形をした安山岩製石器で，両面が良く磨かれている。片面の中央付近に浅い窪みがあり，側面は全周に敲打痕がある。これは磨石・敲石・凹石を兼用した石器である。

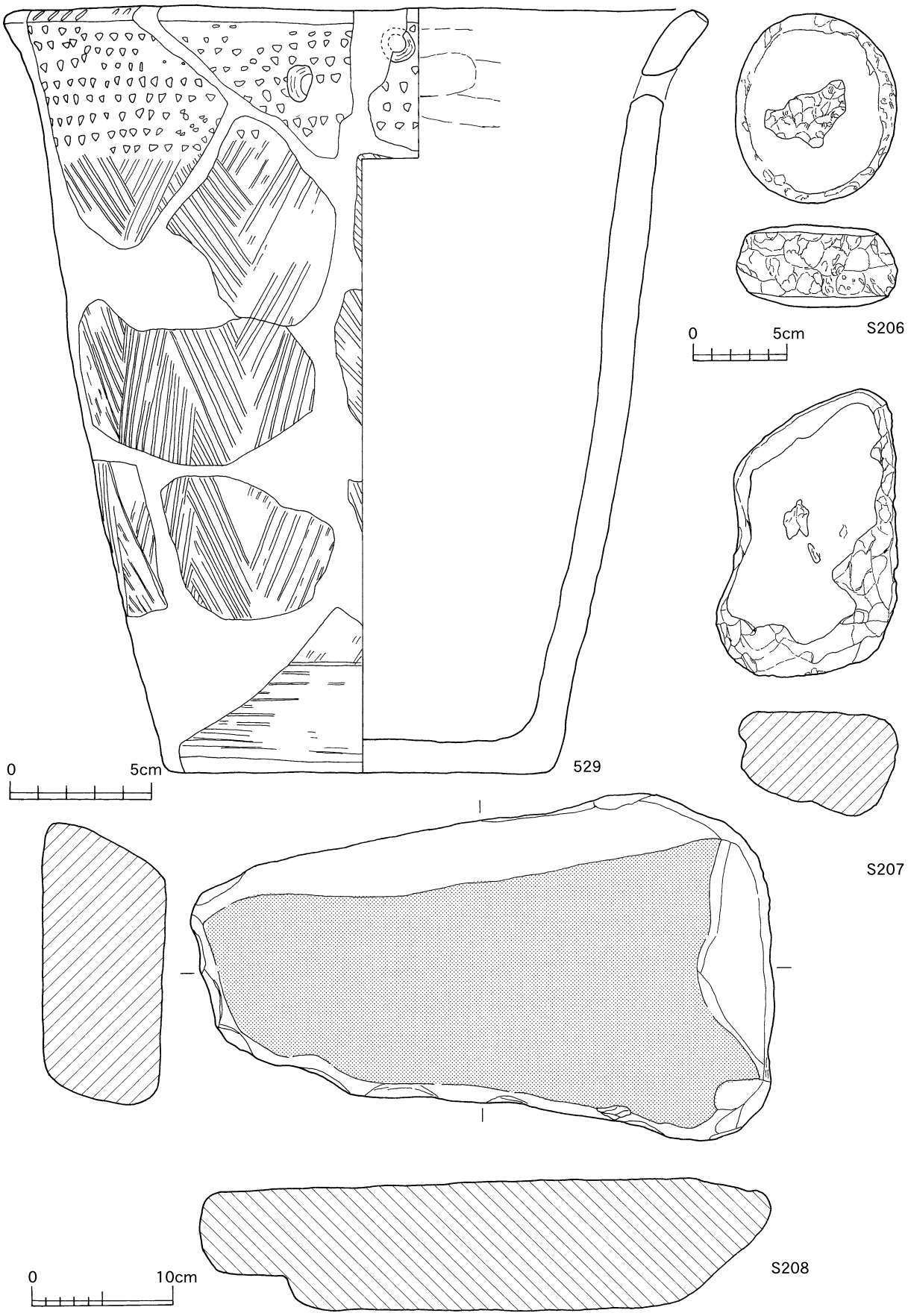
Ｓ207とＳ208は石皿である。Ｓ207は平面が20.5㎝×13㎝，厚さが7.5㎝ある花崗岩の河原石の片面を使用している。Ｓ208は平面が41.5㎝×24.5㎝，厚さが9.5㎝ある安山岩の河原石の両面を使用している。全面摩耗している。



第106図　集石遺構10号・11号出土遺物



第107図　集石遺構12号と出土土器



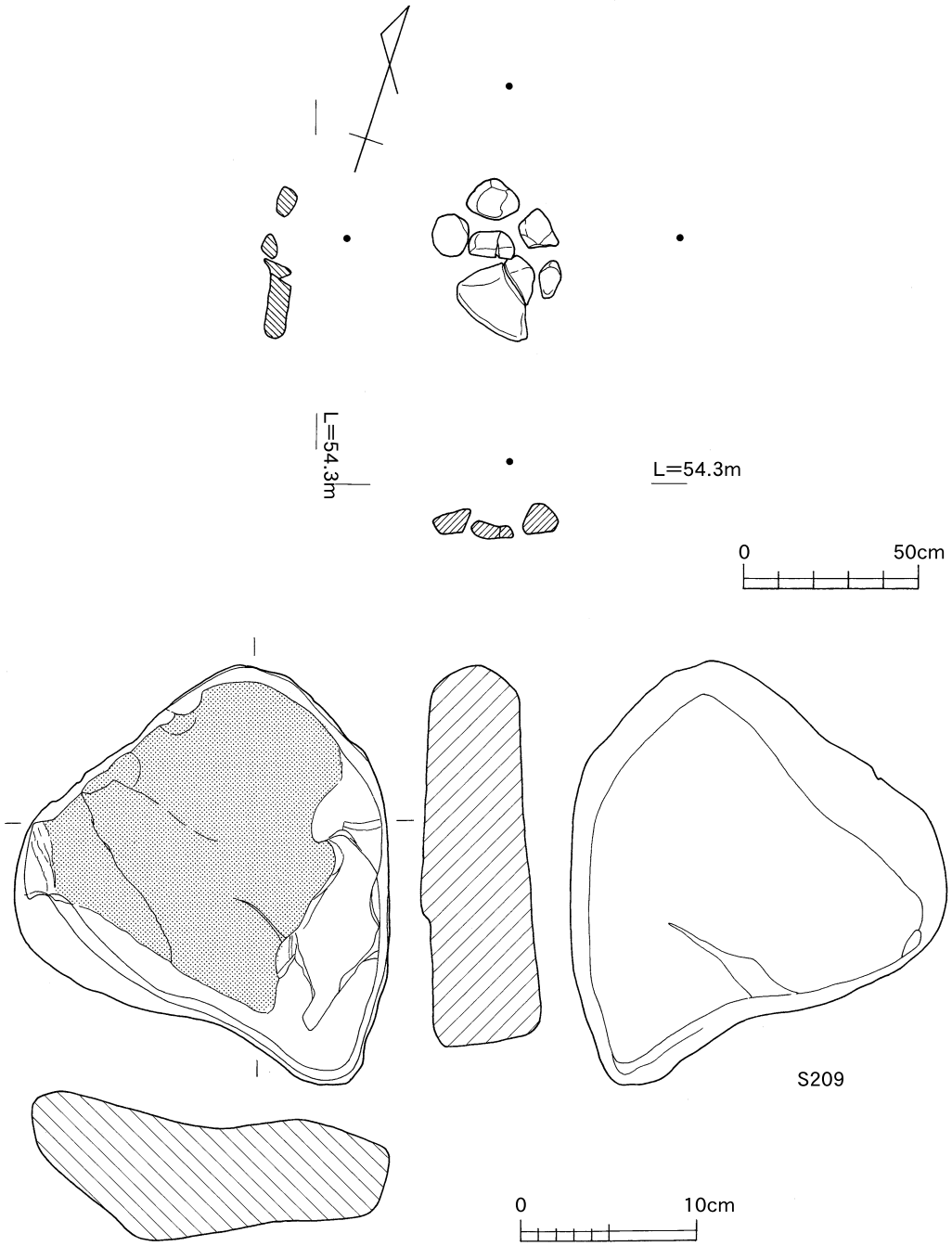
第108図　集石遺構12号出土遺物

13）集石遺構13号（第109図）

７Ｃ区のⅦ層で発見された集石遺構で，割合に大きな円礫７個が40㎝×50㎝の範囲にまとまっている。掘り込みはなく，ほぼ平坦に置かれている。石材は砂岩で，火を受けて割れているものもある。南端に置かれた最も大きな石は石皿である。

この遺構は礫が整然と並んでいること，割と大きな礫がそろっていることから，一次的に置かれたものと思われる。

石皿（Ｓ209）が出土している。24㎝×21.5㎝，厚さが6.5㎝の不定形の砂岩を用いており，片面のみを使用している。ひび割れが激しい。



第109図　集石遺構13号と出土石器

２　石皿・磨石集積遺構（第110図）

３Ｄ区で検出された遺構で，ほぼ水平に置かれた石皿の脇に，磨石がたてかけたような状態で置かれていた。掘り込みはみられず，周辺に炭火物等もみられなかった。東側近辺に２点の磨石もあったが，関連はつかめなかった。

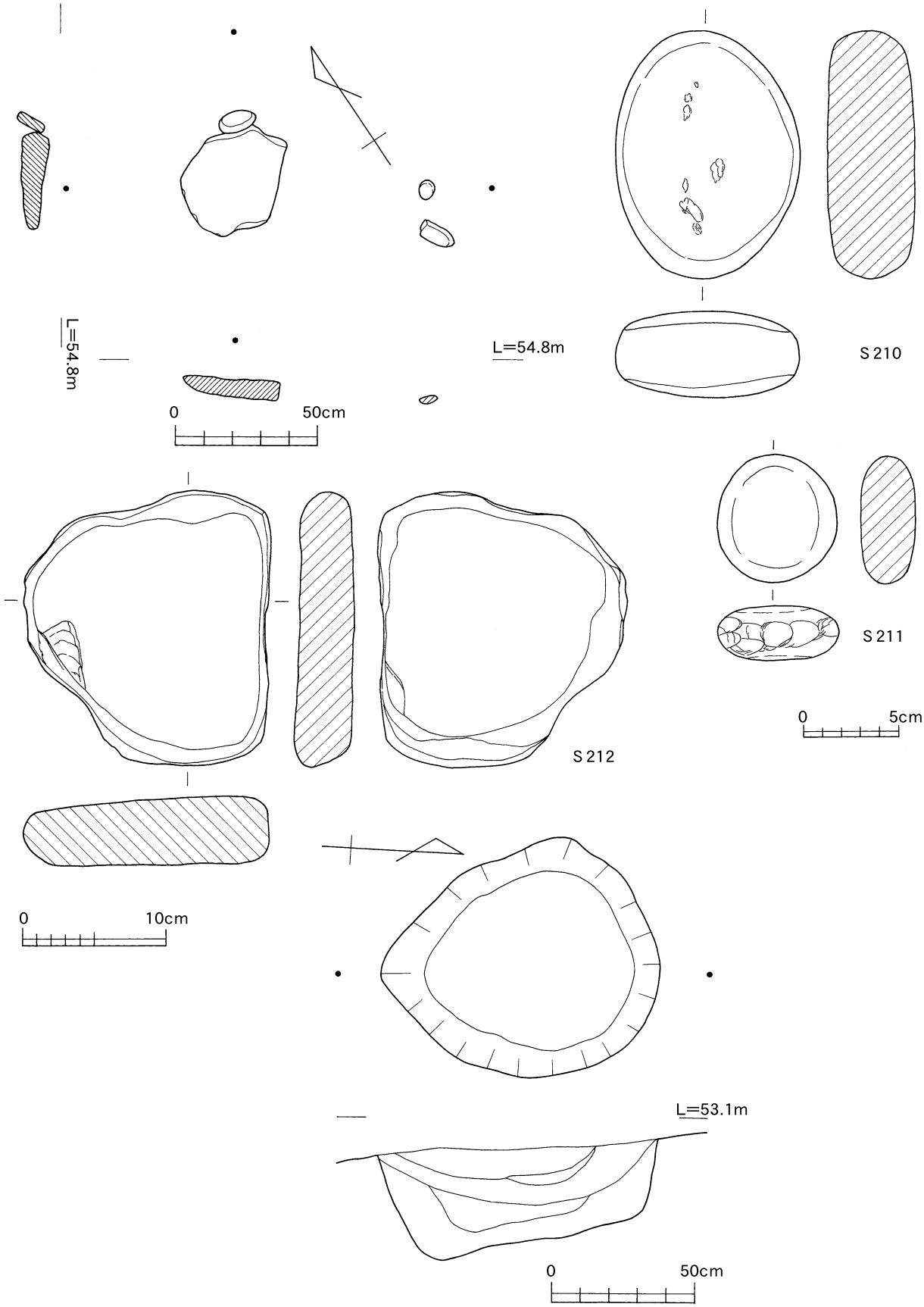
Ｓ210は安山岩製の磨石で，13㎝×9.5㎝の楕円形をしている。両面・側面ともよく使い込んでツルツルしているが，石材のためかでこぼこも目立つ。Ｓ211は6.6㎝×6.3㎝のほぼ円形をした砂岩製のもので，両面を使用し，側面には打痕がみられることから敲石としても用いられている。

石皿（Ｓ212）は長さ19.2㎝，幅17.2㎝，厚さ4.5㎝の花崗岩製である。両面を使用しており，ほぼ平坦であるが，片面はやや窪んでいる。

３　土坑（第110図）

６Ｃ区で検出された上面で100㎝×80㎝，下面で75㎝×70㎝の略円形をした土坑である。深さは27㎝～39㎝で，断面形は逆台形をしている。埋土は下から黒っぽい茶褐色土まじりの黄褐色軽石，黄褐色軽石，軽石まじりの黄褐色火山灰，黄褐色軽石，黄褐色火山灰まじりの黒色土である。埋土中に人工遺物はなく，腐植土が少なく，軽石が多くはいっていることなどから，時期，性格ともはっきりしないが，黄褐色火山灰などの色から池田カルデラの噴出物と考えられ，前期頃の土坑とも考えられる。

四方高迫遺跡



第110図　集積遺構と出土石器・土坑

第２節　遺物

遺物には土器と石器がある。

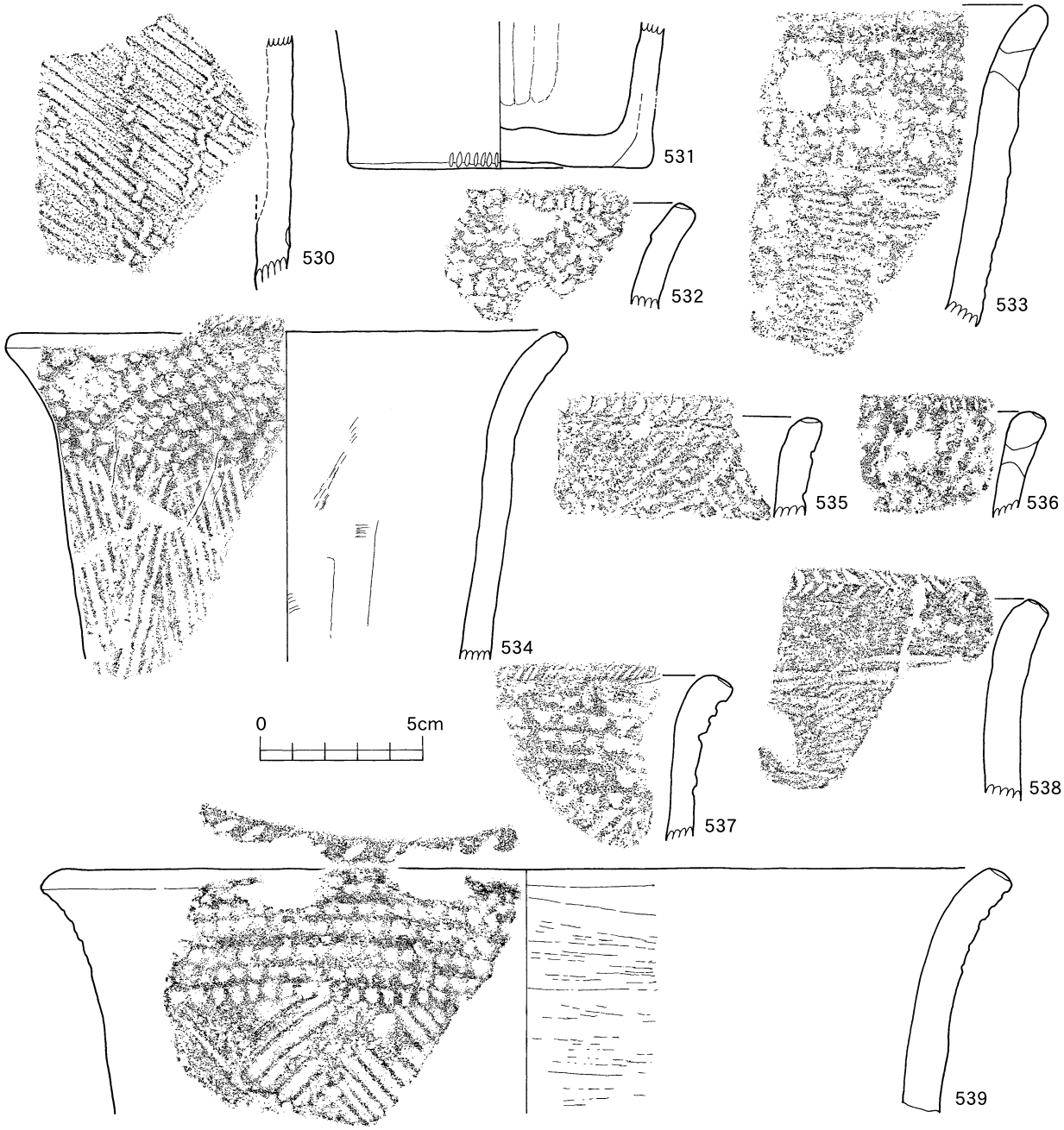
１　土器

255点の土器が出土しているが，これは大きく３種に分けることができる。前平式土器・石坂式土器・妙見式土器である。

１）前平式土器（第111図530・531）

２点だけだが前平式土器の破片がある。

530は２Ｃ区Ⅶ層で出土しており，内面の広い範囲は剥脱している。角筒土器で，外面は右下がり斜方向の二枚貝貝殻条痕が付され，そのあと縦方向および斜方向の二枚貝筋による押圧文が付さ



第111図　縄文土器(1)　前平式土器・石坂式土器

れている。内面調整はナデかと思える。

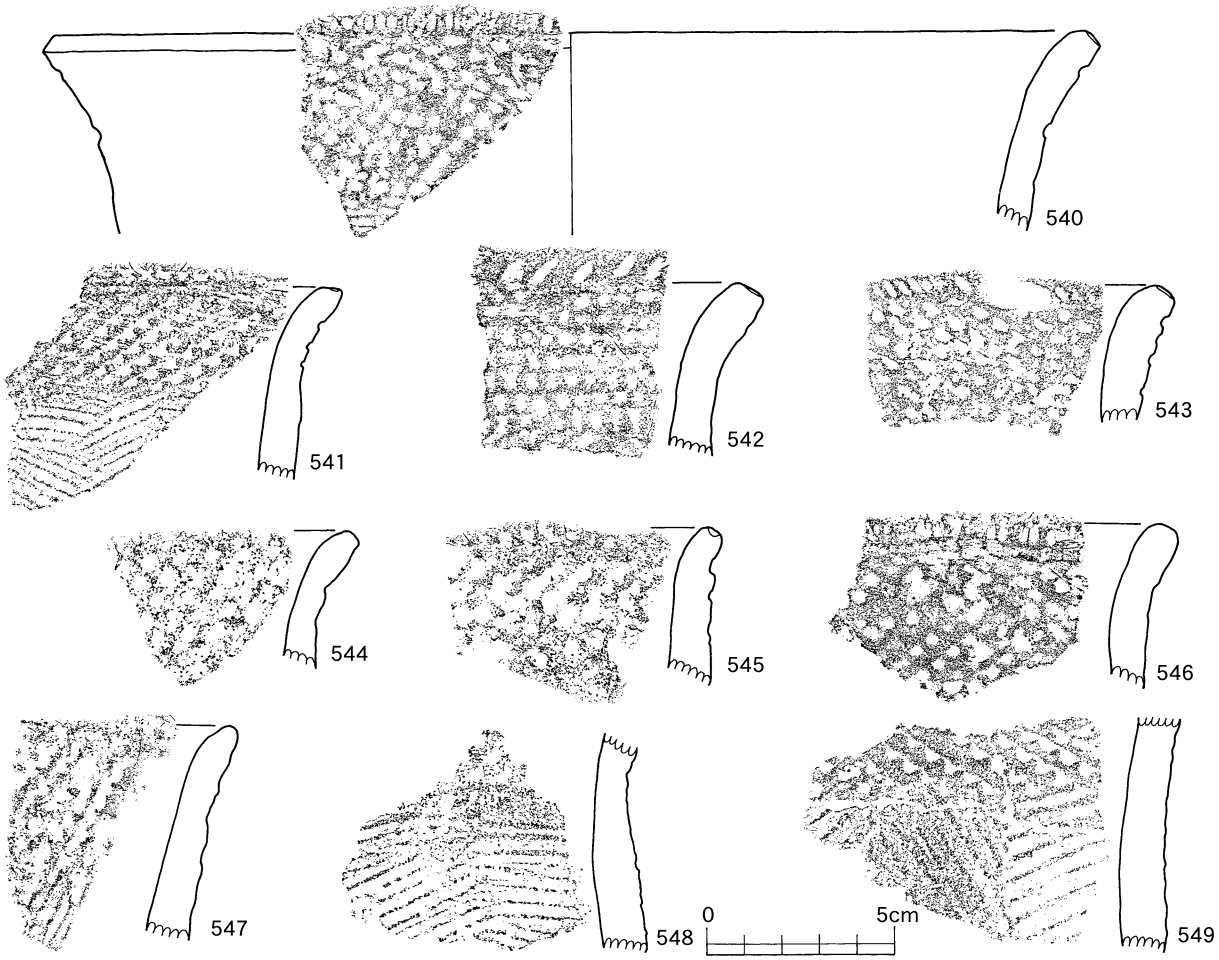
531は７Ｃ区Ⅶ層で出土した底部直径9.4㎝の円筒土器底部で，ややあげ底になっている。底は円板の外をまくようにして積み上げている。外面は横方向あるいは斜方向の貝殻条痕が付され，底近くにはヘラ刻みが巡っている。内面は縦方向のヘラナデ，底部はミガキに近いていねいなヘラナデで仕上げている。

530の外面と531の底は灰黒褐色，530の内面と531は茶褐色を呈しており，焼成度はともに良好である。石英・黄白色石・雲母などの小石を含む砂質土を用いており，５㎜大のものもある。

２）石坂式土器（第111図～第115図532～583）

口縁部が外反する円筒土器で，安定した平底である。外面は二枚貝による綾杉状の条痕文を主体とするが，上面に貝殻の刺突文があるものと，全面に条痕があるものとがある。条痕がなく全体を刺突文で綾杉状とするものもある。内面はほとんど横方向のヘラナデで仕上げている。

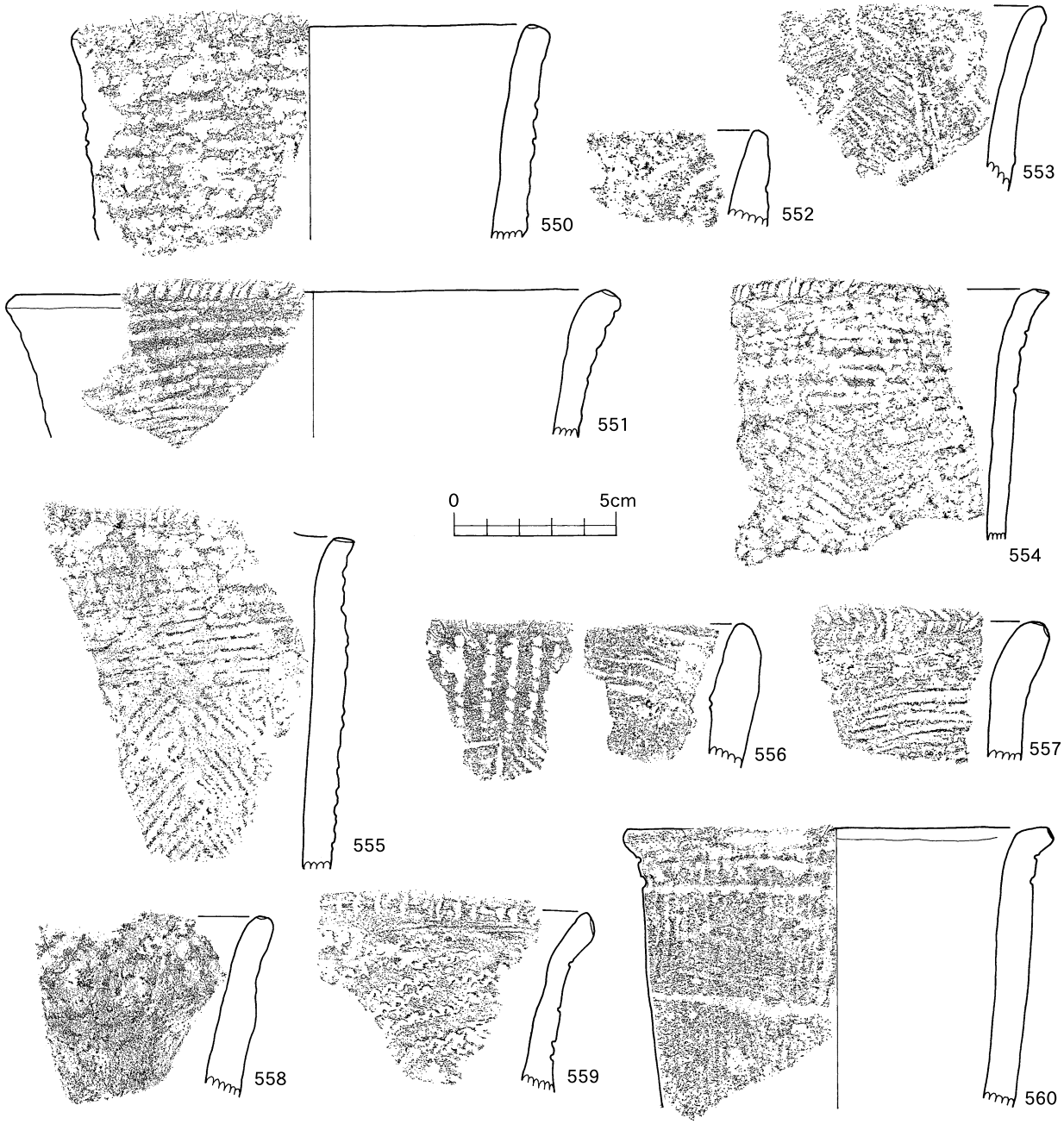
532～561は上面に貝殻の刺突文があるものである。532は口唇部にヘラキザミがあり，口縁部には巻貝殻頂押圧による右下がり刺突文がある。533は上部に６列ほどの横方向二枚貝刺突文があり，その下には横方向の貝殻条痕がある。左側に円形の補修孔がある。外から内へ向かって，もみ錐様のもので穿たれている。口唇部の刻みは不明である。534は口縁直径17.5㎝と小型のもので上部に右下がりの二枚貝刺突があり，その下に二枚貝腹縁による条痕文が綾杉状に施される。口唇部は欠



第112図　縄文土器⑵　石坂式土器

けが目立つが，ここにヘラ刺突がみられる。535・536は口縁上部に二枚貝腹縁による左下がり刺突文がみられ，口唇部にはヘラ刺突文・ヘラキザミがみられる。536は丸い補修孔がみられる。

537は横方向のヘラナデのあと，二枚貝腹縁による横方向の刺突文が付され，その下は二枚貝腹縁によって綾杉状の条痕がみられる。口唇部はやや肥厚し，ここには密にヘラキザミが付される。538も二枚貝腹縁によって刺突文が付されているが，そのあと横方向のヘラナデが施されているために刺突文はほとんど消えている。口唇部にはハの字状にヘラキザミがみられる。539は口縁直径が30㎝あり，外面上部には６段ほどの二枚貝腹縁による横方向刺突文がある。その下には幅の広い貝殻腹縁によって綾杉状の条痕文が付される。口唇部には左下がりのヘラ押圧がみられる。口縁下部には積み上げ痕がみられる。

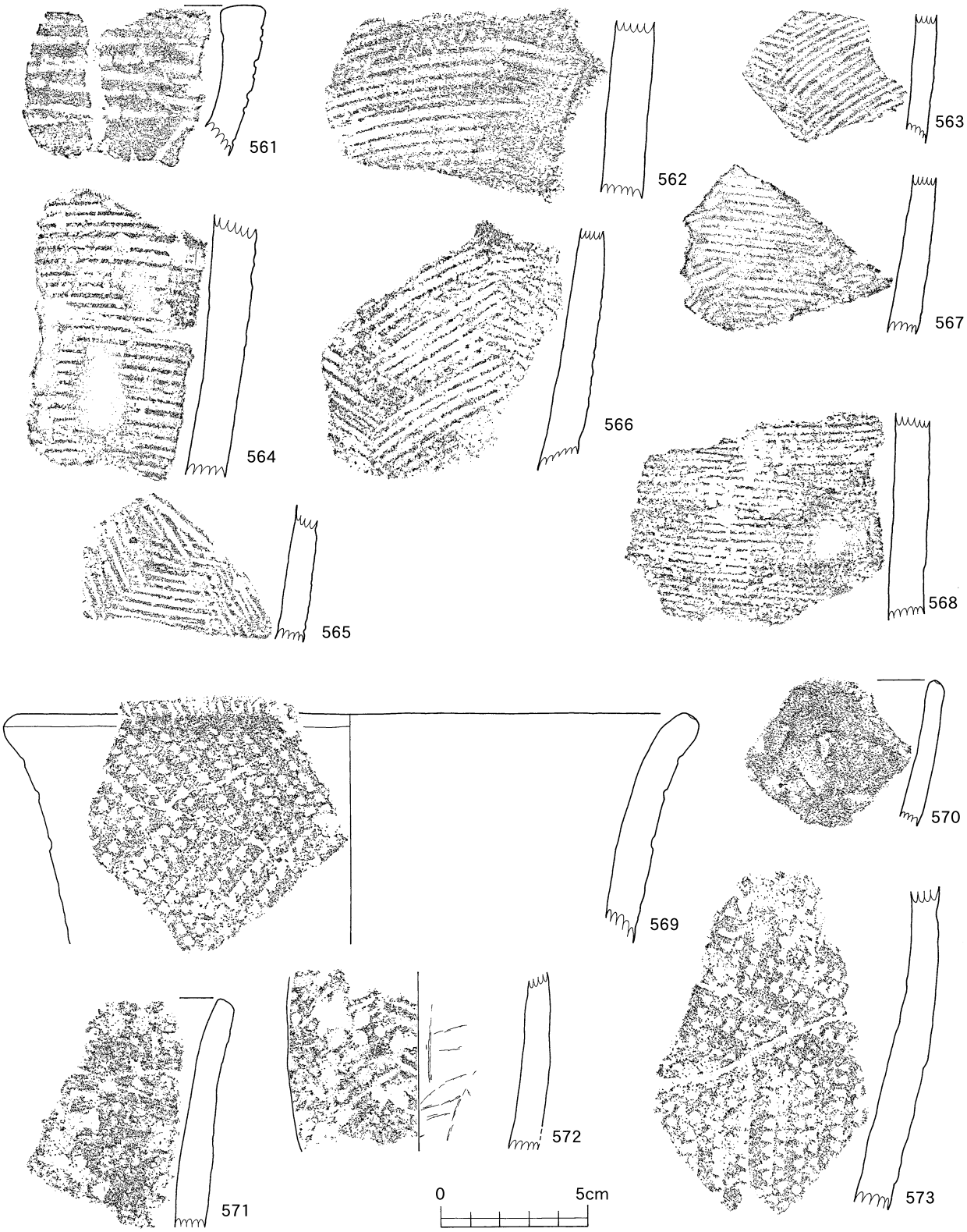


第113図　縄文土器(3)　石坂式土器

540は口縁直径が28㎝あり，外面上部は二枚貝腹縁によって綾杉状の刺突文が付されたあと横方向のヘラナデが，下は貝殻条痕が施される。ススが付着し，口唇部にはヘラ押圧がみられる。541は二枚貝腹縁によって左下がりの斜方向刺突文が付され，その下には綾杉状貝殻条痕が施されている。口唇部には二枚貝腹縁の浅い押圧文がみられる。542は二枚貝腹縁による横方向刺突文のあと，ヘラによって横方向にナデている。その下部は貝殻条痕がみられ，口唇部には左下がりのヘラ押圧文が付されている。543は右下がり方向の並行した巻貝殻頂刺突文が付され，口唇部には密にヘラ押圧文がみられる。544は左下がり方向の並行した巻貝殻頂刺突文が付されている。545は外面の剥脱が目立つが，左下がり二枚貝腹縁刺突文が付され，口唇部には巻貝殻頂による刺突文が付されている。内面は口縁端近くまでこげ目がみられ黒みがかっている。546は二枚貝腹縁刺突文で綾杉状にしており，口唇部にはヘラ押圧が施される。547は二枚貝腹縁による左下がり刺突文があり，その下には貝殻条痕文がある。548は二枚貝腹縁の左下がり押圧文，549は右下がり刺突文があり，その下は綾杉状の貝殻条痕文である。549の外にはススが付着している。550は口縁直径14.8㎝とやや小さく，外反度も少なくほぼまっすぐ外へ開きながら伸びている。表面はやや磨滅しているが横向きの二枚貝腹縁刺突文が二段に付され，その下は貝殻条痕である。口唇部にはこまかいヘラ押圧文がみられる。551も外反度は少ないが，端部がふくらんでおり，口縁直径が19㎝ある。外面は５段の二枚貝刺突文が横方向に付され，その下は貝殻条痕である。552は表面剥脱が目立つが端部が細くなっており，外面には短い二枚貝腹縁刺突文が縦方向に付されている。553は上まで浅い貝殻条痕が付されている。内面にコゲが付着している。554はやや薄い作りで，上半が二枚貝腹縁による６段ほどの横方向刺突文で，その下に綾杉状の貝殻条痕がある。口唇部は左下がりのヘラキザミである。555は波状となる口縁で，端部がやや外反しているが，直立に近い。口唇部にヘラキザミがあり，上から横方向の二枚貝刺突文，横方向貝殻条痕，綾杉状となる貝殻条痕となり，条痕の上にも綾杉状となる二枚貝刺突文がみられる。556は小型の土器で，口縁端が細くなる。外面はヘラナデのあと，上部が縦方向の二枚貝刺突文，その下が綾杉状の狭い貝殻条痕となる。557は口唇部にハの字状のヘラキザミがあり，上部の狭い範囲に貝殻刺突文を施したあと，ヘラナデを施す。その下は貝殻条痕である。558は上から二枚貝腹縁による左下がり刺突文，横方向刺突文，綾杉状貝殻条痕となる。559は薄い作りで口唇部にヘラキザミがある。内外ともヘラナデで仕上げているが，外面はそのあと二枚貝腹縁の刺突文が，横方向あるいは左下がり方向に施される。560は口縁直径が13㎝と小型で，口縁端が強く外反するが，やや外へ広がる円筒形土器である。口唇部は磨滅しているためはっきりしないが，ヘラ押圧が施されているようである。口縁端近くには二枚貝刺突文が２段ある。その下には縦方向の貝殻条痕がある。内面の口縁端近くにはススが付着している。561は分厚い作りの内反する口縁部である。外面はヘラナデのあと二枚貝腹縁による横方向の浅い刺突文が施されている。口唇部はていねいなヘラナデで仕上げている。

562～568は胴部で，562・564・568のように分厚いもの，563・565・567のように薄いものとがある。562は底部近くで，外面は部分的に縦方向もあるが，ほとんどは横方向の貝殻条痕で仕上げる。563は弧状となる貝殻条痕で，綾杉状となる。564・568は剥脱が目立つが，横方向の貝殻条痕となる。568は幅が狭い。565～567は綾杉状の貝殻条痕である。569は二枚貝腹縁の刺突で綾杉状とするが，その間に横方向の刺突もみられる。刺突のあと部分的にナデ整形もみられ，口唇部にはヘラキ

ザミがある。口縁直径は24㎝である。570は小型土器で薄い作りとなり，内外とも横方向のヘラナデで仕上げている。571は口縁へまっすぐ伸びる器形をし，外面は横方向貝殻条痕のあとヘラナデである。剥脱が目立つ。572は最大径が９㎝しかない小型の円筒土器で，外面は綾杉状の貝殻条痕

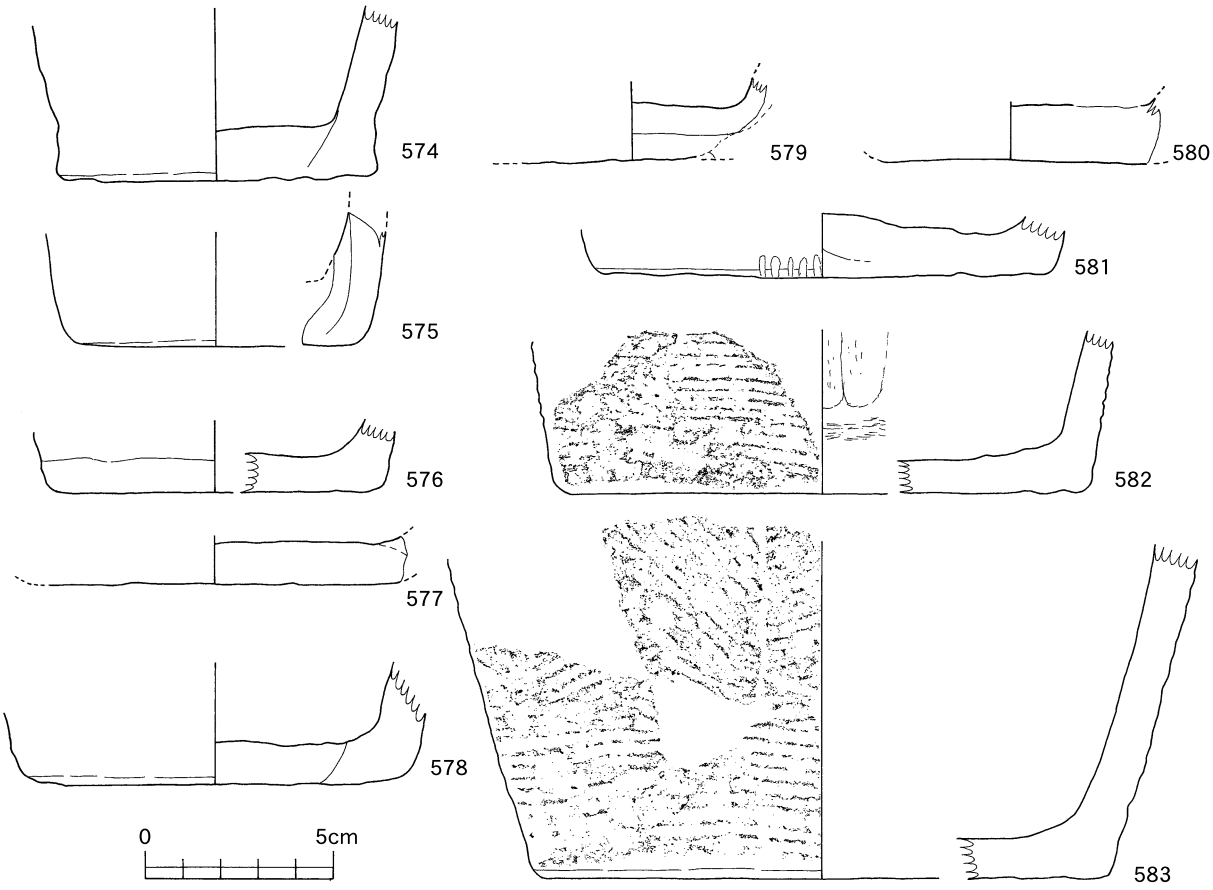


第114図　縄文土器(4)　石坂式土器

である。外面の剥脱が目立つ。573も二枚貝腹縁の刺突によって綾杉状とする。

574～583は底部である。端部は角ばるものと，575・578のように丸みをもつものとがある。底部直径は575のように８㎝足らずのものから，583のように15㎝位のものまである。底部付近はヘラナデとなるものが多いが，582・583は貝殻条痕である。582は横方向，583は底近くが横方向，その上が綾杉状となる。581は立上がり部分にヘラ刺突が巡っている。574・575・578・580の剥離状況・断面観察から，底部は内面に円盤状のものをおき，その外に円筒状のものを貼付けている。579は底部を貼付けによって厚くしている。底の調整はていねいなヘラナデで，582などはミガキに近い。574・577～580は白粉が付いている。

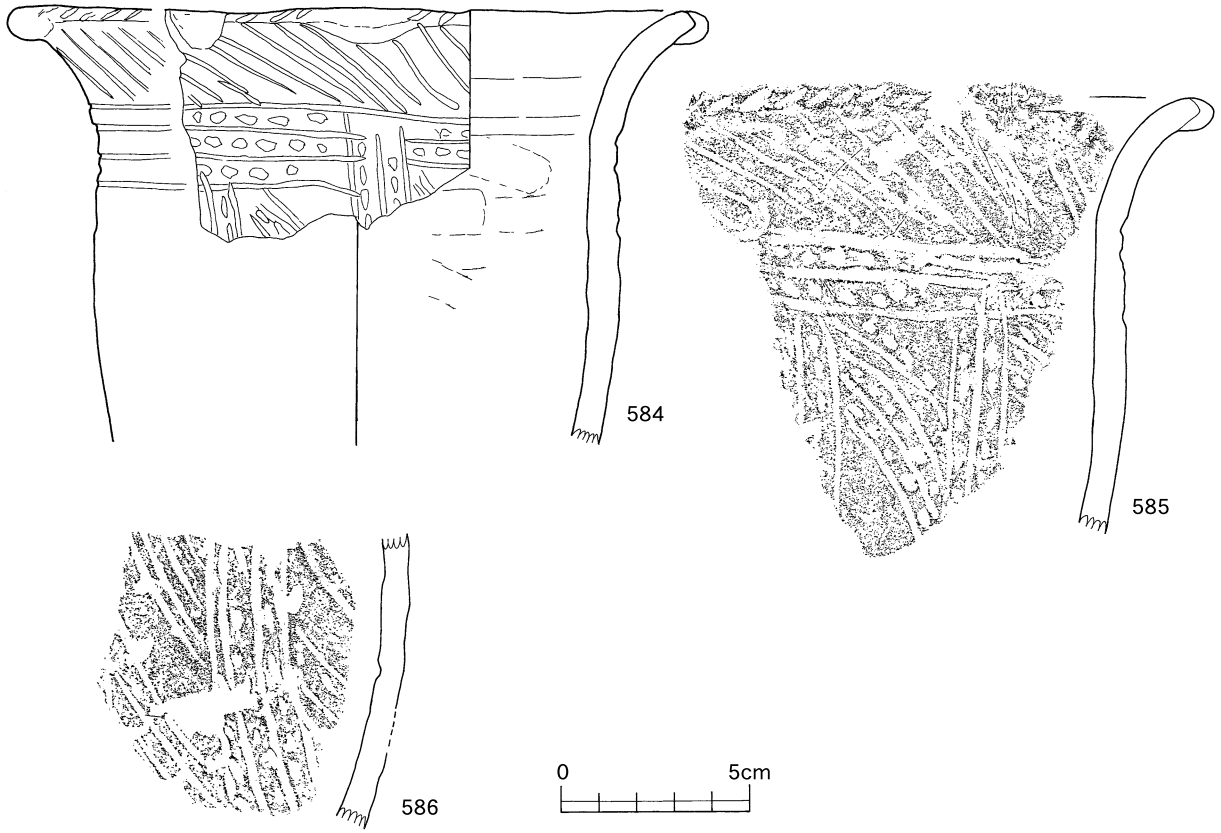
これらは茶褐色・淡茶褐色・灰褐色などの色調を呈し，焼成度は概して良好である。胎土は概して白色石・石英の細かい石を多く含んでおり，他に長石・茶色石・金雲母などもみられる。



第115図　縄文土器(5)　石坂式土器

３）妙見式土器（第116図584～586）

７・８－Ｂ区Ⅶ層で出土した。口縁が外反し，ヘラ沈線，貝殻押圧文などが施される土器である。一個体と思われる。口縁直径は18㎝あり，胴部はややふくらんでいる。口縁部の一か所にこぶ状の突出部がみられ，口唇部には左下がりのヘラ押圧文が付されている。口縁部にはヘラによる右下がりの短絡線が施される。頸部には４条の沈線が巡り，その間に巻貝殻頂による刺突文が施される。胴部には縦あるいは斜方向のヘラ沈線が施され，その間に巻貝殻頂の刺突文がある。外面の地文はていねいなナデで，内面は横方向のヘラナデである。色調は茶褐色を呈しているが，内面はやや灰色がかっている。焼成度は良好であるが，やや軟質である。金雲母を多く含んでおり，他に白色石・石英などの細かい石がある。



第116図　縄文土器⑹　妙見式土器

第18表　縄文土器観察表(1)

図番	出土地	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
530	2C	斜方向貝殻条痕	ナデ？ （剥脱多）	外：灰黒褐色 内：茶褐色	良	金雲母・黄白色石・石英の多い砂質土
531	7C	横・斜め貝殻条痕	ヘラ縦ナデ	茶褐色（底は灰褐色）	良	石英・白色石・黒雲母（５㎜大の石あり）などの小石を含む
532	6C	ヘラナデ	ていねいなヘラナデ （剥脱している）	黄みがかった淡茶褐色	良	茶色石・石英・白色石などの細かい石を含む
533	6C	横貝殻条痕	ヘラ横ナデ （逆時計回り）	外：茶褐色 内：黒褐色	良	白色石・石英・黒色石などの細かい石を含む
534	3C	綾杉状貝殻条痕	ミガキに近い ていねいなヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色 一部黒褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
535	6C	ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	やや赤みがかった 淡茶褐色	良	石英・白色石・雲母などの細かい石を含む
536	6C	ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	灰がかった淡茶褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
537	4C	ヘラ横ナデ 綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	普通	白色石・角閃石・石英・茶色石・灰色石などの細かい石を含む
538	6C	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄みがかった明茶褐色	普通	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
539	6C	幅の広い 綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	普通	石英・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
540	6C	ヘラ横ナデ 貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良	長石・石英・白色石・角閃石などの細かい石を含む
541	6C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：黄茶褐色 （一部黒褐色）	良	石英・白色石などの細かい石を含む
542	6C	貝殻条痕 ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
543	3D	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む
544	7C	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	石英・茶色石・長石の多い砂質土
545	7C	ヘラ横ナデ （剥脱あり）	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色 （内：こげめが口縁端までありやや黒み）	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
546	6C	ヘラ横ナデ	ミガキに近い ていねいなヘラ横ナデ	黄っぽい淡茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石を含む
547	6C	貝殻条痕	ヘラナデ	外：淡茶褐色 内：紫がかった暗茶褐色	良	石英・雲母・白色石などの細かい石を含む
548	5C	綾杉状貝殻条痕	ていねいな横ナデ	外：茶褐色 内：淡茶褐色	良	石英・黒色石・茶色石・白色石などの細かい石を含む
549	6C	幅広の綾杉状貝殻条痕	ていねいな横ナデ	外：暗茶褐色（スス付着） 内：茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石を含む
550	4C	ヘラ横ナデ （剥脱あり）	ていねいなヘラ横ナデ	外：黄っぽい淡茶褐色 内：暗灰褐色	良	雲母・白色石・石英などの細かい石を含む
551	8E	貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	外：黒灰色 内：淡茶褐色	良	黄白色石・石英・角閃石などの細かい石を含む
552	2CD	ヘラ横ナデ （剥脱あり）	ナデ	外：淡茶褐色 内：黒褐色	普通	石英・長石などの細かい石を含む
553	8E	浅い貝殻条痕 （剥脱目立つ）	ヘラナデ	外：茶褐色 内：黒褐色（コゲ付着）	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
554	7C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：黒褐色	普通	細かい石英粒多　他に長石・茶色石・白色石などの細かい石を含む
555	4C	深い貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：黒褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
556	3C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	暗茶褐色	良	白色石・石英・雲母などの細かい石を含む

第19表　縄文土器観察表(2)

図番	出土地	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
557	5C	貝殻刺突のあとヘラナデ その下貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	石英・黒色石・長石などの細かい石を含む
558	6C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	茶褐色 （内はやや黄っぽい）	普通	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
559	3C	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	石英・白色石・長石などの細かい石を含む
560	3D	縦方向貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
561	4D	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	暗灰褐色	良	白色石・石英が多い 長石・茶色石もあり
562	4C	横方向貝殻条痕 （部分的に縦方向）	ていねいな横あるいは縦ナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	白色石・石英の細かい石が多い 茶色石もある
563	4C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラナデ	赤みがかった茶褐色	良	石英・長石・白色石などの細かい石を含む
564	5C 7C	横方向貝殻条痕	ていねいな横ナデ	淡茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石を含む
565	4C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	良	石英・黄白色石・長石などの細かい石を含む
566	7C	綾杉状貝殻条痕	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
567	6C	綾杉状貝殻条痕	ていねいなヘラ横ナデ	外：黄っぽい淡茶褐色 内：灰黒褐色	良	石英・白色石などの細かい石を含む
568	6C	細かい横貝殻条痕 （剥脱あり）	ていねいな横ナデ	外：茶褐色 内：灰褐色	良	石英・長石などの細かい石を含む
569	4D	部分的にナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡灰褐色	良	白色石・石英が多く金雲母もある
570	5C	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰褐色（外はやや黒み）	普通	石英・長石が多い
571	4D	ヘラナデ（剥脱あり）	ヘラ横ナデ	灰がかった茶褐色	良	石英・白色石が非常に多い
572	7C	綾杉状貝殻条痕	横ナデ	外：灰がかった茶褐色 部分的に黄みをおびる 内：黒褐色	良	石英の多い細かい石を含む
573	5C	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	灰がかった淡茶褐色	普通	金雲母・白色石・石英などの細かい石を含む粗い土
574	6C	ヘラナデ （剥脱が目立つ）	ヘラナデ	外：茶褐色 内：黒褐色	良	黄白色石・石英・雲母などの細かい石を含む
575	7C	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	外：灰褐色 内：黒褐色	普通	石英・雲母・茶色石・白色石などの細かい石を含む
576	8D	摩耗が目立つヘラナデ	ヘラナデ	外：黄茶褐色 内：淡茶褐色	普通	黒雲母・黒色石・石英・白色石などの細かい石を含む
577	4D	不明	ヘラナデ	明茶褐色	良	石英・雲母・茶色石などの細かい石を含む
578	4D	ヘラナデ	ヘラ押圧	灰褐色	良	金雲母・石英・白色石などの細かい石を含む粗い土
579	4D	不明	粗いヘラナデ	黒っぽい暗茶褐色	普通 (外は良)	石英・白色石などの小石が多い
580	5C	不明	表面剥離目立つ	茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石・雲母などの細かい石を含む（９㎜大の石あり）
581	6C	縦方向貝殻条痕	ヘラ押し・ヘラナデ	茶褐色	普通	石英・雲母・白色石などの細かい石を含む
582	5C	横方向貝殻条痕	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	白色石・黄白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
583	7C 4C	深い貝殻条痕	ヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：淡茶褐色（黒色化）	良	黒色石・石英・白色石などの細かい石を含む

２　石器

縄文時代早期のⅦ層で出土した石器と，縄文時代晩期のⅡ層で出土した石器がある。

１）Ⅶ層出土の石器

石鏃・トロトロ石器・磨製石斧・打製石斧・礫器・敲石・磨石・砥石・石皿がある。

①石鏃（第117図Ｓ213）

えぐりのない二等辺三角形のもので，両面とも周辺からていねいに加工している。

②トロトロ石器（第117図Ｓ214）

チャート製のトロトロ石器である。ほぼ正三角形をしており，深さ１㎝ほどのえぐりがある。周辺から細かく加工してあり，両脚は方形をしている。両面ともていねいに磨いており，ツルツルしている。

③磨製石斧（第118図Ｓ215～Ｓ219）

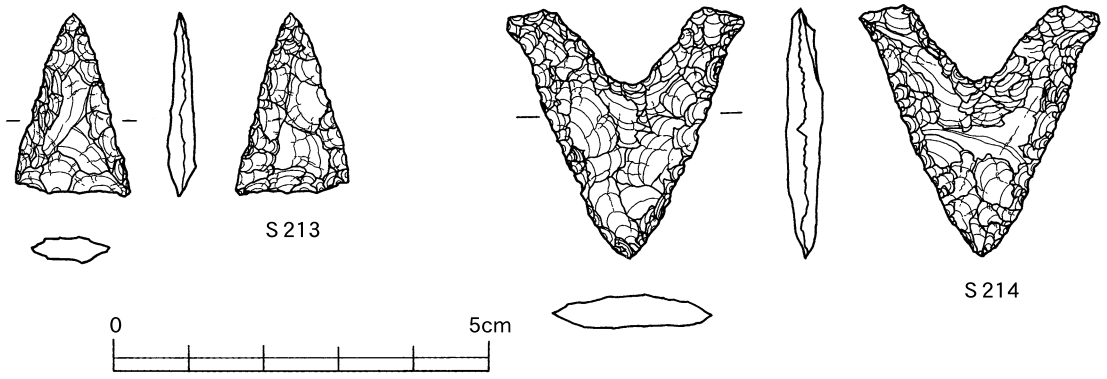
５点あり，いずれも刃部あるいは頭部が欠けたもので，１点は未製品である。Ｓ215～Ｓ217はいずれも河原石を用いている頭部であるが，ほとんど加工がなく，刃部のみにていねいな加工をしたものと思われる。Ｓ215は頭部と側部の一部に加工痕がみられ，Ｓ216は片側の側辺が欠けているが，そのあとの調整痕はほとんどない。Ｓ217は短く折れている。Ｓ218は主要剥離面を片面に残し，一方は自然面を残しているが，一部は磨いた痕跡がみられる。Ｓ219は刃部をていねいに両面から磨いた蛤刃状のもので，片面（図の左側）はややへこんでおり磨き痕がみられない。

④打製石斧（第118図Ｓ220～Ｓ223・Ｓ225）

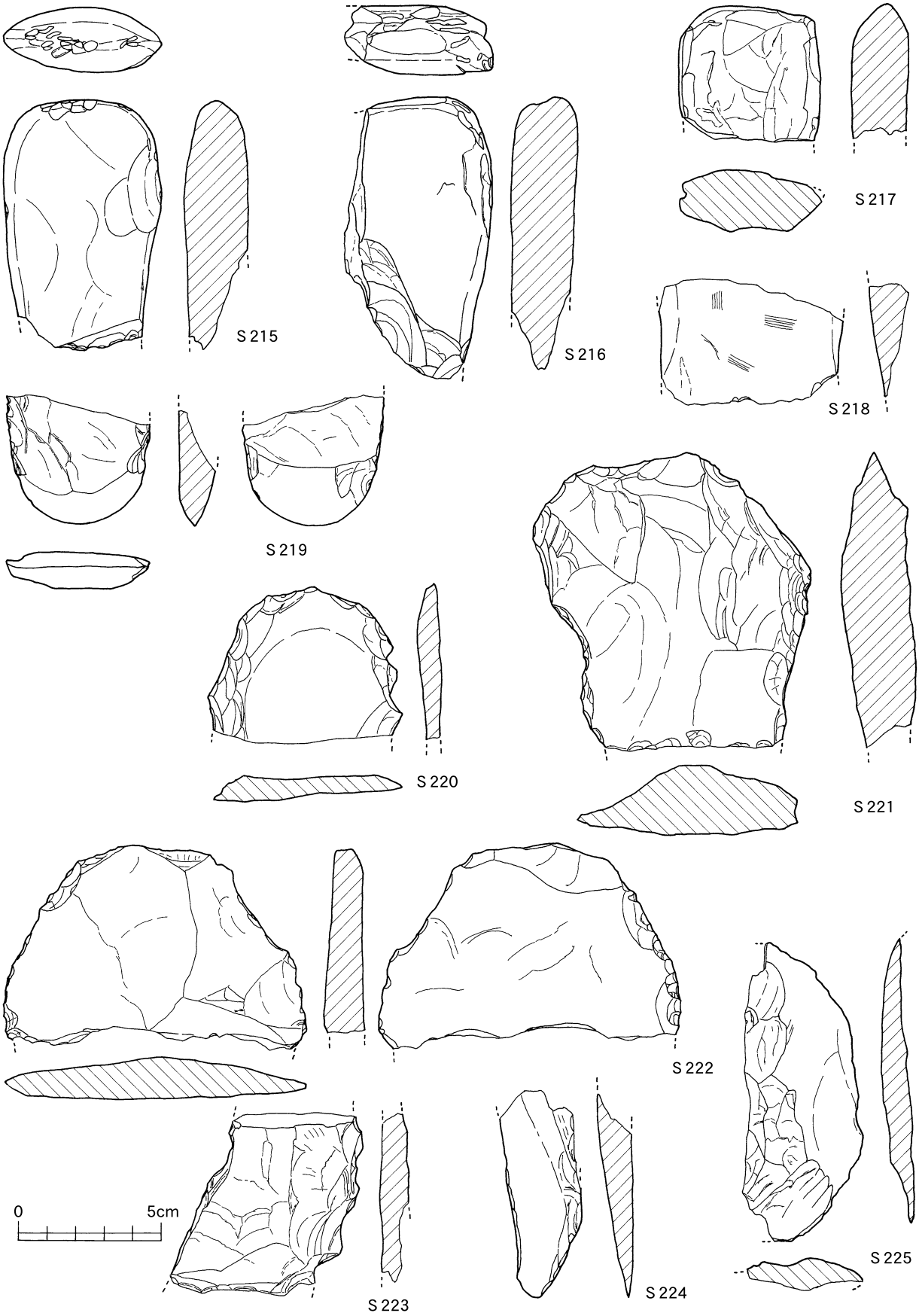
５点あり，１点は未製品である。いずれも折れており，完形品はない。Ｓ220～Ｓ222は頭部破片である。Ｓ220の頭部は周辺から加工して半円形をしている。片面は主要剥離面を残し，厚さ１㎝足らずの扁平なもので，風化している。Ｓ221・Ｓ222は幅広い頭部で，ともに自然面を広く残しているが，縁辺は細かく加工して形を整えている。Ｓ223はくつ形を呈する扁平打製石斧の胴部で，上下を欠いている。縁辺のみを加工し，裏は主要剥離面を残している。Ｓ225は表面に広く表皮を残し，逆面は主要剥離面の剥片で，打製石斧の未製品かと思われる。

⑤礫器（第119図Ｓ226～Ｓ231）

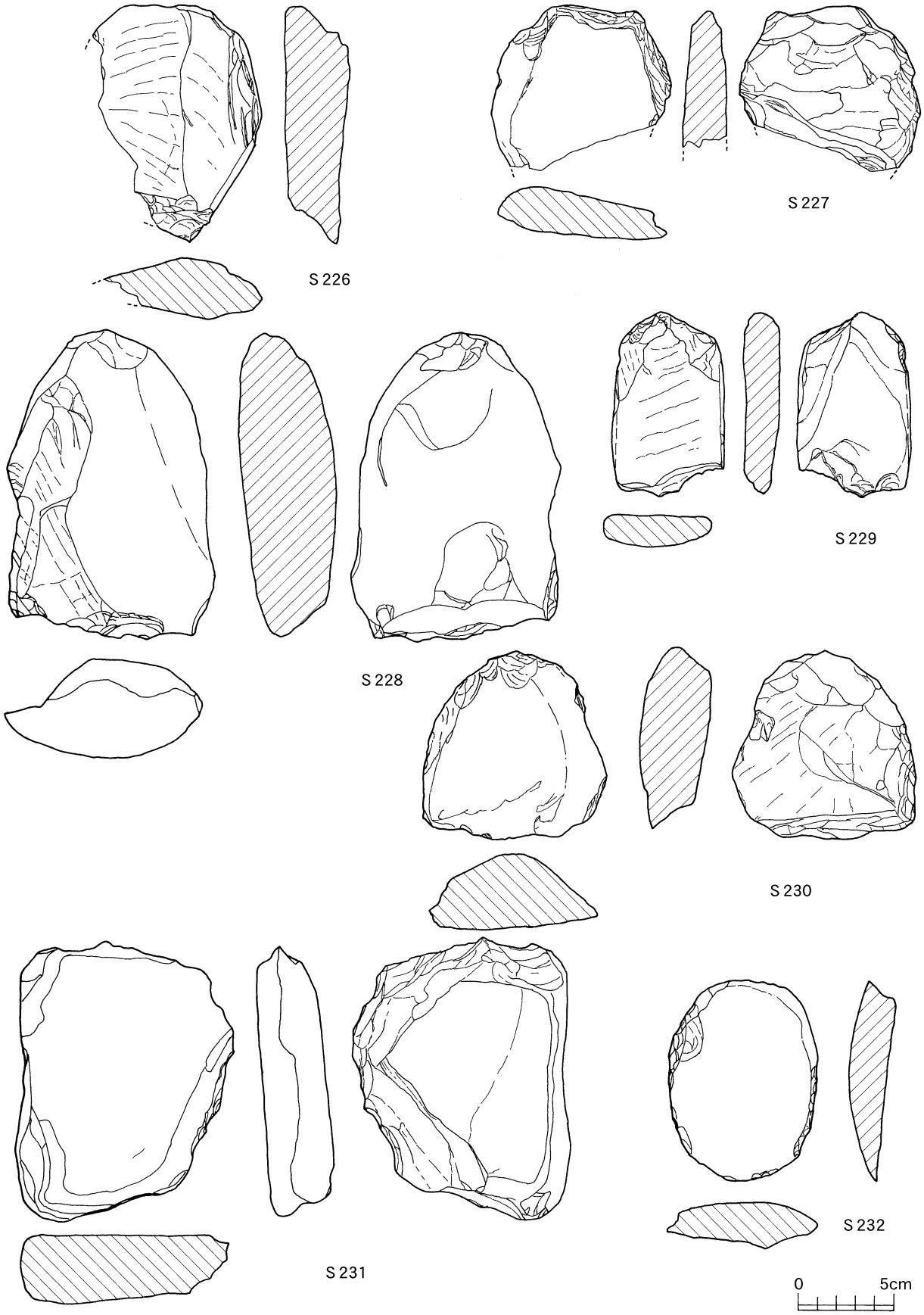
いずれも頁岩製のもので６点出土している。Ｓ226は分厚い礫の先端を加工して鋭い刃としている。Ｓ227は片面に広く自然面を残す礫の周辺の一辺を両方から打ち欠いている。Ｓ228は両面に自



第117図　石器(1)　石鏃・トロトロ石器



第118図　石器(2)　磨製石斧・打製石斧



第119図　石器(3)　礫器

然面を広く残す礫の一短辺を両側から打ち欠き刃部としている。S229は磨製石斧の頭部を利用したものと思われる。刃部を両側から打ち欠いているが，頭部は石斧製作時の加工痕と思われる。S230の片面は自然面を残し，あと一方は主要剥離面を残している。一面を両側から打ち欠き刃部としている。S231は一側面に両側から打ち欠いた痕跡がみられる。

⑥磨石（第120図・第121図S233～S245）

13点出土している。平面形が惰円形をし，断面が扁平なものと，平面・断面とも不定形なものとがある。前者が多い。磨石のなかには敲石として用いられているものもある。

S233は整った形をしており，表・裏・側面ともよく使いこなしている。S234・S236は厚い作りのもので全面ともよく使いこなしている。S235は片面はよく使って平坦であるが，片方は雑である。S237の片面はほぼ平坦だが，一方は亀ノ甲状に使用している。S238は破損しており，雑な使い方をしている。S239は河原石を用いており，使用痕は顕著でない。S240も分厚いが，全面をよく使いこなしている。

S240までのものも敲石として使用したものがあるが，S241～S245は敲石としても良く使っている。平面形は楕円形で，断面が扁平なものである。S241は側面に打痕跡が顕著で，表・裏面ともなめらかである。片方がへこんでいる。S242は表・裏面ともツルツルしているが，側面の使用は顕著で，部分的に敲打痕がみられる。S243・S244は磨石・敲石としてよく使っている。S245も表面をよく磨っているが，片面は欠失部が目立つことから敲石として使用しているようである。側面は敲打痕が目立つ。

⑦敲石（第121図S246・S249～S252）

５点あり，平面形が棒状のものと楕円形状のものとがある。S246・S249は棒状をし，S246は頭部に使用痕がないが，一端の一部に敲打痕がみられる。S249は顕著な使用痕がないことから頭部と思われる。

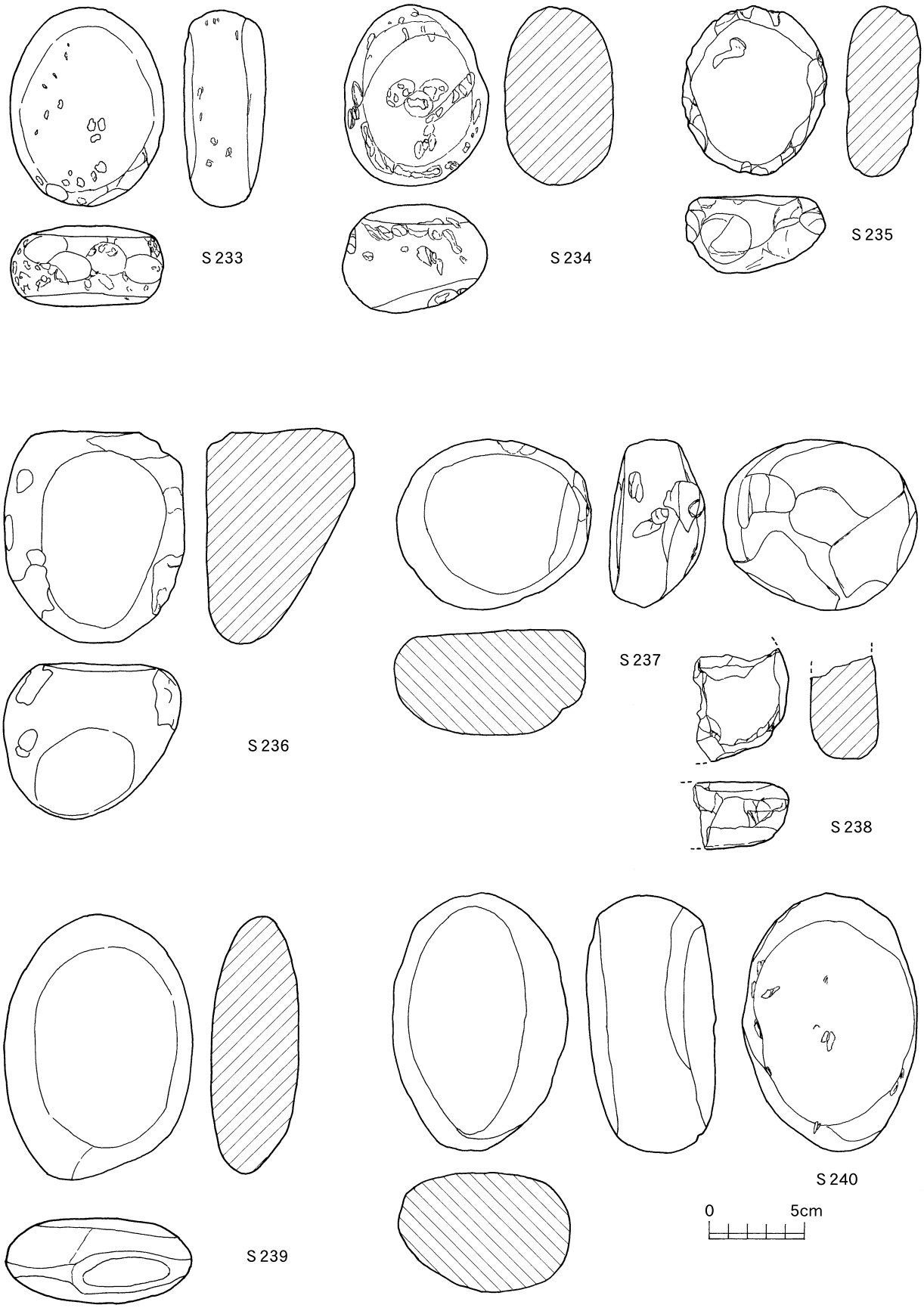
S250～S252は楕円形をしている。S250の一端は大きく剥離している。S250は広いほうの端部に敲打痕が顕著にみられる。S251・S252とも短側辺の両端を使用しているが，使用痕は顕著でない。

⑧砥石（第122図S253・S254）

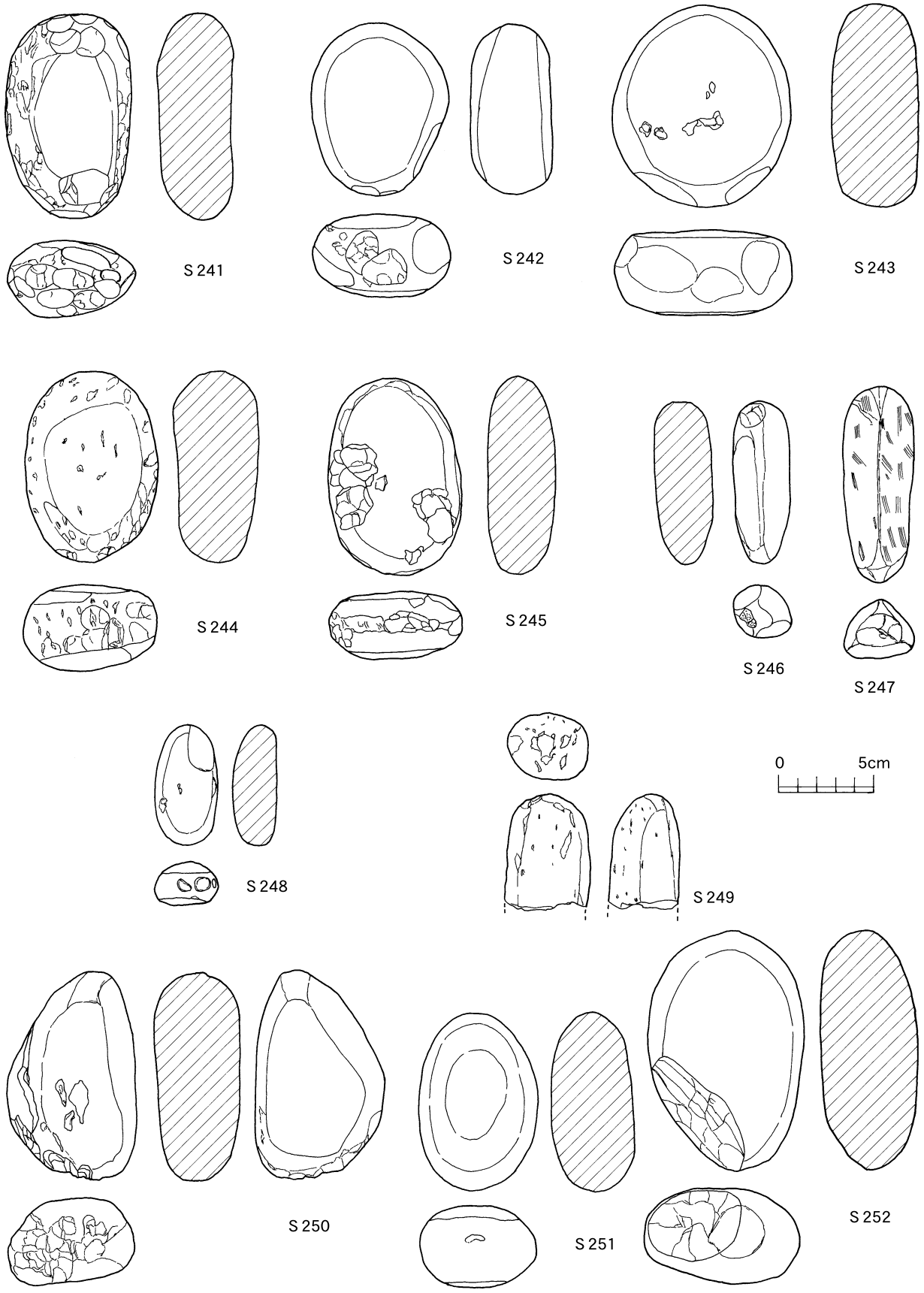
２点出土している。S253は楕円形をし，最大の厚さは９㎝と厚い。組砥で，上面と左側面の２面を使用している。S254は小型で，厚さも1.5㎝～2.5㎝しかなく，一面のみを使用している。

⑨石皿（第122図S255～S263）

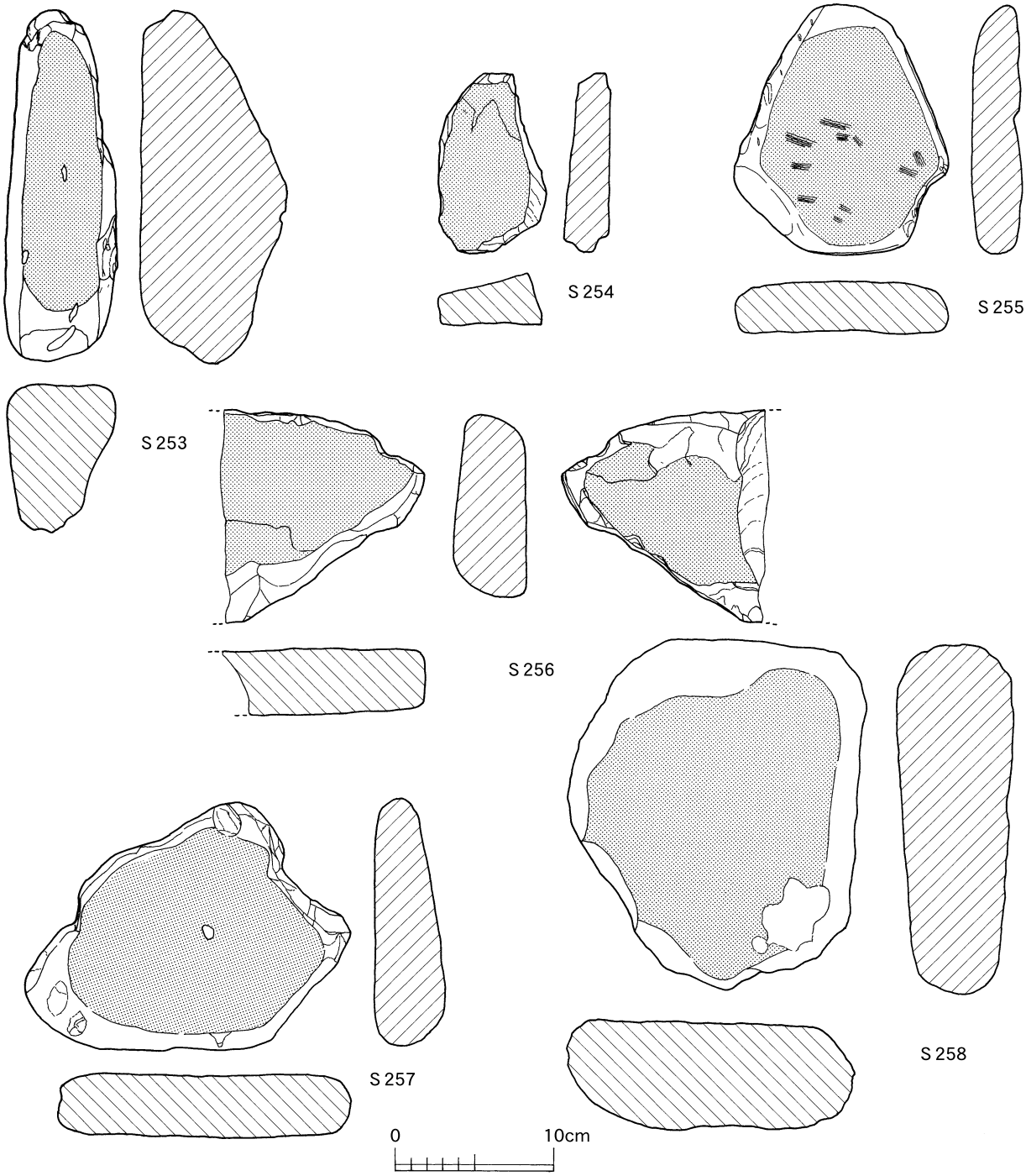
９点出土している。S255・S256・S261は砥石の可能性もある。平坦なものが多い。S256・S261・S263以外は完形品だが，S262以外は小型で扁平である。S255は片面のみ使用しており，砥石としても用いている。S256の表面はツルツルしている。S257も片面のみを使用しているが，やや窪んでいる。S259も片面のみ使用しているが，でこぼこが目立つ。S260は片面のみ使用しており，やや窪んでいるが，底のほうが曲がっているためサドルカーン状を呈している。S263は片面のみ使用して，やや窪んでいる。



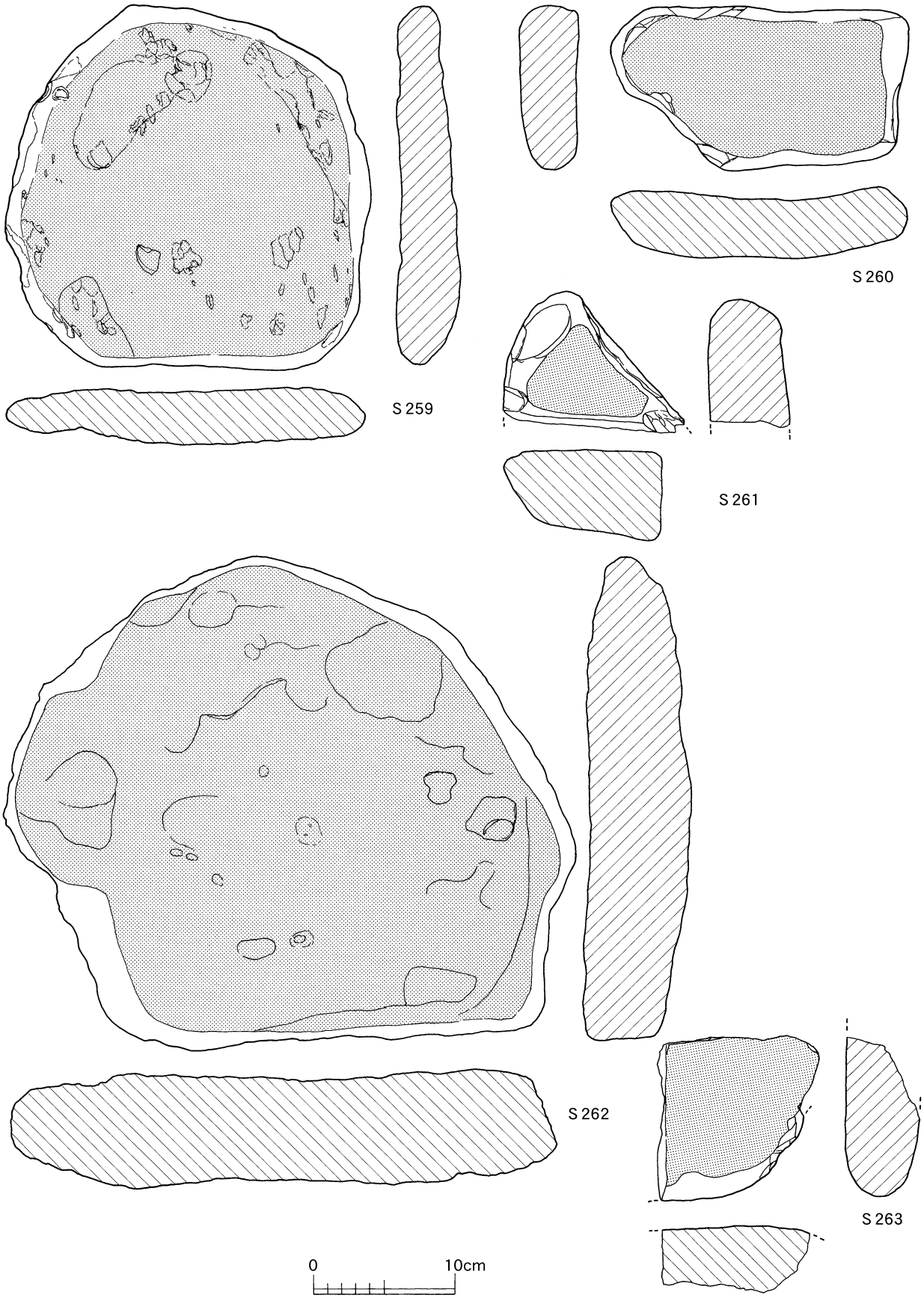
第120図　石器(4)　磨石・敲石



第121図　石器(5)　磨石・敲石



第122図　石器(6)　砥石・石皿



第123図　石器(7)　石皿

２）表層並びにⅡ層出土の石器

ここで紹介する石器は縄文時代早期のものが混っているかもしれないが，とりあえず出土した層で紹介する。

①打製石斧（第118図Ｓ224）

扁平打製石斧の刃部で，先端は細くなっている。裏は自然面を残し，安山岩製だが風化している。

②礫器（第119図Ｓ232）

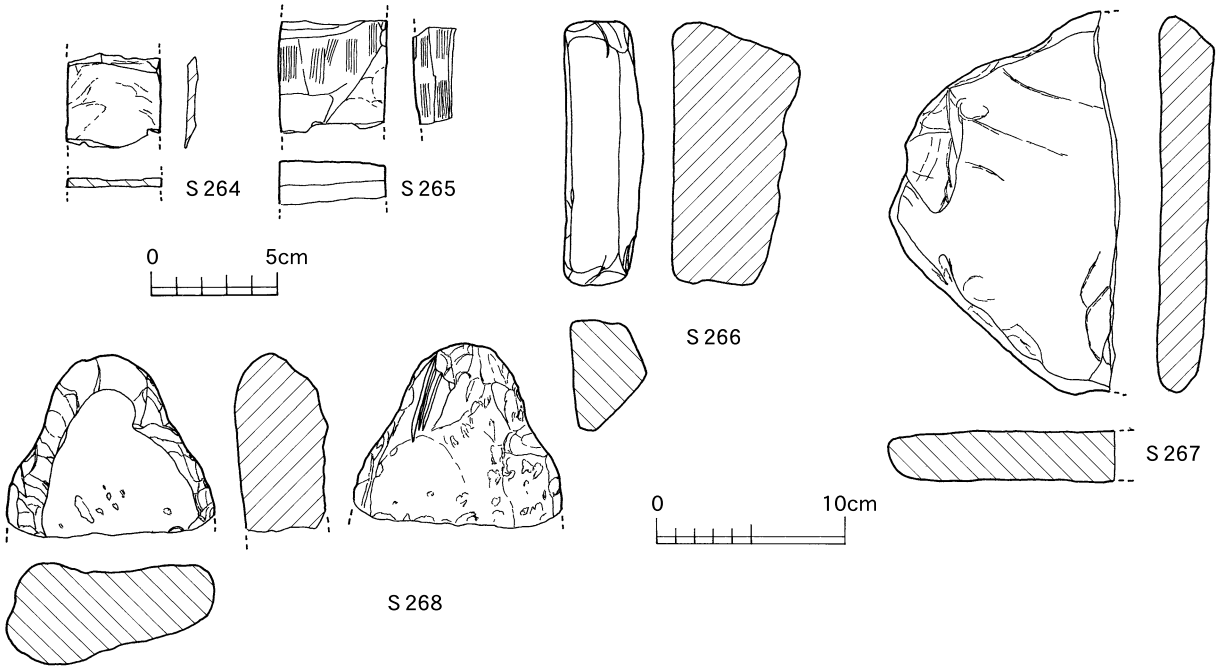
磨石の半欠品を再利用したもので，Ⅱ層で出土している。惰円形を呈し，表の周辺に使用痕がみられ，裏には使用痕はほとんどない。

③敲石（第121図Ｓ247・Ｓ248）

ともに砂岩製で棒状のものである。Ｓ247は三角柱状を呈し，先端部のみに軽く使用痕がみられる。三面ともに砥石として用いた痕跡がみられる。Ｓ248は扁平なもので先端部の一部に敲打痕がみられる。裏面は砥石として使用された可能性もある。ともにⅡ層出土である。

④砥石（第124図Ｓ264～Ｓ268）

５点出土している。Ｓ264・Ｓ265はともに15Ｆ区Ⅱ層で出土した粘板岩製のもので，同一個体の可能性がある。ともに剥離しており，Ｓ265は両側面と表面に使用痕があることからＳ264も同じ状態の可能性があるが，この破片では側面のみに使用痕がみられる。Ｓ266～Ｓ268は砂岩製である。Ｓ266は分厚いもので，使用痕は顕著でないが，表面と一側面に使用痕がみられる。Ⅱ層で出土している。Ｓ267は石皿の可能性もある礫で欠けている。片面のみを使用しており，Ⅱ層で出土している。Ｓ268は下が欠けているが，おむすび状を呈し，面を石皿として使用しているが，あとの片面に筋砥の使用痕がみられる。表層の出土である。



第124図　石器(8)　砥石

第20表　石器観察表

番	種　類	出土地	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ
213	石鏃	11C	Ⅶ	安山岩	2.4	1.5	0.4	1.15
214	トロトロ石器	6C	Ⅶ	チャート	2.3	2.4	0.5	3.7
215	磨製石斧	5C	Ⅶ	頁岩	8.9	5.6	2.4	160
216	磨製石斧	4C	Ⅶ	頁岩	(9.9)	(5.1)	2.4	(175)
217	磨製石斧	6C	Ⅶ	頁岩	(4.7)	5.0	2.1	(70)
218	磨製石斧	7C	Ⅶ	頁岩	(4.4)	6.4	1.5	(45)
219	磨製石斧	3D	Ⅶ	頁岩	(4.3)	5.0	1.3	(30)
220	打製石斧	3D	Ⅶ	頁岩	(5.5)	6.7	0.9	(45)
221	打製石斧	4D	Ⅶ	頁岩	(10.4)	9.3	2.5	(290)
222	打製石斧	6C	Ⅶ	安山岩	(6.7)	10.6	1.4	(110)
223	打製石斧	5D	Ⅶ	頁岩	(6.4)	5.7	1.0	(50)
224	打製石斧	9E	Ⅱ	頁岩	(7.3)	2.6	1.2	(20)
225	打製石斧	8B	Ⅶ	頁岩	10.5	4.1	1.1	40
226	礫器	6C	Ⅶ	頁岩	12.4	(8.3)	3.2	(410)
227	礫器	6C	Ⅶ	頁岩	(8.6)	9.3	2.4	(240)
228	礫器	4C	Ⅶ	頁岩	15.8	10.8	5.2	1,120
229	礫器	7C	Ⅶ	頁岩	9.1	5.9	2.0	150
230	礫器	7C	Ⅶ	頁岩	9.8	9.6	3.3	355
231	礫器	7C	Ⅶ	頁岩	14.3	11.0	3.5	840
232	礫器	16E	Ⅱ	頁岩	10.4	7.8	2.4	235
233	磨石	7C	Ⅶ	花崗岩	10.3	8.0	4.3	555
234	磨石	3D	Ⅶ	安山岩	9.4	7.5	5.6	540
235	磨石	6C	Ⅶ	花崗岩	8.9	7.4	4.0	360
236	磨石	7C	Ⅶ	安山岩	11.1	9.5	8.1	1,070
237	磨石	7B	Ⅶ	砂岩	8.8	10.2	5.4	600
238	磨石	8C	Ⅶ	安山岩	5.5	5.0	3.5	125
239	磨石	5C	Ⅶ	砂岩	13.7	9.8	4.5	885
240	磨石	4C	Ⅶ	安山岩	13.4	9.2	6.7	1,150
241	磨石・敲石	5C	Ⅶ	砂岩	10.6	6.6	4.1	400
242	磨石・敲石	6C	Ⅵ	花崗岩	9.1	7.2	4.3	425
243	磨石・敲石	4C	Ⅶ	安山岩	10.6	9.8	4.5	680
244	磨石・敲石	5C	Ⅶ	花崗岩	10.0	7.0	4.6	465
245	磨石・敲石	8B	Ⅶ	安山岩	10.3	6.9	3.6	395
246	敲石	4D	Ⅶ	砂岩	8.6	3.0	2.8	100
247	敲石・砥石	12F	Ⅱ	砂岩	10.4	3.7	3.1	160
248	敲石	14F	Ⅱ	砂岩	6.4	3.3	2.3	70
249	棒状敲石	6C	Ⅶ	安山岩	(6.1)	4.4	3.6	(135)
250	敲石	5D	Ⅶ	安山岩	11.0	6.7	4.5	440
251	敲石	4C	Ⅶ	砂岩	9.4	6.1	4.3	370
252	敲石	6C	Ⅶ	砂岩	12.7	8.3	5.1	720
253	砥石	6C	Ⅶ	溶結凝灰岩	23.1	7.0	9.3	1,165
254	砥石	6C	Ⅶ	ホルンフェルス	9.5	5.0	2.4	140
255	砥石・石皿	5C	Ⅵ	砂岩	15.7	13.5	3.2	975
256	砥石・石皿	3D	Ⅶ	砂岩	13.5	(13.0)	4.1	(930)
257	石皿	8C	Ⅶ	砂岩	15.5	18.5	4.5	1,860
258	石皿	6C	Ⅶ	花崗岩	22.0	18.2	7.4	4,600
259	石皿	5C	Ⅶ	安山岩	25.6	25.4	4.7	3,400
260	石皿	4D	Ⅶ	花崗岩	21.0	11.6	4.6	1,840
261	砥石・石皿	3D	Ⅶ	砂岩	(9.5)	11.2	6.3	(840)
262	石皿	3D	Ⅶ	安山岩	34.4	40.0	8.1	14,600
263	石皿	5C	Ⅶ	砂岩	(11.2)	(11.4)	5.3	(900)
264	砥石	15F	Ⅱ	粘板岩	(3.7)	3.7	(0.4)	(8.3)
265	砥石	15F	Ⅱ	粘板岩	(4.4)	4.2	1.7	(56.6)
266	砥石	17F	Ⅱ	砂岩	14.0	4.1	6.6	545
267	砥石・石皿	11F	Ⅱ	砂岩	11.9	(12.2)	3.0	(1,000)
268	砥石・石皿	14F	表	砂岩	(11.0)	9.5	5.7	(685)
269	磨製石鏃	15F	Ⅱ	頁岩	3.8	2.6	0.2	2.2
270	磨製石鏃	15F	Ⅱ	頁岩	4.9	3.5	1.6	12.6

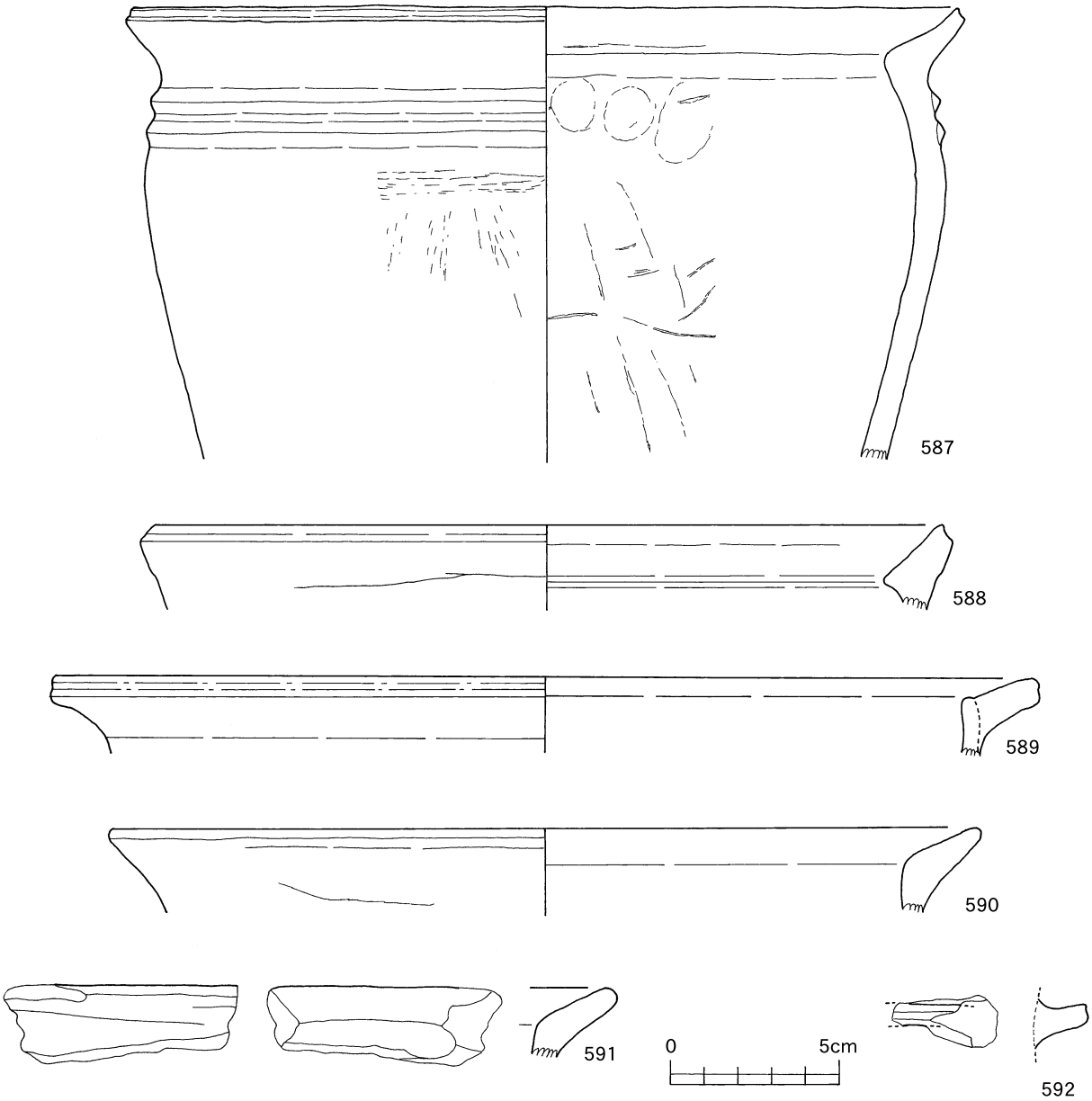
弥生土器97点と磨製石鏃１点が出土している。これらは，ほぼ北東側区域の11～18－Ｅ・Ｆ区で出土しており，狭い範囲に分布していることがうかがえる。

第１節　土器

甕形土器と壺形土器がある。

１　甕形土器（第125図587～592）

内側がやや下がる逆Ｌ字形の口縁をもつ。587は口縁直径が24.4㎝で最大直径となり，口唇部はややへこむ。内面は口縁部がやや窪んで頸部で強く屈曲している。外面の肩部はゆるやかに張り出し，ここに２条の三角突帯が貼付けられている。内外面とも口縁近くは横，その下は縦方向のヘラナデで仕上げ，外面はていねいである。器形はややでこぼこしている。588は口縁直径が23.5㎝で，口縁部は分厚く口唇部はやや窪んでいる。口縁内面はやや窪んでいるもののほぼまっすぐ伸び，頸



第125図　弥生土器(1)

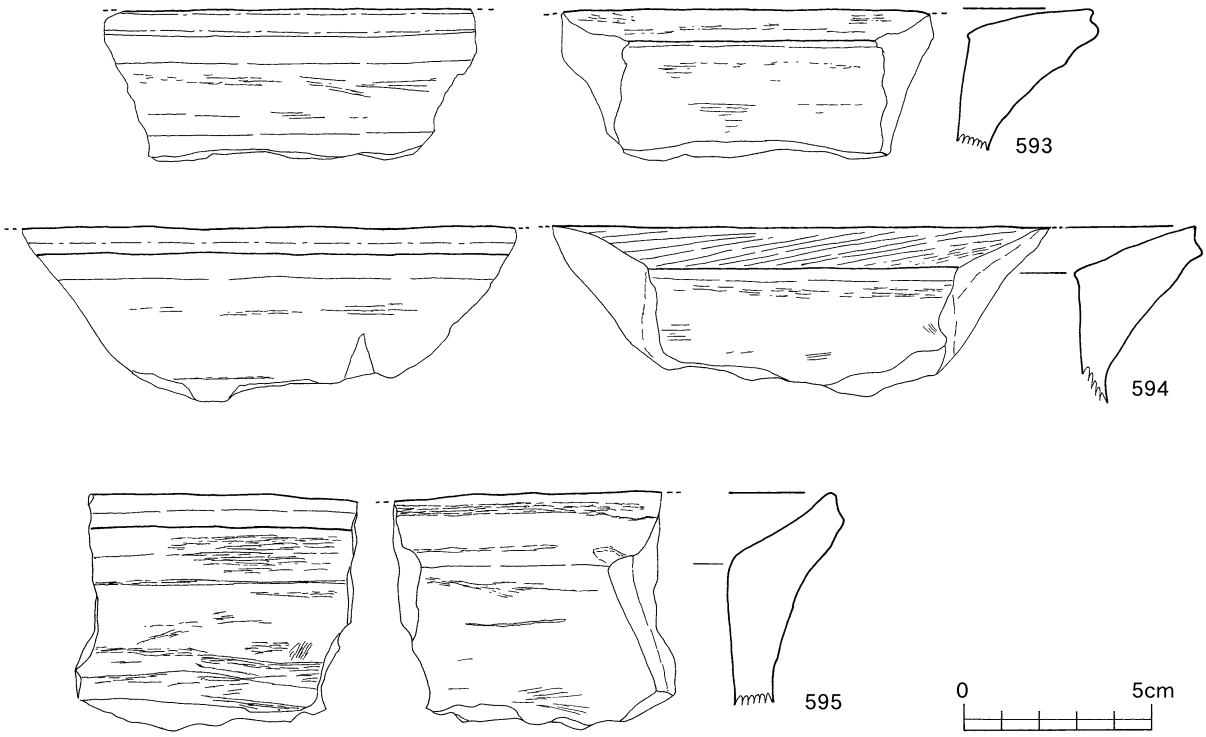
部は強く屈曲し，内側へやや突出している。内外とも横方向のヘラナデである。589は口縁直径が29㎝あり，口唇部は窪んでいる。頸部内面は強くくびれている。逆Ｌ字形の口縁部は貼付けられている。内外ともていねいな横方向のヘラナデである。590は口縁直径26㎝で，頸部内面は丸みをおびて胴部に至る。口唇部も丸みをおびている。591も同じような形をしている。調整は内外とも横方向のヘラナデである。592は胴部からはがれた浅いM字状突帯である。

２　大型甕形土器（第126図593～595）

593・594はやや内側が下がった平らな口縁部で，内面屈曲部はやや内側に飛び出している。外側はゆるやかに曲がり，口唇部は窪んでいる。内外ともていねいな横方向のヘラナデで仕上げているが，594の口縁部内面は斜方向である。594の口縁下部は指ナデと思われるくぼみがある。595は内面が丸みをもって屈曲し，口縁はやや窪んでいる。内外ともヘラ横ナデで仕上げている。593は淡茶褐色，594は暗茶褐色，595は黒褐色を呈している。594・595の焼成度は良いが，593はやや軟質であり剥脱が目立つ。白色石・石英・黄白色石・茶色石・金雲母などの石を含んでいるが，593・594は細かい石で作られているのに対し，595は１㎝大の石も含む割と粗い土を用いている。

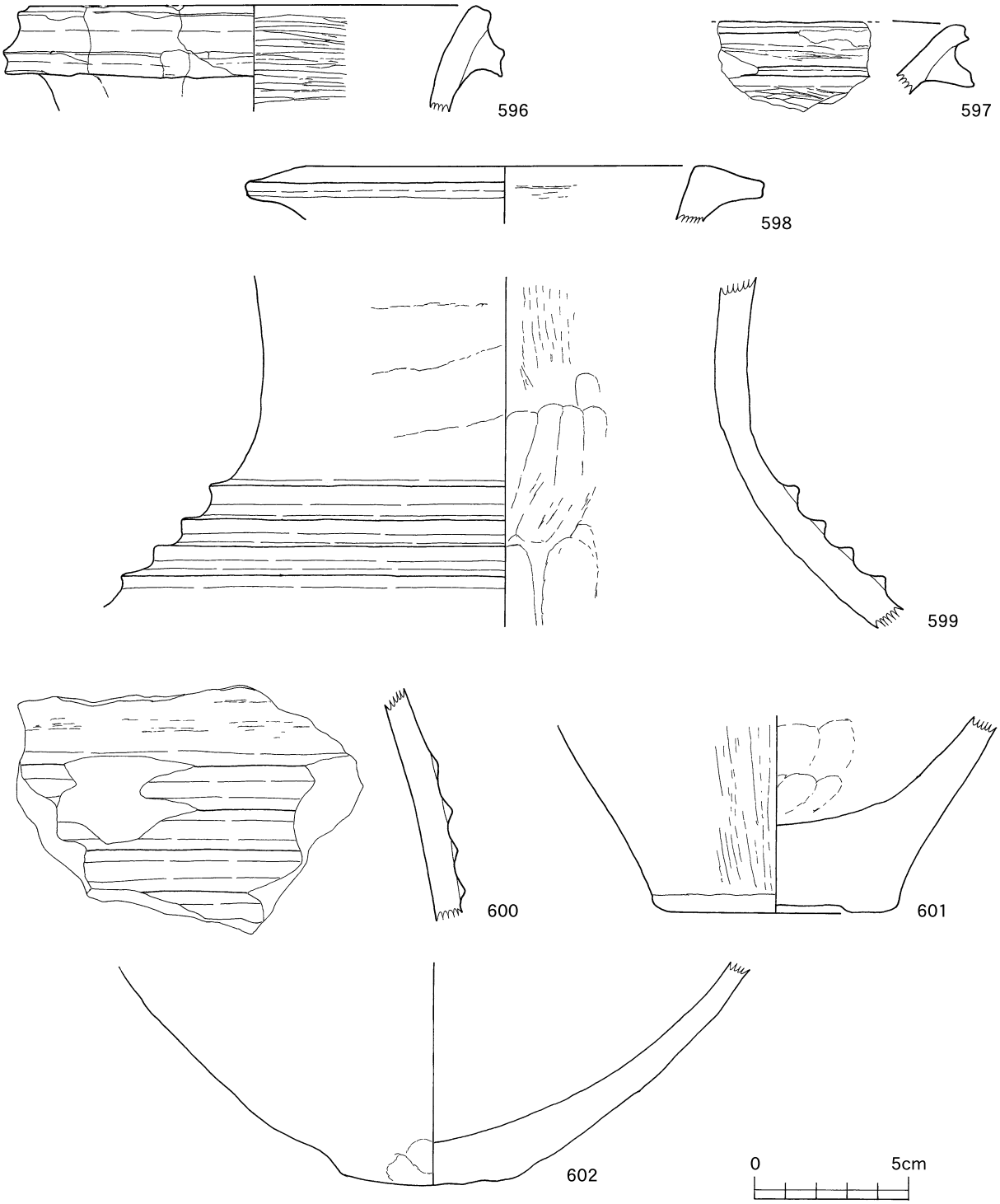
３　壺形土器（第127図596～598・601）

口縁部はつばが付き二叉状口縁となるもの（596・597）と，逆Ｌ字状のもの（598）とがある。596は口縁直径が14㎝あり，外反する口縁部のやや下に断面形がM字状になる突帯が貼り付けられる。口唇部はやや窪んでいる。597も強く外反する口縁下に細長い三角形状の突帯が貼り付けられている。口唇部，貼付突帯とも窪んでいる。598は口縁の外がやや下がった逆Ｌ字状口縁で，口縁直径は16.8㎝ある。口唇部はへこむ。外面は横方向のヘラナデで仕上げているが，597はヘラミガキである。内面はいずれも横方向のヘラナデで仕上げているが，596・597ともていねいである。いずれも茶褐色を呈しているが，597は暗く，598は淡い。焼成度は598がやや軟質だが，596・597は

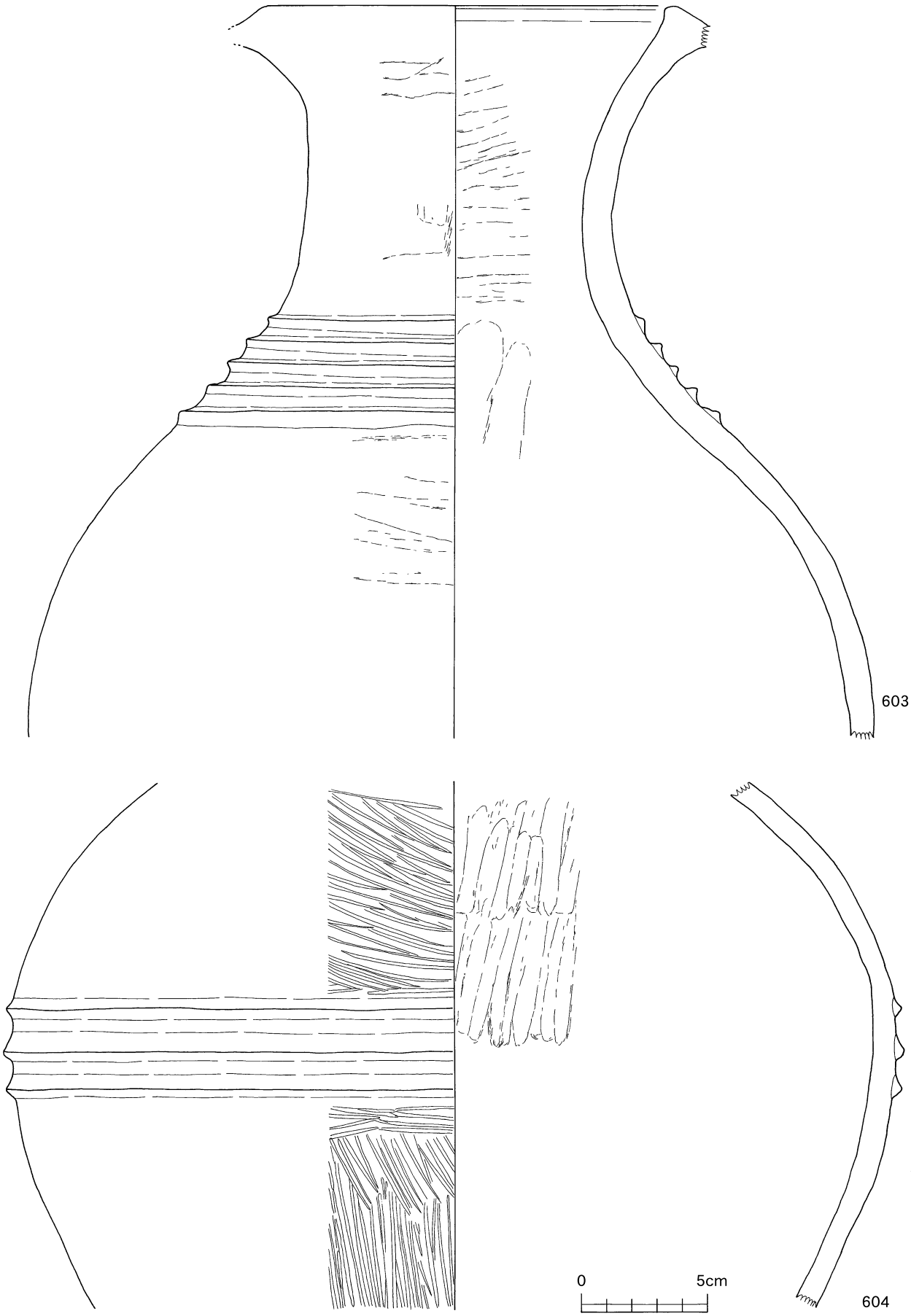


第126図　弥生土器(2)

良い。金雲母・白色石・石英・茶色石などの多い細かい土を用いている。601は直径８㎝の平底で，底はなにかの圧痕があり深く窪み，そのあとヘラナデで仕上げている。内底は粘土が貼付けられ，でこぼこしている。内外とも縦方向のヘラナデで仕上げているが，外はていねいである。茶褐色を呈しているが，外は暗い。焼成良好で，金雲母・石英・黄白色石などの細かい石を含んでいるが，特に金雲母は多い。



第127図　弥生土器(3)



第128図　弥生土器(4)

4　大型壺形土器（第127図599・600・602～604）

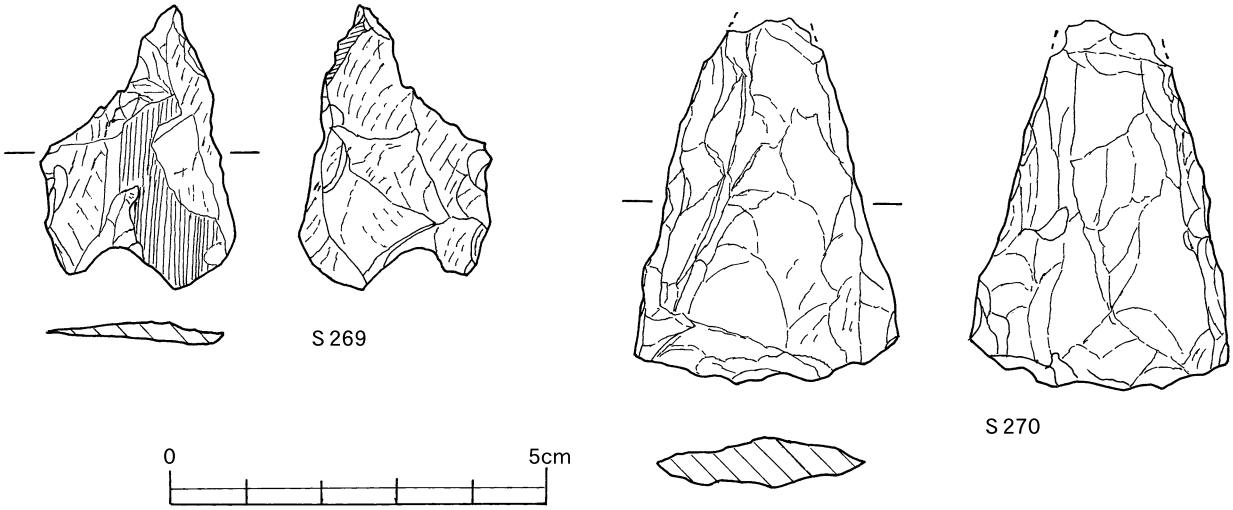
小さい口縁部から胴部へふくらみ，肩部と腹部に貼付突帯がある。丸底に近い小さな平底である。603は口縁から胴部までの破片である。口縁直径は16.5㎝と小さく，外がやや下がる逆Ｌ字形口縁である。端部が欠けているため，M字状になるのか，丸みをもっておわるか，はっきりしない。口縁部付近で外へ粘土を貼付けて，肥厚させている。口縁内面は内へやや反らせて，口唇部を広くしている。肩部に５条の三角突帯が貼付けられている。599も肩部で，4条の三角突帯が貼付けられている。600・604は腹部で，600は４条，604は３条の三角突帯が貼付けられている。604は丸みをおびた器形をしており，最大径が35㎝ある。外面の調整はていねいなヘラナデで仕上げているが，603の下半部や604などはミガキに近い。横方向が多いが，頸部や下半部は縦方向である。内面もヘラナデで，600や603の頸部などは横方向，その他は縦方向である。603の内面は剥脱が目立つ。色調は淡茶褐色を主とするが，599・604はやや暗く，600は灰色がかっている。底部（602）は直径６㎝の小さい平底で，外面はミガキに近いていねいなヘラナデで仕上げているが，底の部分はやや荒れている。内面はヘラ横ナデで仕上げているが，剥脱が目立つ。外は底近くが赤っぽい茶褐色で，上は黒色化している。胎土には金雲母が多く含まれ，他に白色石・石英・長石などの細かい石を含んでいるが，７㎜大の小石もみられる。焼成度は概して良いが，600・602は普通である。

第２節　石器

頁岩の剥片等が数点出土している。

Ｓ269は長さ3.8㎝，幅2.6㎝，厚さ0.2㎝あり，全面に欠損部があるが，一部に磨いた痕跡がみられる。研磨痕は両面ともみられることから，形態などからして磨製石鏃の未製品かと思われる。

Ｓ270は先端を一部欠いているが，周辺を打ち欠いて長さ4.9㎝，幅3.5㎝，厚さ1.6㎝の二等辺三角形に整形している。形態からして磨製石鏃と思われるが，研磨痕がないことから未製品であろう。



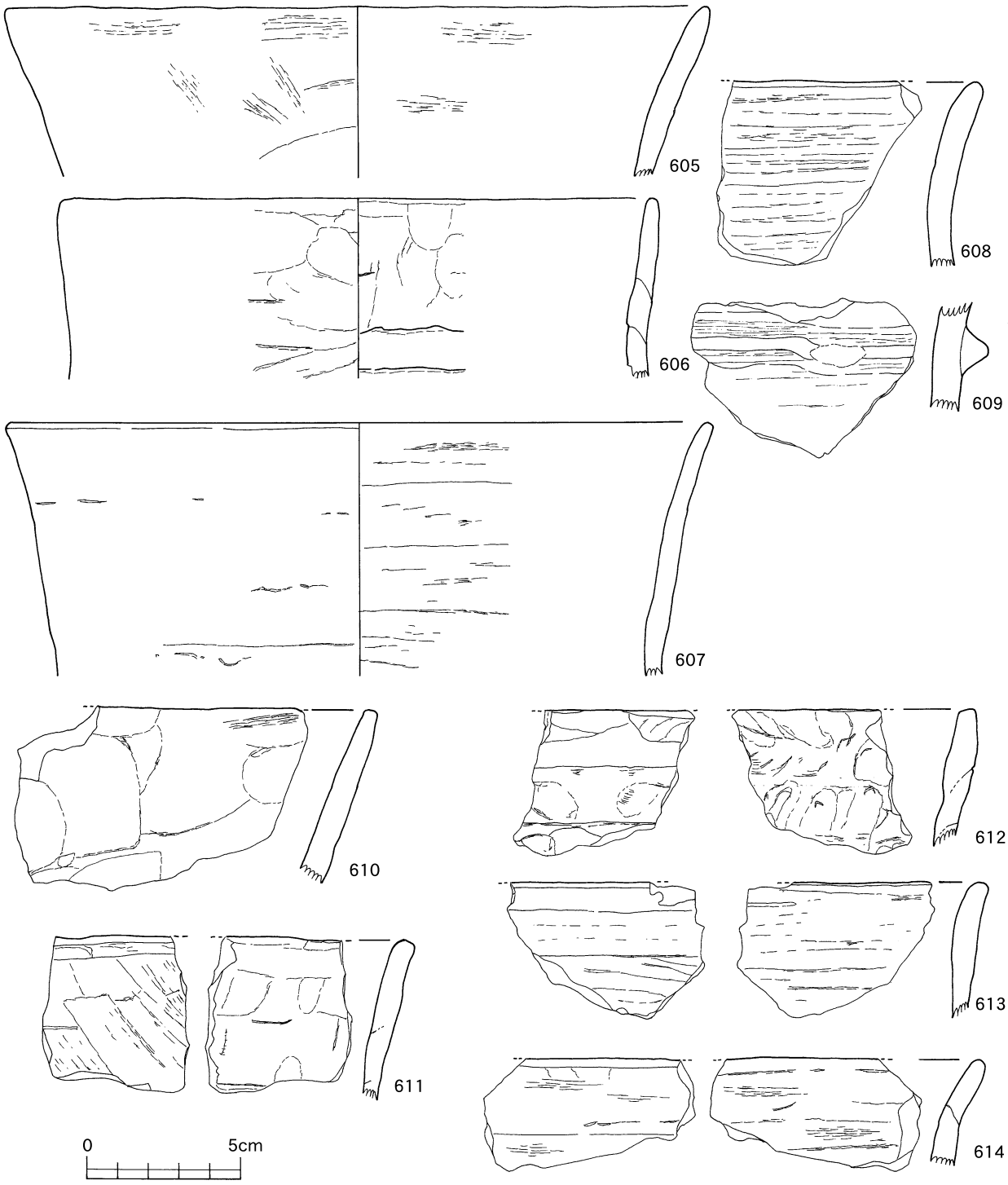
第129図　磨製石鏃

第４章　古墳時代

該期の遺構は検出されていないが，2000点以上の土器等が出土している。これらも弥生土器と同じく，北東側区域の14～18－Ｅ・Ｆ区の狭い区域で出土している。

第１節　土師器

土器のほとんどは土師器であり，器種には甕形土器・壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器がある。

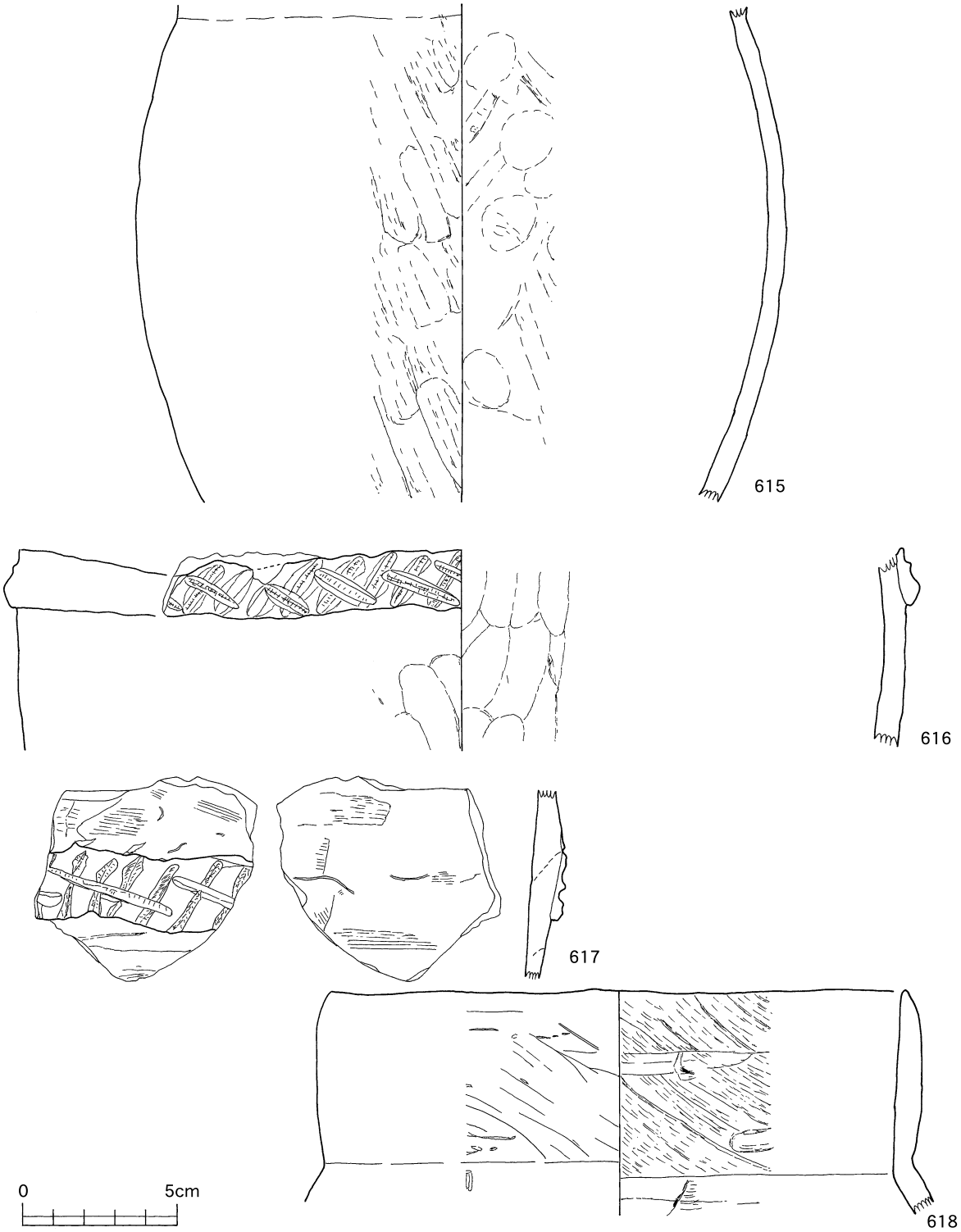


第130図　土師器(1)

1　甕形土器（第130図～第133図605～623）

大きい破片は少ないが，口縁がやや外反し，胴部上半に貼付突帯のあるものもある。

605～614はやや外反するか，まっすぐ伸びる口縁である。608・613・614はやや外へ反っているが，ほかは外へ開きながらまっすぐ伸びている。606・614は継ぎ目が内外ともよく残っている。607は下部分にくぼみがあることからここが頸部となる可能性がある。609は頸部に幅広のやや蛇行

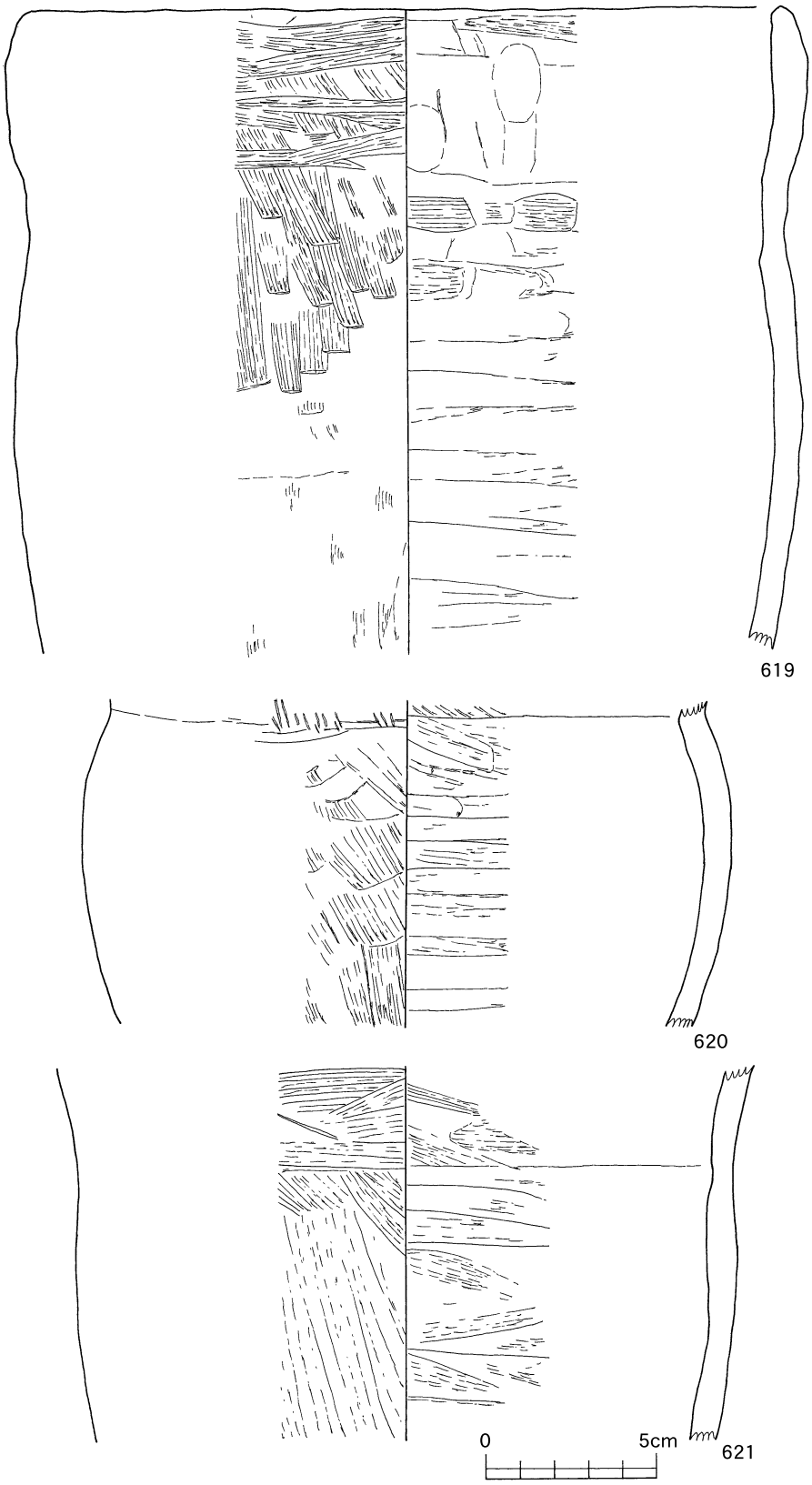


第131図　土師器(2)

する三角突帯が貼付けられている。611の内面にも２条の継ぎ目痕がみられ，612の外面ははっきりした輪積み痕が残っている。612の口縁部はでこぼこが目立つ。615は頸部から底部付近の破片で，最大直径が21㎝と細長い器形をしている。頸部でややくびれて，ここで外反し，薄い作りのまま底へ向かっていることから丸底と思われる。616は直径29㎝の肩部近くと思われるが，ここに幅２㎝ほどの突帯が貼付けられる。これには左下がりから右下がりの布目痕の付いたヘラ圧痕が付され，斜格子状を呈する。617も内外に継ぎ目痕がみられる薄い作りの破片で，これにも616と同じ大きさ，文様の貼付突帯がみられる。618は口縁直径18.5㎝の直立する口縁で，頸部から外へふくらんで底へ向かう。口縁端は尖がった部分と，平坦な部分とがある。619は口縁直径22㎝で，頸部からややふくらんで内反ぎみに立上がっている。厚さがふくらむ部分もあるが，同じ厚さの所もある。620は強くくびれ，621は弱くくびれる頸部がある。

ここでは底部がないが，脚台が出土していないこと，615・618～621などの器形から丸底となる可能性がある。

622・623は大型甕形土器である。口縁直径25㎝ほどで直立している。胴上半には二条以上の三角突帯が貼付けられている。



第132図　土師器(3)

調整は内外ともヘラナデで仕上げており，横方向のものが多い。縦方向のものは607の外面の一部，611・615・619・620の外面，616の両面，621の外面下部にみられる。608・613・616や，610の内面，611・615の外面などはていねいにナデて，613の外面などはミガキに近い。619の外面調整は粗くでこぼこしているが，部分的にはミガキに近い所もある。

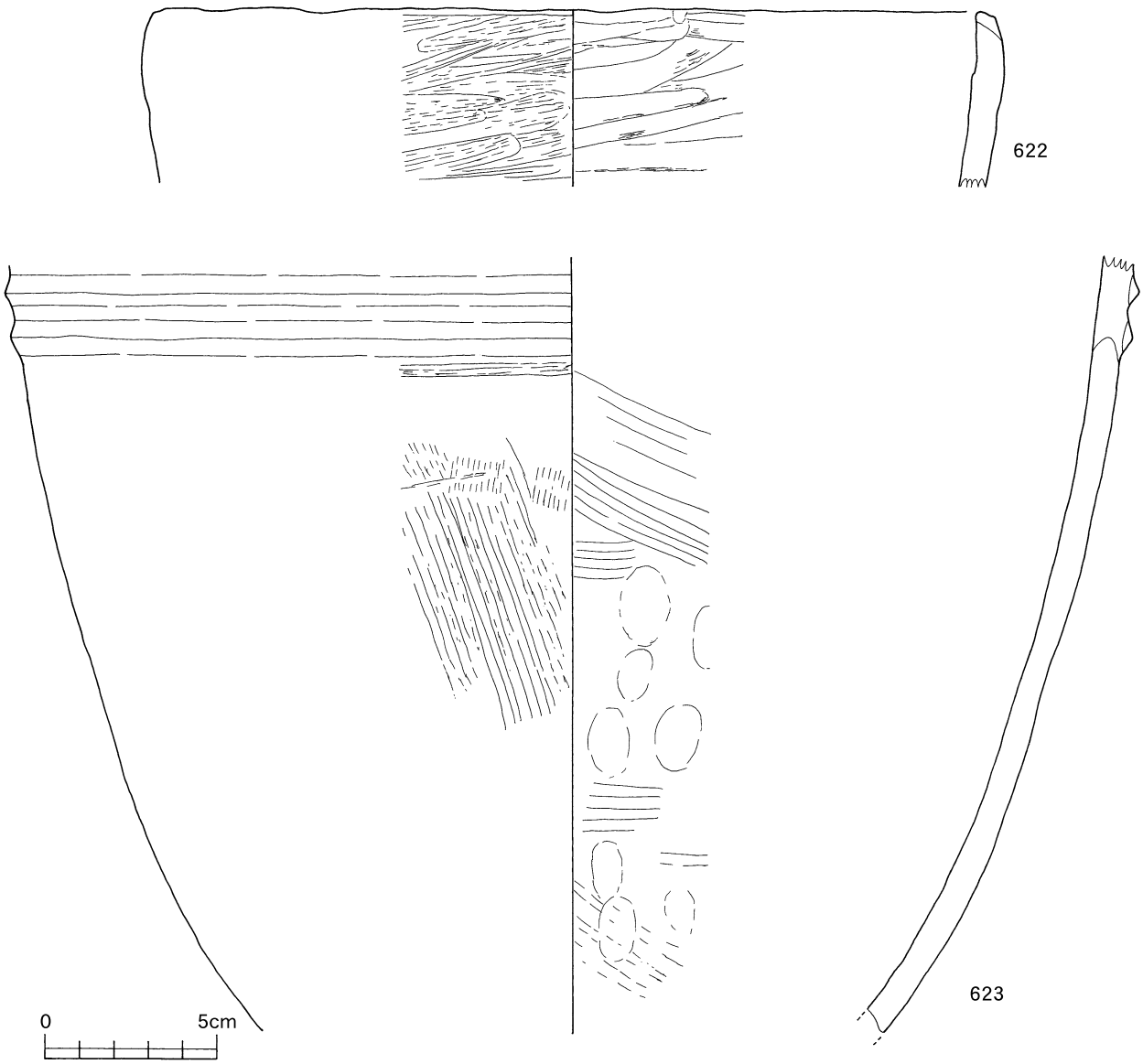
色調は茶褐色，淡茶褐色，茶色がかった灰褐色，黄みがかった淡茶褐色，灰がかった淡茶褐色，赤みがかった茶褐色などがあるが，外面にススが付着しているために黒みがかっているものも多い。

焼成度はいずれも良好である。白色石・石英・黄白色石・金雲母・長石・茶色石などの細かい石を含んだ土を用いているが，３㎜～４㎜大の小石を含んでいるものもある。

２　壺形土器（第134図624～633）

この器種は多くなく，破片も小さいが，二重口縁で頸部と肩部に貼付突帯があり，丸底あるいは小さい平底である。ほとんどが小型である。

624は小型の壺形土器で，直径が6.8㎝あり，ゆるい稜をもつ二重口縁である。くびれた頸部から



第133図　土師器(4)

外へまっすぐ伸び，ゆるい段をもってやや外反しながら丸い端部へ至る。内外ともヘラナデで仕上げるが，外は特にていねいである。625～627は貼付突帯のある頸部である。625は頸部直径が11㎝あり，この部分で胴部と口縁部を接合しており，ここに強く粘土帯を貼付けている。これに左下がりのヘラ沈線を施し，そのあと右下がりの長い押圧を施している。口縁部はやや外反して立上がっており，肩部は薄く，接合部の内面は調整がほとんどないため痕跡がよく残っている。626もほぼ同じような作りで，突帯に左下がりのあと右下がりの布目痕のある押圧が施され，斜格子状を呈する。627は頸部直径が12㎝あり，突帯上に左下がりの布目痕のある押圧が施される。

628は幅3.2㎝ほどの広い突帯の貼付けられた肩部で，突帯上には左下がりヘラ押圧のあと右下がりの布目痕のあるヘラ押圧が施され，斜格子状を呈する。突帯の上下はヘラミガキで仕上げている。631と632は丸底，629・630・633は小さい平底がある。630はややあげ底となっている。外面は縦方向のヘラナデで仕上げているが，629～631はていねいにナデており，特に629はミガキに近い。内面・底もヘラナデだが，631の外面，632の内面は剥脱が目立つ。632の底はややすれている。

色調は茶褐色・淡茶褐色・淡い黄褐色・明黄褐色などを呈しているが，630の内面にはこげが付着している。焼成度は概して良好である。石英・白色石・黄白色石・茶色石・長石・雲母などの細かい石を含んだ土を用いているが，一部の土器には４㎜～６㎜大の小石がはいったものもある。

３　坩形土器（第134図634～638）

小型丸底のものと丹塗り平底のものとがある。

634は頸部直径が７㎝の丸みをおびた器形である。635も胴部最大直径が７㎝と小型であるが丸みをおびた器形をしている。636も同様の器形をしているが，肩部にヘラの刺突文が巡っている。これらはいずれも外面は縦あるいは横方向のヘラミガキ，内面はヘラナデで仕上げている。淡茶褐色，あるいは黄みがかった淡茶褐色を呈し，焼成は良好である。黄白色石・長石・石英・白色石などの細かい石を用いている。15Ｆ区・17Ｆ区・18Ｆ区などで出土している。

丹塗り土器の胴部はソロバン玉状の形をしており，底部は安定した平底である。内外ともヘラナデで仕上げているが，外面はていねいである。淡茶褐色・淡黒褐色・黄褐色を呈しており，外は底までやや暗い赤色を塗っている。黄白色石・石英・長石などを含む細かい石を用い，焼成度は普通。

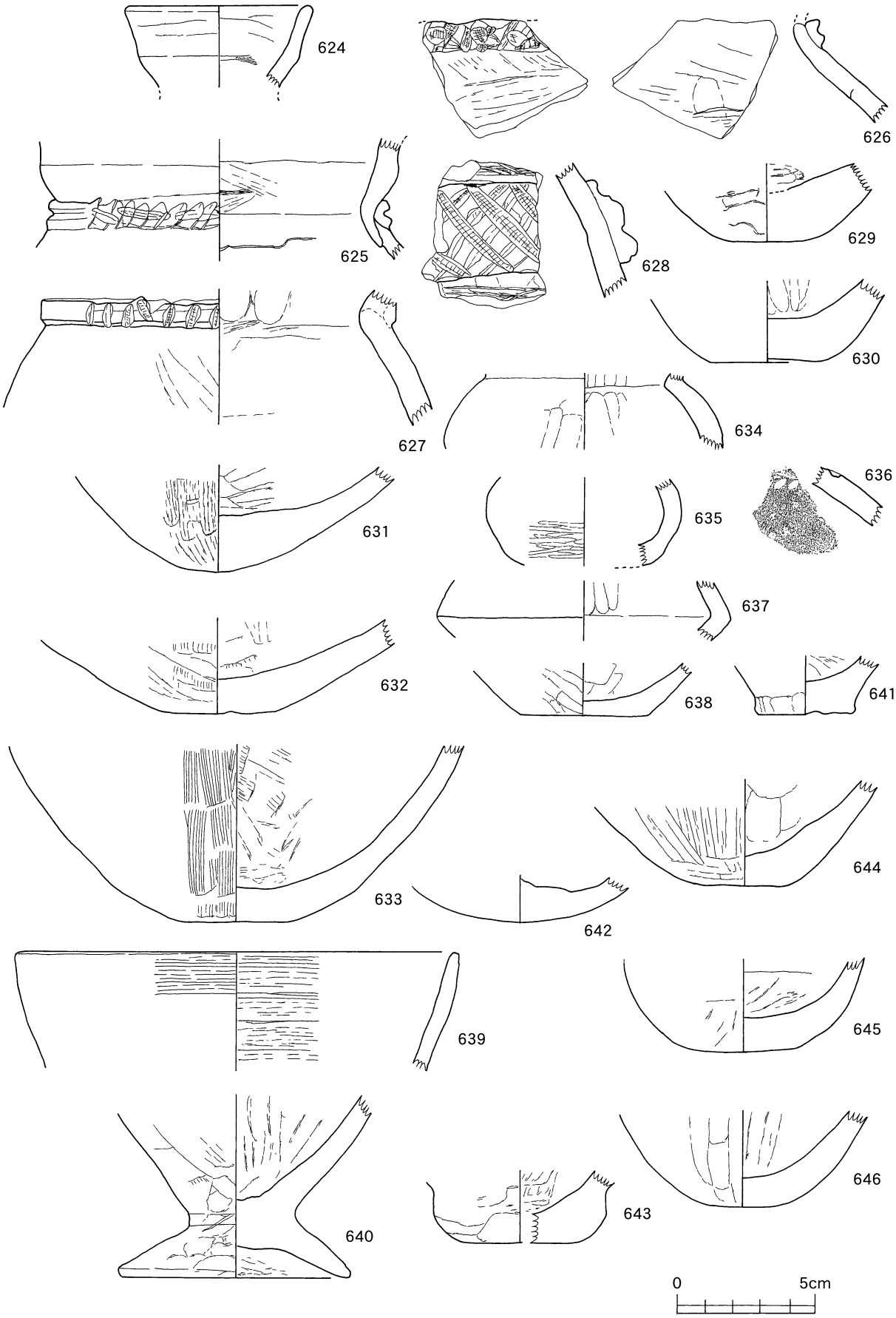
４　鉢形土器（第134図639～646）

鉢状のものと，脚台付きのものとがある。

639は口縁直径が16㎝ある大型のもので，内反する器形をし，口縁端は角ばっている。内外とも横方向のヘラナデで仕上げ，外はていねいにナデている。640は直径4.4㎝ある低い台の付くもので，作りは雑である。内外ともヘラナデで仕上げているが，鉢部外面は縦方向，その他は横方向である。

底は小型壺との区別がつかないため，とりあえずここでは鉢として扱っている。641は小型の壺形土器の平底で，内外ともヘラナデで仕上げているが，底には木の実かと思われる深い圧痕が残っている。外は赤っぽい淡茶褐色，内は黒褐色を呈しており，焼成度は普通である。642は丸底で，内面調整は縦方向のヘラナデだが，底は押圧のためでこぼこしている。643はていねいなヘラナデで仕上げているが，表面がでこぼこした小型の平底である。644～646は小さい平底の土器で，外面はていねいな縦方向のヘラナデをしており，特に645はミガキに近い。644は表面が摩滅している。

色調は暗灰褐色・黒褐色・黄褐色・淡茶褐色などを呈しているが，639の外にはススが付着して


624
626
625
628
629
627
630
634
631
635
636
637
632
638
641
633
644
642
639
645
640
643
646
0
5cm

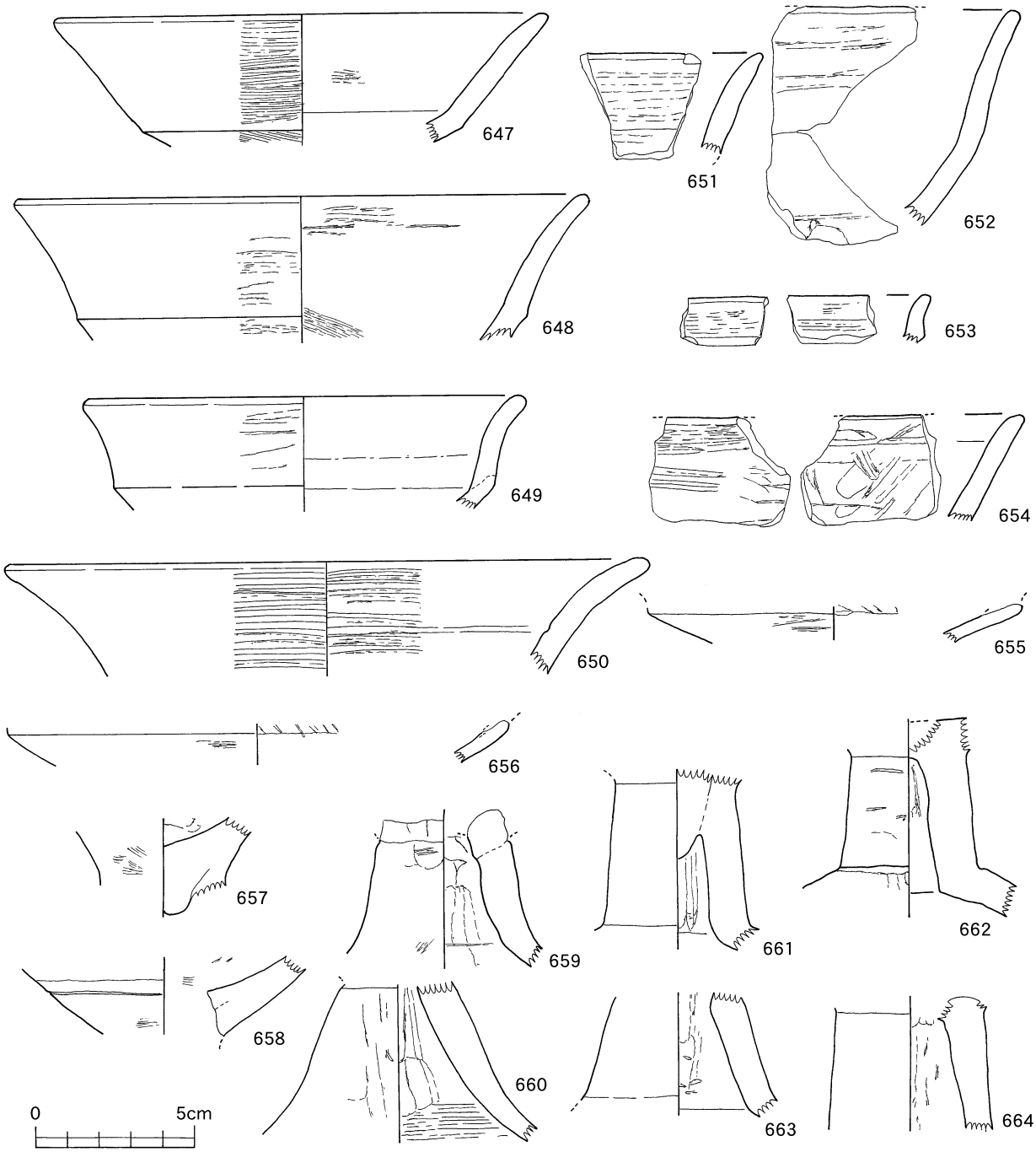
第134図　土師器(5)

いる。焼成度は良好で，石英・白色石・茶色石・黄白色石などの細かい石を含んだ土を用いている。

5　高坏形土器（第135図・第136図647～676）

外反する口縁部と丸みをおびた底部から成る坏部と，短かい筒部・ハの字状に広がる裾部から成る脚部の形態をしている。なお，663と664はふいごの羽口（678・679）に転用している。

口縁部（647～654）も長く伸びるものと短いもの，丸みをおびるものと，直線的なものなどがある。650は口縁直径が20㎝とやや大型で，内面に浅い凹線風のものがみられる。649は口縁直径が14㎝と中型で，丸みをおびて外反する口縁部とまっすぐ伸びる底部から成るが，胎土が口縁部は精製土，底部は白色土などを含む砂質土と異なる特長をもつ。647・648は外反しているが直線的に伸び



第135図　土師器(6)

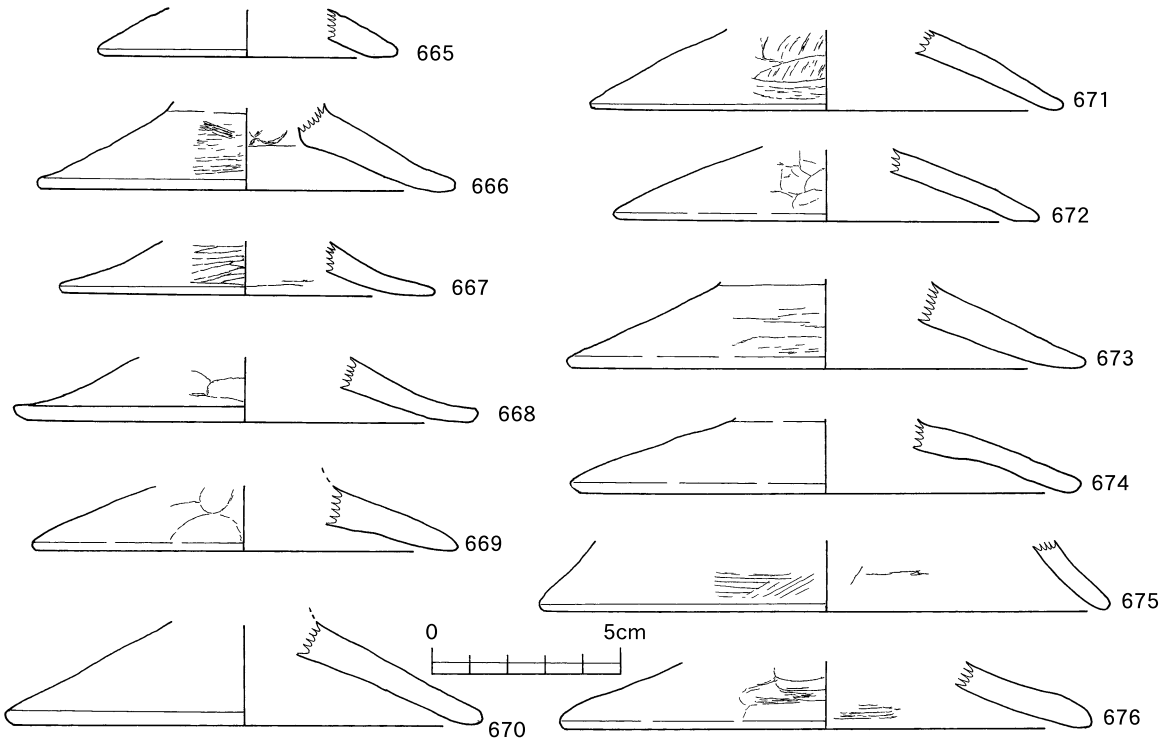
ており，口縁部と底部にはっきりした稜を持つ。口縁直径は648が18㎝，647が16㎝ある。653は外反する口縁部だが，短い。652は逆に深い坏部で，口縁部と底部の境はゆるやかである。

655・656は坏部の口縁と底部の境付近で底部の接着部分に細かい右下がりのヘラ沈線がみられる。生乾きの時点で口縁部を貼付けたものと思われる。

657～661は坏部と脚部との境付近で，658は坏部の中心部に接合面，その中央付近に貼付部分がみられる。また，底近くに浅い沈線が巡っている。657は境に貼付け部がみられ，中央には団子状の粘土塊がみられる。659は脚部上側に粘土塊を乗せて貼付けている。661も中央に棒状の粘土塊を埋め込んでおり，裾部は強く屈曲して広がっている。662は底部内面がまっすぐしており，裾部へは強く屈曲して広がっている。坏部と脚部の接着には坏の中央部に粘土塊を埋めることによって接合するものと，粘土を内外からくっ付けて接合するものとがある。

脚部は659・661・662・664のように筒部をもつものと，660・663のように筒部と裾部の境が明瞭な段をもたないものとがある。裾部は端部が細くなるものと，668・670・672～674のように丸みをもつものとがあり，直径も665のように８㎝しかない小さいものから，675のように15㎝ある大きなものまであるが，多くは11㎝～14㎝のなかにはいる。666は外面に薄い丹塗りがみられる。666～668・676は裾部がやや内反するのに対し，669・670・672・674は外へわずかにふくらんでいる。673の外面は赤っぽい淡茶褐色を呈しており，丹塗りのようにみせている。調整は横方向のヘラナデを主体とし，なかにはていねいな調整をしてミガキ風にみえるものもある。

色調は淡茶褐色・にぶい黄褐色・乳茶褐色などで，黒班もある。石英・長石・黄みがかった白色石・茶色石などの細かい石を多く含む胎土だが，662は黄白色石がひじょうに多いやや粗い土である。



第136図　土師器(7)

第21表　土師器観察表(1)

図番	出土地	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
605	14F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	にごった淡茶褐色 （外にスス付着）	普通	白色石・黄白色石・金雲母などの細かい石を含む
606	17F	ヘラ横ナデ 継ぎ目がはっきり残る	ヘラ横ナデ 継ぎ目がはっきり残る	茶色っぽい灰褐色 （厚くスス付着）	普通	黄白色石・石英・白色石などの細かい石を含む
607	17F	ヘラ横ナデ （一部縦ナデ）	ヘラ横ナデ	茶褐色 （外にスス付着）	良	黄白色石・石英・長石などの細かい石を含む
608	17F	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色 （外はススのため黒色化）	良	石英・白色石・金雲母・茶色石などの細かい石を含む
609	16F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：灰がかった黒褐色 （スス付着） 内：黄茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む （４～６㎜大の石あり）
610	17F 18F	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	灰がかった淡茶褐色 （スス付着のため黒褐色）	普通	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
611	17E	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
612	17F	ヘラ横ナデ 輪積痕がはっきり残っている	ヘラ横ナデ	赤みがかった茶褐色 （外はススにより黒色化）	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
613	18F	ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色（外に黒班）	良	黄白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
614	17F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰がかった淡茶褐色 （外にスス付着）	良	白色石・石英・黄白色石などの細かい石を含む
615	14F 18F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	外：赤っぽい茶褐色 （スス付着） 内：淡茶褐色・黒褐色	良	石英・金雲母・黄白色石などの細かい石を含む
616	17F	ていねいなヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	外:淡茶褐色（スス付着） 内:黄みがかった淡茶褐色	良	黄白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む（３㎜大の石あり）
617	18F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった灰褐色	良	白色石・石英などの細かい石を含む
618	15F	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む
619	14E 15F	粗いヘラナデ部分的にはミガキに見えるヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色 （外はススのため黒色化）	良	石英・黄白色石・茶色石・白色石などの細かい石を含む
620	15F	ハケナデ　ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色 （外にスス付着）	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
621	15F	横ナデ　ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色 （外にスス付着）	良	石英・白色石・茶色石・黄白色石・金雲母・長石などの細かい石を含む
622	15F	ヘラ横ナデ でこぼこが目立つ	ヘラ横ナデ でこぼこが強い	茶褐色 （外はやや赤っぽい）	良	石英・金雲母・白色石・長石などの細かい石を含む
623	15E	ヘラ縦ナデ	右下がりハケナデ	外:黄色っぽい淡茶褐色 （スス付着，黒班あり） 内：淡茶褐色	良	金雲母・石英・長石・茶色石・白色石などの細かい石を含む
624	18F	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラナデ	淡い黄褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
625	18F	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む（６㎜大の石あり）
626	17F	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラナデ	外：茶褐色（スス付着） 内：灰黒褐色	良	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
627	17F	ていねいなヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明黄褐色	良	白色石・石英・長石・茶色石などの細かい石を含む
628	15E	ヘラミガキ	ていねいなヘラナデ	灰がかった淡茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石を含む
629	16F	ミガキに近いていねいなヘラ縦ナデ	ヘラナデ	茶褐色	良	雲母・長石・白色石・石英などの細かい石を含む
630	15F	ていねいなヘラナデ	ヘラ縦ナデ	暗茶褐色 （内にコゲ付着）	良	黄白色石・石英・白色石・長石などの細かい石を含む
631	17F 18F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラナデ	茶褐色 （外の表面は剥脱）	良	黄白色石・石英・白色石・金雲母などの細かい石を含む（５㎜大の石あり）
632	14F	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ （剥脱が目立つ）	淡茶褐色	普通	金雲母・黄白色石・茶色石などの４㎜大までの小石を含む
633	15F	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	茶褐色	良	石英・白色石・黄白色石の多い砂質土
634	17F	ヘラミガキ	ヘラナデ	外:黄みがかった淡茶褐色 内：淡茶褐色	良	白色石・石英などの細かい石を含む
635	15F	横方向ヘラミガキ	ヘラナデ	淡茶褐色	良	黄白色石・長石などの細かい石を含む
636	17F	ミガキに近いヘラ横ナデ	ヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	石英・白色石などの細かい石を含む

第22表　土師器観察表(2)

図番	出土地	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
637		ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	外：淡黒褐色 内：淡茶褐色	普通	黄白色石・石英・長石などの細かい石を含む
638		ヘラナデ ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	黄褐色 （底まで丹塗り）	普通	黄白色石・石英などの細かい石を含む
639	17F	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：暗灰茶褐色 （スス付着） 内：黒褐色	良	石英・白色石・茶色石の多い砂質土
640		ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色 （脚部は黄褐色）	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
641		ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐色 （赤っぽい淡茶褐色）	普通	石英・黄白色石・長石などの細かい石を含む
642	15F	ていねいなヘラナデ	ヘラの押圧により でこぼこ縦ナデ	淡茶褐色	良	石英・黄白色石などの細かい石を含む
643	17F	でこぼこしているが ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	外：淡い黄褐色 （一部黒褐色） 内：茶褐色	良	白色石・石英・長石などの細かい石を含む
644	15F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ （摩耗が目立つ）	外：茶褐色 内：暗茶褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
645	18F	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	暗淡茶褐色 （一部に黒班あり）	良	白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
646	15E	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良	黄白色石・石英・長石・茶色石などの細かい石を含む
647	16F	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡い黄茶褐色 （内には黒班あり）	良	石英・白色石・茶色石などの細かい石を含む
648	17F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	普通	石英多　長石・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
649	18F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	やや赤みがかった黄褐色	普通	上：精製土 下：白色土など含む砂質土
650	18F	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	石英・長石・黄白色石などの細かい石を含む
651	16F	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色 （内に黒班あり）	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
652	18F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡い黄茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
653		ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	普通	黄白色石・石英などの細かい石を含む
654	18F	ていねいなヘラ横ナデ	ミガキに近い ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
655	16F	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	にぶい黄褐色	普通	石英・茶色石・白色石・黄白色石などの細かい石を含む
656	18F	ていねいなヘラ横ナデ	ヘラナデ	茶色がかった黄褐色	良	白色石・石英などの細かい石を含む
657	17F	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	良	黄白色石・石英・茶色石の多い砂質土
658	17F 18F	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：乳茶褐色 内：淡茶褐色	普通	石英・黄白色石・長石・茶色石などの細かい石を含む
659	14E	ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	乳灰色	普通	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む（5㎜大の石あり）
660	17F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	石英・黄白色石・白色石などの細かい石を含む
661	15E	ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラナデ	乳茶褐色 （一部に赤みがかった茶褐色）	普通	石英・長石・茶色石・黄白色石・白色石などの細かい石を含む
662	16F	ミガキに近い ヘラ縦・横ナデ	ていねいなヘラナデ ヘラ横ナデ	茶褐色	良	２～３㎜大の黄白色石が非常に多く，他に茶色石・石英などの粗い土
663	16E	ていねいなヘラ横ナデ	時計まわりの ヘラ横ナデ	外側のみが黄色く変色茶褐色（外は羽口が灰褐色，その下が淡い黄褐色，境はやや赤み）	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
664	15F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
665	18F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡い黄褐色 （一部に黒班）	普通	白色石・黄白色石・石英などの細かい石を含む
666		ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡黄褐色	普通	石英・白色石などの細かい石を含む
667	16F 18F	ミガキに近い ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良	白色石・茶色石・石英などの細かい石を含む
668	17F	ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	暗黄褐色	普通	黄白色石・石英などの細かい石を含む

第23表　土師器観察表(3)

図番	出土地	外面の調整	内面の調整	色　　調	焼成度	胎　　土
669	17F	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	赤みがかった茶褐色（黒班あり）	良	石英・白色石などの細かい石を含む
670	17F	ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（内は暗い）	良	石英・黄白色石・茶色石などの細かい石を含む
671	18F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	白色石・長石・黄白色石などの細かい石を含む
672	18F	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	普通	長石・石英・茶色石・白色石などの細かい石を含む
673	18F	ミガキに近いていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	外：赤っぽい淡茶褐色 内：淡い黄褐色	良	白色石・黄白色石・石英・茶色石などの細かい石を含む
674	18F	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡い黄茶褐色（黒褐色部分あり）	良	石英・長石・白色石などの細かい石を含む
675	18F	ていねいなヘラ横ナデ	ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	茶褐色（内に黒班あり）	良	石英・黄白色石・白色石などの細かい石を含む
676		ヘラナデ	ヘラナデ	白っぽい黄褐色	良	石英・白色石などの細かい石を含む
677	17F	浅い長格子タタキ	同心円当て具表面をナデて浅い	うすい自然釉 内外：灰褐色 中：赤茶褐色	良	
678	15F	ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外：淡茶褐色 内：茶褐色	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
679	16E	ていねいな横ナデ	時計まわりのヘラ横ナデ	外側のみが黄色く変色茶褐色（外は羽口が灰褐色，その下が淡い黄褐色，境はやや赤み）	普通	白色石・石英などの細かい石を含む
680	17E	ヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色（部分的に黒み）	良	石英・白色石などの細かい石を含む

第２節　須恵器（第137図677）

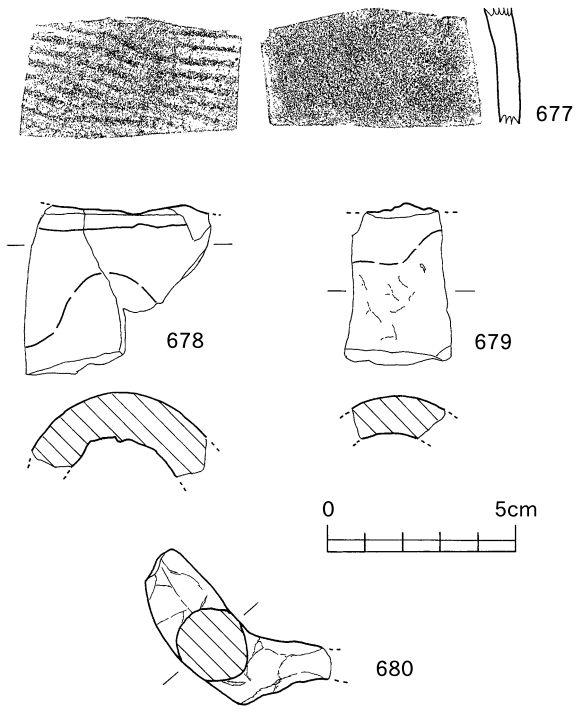
17Ｆ区の土坑で甕と思われるものの破片が出土している。厚さが５㎝ほどと薄く，外面には浅い横長の格子タタキ，内面には同心円当て具の痕跡があるが，内面は表面をナデており良く残っていない。内外面とも表面は灰褐色を呈しているが，外面には薄い自然灰釉がかかっている。内は赤っぽい茶褐色を呈しており，焼成度は良好である。

第３節　土製品（第137図678～680）

ふいご羽口と匙形土製品が出土している。

ふいご羽口は４点（14Ｅ区・15Ｆ区・16Ｅ区）出ているが，いずれも高坏形土器の脚部を利用したものである。いずれも破片になっており，脚上部を羽口のほうに使っており，灰色化している。

匙形土製品は把手部分のみで，表面の剥脱が目立つがヘラで丸く棒状に整え，匙部との間はやや細くなっている。直径は２㎝前後である。部分的に黒みをおびているが，黄味がかった淡茶褐色を呈している。焼成度は良く，石英・白色石などのこまかい石を用いている。17Ｅ区のⅡ層で出土している。



第137図　須恵器・土製品

第５章　小結

中尾遺跡とは同じ台地にあるものの南側に約１㎞離れていることから，この両遺跡は別の集団の生活拠点と思われる。ただ，時期的には同じような時期に居住した可能性もあり，相互に影響を与えあっていたこともあったのであろう。ここでは大きく縄文時代早期，弥生時代中期，古墳時代前・中期の３時期にわたって住んでいる。このうち，ふたつの時期の問題点についてまとめていく。

第１節　縄文時代早期の生活跡

この時期の遺構は集石遺構13基・集積遺構１基・土坑１基だけが検出され，集落構成の主要素である竪穴住居跡は見つかっていない。ただ，このことは県内の他地域・他遺跡でもいえることで，竪穴住居跡が見つかっていないことで，ここに人が定住していなかったとは簡単に断定できない。竪穴住居跡が見つかっていない点については，竪穴住居が造られず簡単な家で済ませていたのか，現代の研究者が竪穴住居を検出できない（埋土と検出面の土が似ているため）のか，あるいはキャンプ的な移住性の強い生活をしていたため住居が造られなかったのか，さまざまな理由が考えられるが，各地で多く見つかる集石遺構の存在から考えれば，これらの遺跡は安定した居住地の可能性が強い。とすれば，当時（縄文時代早期）の包含層，あるいは生活基盤層の土色が黒色土であることから，現代の調査担当者が遺構を探しきれていないと考えるほうがもっとも納得しやすい。当遺跡でも集石遺構が13基検出されていることを考えれば，これらの存在時期をどれほどの幅考えるかによるが，数年間の居住を考えたほうがわかりやすいのではなかろうか。

ところで，これら13基の集石遺構をそれぞれ見ていくと，すべてが同じような配置・構成・基模などをしていない。それは，それぞれの役目の違いをしていると思われる。集石遺構の性格については南太平洋地域等の民族例などから石蒸し調理用のものとする考えがなかば定着している。この他にも単なる炉・かまどなどとしても用いられていた可能性もある。ここでは，そうしたことを考慮しながら，それぞれの集石をみていきたい。

蒸し焼き用のものとすれば，①物を乗せる基礎の礫群のみが残る，あるいは検出された場合②基礎の礫群と，その上にかぶせた礫の廃棄場が一体化した場③礫の廃棄場のみが残っている場合が考えられる。当遺跡の場合を考えれば①に該当するものが１号・６号・９号，②に該当するものが３号・７号・10号・11号，③に該当するものが２号・４号・５号・８号・12号となる。この遺構には磨石や石皿などの転用を除くと人工遺物が含まれないことが多い。しかし，当遺跡では多く，あるいは完形品に近い形で残っていることがいくつかにみられる。それらの遺構はいずれも②か③の場合で，①の場合はない。このこともこの遺構を一次的な使用場と，廃棄場とに分けるひとつの根拠となろう。

このように考えると，当遺跡の集石遺構は13基見つかっているが，本来は８基あるとみれる。

集石遺構２号の中で石皿と磨石の一体化した遺構が見つかった。この石皿がボロボロになっている状況からして，この遺構は火を焚く場の近くで木の実を粉砕化している作業場としてとらえることも可能かもしれない。あるいは磨石が２個とも欠損し，石皿が異様に窪んでいることを考慮すれば，もはや使用に耐えないものを用いて，豊作を祈願する祭祀が行われた跡の可能性もある。

また，集石遺構７号で出土した軽石製品については，これを他の礫と同じように調理に用いたと考えることは石材のもろさからして無理がある。軽石製品については実用品としては使用しにくいことから祭祀用品として考えられることが多いが，この場合，出土している場所からして実用品と

しては考えられないだろうか。煮炊き具の場合，今日では蓋をするのは当然であるが，考古資料としての出土はほとんどない。可能性として木の葉，木の枝などが考えられるが，板材加工がむずかしいことを考えれば軽石の利用はどうだろうか。大きさが深鉢の口縁直径からみて，やや小さいようにも思えるが，中蓋として許容範囲の中にあるかもしれない。今後，類例調査など課題としたい。

第２節　古墳時代土師器の特性

南九州特有の土器である成川式土器は甕形土器の底に脚台が付くという特徴がある。そのため，南九州の古墳時代遺跡には必ずといっていいほど脚台の破片が出土する。当遺跡に隣接する中尾遺跡でも多くの脚台が出土している。ところが，当遺跡では脚台が全く見られない。整理作業を始めた頃，この遺跡には甕形土器がない。中尾遺跡に集落と墓があることから，当遺跡は壺・坩・高坏から成る祭祀遺跡ではないかと考えたこともあった。ところが，口縁部などをみると壺だけでなく甕も多く出土していることがわかってきた。大隅半島では遺跡によって成川式土器と宮崎平野系土師器の比率が違うことがあるという現象については昨年「二子塚Ａ遺跡」の報告書で記し[1]，このことについては中村直子氏の先見的論文[2]もある。つまり，成川式土器のみの遺跡，成川式土器の中に宮崎平野系土師器が少量含まれる遺跡，逆に宮崎平野系土師器が多く成川式土器が少量含まれる遺跡があるということである。この三種に分けると当遺跡は宮崎平野系土師器が多く，成川式土器が少量含まれるといった遺跡に含まれ，肝付町後田山下遺跡[3]などと同じような性格になるが，それにしても脚台が全く含まれないという極端な性格を持つことになる。こうした状態は，この地域が成川式土器を主体とする分布圏の端にあたるということも示唆しており，成川式土器の分布圏がどこまで至っているかという懸案事項を解釈する糸口になるかもしれない[4]。ただ，霧島市城山山頂遺跡のように布留式土器が異様に多く出る特殊な遺跡もあることから，その分布範囲をくくることは慎重に検討する必要があろう。この時期は５世紀前半頃であると思われるが，その時期における大隅半島の位置づけは近年，次々発見される墓の分析ともからめ，興味あるものがある。

遺物のなかで注目されるもののひとつに高坏形土器の脚部を再利用したふいごの羽口がある。これは県内各地で最近出土例が増加しつつあるが，大隅半島においても鹿屋市根木原，同榎木原，吾平町中尾などの遺跡で出土しており，鹿児島湾沿いでは指宿地区に多く出土していることとあわせ，その広がりが注目される。また，これらの出土する時期がかなり限られていることから，その伝播経路についても今後検討する必要がある。さらに，どういう工程の中でこれを利用したか，なにをこしらえたかについても調査を進めねばならない。

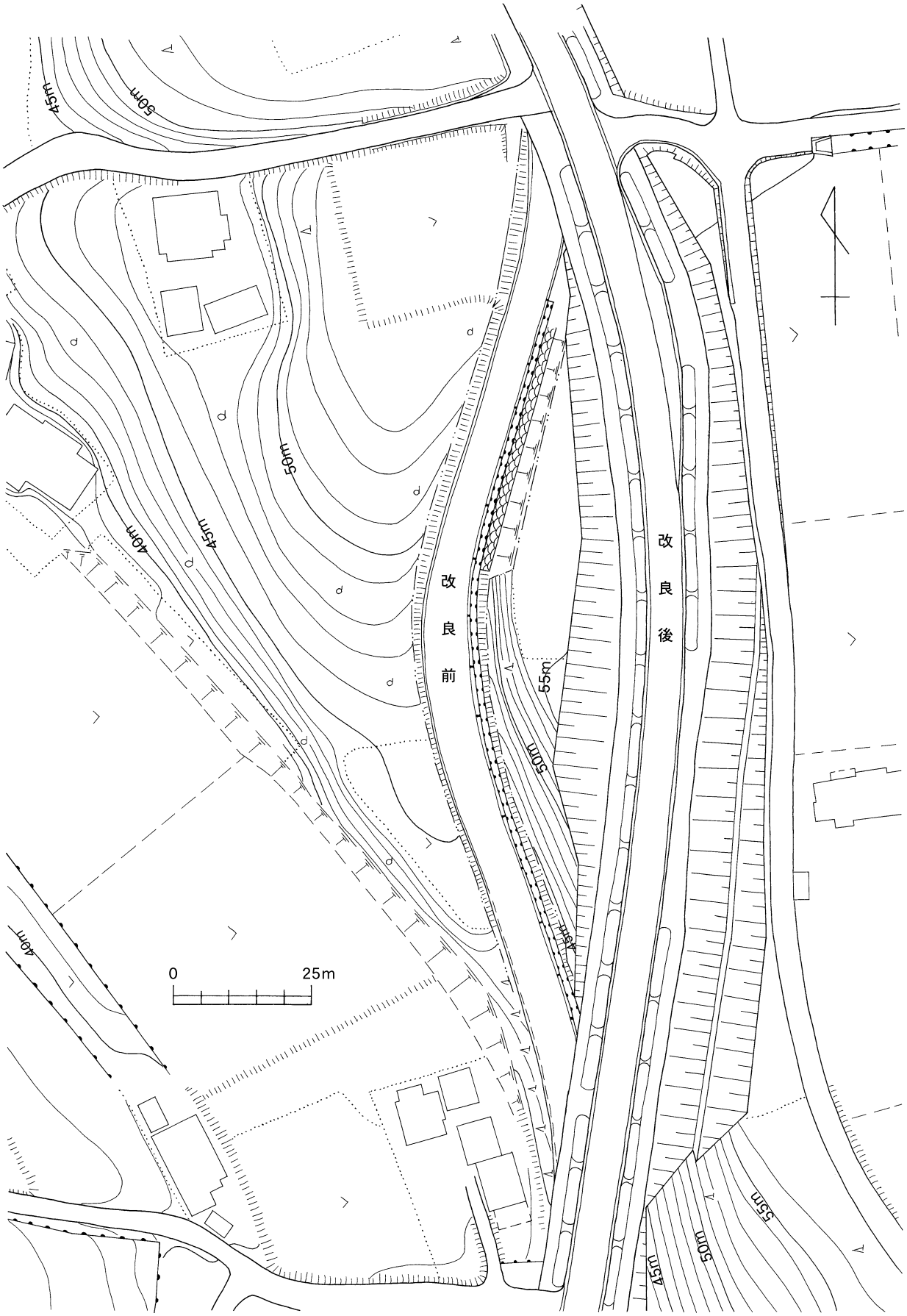
註

１）池畑耕一『二子塚Ａ遺跡』（『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』84）2005年

２）中村直子「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『鹿児島大学プロジェクト報告書　新しい関係性を求めて』2004年

３）新福深・児玉健一郎『後田山下遺跡』（『高山町埋蔵文化財センター発掘調査報告書』５）高山町教育委員会　1996年

４）このことは平成13年に行われた鹿児島県考古学会秋季大会において問題提起したが，その後調査は進んでいない。池畑耕一「古墳時代の国境―土器の違いを中心として」『鹿児島県考古学会研究発表資料―平成13年度秋季大会』鹿児島県考古学会　2001年



第138図　完成後の道路と旧道の位置関係

Ⅵ　ま　と　め

７年にもわたって行われた中尾遺跡の調査成果は，姶良川上流を臨む台地の端部における古代人の生活の歩みを明らかにした。特に古墳時代の生活跡をさぐっていくためにこれまで南九州では不明であった生から死へという一生の足跡を明らかにした遺跡であった。ここではこれらの調査によって明らかとなったことの一部を古墳時代を主体として記していきたい。

第１章　台地上における人びとの変遷

台地の西端付近を横切る道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は，ひとつの台地端にトレンチを設定する調査となり，いくつかの課題を与えるとともに，いろいろなことも判明してきた。

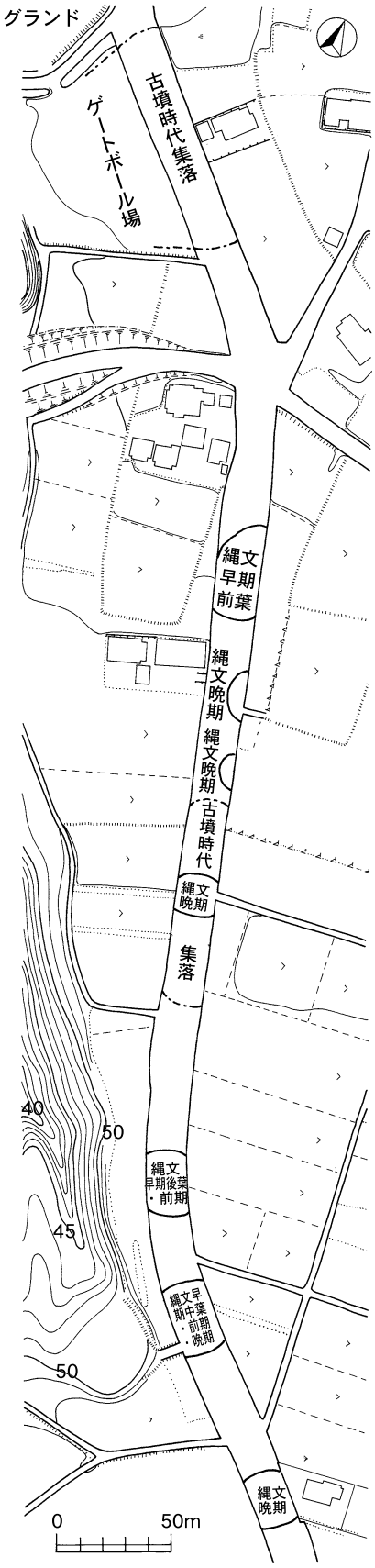
中尾台地は肝属川の支流姶良川を西眼下に望む比高約25mのほぼ平坦な台地で，南北に約2.5㎞，東西に約１㎞ある。台地裾には現在でも数か所に湧水地点があり，その湧水地を公園としている所もある。台地から歩いて５分ほどである。現在では台地上は耕地整理事業によって整然としているが，調査の結果ではいくつかの狭谷がはいってることがわかっており，縄文時代から古墳時代あたりの地形は今といくらか違っていた可能性がある。シラス台地の特質からして，もう少し台地が西へ延び，谷の浅い地形が予想できる。

この台地に人が住んだのは連綿としておらず途切れ途切れになっていることがわかる。

肝属川流域では弥生・古墳時代に比べると縄文時代の遺跡は極端に少ない。肝属川支流に当たる姶良川も同様で，縄文時代の痕跡は晩期になるまで少ない。今回の調査でも同じように縄文時代早期以外の痕跡はほとんどみられなかった。

縄文時代には早期・前期・後期・晩期に住んでいるが，前期・後期はキャンプサイト的な住み方で出土数は少ない。早期は広い範囲に出土がみられ集石59基，連穴土坑２基が検出されるなど安定した生活拠点であったことがうかがえる。土器も前平式・吉田式・石坂式・桑ノ丸式・下剥峯式・押型文・平栫式・塞ノ神式など長期にわたっている様子がわかる。晩期は狭い範囲に散在しており，黒川式土器の使われる中葉以降である。

眼下に川が流れているという地形にしては弥生時代の生活跡はほとんどみられない。早期から前期初頭までと，中期後半の



第139図　時代ごとの住居地分布図

山ノ口式土器が少量出土しているだけで，集落が営まれた痕跡はない。この頃はまだこの地域では稲作の発達はなかったようである。同じように肝属川下流域でもこの時期の集落は少ない。大隅半島では弥生時代における水田耕作の発達はもう少しあとのことであろう。

この台地において飛躍的に人数が増加するのは古墳時代になってからである。当遺跡がこの付近の拠点集落として存在したことを示しているのは28軒にも及ぶ竪穴住居跡と４条の溝状遺構などからうかがうことができる。

古代になるといくらかの土器と共に，溝状遺構などが見つかっているが，急に人数は減っており，その後にこの台地に人が住むことはなかった。中世以降では居住地を台地以外に移したことが予想できる。

第２章　古墳時代の拠点集落

鹿児島県では古墳時代になると各地で多くの土器が出土しており，この頃人口増のあったことがうかがえる。そのなかでも各地に多くの生活跡で構成される集落が存在する。鹿児島湾沿いに霧島市妻山元，姶良町萩原，鹿児島市鹿児島大学郡元団地，指宿市橋牟礼川，吹上浜沿岸に南さつま市芝原，日置市辻堂原，肝属川下流に肝付町東田，同後田山下などの遺跡がある。

これらの集落は４世紀頃に始まり，ほとんどは６世紀頃には終焉を迎えるが，橋牟礼川遺跡のように８世紀頃まで続くムラもある。継続年の違いもあるが，これらのなかには鹿大郡元団地・橋牟礼川・辻堂原遺跡などのように100軒を越える住居数からなる遺跡もある。

中尾遺跡は県道部分では28軒だけであるが，町教委主体で調査したゲートボール場の部分でも重複した多くの竪穴住居跡が発見されており，台地上にはさらに多くの竪穴住居跡があるものと思われる。これらの竪穴住居跡は４世紀頃から始まり，最後には７世紀頃まで続いているようである。集落は台地の端近くに立地しているが，調査区では北側の５区から11区付近，南側の36区から44区付近に集中している。また，重複した21軒の竪穴住居跡があるゲートボール場は５区から11区付近の西側に当たることから，北側の集落の延長部分と考えられ，ここではほぼ２か所に分かれて分布していることがわかる。これらのムラが同一時期における集団の違いなのか，時期を異にするムラなのかは今後の検討課題としたいが，北側のグループは23軒以上の住居で構成されていることから当時としては拠点集落とも考えられる大きなムラである。地下式横穴墓がどちらの集落に属するものか，あるいは別に集落があるのかも興味深い課題である。

住居の形態は県内各地でみられるものと同様，方形である。その多くは正方形に近い形態だが，なかには不定形のものもある。同じ吾平町の名主原遺跡では花弁状を呈するものも多いが，ここでは全く発見されていない。ただ，のちに記すように住居の平面積が狭いものもあることから，こうした狭いものは花弁状の形態をなす住居の中央部である可能性が全くないとはいえない。

住居の大きさは7.2㎡しかない小さなものから36㎡もある大きなものまで大小様々である。計測可能な（推定も含めて）22軒の平均面積は約18.5㎡あり，10㎡～25㎡のなかに８割近くが含まれている。特に大きいもの（約34㎡・36㎡）も２軒あることから，これらは特殊な用途をもっている可能性もある。他の遺跡に比べると，やや小さいものの多い感じがする。

第３章　古墳時代のムラとハカ

人間の一生を考古学的に追求することは難しい。出産儀礼・成長儀礼・生活場所・生産場所・生活用具・そして葬送儀礼・墓地，こうした遺跡を探り，見出しながら復元していくのが考古学研究である。ところで，生活場所と墓地をいっしょに掘り当てるのはそうざらにはない。特に墓が集落と離れてつくられる古墳時代の場合はなおさらである。

鹿児島県でムラとハカが近距離にある遺跡としては垂水市根木原遺跡，指宿市南摺ヶ浜遺跡と橋牟礼川遺跡，枕崎市松ノ尾遺跡と花渡川遺跡，高山町塚崎古墳群と東田遺跡あるいは花牟礼遺跡などがあるが，枕崎市花渡川遺跡の場合は未調査のため詳細が不明である。根木原遺跡の調査成果は未報告のためはっきりしないが，土坑墓２基が発見され，同じ台地上で多くの竪穴住居跡が発見されている。指宿市南摺ヶ浜遺跡では鉄剣などを副葬した土坑墓があり，同じ台地にある橋牟礼川遺跡では多くの住居・貝塚などがある。塚崎古墳群は台地上に５基の前方後円墳と39基以上の円墳があるが，台地の眼下低地に東田遺跡や波見西遺跡などの集落が，同じ台地の基部に20軒ほどの竪穴住居跡から成る花牟礼遺跡がある。なお最近，川辺町堂園遺跡でも複数の竪穴住居跡群と土坑墓群が同じ台地上でみつかっており，今後の調査が注目されている。

このように調査例がほとんどないため，そのつながりがはっきりしない鹿児島県で，中尾遺跡の検出例は今後古墳時代の集落構成を探るうえに貴重な資料となるであろう。

第２章で鹿児島県における拠点集落を論じたが，これらの集落に伴う墓地は現在のところほとんど見つかっていない。辻堂原遺跡の場合，竪穴住居跡を囲むようにして数条の溝状遺構があり，この溝状遺構の性格がどのようなものか興味深いが，溝状遺構の外側の状況がはっきりしないため，今のところ判断できるほどの資料はない。これを複数集団間の境とみるのか，ムラとハカの境とみるのか，あるいは防禦用のものとみるのかは今後の発見資料に待ちたい。中尾遺跡でも同じような溝状遺構が見つかっているが，これらをどのように解釈するのか今回の調査ではつかみきれず，今後の課題である。

中尾遺跡で発見されたハカは地下式横穴墓と呼ばれる南九州東部にみられる特有の形をしたものである。このハカは従来副葬品に貧弱なものが多いことから一般庶民のものといわれたこともあるが，ここでもはっきりしたようにその数はムラ人の数，つまり住居数に比べて極端に少ない。ハカがもう少し広がることは想定されるが，南北の領域あるいは東西における台地幅などを考えてもそれほど墓域が広がるとは考えにくい。とすればここのハカにしても中尾集落に住む人の全てが葬られるにしては少ないことは明白である。さらに，この墓の構造と副葬品の特殊性である。地下式横穴墓の構造・規模からして，ここの墓は決して大きなものではなく，従来の考え方からすれば貧弱な副葬品しかないと想定されていたのに対し，ここでは豊富な副葬品，つまり頭椎大刀・馬具・馬鈴や刀剣など南九州では出土例の少ないものをもっている。ここと谷を挟んで対岸といっていいほど至近距離にある宮ノ上地下式横穴墓群は古くから多くの墓が発見されているのに，ここほどの副葬品はなく，まことに貧弱な副葬品である。集落とのつながりだけでなく，それぞれの墓群間の比較など南九州の墓制を考えるうえに極めて貴重な発見であり，今後の解明が期待される。

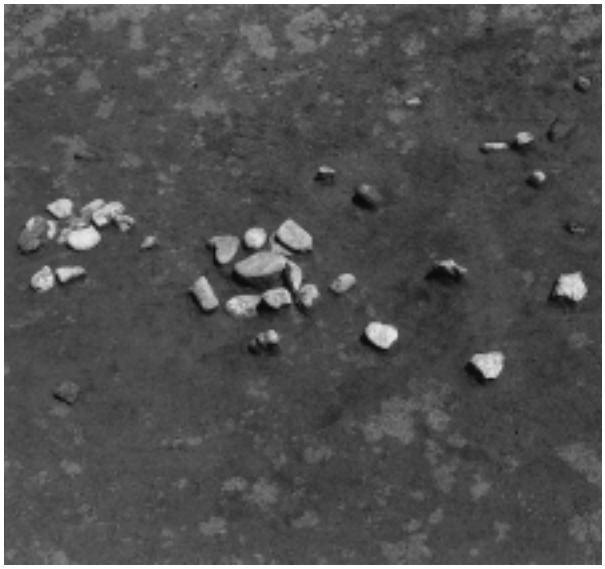
写　真　図　版

遺跡遠景（平成９年度）

遺跡遠景（平成10年度）

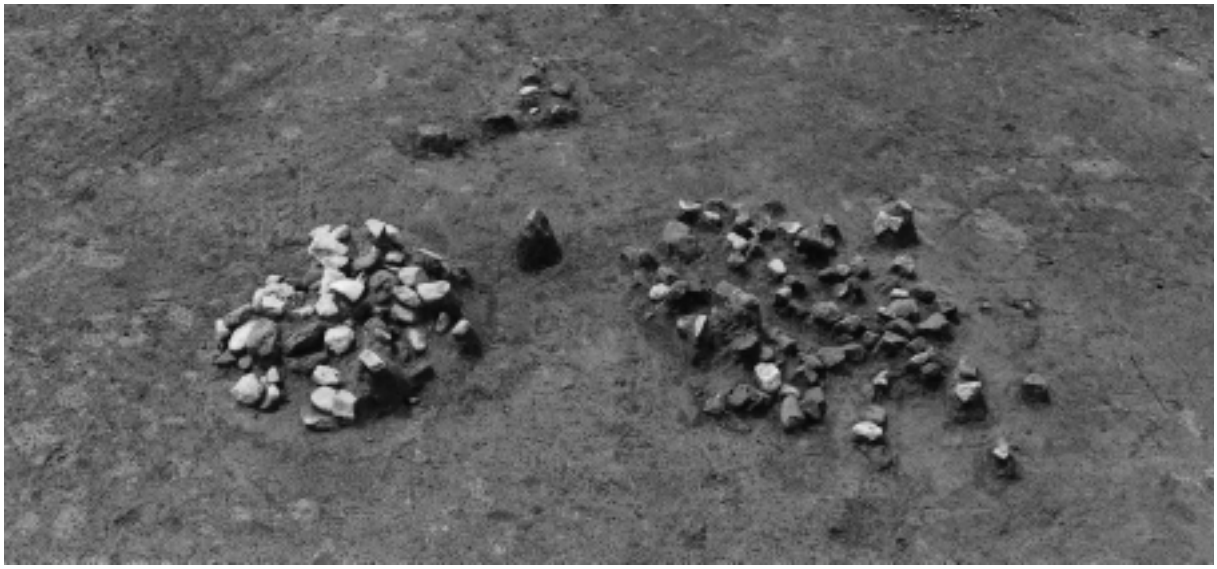
集石遺構３号

集石遺構９号

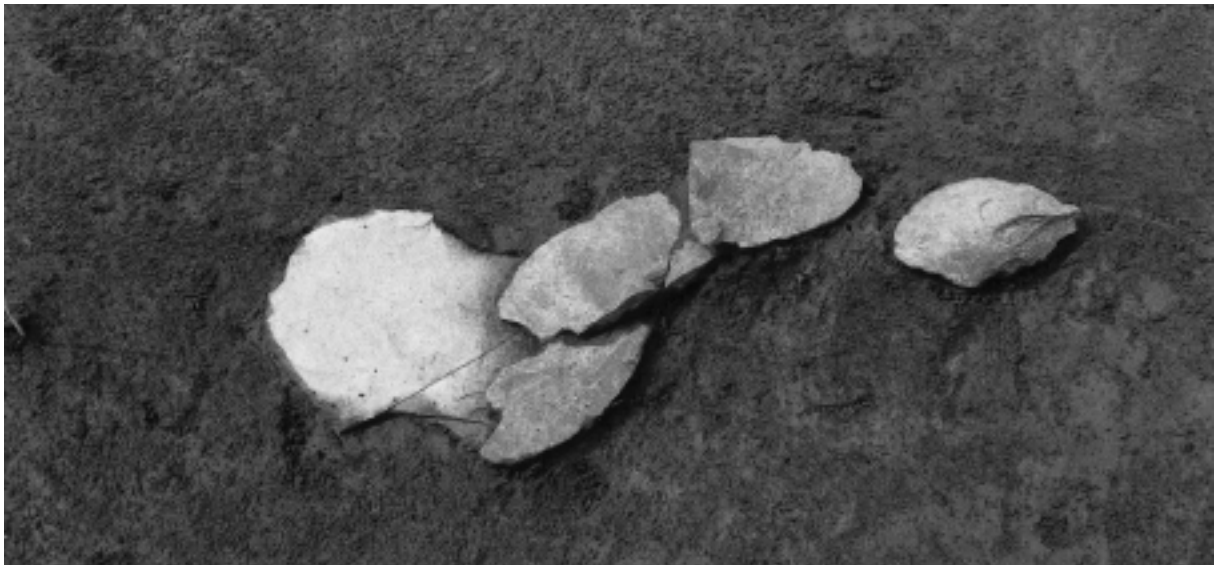


集石遺構10号

集石遺構７号

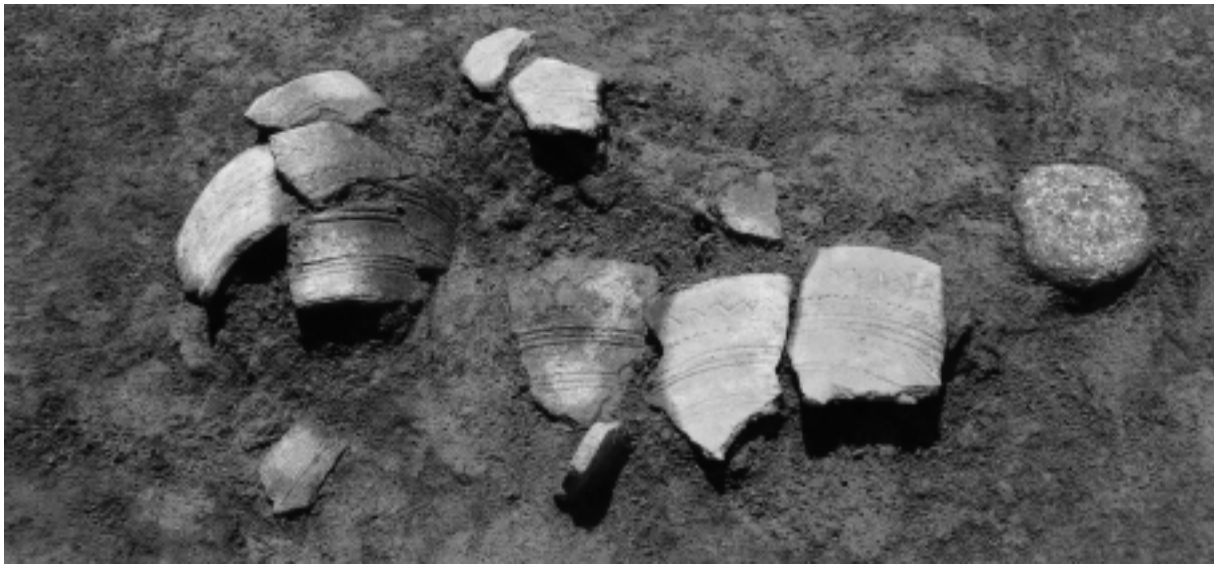


集石遺構６号



集積遺構１号

集積遺構２号



塞ノ神式土器出土状況

1号竪穴住居跡

土器出土状況

土器出土状況

2号竪穴住居跡

土器出土状況

土器出土状況

図版6　中尾遺跡

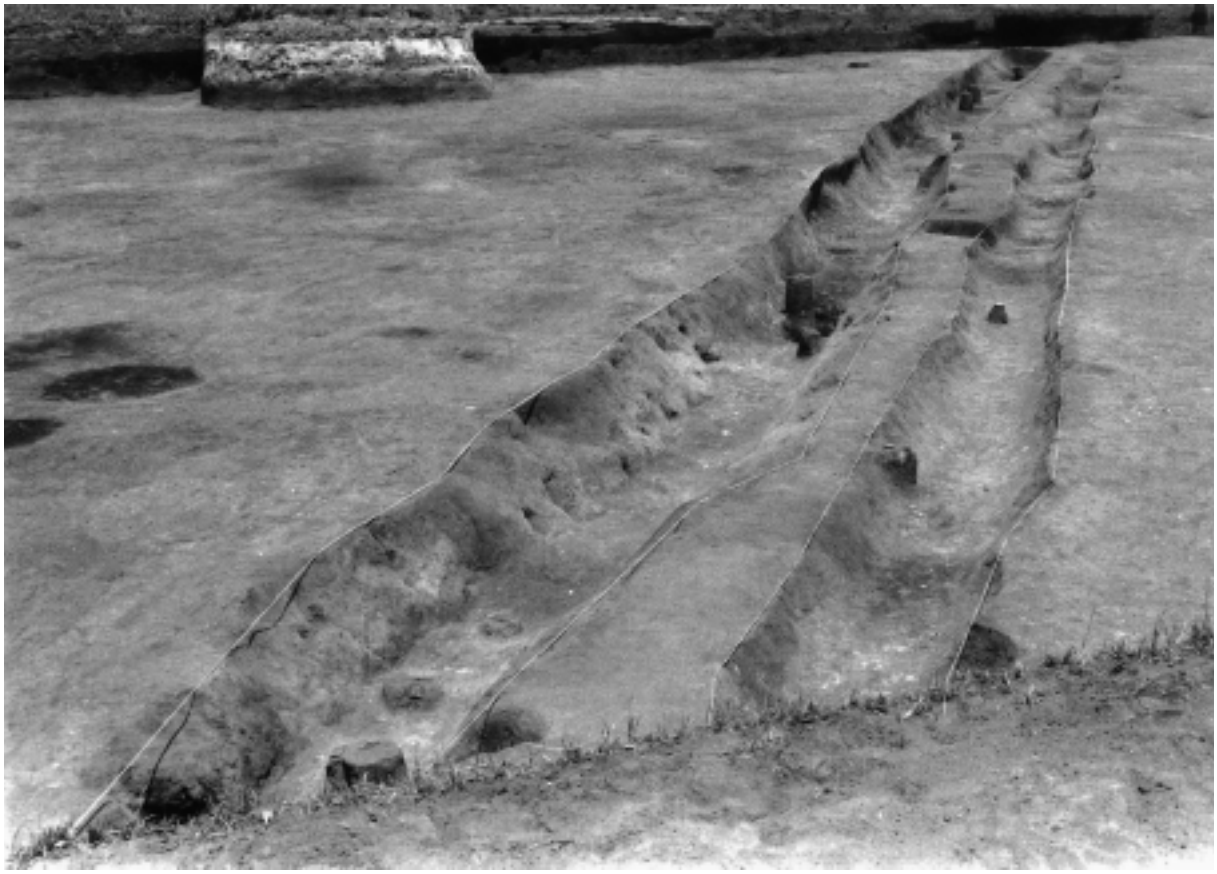
3号竪穴住居跡

土器出土状況

完掘状況

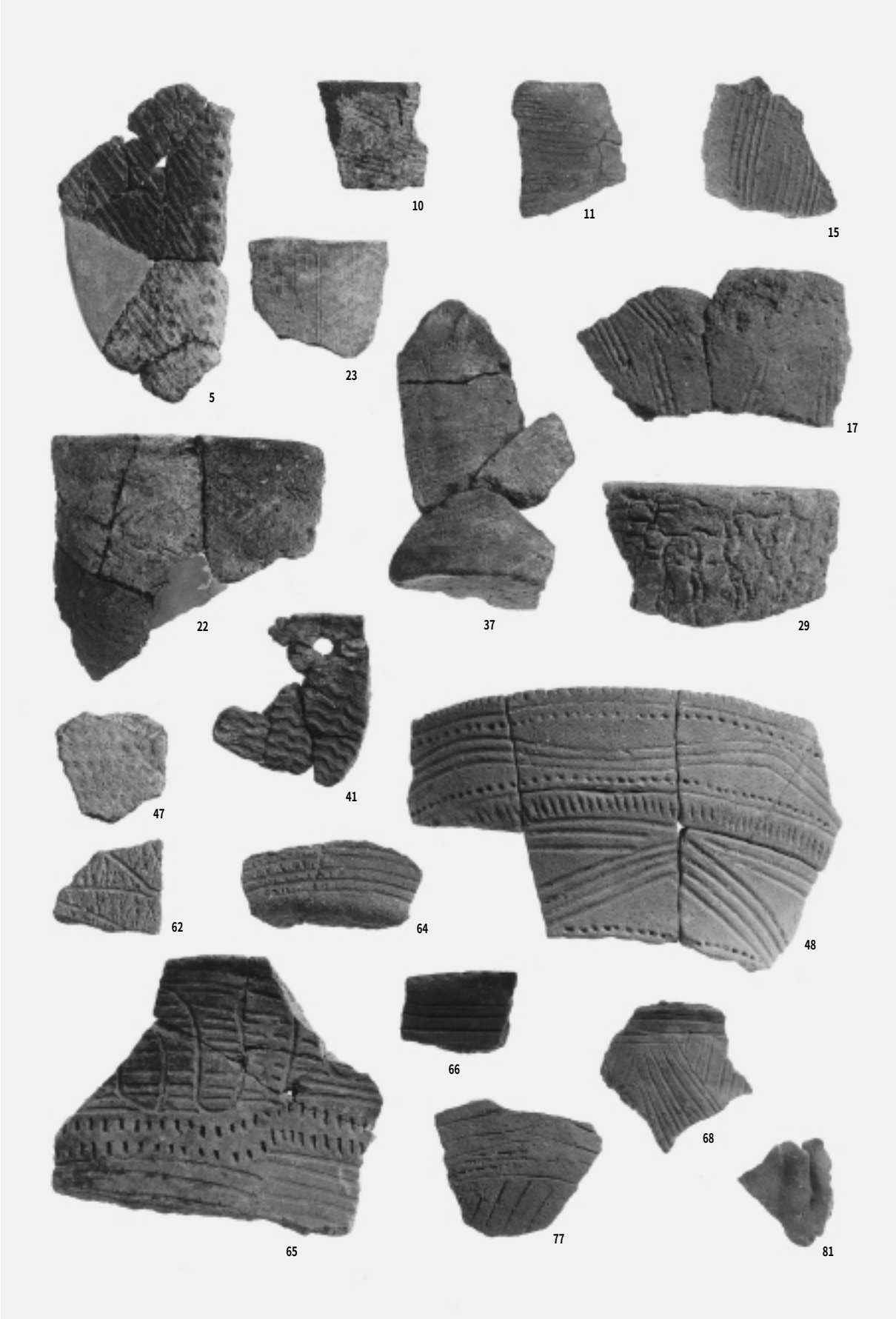
4号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡

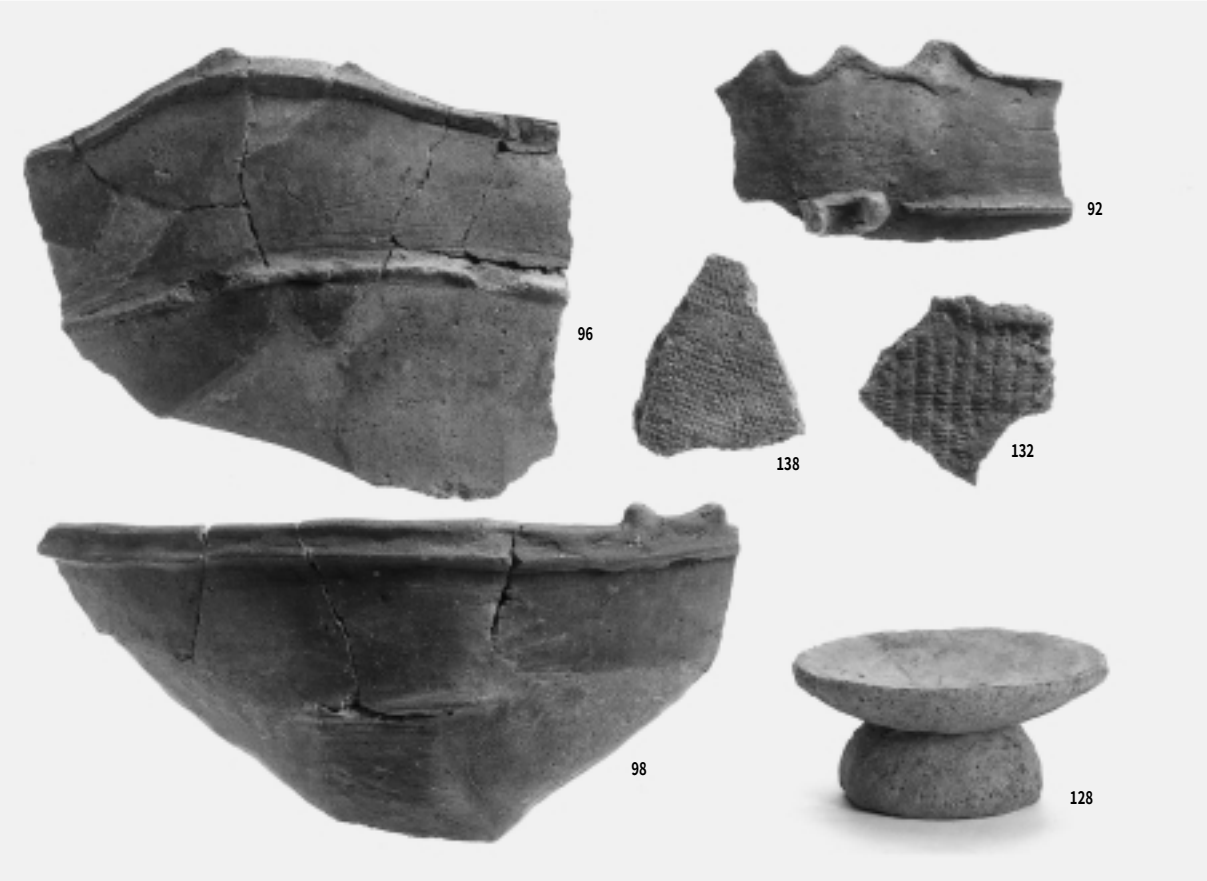


溝3と溝4

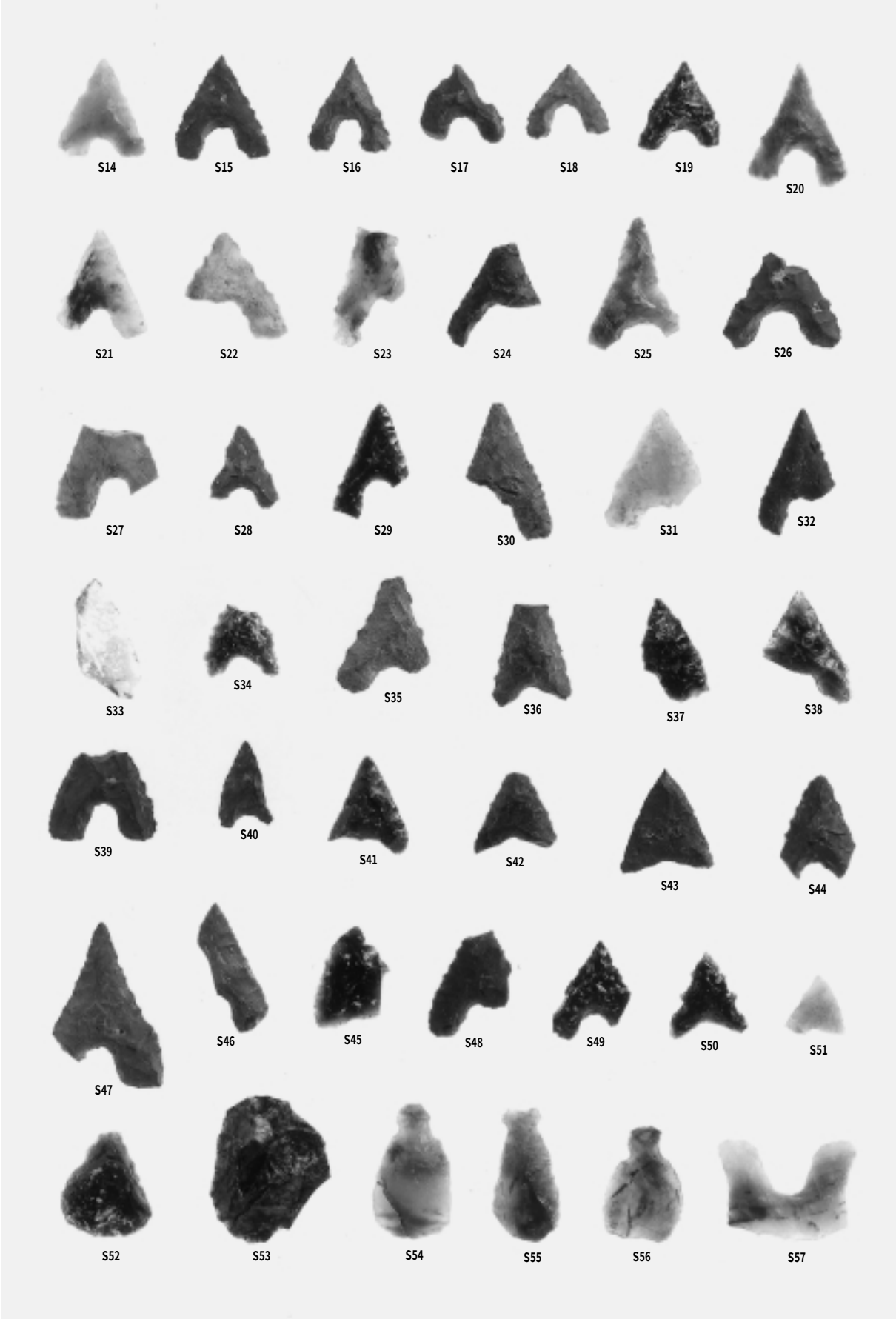
図版8　中尾遺跡（縄文土器）



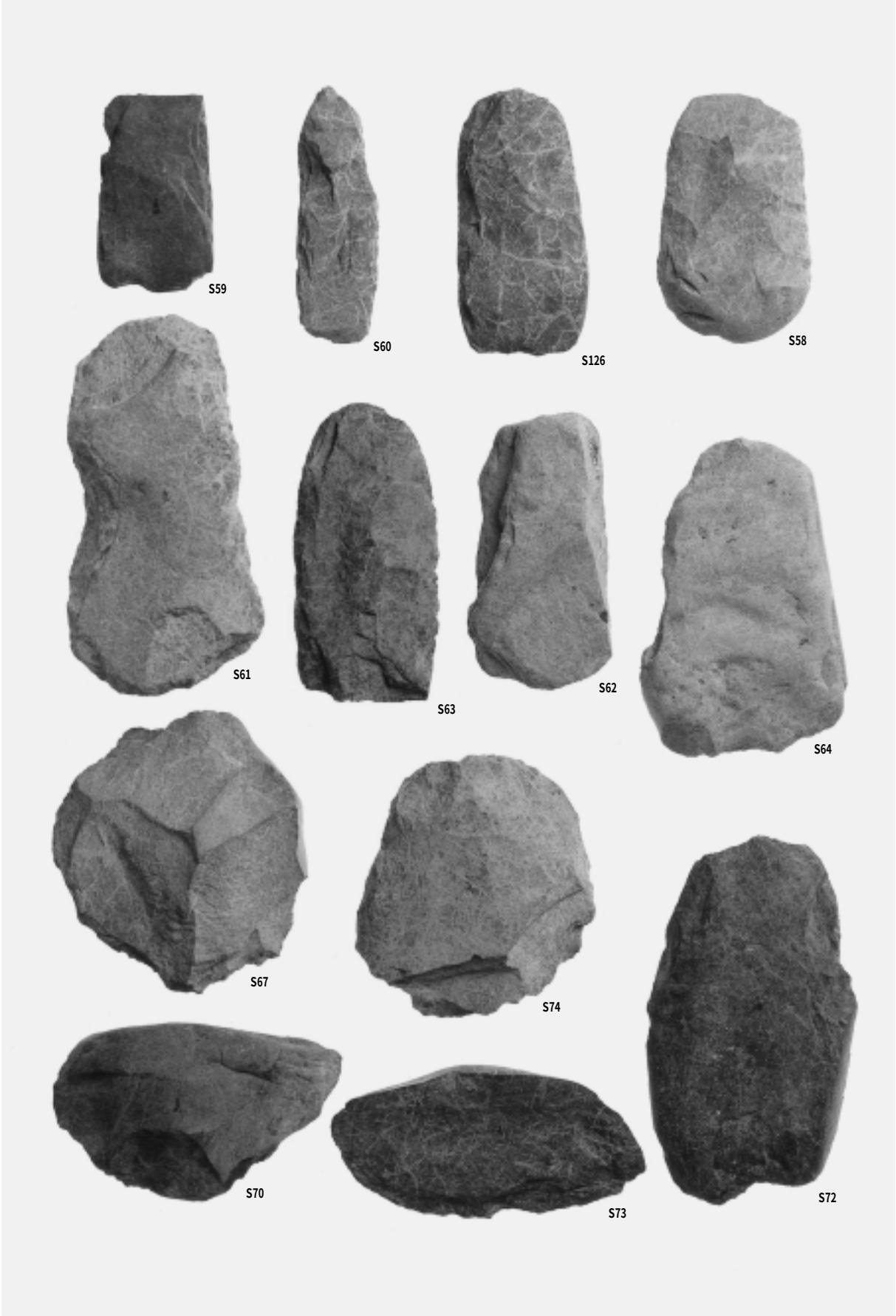
図版9　中尾遺跡（縄文土器）



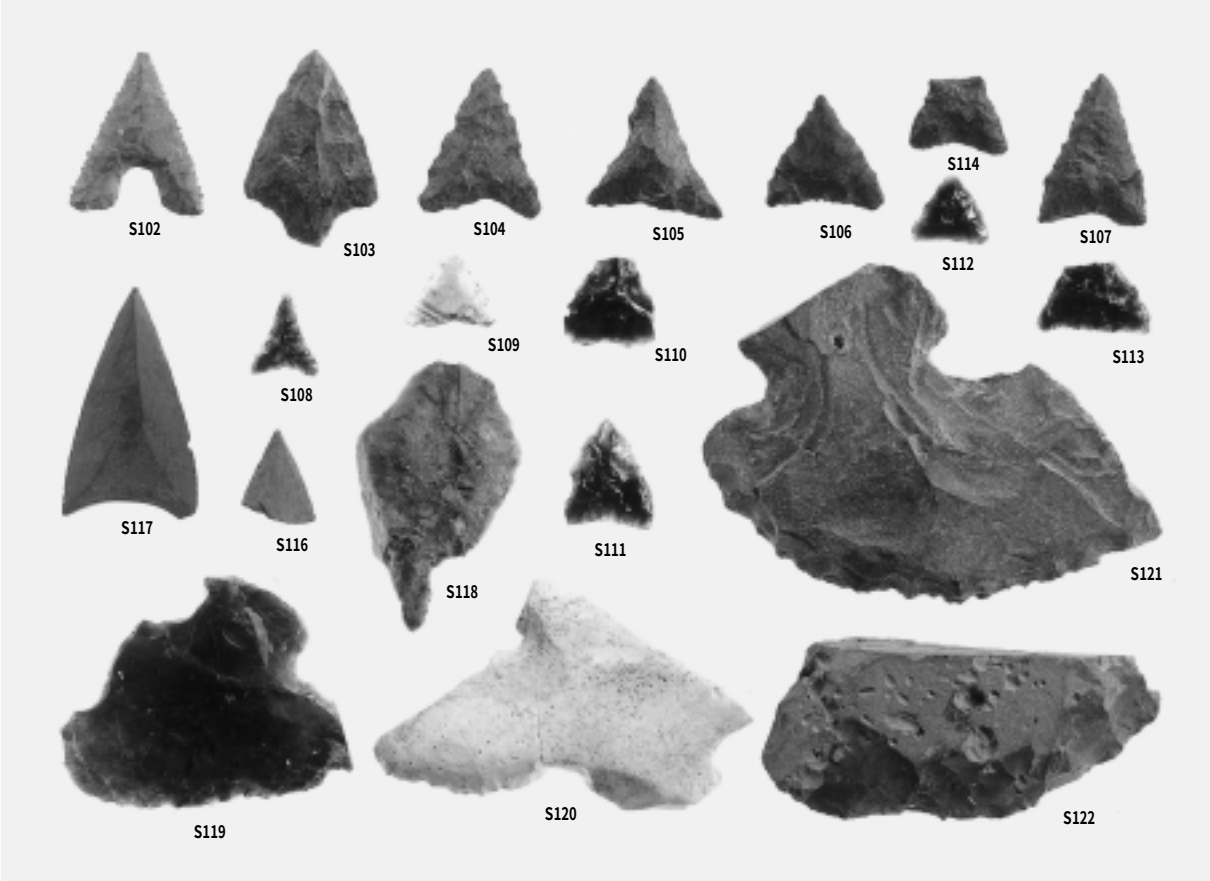
図版10　中尾遺跡（石器）

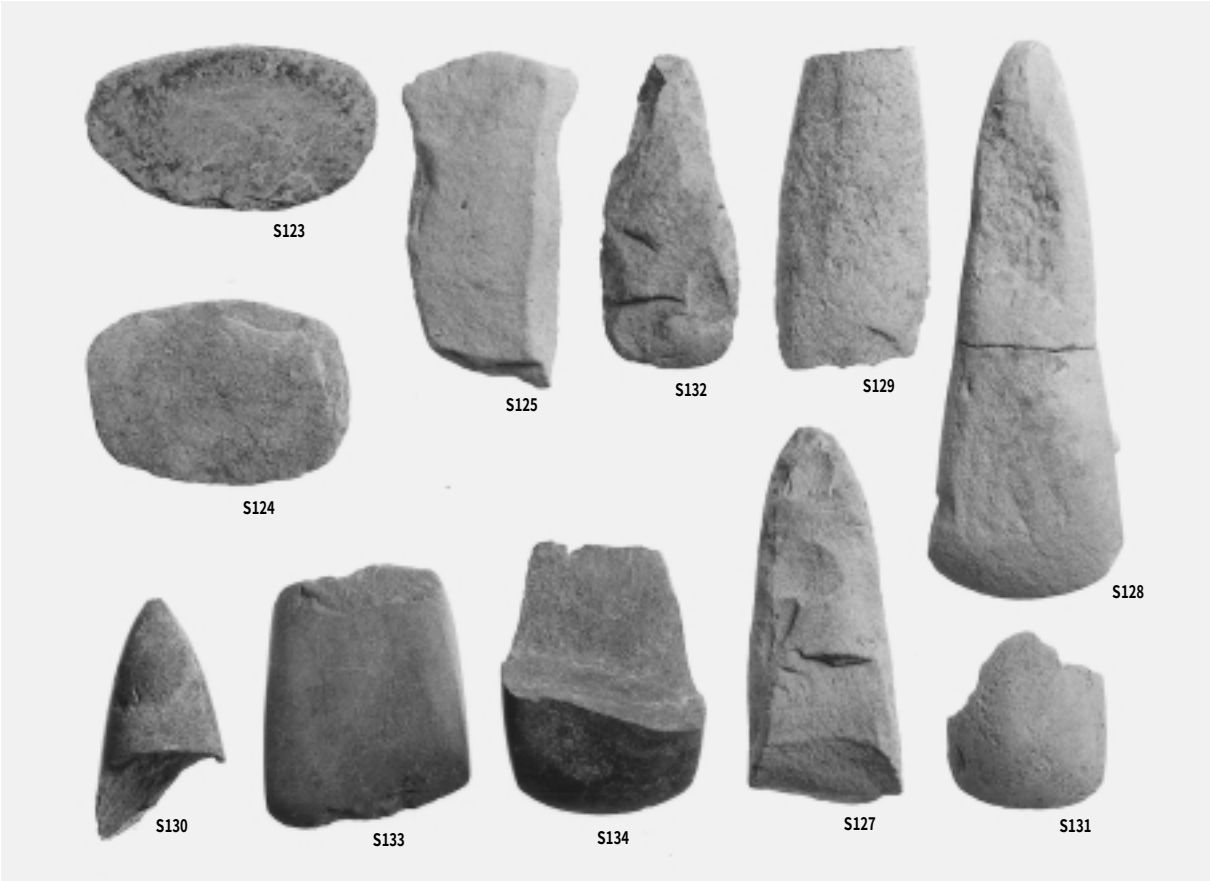

S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
S23
S24
S25
S26
S27
S28
S29
S30
S31
S32
S33
S34
S35
S36
S37
S38
S39
S40
S41
S42
S43
S44
S47
S46
S45
S48
S49
S50
S51
S52
S53
S54
S55
S56
S57

図版11　中尾遺跡（石器）

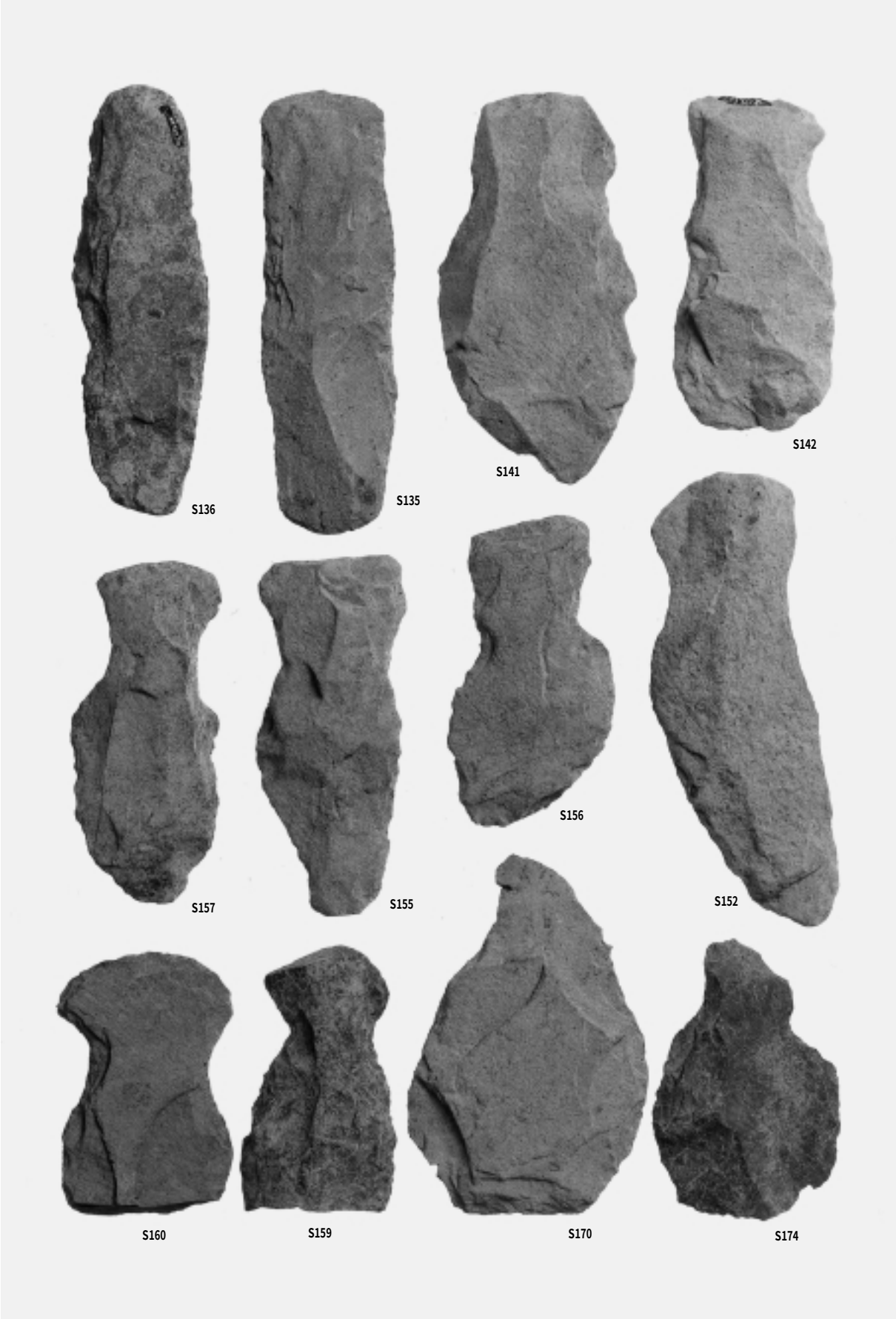


図版12　中尾遺跡（石器）


S102
S103
S104
S105
S106
S114
S112
S107
S109
S110
S113
S108
S117
S116
S118
S111
S121
S119
S120
S122

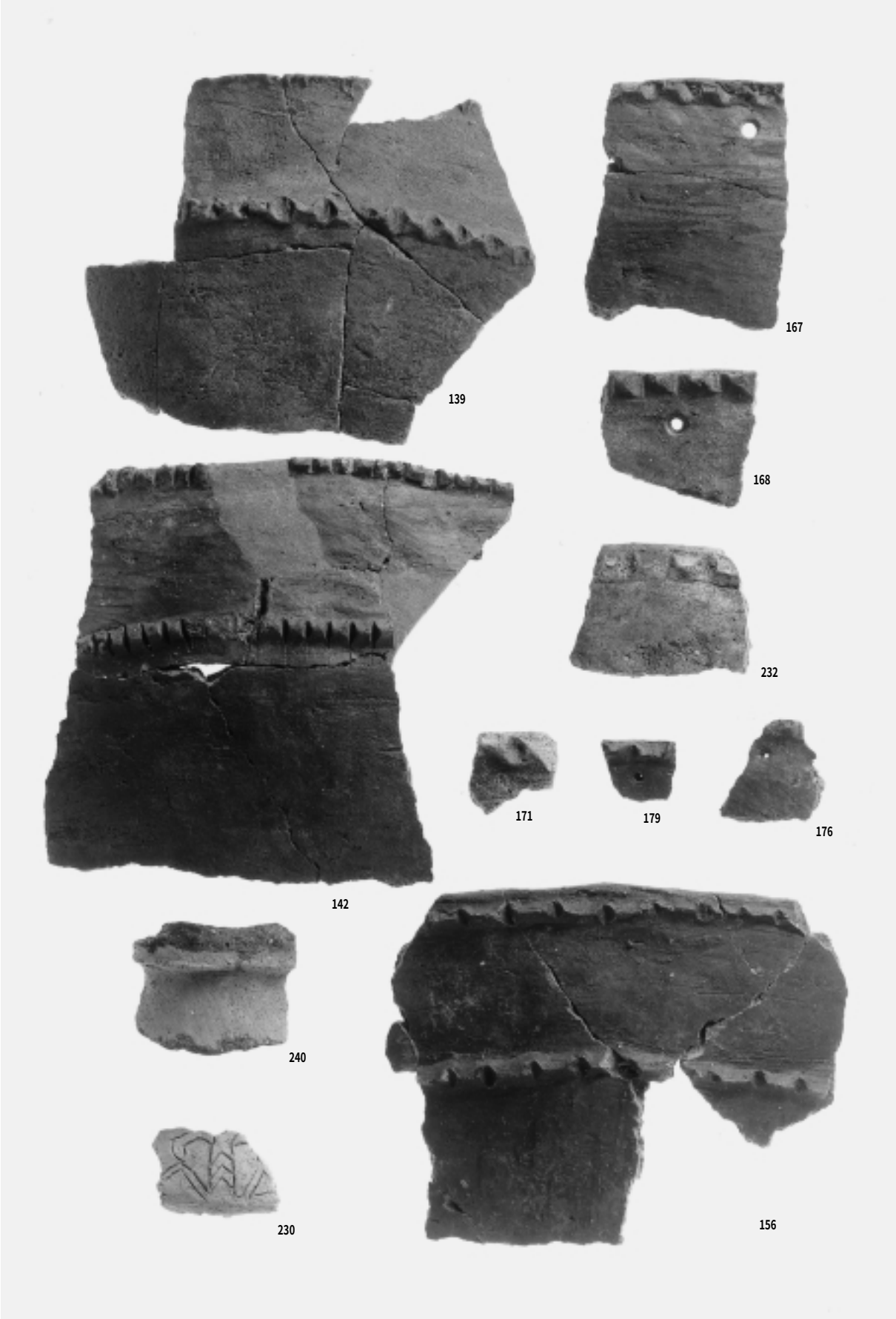

S123
S125
S132
S129
S124
S128
S130
S133
S134
S127
S131

図版14　中尾遺跡（石器）

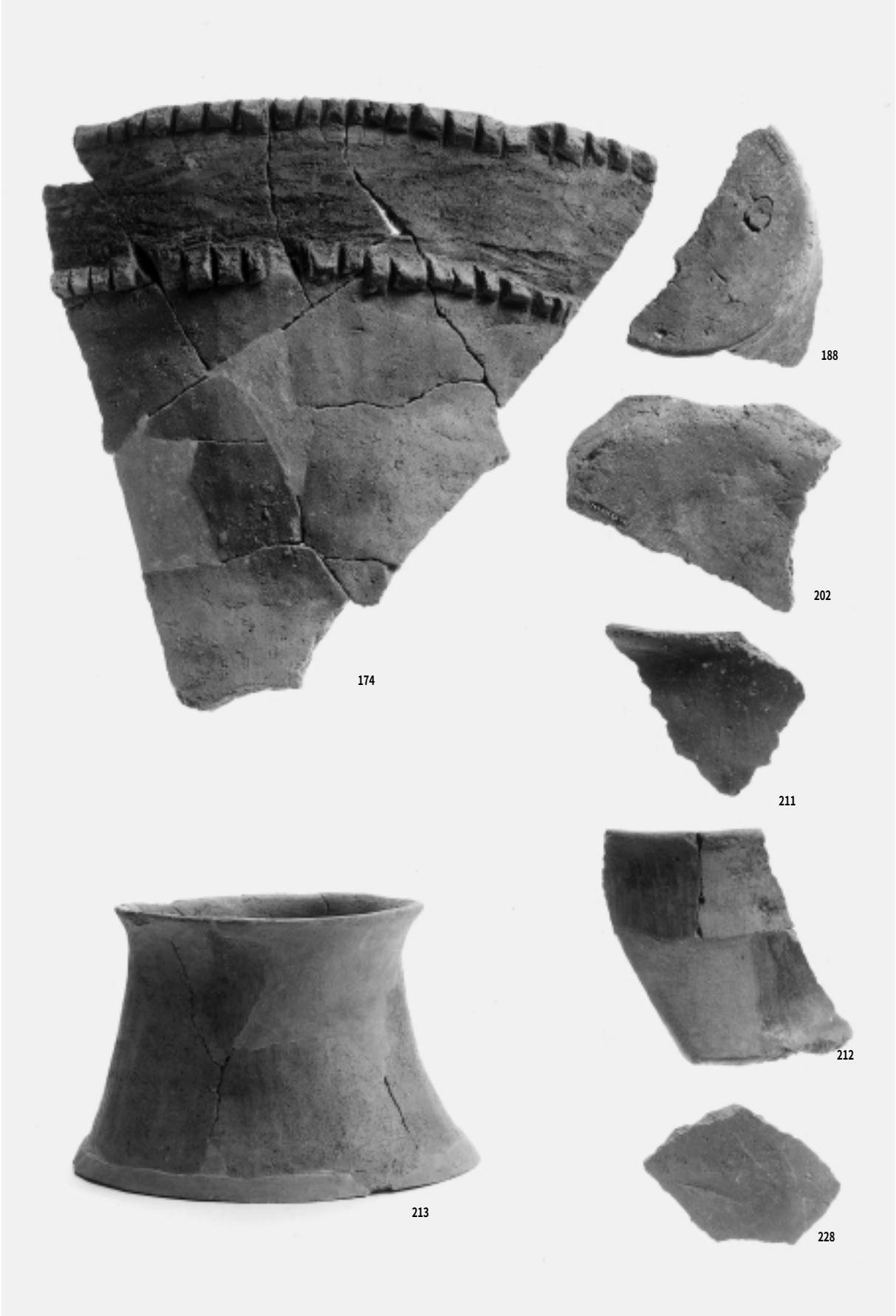


図版15　中尾遺跡（石器）

図版16　中尾遺跡（弥生土器）



図版17　中尾遺跡（弥生土器）



図版18　中尾遺跡（古墳時代土師器）

259

270

255

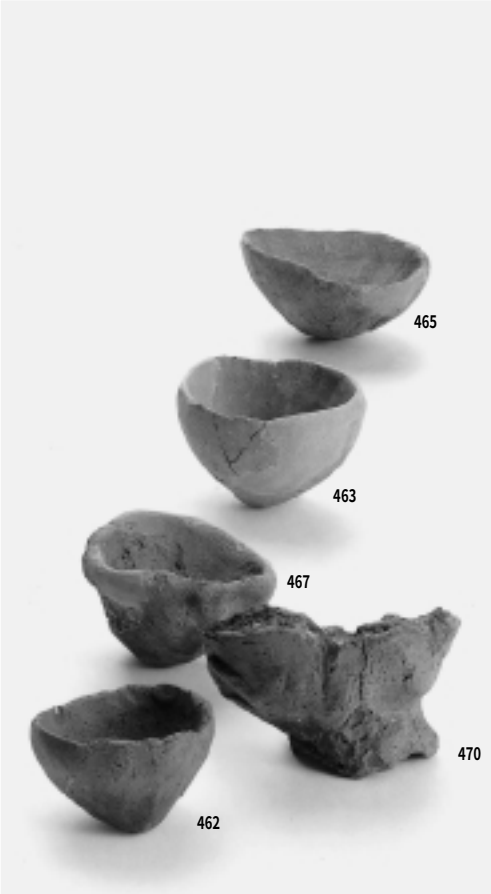
273

265

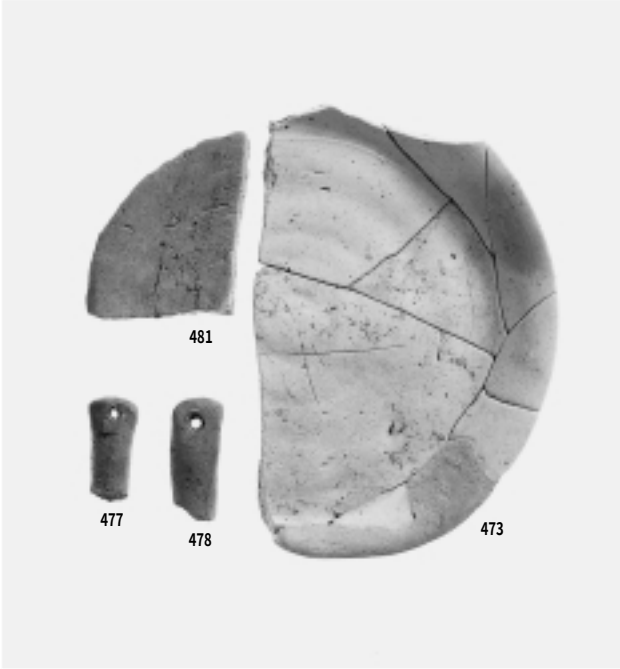
286

図版19　中尾遺跡（古墳時代土師器）

図版20　中尾遺跡（古墳時代土師器）



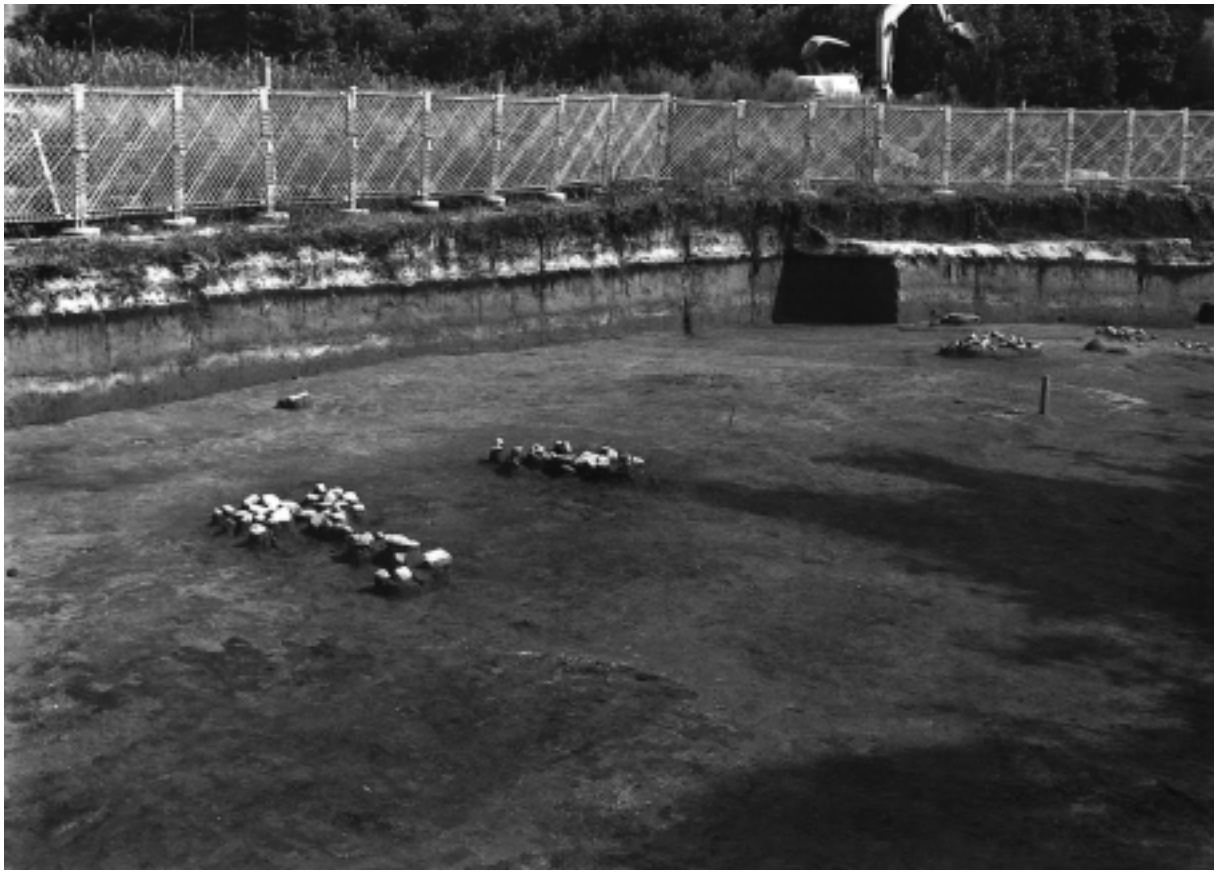
図版21　中尾遺跡（古墳時代土師器と古代の遺物）



発掘体験

地層

縄文早期土器出土状況



集石遺構群

集石遺構４号出土遺物

集石遺構７号

集石遺構８号

集石遺構10号

図版26　四方高迫遺跡（集石遺構出土土器）

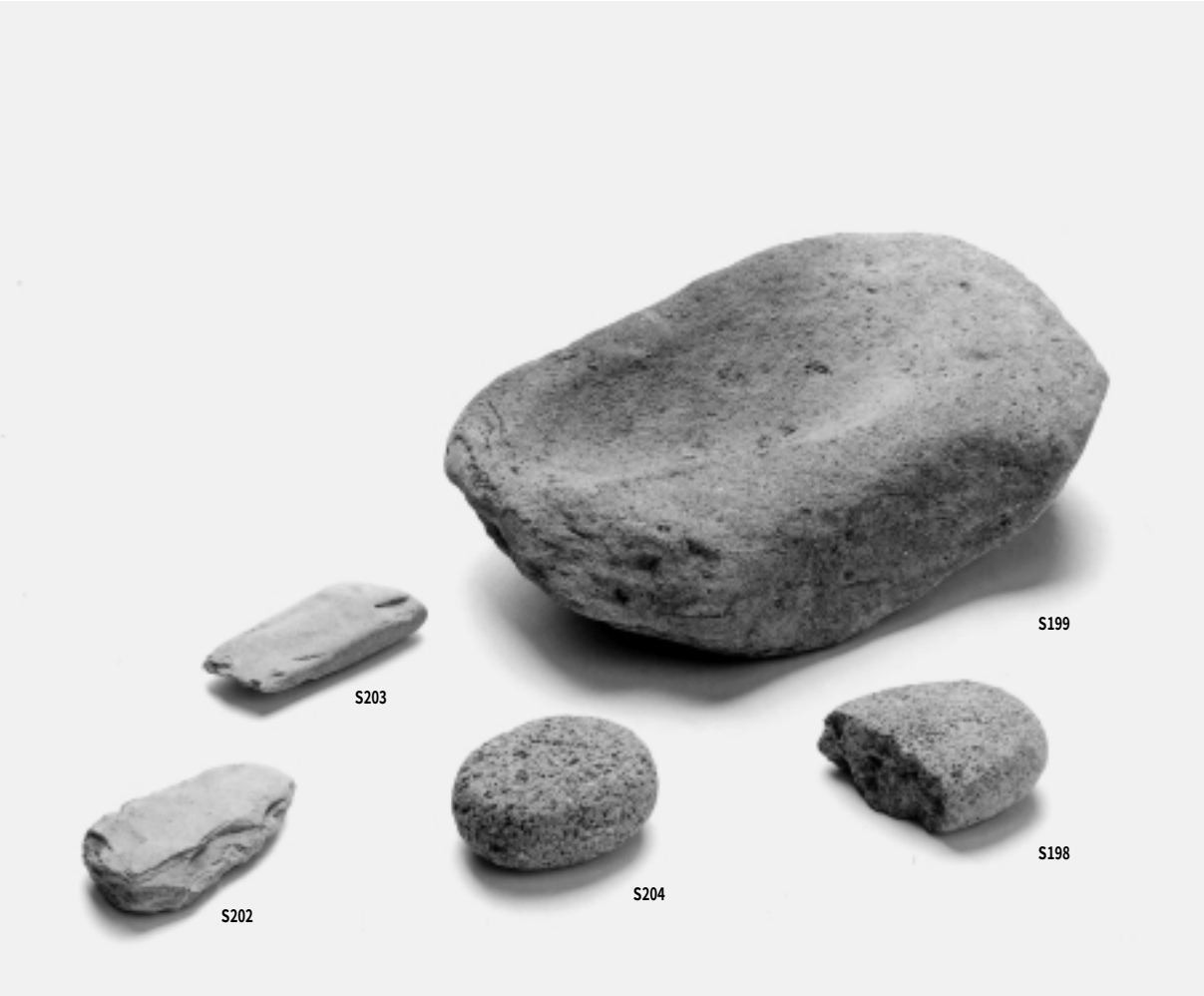
516

521

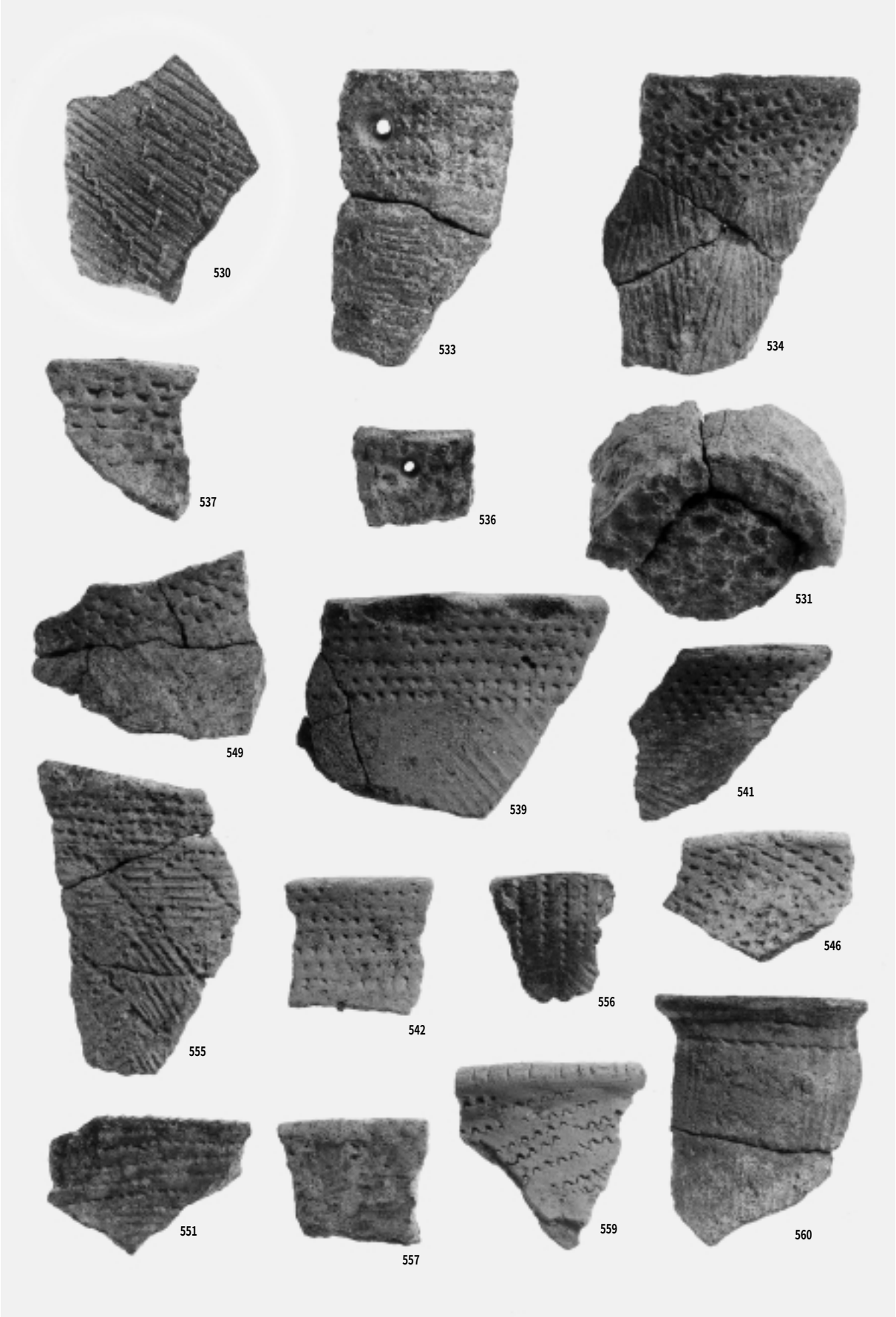
529

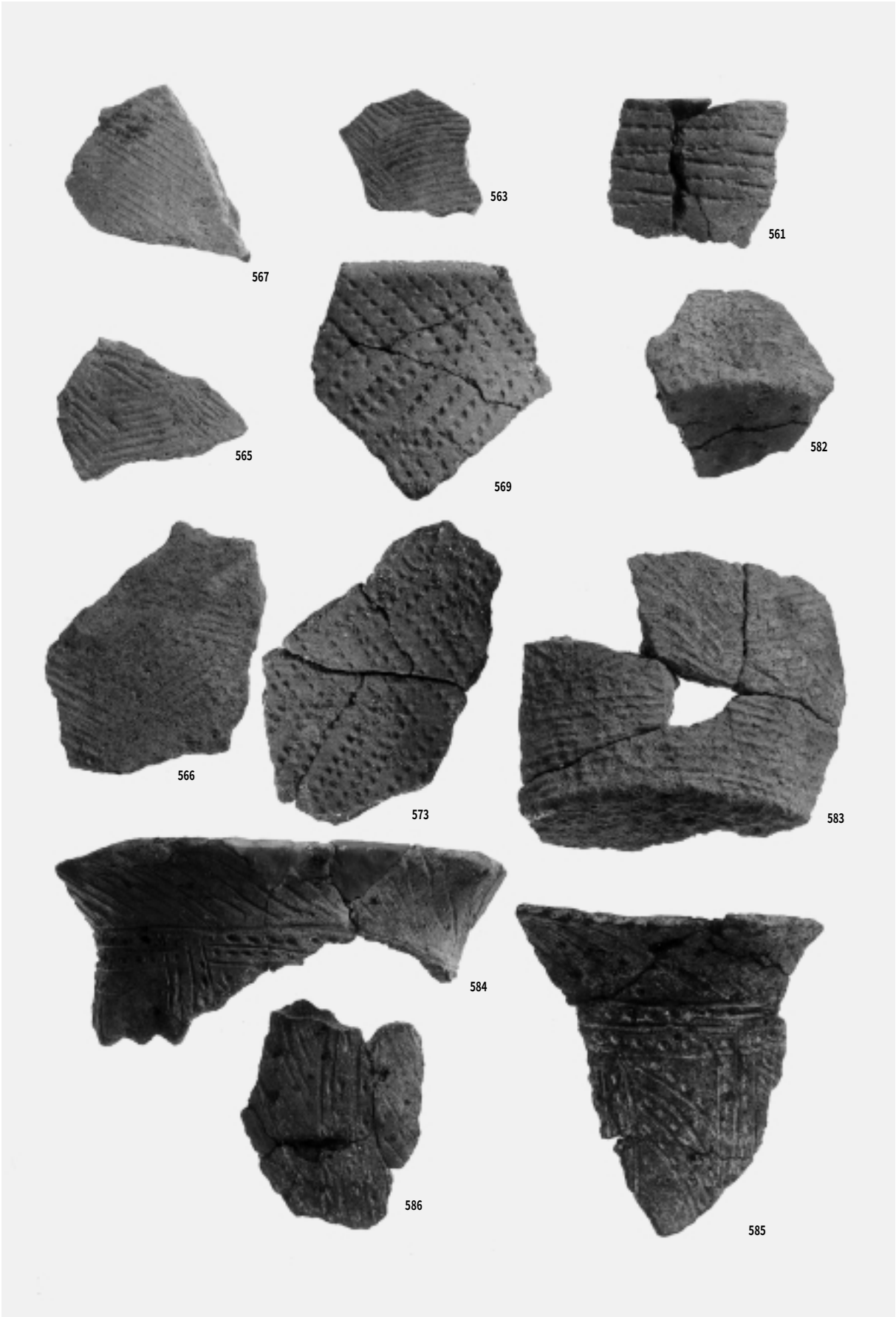
520

図版27　四方高迫遺跡（集石遺構出土石器・石製品と弥生土器）

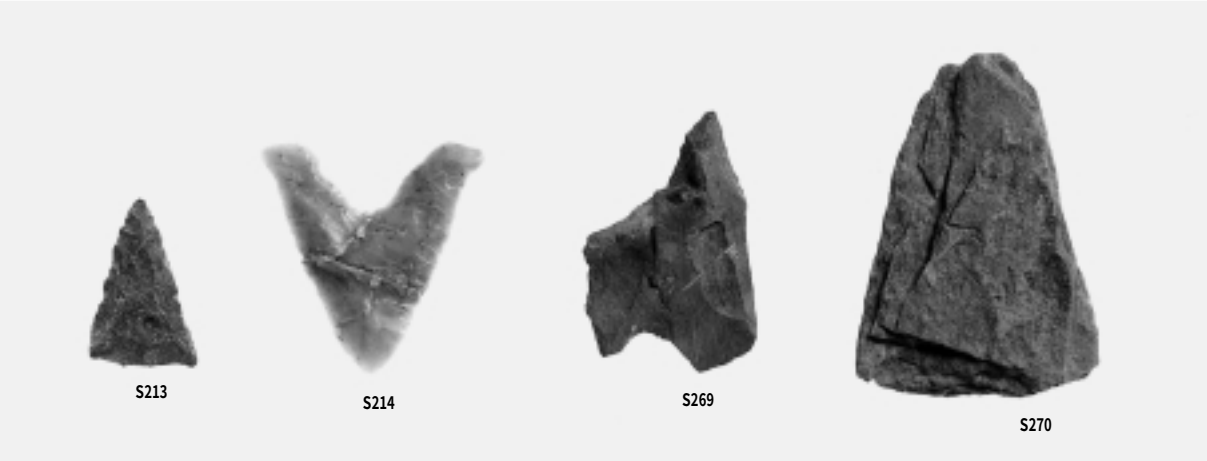


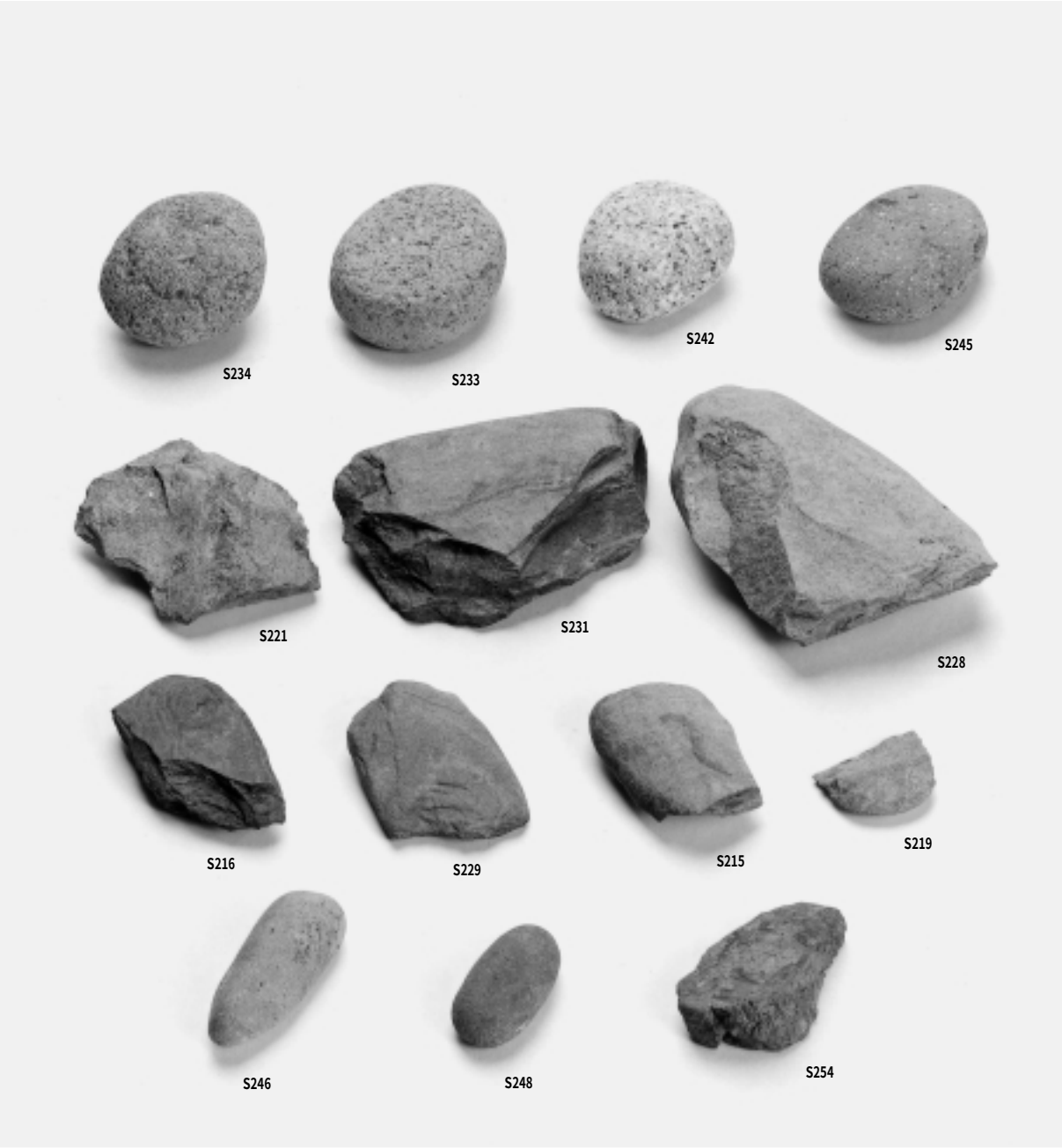
図版28　四方高迫遺跡（縄文土器）




567
563
561
565
569
582
566
573
583
584
586
585

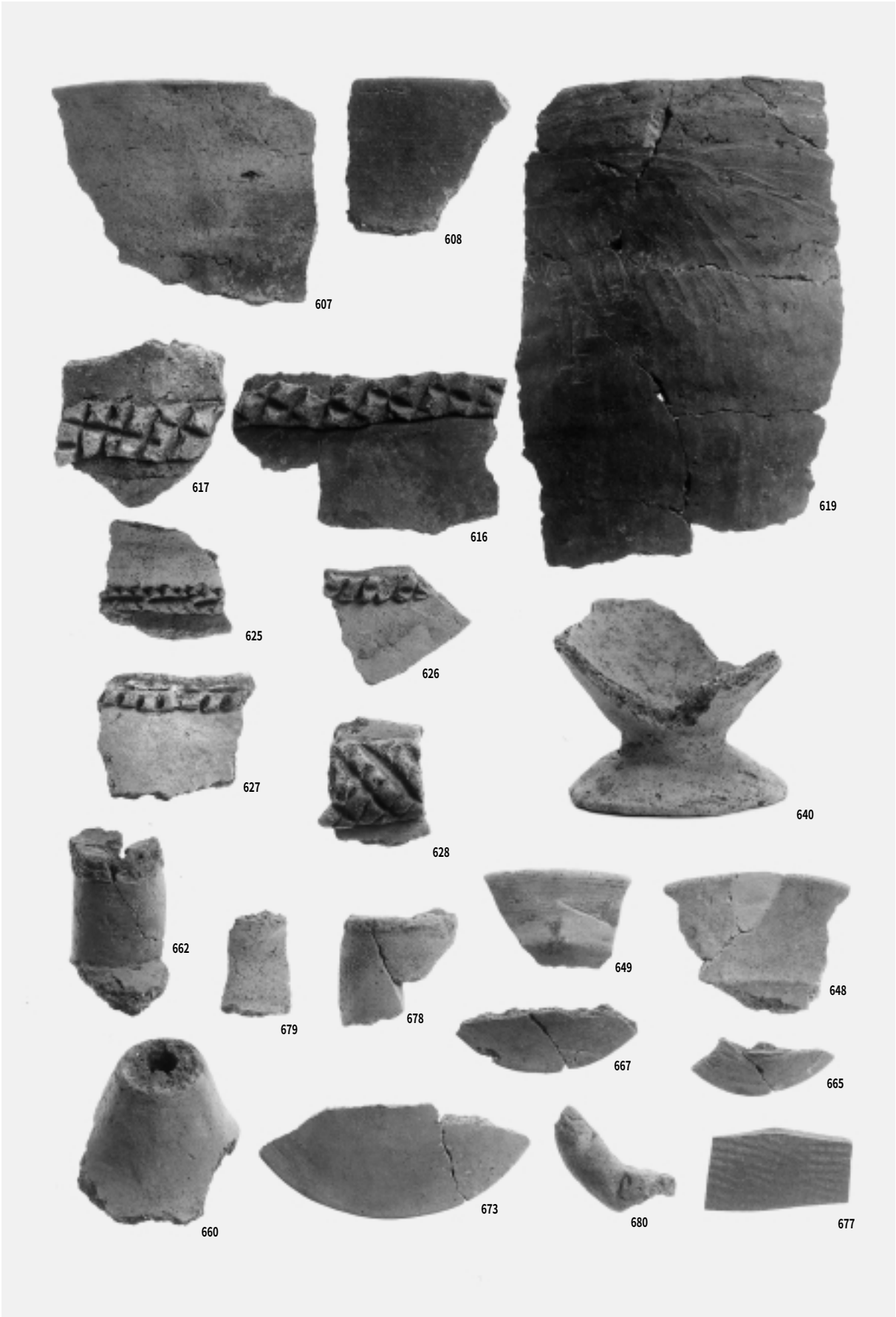
図版30　四方高迫遺跡（石器）





図版31　四方高迫遺跡（弥生土器）

図版32　四方高迫遺跡（古墳時代土師器）



あ　と　が　き

南九州の古墳文化を語る時，その特有な構造を呈する墓のひとつである地下式横穴墓を抜きにしては語れない。吾平町は地下式横穴墓の分布圏の最西南端にあたるとともに，特有な構造・副葬品などをもつ地域でもある。この地で行われた今回の発掘調査では，この墓をさらにこまかく調査できただけでなく，この墓に葬られたであろう人々の生活跡が明らかとなった。

平成の市町村合併によって「吾平山上稜」から町名をとった「吾平町」はなくなった。吾平山上稜への道という長い歴史をもつ道の改良工事に伴って行われた中尾・四方高迫遺跡の発掘調査報告書をここに出すことになった。吾平山上稜と遺跡，吾平町と名付けられた昭和22年頃だったら，この成果は地元の人々を大いに力づけたことだろう。古墳時代の大集落があり，その近くには豊富な副葬品をもった墓があった。鹿児島県ではこのように生活の場と墓がいっしょに見つかる古墳時代の遺跡はこれまでなかった。これをどう解釈するかはまとめに書いたため今後検討されるだろうが，古墳時代の遺跡を考える貴重な資料である。

吾平町という町名がなくなる年にそのような価値のある遺跡の報告書が出されるのは奇遇なことといえよう。

最後になったが，この報告書ができるために努力された発掘調査に従事した調査員の皆さん，交渉にあたられた県教委と県土木部の皆さん，協力を惜しまれなかった吾平町教委の皆さんには心から感謝したい。また，それを手伝われた作業員の皆さんの名を記して謝意を表したい。

（池畑）

（発掘調査）

赤野ナル子・池田愛子・稲村アヤ子・入佐ふき子・江口裕見子・大園邑子・神之園トシ子・上前京子・川野春香・黒羽子文子・小竹千恵子・柴山民子・新村ヨネ・末吉マル・住吉イネ・田実一義・田中シヅ子・田野邉カズ子・田畑信子・茶円ヨリ子・豊重信子・豊重マリ子・永島田テル・永山スミ子・永山チリ・野添良子・橋口ケイ子・福元まり子・前田ミヤ・前田良子・松本タツ子・村田サツ・安田冨子・山下洋子・吉原ひとみ

（報告書作成）

川路加代子・郷田千秋・芝昭子・志和池和恵・末廣みゆき・西川直美・福山霧子・山元宏子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（99）

一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

中　尾　遺　跡

四方高迫遺跡

発　行　　2006年３月

編　集　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　霧島市国分上野原縄文の森２番１号

印刷所　　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033